# サドで邪悪な召喚獣

まあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

# 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
サドで邪悪な召喚獣

【Ｎコード】
Ｎ６２１５Ｍ

【作者名】
まあ

【あらすじ】
欠落した天才『前田　理音』。彼はバカの集まりである文月学園Ｆクラスに望んで転校した。彼は文月学園で過ごすなかで欠落した部分を埋め事ができるんでしょうか？

更新ペースは速いですが、１話が短いのでサクサク読めると思います。お楽しみください。
個人サイト『悠久に舞う桜』でも連載しています。

# 予習問題

「しかし、あんたもモノ好きだね」

「よく言われます」

俺の目の前で1人のくそばばあ……もとい、この学園の最高権力者がため息を吐いているなか、俺は使い慣れない敬語を使い苦笑いを浮かべると、

「だからと言って、外国まで留学して大学を飛び級までした人間があのクラスで学ぶ事なんて、何1つとしてないよ」

「そうかも知れませんけど、色々な人と触れ合う事で、私自身の成長に繋がりますから」

「だけどねぇ」

くそばばあ……もとい、最高権力者は俺の考えに納得いかなさそうな表情で言い、

「……うるせぇよ。くそばばあ」

やはり、使い慣れない敬語は性に合わなかったようで、俺の意見を聞き入れようとしないくそばばあ……もとい、最高権力者の前で本音が漏れる。

「……今、何か言ったかい？」

「いえ、何も」

くそばばあは俺の言葉が聞こえたのか、一瞬、何があったかわからないような様子で俺に聞き返すが、俺は笑顔を浮かべたまま否定すると、

「そうかい？　どうやら、あたしの気のせいだったみたいだね」

くそばばあは聞かなかった事にしようとして頷くが、

「年寄りだから、耳が遠くなってるんじゃないですか？　もしくはくそばばあだし、痴呆が始まってきたか」

「……どうやら、あたしの勘違いじゃなかったみたいだね」

俺は目の前に映る事実を認めようとしないくそばばあに笑顔で言うと、くそばばあは額に青筋を浮かべながら、こちらを睨みつけ、

「あんたはあたしをなんだと思ってるんだい？」

「この文月学園の最高権力者のくそばばあです。俺はあんたの条件を飲んで多額の寄付もしたんだ。約束通り、早く許可しろよ。くそばばあ」

俺はすでにくそばばあの相手をするのが面倒くさくなったため、笑顔で言い切ると、

「……良いだろう。あんたの望み通り、バカなくそガキどもがあつまるＦ組に入れてやるよ。その代わり、後悔なんてするんじゃないよ！！」

「後悔なんてするか、くそばばあ♪」

くそばばあは俺の言葉が余程、頭にきたようで、怒鳴りつけるように言うが、俺はその言葉ににっこりと笑顔を浮かべて言い返す。

こうして、俺、『前田　理音』はめでたく自らが希望する『文月学園２年Ｆ組』に転入する事になる。

# オリキャラ設定

オリキャラ設定

前田（マエダ）　理音（リオ）

性別　男

備考

海外留学をしており、飛び級で有名大学を卒業した天才。

卒業後、いくつかの論文や研究で名声と大金を手に入れたが、他の研究者や科学者達の妬みの対象になったため、鬱陶しくなり、日本に戻ってくる。

人付き合いはあまり良くなく、考えた事がすぐに口に出るため、衝突は絶えない。

その頭脳から、誘拐事件にも巻き込まれたが、自分で誘拐犯を突き出した経験もあり、その経験を糧として体の鍛錬も欠かしていない。

授業では自費でパソコンなどA組にも負けない設備を自分の分だけ持ち込み、授業を聞かずに自分のやりたい事だけをしているが、学園側は転入時に多額の寄付をしたため、鉄人と言えど大人の事情で何も言えない。

前田（マエダ）　怜生（レオ）

性別　男

備考

理音の弟、現在は理音と2人暮らしをしている。理音の幼少期とそっくりでかわいい男の子だが、性格は内向的で人見知りをする。理音が海外で生活していたためか、物心がついた時には理音がいなかったので、理音ともあまり会話がないが、唯一の肉親の理音には懐いているようにも見える。

本宮（モトミヤ）　葵（アオイ）
所属クラス　２－Ｂ
性別　女

備考
第２６７問より合流。
番外編『本と勇気と演劇部』の主人公。現在は秀吉の彼女。
理音、明久、瑞希と同じ小学校の卒業。理音と明久とは顔見知りだったが、瑞希とは面識がない。
内向的な性格で、人と話す事は苦手。趣味は物語を書く事で将来の夢でもあるが、自分に自信がなく、その性格のためか両親には言い出せずにいる。
友人は少なくクラスの女子からは軽く無視をされてる。
理音曰わく、メガネっ娘の巨乳。その破壊力は瑞希をも上回る。

清瀬（キヨセ）　大樹（ヒロキ）
性別　男
所属　２－Ｃ
備考
第２８１問より合流。
番外編『恋と理性と幼なじみ』の主人公。現在は美春と幼なじみ以上、恋人未満の距離。今も昔も美春の保護者。
怜生が通っている幼稚園の園長の子供で学園が終わると良く手伝いをしている。清水美春の幼なじみでもあり、昔から彼女に恋愛感情を抱いていて何度もアタックしているが美春は気づく事がない。たまに美春の父親からバイトを頼まれて美春の家の喫茶店でバイトをしている姿が見られる。
人当たりも良く誰とでも友好的な人間のため、割と顔も広く女生徒からの人気もあり告白もされているが美春が好きだからと断ってい

る。そのため、古い友人からは美春との間を生暖かい目で見守られている。

弓永（ユミナガ）　深月（ミツキ）
性別　女
所属　２－Ｅ
備考
第３２５問より合流。
番外編『秘めた想いと倒錯娘』の主人公。相変わらず、利光とは幼なじみの腐れ縁な関係。
弓道部に所属する少女。入学した時は成績は上位だったが、入学早々に弓道部の練習を見て部員の『凛とした姿がエロかっこ良かった』と言う理由だけで入部。部活にはまり勉強は完全におろそかになった猪突猛進形の少女。
薄い本が大好きなぶっちゃけ、腐女子だが好きなものは好きと言うタイプのため、隠していない。
久保利光と幼なじみであり、利光が明久に思いを寄せる様子を目を輝かせて見ている。
胸のサイズは美波ほどではないが残念。

# 第1問

第1問

「鉄人、転校生は当然、女の子だろうな？」

「このクラスにくる女の子……頭はきっと良くないはずだから……」

「うおぉぉ。転校生、サイコー♪」

転校初日、今日から転入するクラスの前で呼ばれるのを待っていると教室の中から転校生が女の子だと決めつけているようなバカなヤツらの声が響いている。

（……本当に程度の低いヤツらばかりみたいだな。まぁ、その方が観察のしがいがあるか）

教室の中から聞こえてくる声にため息を吐いていると、

「残念だな。転校生は男だ」

「ふざけるな！！」

「俺達に潤いをよこせ！！」

転校生が男だとわかり、すぐに罵倒が始まりだす。

（……何と言うか。ここまで言われると逆に清々しいのか？）

「お前ら、静かにしないと補習室に直行させるぞ！！」

「……」

あまりの状況にふとそんな疑問が浮かんだ時に、クラスの担任でもある西村教諭が生徒達を怒鳴りつけると、補習室が怖いのか生徒達は水が引いたように静かになり、

「前田、入ってこい」

静かになった生徒達の様子を見て、西村教諭が理音を呼ぶ。

「……失礼します」

理音は軽く頭を下げ、教室内に入ると、

「俺はお前らバカを観察するために、このクラスに転入してきた。基本的にお前らバカと頭のできが違う事を最初に伝えておく、バカでもそれくらい理解してくれ」

「……」

最高の笑顔で本音を漏らし、教室全体が理音の言葉に静まり返った後、

「ふざけるな！！　ここにくるって事はお前も俺達の同類だろ！！」

「自分を認められないのは、それだけでバカの証だ！！」

「そんな事はどうでも良い。あいつを引きずり出せ。制裁を加えて

やる！！」

生徒達は理音の言葉がよほど、頭にきたようで立ち上がり、理音に向かってくるが、

「……これだから、バカは嫌いだ」

「！？」

理音は呆れたようなため息を吐くと、懐から大量の花火を取り出し、

「俺にケンカを売った事を死ぬまで後悔させてやる」

「あだだだ！？」

自分に敵意の視線を向けた、全ての生徒達を楽しそうな笑顔を浮かべて撃ち抜いて行き、

「これは一体、どう言う状況じゃ？」

「わかりません」

「……」

その場には生徒達の屍が積み重ねられて行く。

# 第2問

第2問

「……高さが足りないな」

積み上げた屍の山を見て、理音がぼそりとつぶやくと、

「こ、こいつは何なんだ？　室内で平気な面して花火をぶっ放したぞ！？」

「ひ、怯むな。飛び道具は中に入ってしまえば、こっちのもんだ！！」

理音の出している異常さに立ち上がった生徒達が怯むなか、1人の生徒が叫び声を上げて、花火を交わして理音との距離を縮めるが、

「……バカは死ななければ治らないと言うのは本当のようだな」

「ぐはっ！？」

「まぁ、それはそれで、ここに着たかいがある」

理音は慌てる事なく、拳を男子生徒のみぞおちに深々と突き刺し、まるで新しい玩具を見つけた時の子供のように無邪気な笑みを浮かべる。

「こ、こいつは危険だ。総員、明久を生け贄にして退避！！」

「ちょっと、雄二!?　ボ、ボクが生け贄って、どう言う事だよ!!」

理音の笑顔に危険を察知したのかクラスの代表らしき男子生徒が生徒達に指示を出すと、生け贄と言われたバカっぽい顔をした明久だと思われる男子生徒が声を上げ、

「……ほぅ。こいつを俺のモルモットにして良いわけだな」

「ひ、ひぃ!?」

理音は無邪気な笑みを浮かべたまま、懐から注射器を取り出し、男子生徒との距離を縮めて行くと、理音の出す異質な空気に男子生徒は小さな悲鳴をあげる。

「や、やめてください。吉井くんにおかしな事をしないでください!!」

「……姫路?」

理音の注射器が男子生徒に刺さる手前で、1人の女性徒が彼の手をつかみ、理音はその女生徒の顔を見て1度止まる。

「えっ!?」

「……吉井?　……明久?」

「な、なに?」

女生徒は理音から出た名前に驚いたような表情をして理音から手を

離すが、理音は女生徒の反応を気にする様子など見せずに、手の注射器をしまい、自分が追いつめていた男子生徒の顔を覗き込む。

「な、なに？」

「……この伸び、質感……そして、このアホ面」

「いだだだ。なにをするんだよ！？」

理音は男子生徒の頬を思いっきり引っ張ると何かを考えはじめ、

「姫路瑞希と吉井アホ久」

「誰がアホ久だ！！」

何かを思い出したのかポンと手を叩き、男子生徒は名前を間違えられている事に腹を立てているのか、理音を怒鳴りつける。

## 第3問

「アキとあの転校生、知り合いみたいね」

「そうみたいじゃな。しかし、明久はまったく覚えていないような感じじゃ」

クラスの中からそんな声がところどころで聞こえるなか、

「吉井、前田、お前達は何をしてるんだ！！」

「あがっ！？」

「……」

今までの様子を唖然とした様子で見ていた西村教諭が我に返り、理音と明久に向かい拳を振り下ろすと、明久は頭に直撃を受け、理音は当然のようにその拳を交わす。

「……バカになったら、どうするんですか？」

「それ以上になる事はないから安心しろ」

「いや、ある」

明久は頭を押さえながら涙目で言うと、その言葉を西村教諭は全否定するが、理音は不敵な笑みを浮かべ、

「まだ、実験中の新薬なんだが、俺の研究通りなら、記憶力を消す

事ができるはずだ。ほら、あーん」

「だ、誰がそんな薬を飲むか」

明久の口を無理やりこじ開け、怪しげな錠剤を詰め込もうとすると、明久は両手で口を押さえ、必死に抵抗する。

しかし、明久のその行為は理音のサド心に火を点ける行為でしかなく、

「ほぅ。昔よりは少しだけ賢くなったようだな」

「吉井が少しでも賢くなるなんてありえないだろ」

「明久が賢くなるって言うって事は、あいつは俺達以上のバカだな」

理音は邪悪な笑みを浮かべ明久に言うと、生徒達が理音の言葉を全否定する。

「ちょっと、みんなしてそれは酷……あっ！？」

明久は生徒達の言葉に大声をあげた時、理音は開いた口の中に錠剤を1粒放り込む。

「あ、あぁぁぁ！？　ど、どうするんだよ！？」

「どうするも何も良いデータを出してくれれば、それで良い」

明久は理音につかみかかろうとするが、理音は明久を平然と交わし、楽しそうな表情で懐からメモ帳を取り出す。

「明久、一先ずは薬が効き始める前に吐き出したら、どうじゃ？」

「そ、そうだ。秀吉、良い事を言った」

慌てている明久に1人の生徒が助け舟を出すと明久は錠剤を吐き出そうと口の中に手を突っ込もうとするが、

「明久を捕まえろ。そんな事をさせるな！！」

「おおおお」

なぜか、先ほど明久を生け贄にしろと言った男子生徒から生徒達に改めて指示が出て、生徒達は楽しそうに明久を取り押さえる。

# 第４問

「ちょ、ちょっと、雄二、どう言う事だよ！？」

「ただでさえ、ボロボロで汚い教室なのにお前のゲロでこれ以上汚すわけにはいかねぇんだよ」

明久は生徒達に指示を出した男子生徒を怒鳴りつけるが、雄二と呼ばれた男子生徒はため息を吐く。

「それに、その錠剤を飲んでも特に変わりもないんだ。問題ないだろ。何より、面白そうだ」

「放せぇ！！　この怒りを忘れる前にボクの手であいつの息の根を止めてやる！！」

「……なるほど、これはなかなか」

雄二は笑いながら明久に言うと、明久は自分を押さえつけている生徒達をはねのけて、目の前で自分をバカにしたように笑う男に飛びかかろうとするが、脱出する事は出来ず、殺意を込めた視線を送るなか、理音は何かを思いついたようで、邪悪な笑みを浮かべている。

「じゃあな。明久、次に目を覚ます時は他人だな」

「忘れるな！！　雄二、例え、記憶がなくなろうとお前の息の根を止めるのはこのボクだ！！」

「まぁ、お前じゃ、覚えているこ……なに！？」

雄二が明久に別れの言葉を告げると明久は呪いじみた言葉を述べ、雄二がその言葉を笑い飛ばした時、理音が明久に飲ませた錠剤と同じものを彼の口の中に放り込み。

「あいつを押さえつけろ」

「おおおぉ♪」

楽しそうに生徒達に指示を出し、生徒達はかなりのりが言いようで楽しそうに明久と同じように雄二を押さえつける。

「て、てめぇ、何をするんだよ!!」

「被検体は多いにこした事はないだろ」

雄二は突如として自分に起きた状況に理音を怒鳴りつけるが、理音は邪悪な笑みを浮かべたまま言い切り、

「さぁ、俺の知的好奇心を満たしてくれる結果を出してくれよ」

明久と雄二の2人を見て楽しそうに笑う。

# 第5問

「ふ、ふざけるな！？」

「ざまあみろ！！　雄二、お前もこれで終わりだ！！」

雄二は理音を怒鳴りつけ、明久は雄二が自分と同じ立場に落ちた事に歓喜の声をあげるが、

「アキ、あんたもそのままだとまずいんじゃない？」

「そうだった！？」

1人の女生徒からツッコミが入り、明久は声をあげる。

「あ、あの、前田くん、先ほども言いましたけど……」

「さすがにやりすぎだと思うのじゃが」

理音が邪悪な笑みを浮かべながらモルモットを見ていると、瑞希と先ほど明久に秀吉と呼ばれた生徒に声をかけるが、

「大丈夫だ。ちゃんと治療薬（仮）副作用ありも用意してある」

「それなら、安心だ……ちょっと、副作用ありってなんだよ！？」

理音は懐から薬瓶を取り出し言うと、その言葉に明久は安堵のため息を吐いた後に『副作用』と言う言葉に声をあげる。

「まぁ、良いじゃないか。人類の進化、科学の進歩に犠牲はつき物だ」

理音は明久の言葉に答えるつもりはないのかうっとりとした表情で薬瓶を眺めている。

「……さてと、そろそろ薬が効き始める時間だな」

「ふ、ふざけるな!?　鉄人、そろそろ、この転校生をどうにかしろ!!」

「ん?　話を聞くとお前ら2人なら問題ない。俺は授業もあるから戻るぞ。バカ騒ぎもほどほどにしておけよ」

理音が投薬から時間が経ったのを見て笑うと、雄二は担任でもある西村教諭に助けを求めるが、西村教諭は理音を止める事なく教室を出て行く。

「さぁ、時間だ♪」

「うわぁぁぁ!?」

「いやだぁぁぁ!?」

理音の口元がほころび、明久と雄二が情けない声をあげるが、

「あれ?　何ともない?」

「そうだな」

自分達の記憶に変化が無いようで首を傾げるなか、

「まぁ、冗談だからな」

「……」

理音は2人の情けない声を録音していたようで、その声を再生しながら笑う。

## 第6問

「……てめぇ」

理音の行動に呆気にとられて雄二を押さえていた生徒達の手が緩むと雄二は勢いよく生徒達を振り払い、理音につかみかかろうとするが、

「何いぃ!?」

「バカは単純だな」

理音は向かってくる雄二を軽く投げ飛ばし、投げ飛ばした雄二を足蹴にして愉快そうに笑いながら言う。

「……あいつは鬼か?」

「鬼で済むのか?」

雄二を足蹴にして笑っている理音の様子を見て、生徒達がそんな言葉を発した時、

「雄二に何をする?」

「翔子!?　お前、何しにきた?」

「夫のピンチを助けるのは妻の勤め」

おんぼろのF組の教室のドアを勢い良く開けて、1人の女生徒が教

室に乱入してくる。

「……ほぅ。こいつの彼女か何かか？」

「彼女じゃない。私は雄二の妻」

「違うわ！？」

理音は２人の会話を聞いて興味が湧いたようで楽しそうに聞くと雄二に翔子と呼ばれた女生徒は少し顔を赤らめて雄二の妻だと言うが、その言葉を雄二は声をあげて否定する。

「ほぅ。なるほど……」

「何？」

理音は翔子を観察するように彼女を見ると、翔子は理音の視線が気に障ったのか雄二を足蹴にしたままの理音を睨みつけて言うと、

「今日、この学園に転校してきた前田　理音だ。これはお近づきの印だ。使ってくれ」

「これは……！？」

理音は何かを思いついたようで、翔子に薬瓶とメモ書きを手渡すと彼女は理音から受け取ったものを見て、一瞬、驚いたような表情をした後、

「……はじめまして、夫の雄二ともどもよろしくお願いします」

「あぁ、よろしく頼む。坂本　翔子さん」

「だから、違うと言ってるだろ！？」

彼女は理音を自分の味方だと判断したのか理音に向かい挨拶をすると、理音は何かを企んでいるのか邪悪な笑みを浮かべながら雄二を見下し、前もって調べていたのか翔子を『坂本』と言う雄二の名字で呼び、雄二は声をあげる。

# 第7問

「……何を使って懐柔したのじゃ？」

「わかりません」

3人の様子に秀吉と瑞希が苦笑いを浮かべていると、

「簡単なしびれ薬だ。これで既成事実を作ってしまえば良いだろ。媚薬や惚れ薬の方が良いかとも思ったが、あいにくと手持ちがなくてな」

「そんなもんを渡すな!?　こいつは本当に使うぞ!!」

理音は雄二から足を下ろして、秀吉と瑞希の疑問に本気か冗談かわからない答えを出すと雄二は身の危険を感じて声をあげる。

「何、現代の結婚ではでき婚……違うな。今はなんと言うのだったかな？　まぁ、どうでも良いか。素直になれないツンデレを落とすのなら、実力行使が手っ取り早いと思ってな」

「誰がツンデレだ!?」

理音は楽しそうな笑みを浮かべたまま雄二に向かい言うと、彼は立ち上がり、理音につかみかかる勢いで反論しようとするが、

「雄二、子供は何人欲しい？」

「翔子、抱きつくな!!　前田、てめぇ、何が面白いんだ!!」

「何と聞かれるとこの後の展開だな」

翔子は嬉しそうに雄二の腕に抱きつき、雄二は翔子を引き離そうとしながら、理音を怒鳴りつけるが、理音はこの後に起きるであろう展開を予想しているようで、相変わらずの邪悪な笑みを浮かべている。

「……お前ら、立ち上がれ!!　転校生より、先に滅さないといけないのはあの男だ!!」

「そうだ。坂本に死の制裁を!!」

「死ね。雄二ぃぃぃ!!」

理音の言葉をまるで見計らったかのように明久を先頭に生徒達から雄二に向けた嫉妬全開の声が上がり、

「って、お前ら、何でそうなるんだ!?」

「問答無用!!」

「雄二、待って」

雄二は生徒達の様子に引きつった笑みを浮かべて逃げ出すと雄二に殺意を持った生徒達と翔子は雄二の後を追いかけて行き、

「くくく」

理音はその様子を見て楽しそうに笑う。

# 第8問

「……あの、前田くん」

「ん？　姫路、どうかしたか？」

笑っている理音を見て瑞希は恐る恐る理音に声をかけると理音は機嫌が良いのか笑顔のまま振り返る。

「どうかしたかではなくて」

「お主は何がしたいのじゃ？」

「何？　さっき言わなかった？　俺はバカを観察するためにここにきたと」

理音が振り返ると瑞希は苦笑いを浮かべており、隣に立っていた秀吉が理音に向かい聞くと理音は秀吉の一言を聞いて、何度も同じ事を言わされる事が不愉快なようで目つきが鋭くなる。

「すまん。ワシは何かおかしな事を言ったようじゃな」

「そうですか？　木下くん、何かしましたか？」

秀吉は理音の変化に直ぐに気づいたようで理音に向かい謝るが、瑞希は2人の間に何があったかわからずに理音に聞く。

「……別に何もないな」

「何もないって顔じゃないでしょ」

3人の様子を見て、クラスに取り残された1人の女生徒が理音の顔を見て言うと、

「……姫路、どうして、この男は女子の制服を着てるんだ?」

「えーと、前田くん、それは酷いと思いますよ」

「あんた、ウチの事をバカにしてるわけ?」

理音は女生徒のある1部分に目が行ったようで、その女生徒に研究対象としての興味を示したのか目を輝かせると瑞希は苦笑いを浮かべるが、女生徒は理音の言葉が頭にきているようで拳を握りしめるが、

「……これが噂の性同一性障害と言うヤツか? ……」

「だから、ウチは正真正銘の女よ!!」

「……」

理音は女生徒の言葉を聞き入れるつもりなどないようで何かを考えだしたのか、ぶつぶつと言い始めると女生徒は理音に殴りかかると理音は考え事をしたまま、女生徒から向けられた拳をつかみ、無意識に女生徒を畳の上に叩きつけようとする。

「美波ちゃん!?」

「島田!?」

「う、うそ！？」

「……ほう」

理音の流れるような体捌きに瑞希と秀吉は女生徒の身を心配するが、理音の動きは女生徒が宙を舞う１歩手前で急停止する。

# 第9問

「……つまらんな」

「……」

理音は興味がなくなったのか美波と呼ばれた女生徒から手を放すと3人はわけがわからずに呆然としているなか、1人の男子生徒が美波が宙に舞うのを期待していたのかデジカメを向けている。

「……良い写真は撮れたか？」

「……」

理音は男子生徒と目があったのかそう聞くと、男子生徒は全力で首を振るが、

「何色だった？」

「水色と白のストライプ」

「……そうか」

理音が質問を変えると男子生徒は即答で答え、理音は目をつぶって頷く。

「土屋、前田、あんた達は何をしてるのよ！？」

「そのデジカメは市場に出ているものでは最新の物だな。使い心地

はどうだ？　画像はどうなる？　メンテナンスは欠かさないのか？」

「……悪くない。こいつは相棒、メンテナンスには細心の注意を払っている」

美波は自分のスカートを両手で押さえながら2人を怒鳴りつけるが、理音は男子生徒が持つデジカメに興味が移ったようで男子生徒にデジカメの話を聞いている。

「……瑞希、あいつは何なの？」

「そうじゃ、転校生は明久とも知り合いじゃったようじゃが」

「えーと、わたしも会うのは約４年ぶりですから、何とも言えないんですけと、同じ小学校に通ってました。吉井くんとは仲が良かったみたいですけど、小学校卒業と同時に留学したんです」

理音と男子生徒が話をしているのを見て、美波は理音の事を瑞希に聞くと秀吉も同じように瑞希に質問すると瑞希は苦笑いを浮かべながら、理音と知り合った経緯を2人に話す。

「留学って、すごいじゃない」

「はい。ＩＱがものすごく高くて『天才』だと言う話になって、飛び級で大学に進学すると言う話になって」

「天才って言うよりは『天災』と言う感じじゃな」

瑞希は苦笑いを浮かべたまま、理音が留学した経緯を簡単に説明すると、秀吉と美波が驚いたような表情をして言うなか、

「良い話を聞かせて貰った。これから、よろしく頼む。康太」

「……こちらこそ。理音」

なぜか、理音と男子生徒はがっちりと握手を交わしている。

# 第１０問

（……試験召喚システムか？　……科学とオカルトの偶然により完成されたシステムね。オカルトなどあるわけないと言いたいところだが、決めつけは良くない。決めつけは柔軟な考えをできなくする。このシステムが本当に偶然にできたものならば、システムを解析してオカルトだと言われているブラックボックスの中身を開ければ良いだけだしな）

１時間目の授業が始まり、理音はその授業を聞くわけでもなく、持ってきたノートパソコンを開き、考え事を始めていると、

「……何で、あいつは授業を聞いてないのに何も言われないんだ？」

「気にするな。パソコンを使えれば頭が良いと思ってるくらいのバカなんだろ」

「あぁ、いるいる。外見から決めようとするバカ」

雄二を追いかけ回していて、理音の正体を知らないバカ達は大声で理音をバカにしている。

（……あいつらは新薬の実験用モルモットに決定だな。そんな事より、とりあえずはシステムの中に入ってみるか？）

理音はそう考えるともの凄い勢いでパソコンのキーボードを叩き文月学園の試験召喚システムの中に侵入し始める。

（……最先端と言う割にはずいぶんとお粗末なプロテクトだな）

理音は簡単にシステムの中に侵入し終えたようで、『試験召喚システムのプログラム』を解析し始め出す。

（……とりあえずは実戦も見てみたいな。ん？　これは『観察処分者』？　……バカの代名詞のような肩書きだな。該当者は……やっぱり、あいつか）

理音はとりあえずは真面目に授業を聞いているふりをしている明久を見ると、

（まぁ、何かの役に立つかも知れないから覚えておくか。後はこれを……して、こっちを……ると）

邪悪な笑みを浮かべながら、試験召喚システムを自分が侵入した形跡などを残さずに楽しそうに改ざんして行く。

# 第１１問

「……良いか。明久、上手くあいつを誘い出すんだ」

「でも、雄二、ボクや雄二が誘うと怪しまれない？」

昼休みになると明久と雄二は理音に今朝の仕返しをしようとしているのか、何かを企んでいるなか、

「前田くん、今日って、お昼はどうするんですか？」

「……これをこうする事で考えられ現象は……と……の２つ。それなら……」

瑞希が理音に声をかけるが、理音はどうやら自分の世界にトリップしているのか、ぶつぶつとつぶやきながらパソコンのキーボードを叩いている。

「……なにやら、集中してるようじゃの」

「みたいね」

秀吉と美波は苦笑いを浮かべながら、理音を見て言うと、

「これはチャンスだな」

「そうだね」

「……アキ、坂本、あんた達は何を考えてるのよ」

明久と雄二は仕返しのチャンスがきたと思ったようでニヤリと笑い、その様子を見て美波はため息を吐く。

「ちょっと、今朝の仕返しをしようと思っただけさ」

「……それを笑顔で言うのはどうかと思うんじゃが」

美波の言葉に明久は笑顔で言い切り、明久のその様子に秀吉がため息を吐いた時、

「ま、待て。前田、お前は何をするつもりだ？」

「……バカどもが俺の貴重な考察時間を邪魔するな」

理音は自分の周りで騒いでいるのをうっとうしく感じたようで、懐から銃のようなものを取り出し、銃口を雄二に向けると雄二は引きつった笑みを浮かべると、

「今、ここで死ぬか？　それとも俺のモルモットになるか？　俺は慈悲深いからな。お前に選ばせてやる」

「それって、どっちも終わりって意味だよね！？」

「モルモットなら、しばらくは生きてられる」

理音は邪悪な笑みを浮かべ、銃口を雄二に向けたまま、明久との距離を縮めて行く。

# 第１２問

「ま、待て！？　いや、待ってください！！」

「待て？　時は金なりと言う言葉を知らんのか？　……悪いな。お前が知るわけないな」

「ちょっと、そこでバカにするわけ！？」

明久は理音に向かい土下座をして助命を嘆願するが、理音が聞き入れるはずもなく、ただ、明久をバカにするだけである。

「だいたい、何でボクだけに向かってくるんだよ！？　雄二だって」

「……あいつには死にたくなかったら、これにサインしろと条件を出す」

明久は自分だけが追い詰められるのは不公平だと言いたげに声をあげると、理音は邪悪な笑みを浮かべたまま雄二に向けている銃のようなものの引き金に指をかけると銃口から「ポン」と言う小さな音がし、銃口からはひらひらと１枚の書類が揺れている。

「婚姻届？」

「何で、お前がそんなもんを持ってるんだよ！？」

明久がその書類の１番上の文字を読むと周りの視線がその書類に集まり、その書類の妻の欄には翔子の名前がすでに記入され、雄二が名前を書けば直ぐに提出できるようになっており、雄二は声をあげ

て書類を破こうと飛びかかるが、理音は当然、雄二を交わす。

「何、先ほど、お前が何かしたらこれを頼むとお前の妻から渡されただけだ。断っても良いが、その代わり、実印のところが血判になるだけだしな」

「……前田くん、あの少しやりすぎかと」

「姫路、何を言ってる。俺は友人になった霧島と素直になれない坂本を純粋に応援しているだけだ」

「どこが、応援だ!?」

理音は邪悪な笑みを浮かべたまま、この書類を持っているわけを答えると瑞希は苦笑いを浮かべながら理音を制止しようとするが、その程度では理音が止まる事はない。

「……土屋、あんた、あれをどうにかしなさいよ。あんただけでしょ、まともにあれとコンタクトとれてるの」

「……理音、昼はどうする?」

止まらない理音を見て、美波は康太にどうにかしろと言うと、康太は理音に向かい昼食の事を聞く。

# 第13問

「昼？　もうそんな時間か？」

「気づいてなかったんですか？」

康太に声をかけられるまで理音は昼休みに入っていた事にも気づいていなかったようでそう言うと、理音の様子を見て瑞希は苦笑いを浮かべる。

「それで、あんたはどうするつもり？」

「俺の昼は基本的にこれだ」

美波が理音に向かい聞くと、理音は懐からいくつかの薬瓶を取り出す。

「えーと、これはなんじゃ？」

「見てわからないか。栄養剤やその他もろもろだ」

「……」

秀吉は朝にあった理音の錠剤事件を思い出したようで理音に聞くと、理音は平然と答え、その答えに周りは黙ってしまう。

「……理音、それだと身体を壊さないか？」

「食事は活動に必要なエネルギーを摂取する作業だ。これがあれば

充分だ」

康太は理音に向かい言うが、理音には当然の事のようで表情を変える事なく言い切り、

「……明久よりはましじゃと思うのじゃが、これはこれで……」

「……こいつ、やっぱりおかしいわ」

秀吉と美波は理音の答えに呆れたように言う。

「前田くん、土屋くんの言うようにそんな食生活じゃ身体を壊しますよ。私、今日はみなさんと一緒にお昼を食べようとお弁当を多めに作ってきましたんで、前田くんも一緒に食べませんか？」

「！？」

「ほぅ……」

瑞希が理音をお昼に誘うと男性陣の表情が歪み、理音はその様子に違和感を覚える。

「お、俺は今日は学食って気分なんだよな」

「ボ、ボクも」

「待て。姫路がせっかく、こう言ってくれてるんだ。断るのは失礼だろ」

明久と雄二は後ずさりしながらそう言うが、理音は2人の様子を見

て、違和感は確信に変わったようで、２人の首をつかみ。

「せっかくだ。ごちそうになろう」

「はい♪」

２人が逃げる理由より、理音は自分の『知的好奇心を満たす』ために瑞希の料理に挑む。

# 第１４問

屋上

理音の無駄な圧力により、誰１人欠ける事なく、屋上に到着すると瑞希は気を利かせて持ってきていたであろうシートを広げる。

「……どうするのじゃ？」

「とりあえず、いかにダメージを残さないかだよね」

「あぁ、後はせっかくの仕返しのチャンスでもあるから、姫路には悪いが前田には死んで貰おう」

「……全員が生き残る事を考えるべき」

瑞希が準備を続けているなか、理音と美波を除く４人はこそこそと話をしているが、

「あんたが瑞希に気を使うなんてね」

「意外か？」

「そうね」

美波は理音の行動が信じられないのか疑いの視線を理音に向けるが、理音は特に気にする様子も見せずに美波に聞き返すと、彼女は頷いた後、「しまった」と言う表情をする。

「別にとって食う気はない」

「そうなの？」

「食われたいなら別だがな」

「！？」

理音の答えが意外だったのか、美波は恐る恐る理音に聞き返すと理音は表情を変える事なく言い、美波は理音の言葉の意味を理解すると同時に何かを想像したのか顔を赤くする。

「……あんた、サイテーね」

「サイテーかどうかは食われてみないとわからないんじゃないか」

美波は理音を睨みつけるが、理音が気にする様子はない　。

「準備できました。座ってください」

「うん」

「あぁ」

理音と美波が話している間に瑞希は準備を終えたようで理音と美波は瑞希の言葉に返事をしてシートの上に座るが、他の４人は何かに怯えているのかゆっくりと進んでくる。

「どうぞ♪」

「あぁ」

「……」

全員が座った事で、瑞希は笑顔でお弁当を理音にすすめると理音は頷き、おかずの1つを口に運ぶと男性陣は理音の様子をじっと見ている。

「……ほぅ。予想通りま……」

「何を言ってるんだよ。そんな事を言ったら、姫路さんが傷つくだろ」

理音は瑞希ね料理をまずいと予想していたため、特に気にする事なく、自分の感想を述べようとすると明久は慌てて理音の口をふさぎ、理音に耳打ちをする。

# 第１５問

「……あいつ、普通に食ってるぞ。ひょっとしたら、この前ほどじゃないのか？」

「……そうかも知れないのじゃが。前田は間違いなくまずいと言おうとしたのじゃぞ」

「……」

理音と明久のやりとりの裏で残りの男性陣がそんな話をしていると、

「何だ？　お前らは食わんのか？　それとも坂本は愛する妻の手料理しか口に合わないと言う事か？　そうか、言うまでもなかったな。姫路、坂本を霧島に引き渡しても問題ないか？」

「な、何でそうな……そうだな。翔子のところに行ってくるかな」

理音は後ろで話し込んでいるのを見て、また、何かを考えついたのか邪悪な笑みを浮かべながら言うと、雄二はこれを逃げる理由にしようと立ち上がるが、

「それでも、１口くらい食べるのが礼儀だろ」

「そうだね」

「……理音の言う通り」

理音は邪悪な笑みを浮かべたまま、逃げ出そうとした雄二の肩をつ

かみ、明久と康太も雄二につかみかかる。

「お、お前ら、何をする気だ！？」

「ほら、あーん」

「ぐほっ！？」

明久が雄二の口のなかに瑞希のお弁当のおかずを突っ込むと雄二は一瞬、白目を向くが、何とか一線を越えるのを踏みとどまったようで身体は小刻みに震えているが、

「ひ、姫路、わ、悪いな。俺はこれで失礼する」

「はい。残念ですが、霧島さんによろしく伝えてください」

「坂本、また後でね」

ここにいるのは危険だと理解しているため、足元がおぼつかない状態だが屋上を後にして行く。

「ほぅ……なるほど」

「雄二の反応から見ると姫路さんの料理の腕が上がったわけじゃないみたいだね」

「そうみたいじゃが、それなら、どうして前田は無事なのじゃ？」

瑞希と美波が雄二を見送っている後ろで、理音が雄二の症状を見て楽しそうに笑っていると、秀吉が理音に声をかける。

「さっきも言っただろう。食事は必要なエネルギーを摂取する作業だ。美味い、まずいは二の次だ」

「……いや、それは違うと思うのじゃが」

「まぁ、坂本の症状から見れば、なかなかの劇物に分類されるようだな。これは分析用に確保しておこう」

理音は楽しそうに瑞希の料理を1つ手に取ると大事そうにサンプルと書かれた小瓶につめる。

# 第16問

「……料理の評価じゃないよね」

「そうじゃな」

理音の様子に明久と秀吉は引きつった笑みを浮かべていると、

「吉井くんも食べてくださいね」

「う、うん」

瑞希が笑顔で明久に言い、明久はびくびくとしながら瑞希の料理に箸をのばす。

「……理音、あれをどうにかする手だてはないのか？」

「実験中の新薬ならあるぞ。一時的に味覚を麻痺させる薬だ。あくまでも味覚を麻痺させる薬だから、それ以外の症状が出る場合は無意味だがな」

「……ちなみに副作用はどうなっておるのじゃ？」

康太が理音に向かい何か助かるすべを聞くと、理音は懐から新たに怪しげな薬瓶を取り出して見せ、秀吉は警戒しながら理音にその薬の副作用を聞く。

「残念ながら、副作用は発見されなかった。即効性ではあるが体質によって効果が薄くてな。作用時間もバラバラだ」

「理音、それを貰って良いか？」

「副作用がないからつまらんし、効くかはわからんぞ」

「……何もないよりマシ」

「前田、ワシも1錠欲しいのじゃ」

「……あぁ」

理音はつまらなさそうに康太と秀吉に薬を渡すと2人はその薬を飲み込む。

「これで大丈夫なのじゃな？」

「効果は個人差があると言ってるだろ」

「そうじゃな……薬の効果はあるようじゃが、問題は……」

秀吉は薬を飲んだ後、一先ず、自分の弁当を食べてみると、理音の薬の効果が現れているようで頷いた後、自分の目の前の劇薬を見て、ごくりと生ツバを飲み込む。

「木下くんも土屋くんも遠慮なく食べてくださいね」

「ご、ごちそうになるのじゃ」

「……」

瑞希はその料理で明久を地獄に突き落としながらも、２人に笑顔を向けると２人は意を決したように箸を伸ばし、劇薬を口に運ぶ。

「……う、美味いのじゃ」

「……」

「……ほぅ」

なぜか、秀吉と康太は瑞希の料理を美味いと認識したようで驚きの表情をし、理音はその様子を見て何かを考えているのか邪悪な笑みを浮かべ始める。

# 第17問

「えっ！？　……ぶほっ！？」

明久は2人の反応が信じられないようで、改めて瑞希の料理に手を伸ばすが、薬を接種していない明久はそのまずさに意識を持って行かれそうにになるがなんとか持ちこたえる。

「……理音、これはどういう事？」

「推測で言えば、あの料理と俺の薬が何らかの化学変化をして、あれを美味いと認識したんだろう」

「……偶然の産物と言ったところじゃな」

「……あぁ、これは面白い事になった」

理音は何かを考えついたのか、邪悪な笑みを浮かべて言う。

「……一先ず、薬を明久にも与えても良いか？」

「……」

理音が邪悪な笑みを浮かべているなか、秀吉が理音に向かい言うと康太も同意見なのか頷くが、

「いや、あいつは姫路の料理に耐性をつけるべきだ……その方が、面白いしな」

「……理音、本音がだだ漏れ」

「……前田も気づいたようじゃの」

「姫路があいつに惚れてるのはだいぶ昔からだ。気づかないアホ久には当然の報いだろ」

理音はニヤニヤと笑うと秀吉は理音の様子に呆れたようなため息を吐く。

「それより、問題は島田がいつあの劇薬に手を伸ばすかだな」

「……」

「……何だ？」

理音が美波を気づかうようなセリフをはくと康太と秀吉は戸惑ったような表情をし、理音は2人の様子を見て聞き返す。

「いや、お主が島田を気にかけるのが意外じゃったのでな」

「俺の実験以外で人が死ぬのはもったいないだろ」

「……理音、殺人は犯罪」

「大丈夫だ。上手く殺るし、証拠など残さん。今のところ見つかった事もないしな」

秀吉が疑問をそのまま口に出すと理音は本当に美波を心配してないようで、眉1つ動かさずに言い切る。

# 第18問

「瑞希、ウチも貰って良い？」

「はい♪」

「！？」

「……ほぅ」

美波は瑞希の料理の破壊力を知らないためか、自ら地獄への階段を上がり始めると、康太と秀吉の表情はひきつるが理音は1人、邪悪な笑みを浮かべ、

「必要以上に食っても、胸にはつかんぞ。つくのはこっちだ」

「！？」

「……前田、あんた、死にたいわけ？」

理音は美波の脇腹の脂肪を指でつまみ、美波は理音の行動に伸ばしかけていた箸をへし折り、拳を握りしめる。

「事実を言われて認められないとは哀れだな」

「……前田は島田をあれから助けているのじゃろうか？」

「……これは理音の本心」

理音は美波を見下したように言うと康太と秀吉は理音が美波を助けるつもりなのか見極められないようで苦笑いを浮かべる。

「……前田、あんたを殺すわ」

「ほぅ……殺れるものなら殺ってみろ」

「ちょっと、美波も前田君も落ち着いてよ!?」

美波は理音の言葉がよほど頭にきたようで、目にも止まらぬ速さで理音の顔面を撃ち抜こうとするが、理音は平然とその拳を受け止め、2人の様子に明久は口では2人を止めようとするが、理音が美波に殺られる事を期待しているように言う。

「2人とも落ち着いてください」

「そうじゃ、落ち着くのじゃ」

「……」

瑞希と秀吉が2人をいさめようとし、康太は美波のスカートの中を覗きこもうとしている。

「康太、さっきも確認したものを見て楽しいか?」

「……」

「土屋!?」

理音は美波の拳を受け止めたまま言うと、康太はぶんぶんと首を振

り、美波はスカートを手で押さえる。

「姫路、ごちそうになった。俺は学園を見てまわりたいからこれで失礼する」

「もう良いんですか？」

「あぁ、俺は過剰なエネルギーは摂取しないようにしてるから、これで充分だ」

理音はそう言うと、

「……島田、流行りのツンデレも良いが、鈍いあいつには通じないぞ」

「！？」

立ち上がる時に流暢なドイツ語で美波に耳打ちをして屋上を後にして行き、美波はその言葉に理音を睨みつけるが理音が振り返る事はない。

# 第19問

（……ここがAクラスか、確かに設備には金をかけているようだが、無駄な上にセンスに欠けるな。この教室を設計した人間は死んだ方が良いな）

理音はしばらく学園を見て回り、最後に2年A組の教室を覗き込み、そんな事を考えていると、

「……あなた、Aクラスを覗いて何をしてるのかしら？」

「……木下、飯は食い終わったのか？」

秀吉と瓜二つの女子生徒が理音を見て、汚物を見るような視線を向けている。

「ほぅ……」

「何をするのよ！？」

「木下、お前、女装趣味を持っていると思ったが、両性具有だったのか？」

理音は女子生徒の視線など気にする様子もなく、女子生徒の顔を見渡した後、女子生徒の胸に触れ、しっかりと揉み言うと、女子生徒は自分の胸を守るように手で押さえ顔を赤くしながら後ろに飛び退く。

「姉上、前田、こんなところで何をしてるのじゃ？」

「……姉上？　なんだ、双子か、つまらんな」

「秀吉、この男は何なのよ！？」

2人の様子に人ごみができはじめると秀吉が人ごみの中心を覗き込んで理音と一緒にいる女子生徒を姉上と呼ぶと、理音は秀吉の一言ですでに女子生徒から興味が失せたようでそう言うが胸を揉まれた女子生徒は面白いわけがなく声をあげる。

「こやつは前田　理音、本日付でF組に転入してきた男じゃ、前田、こっちはワシの姉上で、木下　優子じゃ。それで、姉上……」

「……Fクラスのくせに」

「あ、姉上、話はまだ続くのじゃが」

秀吉が瑞希から聞いた話を姉の優子に説明しようとするが、優子は『F組』の一言で理音を見下したような視線を向けるなか、秀吉は優子に理音の危険さを説明しようとするが、優子が耳を傾ける事はない。

「Fクラスのくせにか？　他人を見下す事で自分を保とうとしてるわけか……成績と言うくだらないものに囚われている哀れな者の典型的な奴のセリフだな」

「Fクラスがずいぶんな事を言うわね」

理音は優子の言葉が退屈なようでつまらなさそうに言い切ると、優子は理音の言葉が頭にきているのか理音を睨みつけたまま言う。

# 第２０問

「あ、姉上、落ち着くのじゃ」

「落ち着けるわけないでしょ！！　こいつは私のむ……」

「あんな貧相なものを揉んでも欲情はしないから、安心しろ」

秀吉は完全に頭に血が昇っているいる優子を落ち着かせようとするが、理音はさらに優子の怒りの炎に大量の油を注ぎ込む。

「……Ｆクラスのくせに」

「ほぅ……そこまで、Ｆクラスだからとバカにするなら、この場で『試験召喚戦争』でもしてみるか？」

「ＦクラスがＡクラスに勝てるわけがないでしょ。良いわよ。この場で生き恥を曝させてあげるわ！！」

理音は優子をさらに挑発するように言うと、優子は理音の挑発にあっさりと引っかかる。

「待つのじゃ！！　個人で試験召喚戦争が行えるなどと聞いた事がないのじゃ、それに担当教師もいないのじゃ」

「そんなものは必要ない。さっき、その２つの問題は解決しておいた。それ以外にもいくつか面白くしておいた」

「ま、前田、お主は何をしておったのじゃ！？」

秀吉は2人を止めようとするが、理音は邪悪な笑みを浮かべて言うと、理音と優子を囲むように召喚フィールドが現れ、秀吉は理音の一言に驚きの声をあげる。

「何をわけのわからない妄想を言ってるのよ!!　Aクラス、木下優子、Fクラス、前田理音に試験召喚戦争を仕掛けるわ!!　教科は総合教科よ!!　バカが私にケンカを売った事を後悔させてあげるわ!!　試獣召喚（サモン）」

優子は理音に向かい総合教科で試験召喚戦争を仕掛けると優子の目の前の床に魔法陣が浮かび上がり、優子の前には彼女を2頭身にし、中世ヨーロッパの騎兵隊のような姿をした召喚獣がランスを構えている。

「……試獣召喚（サモン）」

理音が優子が召喚獣を呼び出したのを見て邪悪な笑みを浮かべて、召喚獣を呼び出すと先ほど優子が召喚獣を呼び出した時と同様に理音の目の前の床に魔法陣が描かれるが、そこから召喚獣が現れるには優子の時より時間がかかり、雷鳴が鳴り響くなど無駄な演出が含まれている。

「……前田、お主は何がしたいのじゃ」

秀吉は目の前で起きている事に理音の言葉を信じたようで、理音の召喚獣が現れるのに時間がかかっている事にため息を吐いていると、理音の目の前には理音を2頭身にして黒衣をまとい、理音の身長と変わらない大鎌を持った死神を彷彿させる召喚獣が現れ、

「ほぅ……これが俺の召喚獣か？　俺をそのまま2頭身にしたような姿だな。黒衣は俺がいじった通りだが、大鎌はもう少し大きくした方が良いか？　後は……」

理音は自分の召喚獣を右手で持ち上げ、まじまじと観察しはじめ、召喚獣の外観をいじる予定なのかぶつぶつと言い出し、理音の召喚獣は理音に持ち上げられ、手足をバタバタと動かしている。

# 第２１問

「秀吉、何があったんだ？」

「雄二、姉上と前田が試験召喚戦争を始めたのじゃ」

騒ぎを聞きつけたのか雄二が秀吉に声をかけると秀吉はため息を吐きながら言う。

「試験召喚戦争を？　そんな事できるわけ……やってるな」

「それもなぜか理音は触れないはずの召喚獣を持ち上げてる」

「翔子、放れろ」

「いや。妻は夫と一緒にいるのが当たり前」

どうやら、雄二は翔子に捕まっていたようで翔子は理音と優子の様子を見ながらも雄二の腕にしっかりと抱きついている。

「……あんた、いつまで、おかしな事をやってるのよ？」

「……黒衣の死神よりは……に乗った…騎士と言うのも」

理音の様子に優子は声をあげるが、理音の興味はすでに自分の召喚獣に移っているため、優子を完全に無視している。

「……姉上、あれは相当、頭にきてると思うのじゃ」

「……だろうな」

秀吉と雄二が苦笑いを浮かべた時、２人は「ぶち」と何かが切れるような音がした気がすると、優子の召喚獣が理音の召喚獣にランスを向け、一直線に突っ込むが、

「何でよ！？」

「ほぅ……なるほど、個体により……も違うようだな。質量と収縮率から考えると……と言う事か？　まぁ、胸はないが悪くはないな」

理音は優子の召喚獣を左手で捕まえ、何かを考えていると、優子の召喚獣も理音の召喚獣と同様に手足をバタバタさせている。

「……あやつはいったい何がしたいのじゃ？」

「……わからない」

「……どこに行ってもやりたい放題だな」

理音の行動に秀吉、雄二、翔子の３人がため息を吐いた時、

「……この召喚獣にイタズラをしたらどうなるんだろうな？　観察処分者は召喚獣と学生間で感覚のフィードバックがあるからそこを……させ……なるほど、マニアは喜びそうだ」

理音は相変わらず、彼特有の邪悪な笑みを浮かべていると、

「……理音、それはさすがにダメ」

「……そうだな。やるなら、遠距離より直接的に屈服させた方が楽しいしな。格下だと思い込み、侮蔑した人間に陵辱される気分はどんなものだろうな？」

さすがに翔子からツッコミが入り、理音はそのツッコミからさらに何かを考えついたのか口元は小さく緩んでいる。

「あんたは何をする気よ！？」

「まぁ、召喚獣を見るのも一先ず飽きたからな。決着をつけてやろう。この俺に逆らった事を死ぬまで後悔させてやろう。さぁ、この場で踊る道化の実力とやらを見せて貰おうか？」

優子が声をあげると理音は優子に召喚獣を投げ返し、自分の召喚獣を床に戻す。

「……あやつは完全に悪役じゃな」

「……あぁ」

その姿に秀吉と雄二はため息を吐く。

# 第２２問

「えぇ、格の違いを見せつけてあげるわよ！！」

優子の召喚獣が再度、理音の召喚獣に向けて一直線に突進をしてくると、優子の召喚獣の頭の上には彼女の総合教科の点数の『３９２８』と表示されている。

「Ａクラスはだてじゃないな」

「……流石は姉上」

「……でも、理音には勝てない」

秀吉と雄二が優子の点数を見て驚きの声をあげるが、翔子は理音の実力に気づいているのかそう呟くと、

「また突進か？　単調でつまらんな。終わらせてやれ」

理音はただ一直線に向かってくる優子の召喚獣を見てつまらなさそうに言うと、理音の召喚獣は理音の言葉に頷き、突っ込んできた優子の召喚獣のランスを大鎌で叩き落とし、素早く優子の召喚獣の後ろに回り込むと、大鎌の刃を優子の召喚獣の首にかける。

「ど、どう言う事よ！？」

「どうした？　格の違いを見せつけてくれるんじゃなかったのか？」

優子はＡクラス自分がＦクラスの理音に負けるわけがないと思って

いたせいか、目の前で起きている現実が受け入れられないような表情をしていると、理音はその姿を見て邪悪な笑みを浮かべる。

「……何で、あいつは明久並みに召喚獣を動かせるんだ？」

「……前田の話を信じれば、試験召喚システムの本体をいじったそうじゃ」

「はぁ？　そんな事ができるわけ……」

「姫路の話じゃと、あやつは正真正銘の天才らしいのじゃ」

秀吉が理音の事を天才と言った時、理音の頭の上には『∞（インフィニティ）』と表示される。

「何よ。その点数は！？」

「進学校とはいえ、たたが、日本の高校教師ていどがこの俺の頭脳に点数をつけれると思っているのか？　逆にあの程度の編入試験しか作れないバカどもに俺が点数をつけてやりたいところだ」

優子は理音の点数を見て驚きの声をあげるが、理音はすでに試験召喚戦争に興味がなくなっているのかつまらなさそうに言うと、理音の召喚獣の頭の上には『ＷＩＮ』と表示され、優子の召喚獣は消え去っている。

「さてと、負けたものには罰ゲームと世の理で決まっているが、投薬実験と性的お仕置きどっちが良い？」

「あんたは、何を言っているのよ！？」

理音の興味は優子へのお仕置きへと移ったようで、邪悪な笑みを浮かべて言うと優子は今から理音に襲われると思ったようで後ずさりをするが、理音は邪悪な笑みを浮かべたまま優子との距離を縮めて行く。

# 第２３問

「前田、そのくらいにしておいてくれんか？」

「何を言ってる。罰ゲームはお約束で勝者の特権だ。それに俺は気の強い女を屈服させるのが大好きなんだ」

「……お前、最低だな」

秀吉は流石に自分の姉のピンチに理音を止めようとするが、理音が止まるわけがなく、そんな理音の様子に雄二が肩を落としながら言うと、理音はその一言に何かを思いついたようで邪悪な笑みを浮かべたまま振り返り、

「坂本、わかってないな。お前もいつもやってるプレイと違う事をやれば盛り上がると思うぞ。お前も霧島を夜に屈服させればわかるぞ。今夜にでも試してみたらどうだ？」

「今夜は雄二の思うままになる？」

「翔子、何をわけのわからんことを言ってるんだ！？　ちょっと待て、お前ら！！　前田が俺をはめようとしてるだけだ！！　俺はまだ何もしてない！？　カッターを構えるな！？」

理音と翔子の言葉を聞いて、人ごみの中からカッターの刃を出す「カチカチ」と言う音がなりだし、雄二は無実だと叫ぶが、

「まだ？　と言う事はその気はあるんだな」

「雄二、待ってる」

「!?　前田、翔子、お前らは何が楽しいんだ!?」

理音は雄二の言葉を湾曲させて補足すると翔子は顔を赤くする。その様子に嫉妬の視線は廊下一帯に拡大し、雄二にはカッターが投げつけられるが雄二はなんとかカッターを交わすと、2人を怒鳴りつける。

「何?　と言われると素直になれないツンデレの本音を聞く事だな。それに俺は霧島と友人になったわけだし、大切な友人の恋愛の手伝いをするのも学生生活の醍醐味じゃないか」

「私、理音と友達になれて良かったと思う」

雄二の叫びに、理音は悪びれる事なく、雄二と翔子の中を応援してると言い切り、翔子は理音のその言葉を信じたのか頷く。

（……御しやすいなどと思ってそうな顔じゃの）

秀吉が理音の表情を見てため息を吐いた時、

「坂本を殺せ!!」

「そうだ。奴を生かして帰すな!!」

「カップルを作ろうとするあの男も同罪だ!!」

とうとう嫉妬の念にかられた男子生徒数名が理音と雄二に飛びかかるが、「ブン」とその男子生徒達を理音の召喚獣が大鎌で薙ぎ払い、

理音と雄二に向かってきた男子生徒達は吹っ飛ばされる。

「ぐわっ！？」

「な、何で、召喚獣が！？」

「俺が話しているのを遮るとはな。死ぬ覚悟は出来ているんだろうな？」

理音は雄二で遊んでいる事を邪魔をされたのに腹を立てたのか、理音の邪気を含んだ笑顔は今まで雄二に視線を向けていた男子生徒全てに向けられ、

「蹴散らせ」

理音のその一言に、理音の召喚獣がその場でこの様子を見て嫉妬の視線を向けていた男子生徒の全てを吹き飛ばす。

# 第２４問

「……秀吉、こいつは何なの？」

「じゃから、待ってくれと言ったのじゃ。前田理音、小学校を卒業後に留学して飛び級で大学に行っておった天才じゃ」

優子は理音の行動に引きつった笑みを浮かべて言うと秀吉はため息を吐きながら、理音の簡単な学歴を話す。

「何で、そんな奴がＦクラスに転入してるのよ！？」

「秀吉、さっきも聞いたが、何でそれを知ってるんだ？」

「姫路と明久とは小学校が同じなのじゃ、姫路から聞いたのでな。間違いないのじゃ、Ｆ組に転入した理由はバカを観察したいからじゃそうじゃ」

「……やっぱり」

理音の学歴を知らなかった優子は驚きの声をあげるが、翔子は知っていたのか納得したように頷いているなら、理音は楽しそうに蹴散らした男子生徒達を踏みつけている。

「やっぱりって、代表はあいつの事を知っているんですか？」

「前に理音が載っている記事を読んだ事がある。あの年で多くの薬学系の論文で博士号を取っていて、その論文を参考にした薬のおかげで多くの人の命が救われているって、他にも多くの分野で名前が

知れてる天才だって」

優子が翔子につかみかかるように聞くと翔子は自分が見た事がある理音の記事の事を話し、

「そんな凄い奴だったのか？　ただの性悪にしか見えんぞ」

「……確かにそうじゃな」

秀吉と雄二は引きつった笑みを浮かべて言うと、

「そ、そんな奴がなんでこんな学園にいるのよ！？」

「わからない。ただ……理音は寂しそう」

翔子は理音に視線を向けて言うが、

「代表、それはないと思います」

「ワシも姉上に賛成じゃ」

秀吉と優子は翔子の言葉を全否定する。

「……雄二」

「……あぁ、少し気にかけて見る」

「それでこそ、雄二♪」

「だから、抱きつくな！？」

しかし、翔子だけは理音の様子から何かを感じ取っているようで、雄二の学生服をつかみながら雄二に言うと、雄二は翔子の様子に何かを感じ取ったようで頭を掻きながら頷き、翔子は雄二の返事に嬉しそうに雄二の腕に抱きつく。

# 第２５問

「あの、前田君」

「……」

５時間目の英語の授業が始まり、担当教師の遠藤先生が理音の頭の上を見て苦笑いを浮かべながら理音を呼ぶが、理音は反応する事なく、自分のノートパソコンのキーボードをもの凄い勢いで叩いている。

「ねぇ、雄二、前田君はどうして頭の上に召喚獣を乗せてるの？」

「あぁ、なんか、試験召喚システムに入り込んでいろいろシステムをいじったら、元に戻らなくなったらしい。それで、今は解決方法を探してるんだとさ」

「……前田くん、また、ずいぶん無茶な事をしましたね」

理音は頭の上に昼休みに召喚した召喚獣を乗せており、明久はそのわけがわからずに雄二に向かい聞くと、雄二は今の状況を簡単に説明し、瑞希は苦笑いを浮かべている。

「あの、前田君、流石に頭の上に召喚獣がいると後ろのみなさんに迷惑がかかりますから」

「……」

遠藤先生は理音に向かい言うが、実際、理音の後ろにいる生徒は昼

飯を食べた後から、机代わりのみかん箱に突っ伏し眠りに入っている。

「あの……」

「……」

遠藤先生がもう1度、理音に声をかけようとすると、理音の召喚獣は遠藤先生の言葉を理解したようで、理音の頭から立ち上がると理音の膝の上にちょこんと座るが理音はそれを気にする事なく、ノートパソコンに向かっている。

「……あの召喚獣、賢いわね」

「あぁ、流石は前田の召喚獣だ。明久より賢いな」

「そうじゃな」

理音の召喚獣の様子を見て、美波が言うと雄二と秀吉は頷く。

「ちょっと、みんなしてひどいよ!?」

「黙れ。お前と前田の召喚獣を見比べたら、１０００人中１０００人がそう言う。それが認められないから、お前は近所の幼稚園児からも『バカなお兄ちゃん』とバカにされるんだ」

「幼稚園児からは言われてないよ。言われても小学生からだ!!」

「……明久、それを言う時点でどうなのかと思うのじゃが」

明久はバカにされた事に反論しようとするが、その反論により、周りからはさらにかわいそうなものを見るようなもので見られ、明久はその視線に恥ずかしくなったのか畳の上で転げ回る。

# 第２６問

「それより、明久、お主と前田は古い友人だったようじゃの。何か話をしたのか？」

「秀吉、何を言ってるんだよ。ボクはあんな性格の悪い友人は雄二しくわぁ……ちょっと待って、雄二、頭が割れるぅぅぅ！？」

秀吉は明久に理音と何か話したかと聞くが、明久は未だに理音の事を思い出していないようで首を傾げると雄二が翔子ばりのアイアンクローを明久に喰らわせる。

「あの、吉井くんと前田くんは小学生の時、２人でよく遊んでたと思うんですけど」

「小学生のころ？　……ボクの友達で前田理音？　いやだなぁ。姫路さん、確かに前田リオって友達とはよく２人で遊んでたけど、リオは女の子」

「えーと、確かに前田くんは昔はよく女の子と間違えられるくらいかわいかったですけど、正真正銘の男の子でしたよ」

「……姫路さん、それは本当なの？」

「えーと、本当です」

瑞希が苦笑いを浮かべながら、明久が理音との事を思い出すようにヒントを出すが、どうやら明久は小さな頃の理音を女の子と勘違いしていたようである。

「……アキ、あんた」

「バカだとは思っていたが……」

「……流石に理音がかわいそう」

「……そうじゃの」

明久の勘違いに話を聞いていた全員がため息を吐く。

「そ、そんな事を言ったって小学校卒業から会ってないんだから、仕方ないでしょ。それにリオはあんな風に、人体実験をするような……ひぃ！？　そ、そんな事はないよ。あ、あれはボクの夢であって……」

「……何か思い出したようじゃな」

「そうみたいね」

明久は昔の事を思い出そうとしはじめると何かを思い出したのか額に脂汗を流しながら狼狽しはじめる。

「姫路、本当に明久と前田は友達だったのか？」

「はい。いつも2人で楽しそうに遊んでましたよ」

（……それは明久が実験台にされてただけじゃないのか？）

雄二は瑞希の言葉と明久の様子を天秤にかけて、そんな事を考える

が口に出す事はない。

# 第27問

「これで良いな」

6時間目終了の鐘が鳴り響くなか、理音はノートパソコンのエンターキーを押すと理音の膝の上には魔法陣が現れ、理音の召喚獣は魔法陣の中に消えて行く。

「ん。前田、問題は解決したみたいだな」

「あぁ」

雄二は理音の膝の上に魔法陣が浮かび上がり召喚獣が戻って行くのを見て理音に声をかけると理音は短く返事をする。

「しかし、お前は凄いんだな」

「ご機嫌を取りにきても、俺はクラス間の試験召喚戦争に協力する気はない」

理音は雄二が声をかけてきた事の意味を『試験召喚戦争』への協力要請だと思ったようで不機嫌そうに言うと、

「まぁ、期待してなかったと言うと嘘になるが、そこまで警戒しないでくれ」

「ほぅ……それなら、何のようだ？」

雄二は理音の答えに苦笑いを浮かべると理音はその様子に聞き返す。

「一応はFクラス代表として、お前が試験召喚戦争で何をしてくれるか相談しようと思ってな」

「……今、協力しないと言ったばかりのはずだ」

雄二は先ほど否定したはずの『試験召喚戦争』の協力要請だと言うと理音の表情は雄二を見下すように変わり、つまらなさそうに立ち上がり、下校を始めようとする。

「話は最後まで聞け、確かにお前が出ると絶対に負けない。だけどな。俺はそんな面白みのない勝負はしたくない。俺は学力以外でも頭は使いようだと思ってるんでな」

「ほぅ……少しだけ付き合ってやろう」

「話を聞く気にはなったようだな？」

雄二は理音と言う無敵の駒を戦闘では直接使う気はないようでニヤリと笑いながら言い、理音は雄二の様子を見て、『坂本　雄二』と言う人間を面白いと思ったのか頷くと、雄二は何かを企んだように笑う。

「……あの2人に悪だくみをさせるのは危険じゃない？」

「……そうかも知れんのぅ」

理音と雄二の様子を見て、秀吉と美波は疲れたようなため息を吐いている。

## 第２８問

「お前に頼みたい事は２点、うちのクラスは見ての通りのバカの集まりだ。そいつらの勉強を見て欲しい。全教科じゃなくて良い。戦争の核になるものが欲しい。手段は選ばん」

「ほぅ……それは新薬の実験台にしても良いと言う事だな」

「あぁ、死ななければ、大目にみよう」

雄二が理音の言葉に頷いた時、

「坂本、あんた、何を考えてるのよ！！　そんな事をやって良いわけがないでしょ！！」

「島田の言う通りじゃ」

美波からのツッコミが入り、秀吉はため息を吐いている。

「流石に冗談だ」

「……ちっ、つまらん」

雄二は苦笑いを浮かべて冗談だと言うと、理音は舌打ちをする。

「まぁ、戦力の補強として１教科だけでもＡクラスに対抗できる人間が欲しいってのが本音だ。現状じゃ、姫路と康太しかいないからな」

「……防御無視の最強の槍か」

「あぁ、適性もあると思うからな。うちのクラスに適性がある人間がいるかはわからないがな。後はうちのクラスの回復試験や補習の時に点数採点をして欲しい。お前なら他の教師陣より短い間で採点を終わらせる事ができるだろ？」

「……なるほど、鉄砲の導入と兵農分離と言ったところか。そして俺は荷駄隊と言ったところか」

「あぁ、例えて言うならそう言う事だ」

理音は雄二の考えを直ぐに理解したようでそう言うと雄二はニヤリと笑うが、

「だが、将もいない状態で雑兵が増えただけで、戦況が変わるかな？」

「変えるさ」

理音は雄二の提案に質問をすると雄二は根拠などないくせに言い切る。

「……そうだな。それなら、俺からも1つ提案させて貰おう。俺の召喚獣は1度の試験召喚戦争に1度だけ召喚してやろう。しかし、直接攻撃は流石に卑怯だからな。効果は……そうだな。これで決めさせて貰おう」

「これ？　サイコロで何をするつもり？」

理音は何かを考えついたのか畳の上に転がっているサイコロを拾う
と明久が理音の行動の意味がわからずに首を傾げる。

# 第２９問

「俺の召喚獣は支援型にしておこう。アホ久が召喚獣を召喚した時に俺の召喚獣は発動し、サイコロの出た目の数、俺の召喚獣がアホ久の召喚獣を殴り飛ばす。『殴り飛ばした分×アホ久の元の点数＝アホ久の攻撃力』になるようにしておこう」

「明久の点数なら、６倍にしてもＡクラスに勝てるかはわからないが、面白そうだから、了承だ」

理音が提案した事を雄二は純粋に面白いと思ったようだが、

「ちょっと待ってよ！！　ボクの召喚獣が殴られるって事はボクにダメージがくるだろ！！　そんな嫌だよ！！」

「雄二、前田の召喚獣の点数を見たであろう。６発も喰らうと観察処分者の明久は死ぬのではないか？」

「「些細な事だ」」

明久は理不尽だと声を上げ、秀吉は理音の召喚獣の総合教科の点数を見たためか引きつった笑みを浮かべると理音と雄二の２人は明久が死ぬのは些細な事だと言い切る。

「放せ。ムッツリーニ！！　ボクは殺られる前に、あの２体の悪魔を滅ぼさないといけないんだ！！」

「……放しても良いけど確実に返り討ち」

明久は理音と雄二の言葉を聞いて、2人に殴りかかろうとするが、康太は明久を羽交い締めにして明久を止める。

「前田くん、坂本くん、流石にそれはちょっと」

「そうよ。召喚しても役に立たないなら意味ないじゃない」

「元々、役に立たないんだ。問題ないだろ」

「それもそうね」

「あの、美波ちゃん」

瑞希と美波が理音と雄二の言葉に苦笑いを浮かべて条件を変えさせようとするが、雄二が『明久は役立たず』だと言い切ると確かにその通りだと頷く。

「そうだな。俺の召喚獣では確かに死ぬかも知れないな。それなら、サイコロの数だけ、島田がアホ久の本体を殴る事にしよう」

「それなら、良いわね。死なない程度な殴って良いわけだし♪」

「ボクに味方はいないのか！？」

理音が邪悪な笑みを浮かべながら代替え案を提案すると、美波は「ポン」と手を叩き、理音の提案に賛成し、明久は声をあげる。

# 第３０問

「前田、雄二、冗談はそのくらいにするのじゃ」

「そうだな。話が進まないからな。これくらいにするか？　前田…
…いや、理音、お前の召喚戦争参加方法はもう少し考えよう」

秀吉が理音と雄二を止めようとして言うと雄二は頷き、理音の召喚獣の使い方は改めて話し合う事を提案しようとするが、雄二は今のやりとりでそれなりに理音が気に入ったようで理音の呼び方を変えると、

「あぁ、そうするか。どうしたら、殺さない程度に誰が１番アホ久にダメージを与えられるか、各自、考えてきてくれ。雄二もそれで良いか？」

「あぁ、問題ない」

「ちょっと、雄二もリオも目的が変わってきてるよ！？」

理音は雄二の言葉に頷くと雄二が自分の呼び方を変えたため、雄二を名前で呼ぶと２人の様子に明久は相変わらず自分の身の危険を感じているのか声をあげるが明久の理音の呼び方は２人が昔遊んでいた時の呼び方に戻っている。

「姫路、あれはほっといて良いのか？」

「はい。２人とも、昔みたいに笑ってますから」

「そう？　一方的にアキがいじられてるって感じじゃない？」

「……でも、理音、今朝より良い顔してる」

明久が理音と雄二にいじられているのを見て、秀吉はため息を吐くが瑞希と康太が理音の表情が少し違うと言うと、その意見に秀吉と美波も納得したのか苦笑いを浮かべる。

「ちょっと、みんなも笑ってないで、なんか言ってよ！？」

「そうじゃな。前田、雄二、明久いじりもそれくらいにしてそろそろ解散するのじゃ、もう下校時間もとうに過ぎておるのでな」

「そうだな。俺はまだ、部屋の整理も終わってないし、寄る場所もあるから、悪いが先にあがらせて貰う」

秀吉が仲裁に入ると理音は時間を確認し、少し慌てた様子で鞄を手に取り歩き出し、教室のドアまで移動した時、

「リオ」

「何だ？」

明久が理音を呼び止め、理音が振り返ると、

「えーと、おかえり。リオ」

「前田くん、おかえりなさい」

明久は少し照れくさそうな表情で理音に向かいおかえりと言うと瑞

希も明久に続いて笑顔で言う。

「あぁ、ただいま。アキ、瑞希」

理音は明久と瑞希の言葉に先ほどまでとは異なる柔らかく優しい笑みを浮かべて言うと、本当に急いでいるようで直ぐに振り返り足早に歩き出す。

# 第３１問

（……さてと、あのバカどもにどうやってものを教えるかな？　やっぱり、こいつが手っ取り早いと思うんだけどな）

「！？」

理音は登校の途中で懐から薬瓶を取り出し眺めていると理音の姿を見て、１人の女生徒が物陰に隠れる。

（ん？　今、何か不自然な動きが……）

理音はその姿に何かを思い出したようで邪悪な笑みを浮かべると、

「木下姉、昨日の罰ゲームの件だが、１日、ゆっくりと考えて結論はでたか？」

「な、何で気づくのよ！？」

邪悪な笑みを浮かべたまま、隠れた女生徒に近づき声をかけると、理音に見つからないように隠れた女生徒は昨日、理音に試験召喚戦争でぼろ負けした木下優子である。

「結論が出てないなら、新しい媚薬を使っての性的お仕置きにしてやろう。まだ実験の段階だから、どこまで乱れられるかはわからんが、初めてでも快楽の虜にしてやる事は約束しよう」

「な、何をする気よ！？　この痴漢！？　変態！？」

理音は懐から怪しい錠剤を取り出すと優子の逃げ道を塞ぎながら距離を縮めて行くと、優子は今から自分が理音に何をされそうになっているか想像したようで顔を青くして、理音に罵声を浴びせるが、

「何を想像してるんだ？　俺に教えてくれ」

「！？」

理音は優子が想像している事に予想はついており、優子に覆い被さるような距離まで近づいた時に彼女の耳元でささやくように言うと、優子は自分の頭の中で考えてしまった事を理音に見透かされているため、顔を真っ赤に染める。

「直ぐにそれを想像したって事はお前はどこかで期待してるんだ？　これを飲めば、直ぐにお前の期待通りの快楽を味あわせてやれるぞ」

「そ、そんなわけがないでしょ！？」

「それなら、拒絶しろ。本気で助けを求めろ。この距離まで、俺が近づいたのに声もあげない、力付くで抵抗しないって事はお前の素直な部分は期待してるんだ。ほら、口を開けろ」

理音は優子の耳元で彼女の理性が徐々に剥がれて行くように甘い声でささやく。

「うぅぅぅ」

「良い子だ」

優子は理音の声にすでに頭の中がパニック状態なのか、口を開けてしまい理音は彼女の耳元でそうささやくと彼女の口の中に錠剤を入れると、優子の口の中には今まで体験した事のない『不味い』と言う一言では表せない味が広がる。

「な、何よ。これは!?」

「ただのお仕置き用の飴だ。だいたい、俺は見られて興奮するような趣味はない……それにな」

優子は口の中に広がるもので、一気に現実に引き戻されると口の中のものを吐き出し、理音を怒鳴りつけるが、理音は悪びれることなく言い切ると、

「お前みたいな。良い女の肢体は見せびらかさずに独占したいだろ？」

「!?」

再度、彼女の耳元で今度は違う方向から甘い声でささやくと優子は耳まで真っ赤に染まる。

「なかなか、良い反応だ。本気でいじめたくなる」

「な、な、何を言ってるのよ!?」

理音は優子の反応に満足したような笑顔を見せると、優子は顔を真っ赤にしたまま、理音を怒鳴りつけて拳を突き出すが、理音は簡単に彼女の拳を受け止め、

「何を？　自分が良い女だと自覚しろ。別に無理して優等生を演じなくてもお前は良い女だ。少なくとも俺は気に入った」

「！？」

理音は別に特別な感情などないが、自分が思った事をそのまま口に出すと優子はその言葉で何か勘違いしたようで理音から視線を逸らすが、

「じゃあな。木下姉、お前は真面目な優等生を語ってるみたいたがら、遅れるなよ」

理音は他意はないため、表情を変える事なく優子に言うと彼女の返事を聞く事なく、文月学園に向かって歩いて行く。

# 第３２問

「……おはよう」

「裏切り者には死の制裁を！！」

理音が教室のドアを開けると理音に向かいおかしな覆面を被った奴らが叫びながら理音に照準を合わせてカッターを投げつけてくるが、理音はその様子に慌てる事なく教室のドアを閉め直すと勢いよくカッターがドアと教室に刺さる音がする。

（……俺に向かってくるとはな。死んで償って貰おう）

理音はクラスメート達の行動に邪悪な笑みを浮かべると、

「これは何だ！？」

「煙！？　あいつは今日は何をするつもりだ！！」

「良いから退却だ！！」

ドアを少しだけ開け、教室内に小さな薬瓶を投げ入れるとその薬瓶は砕け、教室内に煙幕が上がり始める。

「俺にケンカを売った事を死んだ方がマシだと思うくらいに後悔させてやろう」

理音は煙幕が充満しだした教室内に入ると視界が遮られた状態でも的確に花火で自分の命を狙った人間を撃ち抜いて行き、

「……これはなんのマネだ？」

最後の1人を撃ち抜いた時に煙幕は晴れ、足元のクラスメートを足蹴にして聞く。

「あの、前田くん」

「悪いな。瑞希、煙幕を吸い込んでないか？　一応は無害なものを使用してるが何かあったら、試験薬で良ければ処置はしてやる」

「だ、大丈夫ですよ。それに試験薬は遠慮します……」

瑞希が理音の様子を見て苦笑いを浮かべながら声をかけると理音はそれなりに瑞希の体調を気にしたようで、彼にしては珍しいように思える言葉をかける。

「……お主は何がしたいのじゃ？」

「……と言うか、それは何よ？」

理音と瑞希のやりとりに理音の攻撃対象から外れていた秀吉と美波が呆れた様子で声をかけると、理音は顔に何かスコープのようなものを付けている。

# 第３３問

「こいつを使えば、動き回るバカどもを撃ち抜いていけるからな」

「……理音、それはどれくらい見える？」

理音が装着しているスコープを外して答えると、他のクラスメート達と一緒に撃ち抜かれたはずの康太が理音のスコープに興味があるのか理音に近づいて言う。

「現在、市販されているものよりは高性能のはずだ。昨日、康太には面白い話を聞かせて貰ったし、必要なら譲ろうと思ってな」

「……流石にただは悪い」

康太は理音の提案を断ろうとするが、

「気にするな。これは先行投資だ。これに見合うものをお前なら準備できるだろ？　何なら、カメラにつけるものも作っておこう」

「先行投資と言う事なら、遠慮なくお願いする」

理音は楽しそうに康太に提案すると康太は即答で頷く。

「……あんた達は何をするつもりよ？」

「知的好奇心を満たすための行為だ」

「……理音の言う通り」

美波は2人の様子に冷たい視線を向けるが理音は平然と答え、康太は理音の言葉にこくこくと頷く。

「でも、それはウチらにとって危険な匂いがするのよね。だから、壊させて貰うわ」

「島田、これをやるから納得しろ」

「!?　……仕方ないわね。今回は引いてあげるわ」

美波は理音のスコープに手をかけようとするが、理音は懐から1枚の写真を取り出し、美波に渡すと彼女は一先ず、納得したようで直ぐに懐に写真を隠す。

「……前田、お主は何を渡したのじゃ？」

「小学校時代のバカの満面の笑顔の……瑞希、俺の制服を漁ろうとするな」

「そ、そんな事はしてないですよ!?」

秀吉が理音の行動に呆れたように言うと、理音は隠す必要などないと思っているため、あっさりと答えると瑞希は理音の制服の中に同じような写真がないかと思ったようで理音の制服に右手を伸ばそうとしたところで理音に腕を捕まれる。

## 第３４問

「……姫路、お主もずいぶんとこのクラスに毒されてきてるようじゃな」

「そ、そんな事はないですよ！？」

「そう思うなら、どうして反対の手を伸ばす？」

「えーと……あはは」

秀吉が瑞希の行動に呆れたようなため息を吐くと瑞希は気まずそうに反論するが彼女の左手は理音の制服に伸ばされ、理音は瑞希の左手も右手と同様につかんで聞くと彼女は理音から視線を逸らして苦笑いを浮かべる。

「欲しいなら、後でやるから、まずは俺にやるべき事をやらせろ」

「あの……やるべき事って何ですか？」

理音は彼特有の邪悪な笑みを浮かべて言うと、目の前の理音の変わりように瑞希は苦笑いを浮かべたまま聞き返す。

「何、このバカどもが俺の命を狙った理由を聞いた後に然るべき処置をしないといけないだろ？　なぁ、アキ」

「ひぃっ！？」

理音は邪悪な笑みを浮かべたまま、足蹴にしていた生徒の覆面を剥

ぎ取ると理音に足蹴にされているクラスメートは明久であり、明久はこれから理音に何をされるかを想像したのか小さな悲鳴をあげる。

「まず、この原因を俺にわかるように3文字で説明しろ」

「3文字……ぐわっ！？」

理音は足蹴にしている明久に無茶な事を言うと明久は無理だと言おうとするが3文字を超えたため、理音の足には体重がかけられ、明久は悲鳴をあげる。

「次に俺の質問に速やかに答えなければ、次は命がないぞ」

「だって、3文字なんて無理だよ」

「なら、事の詳細をなるべく簡潔に説明しろ」

理音はまるで明久の命など本当にどうでも言いように感情のない無機質な笑みを浮かべて言う。

「だって、リオが秀吉に襲いかかったって言うから、秀吉にだよ！！　ボク達だって、いつもそんな気持ちを抑えてるのに！！　いただだ。リオ、何も言わずに足に力を込めないで！？　姫路さんも美波もどうして、拳を握り締めてるの！？」

明久の解答に理音は明久を足蹴にしている足に無言で体重をかけて行き、理音の隣で瑞希と美波は額に青筋を浮かべながら拳を握り締めている。

# 第３５問

「……なんで、俺が木下に襲いかからないといけない。俺は男を押し倒す趣味はない」

「だ、だけど、リオが秀吉のおっぱいを揉んだって情報が……いたい！？　いたいよ！？　ちょっと、リオ、止めて！？　このままだと内側のものがはみ出ちゃうよ！？」

理音の疑問に明久が答えると、どうやら、昨日、理音が胸を揉んだ相手が優子から秀吉に変わっているようで、理音は明久の言葉が本当に頭にきているのか、邪悪な笑みを止め、明久を踏みつけている足に力を込め、明久は理音の攻撃に悲鳴をあげるが理音の力が緩む事はない。

「誰が好き好んで男の胸など揉むか！！　俺が揉んだのは木下姉の方だ！！」

「裏切り者には死の制裁を！！」

「……」

理音は事実を述べるとクラスメート達は再度、理音に飛びかかるが、当然、花火で撃墜され、その中には康太も混じっている。

「……前田、あんた、それを言い切るのはどうなのよ？」

「仕方ないだろ。なぜ、木下が女装してるかを確認したかったんだ！！」

「まぁ、確かに似てるけど、普通は間違えないわよ」

「いや、あれは間違える。だからこそ、しっかりと揉んだ。男の木下のなど触れたって揉むわけないだろ！！」

理音は頭に血が昇りきっているようで、事の詳細を暴露しながらも明久を踏みつけている足は力が緩む事はない。

「……前田、お主が姉上の胸を揉んだ事にも問題があるのじゃ、それくらいにしないと明久が死ぬぞ」

「木下、放せ！！　こう言うバカは世の中から滅殺しないといけないんだ！！」

「ちょっと、前田、何があったのよ！？　熱くなりすぎよ！！」

「そうです。何かあったんですか？」

理音の様子を見て、秀吉、瑞希、美波の３人は理音を明久から力づくで引き離すと、

「……お前ら、男が男に襲いかかられる恐怖を身を持って体験した事がないだろ」

「……確かに、日本以外はけっこういるわね」

理音は留学中に男性に襲われかけた事があるのか、ぼそりと言うと海外生活の長かった美波は引きつった笑みを浮かべる。

「……前田くん、ひょっとして」

「瑞希、勘違いをするな！！　俺はそっちの気はない。変な気を起こしたヤツは全部、撃破して社会的制裁も加えた。２度と日の当たる場所に上がってこれないようにな」

「……お主も苦労したのじゃな」

瑞希は理音の顔を見て１歩下がると理音は全力で否定し、秀吉は理音の過去に同じ何かを感じ取ったのか同情したように言うと、

「前田がそれだけ人気があったって事でしょ。アキの話じゃ昔は女の子みたいにかわいかったらしいし」

「島田、それ以上言うな。相手が嫌がっている言葉は誉め言葉じゃない。相手が嫌がっているのに回数を重ねればそれはトラウマになる」

「……お主も良くわかっているようじゃな」

美波が苦笑いを浮かべながら、理音に言うが、理音は思いつめたかのように言い、秀吉は理音の隣でうんうんと頷いている。

「だからこそ、こう言うバカは滅殺しないといけない。社会平和のために！！　お前ら、全員、殺された方がマシって痛みを３日３晩味あわせた後、確実に息の根を止めてやる。もしくは……その体験を強制的にさせて思い知らせてやる！！」

「「ごめんなさい！？　そ、そんな事は考えた事がありませんでした！？」」

理音が携帯電話を取り出した瞬間、今まで理音に殺意を込めた視線を送っていたクラスメート達は理音がどこに電話をかけるか本能的に察したようで、全員でその場に土下座をして理音に許しを乞おうとするが、理音は完全にブチ切れているようで懐から大量の花火を取り出すと、

「よし、今日も全員いるな」

怒りに任せてクラスメート達を花火で撃ち抜き屍を積み上げているなか、西村教諭が教室に入ってきてそう言うと教室での惨劇など気にせずに教室を出て行く。

## 第３６問

「確かに可愛いわね。これは襲われるわ」

「……島田、それ以上言うなら女でも撃ち抜くぞ」

美波は理音が持ってきた、理音と明久の小学生の頃の写真を見て、理音をからかうように言うと、理音はノートパソコンをいじりながら不機嫌そうな表情で言う。

「しかし、どうして、こんなものを持ってきたのじゃ？」

「昨日、引っ越しの片づけをしてたら出てきたんだ。瑞希と島田は欲しがると思ったからな。後はムッツリ商会へ提供をしようと思ったんだ。あのバカはバカだが、それなりに人気があるだろうからな」

「……理音、どうしてそう思う？」

秀吉が理音と明久の昔の写真を手に取り言うと、理音は不機嫌なまま言い、康太はその写真に商品価値はあると判断しながらも理音に聞き返すと、

「あれは昔から、天然で無駄に人の心をもてあそぶ生き物だからな」

「……そうですね」

理音がため息混じりで答えると瑞希の背後に黒いものが混じる。

「アキの写真は好きなだけ持って行っても良いが、俺の写ってるの

は置いてけよ」

「……それは理音の頼みでも聞けない。これもきっと高値で売れる」

理音は写真を漁っている康太に言うと康太は理音の言葉は聞けないと言う。

「……康太、お前との友情はこれまでだな。お前もあのバカどもと同じように罰を与えるべきだったようだな」

「……友情は時にぶつかり合うもの」

理音が康太を睨みつけるが、康太は理音の小学生の頃の写真にも商品価値を見出しているようで理音を睨み返す。

「前田もムッツリーニも落ち着くのじゃ！？」

「前田、この写真って学校以外も多いけど、誰が撮ったの？」

秀吉が2人の間に話って入り、美波が話を変えようと理音に言うと、

「俺の父さんだ」

「へぇ、お父さんは写真が好きなのね」

「あぁ、父さんは写真が好きだった」

「……」

理音が父親の話は『過去形』であり、瑞希は理音の言葉に表情を暗くしている。

# 第37問

「リオ、あのさ……」

「あ？　誰が口を開く事を許可した？」

理音の父親の話が出た事で、明久は何かを思い出したのか理音に声をかけるが、理音はクラスメート達が朝にした事を許していないため、康太と秀吉を抜かした男子生徒は教室の後ろで強制的に正座をさせられ、足の上にはどこから持ってきたかわからない大石がのせられている。

「す、すいませんでした！？」

「……なぁ、理音。今さら言うのも何なんだが、今回の俺はとばっちりなんだ。お前に襲いかかった康太が助かって、俺がこの状態なのは納得がいかねぇ」

明久は理音に向かい謝ると、雄二は理音襲撃事件には関与していないと言う。

「康太とは裏取引が成立したから、今回は見逃しただけだ。それに雄二、お前の無実を何で証明する？　少なくとも、俺を狙ったカッターのなかにお前の指紋がべったりと付着したものがあったんだ。お前の言葉を信じるわけがないだろ」

「……」

理音はノートパソコンで自分を狙ったカッターから犯人全ての特定

をしているようで、ノートパソコンのにはすでにクラスメートの指紋のデータが取り込まれているようで、ディスプレイにはクラスメートの名前に『ＫＩＬＬ』と表示されている。

「お前は、他のバカどもと違って、木下を男扱いしてるから、昨日の仕返しでもしようと思ったんだろうが、相手が悪かったな」

「!?」

理音は雄二を見下したように笑うと雄二の指紋がついていたであろうカッターを取り出し、雄二にむかい投げつけるとカッターは雄二の顔面スレスレを通り過ぎ、壁に突き刺さる。

「まぁ、これにサインをするなら、許してやろう」

雄二は自分の顔の真横に刺さっているカッターを見て、引きつった笑みを浮かべていると、理音は懐から、『翔子の名前が書かれた婚姻届』を取り出す。

「だ、誰が、そんなものにサインをするくわぁ……目が!?　目が!?」

「お前に選ぶ権利があると思ってるのか?」

雄二は理音を怒鳴りつけるように言うが、理音はそんな雄二にためらいもなく目つぶしをする。

「まぁ、お前の命の所有権を持っているのは俺ではないからな。もう少ししたら解放してやるが、今度、ふざけたまねをしてみろ。お前の筆跡を完全コピーをしてこれに記入してやるからな」

「それは偽造だ!?」

「何、バレなければ問題ない。後、その時はここの捺印はお前の血判だ」

理音は邪悪な笑みを浮かべて楽しそうに言い、

「ムッツリーニ、あ奴とはぶつからない方が良いのではないか？」

「……」

秀吉の言葉に康太は大きく頷き、理音の小学生の頃の写真を戻して行く。

# 第３８問

「あれ？　前田、今日はお弁当なんだ？」

「あぁ」

昼休みに入り、理音が弁当箱を取り出すとその様子を美波が見つけて声をかけてくる。

「あんた、料理なんてできるのね」

「作りなれてはいないが、料理くらいはできる」

美波は昨日は昼飯は錠剤で済ませると言った理音が弁当を持ってきた事に単純に驚いたようでそう言うが、理音は表情を変えずに言うと、

「それで、何かようか？　俺はこれから、あの場所から動けない奴らの手の届きそうなギリギリの距離で見せびらかすように飯を食わないといけないんだ」

「そろそろ、解放してあげても良いんじゃないですか？」

相変わらず、足の上に大石を乗せられているクラスメート達の前に移動すると、理音の様子を見た、瑞希は苦笑いを浮かべている。

「流石は姫路さん、リオ、そろそろ解放を……ぐほっ！？」

「アキ、腹が減っただろ。昨日、ある料理を研究して作った栄養剤

なんだが、お前は水と塩しか食ってないらしいから、これをわけてやる。ほかの奴らも飯抜きはかわいそうだからわけてやろう。心配するな。栄養はこの俺が保証しよう。栄養だけはな」

明久は瑞希の助けに理音に解放を要求するが、理音は昨日の瑞希の料理の味を再現した錠剤をクラスメート達の口いっぱいに詰め込んで行く。

「……あれは昨日の姫路の料理の味なんじゃろうな」

「……間違いない」

その様子を秀吉と康太が見て言うなか、

「せっかくの俺の厚意だ。吐き出すなよ。吐き出したら、さらに倍の量を詰め込んでやろう」

「もう勘弁してください！？」

理音は楽しそうに言うと、その言葉に明久達は解放を懇願し、

「前田の背中に黒い羽が見える気がするのじゃ」

「……間違いなく生えてるわ」

「あはは」

理音の様子に秀吉、康太、瑞希、美波の４人は引きつった笑みを浮かべる。

# 第３９問

「酷い目にあったよ」

「まったくだ」

「アキと坂本の場合は自業自得でしょ」

理音は栄養剤を飲み込んだ人間から順に重石を外して行くと耐性ができているのか、明久と雄二だけは何とか生存しているが、他のクラスメート達は口から泡を吹きながらビクビクと痙攣している。

「破壊力は再現できたようだな……面白い」

「リオ、ここまでやるなんて酷いよ！！　元はと言えば、リオが……全然悪くないです。それはもう勘弁してください」

理音が栄養剤の瓶を眺めていると明久は理音を怒鳴りつけるが栄養剤の瓶を眺めて邪悪な笑みを浮かべる理音を見た瞬間、畳に頭をこすりつけて土下座をする。

「まぁ、今はこれくらいにしてやる」

「ホント？」

「もちろん、嘘だ」

「ぐふっ！？」

理音は明久が顔をあげると栄養剤を明久の口の中に1粒放り込む。

「まぁ、冗談はこれくらいにしておくか」

「ちょっと、冗談で片付けないでよ!?　リオのせいでもう少しで渡っちゃいけない河を渡るところだったよ!?」

「何を言ってる？　これは栄養剤だ。味も天国に逝くくらいの破壊力だっただろ。何なら、もう1粒逝って見るか？」

「……いや、栄養剤の評価は破壊力じゃないだろ」

文句を言う明久の事など関係なさそうに理音が言うと、その言葉に雄二がツッコミを入れ、康太はこくこくと頷いている。

「……まぁ、ボクとリオの中だし、これくらいで勘弁してあげるよ」

「明久、お前、完全に負け犬の発言だぞ」

「雄二、何を言ってるんだ。ボクとリオは小学校時代からの親友だよ。そんなわけあるわけないじゃないか」

明久の頭の中では理音の言葉に危険を訴えるシグナルが鳴り響いているようで、ここで話を区切ろうとするが、雄二は理音と明久の様子にため息を吐きながら言うと、明久はその言葉を全力で否定しようとするが、

「その割にアキは前田の事を忘れてたわよね」

「……性別も間違っていた」

美波と康太が明久の足を引っ張る。

「ちょっと、２人とも何を言ってるんだよ！！　リオ、親友のボクと２人の事、どっちを信用するの？」

「俺はアキを信じてたぞ。お前なら俺の事を『完全に忘れている』と」

「……流石はリオ、親友だけある」

明久は理音に信じてほしいと言うと、理音は明久をバカにし、その答えに明久は涙を流して頷いている。

# 第４０問

「その答えもどうなんでしょう？」

「まぁ、あれがあの２人なんだろ。何となくバランスもとれてるし、あれで良いんだろ」

理音と明久の様子に瑞希が苦笑いを浮かべながら言うと雄二は２人はあれで良いと言い切り、

「さてと、ここでだべってると昼飯を食いっぱぐれるから、俺は飯を買いに行ってくる。明久はどうするんだ？」

「ボクは……いつも通りだよ」

雄二は理音の栄養剤以外のものを摂取したいようで立ち上がり、明久に聞くが明久は相変わらず、お金がないようで水飲み場に向かおうとすると、

「アキ、お前、飯くらいはまともに食うようにしないと、そのうち、玲さんが帰ってくる事になるぞ」

「リオ、そんな恐ろしい事を言わないでよ」

理音が立ち上がる明久に向かい、明久の姉の名前を出すと明久が苦笑いを浮かべるなか、理音と明久以外は『玲』と言う名に心当たりがないため、首を傾げている。

「……日本に戻る前に玲さんに偶然会ったんだが、あの人はパワー

アップしていた」

「……えーと、ホント？」

「あぁ、俺が言うのもあれだが……玲さんはおかしい」

理音は明久の姉がおかしいと言い切ると、

「自分もおかしいって自覚はあるんだ」

「あはは」

美波は理音の言葉にため息を吐き、瑞希は苦笑いを浮かべる。

「当たり前だ。天才はいつの時代もネジの５、６０本抜けている」

「……理音、それは多すぎ」

理音は自分もおかしいと言い切ると、康太がツッコミを入れる。

「そうか？　色々な分野の天才と言われる人間にあったが、誰もみなおかしかったぞ。例をあげると……」

「いや、長くなりそうだし、遠慮する」

「雄二、ボクも途中まで一緒に行くよ」

理音が今までにあった『異質な才能』を持った人間の話をしようとすると雄二と明久は危険なものを感じたようで足早に教室を出て行き、

「前田、ウチらもお弁当食べちゃわない？」

「そうじゃの。お主が遊んでいたせいで時間もなくなってきたしのう」

「そうか？　面白い話なんだが」

秀吉と美波が理音の話を強制的に切る。

# 第４１問

「そう言えば、前田、後で機会があれば、姉上に昨日の件を謝って欲しいのじゃが」

「昨日の件？　あの無い胸を揉んだ事か？」

「……お主、それを口に出すのはどうなのじゃ？」

「無いものは無いだろ。俺はあっちにいたから、余計にそう感じる……そうでもないな。やっぱり、個人差だ」

秀吉は理音とともに弁当を広げながら、理音が優子の胸を揉んだ事を少し非難するように言うが、理音は優子の胸が無い事を言った後、日本人があまり胸が無いと言おうとするが、向かいにいる瑞希と美波の１部分を見比べ、考えを改める。

「……前田、今、ウチと瑞希を比較したわよね？」

「比較したが、中には小さい方が好みだと言う人間もいるから気にしない方が良いぞ」

美波は理音の言葉に額に青筋を浮かべるが理音には悪気は全くない。

「あの、前田くん、女の子にとっては重要な問題ですし、それに恥ずかしいのであまり大きな声で言わないでくたさい」

「そうか？　まぁ、実際はあろうがなかろうが美味そうではあるがな」

「……理音、よくわかってる」

瑞希は恥ずかしいようで顔を赤くして言うが、理音は聞き入れるつもりはない。

「……ねぇ、前田。あんた、美味そうとか言うのは良いんだけど、あんたは襲われる事を体験した事があるのに襲われる相手の気持ちは考えないの？」

「そうです。木下さんだって、前田くんに襲われかけて傷ついているかも知れませんよ」

理音の言葉は女の子の瑞希と美波には不評であり、怒っているような口調で理音に向かい言うと、

「いや、俺の時とは状況が……」

「同じです！！」

「同じよ！！」

理音は自分とは状況が違うと言おうとするが、言葉の途中で瑞希と美波に遮られ、

「……わかった。機会があれば謝ろう」

２人の勢いに負けて理音は頷く。

# 第４２問

「ただいま」

「吉井くん、お帰りなさい」

「アキ、遅かったわね」

明久が昼食の水を飲み終えたようで教室に戻ってくると瑞希と美波が笑顔で明久を出迎える。

「あれ？　リオ、何かあったの？」

「……まぁ、色々とな」

「……」

明久は教室の一画で集まっている理音達の元によってくると、先ほど瑞希と美波の２人に怒られた理音は微妙な表情をしているなか、明久の視線は理音の弁当箱に注がれている。

「食いたいのか？」

「それって、理音が作ったんだよね？　危なくない？」

「ほぅ……疑うか？」

「いや、そんな事は……」

「俺の味覚を信じるなら、さっきの栄養剤よりは確実に美味いぞ」

「あ、ありがとう……ホントだ。美味しい」

理音は明久の視線に気づくと明久の前に弁当箱を差し出しながら、間接的に瑞希の料理の腕をバカにすると明久は理音の言葉を信じたのか卵焼きを指でつまみ口に運ぶと予想以上に理音のお弁当は美味しく驚きの声をあげる。

「俺1人の分なら、味など度外視するがそうもいかなくてな」

「あれ？　リオって1人暮らしじゃないの？」

「吉井くん、前田くんは元々、この街に住んでたんですから」

理音は自分以外の分もお弁当を作ったと話すと明久は首を傾げ、瑞希は明久の様子に苦笑いを浮かべる。

「そうだよね。それなら、今は実家に帰ったの？」

「いや、街外れの古びた洋館を買った」

明久の質問に理音は平然と家を買ったと答えると予想外の答えに周りは唖然としている。

「えーと……古びた洋館って、昔、肝試ししたところだよね？　何であんなところに？」

「特に意味はないが、まぁ、強いて言うなら、あの洋館は悪の科学者が住んでそうだろ？」

明久には理音の買った洋館に心当たりがあるようでため息を吐きながら言うと理音は子供がイタズラを考えているような無邪気な笑みを浮かべて言い、

「……アキ、瑞希、本当にこいつって天才なの？」

「えーと？」

理音の答えに美波がため息を吐くと瑞希は苦笑いを浮かべる。

## 第43問

「だけどさ。あの洋館って、あの時でもかなり古かったよね。住めるの？」

「あぁ、改装費もかなり掛かったけどな。欲しかったのは洋館のイメージだからな。内装はこらせてもらった」

「……お主、そこら辺はムダにこりそうじゃからの」

理音が楽しそうに笑うのを見て、昨日の理音の召還獣の召還を見ていた秀吉は少し呆れたように言う。

「まぁ、嫌いじゃないな」

「それじゃあ、その洋館でおばさんと住んでるんだね。ボクもリオが留学してからはおばさんに会ってないし、そのうち遊びに行っても良い？」

「くるのは構わないが、うちにきてもあの人には2度と会えないぞ」

「どういう事？　1人暮らしじゃないなら、おばさん以外に誰かいる？」

「弟の怜生（レオ）と2人だ。覚えてないか？」

「……うん。ごめん。覚えてない」

理音の笑顔を見て、明久は理音の母親に会いたいと思ったようだが、

理音は明久に『自分の母親とは会う事ができない』と言い、弟と2人暮らしをしていると話すが、明久は理音の弟の事を覚えていなかったようで苦笑いを浮かべる。

「俺の事も忘れてたんだ。当然か」

「……リオもしつこいよ。それなら、おばさんは……」

「明久、止めるのじゃ」

「秀吉、どうかした？」

明久の様子に理音が苦笑いを浮かべると明久は口を尖らせながら、理音の母親の事を聞こうとすると今までの話の流れで秀吉は理音の母親が亡くなっている事を察したようで明久を静止しようとするが、明久は何も気づいていない。

「木下の察した通り、あの人は死んでいる。だから、うちにきても会う事はできない」

「……ごめん。リオ」

「……前田くん」

明久は理音から聞かされた言葉が衝撃的だったのか、気まずそうに理音に向かい謝り、他のメンバーは何と言って良いのかわからないような表情をしている。

「別にアキが謝る事じゃないし、お前らが暗くなる事でもない」

「でもさ……」

「実際は俺はあの人に『売り飛ばされた人間』だ。例え、血が繋がっていようが、そんな人間が死んだ事に俺は何も感じない」

明久はそれでも理音を心配したように言うが、理音の母親を語る様子は家族の情愛など排除しきったように冷たい。

# 第４４問

「前田、お主……」

「どうかしたか？」

秀吉は理音の様子に背中に冷たいものを感じながらも理音を呼ぶと、理音は表情を変える事なく返事をする。

「売り飛ばされたってどう言う事だよ。あんな優しかったおばさんがそんな事……」

「あの事件の原因は俺だ。そんな奴の顔など見たくなかったんだろ。だから、俺に１番高い値段をつけたところに俺を売り飛ばした。顔も見たくない人間を遠くに飛ばし、大金が手には入るんだ。誰だってそうする」

「「……」」

明久は理音が感情もなく、自分の過去を淡々と語るのを見てどうしたら良いかわからないような表情をするが、理音はすでに割り切っているようで何も感じていないように見え、明久と瑞希は理音の言う『あの事件』に心当たりがあるようで目を伏せる。

「何度も言わせるな。お前らは何も気にする事はない。あくまで、これは俺個人の問題だ。お前らに気にされる意味がわからん」

「何を言ってるんだ。心配するだろ」

「友達を心配するのは当然の事」

理音がため息を吐きながら言った時、雄二は話の途中で戻ってきていたようで、声をかけてくるとその腕にはしっかりと翔子が抱きついている。

「雄二、良い身分だな。あいつらがくたばっているから、この間にいちゃついてるわけか？」

「……違う。にやついてないで助けろ」

理音は2人の登場に自分の過去になど興味がないようでニヤニヤと笑いながら言うと雄二は理音の言葉を否定する。

「俺としてはどうしてそこまで霧島を嫌がるかがわからん。美人でスタイルも良いし、頭も良い。普通に考えれば、お前に選ぶ権利などわぁ！？　……止めろ。き、霧島、割れるぅぅぅ」

「例え、理音でも雄二の事を悪く言うのは許さない」

理音は雄二と翔子の様子をまじまじと見た後に雄二を小バカにすると雄二の隣にいた翔子が理音にアイアンクローを喰らわせる。

「……何、これ？」

「な、なんでしょうね？」

「……完全に空気が変わったのじゃ」

「まぁ、リオが気にしてないなら、ボクらが暗くなっちゃいけない

よね」

「……そう思う」

理音と翔子の様子に周りは引きつった笑みを浮かべた時、昼休み終わりを告げるチャイムが鳴り響く。

# 第４５問

「……あんたは何がやりたいんだい？」

帰りのＨＲが終わると理音はこの学園の最高権力者『藤堂カヲル』もといくそばばあに呼び出しを喰らい、学園長室に呼び出される。

「何？　システムを解析すると無駄な部分が多かったから、少し修正しただけです。何より、試験召喚戦争を行うためだけに毎回、教師の呼び出しを行っていれば、教師の仕事が増えて負担になります。そのせいで、授業の準備をする時間が割かれては本末転倒です」

「……その点に関しては納得しよう。だけどね。問題はそれ以外だよ」

理音は当然、悪い事をしたとは思っていないため、最高権力者もといくそばばあに向かい無駄を排除したと言い切るが、くそばばあは問題はそこでは無いと言うと、

「……何で、昨日から教師が試験召喚システムに入り込めなくなってるんだ？　調整やらができないじゃないか！！　それにあんた召喚獣で生徒達を吹っ飛ばしたって言うじゃないか！！」

「……あの程度のプロテクトも外せないのかよ」

くそばばあは理音の昨日の昼休みの事を怒鳴りつけるが、理音はあまりの教師陣の能力の低さに舌打ちをする。

「……あんたには反省って言葉はないのかい？」

「今回の件で、俺が反省する事などないな。俺に反省を促す前に教師陣の能力を向上させる事を考えるべきだろ。この学園は成績が良い者が優遇される。これは世界に向けて大々的に発表してる事だよな？　確かにここの教師陣は他の学校よりは良くやってるかも知れないが、あれだけの設備を与えて、生徒達の競争意識を煽る事ができれば、才能のある人間は教師陣を追い抜いて先に行く。それなら、教師陣のいる意味は何だ？」

くそばばあは額に青筋を浮かべながら言うが、理音を動かすほどの説得力もないため、理音は呆れたような表情をして言う。

# 第４６問

「それは……」

「そうだな。１つ、良いことを教えてやる。俺がシステムに侵入している間に１０００人を超える人間が外部から、このシステムに侵入してきた。侵入してきた相手は国内外、様々な国から、年齢も様々だろうな。もちろん、相手のＰＣには俺特性のプレゼントを贈って置いたけどな。最新鋭を語るわりにはプロテクトはスカスカ、管理する教師陣は偶然できたシステムだからシステムの大部分を理解していない。俺としては、そんな人間がこんな面白いシステムを管理している事が信じられん」

理音はバッサリと文月学園の教師陣を切り捨てるように言うと、くそばばあは理音の言葉に驚いているようで黙り込んでしまう。

「システムに関してはある程度、俺の方で解析させて貰う。代わりに俺なりの見解を毎週レポートとして提出してやる。教師陣にもやることがあるだろうから、教師陣には毎日アクセス時に必要なパスを送ってやるから、それを使ってシステムへの介入をするように指示を出してくれ。これが俺の譲渡ラインだ」

「それを承諾しない場合、どうするつもりだい？」

「そうだな。これはあくまで独り言だ。俺は学校の経営ってのにも、若干、興味があってな」

理音はこれからもシステムをいじると言うとくそばばあは理音を睨みつけて言うが、理音は暗に『文月学園を買収する事』も考えてい

ると言う。

「……なるほど、そこで切り札を切ってくるわけかい？」

「切り札？　これはあくまでも独り言。それに切り札って言うのはハッタリだろうと先に見せては何の効力もないしな。なにより、汚い手を使うつもりなら、こんな事は言わない」

くそばばあは理音の言葉に対抗手段を探そうとするが、理音はその先の手段も持ち合わせているようでくすりと笑うと、

「……わかったよ。その条件をのもう」

「ご理解いただきありがとうございます。後、試験召喚戦争なんですが……」

「わかった。あんたが採点に入る事とF組専属の臨時講師の話も承諾しよう」

くそばばあが理音の提案を飲むと理音は礼を言った後、昨日、雄二と話をした2つの事を提案するとくそばばあは納得がいかなさそうだが頷く。

「それでは、俺は帰らせて貰います」

理音はすでに自分の話は終わったとくそばばあの返事も聞かずに学園長室を出て行く。

# 第４７問

（……あのくそばばあのせいで、時間が遅くなったな。早く、怜生の迎えに行かないと）

理音は学園長室を出ると弟の怜生を迎えに行くために急いで学校を出ようとすると、

（ん？　木下姉？　あいつは何をしてるんだ？　……まぁ、今はあいつにかまっている暇はないな）

校門に寄りかかって誰かを待っているのか、優子が空を見上げているが理音は優子に声をかける事はせずに横を通り過ぎようとすりが、

「ちょ、ちょっと！？　どうして無視をしてくのよ？」

「何か用か？　木下姉」

優子が理音を見て慌てて腕をつかむと、理音は意味がわからずに優子に聞き返す。

「何か用か？　って、あの……」

「用がないなら、放せ。俺は急いでいるんだ」

顔を少し赤らめ理音から視線を逸らす優子を見て、理音は表情を変える事なく言うと、

「……今朝の事を聞きたいと思ったのよ」

「今朝？　バツゲームが物足りなかったのか？」

優子は理音が他意もなく、自分に向かい言った言葉に勘違いをしているのか、理音に向かい言うが、理音には意味がわかるはずもないため、首を傾げる。

「それじゃなくて、あんたが最後に言った……あたしが……良い女だって」

「何だ？　言いたい事があるなら、はっきりと言え」

優子は理音に確認するのが恥ずかしいようで小さな声でボソボソと言うが、理音はその態度にイライラしはじめる。

「何よ。あんたがあたしの事を良い女って言ったんでしょ！！」

「言ったが、それがどうかしたか？」

優子は理音の態度に声をあげるが、理音にはその言葉には他意がなかったため、優子が声をあげる理由がまったくわかっていない。

「どうかしたのか？　って、どういうつもりで……あんな声を言ったのよ？」

「……あぁ。そういう事か。現状で言えば他意などない。お前を良い女だと思ったから良い女と言ったまでだ。お前が照れるようなものではないな」

「……」

理音の言葉で優子は自分の勘違いで理音の事を意識していたのが恥ずかしくなったのか肩を震わせていると、

「勘違いするような事を言った事は謝ろう。すまなかった。これで良いな」

「あんた、謝る気無いでしょ！？」

「これでも誠意を持って謝ってるつもりだ」

理音は優子に向かって謝るが、優子が納得するわけがない。

## 第４８問

「どこがよ!?」

「絡むのは良いが、俺はこれから予定があるんだが」

「予定って何よ?」

優子が理音の態度に声を荒げているが、理音は時間がないため歩き出そうとするが、優子は自分が後回しにされている事に腹を立てているようで理音の腕をつかむ。

「弟を迎えに行くんだ。その後に夕飯を作る」

「……」

理音は優子の行動に面倒そうに言うと優子の表情は昨日、今日と見た理音の印象とは異なる言葉に表情が変わる。

「何だ?　おかしいか?」

「……いや、あんた勝手気ままだから、１人っ子か末っ子だと思ってたから」

「そりゃ、悪かったな。それで、俺はいつ解放されるんだ?　それと、あまりひっついていると変な噂が立てられるぞ。成績優秀な模範生徒を演じてるお前としてはまずいんじゃないのか?　俺は自分で言うのもあれだが問題児だぞ」

「!?」

優子が理音の問いかけに微妙な表情をしていると、理音はその様子を見て、いつもとは違ってくすりと笑うと、優子は初めて見る理音の表情に顔を赤くする。

「ん。そうだ。木下姉、昨日は小さいとはいえ、揉んで悪かったな」

「あんたはこんなところで何を言うのよ!?」

「まぁ、昨日の件でいろいろとめんどくさい事に巻き込まれてな。良く考えれば、俺が悪かった部分も……」

「全面的にあんたが悪いのよ!!」

理音は秀吉、瑞希、美波の3人に言われていた事を思い出したようで、軽いノリで優子に謝るが優子は理音の謝り方に納得がいかないため、理音を怒鳴りつける。

「まぁ、済んだ事をいつまでも気にするな」

「気にするわよ。どれだけ恥ずかしかったと思ってるのよ。。謝って済む問題じゃないでしょ」

「別に初めてを捧げた相手と一生を添い遂げる時代じゃないんだ。お前は気にしすぎだ」

「そう言う問題じゃないわよ!!」

「なら、どうすれと言うんだ?　責任を取れとでも言うのか?」

「そ、そこまでは言ってないわよ！？」

首を傾げて、どこかずれた発言をする理音に優子は完全に自分のペースを乱されているようで、顔を真っ赤にして理音を怒鳴りつける。

「なら、何かを考えておけ。悪いが、俺は本当に時間が無いんだ」

「う、うん」

「じゃあな。木下姉」

理音が時間がないと言うと優子は理音の腕から手を放すと、理音は優子を見て、無防備なほどの優しい笑みを浮かべた後、歩きだし、

「……あいつはなんなのよ？」

優子は理音の笑顔を見て、先ほどとは違う意味で顔が赤くなっているのを感じる。

# 第４９問

（……前田理音か？）

優子は理音と別れ、家に帰ると１人で昨日、今日と２日にわたり自分のペースを乱し続ける男の顔を思い浮かべる。

（むかつく男。自分勝手でスケベで人を見下して……でも）

理音との別れぎわに自分１人に向けられた理音の優しげな表情が思い出され、優子は自分の鼓動が速くなるのを感じる。

（なんなのよ。このあたしが、あんなわけのわからないヤツの事を好きになるわけないでしょ。確かに頭と顔は良いみたいだけど、性格は悪いし、セクハラをするし、何より、あたしの胸を揉んだくせいによりにもよって『ない』よ。確かに少しだけ寂しいかも知れないけど、ちゃんとあるわよ。だから、だから、あんな失礼なヤツを好きになるわけないのよ。これは気のせいよ。あれよ。あいつは危険なヤツだから、身の危険を感じてるだけ、用はあれよ。吊り橋効果みたいなものよ）

優子が大きく首を横に振り、自分が理音の事を気にかけている事を気のせいだと思い込もうとした時、

「姉上、１人で何をしておるのじゃ？」

「！？」

秀吉が家に帰ってきたようで優子の様子を見て、彼女の後ろから声をかけると優子は秀吉の声にかなり驚いたようでびくっと身体を震わせる。

「ひ、秀吉、あんた、何のつもりよ?」

「何のつもりと言われても困るのじゃが、姉上が先ほどから1人でため息を吐いたり、首を振っておるのでのう。何か悩み事……あ、姉上、なぜ、ワシの腕をつかむのじゃ? か、関節はそっちには曲がらなっ!?」

優子は秀吉の腕をつかむと人間の構造上絶対に曲がらない方向に腕を曲げようとして秀吉は悲鳴をあげる。

## 第５０問

「ひ、酷い目にあったのじゃ」

「あんたがあたしを驚かせるのが悪いのよ」

「それは悪かったのじゃ。それで、姉上は何を考えておったのじゃ？」

「……別に、あの前田理音って男に何をさせようか考えていただけよ」

秀吉は優子の攻撃から解放され、安堵のため息を吐くと優子は不機嫌そうに秀吉が悪いと言い切り、秀吉はそんな優子の態度に少し納得がいかなさそうな表情をしながらも、文句を言うと何倍にもなって返ってくるため、文句を言わずに優子が先ほどまで何を考えていたかを聞くと優子は不機嫌な表情のまま、秀吉に先ほどの理音とのやり取りを話す。

（ほう……前田もきちんと姉上に謝ったようじゃの。まぁ、ワシらが謝った方が良いと言った事を教えると姉上の機嫌がさらに悪くなりそうじゃから、このままにして置くとするかの）

秀吉はこれ以上優子の機嫌を損なわないように言葉を飲み込み、

「まぁ、謝ったようじゃから、姉上も少し……ん？　これは、どうやら返し忘れたようじゃの。明日、わけを話さんといかんかの？」

演劇の練習をしようと思ったようで鞄から演劇部の台本を取り出す

と理音の子供の時の写真が床に落ち、秀吉は今日の理音の様子を見ていたせいか苦笑いを浮かべて写真を拾おうとすると、

「秀吉、これは何？」

「前田の小さい頃の写真じゃ。どうやら、騒ぎに巻き込まれて返し忘れたようじゃ。姉上、返して貰えんか？」

優子が秀吉より先に写真を拾い上げて秀吉に聞くと秀吉は苦笑いを浮かべたまま優子に向かい手を出すが、

「これはあたしが預かっておくわ」

「姉上？　何をわけのわからん事を言っておるのじゃ？」

「良いから、あたしに預けておきなさい」

「なぜ、写真を懐にしまうのじゃ？　それは前田に返さないとならんのじゃっ！？　ま、待つのじゃ。姉上！？　さっきも言ったがワシの腕はそっちには曲がらない！？」

優子は理音の子供の頃の写真を懐にしまうと優子から写真を返してもらおうとしていた秀吉の腕をつかみ、秀吉は先ほどより大きな悲鳴をあげる。

# 第５１問

（……昨日は酷い目にあったのじゃ）

秀吉は昨日、優子に攻撃された身体が痛いようでいつもより遅いペースで登校していると、

「ん？　木下か。おはよう」

「前田か？　おはようなのじゃ……」

「……」

後ろから理音の声が聞こえ、秀吉は振り返り挨拶をするが、秀吉の視線がある１点を見つめて止まり、秀吉の視線の先には昨日、秀吉達が見た写真の中の理音をもう少し幼くしたような少年が理音の後ろに隠れるように立っている。

「木下、どうかしたか？」

「昨日、見たお主の幼い頃とそっくりな子供がおったのでな。少々、驚いてしまったのじゃ。この子が怜生くんじゃな？」

「あぁ、怜生、こいつは俺のクラスメートの木下秀吉だ。挨拶はできるな？」

「ワシは木下秀吉じゃ、怜生くん、よろしくなのじゃ」

理音が怜生に向かい秀吉を紹介すると、秀吉はしゃがみ怜生に目線

を合わせて挨拶をするが、

「……」

「どうやら、嫌われたようじゃの」

怜生は一言も話さずに秀吉に向かい頭を下げると理音の後ろに隠れてしまい、秀吉は怜生の様子に苦笑いを浮かべる。

「すまない。人見知りが激しいみたいでな」

「まぁ、仕方あるまい。いきなり、知らない人と会ったのじゃ、それより、そろそろ行かんとギリギリの時間になるぞ」

理音は怜生の行動に何か引っかかるものがあるようで秀吉に向かい謝ると秀吉は気にする必要はないと笑い、学園に行こうと言うと、

「悪い。俺はこの先の幼稚園に怜生を預けてから登校するから先に行ってくれ」

「いや、通り道じゃし、ワシも一緒に行こう」

「そうか？　特に付いてきても何も無いぞ。先生達は若くもないしな」

「……そんなものを目的に付いて行くのは明久やムッツリーニくらいじゃ」

理音と秀吉は怜生を幼稚園に預けてから、学園に向かう。

## 第52問

「しかし、怜生くんは一言も話さなかったのう」

「あぁ」

理音と秀吉は教室に着くと秀吉が怜生の印象を話すと理音は秀吉と同意見のようで頷く。

「なになに、木下、前田の弟にあったの？」

「島田、おはようなのじゃ」

「木下も前田もおはよう」

「あぁ、おはよう」

「それで、木下、前田の弟はどうだったの？　こいつと一緒でおかしかった？」

美波が2人の会話を聞いて声をかけてくる。

「……島田、流石にそれは失礼じゃないかのう」

「冗談だって、それでどうだったの？」

「どうやら、人見知りするようでのう。ワシは話す事もできなかったのじゃ」

秀吉が苦笑いを浮かべながら美波に怜生と会った時の事を話すなか、理音は何か考える事があるのか真面目な表情をしている。

「ねぇ、前田、どうかしたの？」

「ん？　いや、何でもない」

「何でもないと言う顔じゃないわよ」

「そうじゃな」

理音の表情に美波と秀吉は気づき、理音に声をかけるが理音は何もないと言う。

「怜生くんの事じゃな？」

「まぁ、そうだが、これは俺の問題だしな」

「バカな事を言ってないで話しなさいよ。これでもウチは妹の世話を昔からしてるから、アドバイスくらいはできるわよ」

秀吉は理音の様子に怜生の事を考えていると思ったようでそう聞くと、理音は気にする必要はないと言うが、美波は理音を手伝ってやろうと思ったのかそう提案する。

「……何が目的だ？」

「……あんた、ウチの善意を疑う気？」

しかし、理音は美波の一言に疑いの視線を向けると美波はお怒りの

ようで拳を握りしめる。

「……今はこれしかないんだが」

「……まぁ、仕方ないわね。これで今の事は流してあげるわ」

理音は懐から『明久5歳』と書かれたディスクを取り出すと美波はそれを懐にしまい込む。

「……お主達は何をしたいのじゃ？」

「そ、それで、その怜生くんとあんたの状況はどんな感じなの？」

秀吉は2人の様子にため息を吐くと美波は慌てたような口調で理音に質問をする。

## 第53問

「どんな感じと言われても困るが、血が繋がっているとは言え、怜生にとっては初めて会ったようなものだからな。お互いに何を話して良いかわからん」

「まぁ、話を聞く限りでは怜生くんが赤ん坊の頃にお主は留学したのじゃからな」

「そう言う事だ。あの人が死んだととうさんの古い友人から連絡が有って日本に帰ってきた時に再会したんだが……」

理音は怜生と再会した時の事を思い浮かべながら言うが、すでにその頃から怜生は今の様子だったと言う。

「実質、元からなのか、お主の母親が亡くなってから、あの状態なのかはわからんと言うわけじゃな？」

「いや、幼稚園の先生達から話を聞くと元から内向的ではあったが、あの人が死んでから落ち込んでいるのか、悪化していると話だったな」

「そりゃそうよね。２人で生活してたお母さんが亡くなって泣きたい時に誰もそばにいてくれる人がいなかったんだろうし……」

理音の言葉に美波は怜生の事を心配しているようで表情を曇らせる。

「前田、お主、できるだけ、怜生くんのそばにいてやった方が良いのではないか？」

「そうね。まだ、心細いだろうから、できるだけそばにいてあげなさいよ」

「あぁ、そのつもりだ。それもあるからこの街に帰ってきたわけだしな」

「……あんたが素直にそう言うと何か気持ち悪いわね」

「島田は言いすぎだと思うのじゃが、確かに変な感じがするのじゃ」

秀吉と美波は怜生の事を不憫に思ったようで、兄の理音になるべくそばにいてやれと言い、理音はその言葉に素直に頷くがその様子を見て秀吉と美波は微妙な表情をする。

「……悪かったな。これでも1人の心細さも大切な人がいなくなる時の寂しさも知ってるつもりだ」

「……なら良いのじゃ」

「……」

理音の言葉に秀吉と美波は聞いてはいけないような事に首を突っ込んでしまったと思ったようで表情を曇らせると、

「……そんな顔をされても困るんだ。お前らなりに怜生の事を心配してくれたんだろ。なら、そんな表情をしないでくれ。それに島田はいろいろと教えてくれるんだろ？」

「うん。ウチに手伝える事があったら言って」

「ワシもできる事は手伝うのじゃ」

理音は2人の様子に彼にしては珍しく、少し困ったように笑うとその表情に秀吉と美波は笑顔を見せる。

# 第５４問

（……一昨日の木下姉との試験召喚戦争から考察するとここをこうする事で、待てよ。その場合はここが不味いか？　さすがにあまりいじりすぎると状況が変わりすぎる可能性もあるし……）

理音はノートパソコンのキーボードを叩いていると、

「前田くん、美波ちゃんにばかりズルいです！！」

「ちょっと、瑞希、今の前田に言ったって聞こえないって」

瑞希が理音に何か言いたい事があるようで声をかけ、美波は瑞希の様子に苦笑いを浮かべている。

「……何がズルいんだ？　俺はお前に因縁をつけられるような事はしてないぞ」

「あれ！？　反応した」

理音は２人の様子に気づき反応すると美波は驚いたような表情をする。

「あぁ、システムをいじる事で考えられるエラーが多くてな。どこからいじって行くかつまっていたところだ」

「そ、そうなんだ」

美波の言葉に理音は楽しそうに邪悪な笑みを浮かべると美波は少し

引き気味に苦笑いを浮かべる。

「それで、瑞希は何のようだ？」

「前田くん、どうして、美波ちゃんにだけ、吉井くんの……」

「姫路さん、ボクがどうかしたの？」

「！？　な、何でもありません」

理音は瑞希が自分を呼んだ理由がわからないため、瑞希に聞くと彼女はどうやら、理音が今朝、美波に渡した物を自分も欲しいようで理音に言った時、自分の名前を呼ばれた明久が話に入ってきて瑞希は声を小さくする。

「あぁ、あれか。欲し……」

「はい。欲しいです！！」

「何々？　理音、何かくれるの？　ボクにもちょうだ……ぐふっ！？」

理音は瑞希の反応に思い当たったようで首を掻きながら、瑞希にも欲しいかと聞こうとすると瑞希は理音の言葉の途中で返事をする。

そんな2人の様子に明久は何かを貰えると思い自分も欲しいと言った時、理音の栄養剤が明久の口の中に投げ込まれ、明久は意識を持って行かれそうになる。

# 第５５問

「別にやるのはかまわないが、何か俺だけ搾取されてる気がするのは気のせいか？」

「えーと、えへ♪」

「き、気のせいよ！？」

理音は昨日、瑞希と美波の２人に明久の昔の写真を譲っているせいかそう言うと、瑞希は笑顔で誤魔化そうとし、美波は少し慌てながら言う。

「リ、リオ、酷いよ。ボクが何をしたって言うんだよ！？」

「お前が何か欲しいと言うから、お前に必要な栄養をやったまでだ」

「あんなのいらないよ。栄養をくれるって言うなら、もっとマシなものをちょうだいよ。学食でご飯を奢ってくれるとか購買でパンを奢ってくれるとか！！」

瑞希と美波の様子に理音は納得がいかなさそうな表情をしていると、明久は何とか意識をつなぎ止めたようで、理音に文句を言うが、理音は悪ぶる事なく平然と言い切り、明久は別のものをよこせと言うと、

「それでも良いが、アキ、知っているか？　タダより高いものはないらしいぞ」

「……やっぱりいらない」

「何、遠慮するな」

理音は明久の言葉に何かを考えついたようで邪悪な笑みを浮かべ始めると、明久はその様子に身の危険を察知したようで引きつった笑みを浮かべると理音は明久の肩をがっちりとつかみ。

「俺の家の片付けがまだ終わってないんだ。明日の土曜日に手伝わせてやる。その代わりに明日の昼と晩は飯を食わせてやる」

「……2食付き？」

理音は飯で明久を釣ろうとすると、明久は理音の言葉に葛藤しはじめるが、

「前田、明日はウチらFクラスは全員補習よ」

「……マジか？」

「はい。本当です」

理音はFクラス全員で受ける補習があると知らされる。

「なら、日曜だな」

「手伝いは決まりなんだ」

「飯を食いたくないのか？」

「食べたいけど……ちなみにさ。家に罠とかないよね？」

「あぁ、まだ、設置前だ。望みなら今日と明日で全力で設置するが……」

「しなくて良いから！！」

理音は日曜日に明久に手伝いをさせようとすると明久はしぶしぶ承諾すりが、身の危険を少しでも減らそうと理音に罠の可能性を聞くと理音は罠を設置しようとするが、明久はそれを遠慮すると2人の様子に瑞希と美波は引きつった笑みを浮かべる。

# 第５６問

（……冷静になるとどうしてこんな写真を秀吉からあたしは取り上げたのよ？　これじゃあ、まるであたしがあいつの事を好きみたい……違う。ありえないわ。このあたしがあんなわけのわからない奴の事）

優子は昨日、秀吉から取り上げた理音の昔の写真を自分の席で眺めながら、昨日の朝から何度も頭の中で考えている事を否定しようとその写真を破こうとするが、

（……この笑顔には罪はないわよね？　そうよ。そうに決まってるわ！！）

写真の中の幼い理音の笑顔を気に入っているのかすんでのところで思いとどまり、はしっこが少し歪んだ写真に視線を移すと写真の中の幼い理音は優子が見た事のない笑顔で笑っている。

（……この子がなんで、あんなくそ生意気に成長する……）

優子は今の理音の写真のなかの理音を比べるが、昨日の帰りに見た理音の笑顔を思い出し、顔を赤らめた時、

「優子、ＨＲ終わったけど帰らないの？」

「ひゃっ！？」

優子の後ろから同じクラスの『工藤　愛子』が声をかけてきて、優子は驚きのあまり声を裏返す。

「あれ？　驚かせちゃった？」

「そんな事はないですよ。それで、愛子、何かようですか？」

愛子は優子の様子に苦笑いを浮かべると優子は直ぐに学園内で演じている優等生の仮面を被る。

「いや、優子が写真を眺めて百面相をしてるから、何かあったのかな？　って」

「何もないですよ。少し考え事をしていたから」

優子が苦笑いを浮かべると、

「それで、今日1日中、おとといにFクラスに転校してきた前田くんの幼い頃の写真を見て、何を考えてたのかな？」

「！？」

愛子は優子が見ていた写真の詳細を知っていたようでニヤリと笑い、優子はその言葉に驚く。

# 第57問

「あ、愛子、な、何を言ってるんですか！？」

「あれ？　違った？」

「ど、どうして、あたしがあいつの事を気にするわけが」

「やっぱり、気にしてるんだ♪」

優子は愛子の言葉に慌てて何かを否定しようとするが、愛子は優子の反応にニヤニヤと笑う。

「そ、そんなわけなっ！！」

「騒がしいぞ。木下姉」

「噂をすれば何とやらってヤツだね♪」

優子は愛子が考えている事を全力で否定しようとした時、理音がＡクラスに当たり前のように入ってくる。

「噂？」

「あはは、気にしない♪　前田くんとは初めてだから、ボクは工藤愛子。よろしくね♪」

「前田理音だ。工藤愛子か……あぁ、康太と張り合っているってヤツだな」

「そうそう」

理音は愛子の噂と言う言葉に首を傾げるが、愛子は笑顔で気にする事ではないと言い、自分の名前を名乗ると理音は愛子の事を康太から聞いていたようでそう言うと、愛子はうんうんと頷き、

「それで、前田くんはここに何しにきたの？」

「あぁ、昨日、木下姉に考えておけと言った事が決まったかと思って聞きにきたんだ」

理音にA組にきた理由を聞くと理音は昨日、優子に言った事を聞きにきたと言う。

「昨日？」

「あぁ、木下姉のむ……」

「ちょっと、前田くん！？」

愛子は昨日の理音と優子のやりとりを知らないため、首を傾げると理音は表情を変える事なく『優子の胸を揉んだ事への謝罪』と言う事実だけを伝えようとするため、優子は慌てて理音を制止し、

「ちょっと、前田くん、こっちにきて！！」

「何だ？　説明を求められたんだ。事の詳細を教えるのは当然の事だ」

「良いから、こっちにきなさい！！」

「何だ？　別に聞かれて困るよ……」

「あたしが困るのよ！！」

優子は理音を引きずって教室を出て行こうとするが、理音は意味がわからずに首を傾げるが優子は理音の言葉など聞き入れるわけもなく、理音を引きずって教室を出て行き、

「何か、面白い事になりそうだね♪」

「……愛子、からかうのは良くない」

愛子は2人の背中を見て、楽しそうに笑うと、今までのやりとりを翔子は見ていたようで愛子に声をかける。

## 第57問（後書き）

どうも、作者のまあです。

ちょっと思いついたネタを

バカとテストと召喚獣二次小説
『黒き悪意は報われず？』

（……あれ、ここはどこ？）

少年は目を覚ますと目の前には一面の闇が広がって行く。

（えーと、さっきまで、ボクは何をしてたんだっけ？）

少年は今の状況を思い出すために、眠る前に何をしていたか思い出そうとするが、

（……全然、思い出せない。と言うか、ボクは誰？）

先ほどまでの記憶だけではなく、自分の名前すら思い出せなく、

（……この闇のなかを進むのは怖いけど、ここにいても仕方ないし）

闇のなかを手探りで歩き出そうとするが、

（……手がない？　と言うか体がない？）

自分に肉体（いれもの）がない事に気づく。

（……ひょっとして、僕、死んでる？）

自分の状況に慌てるをすでに通りこして頭は冷静に動き出している。

（……えーと、一先ず、もう1度、考えをまとめてみよう）

少年が改めてそう思った時、

（……まぶしい）

一面の闇が強烈な光で照らされて行き、

「すまない。少年、遅れてしまったみたいだな」

光の先からさえない老人が少年に向かい声をかけてくる。

なんか今までと違う感じで原作沿いで書いてみようかな？とふと思いました。

書くかは気分次第です。感想があれば頑張るかもしれません。

# 第５８問

屋上

「……どうして、屋上だ？　愛の告白でもするつもりか？」

「そんなわけないでしょ！？」

理音は優子に引っ張られて屋上までくると、優子が自分を屋上まで連れてきた意味がわからずに聞くと、優子は大声をあげて否定する。

「それなら、何だ？　別に聞かれて困るような事は……」

「あたしが困るって言ってるでしょ！！」

「ん？　何が困るんだ？」

「そ、それはその、あんたと付き合っているとかそう言う噂がでると……」

理音はそんな優子の様子に首を傾げているなか、優子は理音との間を噂される事を気にしているようで小さな声で言うが、

「言いたい事があるなら、はっきりと言え」

「そ、そんな事できるわけがないでしょ！？」

理音は優子に向かいはっきりとしろと言い、優子は顔を赤く染めながらそれはできないと言う。

「なぜだ？」

「お、女の子にはいろいろとあるのよ」

「……生理か？」

「違うわよ！？　良いから納得しなさい！！」

「そうか？　なら、それは良い。それで昨日の件は決まったか？」

理音は意味がわからないため、首を傾げているが優子の言葉に聞いても無駄だと判断したようで、自分が優子を訪ねた本題を聞く。

「昨日の今日で決まってないわよ……いろいろと考える事もあったし……」

「まだ決まってないのか？」

優子は先ほどまで、理音の事しか考えていなかった事を愛子に指摘されたため、顔を赤くしながらまだ決まってないと言うと、理音は呆れたように言う。

「そんな事を言われたって、すぐに決められるわけないでしょ……だって、それって、デートでしょ。あたしにとっては初デートだし、やっぱり、いろいろと考えたいじゃない？」

「何を考えたいんだ？」

「それはいつ手をつなぐとか、キスはまだ早……何でもないわ」

優子は頭の中でいろいろと妄想しはじめたようで、理音がその様子を見て彼女に声をかけると、優子は理音の声に我に返り、何もなかったと言う。

## 第５８問（後書き）

観覧いつもありがとうございます。

作者のまあです。

この作品の理音と優子のからみは皆さんにどう映っているでしょうか？

優子の勘違いが多いのですが、自然なんですかね？

後は理音の存在は？

原作から外れた作品を書いているので理音が溶け込めているか不安になります。

大丈夫だと思うなら、一言でも感想をいただけると幸いです。

それでは。

## 第５９問

「それで、どうするんだ？」

「えーと、それなら、この後、駅前の喫茶店でクレープ奢ってよ」

理音は優子の様子を気にする事なく言うと、彼女は少し照れくさそうに言う。

「クレープか？　別にかまわないが１つ条件がある」

「条件？　あんた、あたしへのお詫びなのに条件を付ける気？　まさか、またスケベな事じゃないでしょうね？」

理音は優子の言葉を承諾しながらも優子に向かい条件があると言うと、彼女は機嫌が悪くなってきたようで理音を睨みつける。

「睨むな。だいたい、今回は一応とは言え、お前へのわびだからな。お前の肢体をもてあそぶのはまたの機会だ」

「もてあそばせるわけがないでしょ！？」

「何、お前が拒否をしようが、俺はやると言った事はやる……待てよ。今からでもあれを合意とすれば奢る必要はないわけだな」

理音は優子で遊ぶ事を決めたようで邪悪な笑みを浮かべながら、彼女との距離を縮めて行くと、

「止めてよ！？　こんなところで初めてなんていやよ！！」

「ん？　俺が相手なのは問題がないのか？」

優子は身の危険を感じて理音を怒鳴りつけるが、理音は彼女をからかうように言うと、優子の顔は真っ赤に染まって行く。

「まぁ、冗談を言ってる場合でもないからな。俺はこの後、弟を迎えに行かないといけないんだ。だから、その後で弟とも付いてくるが問題ないか？」

「お、弟？」

「あぁ、預かって貰える時間にも限りがあるからな」

理音は怜生を連れて行ってもかまわないかと優子に確認すると彼女は予想外の言葉に首を傾げる。

「別にかまわないわよ。デ、デートってわけじゃないし……」

「そうか。なら、行くぞ」

優子は自分でこれはデートではないと言いながらも、少し落ち込んでいるようで声は小さくなって行くが、理音は気にする事なく歩き出し、

「木下姉、早くしろ」

「わかってるわよ！！」

落ち込んでいる優子に優しい声をかける事なく早くしろと言うと、

優子は理音を怒鳴りつけながらも理音の隣にしっかりと並び2人で学園を出て行く。

この後、怜生を加えて3人でクレープを食べ、何もなく2人は別れる。

# 第６０問

「あれ？　リオもこの時間なの？」

「……アキか、あぁ、寝坊してこの時間になったんだ」

理音が昇降口で上履きに履き替えていると、明久が理音の後ろから声をかけてくる。

「へぇ、リオでもそんな事があるんだ」

「……仕方ないだろ。昨日、補習がある事を知ったんだからな。そのせいで昨日の晩のうちにやらないといけない事ができたんだ」

「……それって、明日の罠じゃないよね？」

「……そんな事より、やらないといけない事だ」

明久は上履きに履き替えながら、苦笑いを浮かべて言うと、理音は何か急ぎの用事ができたと答え、明久はその言葉に罠を疑うが理音は否定する。

「リオがそこまでしてやらないといけない事って、何？　また、怪しい実験？」

「怜生を1人で留守番させとくわけにもいかないから、そのためにちょっとな」

「そうか。今日って、幼稚園休みだよね」

「あぁ、毎週土曜は補習みたいだからな。怜生を預かってくれるところを探さないといけないうえに、寝坊したとは言え、昼飯も用意しないといけなかったらから、この時間になったんだ」

「朝からお疲れさま」

理音と明久は教室に向かいながら、理音がこの時間になった理由を話していると、明久は理音が理音なりにお兄ちゃんをしている事が意外なようで苦笑いを浮かべる。

「それで、アキ、お前はなんでこの時間だ？」

「ボクは昨日、遅くまでゲームしてて遅くなっちゃった」

「……お前らしいな」

理音は明久に遅くなった理由を聞き、明久の言葉にため息を吐く。

# 第６０問（後書き）

番外編を投稿しました。

理音以外にも自サイトの方で書いているオリキャラが登場します。

オリキャラが多いため、オリジナルの話が多くなると思いますが、読んでいただけると幸いです。

# 第６１問

「おはよう♪」

「うーす」

「……明久、理音」

理音と明久は２人で教室のドアを開けると康太が２人の姿を見て近寄ってくると、

「おはよう。ムッツリーニ」

「康太、おは……」

「……裏切り者には死の制裁を」

「えっ！？　ちょっと、ムッツリーニ、何をしてるの！？」

康太は懐からすっとスタンガンを取り出し、理音に押し当てると理音は不意をつかれたようでスタンガンの直撃を喰らい、気を失い。明久は何があったのかわからないような表情をしながら、慌てて理音を受け止める。

「裏切り者には死の制裁を！！」

「ちょっと、みんな、何してるの！？」

怪しい覆面を被ったクラスメート達が明久の腕から理音を取り上げ、

理音を教室の真ん中に立てた十字架に貼り付けて行くなか、明久は意味がわからないため、声を上げている。

「諸君、ここはどこだ？」

「「「最後の審判を下す法廷だ！」」」

「異端者には？」

「「「死の鉄槌を！」」」

「男は？」

「「「愛を捨て、哀に生きるもの！」」」

「よろしい。これよりー１２－Ｆ異端審問会を開催する！」

理音が目を覚ますとそこはサバトの会場であり、

「……これはなんだ？」

「ー１罪状を読み上げたまえ」

「はっ。須川会長。えー、被告、前田理音（以下この者を甲とする）は我が文月学園第２学年Ｆクラスの生徒であり、このものは我らが教理に反した甲の罪状は強制猥褻及び背信行為である。昨日未明、甲がＡクラスの女子生徒である木下優子（以下この者をお姉ちゃんとする）に強制的に猥褻行為を働き、手込めにした後、甲によく似た子供を引き連れてー１」

「……未明はまだ夜が明けきらないころだ。時間が間違っている」

理音は意味がわからずに目の前の怪しげな集団に説明を求めるが、クラスメート達は理音の言葉に耳も傾けずに先に進もうとし、話を聞くと昨日の優子との事でこの状況になっていると思われ、理音は読み上げられる罪状にツッコミを入れる。

# 第６２問

「被告は黙っていろ！！　御託は良い。結論だけを述べよ」

「……こ、これはなんだ！？」

「前田、お前、どうやって脱出を！？」

「悪いな。縛る趣味はあるが、縛られる趣味はないんだ」

怪しげなリーダーが理音を怒鳴りつけた時、理音はそこから当たり前のように脱出をすると邪悪な笑みを浮かべながら怪しい集団に向かい懐から怪しげな謎の球体を取り出し、クラスメート達に向かい投げつけるとその球体から網が飛び出し、クラスメート達を一網打尽にする。

「で？　須川だったか。これは何のマネだ？」

「貴様が我がＦクラスの教理に反した疑いがあるからだ！！」

理音は網の中のこの騒ぎの中心らしき、須川と言う男子生徒の腹部を強く踏みつけながら聞くと、須川は理音に向かい言うが、

「教理？　なんだ？　また、昨日と同じようなものか？　俺は昨日は揉んでないぞ」

「貴様は昨日、あの木下優子とデートをしたと言うではないか！！」

理音は意味がわからずに首を傾げているなか、須川が理音を怒鳴り

つけると網の中からの集団からは理音に向けて怨念のこもった言葉がむけられている。

「あれか？　あれは一昨日のわびだ」

「言い逃れする気か！！」

「そんなもんじゃないが……」

理音はくだらない事を言わせるなと言いたげに言うが、須川がその言葉を聞き入れる気はなく、

「なら、あれか？　モテないヤツの嫉妬か？」

「「「悪いか！！　こんちくしょう！！」」」

理音はクラスメート達を見下したように言うと、その一言は確信をついていたため、網の中から魂の叫びが聞こえ、

「……ストレートだな」

「しかも豪速球じゃの」

「全盛期の江夏のようだろ？」

「いや、ボクらの世代じゃ、わかる人間少ないから」

その様子を遠目から眺めていた雄二と秀吉が引きつった笑みを浮かべながら言うと理音は笑顔で言い、明久は理音の一言にツッコミを入れる。

## 第６３問（前書き）

おかげさまで、お気に入り登録が１００件を超えました。

ありがとうございます。

これからも『サドと邪悪な召喚獣』をよろしくお願いします。

## 第６３問

「あれはデートなんてもんじゃない。俺はあれをデートに分類していたら、確実に木下姉を食っていたからな」

「裏切り者には死の制裁を！！」

「ほぅ……アキ、お前もあっちに回るか？」

「い、いや。そんなわけないよ。ボクとリオは親友じゃないか」

理音はため息を吐きながら、網の中の集団に向かい言うと、その言葉に明久が反応して理音を殴りかかろうとするが、理音は邪悪な笑みを浮かべると明久はその笑みに背中に冷たいものを感じて自分の保身を優先する。

「弱いな」

「そうじゃの。それより、前田、お主はもう少し言葉を選べんのか？　いくらなんでも今の言葉はマズいと思うのじゃ」

明久の様子に雄二はため息を吐いていると、秀吉は理音の言葉に少し腹を立てているようで理音に鋭い視線を向ける。

「木下、睨むな。さっきも言っただろ。お前の姉には手を出していない。からかいがいもあるし、容姿は悪くないが、今のところはその気はない」

「それはそれで姉上は傷つくと思うのじゃがのぅ……」

秀吉はなんとなく優子が理音の事を気にしているのに気づいているようでため息を吐くと、

「だいたい、あいつは俺を嫌っているだろ。力づくで俺のものにする事もできなくないが、さすがに友人の身内には手はださん」

「……どうやら、お主も明久と同じようじゃの」

「あ？　俺がこのアキ（バカ）と同じ部分があるって言うんだ？」

理音は優子が自分に向け始めている好意に気づいていないようで首を傾げると秀吉は呆れたようなため息を吐き、理音はその言葉に眉間にシワをよせ機嫌が悪そうに言う。

「ちょっと、リオ、今、ボクの名前をバカって読んだよね？」

「明久、当たり前の事に何を腹立てているんだ？」

「雄二、どう言う事だよ！！」

「そのままだ」

理音が秀吉の言葉に首を傾げているなか、明久と雄二が意味のない争いを始めだすなか、

「お前ら、席に着け。今日も全員いるな。前田、よく脱走者達を捕まえた」

「いえ、これは個人的に制裁を与えるためです」

「そうか。死なない程度にやれ」

「「「それが教師の言葉か！！」」」

西村教諭はクラスの中の様子を気にする事なく教室を出て行く。

## 第６３問（後書き）

座談会のようなもの？

どうも、まあです。

「……何のようだ？」

1度くらい、座談会みたいなものをやっとこうかな？と。

「また、無計画なわけだな」

『計画』と言う言葉があるなら、理音はいませんよ。元々、自サイトでなんとなく書いたのがこんな形になってるんですから。

「それもそうだ」

『サド』は原作沿いってわけじゃないんですが、受け入れられてるんですかね？

「知らん。俺は俺の知的好奇心さえ満たせれば良い」

まぁ、作者は気になるんですけど、読んでは貰えているようですが、感想がないとこのまま突っ走って良いのか不安になります。他の方と同じように原作沿いの方が好まれるねかな？と

「だけど、原作沿いを書く気はないんだろ？」

そのつもりなら、理音以外で書きます。理音は原作から外れる主人

公ですから、召喚システムでは無敵を誇りますが、戦わないと言う半端な主人公ですからね。

「なんのためにいるかわからんな」

そうですね。（苦笑）

気が向いた方は感想を書いてくれると嬉しいです。やる気をだせます。

後は略称もあれば

「サド以外ないだろ」

……そうですね。

## 第６４問

「よし、午前中の補習はここまでだ。午後は1時からだ。遅れるなよ」

午前中の補習が終わり、西村教諭が教室を出て行く。

「さてと」

「あれ？　リオ、どこか行くの？」

理音が立ち上がるのを見て、明久は首を傾げる。

「朝、寝坊したと言っただろ。それで慌てていたから弁当と栄養剤を忘れてきたんだ。だから、購買でパンでも買ってくる」

「そうなんだ。それなら、ボクも途中まで一緒に行くよ」

「……また、水だけか？」

「……今月は期待の新作が目白押しで余裕がないんだよ」

「……そうか。なら、途中まで行くか？」

「そうだね」

理音は明久の相変わらずの食生活にため息を吐きながら2人で教室を出て行く。

「明久も理音もいないとなると俺達だけか？」

「そのようじゃのう。ムッツリーニはどこか行ってしまったようじゃしのう」

「あれ？　坂本、あんたは今日は学食じゃないの？」

「あぁ、明久じゃないが、今月は少し厳しくてな。昨日の夕飯をつめてきた」

「それじゃあ、お昼、食べちゃいましょうか？」

雄二、秀吉、瑞希、美波の４人がお弁当を食べ始めてしばらくした時、

「み、みんな、大変だよ！！　リ、リオが、リオが！？」

「アキ、そんなに慌ててどうしたのよ？」

明久が腕に小さな子供を抱きかかえて大慌てで教室に戻ってくる。

「ん？　その子は」

「リオが自分の怪しい薬でちっちゃくなっちゃった！？」

明久の抱きかかえている子供は理音の弟の怜生であり、秀吉は怜生に挨拶しようとするが、明久は何かを勘違いしているようで怜生を４人の目の前に出し、バカげた事を叫ぶ。

# 第６５問

「なに！？」

「ホ、ホントです！？　子供の頃の前田くんがいます！？」

「ちょっと、前田！？　解毒剤はあるのよね？」

明久の言葉と目の前の怜生を見て、雄二、瑞希、美波が驚きの声をあげるなか、

「……お主らは何を言っておるのじゃ？　どう考えても、弟の怜生くんじゃろ」

「……」

秀吉がため息を吐きながら言うと、怜生は無言で頷いた後、うつむいてしまう。

「……わかってたよ。冗談に決まってるじゃないか」

「そうですよね」

明久は秀吉の言葉に恥ずかしくなったようで、目を逸らして冗談で終わらせようとすると、雄二、瑞希、美波の３人も明久と同様に秀吉から目を逸らす。

「なら、お主らはどうして、目を逸らすのじゃ？」

「前田なら、ホントにありえそうだから」

「あぁ、あいつはそんな怪しげな薬をいくつも持っていそうだ」

秀吉は４人の様子にため息を吐くと美波と雄二は理音ならありえると言い、怜生以外は同じ意見を持ったようで苦笑いを浮かべる。

「それで、怜生くんはどうして、ここまできたのじゃ？」

「……」

秀吉が怜生が文月学園にきた理由を聞くと、怜生はうつむいたまま、背負っていた鞄から、お弁当箱を取り出す。

「リオが忘れたお弁当を持ってきてくれたんだね」

「……」

明久が怜生に向かい言うと怜生は無言で頷く。

「怜生くんのお兄ちゃんは少し席を外していますから、怜生くん、ここでわたし達と一緒にお兄ちゃんを待ちましょうか」

「……」

瑞希はにっこりと笑うと怜生に向かい優しく微笑みかけて言うが、怜生は首を横に振ると秀吉にお弁当箱を預けて逃げ出すように教室を出て行こうとするが、

「まぁ、待て。がきんちょ。せっかくだから、理音に会っていけ」

雄二が怜生を捕まえる。

## 第６５問裏（前書き）

第６５問の理音側です。

大樹のデータは番外編『秘めた想いと倒錯娘』のオリキャラデータに記載しています。

## 第６５問裏

「ん？　前田、土曜日に学園にきて何かあったのか？」

「清瀬か？　Ｆクラスは土曜日は補習らしくてな」

理音が明久と別れた後、購買に向かう途中で大樹が声をかけてくる。

「そりゃ、ご苦労な事で」

「まったくだ」

大樹は理音の答えに苦笑いを浮かべると理音はため息を吐き、

「そっちこそ。土曜日に何をしてるんだ？」

「俺か？　俺は飯を食いにな」

「わざわざ、学園にか？」

補習のない大樹が学園にいる意味がわからないため、首を傾げる。

「あぁ、今日は両親が出かけてな。１人分は面倒だしな」

「飯なら、昨日、働いていた喫茶店で良いだろ」

苦笑いを浮かべている大樹に向かい理音は怜生と優子と行った喫茶店で大樹が働いていた事を思い出すが、

「いや、休日にあの変態父娘にかかわり合いたくない」

「あぁ、確かにな」

大樹がため息を吐くと理音は昨日、喫茶店で何かおかしなものを見たようで納得したように頷く。

「それでも、お前は清水に惚れてるんじゃないのか？」

「まぁな。基本的におじさんと島田が関わってこなければ、普通だしな……なぁ、前田。ふと思ったんだけど、お前が学園にいるって事は怜生くんは1人で留守番か？」

「あぁ、急だったしな。預かってくれる場所を探さないといけないな」

「そうだな。うちは土曜はやってないし、怜生くんも1人じゃ不安だろうから、預かってくれる場所をうちの親に聞いて見るな」

「あぁ、すまない」

理音と大樹は雑談をしながら、購買の前まで着くと、

「じゃあ、俺は学食だから」

「あぁ」

理音は大樹と別れて土曜日のため、空いている購買でパンを見繕っていると、

「前田」

「……木下姉か？　どうかしたか？」

本来、学園にいないはずの優子が理音に声をかけてくる。

「前田、あんた、なんで購買にいるのよ。怜生くんはどうしたのよ？」

「パンを買いにきたに決まってるだろ。怜生は家だ」

「違うわよ。さっき、怜生くんに会ったの。吉井くんが連れて行っちゃったけど」

「お前はバカか？　怜生が学園にくるわけないだろ」

優子は学園で怜生を見かけたと言うが理音が信じるわけがない。

# 第６６問

「雄二、何してるんだよ。怜生くんが怖がってるだろ」

「ん？　そうか？」

怜生と雄二の様子を見て、明久が声をあげると雄二はその言葉に怜生の顔を覗き込むと怜生は泣き出しそうな表情をしている。

「悪かった。泣くなよ」

「雄二みたいな凶暴な人間ってのは怜生くんみたいな子供にはわかるんだよ」

「明久、俺が凶暴かどうか試してみるか？」

「じょ、冗談に決まってるだろ！？」

雄二は怜生に向かい自分は怖くないと言いたげに手を放して苦笑いを浮かべると明久は雄二をバカにするような声を言い、その一言に雄二の視線は鋭くなり、明久の胸倉をつかむ。

「……」

「怜生くんは悪くないのじゃ、今のは明久が悪い声をしたからじゃ」

「そうよ。泣かないの。男の子でしょ」

「怖くないですよ」

明久と雄二の様子を見て、怜生は怯えているのか、目に涙をにじませると秀吉、瑞希、美波の3人は怜生に優しく声をかける。

「前田、速くしなさいよ」

「木下姉、何を言っているんだ？　怜生が学園にくるわけないだろ。お前の見間違いだ」

「間違ってないわよ。間違いなく怜生くんだったんだから」

廊下から理音と優子の声が聞こえ、

「……怜生？」

「ほら、いたでしょ」

2人が教室のドアを開けると泣き出しそうな怜生と今にも明久に殴りかかりそうな雄二の姿が目に入り、

「アキ、何をした？」

「リオ、ちょっと待ってよ！？　ボクは何もしてないよ！？」

「前田くん、落ち着いてください。吉井くんは何もしてませんから」

理音は感情を理性で抑えつけているような声で明久に聞くと、明久は今の状況は自分の生命活動を表す針がレッドゾーンを振り切っている事を感じ取ったようで慌てて言い、瑞希は今まで見た事のなり理音の様子に苦笑いを浮かべながら明久をフォローしようとする。

## 第６７問（前書き）

みなさんのおかげでＰＶが１５０，０００アクセスを超えました。

ありがとうございます。

これからも楽しんでいただけるものを書いていきたいと思いますので、引き続きよろしくお願いします。

後は感想と評価をしていただけるとやる気につながりますのでよろしくお願いします。

# 第67問

「怜生くんがお主の忘れた弁当を持ってきてくれたのじゃ。怜生くんら帰ると言ったのじゃが、雄二がせっかくだから、お主に会って行けと言ったのじゃが……」

「坂本の顔が怖かったみたいよ」

「……俺へのフォローはないわけだな」

秀吉と美波が明久をフォローするように言うと、雄二はため息を吐き、

「そうか……怜生、すまないな」

「……うん」

理音は怜生の頭の上に優しく手を置くと怜生は恥ずかしそうに頷く。

「……帰ります」

「怜生くん、ちょっと待って」

怜生は目的を達したためか、そう言うと教室を出て行こうとするが、美波は何かに気づいたようで怜生の手をつかむ。

「美波、どうかしたの？」

「ウチの思い過ごしじゃないと思うんだけどね。怜生くんは前田と

一緒にいたいんでしょ。違う？」

「……」

明久は美波の様子を見て聞くと、美波は怜生は理音と一緒にいたいんじゃないかと言うと怜生は大きく首を横に振るが、

「ねぇ。怜生くんもお昼一緒で言いよね？」

「はい。私もそれが良いと思います」

美波は怜生の様子を見て、自分の考えが確信に変わったようで、怜生も一緒にお昼を食べようと言い、瑞希は頷く。

「……でも」

「良いから、座れ。がきんちょ」

雄二も美波と同じように何かを感じ取っていたようで、帰ろうとする怜生を捕まえると怜生が背負っている鞄から、もう1つのお弁当箱を取り出す。

「やっぱりね」

「島田もわかっていたようじゃの」

「ウチの妹も寂しい時、あんな顔をするのよ」

美波は雄二と怜生の様子を見て、苦笑いを浮かべる。

「それじゃあ、お昼にしましょう。前田くんと怜生くんはここに座ってください」

「怜生」

「……うん」

瑞希は怜生に優しく微笑みかけながら言うと、怜生は遠慮がちに頷く。

「それじゃあ。あたしは戻るわ」

「ん？　そうか。一緒に食えば良いじゃないか」

「いや。でも……」

優子は話がまとまった事で教室を出て行こうとすると理音が彼女を呼び止めるが、優子はＦクラスの教室でお弁当を食べる事に抵抗があるのと理音が誘ってくれた事が嬉しいような微妙な表情をしている。

## 第６８問

「何だ？　何か問題があるのか？」

「別に問題ってわけじゃないけど……この教室で食べるの？」

優子の態度に理音が聞き返すと優子はＦクラスの教室はイヤだと言いたげに聞くと、

「まぁ、なれないと抵抗があるだろうな」

「そうね」

雄二と美波は優子が何をためらっているのかわかるようで頷く。

「何がだ？」

「基本的にこの教室は飯を食う環境じゃないって事だ」

「そうかも知れませんね」

理音が首を傾げると変なところに無頓着な理音の様子を見て、雄二と瑞希は苦笑いを浮かべる。

「別に気にする理由がわからん。ただでさえ、現代人は免疫力が低下しているんだ。雑菌に触れる機会を増やさなければ、それこそ病気になるぞ」

「ここが雑菌まみれって事は否定しないのね」

「そうみたいじゃのう」

理音が首を傾げながらもFクラスの教室が汚い事を肯定するように言うと、秀吉と優子は呆れたように言う。

「お前ら雑菌をバカにするなよ。確かに腹は壊すかも知れないが長期的な目で見れば、その辺でやっている予防接種よりは高い効果を望める。雑菌を簡単に取り入れるなら、方法としては……」

「怜生くんがいるんだから、おかしな事を言うのは止めなさいよね」

「？」

理音は何かを説明しようとすると優子は理音の会話の流れで下ネタが紛れ込んでくると感じたようでジト目で理音を睨みつけながら理音の口を押さえると怜生は2人の様子に首を傾げる。

「木下さん、前田くんの事がわかってる感じです。羨ましいです」

「ホントよね」

何かを勘違いしているのか、理音と優子の様子を見て、瑞希と美波はなぜか目を輝かせている。

「……がきんちょ、お前の兄貴は何がしたいんだ？」

「……」

雄二は理音と優子のやり取りを怜生に聞くが怜生はわからないと言

いたいようで首を横に振る。

# 第69問

「何を言ってる。木下姉、きちんとした性教育は……」

「まだ、言う気？」

理音は優子が自分の言葉を遮る意味がわからずに言うと、優子は理音を睨みつける。

「理音、そこでいちゃついていないで、飯にするぞ。せっかく、がきんちょが弁当を持ってきたんだ」

「ん？　そうだな。木下姉、お前も早く座れ」

「悪いけど、断らせて貰うわ。あたしは今日、お弁当を持ってきてないから、学食に行くはずだったし……」

雄二がため息を吐きながら、理音と優子に声をかけると優子は雄二の言葉に少し顔を赤らめながら学食に行く予定だったと言う。

「秀吉はお弁当なのにお姉さんは違うんだね」

「姉上はいつも休みの日は家でだらだらしておるからのう。母上もワシの分しか作らなかったのじゃ」

「……秀吉、ちょっと良いかしら♪」

「なんじゃ？」

昭久が優子がお弁当を持ってきていない事を疑問に思うと秀吉は苦笑いを浮かべながら、優子の休日の様子を話すと優子はにっこりと笑いながらも額に青筋を浮かべ、秀吉を廊下に引きずって行く。

「……怜生、耳をふさいでおけ」

「？」

理音は秀吉と優子の様子に何かを察したようで、怜生の耳をふさぐと廊下からは秀吉の悲鳴が響く。

「せっかく誘ってくれたのを断るのは気が引けるんだけど、あたしは学食に行くわ」

「パンで良ければあるぞ」

「あっ！？」

優子は秀吉から返り血で頬を染めながら断ると、理音は購買で買ってきたパンを差し出し、明久は理音が弁当を手にした事で何かを期待していたのか声をあげる。

「良いの？」

「俺の飯は怜生が持ってきてくれたからな。遠慮はいらない」

「それじゃあ。頂いちゃおうかな♪」

優子は理音からパンを受け取るとしっかりと怜生とは反対側の理音の隣に座る。

# 第７０問

「ボクのパンが……」

「おい、明久、お前はなんで、理音からパンが貰える事を前提で考えているんだ？」

優子が理音からパンを受け取ったのを見て、明久が残念そうな声を出すと、雄二は呆れたような表情をして言う。

「……お兄ちゃん、お昼ご飯は？」

「ちょっと、お弁当とお財布を忘れちゃってね」

「明久、嘘を教えるな。がきんちょ、こいつは好き勝手に金を使って昼飯を買う余裕がないんだ」

怜生は明久が何も食べないのを見て、おどおどとしながらも明久に聞くと、明久は流石に怜生に真実を告げるのは恥ずかしかったようで見栄を張るが雄二は明久の嘘を即座に訂正する。

「……お金は大切に使わないといけないって、お母さんが言ってたよ」

「う、うん。そうだね」

「仕方ないんだ。がきんちょ、明久はバカだからな」

怜生は母親からお金の大切さを教わっていたようで明久に向かい言

うと、明久は耳が痛いのか怜生から目を逸らすが、雄二は明久がバカだから仕方ないと言う。

「ちょっと、雄二、怜生くんの前で言わなくたって良いだろ！！」

「黙れ、明久。がきんちょに嘘を教えるお前が悪いんだ」

明久は雄二に向かい文句を言うが、雄二はその文句を一蹴する。

「……」

「どうした？」

怜生は明久と雄二の会話を聞いて、理音に何か言いたい事があるようで理音の制服の袖をつかむ。

「お弁当、お兄ちゃんに分けてあげても良い？」

「あぁ、怜生がそうしたいならな」

怜生は明久にお弁当を分けたいと理音に確認すると理音は怜生の様子に優しげな笑みを浮かべて頷き、

「アキ、弁当を分けてやるから騒ぐな」

「ホント！？」

理音は自分の弁当箱の蓋の上に自分と怜生の弁当からおかずをいくつかのせて明久に渡すと明久は歓喜の声をあげる。

「怜生に礼を言うんだな」

「うん。ありがとう。怜生くん♪」

「……」

明久は満面の笑みで礼を言うと怜生は恥ずかしそうに頷き、

「最近、アキが前田に餌付けされてる気がするわ」

「前田くん、私は負けませんからね」

瑞希と美波から、理音に向けて敵意の視線が向けられる。

# 第71問

「……帰ります」

お弁当を食べ終わりしばらくすると怜生は立ち上がり、頭を下げて家に帰ると言うが、

「もう少しいても良いんじゃない」

「そうですね」

怜生の表情が理音と一緒にいたいと映っているのか、瑞希と美波が怜生を引き止める。

「さすがにそろそろ不味いだろ」

「ですけど、怜生くんを1人で帰らせるのは不安じゃないですか？」

「姫路さんの言いたい事もわかるけど、仮にもボクらは補習中だよ。ここに怜生くんを置いとくわけにもいかないよ」

明久と雄二がさすがに怜生をこれ以上引き止められないとは思っているが、瑞希や美波の言いたい事もわかるようで困ったように笑う。

「ねぇ。西村先生なら、話をすればわかってくれないかな？　怜生くんはおとなしいから、騒がないだろうし」

「そうじゃのう。鉄人はあれでもそう言う面に関しては融通を利かせてくれるしのう」

「それなら、鉄人に掛け合ってみるか？」

美波が担任である西村教諭に話してみようと言うと、それも1つの選択だと納得できるが、誰も西村教諭に話をしに行きたくないようで苦笑いを浮かべるなか、

「そうだな。話が通じる可能性があるなら行ってみるか。怜生」

「……」

理音は怜生を連れて職員室まで行こうとすると、

「ねぇ。補習が終わるまでで良いなら、あたしが怜生くんを預かろうか？」

「姉上、いきなりどうしたのじゃ？」

優子が怜生を預かると言い、秀吉はなにかあるのか眉間にシワを寄せる。

「秀吉、何かあるの？」

「姉上に怜生くんを預けるのは少し心配な気がするのじゃが……」

優子が秀吉を睨みつけると秀吉は怜生が心配だと言い、

「ショタか」

「ショタだな」

「……お兄ちゃん、ショタってなんですか？」

理音と雄二は秀吉の様子に優子の性癖を理解したようで頷きながら言うと、怜生は意味がわからずにきょとんとしている。

# 第72問

「小さな男の子にムラムラする危ない性癖を持つ女の事だ。襲われないように気をつけろよ」

「……はい。気をつけます」

「前田、あんた、怜生くんに何を教えてるのよ!!」

理音が怜生の質問に答えると、怜生はすべては理解してないようだが頷き、優子から隠れるように理音の影に隠れ、優子は理音を怒鳴りつける。

「身を守る術を教えるのは兄の務めだ」

「あたしはショタコンじゃないわよ!?」

「秀吉、どうなんだ?」

優子は自分がショタコンではないと否定すると雄二が秀吉に聞き、

「姉上が買い集めてる薄い本を見る限り、ワシは否定できんのじゃ」

「薄い本? ってなんですか?」

「秀吉!! あんた、何を言うのよ!!」

秀吉は優子が集めている薄い本の事を話すと瑞希はその本に心当たりがなく首を傾げ、優子は秀吉を怒鳴りつける。

「ねぇ。リオ、秀吉のお姉さんって」

「腐だな」

「あぁ、間違いなく腐だ」

「意外ね」

優子の様子に明久は苦笑いを浮かべると理音と雄二は間違いないと言い切り、美波は苦笑いを浮かべる。

「ち、違うわよ。あ、あたしはそんなんじゃ」

「まぁ、趣味はそれぞれだろ。お前の妄想力の高さも納得がいった。それを隠すために優等生のフリか？」

優子は慌てて否定しようとするが、理音は今までの優子の行動すべてがつながったようで頷く。

「だから、違うって言ってるでしょ！？　あたしはそんなものに興味なんてない！！」

「別にお前がホモネタが好きだろうと俺は気にしない。それに俺が持っているデータでは女の7割以上がホモネタが好きだと出ている」

「それって、どこで？」

「ある電気街だ」

「「……」」

理音がなぜ手に入れたかわからないデータの話を聞き、微妙な空気が流れる。

「それに男は一部例外を除いて、レズネタは大好きだしな」

「……レズネタ？」

「それはな……」

「言わすか！？」

理音が怜生に説明しようとすると優子が理音の口を押さえる。

# 第７３問

「今週の補習はここまでだ」

補習の時間もようやく終わり、西村教諭が教室を出て行くと、

「さてと……」

「リオ、怜生くんを迎えに行くの？」

「あぁ」

結局、優子に怜生を預かって貰ったため、理音はＡクラスの教室に行こうとした時、

「……お兄ちゃん」

「怜生」

怜生、優子、翔子、愛子の４人が教室に入ってくる。

「翔子？　何でお前がここにいる？」

「……雄二がいるから」

「お前は今日は休みだろ？」

「……雄二がいるから、私も学校にくる」

「また、お前はそんな事を……」

「……雄二が学校にこないなら、私もこない。例え、平日でも」

雄二と翔子が話し始めるのを見て、

「雄二は愛されてるな」

「そうだね」

「代表……」

理音は何かを考えているのか邪悪な笑みを浮かべ、愛子は笑いながら同意をし、優子はため息を吐いている。

「木下姉、工藤、後……霧島には後で言えば良いか」

「そうだね」

「今日はありがとう助かった。怜生、お前も2人に礼を言え」

「……今日はありがとうございました」

理音に言われて怜生が優子と愛子に頭を下げると、

「もう。怜生くんは可愛いな。ボクなら全然気にしなくて良いよ。なんなら、来週も怜生くんの相手をするよ♪」

「……怜生くんは大人しいから、迷惑じゃなかった」

愛子は怜生を気に入ったようで怜生を抱きしめ、翔子は雄二との話も終わったようで愛子に同意した後、

「……雄二、私も怜生くんみたいな子供が欲しい」

「翔子、お前は何を言ってるんだ!?」

頬を赤く染め、雄二に言うと雄二は驚きの声を上げると同時に覆面の集団が雄二をさらっていき、

「雄二、待って。話は終わってない」

翔子は雄二と覆面の集団を追いかけて行く。

# 第７４問

「代表……」

「やっぱり、Ｆクラスは面白いな」

雄二が覆面の集団にさらわれて行くのを見て、優子はため息を吐き、愛子は楽しそうに笑っている。

「木下姉、工藤、もう少し怜生を頼んで良いか？　俺は雄二と霧島で遊んでくる」

「はぁ？　あんたは何を言ってるの？」

「お前こそ、何を言ってる？　あれを見たら追いかけないといけないだろ」

「あぁ、確かにわかるかも知れない」

理音は雄二と翔子で遊ぶつもりのようで笑顔で言い切ると優子は呆れたように言うが、愛子は理音の言いたい事がわかるようで頷いている。

「工藤、お前とは気が合いそうだ」

「そうかもね。でもさ、怜生くんはお兄ちゃんと一緒にいたいみたいだよ」

「……」

愛子は理音の制服をつかんでいる怜生を見て苦笑いを浮かべると、

「……そうだな。怜生、買い物して帰るか？」

「……」

理音は怜生の様子に少し戸惑ったような表情をした後、怜生に向かい聞くと怜生は無言で頷く。

「なら、行くか？」

「……」

理音が怜生に向かい手を出すと怜生は少し戸惑いながらも理音の手を握る。

「木下姉、工藤、今日は助かった」

「さっきも聞いたよ。気にしないの」

「そうよ」

理音は改めて、優子と愛子の2人に礼を言うと優子は少し照れくさそうに返事をする。

「じゃあな」

「……」

「前田、ウチも夕飯の買い物に行くから待って」

「あぁ」

理音と怜生が2人で教室を出て行こうとすると、美波も商店街に行くようで3人で商店街に向かう。

「ねぇ、優子、前田くんを追いかけなくて良いの？」

「追いかけるわけないでしょ！？」

「素直じゃないね」

「そうじゃのぅ」

愛子は教室を出て行く3人の背中を見送った後、優子をからかうように言うと、優子は全力で否定するが、その様子に愛子は楽しそうに笑い、2人の様子を見ていた秀吉はため息を吐く。

## 第75問

「……怜生、夕飯は何が良い？」

「……何でも良いです」

「そうか」

理音は手に大根を持ちながら怜生に聞くと怜生は特に食べたいものはないと答える。

「……前田、あんたがそうやってるのって、恐ろしく似合わないわね」

「そうか？」

「えぇ。あんたを知ってる人間なら確実にそう言うわ」

美波は理音の様子に苦笑いを浮かべると、理音は首を傾げる。

「そうか？　これでもあっちではそれなりに自炊はしてたんだぞ」

「そうなの？　瑞希の話じゃ、留学先があんたの生活費とかも出してくれてたって、それなら、あんたの生活の世話をしてくれる人もいたんじゃないの？」

「あぁ、最初はな」

「最初は？」

美波は理音の留学先での生活は優遇されていたと思っていたようで首を傾げる。

「考えても見ろ。くそ生意気なジャップのガキを自分から世話しにくるはずもないだろ」

「あんたねぇ」

理音は美波の疑問に面倒くさそうに答えると、美波は苦笑いを浮かべるが、

「事実だ。最初は俺がガキだったせいか、自分を優位に見せるように俺を見下していたが、少しすると気づき恐怖するんだよ。俺が『異質』だってな」

「恐怖に異質ね？　ウチから見ると確かにおかしいけど、そこまでおかしくないと思うけど」

「それはお前があのクラスに毒されてるからだ。たぶん、俺はあのクラスじゃなければ、俺の扱いは昔と変わらない」

理音は自分の過去など興味なさそうに言った時、

「お姉ちゃん、この人、お姉ちゃんの彼氏ですか？」

「葉月？」

「ん？　島田、この小さな生物はお前の妹か？」

「……」

小さな女の子が美波を呼ぶと理音はしゃがみこんで女の子の顔を覗き込み、怜生は理音の後ろに隠れる。

# 第７６問

「葉月。こいつは『友達』の前田理音と弟の怜生くん」

「そうなんですか？　はじめまして、島田葉月です。お姉ちゃんがいつもお世話になってます」

美波が妹の葉月に友達を強調して理音と怜生の紹介をすると葉月は礼儀正しく、２人に向かいお辞儀をする。

「……ずいぶんと礼儀正しいな。本当にお前の妹か？」

「……前田、あんた、殺すわ」

「前田理音だ。怜生、この小さな生物に挨拶をしろ」

「……」

理音は葉月の様子と美波を比べたようで思った事を口に出すと、美波から理音に向けて殺気が放たれるが、理音は気にする事なく怜生に挨拶をするように言うと、怜生は理音の後ろから葉月に向かい頭を下げる。

「よろしくです。怜生くん」

「……よろしくお願いします」

葉月は怜生に近寄り、改めて挨拶をすると怜生は葉月につられるように頭をさげる。

「お兄さん、怜生くんは恥ずかしがり屋さんですか？」

「あぁ。悪いな。小さな生物」

「葉月は小さな生物じゃないです。葉月には島田葉月と言う名前があるです」

理音の葉月の呼び方を葉月本人は気に入らないようで頬を少し膨らませる。

「悪かったな。島田妹」

「葉月です」

「あぁ。悪かった。葉月」

「よくできましたです♪」

頬を膨らませる葉月の様子に理音は少し戸惑ったように笑い葉月の名前を呼ぶと彼女は理音に笑顔を見せる。

「ねぇ。前田、あんたって、ひょっとして年下に甘い？」

「さあな。あまり、自分より年が下の人間と関わってこなかったからな。どう接したら良いかわからないと言う答えが妥当だろうな」

「……わからないのね」

「そのようだな」

美波は理音と葉月の様子に苦笑いを浮かべると理音は少し考え、自分の事を分析して答えるが美波はその答えにため息を吐く。

# 第７７問

「お姉ちゃん、今日のお夕飯はなんですか？」

「まだ決まってないのよ。葉月は何か食べたいものある？」

「お夕飯は何でも良いですけど……」

葉月は夕飯に食べたいものは特にないようだが、外の喫茶店視線が移る。

「喫茶店に何かあるのか？」

「えーと、お友達から美味しいパフェがあるって聞いていたんですけど、葉月のおこづかいじゃちょっと足りませんでした」

理音は葉月の視線の先に何かあるかを聞くと葉月は苦笑いを浮かべる。

「ダメよ。こんな時間に食べたら夕飯が食べられなくなっちゃうでしょ」

「わかってるのです」

美波は葉月に言い聞かせるように言うと、葉月も美波の言いたい事がわかっているようでしゅんとする。

「葉月、すまないが買い物が終わるまで怜生の相手をして貰って良いか？」

「葉月はかまいませけど」

「ありがとう。怜生、少しの間、葉月と遊んでてくれ」

「……」

理音は葉月の返事を聞くと自分の後ろに隠れている怜生の背中を押し、

「島田、買い物を終わらせるぞ」

「ちょっと、前田!?　何?　何なのよ?」

美波を引きずって行く。

……

……

……

……

「葉月、助かった」

「気にしないでください」

「……」

理音は買い物を終えると葉月に向かい礼を言うと葉月は笑顔で返事をし、怜生は理音の後ろに戻る。

「葉月、怜生の相手をしてくれたお礼がしたいんだが、あそこでパフェで良いか？」

「えっ！？　良いんですか？」

「あぁ。俺も甘いものが食いたい気分だしな。男だけで入るのもな」

理音は葉月を喫茶店に誘うと葉月は嬉しそうな表情をするが葉月は美波の顔を期待するように見る。

「ちょっと、前田。あんた、ウチの話聞いてた？」

「あぁ。お前にも奢ってやるから行くぞ」

「ちょっと、前田。待ちなさい！？」

理音は美波の答えを聞かずに怜生と葉月を連れて喫茶店に入って行き、美波は3人の後を追いかけて行き、理音の奢りで喫茶店で軽く話をした後、解散する。

# 第７８問

「……お兄ちゃん、お客さん」

「あぁ。アキが着たみたいだな」

理音は朝食の後片付けをしていると家のインターホンが鳴る。

「悪い。遅くなった……何でお前らまでここにいる？」

「おはよう。リオ」

「おはようございます。前田くん」

理音は後片付けをしていたため、玄関に出るのが少し遅れた事を謝りながら玄関を開けるとなぜか明久以外に瑞希と美波が立っている。

「あれ？　前田、今日はメガネなんだ。目悪いの？」

「あぁ、視力はあまり良くない。こっちの方が楽だから、休みはだいたい……違う。俺の質問に答えろ」

美波は理音がメガネをかけているのを見て、首を傾げると理音は普通に答えるが途中で瑞希と美波が家にきた理由を聞く。

「まだ、片付けも残っていそうでしたし、吉井くんと前田くんが片付けに時間を取られていると怜生くんは寂しいかな？　と思いまして」

「あぁ。それは助かるが昨日が補習だったんだぞ。休まなくて良いのか？」

「気にしないの。それで上がって良い？」

「あぁ」

「「「お邪魔します」」」

瑞希は苦笑いを浮かべながら、片付けを手伝いにきたと言うと、理音は2人の事を気にかけるが2人とも帰る気はなさそうに見えるため、理音は3人を家の中に招く。

「おはよう。怜生くん」

「……おはようございます」

明久は居間に着くと怜生を見つけて笑顔で挨拶をすると、怜生は少し警戒しながらも3人に向かい頭を下げる。

「……ねぇ。前田、片付けが終わってないって言ってたけど、どこが終わってないの。片付いてるじゃない」

「はい。キレイになってます」

瑞希と美波は理音の家がまだ全然片付いていないと思っていたようだが、玄関から居間まではキレイに片付いており、2人は感心したように言う。

「生活スペースは先に片付けるに決まってるだろ。片付けたいのは

書庫だ。あっちの研究で使った資料とか本があってな。アキ」

「何？」

「朝の残りだ。どうせ、何も食ってないんだろ」

「ありがとう。リオ」

理音はキッチンからおにぎりを2つのせた皿を明久に渡すと、

「インスタントコーヒーしかないが瑞希と島田はそれで良いか？」

瑞希と美波に聞くと2人は頷く。

## 第79問

「待たせたな」

「ありがと」

「気を使って貰ってすいません」

理音は4人分のコーヒーと怜生に牛乳を持ってくると、自分のカップの中に砂糖を大盛で3杯入れる。

「リ、リオ、それって甘くない？」

「いや」

「……前田って、実は甘党よね」

明久は理音が当たり前のようにコーヒーに口をつけるのを見て苦笑いを浮かべると、美波は昨日、理音が怜生や葉月と一緒にパフェを食べていたのを見ていたせいか苦笑いを浮かべる。

「そうか？　気にした事がないからわからんが、糖分は即効性でエネルギーを摂取するのに手軽だしわりと使うな」

「そうだとしても多いわよ」

「……そうか」

理音は自分の味覚の事など気にしていないようで美波は苦笑いを浮

かべたまま言うと理音は少し納得がいかなさそうに頷き、

「しかし、お前らがくるとは思ってなかったから、昼飯と夕飯はどうするかな？」

明久には昼食と夕食を奢ると話していたが瑞希と美波の分は考えていなかったため、首を傾げる。

「それなら、霧島さんと雄二に材料を買ってきてって言ってあるから大丈夫だよ」

「……何？　あいつらもくるのか？」

「さすがに姫路さんと美波がくるとなったら、材料が足りないと思ったし、何より、ボクがリオの手伝いでせっかくの休みをつぶしているのに雄二が家で寝てるのは許せないからね」

明久は楽しそうに雄二を巻き込んだと言う。

「雄二は朝から霧島と食料品を買いあさってるのか？」

「2人でお買い物、素敵です」

「憧れるよね」

理音は明久の話で雄二が首輪をつけられて翔子に引きずられいるのを想像する隣で瑞希と美波の中では雄二と翔子は完全に仲の良いカップルのようで目を輝かせている。

# 第８０問

「なぁ。翔子」

「……何？　雄二」

「どうして俺は朝からお前につきあわされないといけないんだ？」

「……妻の買い物を手伝うのは夫の役目」

「あのなぁ。いつも言うがおかしな事を……」

雄二は朝から翔子に無理やり起こされ、今の状況も説明されずに翔子に腕に抱きつかれて商店街を引きずられるように歩かされている。

「……おかしな事は言ってない。それに今は２人でデートしてる事が大事」

「デートじゃない。それより、俺はお前と一緒に朝から食材を買いあさらないといけないんだ？　せめて説明をしろ」

「……新婚さんみたい」

「おかしな事を言うな！！　と言うか、理音かおかしな事を吹き込んだのは！！」

「……吉井からのアドバイス」

（明久、殺す）

翔子とのかみ合わない話を聞きながら、雄二が明久を殺す事を心に誓った時、

「代表？　デートですか？」

「姉上、邪魔をしたら悪いのじゃ」

2人を見つけて、優子と秀吉が声をかけてくる。

「……秀吉、勘違いをするぬわっ！？　ちょっと待て。翔子！！それは逆関節だ！？」

「……おはよう。優子、木下」

「お主も大変じゃのう」

雄二は優子と秀吉の勘違いを否定しようとするが、翔子は2人の勘違いを肯定するように雄二に抱きついている腕に力を込めるがその行為は雄二にとっては痛みしか伴わなく、秀吉は苦笑いを浮かべている。

「……優子は買い物？」

「はい。少し欲しいものがあったので、秀吉に荷物持ちを頼んだんです」

「……お前も大変だな」

「仕方ないのじゃ」

翔子は雄二をつかんでいる腕の力を少し緩めて優子に聞くと優子の答えに雄二はせっかくの休みをつぶされている秀吉に自分と同じものを感じたようである。

「雄二も霧島の買い物の荷物持ちのようじゃの」

「違う。俺はわけもわからないまま引きずり出されたんだ」

「どういう事なのじゃ？」

「……吉井に頼まれた」

秀吉は雄二と翔子が何をしているか聞くと雄二は未だに意味を知らされていないため、ため息を吐くと翔子は理音の引っ越しの片付けを手伝うと説明する。

## 第81問

「なるほどのう。確かに人手は必要かも知れんが……」

「……それで、これから手伝いに行く」

「……そう言う事なら仕方ないか」

翔子の説明を聞いて、雄二は納得がいかなさそうだが頷く。

「まぁ。人手は必要じゃからのう」

「あぁ。そうだな。人手が必要なら早いとこ終わらせるぞ」

雄二は翔子と2人でいるより、理音の手伝いをしてる方が安全だと感じたのか早く買い物を終わらせるように翔子に言う。

「そうじゃのう。邪魔するのもなんじゃし、姉上、ワシらも行くのじゃ」

「……人手はいるわね」

「姉上、何を考えておるのじゃ？」

秀吉は雄二と翔子の邪魔をするのを悪いと思ったようで優子の買い物の続きに行こうと言うが、優子は何かを考えているようでぽつりとつぶやくと秀吉は優子に聞き返すと、

「秀吉、あたし達も手伝いに行くわよ」

「姉上、いきなり、何を言うのじゃ？」

「良いから行くわよ。代表、あたし達は先に行きますから、ゆっくりと買い物をしてきてください」

「待つのじゃ。姉上！？」

優子は理音の家に行ってみたいようで『引っ越しの手伝い』と言う名目を手に入れ、秀吉を引きずりながら歩き出すと、

「まぁ、待て。いきなり2人が押しかけるのは理音も驚くだろ。俺と秀吉が先に行って説明するから、木下姉は……」

「……雄二は私と買い物をする」

雄二は翔子を優子に押しつけようとするが、翔子は雄二を引きずって歩き出し、

「……秀吉、行くわよ」

「……そうじゃな」

優子と秀吉は雄二と翔子の様子に何かを感じたのか苦笑いを浮かべた後、2人で前田家に向かって歩き出す。

# 第８２問

「悪かったな。雄二、霧島……木下と木下姉？」

「何よ。あたしがきたら悪いの？」

「……姉上、どうしてケンカ腰なのじゃ？」

理音はインターホンが鳴ったため、雄二と翔子がきたと思い、玄関のドアを開けるとそこには優子と秀吉が立っており、理音は２人を見て首を傾げると優子は理音の様子に少しムッとする。

「別にくるのは構わないが、雄二と霧島だと思ってたからな。それで何かようか？」

「商店街で雄二と霧島に会ってのう。それで姉上がワシらも手伝った方が良いと言ってのう」

「そうか。悪いな」

理音は優子と秀吉が家を訪ねた理由を聞くと秀吉は雄二と翔子からみんなで理音を手伝っている事を聞いて手伝いにきたと理音に説明しているなか、

（……なんで、あいつはメガネなのよ？　何かを狙ってるの？）

優子は理音のメガネ姿に１人でおかしな事を考えている。

「ん？　木下姉」

「な、何よ!?」

理音は優子の視線に気づいたようで優子を呼ぶと優子は声を裏返し、

「メガネフェチか?」

「ち、違うわよ!?　あんたはいきなり何を言い出すのよ!?」

「……姉上、前田、2人して何をしておるのじゃ?」

理音の脳みそは優子の視線から1つの答えを弾き出したようで優子に向かい言うと優子は声をあげて否定し、秀吉は2人の様子にため息を吐く。

「いや、改めて、木下姉の腐女子っぷりを確認していたところだ」

「だから、違うわよ!!　だいたい、何であんたはメガネをかけてるのよ?」

「研究で目を酷使しすぎてな。メガネかコンタクトがないとほとんど何も見えないんだから仕方ないだろ」

理音は優子の様子など気にする事なく、自分の視力が悪い事を簡単に説明すると2人を家のなかに案内して行く。

# 第８３問

「遅いよ。雄二……秀吉にお姉さん？」

理音が２人を片付け中の部屋まで連れて行くと明久は雄二がきたものと思っていたため、雄二に文句を言おうとするが、優子と秀吉の顔を見て首を傾げる。

「商店街で雄二と霧島にあって、手伝いにきてくれたそうだ」

「ホント？　助かったよ。２人で片付けるには量が多かったから」

「そのようじゃのう」

「この本って、あんたは全部、読んでるの？」

明久は理音から、２人が手伝いにきてくれた事で安心したのか笑顔を見せるなか、優子と秀吉は整理する本の量を見て驚いている。

「あぁ。研究に使った資料や各分野の最先端技術の論文。その他もろもろだ。一応はすべて目を通してあるが、必要な時に見つからないのは困るからな。これを並べるのを手伝って欲しい」

「さっきから、リオと２人でやってたんだけど、全然進まないんだよ。重いし、開いて見ても面白い事も書いてないし、だいたい、こんな体力を使う作業はボクじゃなくて雄二向きなんだよ」

理音は書庫にある本を使う時の事を考えているようで整理しておきたいようだが、明久はすでに飽きているようで文句を言いながら、

本を整理して行くが本の扱いは悪い。

「明久、お主は……」

「文句を言う前に働け。後はあまり雑に扱うなよ。その本はどれも価値があるんだからな」

「価値がある？　……」

秀吉が明久の様子にため息を吐くと理音は明久の本の扱い方に不満があるようで明久に言うと、明久の視線は本をお宝を見るように変わるが、

「学術的な意味でな。それを古本屋に持って行っても安いと思うぞ」

「そうなの？」

「専門書って言うのは読む人間が限られているからな」

「そうなんだ……」

がっかりとしている明久を見て、理音はため息を吐いた後、優子と秀吉に指示を出し作業に戻る。

## 第８４問

「木下姉、次はそれだ」

「これ？」

「あぁ」

理音は脚立の上に乗り、優子に手伝ってもらいながら、高い場所にある本棚に本を並べていると、

「ねぇ。怜生くんはどうしてるの？」

「居間で瑞希と島田が遊んでくれてる」

「……」

優子は書庫に怜生がいないのが気になったようで理音に向かい聞くと理音は当たり前のように事実だけを述べるがその言葉に優子は文句がありそうな表情をする。

「どうかしたか？」

「別に、あたしが力仕事をしてるのに、どうして、姫路さんと島田さんは怜生くんと遊んでるのかな？　って思っただけよ」

理音は優子の反応に聞き返すと優子は不満げに言うが、

「お前は片付けを手伝いにきたと言っただろ。あの２人は最初から

怜生の相手をしにきたんだ」

当然、理音は優子が何を不満に思っているかわからずにこのような形になった事実だけを言う。

「そうよね。あんたはそう言うヤツよね」

「……なんだ？」

理音の言葉に優子は呆れたようなため息を吐くと、理音は意味がわからないようで首を傾げる。

「……別に」

「なら、睨みつけるな」

優子は理音に言いたい事はあるが、理音に言っても仕方ないと思ったため、理音を睨みつけると理音は優子の顔を見てため息を吐く。

「睨んでなんかないわよ！？」

優子が声をあげると、理音に渡そうと持っていた本が手から落ち、

「……いたい」

優子の足の上に落下する。

「……お前は何がやりたいんだ？」

「うるさいわよ」

理音は優子の様子を見てため息を吐きながら脚立を下りると優子は本が落ちた足が痛いようで少し目に涙をにじませながらも理音を睨みつける。

「見せてみろ」

「ちょっと!?　何する気よ?」

「……黙れ」

理音は優子の靴下を脱がせると本が落ちた箇所を見ながらぶつぶつ言うと、

「行くぞ」

「えっ!?　ちょっと、何よ!?」

優子を抱き上げ、優子は理音の突然の行動に驚きの声をあげるが、

「アキ、木下、悪い。少し外す」

「えっ!?　リオ、何があったの?」

優子の様子など気にせずに明久と秀吉に任せると言い、優子を抱えたまま書庫を出て行く。

## 第８５問（前書き）

ユニークが２００００人を超えました。

ありがとうございます。

これからも頑張りますのでよろしくお願いします。

できれば、感想や評価をしていただけるとやる気につながります。

# 第85問

理音は優子を抱えたまま居間に下りると、

「怜生、瑞希、島田、悪いが、ソファーを開けてくれ」

「前田くん？　木下さんはどうしたんですか？」

居間にいた3人に声をかけると理音と優子の様子を見て、瑞希が慌てて声をかける。

「足の上に本を落としたんだ。そこが少し腫れてるんでな」

「うわ。ホントね。前田、シップとかないの？」

「木下さん、大丈夫ですか？」

「……お姉ちゃん、痛い？」

理音は簡単に状況を話すと優子をソファーに下ろし、3人は心配そうに優子の足を見るが、理音は3人の言葉に答える事なく、奥の部屋に入って行く。

（……見た目より、ずっと力あるんだ）

優子は理音の腕に抱きかかえられた事が恥ずかしくはあるが、それ以上に突然起きたラブイベントに顔を赤くして妄想の世界に入って行く、

「あの。木下さん？」

「何か考えてるみたいね」

「お姫さまだっこですからね。好きな人にお姫さまだっこ♪　……憧れます」

「そうよね。憧れるよね♪」

「……」

瑞希は優子に声をかけるが優子は妄想に入っているため何も反応せず、瑞希と美波は理音が優子を抱きかかえて居間に入ってきた様子を思い出して目を輝かせていると怜生は3人がおかしな世界に行ってしまった意味がわからずに首を傾げている。

「……怜生、こいつらは何をしてるんだ？」

「……わからないです」

しばらくして、理音が救急箱を持って戻ってくると3人の姿を見て首を傾げながら怜生に聞くが、怜生は首を横に振る。

「……まぁ、良いか。瑞希、島田、邪魔だ」

「す、すいません！？」

「あ。ごめんね」

理音は瑞希と美波にどけろと言うと2人は我に返り、理音に道を開

け、理音は優子の足の手当てをする。

# 第８６問

「……これで良いな」

「あ、ありがとう」

理音は手当てを終えると優子は理音の顔を見るのが恥ずかしいようでうつむきながら礼を言う。

「ねぇ。前田、ウチが見る限り、普通の手当てしかしてなかったみたいだけど」

「何だ？　改造手術でもしろと言うのか？」

美波は理音が普通に手当てをしていたのを見て恐る恐る理音に聞くと理音は楽しそうに懐からメスとドリルを取り出し、

「そんなわけないでしょ！？」

「ま、前田くん、それはちょっと」

「冗談だ。改造手術はいろいろと裏で動かないといけないから面倒だしな」

「お兄ちゃん、した事があるんですか？」

美波は慌てて理音を止め、瑞希は苦笑いを浮かべるなか、怜生は理音が取り出した道具を見て目を輝かせている。

「れ、怜生くん？」

「改造手術は男のロマンだ」

「……はい」

怜生の反応に美波は疑問を持ったようで怜生を呼ぶと理音はうんうんと頷きながら言い、その言葉に怜生は遠慮がちに頷く。

「……意外なところで血のつながりを見たわ」

「そ、そうですね」

前田兄弟の様子に瑞希と美波は顔をひきつらせると、

「あのさ。変な事ってしてないわよね？」

「今回はただの打ち身だしな。特別な事は必要ないだろ」

優子は目の前で行われているやり取りに顔をひきつらせながら理音に聞くと、理音はつまらなさそうに言った後、

「何だ？　してほしいのか？」

「お、おかしな事を言うな！？　このスケベ男！？」

理音は邪悪な笑みを浮かべて優子の耳元でささやくと優子は何かを想像したようで顔を真っ赤にして理音を怒鳴りつける。

「怜生くん、こっちで遊んでようか？」

「そうですね」

「……はい」

理音と優子の様子に瑞希と美波は勝手に気を利かせて怜生を連れて行く。

# 第87問

「まぁ、この状況じゃ逃げられないけどな」

「あ、あんたは何を考えてるのよ!?　み、みんながいるのよ!?」

「お前は何を想像してるんだ?」

理音は優子の耳元でささやくと優子はこれから理音に何をされるのかいろいろと想像しているようで耳まで真っ赤に染めており、理音はそんな優子の様子を見て楽しそうに笑うと、

「俺は戻るから大人しくしてるんだぞ」

「う、うん」

理音は他意はなく、優子の頭を優しくポンポンと2回叩くと、彼女は理音から目を逸らして頷く。

「瑞希、島田、そこで覗いてないで、こいつの相手も頼むぞ」

「「!?」」

理音は瑞希と美波がこちらの様子をうかがっているのに気づいていたようで表情を変える事なく、2人に言うと彼女達は怜生の手を引きながらバツが悪そうな表情をして居間に戻ってくる。

「えーと」

「あはは」

瑞希と美波は理音にばれていた事にとりあえず、理音と優子から視線を逸らしながら苦笑いを浮かべるなか、怜生は今の状況が理解できていないようできょとんとしている。

「それじゃあ、俺は戻るからな」

「うん……」

理音はこの微妙な空気を気にする事なく居間を出て行くと、優子は理音の背中に熱い視線を向けるが理音が振り返る事はなく、

「木下さん、木下さん。前田とどこまで進んでるの？」

「私も聞きたいです！！　前田くんと木下さん、どっちから告白したんですか？」

「えっ！？　ちょっと待ってよ！？　あ、あたしと前田はそんな関係じゃないわよ！？」

瑞希と美波は先日からの理音と優子の様子に勘違いしているようで優子につかみかかるように聞き、優子は顔を赤く染めながら全力で否定するが、

「でも、あの前田がお姫様だっこよ。どうでも良い人間にだったら、『……自分でどうにかしろ』とか言うわよ」

「そ、そうかな？」

「はい。木下さんは前田くんにとって、特別な女の子だと思います！！」

「……」

美波は理音のマネをしながら、理音にとって優子は特別だと言うと優子はその言葉が嬉しかったようで頬を赤く染めうつむくと、その様子に瑞希と美波は目を輝かせているため、怜生はその様子に何も言わずに絵本を持って理音の後ろを追いかけて行く。

## 第88問

「あれ？　怜生くん」

「ん？　どうかしたか？」

「……ここで絵本を読んでても良いですか？」

怜生が書庫の入口からなかの様子をうかがっているのに明久が気づき声をかけると怜生は遠慮がちに聞く。

「別にかまわないが、危ないから近づくなよ」

「はい……」

理音は怜生に危ないから近づかない事を約束すると怜生は頷く。

「でもさ。これって、ホントに終わるの？　全然、進んでる気がしないんだけど」

「確かにそうじゃのぅ」

3人が作業に戻ろうとすると明久は疲れたようで泣き言を言い、秀吉も進まない作業に疲れてきたのか、まだ半分も埋まっていない本棚を見てため息を吐く。

「ボクの召喚獣でも使えれば楽なのに」

「そうじゃのぅ。明久は召喚獣の扱いになれておるから使えれば楽

じゃの。しかし、召喚フィールドは学園にしか……前田？」

「……なるほど、確かに……だから、フィールドを……するには……を流用すれば……なくもないか。前に解析した……を……事で、いや、そうなるとここが……ないから……なら、ここを……ればできなくもないか？」

明久は召喚獣を呼び出せれば楽だと言うと秀吉は苦笑いを浮かべながら無理だと言おうとするが、理音は明久の言葉に何かを思いついたのかぶつぶつと言い始め、

「リオ、どうかしたの？」

「……出力を抑える事でフィールドを……させれば、使用するエネルギー……る事もできそうだな」

明久は自分の世界に入り込んでいる理音を見て苦笑いを浮かべながら、理音を呼ぶと理音は考えがまとまったようでニヤリと笑うと、

「召喚獣が使えそうだ」

「ホント！？」

「使えると言うても、ここには召喚フィールドをはれんのではないか？」

召喚獣を使えると言い、明久はその言葉に単純に喜ぶが秀吉は理音の言葉が信じられないのか首を傾げた時、家のインターホンが鳴り、

「理音、買い物してきたぞ」

「……おじゃまします」

雄二と翔子が到着したようで玄関の方から2人の声が聞こえる。

「まぁ、詳しい話は飯を食いながらにしよう。昼飯も作らないといけないからな。それまで休憩だ」

理音は明久と秀吉に休憩しようと言うと2人の返事も聞かずに玄関に向かい歩き出す。

# 第89問

「悪かったな」

理音は玄関に着くと巻き込んだ形の2人に礼を言うが、

「……理音、お前、熱でもあるのか？　それとも何かを企んでるのか？」

「……気にしなくても良い。私は雄二と一緒に買い物ができて嬉しかった」

雄二は理音の様子に怪訝そうな表情をし、翔子は純粋に雄二と一緒に居られた事が嬉しかったようで笑顔を見せる。

「何も企んでいない。それに企むつもりなら、お前ら2人がデートしていると知った時点で後ろから一定の距離をとって観察をし、次の手を考える」

「……止めてくれ」

理音の言葉に雄二は理音なら本当にやりかねないと思ったようでため息を吐く。

「まぁ、上がってくれ。後は霧島、いくらかかった？」

「……別にこれくらいなら気にしなくて良い」

理音は2人を家の中に招くと翔子に材料費を払おうとするが、翔子

は材料費は自分が持つと言う。

「そう言う訳にもいかないだろ。雄二、お前からも言ってくれ」

「別に翔子が良いって言ってるんだ。良いだろ。それより、キッチンはどこだ？　飯作るんだろ。ん？　姫路、島田、キッチンはどこだ？」

「坂本くん、キッチンならこの奥です」

「おはよう。坂本」

「あぁ」

理音は雄二に助け船を期待するが雄二はどうでも良いと言い切り、荷物を下ろしたいようで1人で奥に進んで行き、居間に着いたようで瑞希と美波からキッチンの場所を聞き、先に進んで行く。

「……理音、遠慮しないで良い。私と雄二は理音の友達なんだから」

「しかしな……」

雄二と翔子の様子に理音は戸惑ったような表情をすると翔子は優しげな笑みを浮かべるが、理音はこの状況になれていないようで少し困ったような表情をすると、

「……それなら、今度、優子にクレープを奢ったように私と雄二にも何か奢って」

「わかった」

翔子は理音の戸惑いが彼女には理解できるのかそう言うと理音は頷き、

「霧島、こっちだ」

「……うん」

翔子を連れて雄二のいるキッチンに向かう。

# 第９０問

「……これはカレーか？」

「あぁ。人数もいるし楽だろ」

理音は雄二と翔子が買ってきた材料を見て言うと雄二は頷く。

「まぁ、それもそうだな。後は俺がやるから、雄二は休んでてくれ」

「手伝うか？」

「……できるのか？」

理音は怪しげな色をしたハンドソープで手を洗い、料理を始めようとすると雄二が理音に提案するが、理音は雄二の言葉に怪訝そうな表情をするが、

「心配するな。確実に姫路よりはできる……と言うか、手伝わせろ。お前が１人で料理をしていると姫路が気をきかせて手伝いにくる」

「……それは」

雄二は最悪の事を考えついたようで自分が手伝うと言うと理音は目の前で瑞希の料理がどのように毒物に変化するか興味が湧いたようで邪悪な笑みを浮かべる。

「おかしな事を考えるなよ。良いか、俺の話をよく聞けよ。俺や明久はまだなれているから大丈夫かも知れないが、今回は翔子や……

ニヤニヤするな。そんなんじゃない」

「何の事だ？」

雄二は理音を説得しようとした時に翔子の名前が出ると理音は雄二を見て、『こいつはやっぱり、ツンデレだ』と言いたげな表情をして笑い、雄二は理音の考えている事がわかるようでため息を吐く。

「話を戻すぞ。今回は島田や秀吉の姉、それにお前の弟もいる。俺達は高校生だ。体もだいぶ出来上がっているから、耐えきれるかも知れないが、姫路の料理はお前の弟には『確実に致死量』だ」

「……それは否定できないな」

「明久にだけは姫路の料理を食わせたいが、お前の弟の命をかけるものじゃないだろ？」

雄二は瑞希の料理は怜生には危険だと言うと理音は雄二の意見に納得する部分があったため、真剣な表情で頷くと雄二は自分の身を守りながらも明久には仕返しはしたいようで、理音に話を持ちかける。

「あぁ。確かにアキには他に何かを用意しよう」

「そうしてくれ」

「ちょっと！？　２人して何を言ってるんだよ！？」

理音は頷き、邪悪な笑みを浮かべると明久がキッチンに顔を出し、２人の会話が耳に入ったようで声をあげる。

# 第９１問

「なら、どうする？　一先ず、アキの飯には大量にこれを忍ばせておくか？」

「いや、そろそろ、それにも耐性ができてるんじゃないか？」

「そうなると、そろそろ新しいサンプルが欲しいな……となると……をする事で瑞希の……を煽り、……に……を持っ……るように」

しかし、理音と雄二は明久など無視をし、理音は懐から定番となりかけている栄養剤を取り出すと雄二はその栄養剤はすでに効果が薄いと言い、理音はその言葉に何かを考え始めたのかぶつぶつと言い始める。

「ちょっと、無視は酷いよ！？」

「ん？　何だ。明久、いたのか？」

「って、今、初めて気づいた事にするの！？」

明久は２人の様子に再度、声をあげるとわざとらしく雄二は明久がきた事に今、気づいたようなふりをする。

「何のようだ？　お前は居間にいても良いぞ」

「いやさ。なんか、あそこ、女の子ばかりで居心地が悪くて」

「……木下は相変わらず、女扱いなわけだな」

「いや、これはお前の弟も女の子扱いされてるぞ」

理音は明久に休んでいろと言うが、明久は居間には女の子しかいないと言い、理音と雄二は明久の言葉にため息を吐く。

「当たり前だよ。秀吉は誰がどう見たって、美少女じゃないか！！」

「……アキ、あいつを友人だと思うなら、たまにはあいつの言葉を聞いてやれ」

しかし、明久にとって秀吉は『異性』としか認識されてないようで理音と雄二の言葉を完全否定し、理音は明久の様子に深いため息を吐くと、

「ボクも何か手伝うよ」

「人手は足りてる。と言うか、うちのキッチンは男が3人も並べるほど広くない」

「だよね。理音と雄二が並んで料理してる時点で、気味がわ……！？」

明久は理音と雄二が並んで料理をしている姿が気味が悪いと言おうとすると、理音が使っていた包丁が明久のすぐ横の壁に勢いよく刺さり、

「俺と雄二の料理が嫌なら、本当に瑞希にお前の分を作らせるぞ」

「ごめんなさい！？　リオと雄二の手料理、楽しみにしています！？」

理音は瑞希の料理を脅しに使うと明久はその場で土下座をして命乞いをする。

# 第９２問

「アキ、あんた、また何かしたの？」

「吉井くん、どうかしたんですか？」

キッチンから聞こえる３人の騒ぎ声を聞いて、瑞希と美波がキッチンを覗くと、当然、土下座をしている明久の姿が目に映り、美波は当たり前のように明久が何かしたと決めつける。

「ちょっと、美波、どうして、ボクが何かしたって決めつけるのさ！？」

「え？　違うの？」

明久は美波の決めつけに声をあげるが、美波は完全に明久に非があると決めつけているようで首を傾げると、

「別にアキはおかしな事はしていない。ただ、飯ができるまで暇だから、俺の部屋にある『洋物の無修正のＤＶＤを見せてください』と土下座していただけだ」

「あぁ。ある意味、男らしかったぞ」

性格の歪んでいる２人は打ち合わせもしていないはずなのに即座に明久を地獄に叩き落とし、その言葉に瑞希と美波は背後に漆黒のオーラを漂わせ始め、

「ちょ、ちょっと、リオ、雄二！？　嘘を言わないでよ！！」

明久は2人の様子に身の危険を感じたようで理音と雄二に訂正を要求しようとするが、

「見たくないのか？」

「もちろん。見たい！！！！」

理音は明久の答えとこれから明久に何が起こるかすでに予想がついているため、邪悪な笑みを浮かべながら言うと、明久は恐怖より、『知的好奇心』を優先したようで拳を握りしめ即答する。

「……わかっていたが、明久はバカだな」

「今更だ」

明久の答えに雄二は笑いをこらえながら言うと理音は表情を変える事なく言い切り、

「アキ、ちょっと、良いかしら？」

「吉井くん、お話したい事があります」

「えーと、どうして、2人ともボクの肩をつかむの？」

瑞希と美波は明久の肩をがっちりとつかみ、明久を引きずりながらキッチンを出て行こうとし、

「瑞希に島田。ここを買い取った時に何点か拷問器具があってな。地下室に移動してあるから、好きに使ってくれ」

「はい」

「わかったわ」

理音は楽しそうに瑞希と美波に明久をさらに痛めつける案を出すと2人は頷き、

「ちょ、ちょっと、何を言ってるんだよ!?」

「大丈夫だ。検査したが未使用だった」

「そんな事は聞いてないよ!?」

明久はこれから自分に起こりうる恐怖に声をあげるが、瑞希と美波は明久の言葉に反応する事なく、先を進んで行き、理音と雄二が昼食を作り終わるまで地下室には明久の悲鳴が響いていた。

## 第９２問（後書き）

皆さんのおかげで総合評価が５００ｐｔを超えました。ありがとうございます。

原作からはずれてますし、笑い方が何か企んでいるのがデフォルトなのであまり好かれるキャラクターではないと思います。
優子と理音はカップリングとして方向性は間違ってないのかな？とか作者的にもいろいろと考えてしまいます。

こんな悩みっぱなしの作品と作者ですがこれからもよろしくお願いします。

## 第９３問

「えーと、吉井くんは大丈夫なの？」

「いつもの事だ。気にするな」

「そうなのじゃ。だいたい、姉上に言う資格など……何でもないのじゃ」

昼食の準備ができ、理音が地下室から３人を連れてくると、明久の様子に優子は表情をひきつらせて言うが、理音は気にする事なく言い、秀吉は優子がいつも自分に行う体罰と変わらないと言おうとするが、優子に睨まれ黙り込む。

「木下姉、木下を威嚇してないで行くぞ」

「えっ！？　ちょ、ちょっと、何をするのよ？」

「何？　お前１人だけ、ここで飯を食うつもりか？」

理音は優子と秀吉の様子を気にする事なく優子の隣まで移動しると優子を抱きかかえようとし、優子は理音の行動に顔を赤くして慌てるが、理音は当たり前の事を聞くなと答える。

「そ、そうじゃないでしょ！？　何で抱きかかえようとするのよ？」

「何か問題でもあるのか？」

「問題ってわけじゃないけど……」

理音は優子が声をあげる理由がわからずに怪訝そうな表情をすると、優子は恥ずかしそうにうつむく。

「意味がわからん。良いから行くぞ。俺は他にもやる事があるんだ」

「良いわよ。1人で歩け……」

「人の話を聞かないからだ」

優子は1人で歩けると言い、立ち上がるが足には痛みが走り、理音はため息を吐くと優子を抱き上げ、全員が集まっているテーブルの前の椅子に優子を運んで行く。

「……雄二、私もお姫さまだっこ」

「翔子、お前はバカな事を言うな。俺はそんな恥ずかしい事は絶対にしない……しょ、翔子、止め、止めろぉぉぉ!!!?」

翔子は理音と優子の様子を見て、雄二にお姫さまだっこをねだるが雄二が拒否をすると、翔子は雄二にアイアンクローをかけ、

「怜生くんは見ちゃいけないのじゃ」

「?」

秀吉は目の前で行われている惨劇から怜生を遠ざけようとし、怜生は意味がわからずにきょとんとしている。

# 第９４問

「それで、前田、明久の召喚獣を使うと言うておったがどうするのじゃ？」

「召喚獣を使う？　って、そんな事できるわけがないでしょ」

昼食を食べていると理音が召喚獣を使うと言った事にまだ疑問があるようで秀吉が理音に聞くと秀吉の話を聞いて美波が首を傾げる。

「できないとどうして決めつける？」

「だってそうでしょ。文月学園の召喚システムは世界初だし、他で同じような事をしてるとこはないのよ。無理に決まっているでしょ」

理音は美波に向かい聞くと、美波は自分が知っている召喚システムの事を話すが、

「できないのはいくつか理由があるがな。１番の理由は召喚フィールドを展開及び維持をするのにエネルギーが不足するからだ。安定したエネルギーを供給するのは実は結構難しくてな。俺は専門外だが、学園はそこに力を入れてる召喚システムに隠れているがなかなかの技術だ」

「ん。それなら、規模を小さくすれば召喚フィールドを張れるのか？」

理音は問題点を理解しているようでニヤリと笑うと、雄二は理音の言葉から、理音が何をしようとしているか予想したようで質問する。

「あぁ。召喚フィールドを限定して縮小してやれば問題ない」

「でも、1番重要な召喚プログラムはどうするのよ？」

「あぁ。プログラムの配列自体はこの間、侵入した時に全部記憶してるから、問題ない。まぁ、まだどこが何に関係してるかはわからない部分もあるけどな」

「……記憶」

理音が雄二の質問に頷くが、優子は理音の言う事が信じられないようで疑問の声をあげるが、すでに理音は召喚システムを展開するのに必要なプログラムを保有しており、理音の桁外れの言葉に全員が引きつった笑みを浮かべる。

「でも、どうするんですか？　確かにプログラムがあったとしても実行するものは？」

「あぁ。簡単な事だ」

瑞希は理音が本当に召喚システムを再現できるのか疑問の声をあげると、理音は玩具で遊ぶ子供のように無邪気な笑みを浮かべ、

「！？」

優子はそんな理音の顔を直視して、理音から視線を逸らす。

# 第９４問（後書き）

どうも作者です。

まさかの召喚システムの複製です。

せっかくの世界初の技術だからの複製です。（爆笑）

いろいろと個人的な召喚システムの解釈を混ぜながら続いていきます。

怒らないでください。（苦笑）

# 第９５問

「……お前、楽しそうだな」

雄二は無邪気に笑う理音の姿に背中に冷たいものを感じながら言うと、

「あぁ。知的好奇心を満たすのは何よりも楽しいな」

「今さらじゃが、お主は変わっておるのぅ」

理音は笑顔で答えると秀吉はそんな理音の様子に苦笑いを浮かべる。

「それでさ。簡単って言うけど、どうやって召喚フィールドを張るのよ？」

「あぁ。一応、俺があっちから持って帰ってきたものに使えそうなものがあってな」

「使えそうなものって？」

美波は理音がどのような手段で召喚フィールドを張るのかまだ疑っているようで理音に聞くと理音は使えるものがあると言い、明久は理音の使うものが何か想像もつかないため首を傾げる。

「あぁ。今は動作させてないんだが、盗聴を防ぐために妨害電波を出す……」

「何でそんなもんを持ってるんだよ！？」

「一応は俺の研究は金になるからな。産業スパイやいろんな人間が盗聴しようとするんだ。最初は発見して外していたんだが、めんどくさくなってな」

理音が平然と常識から外れた事を話し始めると明久からツッコミが入るが、理音の表情は変わる事はない。

「それを使って召喚システムが起動する波長の電磁波を書庫に限定して出してやれば召喚フィールドは張れる。簡単だろ？」

「……何か、頭が痛くなってきたわ」

「そうか？　お前らでもわかるように簡単に説明したつもりたんだが、もっと詳しく説明した方が良いか？」

理音は楽しそうに言うが理音が言うほど簡単な事ではないため、優子は頭を押さえると、理音はきちんと説明すると言うと天井からホワイトボードが降りてくる。

「いや、良いからそれをしまってきれ。だいたい、説明されても誰も理解できん」

「そうか？　お前とアキは理解できるんじゃないか」

雄二は頭を押さえながら理音はなぜか明久と雄二なら理解できると言うと、

「……」

優子は理音の言葉が気に入らないようで眉間にしわを寄せる。

## 第９６問

「姉上、どうしたじゃ？」

「何でもないわよ」

秀吉は優子の様子に何かあったのかと聞くと優子は不機嫌そうな様子で何もないと言う。

「じゃが、何もないと言う顔じゃないのじゃ」

「大方、バカ２人が理解できると言われたのに、自分には理解できないと思われてるからムカついているんだろ」

秀吉は優子の様子に苦笑いを浮かべると、理音はつまらないと言った表情で優子の考えを言い当てる。

「確かにね。坂本はわかるけど、アキが理解できるって言われて、自分が理解できないと言われるとね」

「確かにのう」

美波は優子の気持ちもわかるようで苦笑いを浮かべると秀吉が頷く。

「別にお前らがアキに劣ると言うわけじゃない。と言うかアキよりバカな人間を俺は未だかつて見た事がない」

「確かにな。明久より、バカな人間は世の中にはいない」

「ちょっと、２人とも言い過ぎだよ！？」

理音と雄二は明久を底辺のバカだと言い切ると明久は声を荒げて文句を言うが、

「それならなんでよ」

優子が明久を無視して理音に聞く。

「バカは柔軟なんだよ。常識に捕らわれないから、ぶっ飛んだ話にも対応する事ができる。実際、ある分野でトップを取っている人間は少なからずおかしいしな」

「前に言ってた。ネジの５０本や６０本ってヤツか？」

「あぁ」

理音は優子の質問に彼なりのバカの評価をすると雄二はその話に以前、理音から聞いた話を思い出す。

「良く言う『バカと天才は紙一重』って言うけどな。そう言うところも確かにあるんだ」

「なるほどね」

「アキはそう言う意味で理解できると思った。雄二は頭の回転だけなら、この中で１番速いからいけると思った」

「おいおい。いくらなんでも、お前が話す桁違いに難しい話はわからんぞ」

理音は明久と雄二の名前を出した理由を簡単に言うと雄二はさすがに無理だとため息を吐くが、

「良い事を教えてやる。俺は科学者だからな。人にも物にも過大評価はしないようにしている」

「……理音、雄二の凄さをわかってる」

理音は本心から思っているようで、くすりと笑う雄二の事を誉められた事が嬉しいのか翔子は笑顔を見せる。

「お、おう」

「それじゃあ、俺はシステムの書き換えとか少しやることがあるから、お前らは準備ができるまでゆっくりしててくれ」

雄二は理音からの自分に向けられた評価に戸惑っているような返事をすると理音は立ち上がり、1人で部屋を出て行く。

## 第97問

（……ここをこうすると波長は安定するが場所指定は外れるか？
なら、こっちをこうすると……これだと波長が少し歪むな）

理音は装置を書庫に運ぶと1人で調整をしていると、

「これがその装置？」

「凄いもんじゃのぅ」

秀吉に肩を借りて優子が書庫に入ってくる。

「どうかしたのか？」

「別に、どんなものなのかな？　と思っただけよ」

「……姉上、どうしてケンカ腰なのじゃ？」

理音は2人の様子に聞き返すと優子は理音から視線を逸らすとそんな彼女の様子に秀吉はため息を吐くと、

「前田、ワシは明久達と怜生くんと遊んでおるのじゃ。姉上は目を放すと1人で動こうとするからのぅ。そばに置いておいて欲しいのじゃ。前田の話なら少しは聞くようなのでのぅ」

「ちょっと、秀吉！？」

秀吉なりに素直になれない姉と自分の恋愛には鈍感な理音を心配し

たのか気を利かせて居間に戻ってしまう。

「目を放すなと言われても、俺はやる事があるんだが……」

「別に、あたしの事なんて気にしないで良いわよ。あたし、居間に戻るわ」

理音の言葉に優子は居間に戻ろうとすると、

「まぁ、いるつもりなら手伝え。俺は本体をいじる。数値の入力は終わってるから、エラーがでたら教えろ」

「う、うん」

理音はそう言うと優子を抱きかかえて装置に繋いでいるパソコンの前に座らせる。

「変なものは触るなよ。壊したら弁償させるからな」

「えーとさ。ちなみにこれって、いくらくらいするの？　一般的なパソコンとやっぱり、桁が違うわよね？」

「当たり前だ。市販品と一緒にするな。仮に壊したら、一生、お前を俺の玩具として飼ってやる」

「一生……一緒にいられる？」

理音は優子がパソコンを壊した場合は優子に一生働いて返せと言う意味を込めるが、優子は彼女特有の妄想力を発揮する。

「……一生、働いても返せない額だと言う事だぞ」

「わ、わかってるわよ！？」

優子は理音と2人っきりになって嬉しいと思っていたが、理音のパソコンの値段が気が気でないようで何もラブな展開を起こせなかった。

# 第９７問（後書き）

皆さんのおかげでユニークが２５０００を超えました。
ありがとうございます。

楽しんでいただけるように頑張りますのでこれからもよろしくお願いします。

## 第９８問

「本当に大丈夫なんだよね？　変な副作用とかないよね」

「副作用に関してはわからん。データがないからな」

「ちょっと、そんなものをボクで実験しないでよ！？」

理音が装置の調整を終わらせたため、片付けの続きをするために明久に向かい言うと、明久は不安そうな表情で言うが理音は表情を変える事なく言い、明久は声をあげるが、

「何、人類の進化、科学の進歩に犠牲は付き物だ。お前の死は無駄にしない」

「ちょっと、それ、明らかにおかしいよね！？」

理音はうっとりとした表情で装置を眺めながら言うと明久は当然、声を上げる。

「木下姉、面倒だ。エンターキーを押せ」

「これ？　押したらどうなるの？」

「良いから押せ」

「わかったわよ」

理音は文句しか言わない明久の様子に面倒になったのかパソコンの

前に座っている優子に向かい言うと、彼女はため息を吐きながら、理音の指示に従いエンターキーを押す。

「ちょ、ちょっと、何をする気だよ!?」

「何、強制的に召喚獣を召喚するだけだ」

「ふざけるな!?」

明久が大声をあげるなか、床には召喚陣が現れ、『ポン』と小さな音を立てて明久の召喚獣が現れる。

「1体じゃ、効率も悪いな。試獣召喚（サモン）」

「リ、リオ!?」

「ちょっと、あんたまで、呼ぶ必要あるの?」

明久は何かおこるんじゃないかと不安げに自分の召喚獣を見るが特に何も起こる事はなく、理音は純粋に効率を考えて自分の召喚獣を呼び出すと理音のいきなりの行動に優子は驚きの声をあげる。

「前田、大丈夫なの?」

「何がだ?」

「それって、副作用とかわかんないのよね?」

理音が召喚獣を呼んだのを見て、書庫の外から様子を覗いていた美波が心配そうに聞くと、

「人類の進化、科学の進歩に犠牲は付き物だ。その時はその時だ。だいたい、俺は自分で作ったものは基本的に自分を最初の被検体にしている。それに今回は……」

理音はくだらない事を聞くなと言いたげに話している途中で、

「ちょっと、リオ、良い？」

「何だ？　アキ」

「良いからこい！！」

明久は理音の言葉に何か引っかかるものがあったようで理音の胸ぐらをつかむと明久は理音を引きずって書庫を出て行く。

「吉井くん？」

「ちょっと、アキ、どこに行くのよ？」

「姫路、島田、追いかけるな。翔子、がきんちょを押さえておけ」

「……わかった」

雄二は明久が何をするつもりか理解しているようで追いかけようとする瑞希と美波を止め、翔子には怜生を放さないように言う。

## 第９８問（後書き）

どうも作者です。

まさかの明久の激怒。

明久は何を怒っているのでしょうか？

次回からはバカテスにあるまじき『シリアス』でお送りします。（爆笑）

感想などをいただけると幸いです。

# 第９９問

「雄二、前田は……」

「秀吉の思った通りだろ。あいつもあいつが言っていた『壊れている人間の１人』だと言う事だ」

秀吉も雄二と同じように理音の言葉と明久の行動に何かを感じ取り、雄二の名前を呼ぶと雄二は彼の頭の中には最悪の結果が浮かんでいるようで苦虫を噛み潰したような表情をする。

「ちょっと、坂本も木下もどうしたのよ？」

「そうですよ」

「……瑞希、美波。ダメ。怜生くんがいるところで話す事じゃない」

瑞希と美波は雄二と秀吉に２人がいなくなった意味を聞くと翔子も２人が何を考えているのか理解しているようで、怜生の耳を塞いで首を振る。

「代表、前田に何かあるんですか？　秀吉も坂本くんも」

「姉上、じゃから、今、話す事ではないと言うておろうが」

「秀吉、話しなさい！！」

優子は足の痛みなど頭から消えているようで秀吉につかみかかると、

「……翔子、がきんちょを頼めるか？」

「……わかってる。怜生くん、居間でお姉ちゃんと遊ぼう」

「……」

雄二はこのままでは秀吉にも被害が及ぶと判断したようで翔子に怜生の相手をするように言うと、翔子は頷き、怜生を連れて行く。

「それで、どう言う事よ？」

「姉上、放して欲しいのじゃ。このままでは話す事もできんのじゃ」

「……」

優子は秀吉から手を放すと雄二と秀吉に視線が集まる。

「……それで、アキが怒ってたのはどうしてよ？」

「理音が自分を大切にしないからだろ。『人類の進化、科学の進歩に犠牲は付き物だ』、『自分で調合したものは基本的に自分を最初の被検体にしている』、後はこれは姫路と島田は知らない事だが……」

「……前田の留学先での専攻分野は薬学じゃ」

「……ウソ」

「あ、姉上！？」

美波の言葉に雄二は困ったように頭を掻きながら話し始め、秀吉が『理音の専攻分野』を話した時、優子にも明久、雄二、秀吉、翔子が考えた事がわかったようで床にへたり込み、秀吉は慌てて優子を抱きかかえる。

「あの、それって」

「あいつは今まで、多くの薬を作って多くの人間を助けている。当然、実験薬がほとんどだ。あいつの言葉を信じれば、あいつはそれを自分に投薬してデータを取っている。今は良いかも知れないけどな。時間が経ってから現れる副作用だって、新しい薬を作った時にすぐに出る副作用だってある。実際、あいつの身体の中はもうボロボロだって可能性だって否定できない。言い方は悪いが、あいつは今までは1人で生きていたからそれで良かったかも知れない。だけど、今は……」

「……怜生くんがいます」

「……そう言う事じゃ。もし、前田に何かあったら、怜生くんは本当に独りぼっちになってしまうのじゃ。明久はそれに気づいたから怒っていたのじゃ」

雄二と秀吉の言葉に優子、瑞希、美波の3人は顔を青くする。

## 第９９問（後書き）

どうも作者です。

シリアスは続きます。

バカテスにあるまじきシリアスを皆さんはどんな思いで読まれているんでしょうか？

原作からはだいぶずれてますが楽しんでいただけているのでしょうか？

一言でも感想をいただけると幸いです。

次回は理音と明久のシリアスタイムです。

怒らないでください。（苦笑）

# 第１００問

「アキ、どうしたんだ？」

「リオ、ふざけるなよ」

明久は理音を家の外まで引っ張り出すと理音の胸倉をつかむが、理音には明久が何に対して怒っているか理解できないため、冷静な目をして聞き返す。

「どうしたんだ？　じゃない。ボクは怒ってるんだ！！」

「そんなものは見ればわかる」

「わかってない！！」

熱くなっている明久とは対照的に理音の反応は冷たい。

「意味がわからん」

「わかれよ。お前、自分が何をしてたかわかっているのか？」

「もっとわかりやすく言え」

「自分を被検体にしてるって事だよ」

「……それの何がおかしい？　効果のわからないものを他人で試すわけにはいかないだろ」

明久の言葉を聞いても理音は明久が何に対して怒っているのかわからずに首を傾げている。

「リオ、お前は自分で薬の実験して失敗したらどうするんだよ？」

「最悪、死ぬな」

理音はやはり必要な何かが欠落しているようで自分の死に対して特別な感情があるようには見えない。

「リオがいなくなったら、怜生くんはどうなるんだよ！！」

「とりあえず、施設に入る事になるが、ちゃんと遺産は残してやれる。俺が死んだら俺の研究の権利やその他もろもろはすべて怜生に行くように……」

「そんな事じゃないだろ！！　おばさんも死んじゃって、リオまでいなくなったら、怜生くんは独りになっちゃうんだよ。どうして……だよ。何で、簡単にそんな事言うんだよ。ボクはイヤだ。おじさんの時みたいに誰かがいなくなるのはイヤなんだ。リオがいなくなった時だって、ボクがどれだけ悲しかったか」

明久は理音が死んでしまった時の事を勝手に想像しているようで涙を眼に溜めながら言う。

「……俺の存在を忘れていたくせによく言うな」

「そ、それは謝るよ。それでも、リオが帰ってきた後にボクだって思い出したんだから、あの時の事を……」

「そうか……」

「だからさ……」

理音は明久の言葉にやっと明久が何を怒っているか理解したようで頷くと、

「……アキ、俺はあの日から壊れているんだ。目の前でとうさんが死んだ日から、死と言うものに恐怖を感じた事がない。ただ、とうさんにまた会えるかも知れないとしか考えていない」

「お前、まだ言う気か！！」

理音は表情を変える事なく、死ぬ事は怖くないと言うと明久は理音の胸倉をつかみ直すが、

「落ち着け。話はまだ終わっていない……」

理音は苦笑いを浮かべて明久の手を自分の胸倉から放し、

「俺は『欠陥品』だ。それは誰よりも自分が理解している。壊れたものはいつだって誰にも必要とされないんだ」

「違う。リオは壊れてなんていない。少なくとも怜生くんやボクにはリオが必要だよ」

「お前が何と言おうとこの事実は変わらない」

理音は自分を欠陥品だと言い切り、明久はその言葉を否定しようと声をあげると、

「……だから、俺を直すのを手伝ってくれないか？」

「えっ！？」

理音の口から出た言葉に明久は意味がわからなかったようで驚きの声をあげる。

「……ホントはあの人が死んだと聞いた時、この街に戻ってくる気もなかった。怜生には生きるのに必要な金だけを送ってやれば良いと思ってたんだ。それでも、小さくなって泣くのを我慢していた怜生を見た時、守らないといけないと思った……違うな。怜生の姿があの時の自分と重なったんだ。俺は欠落しているから、それをあいつで埋めようとしたのかも知れない」

理音は表情を変える事なく淡々とした口調で言うと、明久は戸惑った表情で理音の話を聞いている。

「……ここに戻ってきて、お前と再会した後には『何かが埋まって行くような感覚』があるんだ。だから、頼めるか？」

「当たり前だろ」

「……頼む」

明久は理音の言葉に笑顔で答えると理音は笑顔を見せ、その笑みはいつもの彼の笑みとは違う優しい笑みである。

# 第１００問（後書き）

どうも、作者です。

シリアスはひとまず、ここで終了です。

欠陥品の理音は明久に助けを求めました。

今回の話が理音が文月学園にきた理由です。

壊れた自分の隙間を埋めるために幼なじみである明久に助けを求めた理音。

明久達と過ごすなかで理音は壊れた部分を直す事が出来るんでしょうか？

シリアスが続きましたが、皆さんの目にはどう映ったでしょう？

一言でも感想をいただけると幸いです。

# 第１０１問

「翔子、そこの赤い本を取ってくれ」

「……はい。雄二」

「坂本くんと翔子ちゃん、息がぴったりです」

「もう夫婦みたいよね」

「姫路、島田、おかしな事を言うな!!　おいっ!?　翔子、脚立を揺らすな!?　落ちるだろ!!」

理音と明久が書庫に戻ると足を怪我した優子は怜生の相手をし、他のメンバーは本の整理を始めている。

「それで、これは一体、どういう状況だ?」

「べ、別に良いでしょ。召喚獣を使わなくてもこれだけの人数がいれば終わるでしょ」

「そう言う事じゃ」

理音はなぜ、このような状況になったかわからないため、首を傾げると優子と秀吉は慌てながら言うが、

「召喚獣を使ったほうが速いだろ。せっかく、フィールドを展開できるようにしたんだ」

「だって、副作用とかあったら怖いじゃない？」

「それを言ったら、文月学園でも使えないだろ。基本的にシステム以外は場所指定しかしてないんだ」

理音が呆れたように言うと、美波は遠慮がちに聞き、理音はその言葉にため息を吐く。

「えっ！？　副作用ってないの？」

「当たり前だ。さっきも言っただろ。副作用……」

「怜生くん、ちょっと、耳を塞いでおいてくださいね」

「？」

明久が驚きの声をあげると理音はため息を吐きながら、何かを説明しようとすると瑞希は笑顔で怜生の耳を手で押さえる。

「……なんだ？」

「あんな、怜生くんに聞かせる話じゃないでしょ」

「あん？　別に構わないだろ。危険がないと判断してるものじゃないとアキにだって最初に使わせるわけないだろ」

「そ、そうなの？」

理音は瑞希の行動の意味がわからずに眉間にしわを寄せながら言うと、優子は理音に向かい言うが、理音は最初から副作用はないと判

断していたようでそう言うと明久は驚きの声をあげる。

「あぁ。だから、召喚しても問題なんて……ない」

「今の間は何よ!?」

「冗談だ」

優子は理音の説明に声をあげると理音はイタズラな笑みを浮かべて冗談だと言い、

「アキ、やるぞ」

「う、うん。でもさ」

「知ってるだろ。俺は約束は割と守る」

「そうだよね」

理音の言葉に明久は理音が嘘を吐いていないと判断したようで笑顔を見せると2人は召喚獣を呼び出す。

# 第１０２問

「やっぱり、召喚獣を使うと速いね」

「あぁ。腕力が違うからな」

理音と明久が召喚獣を使い始めると先ほどまでかかっていた時間が嘘のように作業が進んで行く。

「なぁ、理音。俺達の召喚獣も呼べないのか？」

「データの書き換えをしないといけないから、少し時間がかかるができるぞ。やってみたいのか？」

「いや、お前の召喚獣を見てると点数がそのままなのに物も破壊せずに使ってるだろ。まるで観察処分者の明久と同様に」

「それは観察処分者のデータをいじってるからな。フィードバックを排除もしてる」

「ちょっと、そんな事ができるの！？」

雄二は理音の召喚獣の異質さに理音に聞くと理音は平然と観察処分者のデメリットを排除していると言うと明久は声をあげる。

「俺は試験で召喚獣を使うわけでもないからな。必要ないだろ」

「確かにそうだな……なぁ、感覚の共有化はお前のプログラムでできるんだよな？」

理音は明久のフィードバックを解除する気はないと言うと雄二は何かを考えついたのか、理音に確認をする。

「あぁ。できる」

「そうか。それなら、それを使って召喚獣の扱い方を練習できるのか？」

「……なるほど、まぁ、結果から言えばできるが」

理音はそう言うとパソコンの前に移動し、キーボードをもの凄い勢いで叩き始めると床から魔法陣が現れ、理音の目の前に雄二の召喚獣が現れる。

「お、すげえな。俺の意志通り動くぞ」

「ホント？　前田、あんたってやっぱり凄いのね」

雄二と美波は感心したようで声をあげると、

「霧島」

「……何？」

理音はイタズラな笑みを浮かべると現れた雄二の召喚獣を持ち上げると翔子に軽く投げ、翔子は雄二の召喚獣を胸で受け止める。

「ぶはっ！？」

「ちゃんとなれないと本番に困るぞ」

雄二は召喚獣から伝わる翔子の胸の感触に意志を持って行かれそうになり、理音は雄二の様子に邪悪な笑みを浮かべると、

「島田、アキの召喚獣でも抱きかかえてみるか？」

「えっ！？」

理音は邪悪な笑みを浮かべたまま、明久の召喚獣を持ち上げる。

「リ、リオ！？　ちょっと待ってよ！？　美波に抱きつかれたって肋骨があだだだ！！！！　胸がないから肋骨が……」

「相変わらず、良い技のキレだ」

「……あんたはいったい何がやりたいのよ？」

明久は美波の貧相な胸では嬉しくないと言うと美波からは明久本体への制裁が与えられ、理音は2人の様子に邪悪な笑みを浮かべたまま言うと優子はため息を吐く。

# 第１０３問

「別にアキに少しだけやり返さないといけないと思ってな」

「……俺はとばっちりか？」

「良い感触だっただろ？」

「ぐっ！？」

理音は先ほどの明久とのやり取りがそれなりに悔しかったようで完全に復讐をする気であり、雄二は文句を言おうとするが、理音にかなうわけがない。

「変な意地を張らずに素直に嫁の胸を揉みたいと言えば良い」

「……雄二、私はいつでも大丈夫」

「バカな事を言うな！！　俺はお前の胸になんか興味はない！！」

「……それは許さない」

「止めろ。翔子！？　割れ、割れるぅぅぅっっ！！！？？？」

理音は雄二に向かい言うと雄二は翔子の胸には興味がないと全力で否定しようとするが翔子のお怒りを買う。

「……前田、あんたは何がしたいの？」

「……まったくなのじゃ」

「別に、俺なりに素直になれないあいつの背中を押してるつもりなんだがな」

優子と秀吉が理音の様子にため息を吐くなか、理音はくすりと笑う。

「瑞希、お前にはこれをやるから好きにしろ」

「……ありがとうございます」

「あだだだだ！！！？？？　な、何で？　腕が捻切れるように痛い！？」

明久と美波の様子に嫉妬の視線を向けている瑞希に殴りつけろと言いたげに手に持っていた明久の召喚獣を手渡し、瑞希は素直に理音から明久の召喚獣を受け取ると瑞希は明久の召喚獣の腕を力一杯捻る。

「お主、わかっておったが鬼畜じゃのぅ」

「いまさらだな」

秀吉は明久の悲鳴にため息を吐くと理音は楽しそうに笑うと、

「まぁ、あいつらは楽しんでるから、そのままにしてお茶にでもするか？　木下姉、行くぞ」

「ちょっと待って！？　それは良いから、あたしは秀吉に肩を貸して貰うから」

「そうか？　それなら、木下、任せるぞ。怜生、行くぞ」

「……」

「了解なのじゃ」

理音は居間におりてお茶にしようとしていたようで優子を抱きかかえようとすると、優子は顔を赤くして秀吉に連れて行って貰うと言い、理音はその言葉の真意を読み取る事なく怜生と一緒に先に居間におりて行き、

「姉上も素直に前田に運んで貰えば良かったのではないかのぅ？」

「秀吉、うるさいわよ！！」

秀吉は優子の様子にため息を吐きながらも優子と一緒に理音と怜生の後ろを追いかけて行く。

# 第１０４問

「ん？　怜生と木下はどうした？」

理音がコーヒーとクッキーが入った缶を持ってくると居間には怜生と秀吉の姿がない。

「えーと、怜生くんが他の絵本を取りに行くって言って、秀吉はついて行ったわ」

「そうか」

優子は理音の疑問に答えると先ほどの理音の話を聞いてから、初めて2人っきりになったせいか気まずいようで理音から視線を逸らすが理音は何も言わずに、優子の前にコーヒーを置く。

「……」

「……」

理音は何も言わずにコーヒーに口をつけると優子も理音の後を追いかけるようにコーヒーを飲む。

「……何か言いたい事があるのか？」

「べ、別に」

「嘘を言うな」

理音は優子の様子に何かあると思ったようで彼女に聞くと優子は何もないと言いたげだが、理音は優子の表情を見て嘘だと言い切る。

「……なんで、嘘だと言い切るのよ？」

「お前は学園では冷静を装おうとするが、表情に出る」

「なんでそんな事を言えるのよ？」

「見てればわかるだろ」

「わ、わかるんだ」

優子は理音の答えに図星を指されているが、意地を張っているようで理音に向かい言うと理音は当然の事を言うなと言い切り、理音の言葉に優子は恥ずかしくなったようで顔を赤くしてうつむく。

「それで、何が聞きたいんだ？」

「えーとさ……あんた、体って大丈夫なの？」

「どういう質問だ？　毒でも盛ったか？　悪いが俺の特技は毒無効だ」

「……あんたは何をわけのわからない事を言ってるのよ？」

優子は今までの実験で理音の体におかしな事はないのかと心配そうに聞くが、理音の答えはずれているため、優子は呆れたようなため息を吐くと、

「さっき、吉井くんがあんたを連れて行ったでしょ。それで、坂本くんが吉井くんが怒った理由を教えてくれたから……」

「あれか。別に体の不調はない。試験薬の投与と言っても、動物実験も終わらせてあるんだ。そんな危険なものはめったにない」

「そう……」

優子は理音の言葉に安心したようで笑顔を見せると、

「……優子と理音、良い雰囲気」

「そうですね」

「やっぱり、あの2人ってつきあってるのよね？」

「違うだろ。少なくとも理音には恋愛感情はなさそうだ」

「確かにのぅ……」

その様子を他のメンバーはしっかりと覗いている。

## 第１０４問（後書き）

どうも作者です。

サドの話ではありません。

宣伝です？

バカテスで新作を始めました。

『僕と歪んだ愛情表現？』と言う作品です。

興味がありましたら読んでみてください。

# 第１０５問

「アキ、お前、夕飯はどうする？」

「えっ！？　今日はリオが食べさせてくれるんだよね？」

「そのつもりだったんだが、召喚獣を使ったから予想以上に早く終わったからな」

全員がそろい居間でお茶を飲んでいると理音が明久に夕飯の事を聞く。

「ボクはリオが夕飯を食べさせてくれるって言ってたから、夕飯は何も用意してないんだよ」

「どうせ、お前の夕飯は塩と水だろ」

「失礼な。砂糖だってあるよ！！」

明久の言葉に雄二が呆れたように言うと明久は反論するが、周りからの視線は冷たい。

「いや、アキがいるのは一向に構わないんだ。夕飯はお前の好物のパエリアを作るつもりだったしな」

「ホント！？　パエリアなんて久しぶりだよ♪」

理音は問題は他のところにあると言うが、明久は理音の口からでた好物に興奮しているようで話を聞いてない。

「……落ち着け」

「な、何をするんだよ!!　リオ!!」

理音は浮かれている明久の頭に何の躊躇もなくチョップを喰らわせると明久は正気に戻る。

「お前がここにいると居座ろうとする奴が2人いるんだ。そうなるとなし崩しに全員が残るだろうから、完全に材料が足りない」

「確かにな。俺と翔子は昼の分しか買ってきてないしな」

「頷くなら、帰る準備を始めろ」

理音が明久に理由を言うと雄二は理音の考えている事を理解したようで頷くが、理音はそんな雄二の態度に冷静に突っ込みを入れる。

「雄二を帰すのは簡単だよ。霧島さん……」

「……わかった。やっぱり、吉井は良い人」

「おい。明久、お前は何を言った!?　翔子、待て!!　そ、それは何だ!?」

明久は翔子に何かを耳打ちすると翔子は頷き、雄二との距離を縮めて行く。

手には『首輪』を持って……

「これで、坂本夫妻は片付いたな」

「ちょっと待て!?　この状況を一言で片付けるな!?」

「良いだろ。だいたい、お前が素直に自分の気持ちと向き合えば霧島だって力づくの行動にはでないんだ」

理音は雄二と翔子の様子に眉１つ動かさずに言うと、雄二は理音に助けを求めるが、当然、見捨てられる。

「後の問題は木下姉か?」

「ワシが連れて帰るから問題はないのじゃ」

「そうよ」

理音はケガをしていり優子を見て言うと秀吉が連れて帰ると言うが、

「いや、俺がいうのもなんだが、ここは街の外れだしな。流石に遠いだろ」

「それならどうするの？　タクシーでも呼ぶ？」

理音はここから、秀吉が優子に肩を貸しながら帰るのは遠いと言うと、美波は首を傾げる。

「いや、俺がバイクで送る」

「バイク？」

「どうかしたか？」

「免許あるの？」

「あぁ。何かと便利だからな。お茶が飲み終わって落ち着いたら送るから、アキ、俺が帰ってくるまで怜生の事を頼めるか？」

「うん。大丈夫だよ」

「……」

理音の言葉に明久と怜生は頷くと、

「瑞希、島田。お前らも帰る準備を始めろ。あんまり遅くなるとお前らの両親が心配するしな」

「……はい」

「……わかってるわよ」

瑞希と美波に釘を刺すと2人はしぶしぶ頷く。

# 第１０６問

「おはよう」

「ん？　明久と理音は一緒の登校なのか？」

「あぁ。結局、アキはうちに泊まったんだ」

理音と明久が登校すると雄二が２人に声をかけ、理音は明久が家に泊まったと話す。

「それでか、昨日から飯を食ってるから血色が良いんだな」

「制服もしっかりとアイロンがけされておるしのぅ」

「制服はリオの予備を借りたんだけどさ。サイズは大きいのにベルトはこれ」

雄二と秀吉が明久の珍しくきちんとした格好を見て言うと、明久はベルトを見せると明久が締めているベルトはまだ締まる余裕がある。

「お前、飯をまともに食ってない明久より細いってどういう事だよ？」

「あん？　アキと一緒にするな。無駄なものはつけてないだけだ」

「ホントだよ。昨日、リオのお腹見たんだけど、しっかりと割れてるしさ」

明久は理音の身体を羨むように言うと、

「ウチにはアキの本心がわからない！！」

「吉井くん、前田くんと一晩をともにするなんて不潔です！！　そう言う事はもっと大人になってから行うべきです！！」

わけのわからない勘違いをした瑞希と美波が叫ぶ。

「……瑞希、島田、くだらない事を言うとお前らでも潰すぞ。俺の守備範囲は１６から２３歳の巨乳で、性別が『女』は必須事項だ」

「じょ、冗談に決まってるでしょ」

「それだと姫路はストライクゾーンだな」

「姉上は外れておるのぅ」

「……理音、サイズで差別するのは良くない」

理音は瑞希と美波の反応に背中に黒い殺気をまとうと瑞希と美波は慌てて自分の言葉を否定し、康太は理音の言葉に静かなる炎を燃やして反論する。

「康太、絶壁なら俺の手で育てるんだ。問題はない」

「……それなら納得」

「それで良いのか？」

「「当然」」

理音は平然と揉むと言い切ると雄二はため息を吐くが理音と康太の意見が変わるわけがない。

「……前田、あんたもウチの敵ね」

「だから、何度も言わせるな。俺は残念でも絶壁でも惚れた相手のなら全力で育てるのに協力するつもりだ。まぁ、本音を言えば瑞希のも島田のも揉みたい」

美波は胸の話になったせいか、理音を睨みつけるが理音は表情を変える事なく言い切る。

「あれ？　リオの守備範囲って……」

「明久、どうかしたのか？」

明久は理音のタイプを聞いて何か引っかかったようで首を傾げていると雄二は何か面白い事になると思ったようで明久に聞くと、

「思い出した!!　リオの初恋って……何でもない」

「何だ？　その面白そうな話は」

明久は理音の初恋の相手を思い出したようで「ポン」と手を叩くがそれは思い出してはいけない事だったようで直ぐに何もないと言うが雄二は昨日、理音と明久のせいで翔子に捕まっているせいか理音の弱みを手に入れるために首を突っ込もうとするが、

「別に年上で巨乳のアキの姉さんが初恋の相手なだけだ」

「あっさり、話しちゃうんですね」

当の本人の理音は明久と雄二の様子など気にする事なく事実だけを言うと瑞希は苦笑いを浮かべる。

「別に気にする事でもないだろ。お前らは会った事もないんだしな」

「それもそうじゃのぅ」

「いや、ボクは割と複雑なんだけど」

「……大丈夫だ。容姿は今もドストライクだが、あの人はない」

「そ、そうだよね」

「席に座れ。ＨＲを始めるぞ」

理音の言葉に明久が苦笑いを浮かべた時、西村教諭が教室に入ってくる。

# 第１０７問

「今日は何を食うかな？　明久、お前は昼飯はどうするんだ？」

「今日はリオがお弁当を作ってくれたんだよね♪」

昼休みになると雄二は立ち上がり、明久に昼飯をどうするかと聞くと明久は嬉しそうに言うが、

「吉井くん、わたし、吉井くんのためにお弁当を作ってきました。一緒に食べませんか？」

「アキ、お弁当作りすぎて余ってるんだけど、食べない？」

理音に敵意の視線を向けながら瑞希と美波が明久を捕まえる。

「え？　ちょっと、２人とも待ってよ。ボクにはリオのお弁当があるんだから」

「アキはウチや瑞希が作ったお弁当より、男の前田が作ったお弁当の方が良いの？　やっぱり、前田とそんな関係なの？」

「吉井くん、前田くん、不潔です！！」

明久は瑞希の弁当は命に関わり、美波の料理の実力は未知のため、理音の弁当に逃げようとするが瑞希と美波はずれた発言をする。

「……どうして、あいつらは俺とアキをそう言う関係にしたがるんだ？」

「……大丈夫。最近は理音と明久も売れ筋」

「康太。今の話はどういう事だ？」

「……急用を思い出した」

理音は瑞希と美波の反応に呆れたようでため息を吐くと康太が音もなく理音の隣に現れると理音にとって不吉でしかない言葉をつぶやき逃げるように教室を出て行く。

「……雄二、木下、俺はこの弁当をどうしたら良いと思う？」

「明久は弁当があるしな」

「と言うか、明久が弁当にありつけるかどうかが疑問じゃのう」

理音は康太の言葉の真意に気づくことなく、２人分の弁当箱を取り出しながら、雄二と秀吉に聞くと２人は覆面を被ったクラスメート達に追われはじめ、瑞希と美波の２人はその後を追いかけて行く。

「あまったな。雄二か木下、食うか？」

「いや、魅力的な誘いではあるんだが、俺はこれから全力で逃げないといけなくなった」

「……雄二、理音からお弁当を貰うなんて吉井だけじゃなく、理音も浮気相手？」

雄二は理音の言葉に何か背中に冷たいものがつたったようで断ると

背後に黒いものをまとった翔子が雄二の分のお弁当を持って教室の入り口に立っている。

「霧島、悪いが俺は男に興味はない。それに愛妻弁当が届いたようだしな。木下、お前はどうする？」

「ふむ。確かに前田の料理は美味いのじゃが、今日は演劇部の仲間と約束があるのでのぅ」

「そうか。なら、どうするかな？」

「……理音、あまってるなら、優子に持って行って」

理音があまった弁当をどうするか悩んでいると雄二にアイアンクローをかけながら、翔子が優子に持って行けと言う。

「木下姉にか？」

「……優子は今日は購買か学食と言っていたけど、まだ、足が痛いみたい。遅くなるとお昼が食べられない」

「そうじゃのう。前田、良ければ、姉上に持って行ってくれぬか？」

「そうだな。あいつのケガは俺のせいでも……いや、あれは木下姉が鈍くさいからだ」

「……理音」

「睨むな。行かないとは言ってない」

理音は秀吉と翔子の提案を受け入れ、弁当を持って教室を出て行く。

# 第１０８問

「ねぇ。優子、足が痛いならボクが優子の分も買ってこようか？」

「大丈夫よ。心配しないで……」

理音がＡクラスの教室の前まで歩くと優子と愛子が並んで購買に向かって歩いていると優子は足に痛みが走ったようでバランスを崩す。

「優子！？」

「やっぱり、もう少しボリュームが欲しいな」

「……前田くん？」

愛子は優子を受け止めようとするが間に合わず、優子が倒れそうになるが理音の手が伸ばされ優子を抱き止め、愛子は理音の登場に安心したようでため息を吐くが、

「あ、あんたはどこに手を回してるのよ！！？？」

理音は優子を抱き止めた時に狙ったように彼女の胸に腕を回しており、しっかりと優子の胸を揉んでいるため、優子は顔を真っ赤にして理音を怒鳴りつける。

「個人的にはもう少しと言うか、まだまだ物足りないな」

「前田くん、小さいのは小さいので良さがあるんだよ」

「確かに感度が良いとは聞くな」

しかし、理音は優子の様子など気にする様子もなく優子の胸の感想を言っていると愛子は自分も少し寂しい部類のため反論するように言う。

「確かな感度も重要だよね。でも、知ってる？　どこかの偉い人が『貧乳はステータス』だって言ってるし」

「まぁ、中途半端にあるよりはない方が燃える……違うな。草冠を使った字が適切だったか？」

「君って日本にいなかった割には日本のオタク文化に反感ないよね？」

「まぁ、あっちでも日本のマンガやアニメは高評価を得ていた日本が誇る文化と胸を張っても良いと思うぞ」

理音と愛子は世間話を始めるが理音の手が優子の胸から放れる事はなく、

「あ、あんたはいつまで、人の胸を揉んでるのよ！？」

優子から理音に向けて右ストレートが飛ぶが理音は当然、交わす。

「前田くん、優子の胸はどうだったの？　……間違えた。何かようがあったんじゃないの？」

「あぁ、サイズの割にはなかなか良かった……弁当があまったからな。霧島から木下姉はまだ動きずらそうだったと聞いてな。持って

きたんだ」

理音と愛子のセクハラトークは終わる事はなく、優子にお弁当を持ってきた事を言うと、

「そっか。それなら、邪魔しちゃ悪いから、ボクは1人で購買に行くね。優子、前田くんと仲良くやるんだよ」

「ちょっと、愛子!?」

愛子はニヤニヤと笑うと優子に耳打ちをして優子に捕まらないように走り出し、優子は愛子を引き留めようとするが彼女が振り返る事はなく、

「ほら、お前の教室で良いな」

「えっ!?　ちょ、ちょっと、だから、どうしていつもそう強引なのよ!?」

理音は優子に肩を貸すと当たり前のようにAクラスの教室に入って行き、優子は理音との事を見て教室のクラスメートから声が上がるため、耳まで真っ赤に染めるが理音が気にするわけがない。

# 第１０８問（後書き）

どうも、作者です。

理音と優子は皆さんにはどう映ってるんでしょうか？

優子がヒロインの小説は基本的に優子を怒らせて逆間接がセオリーなんですが、どうもセオリーからはみ出ます。

まぁ、他人と同じものを書いても仕方ないと思う反面、不安にもなります。

皆さんは理音も１度くらちは逆間接を喰らうべきだと思いますか？

（爆笑）

# 第１０９問

「……なんだ。口に合わないのか？」

「美味しいわよ。美味しいけどね……」

理音は優子に与えられているスペースに当然のように座ると弁当を広げ、２人で弁当を食べ始めると優子の様子に弁当が口に合わなかったと思い彼女に聞くが優子はいろいろと複雑なようである。

「なら、何だ？」

「あんたは気にならないの？　この状況を？」

理音は優子の答えに首を傾げると優子は周りから聞こえる２人の中を噂する声が気になっているようであり、原因を作った理音を軽く睨みつけるが理音との間を噂される事には悪い気はしてないようで顔を少し赤らめる。

「別に気にならんな。奇異の視線を受けるのはなれている」

「そうなんだ」

理音は優子との間を噂されている事に気づいていないようで興味がなさそうに言うと、優子は理音の反応が軽くショックなのか少し落ち込んだような返事をすると、

「そう言えば、あんた達って『清涼祭』はどうするの？」

「清涼祭？　なんだ、それは？」

「……呆れた。学園祭よ。そっちのクラスでは話にもあがってないの？」

意地っ張りな彼女は理音に自分の気持ちがバレないように話を変えるが、理音は学園祭の事を知らないようで首を傾げ、優子は理音の様子にため息を吐く。

「……そう言えば、朝のＨＲで担任が言っていたような気もするが」

「聞いてなかったのね」

「まぁ、そう言う事だな」

優子は理音の様子に呆れたように言った後、

「ねぇ。あのさ。清涼祭の行事で召喚大会って言うのがあるんだけどさ。トーナメントで２人１組で召喚戦争をして行くんだけどさ。一緒に出ない？」

顔を赤らめながら、理音を召喚大会に誘うが、

「たぶん、ムリだな。俺が出ると絶対に負けないし、出場許可がおりないだろ」

「それもそうよね」

理音は自分には出場資格がないと言うと優子は残念そうに頷く。

「何かあったのか？」

「別に、優勝賞品が『如月ハイランドのプレミアムチケット』だったから……あんたと一緒に行きたいなと思っただけよ」

理音は優子の様子に聞き返すと優子は理音に聞こえないくらいの小さな声で理音と一緒に行きたかったっ言う。

「如月ハイランドか？　行きたいのか？」

「プレオープンだとゆっくり遊べると思ったのよ。別にあんたと2人で行きたかったってわけじゃないわよ。あんたと出場すれば確実に取れるでしょ」

優子は慌てて理音と行きたいと言う事を否定すると、

「それなら行くか？　俺は怜生を連れて行く予定だったしな」

「ちょ、ちょっと待ちなさいよ。今、あたしはプレオープンって言ったのよ。チケットがないと入れないの」

理音は他意などなく優子を誘うが、優子はチケットがないと入れないと呆れたように言う。

「だから、チケットだろ。ペアチケットではないが、プレオープンの入場チケットなら持っている」

「……何でよ？」

理音は優子の様子に平然と言い切ると優子は顔をひきつらせる。

「ん？　いろいろとな。ジェットコースターとか絶叫系を作るのに安全対策とかいろいろと相談を受けてな。設計やらに協力したんだ」

「……あんた、専攻は薬学じゃなかったの？」

「大丈夫だ。速度以上の恐怖を保証しよう」

理音は優子の疑問に答えると優子は納得がいかなさそうな表情をするが、理音は楽しそうに笑っている。

「それで、どうする？　行きたいなら連れて行くが」

「良いの？」

「あぁ」

「それなら行く♪」

理音は無自覚だが優子をデートに誘うと優子は子連れデートではあるが嬉しそうに頷く。

# 第１０９問（後書き）

どうも、作者です。

ついに原作に合流する時がきました。（爆笑）

理音の過去はもう少し後でやろうと思いながらまさかの１００問越え。（苦笑）

原作のなかで理音はどう動くんでしょうか？

まぁ、相変わらず、召喚戦争はしない異色の主人公です。（爆笑）

# 第１１０問

（これが召喚大会の商品か？　チケットだけじゃないんだな……白銀の腕輪か？　……これは？）

理音は午後の授業が始まると優子から話を聞かされた召喚大会の賞品をのぞき込んでいる。

「この光景も見なれてきたわね」

「そうですね」

清涼祭の出し物を決めるＨＲの時間にも関わらず、教室には理音、瑞希、美波の３人しかいなく瑞希と美波は理音の様子に苦笑いを浮かべている。

「それで、美波ちゃん、『召喚大会』の事なんですけど」

「ウチは構わないけど、ホントにウチで良いの？　ウチより、前田に手伝って貰えば、簡単に決着がつくんじゃないの？」

「確かに前田くんがパートナーになってくれれば、簡単に優勝できるとは思いますけど……」

「俺は召喚大会には出れない。さっき、木下姉にも誘われてな。学園長もといくそばばあに確認もした」

瑞希は清涼祭のメインイベントでもある召喚大会に出場するつもりなのか美波にパートナーとして出場して欲しいと言うと、美波は当

然の疑問を口にし、瑞希は苦笑いを浮かべ、理音は表情を変える事なく言う。

「まぁ、確かにそうね。でも、何で、瑞希は召喚大会に出る気になったの？　ウチが言うのもなんだけど、瑞希ってそう言う目立つ事をするって印象がないのに」

「それは……」

「瑞希の身体を心配した家族が転校するように言われて、その考えを改めて貰いたいからだろ？」

「はい……」

「ちょっと、転校ってどう言う事よ！？」

美波の疑問に理音は表情を変える事なく言い切ると、その言葉は的を得ていたようで瑞希は小さく頷き、美波は声をあげる。

「そのままだろ。瑞希は体が弱いしな。こんなボロの施設じゃ体に悪いから、他のもっと環境が良い学校に転校させたいんだろ。後はバカばかりのクラスは瑞希には相応しくないとでも言われたか？」

「はい。お父さんはFクラスのみんなの事も知らないのにみんなをバカにしました。だから、召喚大会どお父さんを見返したいんです」

「……わかったわ。瑞希、ウチが協力するわ」

「ありがとうございます」

美波の返事を聞き、瑞希は笑顔を見せると、

「まぁ、頑張れ。転校しなくて良いように奥の手は考えておいてやるから」

「……前田、あんた、冷たくない？　瑞希が転校するかもしれないのよ」

「言っただろ。奥の手は考えておいてやる。最悪の時は瑞希が転校しないように両親の前で土下座でも何でもして説得してやる……それより、島田、お前の家にはパソコンはあるか？」

理音はパソコンのキーボードを叩きながら、あまり関係なさそうな態度で言うと美波は理音を睨みつけるが理音は気にする事なく、美波に向かい言う。

「あんた、それでも友達！！」

「……熱くなる前に答えろ」

「あるわよ。これで良いの？」

美波は理音を怒鳴りつけるが理音はため息を吐きながら言い、美波は理音を睨みつけたまま答えると、

「とりあえず、今日の分の宿題だ」

「これ、何よ？」

理音はパソコンからＵＳＢメモリーを取り外し、美波に渡すと彼女

は意味がわからずに首を傾げる。

「問題さえ読めれば、Ｂは難しくてもＣは狙えるんだよな？」

「それって、どう言う事？」

「学園長もといくそばばあに召喚大会前のお前の分の回復試験は俺がドイツ語に訳したものに変えると言ってくる。その代わり、早く日本語の読み書きをできるようになれ。それはそれができるための宿題だ」

理音はそう言うと立ち上がり、瑞希の頭をポンポンと優しく叩くと、

「お前らが負けても、俺がどうにかしてやる。だからと言って手を抜くなよ。瑞希の父親は召喚大会を見にくるんだろ。真剣にやらないと思いは伝わらないからな」

「はい。わかってます」

学園長室に向かい歩き出す。

# 第１１０問（後書き）

どうも、作者です。

ついに始まった原作沿い？

理音は瑞希の転校を防げるんでしょうか？（悪笑）

まぁ、表舞台では理音は動きませんが、まぁ、誘拐事件とかいろいろと理音の傷をえぐる事もありますからね。（悪笑）

# 第１１１問

「くそばばあ、いるか？」

「……あんたはもう少し年上を敬う事はできないのかい？　と言うか、授業はどうしたのさね？」

理音はノックをする事もなく、この学園の最高権力者もといくそばばあが生息する学園長室に入ると学園長の『藤堂　カヲル』はため息を吐く。

「授業はクラスメートがＨＲをボイコットして野球をしてるから、そろそろ、西村先生に捕まるところだろ」

「……さすが、Ｆクラスさね」

「あぁ、バカの集まりだ」

理音は表情を変える事なく言うと学園長はため息を吐くが理音は反論する気はない。

「それで、あまりにＦクラスは酷いと理解したからクラス替えを頼みにでもきたのかい？　残念だけど、Ｆが良いと言ったのはあんただ。今更、替える気はないよ」

「それに関しては問題ない。俺なりに楽しくやっている」

「そうかい」

学園長の言葉に理音はくすりと笑うと理音の以前とは異なる表情の変化に学園長は何か安心したように笑う。

「それ以外だと……さっきも言ったけど、あんたに召喚大会の出場資格はないよ」

「それじゃなくてな……」

理音は学園長に向かい『美波へのテストをドイツ語表記にする代わりに美波には日本語の勉強をさせる事』を伝えるが、

「却下だね。そんな事をしてもあたしには得はないしね」

学園長は理音の言葉を却下する。

「まぁ、タダで聞いてくれと言うつもりもなかったけどな」

「さすがだね。わかってるじゃないか」

理音は学園長の様子に何か条件が出てくるとわかっていたようでため息を吐くと学園長はニヤリと笑う。

「条件は白銀の腕輪の欠陥部分の修復か？」

「理解が早くて助かるよ」

「欠陥品だとわかっているなら、取り消せば良いだろ」

「こっちにもいろいろとあるんだよ」

理音は先ほど覗いていた召喚大会の賞品に欠陥を見つけていたようで、そう言うと学園長はため息を吐く。

「悪いな。さっき少しだけ覗かせて貰ったが、すぐに直るようなものじゃなかったぞ。修復プログラム自体は俺とあんたがいれば時間がかからずにできるだろうが、修復にかかる時間が絶対的に足りない。他の賞品に替える事を薦める」

「だから、そう言う訳にもいかないんだよ。あんたは口が堅いだろうし……」

学園長は真面目な表情になると教頭の『竹原』がいろいろと裏で動いて他の学園と繋がり、文月学園をつぶそうとしている事を告げる。

「……なるほど、それなら、俺に考えがある」

「どうする気だい？」

「修復には俺も全力を尽くすが、間に合わない事も考えて、保険を用意する。幸い、あいつらが動く要素もそろってるしな」

「保険？」

理音は学園長からの話を聞いてニヤリと笑うと学園長は表情をしかめる。

「簡単な事だ。腕輪の欠陥が起きる条件が点数なら、『低得点者で優勝を狙えるバカ２人』を召喚大会に引っ張りだせば良い」

「……Ｆクラスの坂本と吉井かい？」

「ん？　そっちも気づいていたようだな」

「あぁ。問題としてはどう引っ張りだすかだったんだけど、あんたに任せるよ」

「これで交渉成立だな。あいつらが来たら上手く載せてやってくれ。たぶん、教室の改修やらを頼みにくるはずだからな」

理音と学園長はお互いに何か考えがあるようでニヤリと笑う。

# 第１１２問

「……なんだ。これは？」

理音が教室に戻ると、黒板の前には明久と美波が立ち、清涼祭の出し物を決めている。

「前田。お帰り、悪いんだけど、あいつらを黙らせてくれる？」

「花火で良いか？」

「えぇ。火事にならない程度でお願い」

美波は理音を見るなり、一向にまとまらない話し合いを進めるために理音に向かい言うと理音は当たり前のように懐から大量の花火を取り出すと、

「「「すいませんでした。静かにします！？」」」

騒いでいたクラスメート達は理音の火力に恐怖を抱いているようで土下座をする。

「……写真館『秘密の覗き部屋』、ウェディング喫茶『人生の墓場』、中華喫茶『ヨーロピアン』？　……なんだ？　この案は？」

「提案されたそれでも使えそうなものよ。名前はアキが決めたの」

「ちなみに、この秘密の覗き部屋は裏があるのか？　アキ、なんなら、俺の秘蔵の写真をお前の好みの巨乳のポニーテールを中心に雄

二のタイプのロングヘアーの美人系や他にも各種取り揃えてあり、もちろん、『無修正』だ」

理音は清涼祭の出し物の案を眺めた後、懐に手を入れると、

「リオ、その写真、ボクにちょうだいーーダメだよ。さすがに学園の行事なんだから」

「なぜ、それを!?　俺にもくれーー明久、本音がだだ漏れだぞ」

「……」

「ムッツリーニ、お主、大丈夫か？」

明久と雄二は理音の言葉に食いつき、クラスメート達から歓声が上がるなか、康太は何かを想像したようで大量の鼻血を吹き出し、秀吉に抱きかかえられる。

「皆、清涼祭の出し物は決まったか？」

「今のところ、候補は黒板に書いてある３つです」

西村教諭が現状を確認しにきたようでドアを開けて美波の言葉で黒板を覗き込むと、

「……補習の時間を倍にした方が良いかも知れんな」

「倍で足りますか？」

「ちょっと、リオ。余計な事を言わないで!?」

額に青筋を浮かべながら補習を倍の時間にすると言うと理音は楽しそうに補習の時間をもっと増やそうとし、明久は理音を止めようと声をあげるなか、クラスメート達は補習の時間を増やされるわけにはいかないと全てを明久のせいにしようとするが、

「みっともないマネをするな。先生はバカな吉井を選んだ事自体を頭が悪い行動だと言っているんだ!!　前田、お前も悪のりしていないで真面目にできんのか。だいたい、お前がいたんだ。吉井を選ぶのを止められなかったのか!!」

「すいません。少し、学園長もといくそばばあのもとに行ってましたので、それに俺は悪い人選ではないと思いますけど」

西村教諭は生徒達を一喝すると理音に向かい言うが、理音は明久を選んだ事は間違ってないと言い、邪悪な笑みを浮かべる。

# 第113問

「……リオは誉めてくれてるみたいだけど、どうして誉められてる気がしないんだろう？」

「前田が何かを企んでいるように笑うのはいつもの事でしょ」

明久は理音が自分を誉めてくれた事に何か疑っているのか微妙な表情をすると、美波は気にする事でもないと言い切る。

「……前田、お前もこのバカ達と一緒に過ごすようになって、バカが移ったか？」

「知ってるだけですよ。確かに学力は皆無ですけど、こいつにはこいつの長所があります」

西村教諭は理音を心配するように言うが、理音はその心配を鼻で笑い、

「……まぁ、良い。しばらくすれば前田も勘違いに気づくだろ」

「鉄人、せっかく、リオがボクを誉めてくれてるんだよ。ここはもっと良い事を言うところだよね？」

西村教諭のため息混じりの言葉に明久は声をあげるが、

「あれって誉めてるのか？」

「半々じゃのう」

雄二と秀吉は理音は明久を誉めてはいないとため息を吐くと、

「何だとこらぁ！！　表で……なくて良いです。リオは悪くないです」

「……まぁ、今日は許してやる。それより、早いとこ決めるぞ。俺は学園長もといくそばばあから、仕事を頼まれたんだ。ここで遊んでる暇はない」

明久は理音に文句を言おうとするが、理音から向けられる銃口（花火）に怯み、土下座をすると理音は話を戻そうとする。

「そうだな。お前らもバカな事をやってないで、清涼祭の売り上げで設備を向上させるように努力しないか」

西村教諭は理音の言葉に頷くとクラス設備の向上のために努力しろと言うとクラスメート達はそこで初めて気づいたようで一気に教室が活気づく。

「……まとまらないわ。前田」

「わかった」

「「「すいませんでした。はしゃぎすぎました！！　命だけは助けてください！！！！」」」

活気づくを通り越して収集のつかなくなったクラスメート達を見て、美波が理音に向かい言うと理音は明久に向けていた銃口を大声をあげていた生徒の１人を躊躇なく撃ち抜くとクラスメート達はその場

で全力で土下座をして命乞いをする。

「島田、まとめろ」

「そうね。まとまらないし、このなかから選ぶからね」

「康太、瑞希と島田、木下のチャイナドレスの準備を」

「……すでにできている」

「……スリットは？」

「……当然、深め」

美波は３つの候補から決めると言うと理音は康太に中華喫茶の衣装を聞くと康太と理音の言葉で中華喫茶ヨーロピアンに票が集中する。

「……決まったけど、ウチは着ないわよ。瑞希も木下も嫌よね？」

「はい。やっぱり、恥ずかしいです」

「……それより、なぜ、ワシがチャイナドレスを着ないといけないのじゃ？」

美波は瑞希と秀吉に助けを求めるが、

「明久、お前、チャイナドレスは好きだよな？」

「大好ーー愛してる！！」

理音が明久に話を振ると明久の一言で瑞希と美波が頷き、３人のチャイナドレスが決定する。

「ワ、ワシは納得しておらんのじゃ！！」

秀吉だけは納得がいかなさそうであったが、この際、無視をしておく事とする。

# 第１１４問

「アキ、前田、ちょっと良い？」

「美波、どうかしたの？」

「俺は忙しい。さっきの話の続きなら、アキに相談にのって貰え」

帰りのＨＲが終わると美波が瑞希の転校を止めるために理音と明久を呼び止めるが理音は明久に美波を押し付けて教室を出る。

（……とりあえずは学園長室で良いんだよな）

理音は教室をでると学園長との約束を守るために学園長室に向かい歩きだすと、

「前田、どこに行くの？」

「ん？　木下姉か、学園長もといくそばばあに召喚システムのメンテナンスを手伝ってくれと言われてな」

「……あんた、学園長先生をくそばばあって言うのはどうなのよ」

優子が理音を見つけて声をかけてくると理音は『白銀の腕輪』の事はとりあえずは伏せて言うが、優子は理音の学園長の呼び方にため息を吐く。

「なら、妖怪ばばあ」

「……そうじゃなくて、学園長先生よ。敬語を使いなさいよ」

「知ってるか。敬語とは尊敬する相手に使う言葉使いだ。現状で言えば、俺があの妖怪ばばあに使う意味がない」

「……もう良いわ」

理音は敬語を使う必要性はないと言い切ると優子は呆れたようにため息を吐く。

「それで、何かようか？　俺は忙しいんだ」

「別に特に用があったわけじゃないけど……帰るなら、一緒にとか」

理音は優子が自分に声をかけてきた理由を聞くと優子は理音と一緒に帰りたかったようで少し残念そうな表情をする。

「何かあるなら、くるか？　そこで話を聞いてやる」

「ちょっと、学園長先生の用事でしょ。あたしが行って良いわけ？」

「別に問題ないだろ。お前が専門用語を理解して悪用するなら別だけどな」

「……そんな事はできないわよ。でもね。そう言う意味じゃないでしょ」

理音は優子の様子に何かあると思ったようで一緒にくるかと聞くと優子は常識的にありえないと言うが、理音は気にするわけがなく、優子はため息を吐く。

「なら、問題ないだろ」

「で、でもさ」

「ほら、行くぞ。足が痛いなら運んでやるがどうする？」

「は、運ばなくて良いわよ！？」

「ん？　そうか」

理音は優子をからかうように言うと優子は顔を赤くして慌てだし、
理音はそんな優子の様子を見て楽しそうに笑う。

# 第１１４問（後書き）

どうも、作者です。

理音は尊敬してない人間には敬語は使わないと言いましたが、良い子と良い大人は見極めてきちんと使ってください。

……理音って学園長には敬語使わないけど鉄人には敬語だ！？

尊敬してるのかな？（苦笑）

# 第115問

「学園長もといくそばばあ、きてやったぞ」

「ちょっと、前田!?　せめて、ノックくらいしなさいよ!?」

理音はノックもせずに学園長室のドアを開けると、一緒にいた優子は流石に慌てていると、

「……くそじゃり、せめて、ノックくらいはできんのかい?」

学園長から優子が理音に言った言葉が繰り返される。

「す、すいません。学園長先生、このバカにはあたしがしっかりと言い聞かせますので」

「……何をする?」

優子は学園長の言葉に慌てて、理音の頭を押さえつけて謝罪するが理音は意味がわからないと言いたげな表情をする。

「まぁ、そっちの生徒に免じて許そうじゃないか。……しかし、あたしはあんたに仕事を頼んだはずなのに、どうして、彼女を連れてくるんだい?」

「べ、べ、別にあたしはこいつの彼女じゃ!?」

「何をわけのわからん事を言っている。こいつが何か用事がありそうだったからな。連れてきただけだ」

学園長はため息を吐いた後、理音と優子の顔を交互に見てニヤニヤと笑うと、優子は慌てて否定するが、理音は表情を変える事なくくだらないと言い切り、

「それで、俺はどこで作業をすれば良いんだ？」

「あぁ。奥の部屋に準備してあるから、よろしく頼むよ。あたしももう少ししたら、行くから」

「あぁ。木下姉、行くぞ」

学園長に向かい聞くと学園長は奥にある部屋を指差し、理音は優子に言うと、

「待ちな。そっちの……」

「あっ！？　２－Ａクラスの木下優子です」

学園長は優子を呼び止め、優子は学園長に自分の名前を名のる。

「そうかい。あんたがあの木下かい。くそじゃり、少しの間、あんたの彼女を借りるよ」

「か、彼女！？」

「……だから、わけのわからん事を言うな」

学園長は優子に興味が湧いたようで彼女を引き止めると優子は顔を赤くするが、理音は意味がわからないと言いながら、奥の部屋に入

って行く。

# 第116問

「あの、学園長先生」

「悪いね。少し、あのくそじゃりの事で聞きたい事があってね」

優子は学園長に呼び止められた理由がわからずに緊張した面持ちでいると、学園長は肩の力を抜けと言いたげに少し柔らかく笑う。

「聞きたい事と言われましても、あたしも前田と会ってまだ1週間くらいしか……」

「そう言われればそうさね。それなのにもう女の子を騙して、まったく、親子そろって手が早い」

優子は苦笑いを浮かべると学園長は理音の父親の事を知っているようでため息を吐く。

「あ、あの。学園長先生は前田のご両親の事を知っているんですか？」

「……まぁね。昔、少しだけ、大学で教鞭をふるっていた時期があってね。あいつの父親はその時の教え子だよ。バカみたいに明るくてね。人懐っこい笑顔が印象的だったね」

優子は学園長の言葉に聞き返すと学園長は昔を懐かしむように言う。

「そうなんですか？」

「あぁ。なぜか、あいつの父親には懐かれてね。あのくそじゃりが小さい頃にも会ってるんだけどね。まぁ、あのくそじゃりは覚えていないだろうけどね」

「そうなんですか……あの、前田のおとうさんが亡くなったのは」

「……流石に聞いてはないんだね」

優子は学園長に理音の父親が亡くなった時の事を聞こうとすると学園長の顔は小さく歪む。

「……はい。あたしは前田と同じクラスの弟から、又聞きで聞いているだけで詳しい話は何も」

「そいかい……それなら、あたしの言う事じゃないね」

「そ、そうですよね」

学園長は優子の顔をじっと見た後、言えないと首を振ると優子は納得はいかないが頷かないわけにはいかなく、

「まぁ、あんたがあのくそじゃりの特別になればすぐに聞ける事だよ」

「べ、別にあたしは！？」

「なんだい？　本当に違うのかい？」

「……違うとは」

「はっきりとしな！！」

「特別になりたいです！？」

「最初からそう言いなよ。まぁ、頑張りな」

優子の様子を見て、学園長は優しげな笑みを浮かべると優子は慌てて返事をすると、

「それじゃあ、奥にでも行こうか？」

「あ、あの、あたしが行っても本当に良いんですか？」

「まぁ、どうにかなるさね」

優子は当然の疑問を口にすると学園長は苦笑いを浮かべる。

## 第１１６問（後書き）

どうも、作者です。

つながりがあった理音の父親と学園長。

学園長は理音の過去を知っている１人です。

理音以外に理音の過去を詳しく知っている人間は明久、学園長となります。瑞希はこの２人ほど詳しくないんですよ。（悪笑）

# 第117問

「……ねぇ。あんたの専攻分野って薬学なのよね？」

「あぁ、どうかしたか？」

優子は理音と学園長の間で交わされる専門用語を聞いて、自分の専攻分野ではないはずの理音が学園長と対等に会話をし、プログラムを組んでいる事に若干、引き気味に聞く。

「……どうして、当たり前のように何でもできるのよ」

「別に何でもできるわけじゃない。専攻は薬学でもデータの管理とかでいろいろとプログラムは使うんだ。必要性があるから、やってるだけだ。後は召喚システムを解析したデータからの応用だ。木下姉、画面に変化はあるか？」

優子は目の前にいる同じ年の男の子である理音が当たり前のように専門家の学園長とともに行っている作業がどれだけ難しいかだけはわかるようでため息を吐くが、理音は興味なさそうに言うと優子の前にある画面の変化を聞く。

「別に変わり映えしないわよ。……ねぇ、今更だけど、前田は何を手伝ってるの？」

「言ってなかったか。召喚大会の賞品の白銀の腕輪にある欠陥の修理だ」

「白銀の腕輪の欠陥？　……ちょ、ちょ、ちょっと、いきなり何を

ふざけた事を言ってるのよ。学園長先生、冗談ですよね！？」

優子は理音と学園長が何をしているかを理音に聞くと、理音は隠す必要性などないと思っているのか表情を変える事なく、事実のみを言うと優子は驚きの声を上げ、学園長は理音の様子に頭を押さえる。

「……くそじゃり、一般生徒に教えるんじゃないよ」

「ん？　まずかったか？　こいつは召喚大会に出ないし、言ってまわるような人間でもないし、問題ないだろ」

学園長はため息を吐くが、理音は優子は召喚大会に出場しないと思っているため、気にする事なく言うが、

「あたし、召喚大会に出るわよ」

「何？」

「あの後、代表に誘われたのよ。それより、欠陥ってどういう事よ？」

優子は翔子に誘われて召喚大会に出場すると言うと理音につかみかかるように聞く。

「まぁ、気にするな。装備した人間の総合得点が平均以上だと暴走して爆発するくらいだ。計算値だが、爆発の規模も小規模だ。死ぬ事はない」

「気にするわよ！！　学園長、そんな危ないものは即刻、賞品から外してください！！」

「……残念だけど、こっちにも都合があってね。そう言うわけにもいかないのさ。あまり公にもできないしね。それで、このくそじゃりに手伝ってもらってるんだよ」

理音は暴走など些細な事だと言い切ると、優子は学園長に白銀の腕輪を賞品から外せと言うが学園長はため息を吐くと首を横に振る。

# 第１１７問（後書き）

どうも、作者です。

清涼祭に入りましたが、理音の性質上、原作から外れます。（苦笑）

白銀の腕輪の欠陥を優子にバラしました。この事で優子は召喚大会をどうするのか？

どうなるんでしょうか？（苦笑）

# 第118問

「どうしてですか！？」

「まぁ、簡単に言えば、金に汚い大人の足の引っ張り合いだ」

「その通りなんだけど、あんたに言われるとずいぶんと安っぽくなるねぇ」

優子は学園長の言葉に当然、考えを改めて貰おうとわけを聞くと理音は作業の手を緩める事なく言い、学園長は理音の言葉にため息を吐く。

「足の引っ張り合い？」

「木下姉、お前がこの学園を選んだわけはなんだ？　くそばばあの前でも遠慮はいらない。正直に言え」

「えーと、学費が安いからかな？　あたしんちは秀吉もいるし、あいつはたぶん、演劇の専門学校に行きたがるだろうし、あたしも大学には行きたいから、２人で受験になるとお父さんとお母さんも大変だし」

理音の言葉に優子は学園長の前で言いにくそうに言う。

「ここは試験校だ。『試験召喚システム』と言う特殊なカリキュラムのおかげでスポンサーも付いている。その分、学費が安い。と言う事は」

「あたしみたいに考える人間は文月学園を受験する？」

「あぁ、うちの受験生が増えると周りの私立高校は？」

「生徒が集まりにくくなる？　それがどうして召喚大会に繋がるのよ？」

理音は優子に状況を話して行くが優子はまだ話が繋がっていないようである。

「察しの悪いヤツだな。白銀の腕輪はすでに新技術としてスポンサーに発表されてるから、取り下げるわけにはいかない。取り下げても爆発してもスポンサーは離れるだろうな」

「えーと、ひょっとして、最悪、文月学園が潰れちゃうとか？」

「まぁ、そこまではいかないけどね。評判が下がってスポンサーが減れば、規模の縮小や学費の引き上げ、召喚システムが取り上げられる可能性もあるね」

理音は優子の様子に呆れたような表情で説明を続けると学園長は今の状況を改めて優子に説明する。

「俺も寄付金も出してるしな。それにこのシステムは使いようによっては戦争と言ったくだらないものにも使われるからな。他のバカに渡すわけにはいかないんだよ」

「そんな事を言ったって、修復が終わらなかったらどうするのよ？」

「いるだろ。優勝が狙えそうなバカ２人が」

「優勝が狙えそうなバカ2人？　……吉井くんと坂本くん？」

理音は何か企んでいるようで邪悪な笑みを浮かべながら言うと、優子は理音が誰の事を言ってるかはすぐに思いついたようだが、あの2人に学園の未来を託すのは不安なようで引きつった笑みを浮かべる。

# 第119問

「だけど、あの2人が出るとは限らないじゃない？」

「出る。間違いなくな」

優子は明久と雄二が召喚大会に出場しなかった場合はどうするかと聞くと理音はくだらない事を言うなと言う。

「なんで言い切れるのよ？」

「1つはお前が言っていた副賞の如月ハイランドのペアチケット。雄二は霧島に優勝させるわけにはいかないから、後は俺はアキの考える事が何となくわかるからな」

「何となく、わかるね……」

優子は理音につかみかかるように言うと理音は明久の行動などわかると楽しそうな笑みを浮かべ、優子は理音と明久の間にある信頼に少し妬けたようで複雑な表情をした時、学園長の机の上にある内線電話が鳴る。

「悪いね。タヌキからの電話だ。少し黙っててくれるかい？」

「あぁ」

学園長は内線電話に表示されている番号を見てため息を吐くと、

「……そうかい。わかったよ。……悪いね。少し、タヌキと化かし

合いをしてくるよ」

「妖怪とタヌキの化かし合いか？　妖怪がタヌキに負けるわけにはいかないぞ」

内線電話を切り、部屋から出て行こうとする学園長に理音は茶々を入れる。

「黙りな。くそじゃり、あたしはあたしで仕事をやってくるから、あたしがいないからって、彼女といちゃついて作業を遅らせるんじゃないよ」

「……だから、意味のわからん事を言うな」

「……2人っきり？」

学園長は理音の言葉に言い返すが、相変わらずの鈍さを発揮している理音とは対照的に優子は学園長の前で理音が好きと認めたせいが顔を真っ赤に染める。

「くそじゃり、頭が良いだけじゃ、ダメだね。あんたはもっといろんなものを学びな」

「……意味がわからん」

「あ、あんたはわからなくて良いのよ！？　良いから、作業を進めなさい」

学園長は理音と優子の顔を見比べてため息を吐いた後、部屋を出て行き、理音は首を傾げるなか、優子は慌てて理音に言う。

「……そうだな。そう言えば、木下姉」

「な、な、何!?」

理音は学園長が部屋から出て行くのを見送った後、優子に声をかけると彼女は先ほどの学園長の言葉もあるせいか声を裏返す。

「……お前は何を想像してるんだ？　俺はお前みたいな腐女子の考える事は良くわからんが、変な妄想をしてるから、男が寄り付かないんじゃないのか？」

「違うわよ!?　確かにそれは好きだけど、二次元は二次元（それはそれ）、三次元は三次元（これはこれ）よ。あたしは普通に男の子が……って、違うわ!?　あんたは何を言わせるのよ」

理音は優子の様子に表情を変える事なく言うと、優子は理音には変な勘違いはしてほしくないと言おうとするが、変な意地を張る。

# 第１２０問

「別に俺は何も言わせていない。それで、何か用事があったんだろ？　ばばあが戻ってくる前に言え」

「別にこれと言ったような用はないわよ」

「……何度も同じ事を言わせるが。お前は嘘を吐こうとすると顔に出る。俺はヒマじゃないんだ。早く言え」

理音は優子の様子に聞くと優子は何もないとは口では言うが、理音には優子が何かを隠している事はわかると言うと優子は顔を赤らめる。

「う、うん。別にそんなたいした事じゃなかったのよ。ただ、一緒に帰りたいなぁ……って」

「一緒に帰る？　別にかまわないが、俺はまだ時間がかかるぞ。今日中に修復プログラムを完成させないと計算上ギリギリだしな」

「それって、今日は帰れないかも知れないって事？」

「かもな」

優子は理音から視線を逸らしながら一緒に帰りたいと言うと、理音は優子が一緒に帰りたいと言った意味など考える事なく頷くが今日、帰れるかはわからないと言う。

「そうなんだ……あれ？　それなら、怜生くんはどうするの？　そ

んな時間まで預かってもらえないでしょ？」

「あぁ。それなら問題ない。ばばあに話したら、職員の誰かを怜生の迎えに行かせてくれるって事だ。それで終わるまで職員室で預かってくれるそうだ」

「だけどさ。怜生くん、人見知りするでしょ？　先生達に任せておいて大丈夫？」

優子は理音から先生達が怜生を預かってくれると聞いて怜生を心配するような表情をする。

「……確かにな。まぁ、ダメなら、ここに連れてこいば良い」

「でもさ。あんた、怜生くんの相手できないでしょ。怜生くん、きっとさびしいわよ……ねぇ、前田」

「何だ？」

理音は優子の言葉に少し困ったように笑うと優子は何かを思いついたようで理音の名前を呼ぶ。

「怜生くん、あたしが預かろうか？　家なら秀吉もいるし、おとうさんもおかあさんもいるし」

「それは確かに助かるが……迷惑だろ？」

「大丈夫よ。今日、帰れなくても家に泊めれるしね」

「……悪いな。ん？　そうだ。何かあったら携帯に連絡をくれ。木

下は知ってるが念のため」

「うん。それじゃあ、あたしも」

理音は優子の提案をありがたく受けると優子と携帯電話の番号とメールアドレスを交換する。

## 第121問

「なるほどな。姫路の転校か？　……そうなると喫茶店の成功だけでは不十分だな」

「不十分？」

「坂本もそう思うんだ？　前田と同じ意見なのね」

明久は瑞希の転校を阻止するために雄二に協力を頼むと話を聞いた雄二は考え込む。

「ん？　そう言えば、理音はどうしたんだ？」

「やる事があるって、あいつにも瑞希の転校の事を話したんだけど、冷たいわよね」

雄二は理音がいない事を美波に聞くと美波は理音が何をしているか知らないため、不機嫌そうに言うが、

「美波、リオはリオで姫路さんのために何かしてるよ」

「何で、アキはそんな事を言えるのよ？」

明久は苦笑いを浮かべながら、理音には理音なりの考えがあると言うが、美夏は納得いかなさそうである。

「何でって言われると、リオだからかな？」

「いや、意味がわかんないわよ」

「まぁ、島田も落ち着け。島田、理音は姫路の転校で何か言ってたか？」

「えーと、確か、設備と瑞希の健康とクラスメートに問題あるって、それをどうにかしろって」

明久は理音とは言い方は違うが理音は必ず瑞希のために動いていると言うが、美波は明久の言葉にため息を吐くと雄二は苦笑いを浮かべながら、美波に理音の考えを聞く。

「……俺も同じ考えだな」

「参ったね。問題だらけだ」

「そうじゃな。１つ目だけなら、ともかく、残りの２つは難しいのぅ」

雄二は美波の言葉に頷くと明久と秀吉は何をしたら良いかわからずに首を傾げる。

「まぁ、３つ目は姫路と島田が対策を立ててるだろ。それに最悪、理音が姫路の父親に会えば決着がつく」

「何で、リオを？」

「明久、少しは考えろよ。あいつは世界が認める天才だぞ。それがＦクラスにいるって知れば、クラスメートの件は納得してくれる可能性が高い」

「……なるほど、それが前田の言っていた事ね」

雄二は理音がでていけば問題は1つ片づくと言うと美波は理音の言葉の意味を理解する。

「まぁ、あくまで最終手段だろうな。裏技っぽいし、それで姫路の父親が納得しなければ終わりだ。後は1つ目は喫茶店の売上でどうにかなるだろ」

「2つ目は？」

「まぁ、学園長に直訴だろうな。まがりなりにも教育機関だし、何かしらしてくれるだろ。明久、学園長のところに行くぞ」

「そうだね」

雄二は学園長に直訴しに行くと明久は頷き、2人で学園長室に向かおうとすると、

「もうすぐ、下校時間だぞ。そろそろ帰らんか」

「……」

怜生と手を繋いだ西村教諭が見回りにきたようで明久達を見つけて言う。

「鉄人、貴様、怜生くんをどうするつもりだ！！」

「鉄人、がきんちょを人質にしてあいつを脅迫するつもりだな。が

きんちょ。そのゴリラから逃げるんだ!!」

「……吉井、坂本、お前らは何をふざけた事を言っているんだ?」

明久と雄二は怜生の姿を確認するなり、西村教諭を悪人にし、西村教諭はその言葉に青筋を浮かべる。

「明久、逃げるぞ」

「うん」

「待たんか!!　吉井、坂本!!　木下、島田、前田の弟を頼むぞ」

明久と雄二は西村教諭の様子に全力で逃げ出し、西村教諭は秀吉と美波に怜生を預けると2人を追いかけて行く。

「……あ奴らはなぜ、鉄人にケンカを売るのじゃ?」

「知らないわよ。怜生くん、前田は?」

「……学園長先生のお手伝いをしてます」

「そうなの?　少しウチらとここで待ってようか?」

秀吉と美波の言葉に怜生は頷く。

# 第122問

「くそじゃり、進んでるかい？」

「……」

学園長は話し合いを終わらせたようで部屋に戻ってくると理音に声をかけるが、理音は集中しているようでぶつぶつと呟きながら、もの凄い勢いでパソコンのキーボードを叩いている。

「学園長先生、お話は終わったんですか？」

「あぁ、それ以外にもこのじゃりが言った通り、Fクラスのバカ2人がきたよ」

優子は学園長に聞くと理音が予想した通りに事が進んでいると苦笑いを浮かべる。

「そうですか……」

「心配かい？」

「えぇ。それはまぁ……」

優子は学園の命運が明久と雄二にかかっている事が心配のようで表情を曇らせると、

「心配するんじゃないよ。最悪の展開にならないようにしてるんだからね。あんたは参加者なんだ。あの2人が優勝できるように頼む

よ」

「まぁ、対戦しだいではそうしますけど……代表が納得してくれるかが」

学園長は優子の心配を笑い飛ばすが、優子の表情は晴れない。

「あんまり難しく考えるんじゃないよ。難しい事はあんたの彼氏がやってくれるからさ。せっかくの頭脳なんだ。使わないともったいないさね」

「そうですね。きっと、前田ならどうにかしてくれると思います」

学園長は理音と自分でどうにかするから、理音を信じるように言うと優子は笑顔を見せる。

「その代わり、後でちゃんとねぎらってやりなよ。教育者って立場からあまり煽るわけにはいかないけどね。キスの１つでもしてやったらどうだい？」

「キ、キスですか！？　あ、あたしと前田にはまだ早いですよ！？だいたい、まだ、つきあってるわけでもないですし」

学園長は優子をからかうと優子は顔を真っ赤にして慌てた時、

「……ばばあ、木下姉、うるさいぞ」

「あ！？　ご、ごめん」

理音は携帯電話を取り出しながら、２人に言うと優子は理音が先ほ

どの話を聞いていたかわからないため、慌てて返事をし、学園長はそんな優子の様子を見て楽しそうに笑っている。

「……あぁ。悪いな。お前の姉には伝えてあるから、悪いがよろしく頼む。怜生、悪いな。後で迎えに行くから、木下の家族の言う事を聞くんだぞ」

「……はい」

理音の電話の相手は秀吉のようで理音は秀吉に怜生の事を頼み、電話を切ると、

「怜生くん、秀吉と一緒なの？」

「あぁ。西村先生が預けて行ったらしい。木下が校門で待ってるそうだ。悪いが頼む」

「えぇ、迎えにくる前に連絡してよ。あたし、行くから、学園長先生、失礼します」

「あぁ。またね」

優子はここにいると学園長にからかわれるため、頭を下げた後、秀吉と怜生が待っている校門まで急ぐ。

# 第123問

「姉上、前田がくるからだとはわかるのじゃが、そんなに気合いを入れる必要はないと思うのじゃ」

「秀吉、何を言ってるの？　あたしはいつも家にいる時はこんな格好でしょ」

優子と秀吉は怜生を連れて家に帰ると優子は理音が怜生を迎えにくる時の事を考えているようでキチンとした格好で怜生の相手をしているため、優子の本性を知っている秀吉はため息を吐くが、優子は怜生の前で秀吉に関節技をかけるわけにもいかずに秀吉を睨みつける。

「……だいたい、前田は姉上がどんな格好をしておっても気にしないのじゃ。無理をしても、どうせ、ぼろが出て前田にはばれるのじゃ。のう。怜生くん」

「……お兄ちゃんはお姉ちゃんがどんな格好をしていてもお姉ちゃんが好きだと思います」

秀吉は理音は服装など気にするはずがないと言い、理音の前では普段、人前どは見せないぼろを出す優子を見ているためかため息を吐き、怜生に同意を求めると怜生は優子と秀吉の顔を交互に見た後、怜生は理音が優子の事を好きだと思っているようで思った通り言うと、

「そ、そうかな？」

「……はい」

優子は怜生の言葉に照れたように顔を赤くして怜生に聞き返すと怜生は頷く。

「怜生くんは前田が姉上を好いておると思うのじゃな？」

「……お姉ちゃんはお兄ちゃんの恋人じゃないんですか？」

「えーと、違うよ。そうなりたいけど」

秀吉は理音が怜生に優子の事をなんと話しているか気になったようで聞くと怜生は2人は付き合っていると思っていたようで素直に言うと優子は怜生に嘘を言うわけにもいかず、素直な自分の気持ちを言う。

「そうなんですか？　……残念です」

「怜生くん？」

怜生は優子が理音とは付き合っていないと知ると悲しそうな表情をし、優子は怜生の顔を心配そうにのぞき込む。

「怜生くんは姉上と前田が恋人になるのは賛成なのじゃな？」

「……はい。お兄ちゃんはお姉ちゃんといると笑ってくれます。僕はお兄ちゃんを困らせる事しかできないから」

秀吉は怜生の様子に心配そうに聞くと、怜生は自分は理音の足手まといだと思っているようで涙目で言う。

# 第１２４問

「……怜生くん」

「……」

優子は涙目の怜生を優しく抱きしめると怜生は優子の腕の中で小さな声で泣き始める。

「怜生くんは前田を困らせてなんかいないわ」

「そうなのじゃ。怜生くんの思い過ごしなのじゃ」

「……僕がいなければ、お兄ちゃんは大好きな研究を続けられたんです。お兄ちゃんが僕と一緒に暮らすと言った時、みんなが反対してました」

優子と秀吉は怜生の考えが間違っていると言うが、怜生は理音が日本に戻ると言った時に理音が所属していた研究所の人間に陰口を叩かれていたようでそれを思い出しているのか泣き止む事はない。

「ねえ。怜生くん、怜生くんは前田の事、好き？」

「好きです。初めて会った時は怖かったです。でも、おかあさんが言ってた通り、お兄ちゃんは優しかったです」

「なら、前田にいなくなって欲しい？　怜生くんを置いて前田に戻って欲しい？」

「嫌です……お兄ちゃんと一緒にいたいです」

優子は怜生の様子に何を言ったら良いかわからないようだが、優しい声で怜生に理音と離れる事になった時の事を聞くと怜生はその時の事を思い浮かべたようで、怜生の目から溢れる涙は更に量を増して行く。

「……怜生くん、聞いて欲しいのじゃ。前田は怜生くんを嫌ってなどおらぬし、怜生くんが邪魔だとも思っておらぬ。ワシは前田から、直接、聞いたから間違いないのじゃ。ただ、前田はおかしなところで不器用じゃからのぅ。怜生くんとどう接して良いのかわからんのじゃ」

秀吉は怜生の頭を撫でると秀吉が怜生と初めて会った時に理音が話していた事を思い出しながら言う。

「前田は困ったように言っておった。自分は研究しかしていなかったから、怜生くんの相手をどうしたら良いかわからぬと……前田は戸惑っておるのじゃ。普通、兄弟は時間をかけて兄弟になって行くはずなのに前田も怜生くんもほとんどゼロの状況から出発じゃからな。あやつは怜生くんを大切に思っておる。それは間違いないのじゃ」

「……本当ですか？」

「……本当なのじゃ。だから、前田を信じてやって欲しいのじゃ。怜生くんが前田を信じてやらぬと前田がかわいそうなのじゃ」

「……はい」

秀吉は怜生にあわてずにゆっくりと家族になれば良いと言うと怜生は秀吉の言葉を全て理解していないようで不安そうに秀吉の顔を見上げると秀吉は怜生に向けて優しい笑みを浮かべて怜生の不安を振り払うように言うと怜生は小さく頷く。

# 第125問

「夜分遅くにすいません。前田と……」

「早かったわね。あんたの話だと今日中に迎えにこれなさそうだったのに」

理音はプログラムを組み上げ、木下家に着きインターホンを押すと、直ぐに優子が玄関のドアを開ける。

「あぁ。お前と木下が怜生の相手をしてくれたからな。安心して作業に集中できたんだ。助かった」

「……珍しいわね。あんたが素直に礼を言うなんて」

「俺だって、それくらいは心得ている。それで……」

理音は怜生を預かってくれた事を優子に礼を言うと優子は素直な礼を言う理音に少し驚いたような表情をするが、理音は優子の表情など気にする事なく、怜生の事を聞く。

「怜生くんなら寝てるわ」

「そうか」

「起こす？」

「いや、寝てるなら、無理に起こす必要はない」

怜生は時間も遅くなってきているため、すでに眠りについている。

「そう。それなら、入って」

優子は理音を家の中に案内すると、

「前田、遅かったのう。怜生くんは待ちきれなくて寝てしまったのじゃ」

「あぁ。木下、今日はすまなかった。怜生は迷惑をかけなかったか？」

怜生は秀吉に寄りかかるようにソファーで寝ており、理音は優子と秀吉の両親に挨拶をした後、秀吉に礼を言い、怜生が迷惑をかけていなかったかを聞く。

「何、怜生くんは大人しいからのぅ。別に迷惑などかけておらぬ。のう。姉上」

「そ、そうね」

「……何かあったんだな」

秀吉と優子は怜生が不安に思っていた事を理音には言わない方が良いと判断したようで2人で嘘を吐こうとするが理音は2人の嘘に気づき、険しい表情をする。

「……少しのぅ。前田がおらぬ事で不安になってしまったようなのじゃ」

「……そうか」

秀吉は理音に嘘がバレた事に少し落ち込みつつも、怜生が不安になっていると言うと理音はそっと怜生の頭を撫でる。

「迷惑をかけた」

「迷惑などとは思っておらぬ。それにワシは協力すると言うたではないか」

「あたしも迷惑なんて思ってないわよ」

理音は2人に頭を下げると怜生を抱きかかえようとする。

「怜生くんの事、聞かなくて良いの？」

「明日、聞かせてくれ。流石にこんな時間……悪い」

優子は理音に怜生の事を聞かなくて良いのかと聞くと理音はこれ以上、居座るわけにもいかないと言おうとした時、理音の腹の虫が鳴き出し、理音はバツが悪そうに2人から視線を逸らす。

# 第１２６問

「前田、あんた、夕飯食べてないの？」

「時間がなかったからな。何も食っていない」

理音の腹の虫に優子は苦笑いを浮かべながら聞くと理音は本当に急いでプログラムを組み上げてきたようで食事は取っていないと言う。

「それでも、栄養剤くらいは取ったのしゃろう？」

「いや。怜生やお前達と飯を食う時間が増えてからな。１人であれを食うのは味気なくてな」

「ふーん。あんたもかわいいとこあるじゃない」

秀吉は理音の得意の栄養剤の事を聞くが理音の中で怜生と過ごす時間は彼の中の何かを変えているようで苦笑いを浮かべると優子はそんな理音の表情に少しドキドキしながら言うと、

「お母さん、何か作れないかな？」

「もう作ってるから、座って貰いなさい」

優子は母親に理音の夕飯を作って欲しいと言い、母親からは直ぐに返事が返ってくる。

「いや、流石にそこまで世話になるわけには」

「良いから、座るのじゃ。それにお主もよく見ればボロボロではないか」

理音は怜生の面倒を見て貰った上にそこまでして貰うわけにはいかないと怜生を抱きかかえようとするが、秀吉は理音がどれだけ急いでここまで駆けつけたかわかったようで少し休むように言う。

「しかしな」

「良いから座るのじゃ。お主に何かあれば怜生くんも心配するのじゃ。休める時は休むのじゃ」

「そうよ」

理音はそうは言われてもこれ以上は迷惑をかけられないと言うが秀吉と優子は理音を父親が座っている前の席に座らせると、

「前田くん、一杯どうだい？」

「あ。いただきます」

父親は理音にビールを薦め、理音はそれを受け取ると当たり前のように口をつける。

「お。前田くんはいける口だね」

「お父さん、何をしてるのよ！？　前田もなんで、お酒を飲んでるのよ！？」

「こんな時間まで学園の手伝いをしてるって事は成人してるいるん

だろ。良いじゃないか」

「父上、前田はワシと姉上と同級生なのじゃ！！　未成年なのじゃ！！」

「……あれ？　お父さん、不味いことをしたかな？　はい。もう一杯」

「いただきます」

理音がビールを口につけた事に優子と秀吉は声を上げるが、父親はそれなりにアルコールが入っているため、気にする様子もなく楽しそうに笑って理音のコップにビールを注ぎ、理音も気にする事なくコップに口をつける。

# 第１２６問（後書き）

どうも、作者です。

『嘘～』を書いてる人間が今更言うのもあれですが、未成年の飲酒、喫煙は法律で禁止されています。

良い子も悪い子も真似をしないでください。（爆笑）

# 第127問

「前田、あんたも何で平然と飲んでるのよ!!　だいたい、ご飯は遠慮してるのにお酒は遠慮しないのよ!!」

「いや、わりと酒は好きなんだ。あっちでは教授や所長の付き合いで飲んでいたしな」

「そう言う問題じゃないでしょ!!　あんた、未成年なのよ」

「ん？　何か不味いか？」

優子は平然とビールを飲み干す理音を見て言うが理音は表情を変える事なく言うと、

「未成年の飲酒は法律で認められてないの。わかるでしょ!!　見つかったら停学よ」

優子は理音の首をつかみながら言う。

「ん？　少し不味いか」

「不味いに決まってるでしょ!!　ただでさえ、こんな時間に制服の学生が怜生くんみたいな小さな子をおぶって歩いていたら絶対に警察官に止められるわよ」

理音はたいした問題ではないと言おうとするが、実際はそんなわけはない。

「……お主、やはりどこかずれておるのぅ」

「まぁ、二杯飲んだんだ。はい。もう一杯♪」

「俺だけ頂くわけにはいきませんから、おじさんも」

「薦められたら飲まないといけないな」

秀吉は理音の様子にため息を吐くが理音と父親には危機感はなく、完全に晩酌モードに移行している。

「お父さん、あたしの話を聞いてるの！！」

「良いじゃないか。お父さんは子供とお酒が飲むのが夢だったのに秀吉も優子も付き合ってくれないんだから」

「あたしも秀吉もまだ未成年だって言ってるでしょ！！」

優子は父親を怒鳴りつけるがアルコールが入っている父親にはすでに敵はいない上に優子や秀吉が晩酌に付き合ってくれない事に不満を言い始めるが優子はさらに声をあげる。

「あんまり熱くなるな。これでも飲んで落ち着け」

「ありがとう……にがっ！？　何よ。これ！？」

理音は優子の様子に何かを企んだように笑うと熱くなっている優子にビールを手渡し、優子は理音が渡した物がビールだと確認する事なく、一気に飲み干すと初めて飲んだビールの味に顔をしかめる。

「あ、姉上、前田も何をしておるのじゃ！？」

「前田くんもやるねぇ。この調子で秀吉にも飲ませてみようか♪」

「そうですね。木下、知ってるか？　普通の『男子高校生』はこの年になると酒の一杯や二杯、普通に飲んでいるんだぞ。お前は飲めないのか？　そうだな。第3の性別だしな」

「ワシだってそれくらい飲めるのじゃ！！」

秀吉が慌てるなか、父親は楽しそうに秀吉にも飲ませろと言い、理音は秀吉を軽く挑発すると秀吉は簡単に引っかかり、父親からビールを受け取ると一気に飲み干す。

## 第１２７問（後書き）

どうも、作者です。

完全に晩酌モードな酔っ払い２人に巻き込まれた秀吉と優子。（爆笑）

怜生の話は理音の頭の片隅にあるのか？

理音は家に帰れるのか？（爆笑）

そして、酒に飲まれるであろう秀吉は？（爆笑）

# 第128問

「秀吉、あんたもなんで飲んでるのよ!?」

「うんうん。やっぱり、こういうのは楽しいね。前田くん、優子か秀吉を嫁に貰ってくれないかい？　それで私の義息子にならないかい？」

「お父さん、何を言ってるのよ!?」

優子は秀吉が巻き込まれた事に叫び声をあげるが、父親は理音を完全に気に入ったようで優子か秀吉を理音にやるとまで言い始め、優子はその言葉に顔を真っ赤にして父親を止めようとする。

「木下は男なんで遠慮……」

「理音!!」

理音は父親の一言に表情を変える事なく、秀吉を男だと言おうとした時、秀吉はアルコールに弱かったようで顔を真っ赤にしながら今までとは違い、理音を名前で呼ぶ。

「木下、どうかしたか?」

「なぜじゃ。なぜなのじゃ。明久や雄二、ムッツリーニは名前で呼ぶのにワシだけは名字なのじゃ？　ワシは仲間外れにされているようでさびしいのじゃ」

秀吉は理音が自分を名前で呼んでくれない事が不満だと飲み干した

コップを勢いよく置き言うと、

「別に意味はない。名前が良いなら俺は構わない」

「なら、名前で呼んで欲しいのじゃ。理音」

「わかった。秀吉」

理音は気にしないから構わないと言い、秀吉は嬉しそうに頷いているなか、

「……理音か」

優子は自分も名前呼びしたいようで、小さな声でぶつぶつと練習した後、

「り、理音」

「どうした？　木下姉」

意を決して理音を名前で呼ぶが理音は変わらず、呼ぶと、

「何で、秀吉は秀吉なのにあたしは木下姉なのよ？」

優子は理音の胸倉をつかむ。

「ん？　そうだな。秀吉を名前で呼ぶとなるとお前を木下姉と呼ぶのはおかしいな」

「そ、そうよ。だから、優子って、呼んで欲しい……」

「木下で良い……」

「あたしも名前で呼びなさい！！」

理音が考えているのを見て優子は小さな声で言うが、理音は姉をつける必要がなくなったと言おうとすると優子は理音を威嚇する。

「威嚇するな。名前が良いなら、最初から言え。優子、これで良いな」

「う、うん」

理音は優子が威嚇する意味がわからずに優子を名前で呼ぶと優子は顔を赤くして理音から視線を逸らした時、

「前田くんは女の子を名前で呼ぶのは気にしないのね」

優子と秀吉の母親が理音の前に夕飯を並べながら聞く。

「海外生活も長かったですし、特に気にした事はないです……何だ？」

「別に何もないわよ」

理音は優子が少し不機嫌そうな視線を向けているのに気づき、優子に聞くとそんな2人の様子に母親は素直にならない娘と娘の想い人である理音の様子に苦笑いを浮かべる。

## 第129問

「前田くん、美味しい？」

「美味いです」

「優子も秀吉もあんまり美味しいとか言ってくれないから嬉しいわね」

理音が夕飯を食べ始めると母親が戻ってきたせいもあるのか酒宴も少し落ち着き始め、

「ねぇ、理音。あんた、本当に大丈夫なの？」

「ん？　何がだ？」

「何って、お酒飲んでたんだからちゃんと帰れるの？」

「こんなもんは飲んだうちにも入らない」

優子は酒のせいかソファーの上で怜生と一緒に眠りについている秀吉を見た後、理音に聞くが理音は全然問題ないと答えるが、

「ダメよ。何かあったら困るから、前田くん、客間にお布団を敷くから今日は泊まって行きなさい」

母親は理音に泊まって行けと言う。

「いえ、そこまでお世話になるわけにはいきません」

「ダメよ」

理音は母親の提案にそれはできないと言うが、母親は笑顔で理音の言葉を却下する。

「……お世話になります」

「理音、何で負けてるの？」

「……わからん。何故か断ってはいけない気がした」

理音は母親の笑顔に頭を下げると優子は理音の様子がいつもと違うため、理音に聞くと理音は自分でもわけがわからないようで首を傾げると、

「まぁ、わからんものは仕方ない。それより、怜生の事を教えてくれ」

「う、うん」

理音は優子に怜生が泣き出した時の事を聞くと優子は怜生が理音が怜生を置いて戻ってしまうと心配している事、怜生にとって理音はかけがえのない家族になっていると言う事を話す。

「そうか……」

「ねぇ。理音はやっぱり、いつかは帰るんだよね？」

「そうだな。ここではやれない事もあるしな。いつかは帰る事にな

るだろうな。怜生が1人立ちできる頃か、怜生が付いて行っても良いと言えばすぐにでも戻るかも知れない」

理音は怜生の話を聞いて頷くと優子も理音がいなくなってしまう事が不安のようで理音に聞くと理音は怜生しだいだと言う。

「そうだよね」

「まぁ、しばらくは帰らないだろうな。怜生もお前らやアキに懐いているし、俺にもやる事があるしな」

優子はその時の事を思い浮かべたようで表情を曇らせると理音には理音の考えもあるのか苦笑いを浮かべる。

# 第１２９問（後書き）

どうも、作者です。

理音と怜生の木下家へのお泊まり確定です。

そして、小さい子に続いて母親になれてない理音は押し切られます。

相変わらず、最強なわりに弱点が多い主人公だ。（爆笑）

他の作品と比べると理音は常識人になりつつあるなぁ。（苦笑）

# 第１３０問

「……気持ち悪い」

夜も遅くなり、全員が部屋に戻りしばらくすると優子はお酒を飲んだ影響が出てきたようで気持ち悪くなってきたようでトイレに吐きに行こうとすると、

「……お姉ちゃん、どうかしましたか？」

「あの程度で具合が悪くなったのか？」

怜生がトイレに起きたようで理音が怜生の手を引いてトイレの前に立っている。

「……仕方ないでしょ。お酒飲んだの初めてなんだから」

優子は気持ちが悪いため言葉に力はなく、原因を作った理音が平然としているのを見て恨めしそうに言う。

「大丈夫ですか？」

「えぇ。大丈……」

怜生が心配そうに優子の顔を覗き込むと優子は大丈夫だと言おうとするが、酸っぱいものか上がってくる。

「怜生、よけてやれ」

「……ごめん」

優子はトイレに駆け込むなり、アルコール分を体から出そうとするが余裕はなく、ドアを開けたまま吐き出し始めると、

「吐くなら、最後まで出せよ」

「……」

理音は当たり前のように優子の背中をさすり、優子は理音に今の自分の情けない姿を見せたくはないがそんな余裕はない。

「ほら、口をゆすいだら、水を飲んでおけ」

「……いらない」

優子が吐き終えた後、理音は水を渡すが恥ずかしいのと体が水分を拒絶しているため、水をいらないと言うが、

「良いから飲め。後が楽だからな」

「……わかったわよ」

理音はそれでも優子に水を飲ませる。

「ちょっと来い。確か薬があったはずだ」

「う、うん。貰う」

理音はいつも懐に仕込んである薬瓶に薬があると言い、３人で客間

に移動する。

# 第１３１問

「これだな。お前がこれなら、明日の秀吉も同じか？」

「わからないわよ。あたしも秀吉もお酒飲んだの初めてなんだから、あんなものもう2度と飲まないわよ」

理音は制服から薬瓶を1つ取り出すと優子に渡し、優子はその薬を1錠飲むとよほど具合が悪いのか表情を険しくして言う。

「飲むかどうかはお前しだいだろ。まぁ、飲まないまでもたまには酒くらいは注いでやれ」

理音は優子の様子に苦笑いを浮かべると優子は怪訝そうな表情で聞く。

「……まぁな。酒を飲む父親ってのはだいたい、自分の子供と酒を飲むのが夢らしいからな」

「……あんたがどうしてそんな事を言うの？」

「俺のとうさんも、昔、同じ事を言ってたと思ってな。アキが泊まりにくる度に俺とアキが二十歳になったら一緒に飲みたいと言ってたしな」

理音は自分の父親の事を思い出しているのか苦笑いを浮かべると、

「そんな事を言われたら、あたしは何も言えないでしょ。わかったわよ。お父さんにお酒くらい注ぐわよ」

「そうしてやれ」

優子は理音と怜生の父親が亡くなっている事を知っているため、素直に理音の言葉に頷くと理音はその言葉に優しげな笑みを浮かべる。

「だけど、あたしも秀吉もお酒はそんなに飲めないだろうから、理音がお父さんに付き合ってあげてよ」

「俺か？　別に付き合っても良いが、未成年は飲んじゃいけないんじゃないのか？」

「当たり前でしょ。二十歳になってからよ……だから、どこにも行かないでよ」

「わかった。わかった。しばらくは酒は控える。これで良いか？」

優子は理音から視線を逸らしながら小さな声で勇気を出して理音にどこにも行って欲しくないと言うが理音には優子の言葉は聞こえていない。

# 第１３１問（後書き）

どうも、作者です。

最近の理音は柔らかい？（爆笑）

優子と秀吉の家族に触れて、理音は少しセンチな気分です。

優子との距離も多少は縮まったのかな？

# 第132問

「「おはようございます」」

「おはようございます。前田くんも怜生くんも早いわね」

理音と怜生が目を覚まし、着替えて居間に移動すると母親やすでに起きていたようで朝食の準備を始めている、

「そうですか？　俺も家では朝食やお弁当を作るので早いとは思わないんですが」

「そんな事ないわよ。優子はいつもギリギリまで寝てるし、秀吉は朝に演劇の練習をしてるから早く起きるけど、今日はあの通りだし」

「秀吉お兄ちゃん、大丈夫ですか？」

理音は別に早く起きていないと言うと母親は苦笑いを浮かべてソファーを指差すと昨日のお酒が残っているようで秀吉はソファーの上でぐったりとしている。

「……怜生くんに理音、おはようなのじゃ」

「あぁ、おはよう。秀吉、ずいぶんと具合が悪そうだな」

「あ、頭が痛いのじゃ。何で、理音、お主は平然としておるのじゃ。不公平なのじゃ」

理音が秀吉の様子を見て苦笑いを浮かべると秀吉は恨めしそうに言

う。

「そんな目で見るな。これを飲んどけ。即効性だから、1時間くらいで楽になるだろ」

「……ちなみに副作用はないのじゃろうな？」

「あぁ。残念ながら、副作用のロマンに目覚める前に開発した薬だからな」

「……そんなものにロマンを求めないで欲しいのじゃ」

理音は秀吉に優子と同じ薬を手渡すと秀吉は理音に副作用がないか確認すると薬を飲み込む。

「それじゃあ、もう少し寝てろ。怜生、大人しくしているんだぞ」

「……はい」

「理音、お主は何をするつもりなのじゃ？」

「ん？　昨日から世話になりっぱなりだからな。少し手伝ってくる」

理音は母親の手伝いをすると言い、制服の腕をまくりキッチンに向かい、

「……今さらじゃが、理音は万能じゃの」

秀吉はその様子に力なく笑う。

# 第１３２問（後書き）

どうも、作者です。

前田兄弟の起床に対してヒロインは爆睡中です。（爆笑）

さぁ、理音は優子を起こしに行くのか？（悪笑）

宣伝です。『サド～』の番外編を投稿しました。
『恋と理性と幼なじみ』と言うタイトルです。
まさかの美春正統派ヒロイン化計画です。
コアなファンの多い『美春の父親』の暴走やまさかの『父親対鉄人』の夢の対決まで。（大爆笑）

楽しんでいただければ幸いです。

# 第133問

「前田くん、ありがとうね。おかげでいつもより早く終わったわ」

「こちらこそ。すいません。俺や怜生の弁当まで作っていただいて」

「気にしないの。それより……」

理音は母親と一緒に料理をすると母親は礼を言う理音に言いたい事があるようで理音の目の前で人差し指を立てると、

「前田くんのお料理は手際も良いし、よくできてると思います。秀吉や優子の話を聞くととても美味しいんでしょうね。だけど、怜生くんのお弁当としては失格です」

「失格ですか？」

理音のお弁当の作り方は失格だと言うと理音は意味がわからず、首を傾げる。

「そう。怜生くんみたいな小さい子のお弁当は味や栄養面も重要だけどね。見た目も大切なのよ」

「見た目？」

母親は理音には小さな子供が喜ぶようなお弁当は作れないと思いながらも理音に説明しようとするが、理音は絶対にわかっていない。

「まぁ、今度、教えてあげるから、怜生くんを連れてまた遊びにき

たら良いわ」

「はい。お願いします」

理音の様子に母親は苦笑いを浮かべながら言うと理音は素直に頷く。

「理音、お主にしてはずいぶんと素直じゃな」

「ん？　まあな。わからない事はわかる人間に聞くのが手っ取り早い。それより、もう大丈夫なのか？」

「うむ。お主の薬でだいぶ楽になったのじゃ」

理音と母親の様子を見ていた秀吉が声をかけると理音は秀吉に調子を聞き、秀吉は薬が効いているようで笑顔で答える。

「そう言えば、優子はまだ寝てるのか？」

「姉上はまだ寝てる時間なのじゃ」

「ずいぶんとだらけてるな」

理音は薬の効果が効き始めた事で時間を確認するが優子は起きてくる気配はなく、秀吉は苦笑いを浮かべて答える。

「理音くん、何なら起こしに行く？」

「母上、いくら何でもそう言うわけには……」

「お世話になりましたし、それくらいはしてきます」

母親は冗談で理音に優子を起こしてきてと言うが、理音は特に何も考えずに頷くと優子を起こしに向かい、

「……秀吉、前田くんって鈍感くんよね」

「……まったくなのじゃ」

秀吉と母親は理音の背中を見ながらため息を吐く。

## 第１３３問（後書き）

どうも、作者です。

ついに理音、優子の寝込みを襲います。（爆笑）

まぁ、冗談ですが理音は優子の寝てる姿に興奮するのか？

……ないか。（爆笑）

# 第134問

「優子、起きてるか？」

「……」

理音は優子の部屋の前に着くと部屋をノックするがまったく反応はなく、

「入るぞ」

理音は平然と優子の部屋に入って行く。

「くー」

「……ずいぶんと気持ち良さそうに寝てるな」

理音は優子の部屋に入ると寝息を立てている優子の様子に表情を変える事なく言うと、

「起きろ」

「……後5分」

優子の身体を揺するが、優子は起こしにきたのが理音だとは気づかずにまだ寝ていようとする。

「いい加減に起きろ」

「……痛いわね。秀吉、あんた、何をす……へ？　り、り、理音！？　あんたがどうしてあたしの部屋にいるのよ！？」

理音はいつまでも起きようとしない優子の頭を軽く叩くと優子は秀吉が起こしにきていたと思ったようで不機嫌そうに目を開けるとそこには秀吉ではなく、彼女の想い人である理音が立っており、慌てて声をあげる。

「お前がいつまでも起きてこないからだ。秀吉は二日酔いだしな。おばさんは朝から大変そうだからな。俺が起こしにきた」

「起こしにきたじゃないでしょ！？　あたしは女の子なの。常識で考えなさいよ。女の子には色々とあるのよ」

理音は優子が慌てている意味などわからないと表情も変えずに事実のみを伝えるが優子は恥ずかしいようで声をあげる。

「準備だなんだと言うなら、それこそ起こされる前に起きろ」

「……」

しかし、理音は優子の言葉をバッサリと切り捨てると優子は理音の言葉に眉間にシワがよりはじめ、

「あんたはあたしの寝起き姿を見ても何も感じないの！！」

自分の寝起き姿に何も反応しない理音にプライドを傷つけられたようで理音の胸倉をつかむ。

「何も？　パジャマ姿なら、昨日の夜も見ただろ。それに俺はその

中身にしか興味はない」

「……興味はあるんだ」

理音はある意味男らしく言い切ると優子は理音の言葉に顔を赤くする。

「色々と準備があると言うなら、さっさと着替えろ。それとも手伝って欲しいのか？」

「そんなわけないでしょ！？　さっさと出てけ！！」

優子は理音の言葉に顔を真っ赤にして叫ぶと理音は何も言わずに部屋を出て行く。

# 第135問

「……」

「……睨むな。言いたい事があるならはっきりと言え」

理音と優子は怜生を幼稚園に送り届けた後、2人で学園に向かっていると優子は今朝の件で理音に言いたい事があるようで怜生と別れた後から理音を睨み続けている。

「別に何もないわよ」

「ないなら睨むな。だいたい、いつも言っているだろ。お前の嘘はわかる。酒を飲ませた事を怒っているのか？　それとも部屋で押し倒して欲しかったのか？」

「ちょ、ちょっと、何をする気よ!?　こんな朝から、それもこんな人通りのあるところで!?」

理音は優子の態度に邪悪な笑みを浮かべると優子との距離を縮めて彼女を自分と塀の間に挟み、逃げ場所を塞ぎながら言うと優子は先ほどまでの理音とは異なる反応に慌てて声をあげる。

「俺のセリフだ。お前は何を期待しているんだ？」

「そ、それは!?」

理音は優子の耳元で言うと優子は顔を真っ赤にする。

「あ、あんたの怜生くんがいなくなった時の変わりようはなんなのよ！？」

「おかしな事を言うな。俺は俺だ。怜生がいる時もいない時もな」

優子は怜生がいる時には見せない理音の表情に声をあげると理音は表情を変える事なく、自分は何も変わってないと言った後、

「あまり無防備に入ってくるな。俺は欠落した人間だ。たまに自制が効かなくなる」

彼にしては珍しく困ったように笑うと優子の頭をポンポンと優しく叩く。

「勘違いするな。お前にとっての特別は俺じゃない」

「……何よ。それ？」

理音は優子との距離をとろうとしているのか、表情を元に戻すと１人で学園に行こうとするが、優子は理音の行動が気に入らなかったようで理音の腕をがっちりとつかみ、

「あんたは欠落なんかしてない。何１人で重たい物を背負ってる気になってるのよ！！　あんたはあんたでしょ。人にはそれぞれ個性ってもんがあるの。あんたが欠落してるって言ってる部分はあんたの個性よ。それだけでしょ。変なカッコつけるな！！」

理音の耳元で怒鳴りつける。

「……耳元で怒鳴るな」

「何よ。その態度は……っ！？　……ちょ、ちょっと、理音！？」

理音は優子の言葉にため息を吐くと、優子は再度、理音を怒鳴りつけるために理音の胸ぐらをつかもうとするが理音は優子の唇に自分の唇を重ねて彼女の口を塞ぐ。

「行くぞ。真面目な優等生は遅刻するわけには行かないだろ」

優子は理音の突然の行動に目を白黒させるが、理音は表情を変える事なく優子を置いて1人で歩き出し、

「ちょっと待ってよ！？」

優子は自分の唇に残る理音の唇の感触を確かめるように指で触れた後、慌てて理音の後を追いかける。

# 第１３５問（後書き）

どうも、作者です。

……えーと、急な展開でごめんなさい。

なぜ、こうなったから自分でもわかりません。

わかってくれる方がいるかはわかりませんが、たまにオリキャラが勝手に動き出します。割と計算して伏線を混ぜる書き方なんですが計算外になる時があります。

次、どうしようかな？（苦笑）

# 第１３６問

「……おはよう」

理音と優子はあの後、一言も話さずに学園まで歩き理音が教室に入るとなぜか教室は静まり返っている。

「秀吉、何かあったのか？」

「理音、今すぐ逃げるのじゃ」

「逃げる？　意味がわからん」

理音は秀吉に今の状況を聞くと秀吉は表情をひきつらせて理音に逃げるように言うが理音は首を傾げる。

「……お主がワシの家に泊まったと言う事でなぜかＦＦＦ団が殺気立っておるのじゃ。それ以外にも、登校途中にお主が姉上と接吻しておったのを見たと言う者もおってな」

「そうか」

秀吉は理音に逃げるように言うが、理音の反応は薄い。

「理音、お前、本当に秀吉の姉に？」

「……自制が効かなかったんだ」

『『『あいつを殺せ！！』』』

雄二が理音の様子に少し驚いたように聞くと理音は表情を変える事なく言い、その言葉にクラスメート達は理音に向かいカッターを構える。

「……黙れ。今の俺は抑制が効かない。かかってくるなら手加減はしない」

『知るか!!　異端者には死の鉄槌を!!』

『前田理音!!　貴様は我らが血の盟約に背いた!!　その罰は死んで償って貰う!!』

理音はクラスメート達の様子に不機嫌そうに言うが、嫉妬に燃えたクラスメート達が止まる事はなく、明久、雄二、秀吉、瑞希、美波以外が理音に襲いかかるが理音は何かの腹いせのように容赦なくクラスメート達を花火で撃ち抜いて行く。

「……前田、飛ばしてるわね」

「そ、そうですね」

「明久、お前は行かないのか？　珍しいな」

理音の様子に瑞希と美波が苦笑いを浮かべているなか、いつもならクラスメート達と一緒に理音に襲いかかろうとするはずの明久が何もしていない事に雄二が気づく。

「まあね。雄二が狙われてるなら、全力で参加するけどね」

「おい。明久、それはどういう意味だ？」

明久は雄二の言葉に苦笑いを浮かべながら言うと雄二の額には青筋が浮かぶ。

## 第136問（後書き）

どうも、作者です。

理音がおかしい！？

こんなキャラじゃなかったはずなのに！？

ストッパーが無い理音対嫉妬の塊。

理音は生き残れるのか？

そして、妄想ヒロイン優子は何を妄想してるのか？（爆笑）

# 第137問

「雄二も明久も揉めるでない。実際、明久は何もしなくて良いのか？」

「まぁね。ボクは木下さんとリオはお似合いだと思うしね」

「それが信じられねぇんだよ」

秀吉が明久の様子に聞くと明久は苦笑いを浮かべるが雄二は明久の言葉が信じられないと言う。

「確かにね。アキなら前田でも女の子と付き合う事になったら全力で邪魔すると思ったのに、それもAクラスの木下さんよ。いつもならあそこで倒れてるでしょ」

「……ボクだって命は惜しいんだよ」

「……まったく同感だな」

美波は明久が何もしないと言うのを疑いの視線を向けて言うと明久と雄二は理音に撃ち抜かれて屍になって行くクラスメートを見て表情をひきつらせながら言うと、

「ボクはリオと約束したんだ。それにリオの家に泊まった時、久しぶりにリオとゆっくり話をして、おじさんとの約束も思い出したからね」

「おじさんとの約束ですか？」

明久は理音の家に泊まった時に改めて理音と話した事で何かを思い出したようで少しだけ寂しそうに笑うと瑞希は明久の表情に何かを感じたようで明久に聞く。

「……うん。ボクとリオ、おじさんの3人の約束。特別な事じゃないけど、ボクとリオにとってはかけがえのないものかな」

「だから、秀吉の姉貴と理音を応援するわけか？」

「うん。それにリオは雄二と違ってボクに彼女が出来そうになったら、ＦＦＦ団側に回らないで応援してくれるだろうしね」

明久は苦笑いを浮かべて言うと雄二は自分が知る明久とは異なる反応に驚いたような表情をして明久に聞くと明久は雄二と理音は違うと言い、

「あ？　てめぇの幸せを俺が許すわけねぇだろ。バカ明久」

「あ？　なんだとバカ雄二。上等だ。表出ろ！！」

なぜか、2人は睨み合いを始める。

「あの、吉井くんも坂本くんも止めた方が良いと思いますよ」

「まったくね。でも、木下はお姉さんと前田が付き合っても良いの？　立場的に気まずくない？」

「そうじゃのう……ワシは姉上さえ良ければ問題ないのじゃ」

美波は秀吉にふと思った疑問をぶつけると秀吉は優子次第だと笑う。

# 第138問

（……キスしちゃったんだよね？）

昼休みになると優子は朝に理音の唇と触れた自分の唇にそっと触れると、

（ど、どうしよう！？　で、でも、理音もあたしの事が好きって事よね？　両想いって事よね？）

朝からずっと1人で妄想の世界に入り込んでいるようで自分の席でのたうちまわっている。

「……代表、木下さんはどうしたのかな？」

「……わからない。朝からずっとあんな感じ」

優子の様子に学年次席の『久保　利光』が翔子に聞くが翔子はわからないと首を振る。

「前田くんなら、優子がああなった理由を知ってるかな？」

「前田君？　その人は誰だい？」

愛子は苦笑いを浮かべながら、優子がおかしい理由を理音のせいだと決めつけながら言うと、利光は理音と面識がないため首を傾げる。

「久保くんは会った事がないんだっけ？　前田くんは吉井くんの幼なじみだよ」

「……理音と吉井は凄く仲が良い」

愛子と翔子は利光に理音の話をすると、

「……吉井くんにそんな男がいたなんて」

利光はぶつぶつと言いながら教室を出て行く。

「まぁ、このままってわけにはいかないだろうし、代表、ボクは前田くんのところにでも行ってくるね」

「……私も行く。雄二と一緒にお弁当を食べる」

愛子はFクラスに行こうとすると翔子は雄二のために作ってきたお弁当を持ち、2人でFクラスの教室に向かい歩き出すと、

『死ね!!　前田!!』

『殺す!!　殺す!!』

「……しつこいぞ」

Fクラスへ向かう途中で、廊下からグラウンドでFクラスの生徒に追いかけられながらも屍の山を築いている理音の姿を見つける。

「……本当に何があったのかな？」

「……わからない」

愛子は理音の姿に苦笑いを浮かべるが翔子はわからないと首を横に振る。

# 第１３９問

「……キスかぁ。それで優子はあんな様子なんだ」

「……雄二、私もキスして欲しい」

「しょ、翔子！？　何を言ってるんだ！？　放れろ！？」

翔子と愛子はＦクラスに着くと優子がおかしな原因が理音のキスだと聞き、愛子が頷いている隣で翔子が雄二にキスを強要している。

「しかし、姉上が放心状態とはのぅ」

「好きな相手との初めてのキスですよ。当然ですよ」

「そうよね」

秀吉は優子の様子を聞いてため息を吐くが、瑞希と美波は優子の反応は当然だと目を輝かせている。

「だけどさ。優子はいつまであの調子なのかな？　清涼祭が近いのに優子があの調子だとボク達の出し物が進まないんだよね。ボクの口から言うのもなんだけど、代表はクラスをまとめるって感じじゃないし、実質、Ａクラスをまとめてるのって優子だからね」

「……確かに霧島を見ておるとそんな感じがするのぅ」

愛子は苦笑いを浮かべながら、優子が元の状態に戻らないとクラスの出し物が進まないと言い、秀吉は苦笑いを浮かべる。

「でさ。優子を元に戻すのはやっぱり、前田くんの力が必要なんだと思うんだけど……前田くんは今は手があかないよね？」

「……ちょっと無理かもね」

愛子は優子を元に戻すために理音に動いて貰いたいと言うが、先ほど見た理音の様子からは難しそうだと言うと、明久は苦笑いを浮かべながら頷く。

「だよね。でもさ、どうして、前田くんは優子にキスしたんだろうね。前田くんの性格から言えば、いろいろと企んでから、そのままベットインって感じでしょ？」

「……そこまでは言わんのじゃが、確かに理音らしくないのじゃ」

「そうかな？　ボクは冷静なふりをしてるより、ずっとリオらしいと思うよ」

理音と付き合いの浅い秀吉と愛子は理音の行動をらしくないと言うが、明久は昔を懐かしむように笑う。

## 第１３９問（後書き）

どうも、作者です。

理音は相変わらず、追われてます。

そして、優子の役立たず化にＡクラスのピンチ。

理音はどうするのかな？

# 第１４０問

「それってどういう事？」

「えーと、言いかけて言うのも何だけど、言わないとダメかな？」

愛子は明久の表情を見て、理音の過去に興味が湧いたようで明久に聞くと明久は苦笑いを浮かべる。

「せっかくだし、聞きたいな」

「そうじゃのう」

愛子と秀吉は理音の過去に興味があるようで明久に詰め寄る。

「……アキ、余計な事を言うなよ」

「リオ、お帰り。無事だったみたいだね」

理音が教室に帰ってきて明久を止める。

「前田くん、お帰り」

「他の者はどうしたのじゃ？」

「花火だと復活が速くてな。仕方ないから埋めてきた」

理音の登場に愛子と秀吉は苦笑いを浮かべてＦＦＦ団をどうしたかと聞くと理音は表情を変える事なく埋めてきたと答えると、

『な、何で、グラウンドに大穴が!?』

『底から声が聞こえるぞ』

『『『……殺す。殺す。殺す』』』

『……助ける必要はないな』

教室の外からおかしな会話が聞こえる。

「それで工藤は何しに……待て。嫁、動きを塞ぐならこれを使ってみないか？　一時的に麻痺をさせるんだが、意識は完全に残るタイプの薬なんだ。既成事実ってのはやっぱり、両方覚えていた方が効果があるだろ」

「……使わせて貰う。やっぱり、理音は良い人」

「てめぇ、理音!?　ふざけるな!?」

理音は愛子がFクラスにいる理由を聞こうとするが、途中で翔子に襲われかけている雄二に気づくと興味は完全にそちらに移り、翔子に怪しげな薬瓶を渡すと雄二は声をあげるが、

「そうだな。ついでにこれを付けるか。男性機能回復の効果があるんだが、そっちの薬と併用すると麻痺はとけてしまうんだが、代わりに理性を失いかけるが『気になる異性がいれば確実に襲いかかる』と言うデータが多く報告されている」

「……ありがとう」

「り、理音、それは笑えないから止めろ!?　俺の貞操がそんなもので奪われてたまるか!?」

「それって、坂本くんは代表に襲いかかるって事だよね?」

「そう言う事だ」

「……雄二、私はいつでも良い」

理音はもう1つ怪しげな薬瓶を取り出し、邪悪な笑みを浮かべている。

# 第１４１問

「……理音、お主、まさかその薬も自分で実験をしたのか？」

「ん？　どうかしたか？」

秀吉は理音の投薬実験の話を思い出したようで少し口調を強めに言うが、理音は意味がわからずに首を傾げる。

「それって、前田くんが木下さん以外に襲いかかったって事ですか！？」

「前田、あんたね」

秀吉の言葉に瑞希と美波は優子を応援しているため、理音を責めるように言うと、

「……睨むな。条件は言っただろ」

「襲ってないって事で良いの？」

「あぁ」

理音は表情を変える事なく、その薬では襲ってないと言うと雄二と翔子以外は理音をジッと見た後、とりあえず、納得したようで頷くが、

「ねぇ。優子がいたら、襲ってた？」

「工藤さん、そんな誰もが聞きたかった事を簡単に！？」

愛子は楽しそうに笑いながら理音に聞くと明久は声をあげる。

「……なんで、そんな話になる？」

「だって、今朝、優子を襲ったんでしょ。それなら、薬の力を借りたら確実に襲うよね？」

「理音、どうなのじゃ」

理音は眉間にシワを寄せて愛子に聞き返すと愛子は楽しそうに言い、秀吉は真剣な表情で聞く。

「……言う必要はない」

「俺の事には関わってくるんだ。当然、答えるよな？」

「……雄二、往生際が悪い」

理音は答える気はないと言うと雄二は翔子から薬を飲ませられないように全力で抵抗しながらも理音に言う。

「で、どうなの？」

「前田、答えなさいよ。木下さんの事をどう思ってるのよ？」

「はっきりとしてください」

愛子は優子を元に戻す事より、理音をいじる事に興味が移ったよう

で楽しそうに聞くが瑞希と美波は真剣な表情で理音に詰め寄る。

# 第142問

「……他人の事に首を突っ込む前に自分達のをどうにかしろ」

しかし、理音は答える気もないため、瑞希と美波を押しのけると自分の席に座る。

「「……」」

「あはは。確かにそうかもね」

愛子は理音の言葉に静かになる瑞希と美波を見て苦笑いを浮かべると、

「まぁ、前田くんが優子を襲うかどうかは置いといて」

「言い出したお前が言うな」

「細かいよ。それでね……」

愛子は理音に優子が理音とのキスのせいで妄想の世界に飛び立っているため、使い物にならないと教える。

「そうか」

「あれ？　それだけ？」

「あいつの妄想は今に始まった事じゃないだろ」

「確かにそうじゃのぅ」

理音の反応は薄く、優子の妄想は元からだと言い切ると秀吉が理音の言葉を肯定するように頷く。

「いや、だけどさ。今回の原因は完全に前田くんだし、どうにかして欲しいんだけど」

「……断る」

愛子は理音と秀吉の言葉に苦笑いを浮かべながら言うと理音は一言で断る。

「どうして？」

「……」

「……リオ、ひょっとして、木下さんに会うのが照れくさいとか？」

愛子は不満げに言うが、理音は何も答えず、明久はそんな理音の行動に何か違和感を覚えたようで理音に聞く。

「……」

「ひょっとして、図星？」

理音の表情は変わる事はないが、愛子はニヤリと笑う。

「前田、あんたも可愛いとこあるじゃない」

「……」

「あれ？　リオ」

美波は先ほどの仕返しなのかニヤニヤと笑いながら言うと理音は立ち上がり、明久は理音を呼ぶが、

「……ひょっとして、前田くんは逃げたんですかね？」

「……普通に出て行くからわかりにくいけど、完全に前田くんも動揺してるんだね」

「リオは顔に出ないからね」

「そうじゃのぅ」

理音は何も言わずに教室を出て行き、理音の行動に全員が呆気に取られる。

# 第１４２問（後書き）

どうも、作者です。

理音、逃走。（爆笑）

最近の理音はなんか可愛い件。

これは皆さんはどう思ってるんでしょうか？

# 第１４３問

「……屋上まできたのは良いが」

理音は教室から逃げてくるとＦＦＦ団を埋めたグラウンドを避け、屋上で一息つく。

「……俺は何をしたいんだ？」

理音は自分が優子にキスをした理由が自分でもわかっていないようで、ＦＦＦ団が埋まっているグラウンドを見ながらつぶやくと、

「友香、頼む。考え直してくれ」

「しつこいわよ。恭二、私とあなたは終わったの。付き合うときに言ったわよね。私は頭が良い人が好きなの。Ｆクラスにまけるような人とは付き合わない」

（……あの男はあの女とよりを戻したいのか？）

男子生徒と女子生徒が揉めている声が聞こえる。

「友香、それなら、俺が頭が良いと証明すれば良いんだよな？」

「まぁ、そうね」

「それなら、一緒に召喚大会に出てくれ。そこで俺が友香に相応しいと証明して見せ……」

「……気にするな。続けてくれ」

男子生徒は自分が女子生徒と付き合う価値がある事を証明して見せると言いかけた時、理音が近くで2人の事を観察している事に気づく。

「……続けられるか」

「……そうね」

「なぜだ？」

2人は理音が聞いているところでは続けられないと言うが、理音は意味がわからないと首を傾げる。

「当たり前だ。常識で考えろ。」

「悪いな。ところどころ、常識と言うものを無視して生きてきたから、まったくわからないんだ。説明してくれ」

男子生徒は理音の様子に声を荒げるが理音は表情を変える事なく聞き返す。

「常識を無視？　……あなた、ひょっとして、Fクラスに転入してきたって言う前田理音くん？」

「あぁ。すまない。名乗るのが遅れた。前田理音だ」

女子生徒は理音の言葉で何かを思い出したようで理音の名前を呼ぶと理音は2人に頭を下げた後、改めて名乗る。

「……Fクラス」

「恭二、止めなさい。前田くんは試召戦争に参加していないんだし、わざわざ、ケンカを売る必要はないでしょ」

男子生徒は理音がFクラスだと聞き、敵意を込めた視線を送るが女子生徒が男子生徒をいさめる。

## 第１４３問（後書き）

どうも、作者です。

まさかの根本、小山ペアの登場。（爆笑）

どうなるんでしょうか？（悪笑）

# 第１４４問

「えーと、私は小山友香。Ｃクラスの代表をしてるわ」

「……Ｂクラス代表の根本恭二だ」

２人は理音に名乗るが、恭二と言う男子生徒は不機嫌そうに名乗る。

「……小山と根本だな。根本が俺……Ｆクラスに反応したのはＦクラスとの試召戦争が原因だな」

「……わかってるなら言うな」

理音は恭二が不機嫌な理由を表情を変える事なく言うと、恭二は舌打ちをする。

「ん？　すまない。人の心情を察するのは苦手なんだ」

「本当に常識を無視してきたのね」

「あぁ。必要性を感じなかったからな」

理音は恭二の様子を見て、一先ず、謝ると友香は苦笑いを浮かべる。

「それで、なぜ、俺の前では続けられないんだ？」

「なぜ？　って、恥ずかしいからだろ」

「恥ずかしい？　根本が小山とよりを戻したいのは惚れてるからじ

ゃないのか？　それなら、何を恥ずかしがる？」

理音には恭二の言う意味がわからないため、首を傾げる。

「それはこの話が噂になったりするとあれだ。いろいろとあるだろ」

「噂？　気にするな。俺は噂を広めて回るほど無粋ではない」

「……充分、無粋だよ」

恭二は理音から視線を逸らすが理音の追求が終わる事はない。

「前田くん、あなただってあるでしょ。誰かを好きになった時に誰かから茶々を入れられてむずがゆいと言うか」

「……誰かを好きになる？」

「まさか、人を好きになった事ってないの？」

友香は理音と恭二の様子に苦笑いを浮かべたまま言うと、理音が首を傾げるため、友香は驚き聞き返す。

「……まず、人を好きになると言うのがどこからかわからん。初恋と言うものはあったが分析をした結果、それは幼少期の憧れであり、それが恋愛と言うものに分類されるかが理解できない」

「「……」」

友香の問いに理音は少し考えてから自分の考えを口にすると、その答えに恭二と友香は呆れたような表情をする。

# 第１４４問（後書き）

どうも、作者です。

理音は鈍い件。（爆笑）

完全無敵の理系の恋愛はどうなるんでしょうか？

そして、捕まった根本と友香の運命は？（爆笑）

## 第145問

「何だ？」

「いや、もう少し何かないか？」

「あるでしょ。女の子と話すとドキドキするとか」

理音は2人の様子に聞き返すと恭二は呆れたように言い、友香は苦笑いを浮かべて言うが、

「やりたいとかか？」

理音の答えは過程を一気に飛ばしている。

「お前、もっと言い方があるだろ！？」

「そ、そうよ！！」

「何を言っている？　一般的に恋愛感情と言われるものは種の保存であり、シンプルに言えばただの性欲だ」

恭二は理音の一言に慌てて声を上げ、友香は恥ずかしいようで理音から視線を逸らすが理音は意味がわからないと首を傾げる。

「確かにそうかも知れないけどな。いろいろとあるだろ。一緒にいると安心するとか楽しいとか」

「恭二の言う通りよ。ただ、その……したいとかじゃないわよ」

恭二は理音のあまりにドストレートな答えに友香がいる手前が慌て、友香は恥ずかしそうに小さな声で言う。

「……面倒だな。3大欲求なんだ。シンプルにいけないのか？」

「いければ誰も苦労しねぇよ」

理音は面倒だと言うと恭二はため息を吐く。

「……難しいものだな」

「本当よ。それで噂の天才くんは何か答えは出そうなの？」

「……現状で言えば保留だ。データが少なすぎる」

恭二のため息に理音は眉間にシワを寄せると友香は苦笑いを浮かべて理音に聞くと、理音は眉間にシワを寄せたまま保留と言うが、

「さっきはシンプルにいけないのか？　って言ってたのに前田くんはシンプルには考えないの？」

「シンプルにか？　……」

友香が理音に聞き返すと理音は考え込む。

「答えは出そうか？」

「わからんが、根本、小山、邪魔をして悪かった。後はいろいろ答えてくれて助かった礼を言う」

恭二は理音の様子に何かを感じ取ったのか聞き返すと理音は2人に頭を下げてから歩き出すが途中で振り返り、

「小山、お前は根本と付き合うメリットはなくなったと言ったが、それは本当か？　俺が話をさせて貰った様子から推測させて貰えば、お前ら2人はバランスが良いと思う。それが恋愛と言うものにつながるかは俺には理解できないが、根本に1度チャンスをやっても良いんじゃないか？」

「……そうね。1回だけチャンスをあげても良いかもね」

「友香、本当か！？」

「1回だけよ。召喚大会に出てあげるわ」

理音の言葉に友香は恭二に1度チャンスを与える。

## 第１４５問（後書き）

どうも、作者です。

明久達の知らないところで理音の交友関係が広がっていきます。（苦笑）

理音と根本、友香はこの後、どうかかわってくるんでしょう。（悪笑）

宣伝

先日、番外編の『恋と理性と幼なじみ』が完結しました。

そして、新たな番外編『本と勇気と演劇部』の執筆を開始しました。

興味が湧いたらご覧ください。

# 第１４６問

（……シンプルにか？）

理音は屋上を後にすると恭二と友香から聞いた事を考えながら教室に戻ると翔子と愛子はすでに自分達の教室に戻っている。

「リオ、お帰り」

「……あぁ」

明久は理音を見かけて声をかけるが理音の反応は薄く、

「……何かあったのか？」

「……わからんのじゃ」

雄二と秀吉は戻ってきた理音の様子がおかしいと言う。

「前田くん、さっきの続きを教えてください」

「そうよ。木下さんの事をどう想ってるのよ？」

男性陣は理音の様子に空気を読んで理音に何も言わないでいるが、瑞希と美波は空気を読む事なく理音に詰め寄るが、

「……黙っていろ」

理音の反応は薄い。

「姫路、島田、そこまでにしろ。理音にだって考えたい事もあるだろ。だいたい、お前らだってできていない事を理音にだけ押しつけるな」

「「うっ！？」」

雄二は理音の様子に割って入ると瑞希と美波はバツが悪そうな表情をする。

「雄二、お主も珍しいのぅ」

「まあな。何となく、あいつらに答えを強要されている理音が自分と重なったんだ」

「……お主も大変じゃな」

雄二の様子に秀吉が聞くと雄二は苦笑いを浮かべる。

「しかし、理音はどうしたんだ？　俺もたいした付き合いは長くはないが、あそこまで考え込んでいるのは初めてじゃないか？」

「そうじゃのぅ。何か考える事はあっても」

「企むって感じだからね」

明久、雄二、秀吉の３人は今までとは違う理音の様子に苦笑いを浮かべていると、

「……やはり違うな」

「理音、いきなりなんじゃ！？」

「理音、お前は何をしてるんだ！？」

理音は3人に近づいてくるなり、秀吉の胸を揉む。

# 第147問

「……顔じゃないな」

理音は教室の空気が凍りついているなか、気にする事なく秀吉の顔をまじまじと見た後、

「なら、サイズか？」

手をわきわきとさせながら美波に詰め寄ろうとする。

「ちょ、ちょっと、前田！？　あんたはウチに何をするきよ！！」

「そうです。前田くんが揉まないといけないのは木下さんの胸のはずです！！」

「……いや、その答えも間違ってるだろ」

理音が美波に詰め寄ろうとすると美波は自分の胸をかばうように瑞希の後ろに隠れ、瑞希は理音に相手が違うと言うと雄二は状況をつかめないながらも突っ込みを入れる。

「リオ、お前はやってはいけない事をやった！！」

「明久、お主、どうしたのじゃ？」

そんななか、理音の行動に明久が怒りの声をあげ、突如として声をあげた明久に秀吉が聞く。

「リオがボクらのアイドル秀吉の胸を揉んだんだ!!　いくら、リオでも許せるわけがないだろ!!」

「……ワシは男じゃ」

「秀吉の姉のは良くても秀吉のは許せないんだな」

「当たり前だよ!!」

明久の怒りは理音が秀吉の胸を揉んだ事に対する怒りであり、雄二と秀吉はため息を吐く。

「……これも違うな」

「って、何でボクの胸を揉むの!?」

「……なら、いや、これは明らかにサイズが違う」

明久の怒りの声など気にする事なく、理音は明久の胸に手を伸ばし、明久は驚きの声をあげるが理音は表情を変える事なく、次の獲物を探すが瑞希の胸をじっくりと見た後、瑞希のは確実に違うと言う。

「……お前は何がしたいんだ?」

「ん?　いろいろと俺なりに分析をしようと思ってな。流石に雄二は筋肉質だな。参考にならない上につまらん。やはり、男のでは参考にならんな」

雄二は呆れ顔で理音に聞くと理音は自分なりの答えを出そうとしているようでデータを集めていると言う。

「……リオは何のデータを取ってるんだろうね」

「……何がしたいかまったくわからんのじゃ」

つまらないと良いながらも無表情のまま雄二の胸を触っている理音の様子に明久と秀吉は顔をひきつらせながら言う。

# 第148問

「……それで、データは集まったのか？」

「いや、まったく参考にならなかったな」

雄二は理音の手を引き離し、ため息を吐きながら聞くと理音は表情を変える事なく、データ収集は失敗だったと言う。

「リオ、何でデータを取ろうと思ったの？」

「ん？　さっき、屋上であるカップルにあってな。いろいろと質問してな。その返答を参考に俺なりにある推測を立ててデータを取ろうと思ってな」

『屋上にカップル？　ぶち殺せ！！！！』

明久は理音の行動の意味がわからずに顔をひきつらせたまま聞くと理音は平然と屋上で恭二と友香に会った事を話すと明久と康太を中心にクラスメート達は全力で屋上に向かい駆け出し、

「……いや、そのデータが何に対応するのかまったくわからないんだが」

「……まったくじゃ」

理音の言葉とクラスメート達の行動に雄二と秀吉は苦笑いを浮かべながら言い、

「ん？　俺の脈拍や体温、呼吸数の変化の有無。データサンプルとして秀吉の容姿、触れなかったが島田の胸のサイズ、アキを始めとした友人に分類される人間との触れ合い」

理音は雄二と秀吉の疑問に答える。

「それで、何か参考になったの？」

「だから、ならなかったと言ってるだろ。優子に無意識に近づいた時に起きた行動が俺には理解できない」

美波は瑞希の後ろに隠れたまま理音に聞くと理音は平然と言う。

「えーと、それは木下さんが前田くんの特別って事で良いんですよね？」

「……現状で言えばわからん。データが不足している」

瑞希は理音の言葉に苦笑いを浮かべて聞き返すが理音は自分の行動が理解できずに首を傾げており、

「……わかっていたが明久とは違うタイプの鈍さだな」

「……なんと言ってよいのか、わからんのじゃ」

雄二と秀吉はため息を吐く。

# 第１４９問

「それじゃあ、木下さんはどうするのよ？　あんたのせいで木下さんが使いものにならないって、霧島さんと工藤さんがきてたのよ」

「ん？　そうなのか？」

「えーと、前田くん、さっきも話をしましたけど」

美波は理音の鈍さにため息を吐きながら言うと、翔子と愛子がきた時の優子の話を理音はまったく聞いていなかったようで首を傾げると瑞希は苦笑いを浮かべる。

「そうじゃ、理音、姉上をどうにかして欲しいのじゃ」

「そうだな。さっきのデータ収集はなんの役にも立たなかったからな。優子から直接データをとってくるのも悪くないな」

秀吉は優子の事を心配しているのか口調を強くして言うと、理音の目的はすでにデータ収集に変わっており、先ほど優子な会えと言われた時の照れたような様子はまったくなく、何かを企んでいるように笑っている。

「……秀吉、今の理音をお前の姉に会わせるのは危険じゃないか？」

「……そんな気もしてきたのじゃ」

いつもの邪悪さが見える笑い方に戻っている理音を見て、雄二は苦笑いを浮かべると秀吉は理音と優子を会わせる事に不安に思ったよ

うで苦笑いを浮かべるが、

「Aクラスに行ってくる」

「はい。前田くん、頑張ってきてください」

「ちゃんと木下さんの話も聞くのよ」

理音は邪悪な笑みを浮かべたまま、優子のところに行ってくると言うと理音の笑みに何も感じないのか瑞希と美波は理音を応援するように理音を送り出している。

「……秀吉、理音を追いかけなくて良いのか？」

「……その場所にワシがおると姉上に折檻されそうなのでのぅ」

「……お前も大変だな」

雄二と秀吉は理音を止め損ない2人で顔を引きつらせる。

# 第１４９問（後書き）

どうも、作者です。

最近の雄二と秀吉の立ち位置は苦労人。（苦笑）

理音のズレた行動にまったく違和感を感じない瑞希と美波はどう思われてるのかな？（苦笑）

# 第１５０問

（理音と両想い♪　清涼祭は当然、デートよね♪）

優子は相変わらず妄想の世界の中にいるようで１人で机の上でのたうちまわりながら笑っており、

「……工藤さん、代表、木下さんはいつまであんな調子なんだい？　元に戻す方法は見つからなかったのかい？」

「えーと、ボクも代表もどうして良いかわからないんだよね。原因を作った前田くんもちょっといつもとは違ったし」

その様子にクラスメート達が若干ひいているなか、利光は愛子に聞くと愛子は苦笑いを浮かべている。

「代表もそうだけど優子もあんな感じだし、人を好きになるって言うのは凄いね」

「そうだね。相手が誰だろうと凄い事だと思うよ」

愛子は少しだけ羨ましそうに言い、利光が頷いた時、

「工藤、お前は康太が好きなんじゃないのか？　後、霧島、工藤、なんとなくだが、こいつは変態臭がするから葬って良いか？」

理音は平然とＡクラスに入ってきて、利光に花火を向けている。

「ちょ、ちょっと、前田くん！？　いきなり何を言うんだよ」

「……なんだい。君は？　ずいぶんと失礼だね」

「……理音、元に戻った？」

突然現れた理音の姿に3人はそれぞれ異なった反応をする。

「ん？　工藤が康太をからかっているのはそういう事だと思っていたんだが、違ったか？」

「ち、違うよ！？　何でそんな事になるの？」

理音は愛子の反応に理音は表情を変える事なく言うと愛子は慌てて否定するが、

「ん。そうか」

理音は追求する事はなく、

「……それで、理音は何のよう？」

「優子を元に戻しにきてくれたの？」

「あいつが妄想娘なのは俺の知った事ではない」

翔子と愛子は優子を理音に任せて良いかと聞くが理音は表情を変える事なく言い切る。

# 第１５０問（後書き）

どうも、作者です。

理音は自分以外の恋愛感情は正確に見抜きます。（爆笑）

優子の気持ちにも気づいていたから、距離をとろうとしたわけですが、理音の何かが優子を襲いました。（爆笑）

データ収集が目的になり、自分の知的好奇心だけで動く理音はどうするんでしょう？

後、どうでも良い話しですが、先日の理音が秀吉の胸を揉んだかいはアクセス数１．５倍でした。皆さん、どんだけ秀吉ネタが好きなんですか？（爆笑）

## 第151問

「それじゃあ、何しにきたの？」

「データ収集だ」

愛子は理音の言葉に不満そうな表情で聞くが、理音は表情を変える事なく言い切る。

「データ収集？　って、何をするの？」

「ん？　あぁ、いくつかあってな。近い人間との接触時に起きる脈拍や体温、呼吸数の変化の有無だ」

愛子は理音の言葉に首を傾げると理音は表情を変える事なく言い切る。

「……前田くん、ちなみにデータの収集方法は？」

「ん？　今のところ、アキ、雄二、秀吉の胸を揉んだ」

愛子は理音の様子に苦笑いを浮かべて聞き、理音は当然だと答えると、

「……雄二、浮気は絶対に許さない」

「よ、吉井くんの胸を揉んだ？」

翔子は背後に真っ黒なオーラを放ちながら教室を出て行き、利光は

悔しそうに唇を噛んでいる。

「えーと、聞いて良い？　それじゃあ、前田くんがＡクラスにきたのは優子の胸を揉みに？」

「あぁ。現状で言えば、その時に起きる俺の変化を調べない事には結果がでない」

愛子は引きつった笑みを浮かべて聞くが理音の表情が変わるわけがなく、優子に近づこうとするが、

「待って!?　待って!?　前田くん、それは今の優子にとって逆効果と言うか、いろいろと問題があるから」

「何がだ？」

「関係性とかだよ。前田くんが自分の気持ちを理解してないのにそんな行動しちゃダメだよ」

愛子は理音の腕をつかんで理音を止める。

「なぜだ？　今までだって、何度も揉んでるだろ？」

「それはボクも前田くんと優子が両想いだと思ったからであって、今は状況が変わったの」

理音は愛子が自分を止める理由がわからないと言うが、愛子は今までとは違うと言う。

「状況が変わった？」

「そう。変わったの。前田くんは優子の事を好き？　友人じゃなく、女の子としてだよ」

理音が首を傾げると愛子は真っ直ぐと理音を見て聞く。

## 第１５１問（後書き）

どうも、作者です。

雄二、とばっちり。（爆笑）

最初は雄二の胸を揉む予定はなかったんですが、翔子がいるから揉んどきました。

個人的に理音と愛子の絡みが好きです。男女間の友情って感じがします。（苦笑）

# 第152問

「……それを確認するためにデータを集めているんだろ」

「そうかも知れないけど、それはそれなの。その答えで前田くんが優子に恋愛感情がないとしたら、優子はどうするのよ？」

理音は愛子の質問の意味がわからずに首を傾げると愛子は理音の答えの出し方に問題があると言う。

「ボクだって、優子と付き合いが長いわけじゃないけど、優子は前田くんの事が本気で好きだよ。最初の出会いはきっと最悪だったんだろうけど、優子は前田くんのそばだと安心して素を出せる。前田くんと出会う前は優等生を演じてるって感じだったけど、前田くんのそばだといろんな表情を見せるようになった優子は女の子として充分に魅力的なはずだよ。そんな優子をかわいいと思ったから、前田くんは抑えが効かなくて優子にキスをしたんだよね？　それは前田くんが優子の事を好きだってことでしょ。ホントは前田くんだって、それをわかっているのにどうして自分の気持ちに蓋をして答えを出そうとするの？　もっと素直に自分の『心』に従えないの？」

「……工藤、お前は俺が感情で動く事がどれだけ危険かわかるか？」

愛子は自分の考えを理音にぶつけるが、理音は表情を変える事なく聞き返す。

「危険？」

「俺が感情的に動くと言う意味をお前は理解していないようだな。

『俺の心はあの日から壊れている』。自分で言うのもなんだが、俺の攻撃性は異常だ。それはある事件で俺の心には壊れた部分があり、抑えきれないためだ……俺の攻撃性は何かで抑えつけなければ暴走し、全てを巻き込み破壊しはじめる。言いたくはないが、俺の頭はその方法を簡単にはじきだす。論理的、科学的に情報を集めて答えを導き出すのは俺が人であるために必要な事だ」

愛子は理音が何を言いたいかわからずに首を傾げるが、理音は表情を変える事なく、自分を化け物の類だと言い切る。

# 第１５２問（後書き）

どうも、作者です。

愛子の言葉は理音の核心をついていますが、理音は簡単には認めるわけにはいきません。（苦笑）

理音は自分の欠落した部分も分析しており、それを抑えつけるための行動が理音の知的好奇心に繋がっています。

全てを分析して答えを導き出す理音は心に従うのか？

どうなるんでしょうか？

# 第153問

「どう言う事？」

「……言葉の通りだ」

愛子は淡々と自分を化け物と言う理音を見て首を傾げるが理音は表情を変える事なく言う。

「でも、今の話を聞く限りじゃ。前田くんも優子の事が好きなんでしょ。それなら……」

「……」

愛子は一先ず、理音が優子の事を好きだと認めさせたいようで理音に向かい言うと理音の顔は小さく歪む。

「前田くん」

「……お前は俺に何を期待しているんだ？」

愛子は理音の変化に気づいたのか、理音の顔を覗き込むと理音は愛子に聞き返す。

「何？　って、優子の事を」

「……なぁ。工藤、お前や瑞希、島田もそうだが、どうして直ぐに答えを出したがるんだ？」

「えっ！？」

真剣な表情をする愛子に理音は表情を変える事なく言うと愛子は驚きの声をあげる。

「お前から言わせれば、素直に心に従わない俺はヘタレと言ったそう言う類の情けない男に分類されるんだろうが、周りに流されて答えを出すのは本当に正しいのか？　何かあった時にお前が今の俺の立場にいたら、周りを責めずにいられるか？」

「それは、わからないけど……」

理音の言葉に愛子は言葉をつまらせると、

「今のままでは俺には答えは出せない。あの日の事もあいつの事もだからこそ。俺は考えてから動く。そう決めたんだ。これが俺が自分の心に従った結果だ」

「前田くん……」

理音は理音なりに自分の心に従っていると言うと優子のもとまで歩き出し、愛子は何も言えずに理音の背中を見送った時、

「……前田くんって、口で言うより、絶対に体が先に動くタイプだよね」

優子のもとに着いた理音はまた体が勝手に動いたようで、再度、優子の唇を奪い、愛子はその様子に苦笑いを浮かべる。

## 第153問（後書き）

どうも、作者です。

口ではいろいろ言った割に理音暴走♪（爆笑）

理音は感情的？　それとも理性的？

本当の理音はどちら何でしょうか？（苦笑）

そして、妄想ヒロインは？（悪笑）

# 第154問

「理音？」

「……」

優子は妄想のなかにいたが、自分の唇に何かが触れる感触で現実に引きずり戻されると、直ぐ目の前には理音の顔がある。

「近っ！？　近いわよ。理音！？」

「ん？　そうか」

優子は理音がもう1度、自分にキスしていた事は目に入っていなかったようで、慌てて理音に距離を取るように言うと理音は頷き、優子から少し離れる。

「ど、どうしたのよ？」

「……少し調べたい事があってな」

優子は理音が目の前にいる理由を聞くと理音は表情を変える事なく、調べ物があると言うと、

「……脈拍、体温にわずかな上昇は見られるが呼吸数には変化なし……しかし、よりにもよってどうして俺はこんな貧相なもので」

優子に調査項目の許可をとらずに彼女のわずかなふくらみに自分の脈拍や体温の変化がある事が納得できないと言う。

「あんたはいきなり何をしてるのよ！？」

「気にするな」

「気にするわよ！？」

優子は理音のいきなりの行動に顔を真っ赤にして拳を振り下ろすが、理音は表情を変える事なく、彼女の拳を受け止めて言うが、状況の理解できない優子は声を上げる。

「……ん。まぁ、悪くはないな」

「いきなり、何をするのよ！？」

「……黙っていろ」

優子の事などまるでどうでも良いと言いたげに理音はつかんでいた腕を引き寄せると、優子は理音の腕のなかにすっぽりと収まり、

「……なるほど」

「ちょっと、理音。恥ずかしいよ。こう言うのは2人っきりの時が良いよ」

優子は理音の腕の中で恥ずかしそうに言うが、理音は優子の身体の感触を味わった後、答えに行き着いたのか大きく頷くと、

「前田くん、答えは出た？」

「……工藤さん、あんまり2人をからかうのはどうかと思うよ」

愛子が理音の腕の中で耳まで真っ赤に染めている優子をニヤニヤと笑いながら言うと利光が愛子をいさめる。

# 第１５４問（後書き）

どうも、作者です。

理音に自覚はないけど、Ａクラスでも外堀は埋まって行く。（爆笑）

いちゃついているようにしか見えません。

# 第１５５問

「……体温及び脈拍にわずかな上昇が見られたが、現状のサンプルデータとしては俺が同年代の異性との接触データが少ないから保留だな」

「保留？」

「あれ？　前田くんって実技の経験ないの？　何ならボクと実技のお勉強する？」

理音は優子を抱きしめたままデータ不足と言うと優子は理音が何を言っているかわからないため、きょとんとしているが、愛子は理音をからかうように言う。

「悪いな。未経験者に指導して貰うほど俺は経験は浅くない。一般的に言われる『愛のある行為』と言うものはした事がないだけだ。快楽を求める行為とサンプルデータ収集でなら経験済みだ」

「……前田君、それを人前で言うのはどうかと思うよ」

理音は表情を変える事なく言い切り、利光は理音の言葉に眉間にシワを寄せると、

「あんたはいきなり、何を言ってるのよ！？」

優子は理音の腕から這い出るなり、理音を殴りつけるがその拳は空を舞い、

「優子、お前がどこまで妄想していたかわからないが、その妄想を実現できるかは保留だ」

「へ？　どういう事？」

「現状で言えば、俺の中にあるお前への感情は恋愛感情と言うものに分類されるか、性欲に分類されるかがはっきりしない」

理音は自分の言いたい事だけ言うと、Ａクラスを出て行き、

「……どういう事？」

「まぁ、優子がある意味大切にされてるって事じゃない？　前田くん、優子とはただエッチがしたいだけじゃないみたいだし」

「……工藤さん、君も前田君と一緒でもう少し言葉を選べないのかい？」

優子は意味がわからずに首を傾げると愛子は苦笑いを浮かべ、利光はため息を吐く。

# 第１５６問

「止めろ。割れ、割れるぅぅぅ！？」

「……理音、優子はもう大丈夫？」

理音がＦクラスの教室に戻ると雄二にアイアンクローを仕掛けている翔子が理音に気づき声をかける。

「あぁ。一先ずは元気に拳を振り回していたぞ」

「……理音、お主はいったい何をしたのじゃ？」

理音は翔子の質問に答えると自分の席に座り、いつも持ち込んでいるノートパソコンの電源を入れると秀吉は理音の言葉に理音が優子を怒らせたと思ったようでため息を吐くが理音が気にする事はない。

「り、理音、お前は翔子に何を言ったぁぁぁぁぁぁっ！？」

「……浮気は絶対に許さない。雄二がきちんと謝って、これにサインすれば許す」

雄二は自分が翔子に攻撃を受けているかがわからずに原因を作ったであろう理音に聞くが、翔子は婚約届けを手に雄二に言う。

「……霧島、現状で言えば、俺は雄二に手を出す気はない。男に興味はない。何より、雄二のは優子と違って、揉んでも楽しくなかったしな」

「……そんな事ない。雄二のは揉んでも楽しい」

「翔子!?　お前はどこを触る気だ!?」

理音は翔子の言葉を否定すると翔子は雄二をつかんでいた手を頭から下半身に伸ばそうとして、雄二は全力で翔子の魔の手から逃げるが、

「……雄二のエッチ」

「ちょっと待て、翔子!?　何で、お前は顔を赤くするんだ!?」

なぜか、翔子は頬を赤くし、雄二は翔子に何もされてない知らしめるために大きな声で言う。

「……雄二、いちゃつくなら、外でやれ。ここで騒がれると俺の考えがまとまらない」

雄二が騒いでいる姿に理音はこれから雄二に起きるであろう事を予想して教室を出ていけと言うと、クラスメート達は怪しげな覆面をかぶりはじめ、身の危険を感じた雄二は全力で教室から逃げ出す。

## 第１５６問（後書き）

どうも、作者です。

ｉｆどうしよう？（苦笑）

書きたい気持ちもやっぱりありますが、たぶん、完全オリジナルストーリーになるし大変だと思います。（苦笑）

できれば多くの方の意見が聞きたいです。

感想もセットでとは言いません。

1．書いちゃえば良いのに。

2．本編に力を入れて欲しい。

2択で番号だけでもお願いします。

締め切り予定は第１６０問を書き上げるくらいまでで？

皆さんのご意見をお願いします。

# 第157問

「……」

「前田、何かわかったの？」

雄二と翔子が出て行き、静かになった教室で理音がノートパソコンのキーボードを叩こうとした時、美波が理音に声をかける。

「……現状で言えば、何もわからん」

「そうなんですか？」

眉間にしわを寄せながら理音が何もわからないと言うと瑞希は理音の様子に苦笑いを浮かべる。

「理音、何もわからんとは言うても何かなかったかのぅ」

「何かと言われれば、データ収集のために優子の胸を揉んだんだが、わずかな体温と脈拍の上昇が見られた」

秀吉は何もわからないと言う理音を見てため息を吐きながら言うと理音は表情を変える事なく、優子の胸を揉んだと言う事実だけを告げる。

「……ねぇ。前田、あんたは人前でそんな事をするのはやめなさい」

「なぜだ？」

美波は理音の言葉に顔をひきつらせて言うが、理音には理音なりに意味がある行動だったため、美波の言葉の意味がわからずに聞き返す。

「あんたは人目なんて気にしないだろうけど、木下さんは女の子なの。あんたのおかしな行動で変な噂がたったらどうするのよ？」

「変な噂？」

「あるでしょ。いろいろとあんたは天才なのにそう言うのはわからないのね」

美波は優子のためを思って言うが、理音は依然として首を傾げているため、美波はため息を吐く。

「だから、調べてるんだろ」

「……そうじゃないわよ。あんたの言うわずかな体温と脈拍の変化って言うのはあんたが木下さんを好きって事でしょ」

「わからんだろ。俺は自分は巨乳好きだと思っていたが、実は貧乳好きだったのかも知れないだろ」

美波は理音にどうしても優子を好きだと認めさせたいようだが、理音は今までの自分の好みを確認するため、表情を変える事なく、美波の胸を揉み言う。

## 第１５７問（後書き）

どうも、作者です。

ｉｆ賛成数現在３票です。
反対数はなし。

このまま行くのかな？

票伸びないと書く時も書きにくいかな。（苦笑）

# 第158問

「……なぜだ？　島田の胸では体温と脈拍に変化は感じられない」

「あんたはいつまでウチの胸を触ってるのよ！！」

理音自分の立てた仮説とは違う答えに眉間にシワを寄せるが美波の胸を触っている指は動いており、美波は怒りで顔を真っ赤にして理音を殴りつけるが、

「……張りと揉み心地は良かったがやはり物足りないな。となると俺は巨乳好きのままで間違いないな……いや、俺はサイズに関わらず乳が好きなのか？　だとしても、優子の胸を揉んだ時に感じた高揚感は……」

理音は美波の拳を交わしながらぶつぶつと考え込んでいる。

「な、何であたらないのよ？」

「……島田」

美波は攻撃すべてを交わされていくため、疲れたようで息切れをしているなか、理音が美波を呼ぶと、

「何よ。もう触らせないわよ」

「えーと、美波ちゃん、どうして、私の後ろに隠れるんですか？」

美波は理音を警戒して瑞希の後ろに隠れて言う。

「下着のサイズが合ってないぞ。見栄を張るな」

「あんた、殺すわ」

理音は表情を変える事なく、美波の胸を揉んだ感触から言うと美波の声には殺意が混じるが、

「落ち着け。見栄を張るのも良いが、間違ったサイズをつけていると成長の妨げや形が悪くなると言う話を知り合いに聞いたのを思い出しただけだ」

「そ、そうなの？」

理音からの情報に美波はきょとんとした表情で聞き返す。

「あぁ。俺は本職じゃないから、本当かはわからないが、気になるなら揉んだ詫びに聞いておいてやる」

「お願いするわ」

理音はそれなりに美波に気を使ったようでそう言うと美波は理音の手をがっちりと握り締めお願いする。

「……島田、それは騙されているのではないのかのぅ」

「あはは」

秀吉は理音と美波の様子にため息を吐き、瑞希は苦笑いを浮かべる。

## 第１５８問（後書き）

どうも、作者です。

こうやって見ると理音変態ですね。（苦笑）

理音は自分を乳好きと判断しました。（爆笑）

どんどん、本筋から外れて行く理音はどこに向かうのでしょうか？

ｉｆ賛成票４票です。

# 第159問

「……」

「理音、今日は学園長の手伝いは良いのか？」

HRを終えると理音がカバンを手に教室を出て行こうとするのを見て、秀吉が理音に声をかける。

「あぁ、昨日、プログラムはできたからな。しばらく動かしてから調整だ」

「理音、お前、何かしてるのか？」

理音の答えに雄二が首を傾げると、

「あぁ、召喚大会決勝戦の演出や他にもいろいろな」

「……リオの演出？　CGとか使うの？　それとも流行りの3Dとか？」

「まぁ、楽しみにしておけ」

理音は邪悪な笑みを浮かべて笑うと、明久は興味があるのか食いつき、理音は楽しそうに笑う。

「……まぁ、清涼祭の出し物だし、おかしな事はするなよ。姫路の件もあるんだ。俺達、Fクラスの問題から学園全体の問題になったら目も当てられない上に、お前が出ていっても姫路の父親を説得出

来なくなるからな」

「あぁ、それくらいはわかっている」

雄二は理音の笑みに何か裏があると感じ、理音を引っ張ると瑞希に聞こえないように彼女の転校を防ぐためにおかしな事をするなと理音に釘を刺す。

「もう良いか？　帰って家事をしないといけないから、今日は急いで帰らないといけないんだ」

「そうか……なぁ、理音。お前に頼みたい事があるんだ。明久、お前もちょっとこい」

「えっ？　ボクも」

理音が教室を出て行こうとするが、雄二は何かを考えついたようで明久を呼ぶ。

「それで、何のようだ？」

「あぁ。俺と明久は召喚大会に出るんだ。それで悪いが勉強を教えてくれ」

「なるほど、リオに教えて貰うのはありだね」

雄二は理音に勉強を教えろと言うと明久がいい考えだと頷くと、

「別にかまわないが、やる気を出すなんてどうしたんだ？　お前らは召喚大会なんか……如月ハイランドのペアチケットか？」

理音は学園長から2人が召喚大会に出場すると聞いているが、何かを思いついたのか邪悪な笑みを浮かべる。

## 第１５９問（後書き）

どうも、作者です。

とりあえず、優子は後回しで家事優先の理音。（爆笑）

まぁ、特別問題での最優先事項はタイムサービスだから仕方ない。（苦笑）

ｉｆ賛成票は４票＋優子に萌えるなら賛成１票。

次で締切？

４票で執筆もなんか締まらないかな？と思いながら話を考えてます。

# 第１６０問

「アキ、ペアチケットをとったら、誰を誘うの？」

「教えてください！！」

理音の言葉に瑞希と美波は反応し、明久に詰め寄る。

「……理音」

「何だ？」

雄二は理音の言葉が２人を煽ったと思い、理音を睨みつけるが理音は楽しそうに笑っている。

「誰？　誰と行くつもりよ」

「吉井くん、教えてください！！」

「誰とって、決まってないけど……雄二」

瑞希と美波に詰め寄られて明久は助けを求めるように雄二を呼ぶが、その選択は間違っており、

「やっぱり、アキは坂本とそう言う関係だったのね」

「不潔です！！　男の子同士なんて不潔です！！　あんまりです！！」

瑞希と美波はいろいろと間違った解釈をし、

「あの2人は本当にアキの事が好きなのかわからなくなるな」

「……おい。理音、お前はわけのわからない事を言うな」

理音は瑞希と美波の反応を見て楽しそうに笑い、雄二は明久との間にたてられた疑惑に心底嫌そうな表情で言う。

「ちょっと、2人とも誤解しないでよ。だいたい、雄二みたいなゴリラと行くなら、秀吉とデートに使うに決まってるでしょ」

「……明久、何度も言わせるではない。ワシは男じゃ」

明久は雄二となど死んでもゴメンだと言う勢いで否定し、秀吉を誘うと言い切ると秀吉は顔を赤らめる。

「秀吉、顔を赤らめるな。明久、お前もおかしな事を言うな。姫路、島田、俺と明久は優勝できたらチケットは売るつめりだ。プレミアムチケットだし、結構な額で売れるだろ」

「そ、そうだよ」

雄二は話を強制的に終わらせようとし、明久もそれに便乗しようとするが、

「それを霧島が手に入れ、雄二は強制的にデートと」

「理音、恐ろしい事を言うな!!」

理音は話に割り込み、雄二は理音の言葉で翔子とのデートを想像したようで顔を真っ青にして理音を怒鳴りつける。

## 第１６０問（後書き）

どうも、作者です。

先日までのｉｆの投票ありがとうございました。

毎日更新は無理ですが、頑張って書いていきたいと思います。（苦笑）

# 第１６１問

「否定できないだろ？」

「……言うな。考えないようにしてるんだから……そうだ。理音、俺と明久が優勝したらお前が俺達からチケットを買え、そして、秀吉の姉を誘え。今日のわびとか言ってな」

理音は雄二の顔を見て邪悪な笑みを浮かべたまま言うと、雄二は良い事を思いついたと言いたげに言うが、

「悪いな。お前にチケットを貰うまでもなく、プレオープンの入場チケットなら持っている」

「どうしてだ？」

「安全対策とか相談を受けてな。いろいろと手伝ったんだ」

理音は如月ハイランドのチケットを持っているため、雄二の誘いにはのらない。

「そんな事もやってたんだ」

「あぁ。俺がこの街の出身と言う事で地元の発展にと言われてな。あまり興味もなかったが、確かにおもしろそうではあったんでな」

明久は瑞希と美波から解放されたため、理音の言葉に苦笑いを浮かべると理音は表情を変える事なく言い切った後、

「……そう言えば、確か今回のペアチケットには何か特典があると聞いた気が、アキ、雄二、何かしらないか？」

「えーと、確か」

「知らん。俺も明久も何も知らん！！　お前も余計な事を言うな」

理音は邪悪な笑みを浮かべながら、明久と雄二に聞くと明久は首を傾げながら答えようとするのを雄二が割り込む。

「そうか。霧島にバレたら大変だな」

「お前、知ってて言ってるだろ」

「当たり前だ。ウェディング体験とか言ったよな。知ってるか？企業の権力ってのはなかなか強力なんだぞ」

理音は雄二をからかうように言うと、

「ウェディング体験ってなんですか？」

「なになに？」

瑞希と美波が食いつき、

「ん？　さっき言った通り特典で……」

「悪いな。２人とも、俺と明久はこれから理音と出かけるんだ。時間がないから行くぞ。明久」

「う、うん」

理音は邪悪な笑みを浮かべたまま、瑞希と美波に説明しようとするが、雄二はこの2人にウェディング体験の事がバレると面倒な事になると思い、明久と一緒に理音を引きずって行く。

# 第162問

「あれ？　校門の前にいるのって木下さんだよね？　リオを待ってるのかな？」

玄関を出て校門に向かう途中で、明久が校門によりかかり空を見上げている優子を見つける。

「どうする？　お前を待ってるなら、俺達は今日は退散するぞ」

「別にかまわんだろ。俺は優子と何か約束していたわけではないしな」

雄二は先ほどの仕返しを思いついたのかニヤリと笑い言うが、理音が反応する事はなく優子に声をかける事はせずに校門を出て行こうとすると、

「ちょっと、理音！？」

当然、優子は慌てて理音を止める。

「何だ？」

「何だって、あのさ」

理音は表情を変える事なく、振り返ると優子はいろいろと聞きたい事がありそうな表情をしており、

「理音、今日は俺達は帰るからしっかりやれよ」

「えっ！？　ちょっと、雄二、リオの家に行かないの？　ボクの夕飯の予定が、ボクのカロリーがぁ！！」

「明久、お前、直ぐに理音にたかろうとするのをやめろ」

雄二はニヤニヤと笑い、明久は理音に夕飯をたかろうとしていたようで涙を流すと雄二はため息を吐き、明久を引きずって行く。

「それで、何のようだ？　何もないなら、俺は怜生を迎えに行くぞ」

「な、何のようだ？　って」

理音は自分からは優子に言う事はないと言うと、当然、優子は不満そうな表情をする。

「言いたい事があるなら、さっさと言え」

「だ、だから、あの、あたしと理音の関係ってさ。彼氏彼女になるのかな？　って」

優子は理音との関係性をはっきりさせたいようで理音の目を見て言う。

「……保留だと言わなかったか？」

「それで納得すると思ってる？」

理音はさっき話したと言うが優子が納得できるわけがなく、

「……なら、どうすれば良いんだ？　お前の言う彼氏彼女と言うものはどういうものだ？」

「そ、それは……デートしたりとか」

理音は優子の様子に聞き返すと、優子は顔を赤くして理音から目を逸らす。

# 第１６２問（後書き）

どうも、作者です。

皆さんの応援のおかげで総合評価が１０００ポイントを越えました。
ありがとうございます。

記念に何か……と言いたいところですが、
コラボはうちの場合は記念にならない。
座談会は……理音とじゃ話がつながらない。
ん？　『嘘～』と同じ流れだ。（苦笑）
何かやった方が良いのかな？

## 第163問

「ふむ……他には？」

「ちょっと、何で、そんな反応なのよ？」

優子の言葉に理音は何かを考えるように頷き、理音は情報収集に移ったのか、優子に何か言えと言うが、優子は当然、不満げな表情をする。

「情報収集だ。現状で言えば、俺の中での男女間の行為で言えばセッ……」

「こんなところで何を言うつもりよ！？」

理音の言葉を優子は慌てて遮り、

「……そう言うのだって、好きな人としたいでしょ？」

「そうか？」

恥ずかしそうに言うが、理音の表情は変わる事なく頷くと、

「なら、優子は俺とやりたいのか？」

「あんたはこんなところで、そんな事を言うな！！」

優子にドストレートで聞き、優子は顔を真っ赤にして声をあげる。

「なるほど、否定はしないわけか……」

「ちが！？　そうじゃないでしょ！？」

理音は優子の反応に何かを考えるように頷くと優子は慌てて理音を怒鳴りつけるが、

「個人的な好みで言えば……胸が」

「あんた、あたしにケンカ売ってるわけ？」

理音は優子の顔をまじまじと見た後、優子の胸を見てため息を吐くと優子の額には青筋が浮かぶ。

「ん？　別にそう言うわけじゃない。個人的な好みで言えば、容姿、性格、リアクションの良さは充分なんだが……胸が」

「あんた、やっぱり、あたしにケンカ売ってるでしょ！！」

理音は優子の胸を見てため息を吐くと優子は理音の胸ぐらをつかむが、

「まぁ、徐々に育てれば良いか」

「ふぇっ！？」

理音はくすりと笑うと優子の耳元でささやき、優子は理音の言葉に声を裏返す。

「行くぞ。怜生を迎えに行かないといけないからな」

「えーと、それって？」

理音は優子の手を自分の胸ぐらから放すと理音は歩き出し、優子は理音の言葉の意味に頭がついて行かないようで首を傾げると、

「さっさとしろ。置いてくぞ」

「えっ！？　う、うん」

理音は優子の様子に優しげな表情で笑い、優子は理音の笑顔に顔を赤くしながら頷き、理音の隣に並び歩き出し始める。

## 第１６３問（後書き）

どうも、作者です。

優子の反応にひとまずは恋人になったであろう２人？

まわりは変化に気づくんでしょうか？

まぁ、関係性がはっきり変わっても理音のやる事は変わらないだろうしね。

周りもまたいちゃついてるくらいです。（爆笑）

# 第１６４問

「雄二、アキ、お前もこい」

「ん？　理音、何かようか？」

理音は登校すると自分の席に座ってあくびをしている雄二と明久に声をかける。

「リオ、おはよう。どうしたの。何かくれるの？」

「ん？　栄養剤で良ければいくらでもくれてやるぞ」

「そ、それはいらない」

明久は理音が何かくれると思ったのか駆け寄ってくるが、理音の言葉で１歩さがる。

「それで、何かようか？」

「あぁ、昨日は付き合えなかったからな」

雄二は理音が声をかけてきた理由が思い当たらないようで首を傾げると理音は昨日は優子と話をしたため、２人に勉強を教える事ができなかった事を謝ろうとするが、

「不潔です！！　前田くんには木下さん、坂本くんには翔子ちゃんがいるのに！！」

「そうよ。それなのにアキまで！！」

相変わらず、瑞希と美波はわけのわからない事を叫び、

「違うから！？　ボクはそっちじゃないから」

「……いい加減にしろ」

明久は全力で否定し、理音はため息を吐く。

「……あの2人にかまっていると話が進まないからな。お前ら、家にパソコンはあるか？　アキは確か持ってると言ってたよな？」

「ボクはあるけど」

「……この間まではあった」

理音は瑞希と美波の相手はしないと言うと本題に入ると理音の質問に雄二はため息を吐く。

「この間まではあった？」

「……この間、翔子から逃げる途中で叩き壊された」

「……お前らは何をやってるんだ？」

雄二のため息混じりの言葉に理音はため息を吐くと、

「なら、しばらくはこれを貸してやるから、これを使え」

理音は今日はいつも持ってきているノートパソコンの以外にもう1台ノートパソコンを持ってきている。

「これを使えってのはどう言う事だ？」

「一応は昨日言ってたものだ。俺はばばあの手伝いもしないといけないから、毎日付き合えるわけじゃないしな」

「雄二の疑問に理音はノートパソコンを立ち上げると2つのフォルダが用意されている。

「俺用と明久用って何か違うのか？」

「お前とアキじゃ、覚え方が違うだろ」

雄二は理音が自分と明久のために勉強の資料を作ってきた事を理解し、説明を求めると理音は明久用のフォルダを開く。

「凄いです」

「そうなの？」

「はい。わかりやすく解説されている上に関連した事もきれいにまとめられてます」

瑞希は理音のフォルダの出来に驚きの声をあげる隣りで、

「アキはただ、教科書や問題集をやらせても飽きるだけだろ。こっちはもっと凄いぞ」

「ウソ！？　この武将ってこんな事をしたんだ」

「……今更ながら、流石、幼なじみだな。明久の扱いを心得てる」

理音は楽しそうに日本史のフォルダを開くと明久はゲームで知っている名前があり、食い入るようにパソコンの画面を覗き込み、雄二は理音と明久の様子に苦笑いを浮かべる。

## 第165問

「しかし、良いのか？　パソコンまで貸して貰って」

「別にかまわない。こっちのとは違うからたいした性能は良くないぞ。市販品より、少し良い程度だ」

雄二は理音がノートパソコンを貸してくれた事を悪いと思っているようで確認をすると理音は気にするなと言うが、

「壊した場合は弁償させるからな。霧島に壊さないように言っておけ」

「……あぁ。しかし、やっぱり、パソコンがないと不憫だな」

壊した場合は弁償だと言うと雄二は頷きながらも、翔子にパソコンを壊された事を思い出してため息を吐く。

「エロ画像もダウンロードできないしな」

「……いきなり、朝から教室の真ん中で言うな」

「気にするな。だいたい、この年になってパソコンがあるのに1つも入っていない方がおかしい」

理音は平然と言い切ると雄二はため息を吐くが、教室からは理音を賞賛する声が響き、

「何なら、こっちもつけるぞ」

理音は不敵な笑みを浮かべながら、ＵＳＢメモリーを懐から取り出す。

「リオ、ダメだよ。朝から鉄人に見つかったら」

「アキの分も用意したんだが、いらないのか？」

「もちろん、欲しい！！」

明久は理音の言葉を１度は否定するが、すぐに本能に従うと、

「吉井くん、そんなものは必要ありませんよね？」

「いらないわよね？」

瑞希と美波から明久に向けてまがまがしい何かが向けられる。

「……あいつらはアキが女に反応する時はあんな反応をするくせに、どうして、アキが男好きだと疑うんだ？」

「……さあな」

「それで、どうする？　いらないなら、康太に渡すぞ」

「……理音の厳選の品は高値が付く」

理音はため息を吐いた後、いらないなら、ムッツリ商会に流すと言い、

「いらないとは言ってぬわっ！？　しょ、翔子、どうして？」

「……雄二、浮気は絶対に許さない」

雄二がＵＳＢメモリーに手を伸ばした時、雄二の頭には翔子の手が伸びる。

「霧島、パソコンは俺のだから壊すなよ」

「……わかった」

「われ！？　われるぅぅぅ！？」

理音は翔子に釘を刺すと康太にＵＳＢメモリーを渡す。

# 第166問

「ねぇ。理音、代表から聞いたんだけど、吉井くんと坂本くんの勉強を見てるってホント？」

「……あぁ。今日からだけどな」

優子は学園長室の奥の部屋に入るなり、パソコンのキーボードを叩いている理音に聞くと理音は表情を変える事なく頷く。

「ねぇ。腕輪って点数が高くなると暴走するんでしょ？　それなのにあの2人に勉強をさせてどうするのよ？」

「……あぁ。あの2人なら、1週間くらい真面目に勉強してもAクラスまでの成績まで行かないから、問題ない」

優子は理音と学園長から聞いていた腕輪の暴走条件を口に出すが理音は表情を変える事なく言い、

「あれ？　暴走ってCクラスの平均くらいで暴走するんじゃないの？」

優子は以前に聞いていた条件と違うため、首を傾げる。

「俺がばばあに頼まれてるのは2つ。腕輪の欠陥の修復。それと同時に修復が間に合わない場合を考えて、暴走条件の範囲をせばめる事だ。計算上ではAクラスの上位レベルじゃなければ暴走はしない」

「そうなの？」

「あぁ」

理音は計算上ではAクラスの上位成績者に匹敵するくらいの成績じゃなければ問題ないと言うと、

「それなら、吉井くんと坂本くん以外でもどうにかなりそうなのね？」

「なかに1部例外もいるけどな」

「……代表と姫路さんよね？」

「忘れるな。お前もその1人だ」

優子は改めて、召喚大会に参加する事を後悔するようにため息を吐く。

「まぁ、アキと雄二の事だ。お前と霧島に当たってもどうにかするだろうが、当たった場合はフォローしてくれ」

「はいはい。頑張るわよ。その代わり……」

「なんだ？　成功したら、ご褒美でも欲しいのか？」

優子は理音が明久と雄二の方を信用しているように見えるため、不機嫌そうに頬を膨らませると理音は彼女をからかうように笑い、

「な、何を言ってるのよ！？」

優子が理音の笑顔に慌てた時、

「……ここが学園長室の1部だって事を忘れるんじゃないよ」

学園長はドアを開けるなり、2人の様子にため息を吐く。

# 第167問

「別に忘れてはいない。それで、ばばあ、そっちはどうなってる？」

「……学園長先生、すいません」

学園長の登場に理音は表情を変える事なく言うが、優子は理音の隣で小さくなっている。

「別にあたしも学園内でしなければうるさくは言わないよ。その代わり、避妊はしっかりとするんだよ」

「学園長先生！？　な、何を言ってるんですか！？」

学園長は理音はからかいがいがないと言いたげに優子を見てニヤニヤと笑うと優子は顔を真っ赤にする。

「もちろん、その時は……」

「あんたはこんなところで何を言う気よ！？」

「……首を絞めるな」

理音は優子の反応とは対称的に相変わらずの無表情で答えようとすると優子は顔を真っ赤にしたまま、理音の首をつかむ。

「はいはい。いちゃついてないで、さっさと状況を話しな。くそじゃり」

「そう思うなら、こいつをからかうな。それは俺の特権だ」

学園長は自分で言ったくせにもう充分だとため息を吐くと理音はつられるようにため息を吐く。

「こっちは暴走条件はプログラムが正常に作動していて、予想値よりは若干、点数が高くても暴走は抑えられるが、修復はやはり間に合わないだろうな」

「直接、修復するわけにはいかないのかい？」

「無理に決まってるだろ。プログラム作動中に下手に侵入すると……」

理音の説明の途中で、エラー音が響く。

「な、なに？」

「どっかのバカが侵入してきたんだ。簡単なトラップに引っかかりやがったな。ずいぶんとレベルが低い……侵入先は、まぁ、予想通りか」

「やっぱり、学生が取られた私立だね」

優子がエラー音に驚いている隣で理音と学園長はくだらないと鼻で笑うと、

「どうする？　破壊プログラムをプレゼントするか？　それとも、ダミーの情報でもつかませておくか？」

「一先ずはダミーの方が後の作戦を考えやすいだろうね」

「そうだな」

2人は憂さを晴らすかのように邪悪な笑みを浮かべながら、侵入者を弄んで行く。

# 第168問

「それで、そっちはどうなってるんだ？」

理音のパソコンの画面には先ほど侵入してきた先の情報が映し出されている。

「理音、これはこのままで良いの？」

「あぁ。今、ダミーの情報を流しているのと同時にこっちからも侵入してそこから情報のコピー及び清涼祭が終わると同時に相手のデータを食い潰す破壊プログラムを注入しているからな」

「……」

優子はパソコン画面を見て言うと理音は平然と答え、優子は顔をひきつらせるが、

「それで、そっちはどうなってるんだ？」

理音は優子の事など気にする事なく、学園長に聞く。

「一先ず、召喚大会の参加者は決まったよ。見るかい？」

「あぁ……注意するのは、優子、瑞希、霧島……後は3年の常村と夏川ってところか？　教頭の手ゴマはこの2人だな」

学園長から渡された名簿を見て理音は腕輪の暴走をしそうな人間の名前をあげて行く。

「あんたもそう思うかい？」

「あぁ。何か条件なするなら、３年なら推薦してやるとか空手形を出せば、食いつくヤツもいるしな。優勝を狙うならやっぱり、Ａクラスだしな……それに情報から見るとこいつらの素行は良くないし、話を持ちかけるとすれば妥当だろ」

学園長も理音と同じ考えのようでため息を吐くと理音は夏川と常村を見下したように鼻で笑う。

「理音、その２人ってＡクラスでしょ。そんなものにのるの？」

「成績だけしか考えられない社会の弊害だ。それくらいはわかるだろ」

「う、うん。まぁ、最近はね」

優子はＡクラスの２人が教頭の手ゴマになる理由がわからないと首を傾げると理音は表情を変える事なく言い、優子は理音と出会った事で自分が変わってきていると言う自覚があるようで頷く。

「それに多くの人間は興味のないものを無理に頭に詰め込むんだからな。普通は嫌になる」

「それは確かにわかるかな」

理音はくだらないと言うと優子は少しだけ、夏川と常村の考えも理解できるのか小さく頷く。

# 第169問

「まぁ、お前も含めてだが、Aクラスでもばばあが召喚システムを教育に使う意図がわからないんだ。金の事しか考えてないヤツらがばばあの意図に気づく訳もないからな。こんなくだらないバカがでるんだ」

「学園長先生の意図？」

理音は今回の事件が意味もなくくだらないと言いたげに言い、優子が首を傾げると、

「……余計な事を言うんじゃないよ。くそじゃり、あたしはスポンサーと新技術について説明をしてくるから、チェックが終わったらさっさと帰るんだよ。間違ってもさっきの続きをやろうなんて考えるんじゃないよ」

学園長は理音に余計な事わ言うなと釘を指した後、学園長室を出て行く。

「……ねぇ。理音」

「何だ？　ばばあは止めて行ったが、さっきの続きをして欲しいのか？」

「違うわよ！？」

優子は学園長に止められた理音の言葉が気になっているようで理音は優子をからかうように笑い、優子は顔を赤くして否定する。

「冗談だ。ばばあが召喚システムを教育に使う理由だろ？」

「うん」

理音は優子に聞き返すと優子は頷く。

「召喚システムとうちのテストの特徴はわかるな」

「えぇ。自分のテストの点数に連動した召喚獣を呼び出し、戦わせる事ができる。だから、うちのテストは他の学校と違って上限がない」

「なら、優子、お前の得意教科はなんだ？」

「あたし？　あたしは特にないわよ。ちゃんとまんべんなく勉強してるし」

「そうだな。なら、お前は大学に進学する上で何を目指して進学する？」

理音は優子に得意教科とこの先の進路を聞く。

「ちょっと待ってよ。いきなり、言われたってそんな事は考えてないわよ。あたしの成績なら良い大学はいけると思うけど……」

「何をしたいかは考えてない？」

「う、うん」

優子は理音の質問の意図がわからないようで頭に疑問符を浮かべている。

# 第１７０問

「そこだ」

「どこよ？」

理音は短く言うが優子は意味がわからずに言うと、

「お前は何もないのに大学に行こうとしているが、仮に試召戦争をした時に誰も追いつけないくらいの点数がとれたらお前はどうする？」

「えーと、他も同じように点数を取れるようにする？」

「……悪かった。お前は優等生を演じたいからそんな答えだよな」

優子の答えは理音の求めていたものとは違い、理音はため息を吐く。

「聞いといてそれはなんなのよ？」

「悪かった。悪かった。試召戦争や召喚システムには勉強に興味を持たせると言う目的があるんだ。誰にも負けない教科があるって言うのはそれに興味を持っていると言う事、それだけは誰にも負けたくないと言う気持ちにつながり、また、その教科に力を入れる。そいつは大学受験の時、何を目指す？」

優子は理音の様子に頬を膨らませると理音は苦笑いを浮かべて言う。

「……その教科を勉強する道に進む？」

「あぁ。それが何かはわからない。実際は3年間で道なんか見つからないかも知れないしな。それでもお前らは自分や友人達の成績を目の前にして考える事ができる。他の学校にはない事だ。少なくともお前達は他の学校の生徒より、それを考える機会を与えられている」

理音は少しだけ寂しそうに笑う。

「理音、どうかした？」

「ん？　何がだ？」

優子は理音の様子に何か感じたようで心配そうな表情で理音の顔を覗き込むと理音はいつもの表情のない顔に戻る。

「なんか、今、少し変だったから」

「そうか？　少しだけ、お前らが羨ましくなっただけだ。俺には考える時間も選択肢もなかったからな。お前は考える時間がある。まんべんなく点数を取るのも良いが自分の興味のあるものを探してみる事も考えろ」

「そうね。その時はあたしの勉強も見てくれるのよね？」

「あぁ。それくらいならな。さてと、そろそろ帰るぞ」

優子は理音の言葉に少しだけ考えようと思ったのか頷くと理音は作業を終えたようで優子に帰るぞと言い立ち上がる。

「終わったの？」

「あぁ。とりあえずな。さてと今日も怜生は西村教諭のところか。先に玄関に行ってろ」

「えぇ」

理音は頭を掻きながら西村教諭に預かって貰っている怜生を迎えに行くために職員室に向かう。

# 第171問

「失礼します。前田　理音です」

「きたか。入ってこい」

理音は怜生を西村教諭に預かって貰っているため、生徒指導室のドアをノックすると西村教諭から入れと返事があり、理音がドアを開けると、怜生は西村教諭の膝の上に乗っかっている。

「……」

「……黙ってないで何か言え」

理音は目の前の光景に一瞬、何があったかわからないような表情をすると西村教諭は膝の上にあがっている怜生をどうして良いのかわからないようでため息を吐く。

「怜生の相手をお願いしといて言うのもなんですが、恐ろしく似合わないですね」

「……言いたい事はそれだけか？」

理音は見たままの感想を言うと西村教諭はため息を吐くが膝の上に怜生がいるので、理音を怒鳴りつける事はできないため、眉間にしわを寄せている。

「いえ……怜生は父親と言うものを知らないので西村先生に甘えてしまったようです。怜生の面倒を見ていただきありがとうございま

す」

「……あぁ。怜生くん、そろそろ、下りてくれないかい？　俺も仕事が残っているのでな」

「……はい。西村先生。我がままを言ってすいませんでした」

理音は西村教諭に向かい頭を下げると西村教諭は教室で見る理音の様子とは違い兄として行動している理音の姿に少しだけ驚いた表情をした後、怜生に向かい膝から下りるように言うと怜生は西村教諭の膝から下りると頭を下げると、

「……前田、この子はもう少し」

「……はい。わかってます」

西村教諭は聞きわけの良すぎる怜生に何か危うさを感じているようで理音に声をかけると理音は表情を変える事なく頷き、

「……わかっているなら良いんだ」

「それじゃあ、俺と怜生は帰ります。今日はお世話になりました」

「……西村先生、ありがとうございました」

理音と怜生は西村教諭に頭を下げると理音は怜生の手を優しく握り、2人で生徒指導室を出て行き、

「……少し気にかけないといけないな」

西村教諭は2人のなかに見える何か形のないものに不安を覚えたようで眉間にしわを寄せる。

# 第172問

「……ここまでだな」

「やはり修理は間に合わなかったかい」

清涼祭1日目の朝、理音は学園長室の奥でパソコンを前にして言うと学園長はため息を吐く。

「あぁ。元から、時間的に無理だったしな。Aクラス上位者以外なら暴走しないんだ。対策も立てやすくなっただろ。まぁ、お披露目まではこいつも動かしておくし、ギリギリまで粘ればどうにかなるだろ。後は俺では計算できないバカに任せるだけだ」

「それが酷く不安でねぇ」

理音は彼なりに明久と雄二を信じていると言うと学園長はため息を吐くが、

「そこまで不安がるなら、不具合が見つかった時点で話を持ってこい。早くわかれば対処の仕方だって変わったはずだ」

「一応、あたしにも研究者としてのプライドがあってね」

理音は学園長の落ち度だと言うと学園長は苦笑いを浮かべる。

「そんな事を言って何かあったら、どうするつもりだ？　科学とは万人のためになければいけないはずだ。勝手なプライドで他人を巻き込むな」

「流石に天才の言う事は違うね。あんたから見れば、あたし達一般の研究者が見ているところなんて、つまらないんだろうね」

理音はため息を吐きながら言うと、学園長は理音の言葉に皮肉を込めて言うが、

「そんなくだらない嫉妬心で動くほど、俺は暇じゃない。だいたい、俺に選択権などはないんだ。俺みたいな化け物は鎖に繋がれていないと暴走するんだ。知識は俺を縛り付けるための鎖。違うか？」

「……あんたはまだそんなくだらない事を言っているのかい？」

理音は感情など捨てきったような冷たい目で自分を『化け物』と言うと学園長は呆れたと言いたげにため息を吐き、

「少なくともあんたがいくら化け物と言おうがあんたを人間として見ている人間がいるんだ。あんたはここに戻ってきたからにはそれに答える義務があるはずだよ」

「……」

「少しは閉じ込めた自分と向き合いな」

理音に言い聞かせるように言うが、

「……黙れ。ばばあ」

理音は学園長を睨みつけるとそれ以上は何も言わずに学園長室を出て行く。

# 第173問

「……」

「前田君、どうかしたの？」

理音は学園長室から出ると眉間にしわを寄せたまま、教室に向かい歩いていると友香が理音の険しい顔を見て声をかけてくる。

「ん？　小山か別に何もない」

「何もないって顔じゃないんだけどね」

理音は友香の方を見ると何もないと言うが友香は苦笑いを浮かべると、

「まぁ、私が言える事なんて何もないと思うけど」

「……」

理音の顔を覗き込むように言うが理音は無表情なままである。

「私には言えない？」

「……俺にかまう前にお前はやる事があるだろ」

友香は理音に向かい聞くと理音は自分の事は気にしないで友香に自分の事をやれと言う。

「召喚大会？　今から慌てても仕方ないでしょ。そう言えば、恭二の勉強を見てくれたんだって」

「あぁ。時間がある時とプリントを作って採点してやっただけだがな」

「あれで恭二の点数あがったみたいよ。今じゃ、Ａクラスくらいあるんじゃないかな」

友香は召喚大会に向けて恭二が理音に頼んでいた事で恭二の成績があがったと言う。

「別に、あいつは元々、Ｂクラスの代表なんだ。少し真面目にやれば直ぐに成績は上がるだろ」

「でも、恭二よ。前田君の彼の噂は聞いた事あるでしょ？」

理音は自分はたいした事はしてないと言うと友香は恭二の悪い噂を聞いた事はないか聞く。

「聞いた事はあるが、興味はない。少なからず、俺はあいつが真面目に取り組んでいた姿を見ているからな」

「へぇ。ホントに頑張ってたんだ」

「意外か？」

「それはね」

理音は恭二の悪い噂など興味はないと言い切ると友香は少しだけ優

しい笑みを見せる。

「そんな顔をするなら、見捨てないでやったらどうだ？」

「そうね。少しだけ考え直しても良いかな」

友香の笑顔につられたのか理音の表情から険しさが消えると友香は安心したのかくすくすと笑うと、

「ん？　どうかしたか？」

「何も。前田君、私、クラスの方もみないといけないから戻るわね」

「あぁ。俺も教室に戻る」

理音と友香は自分の教室に歩きだす。

# 第１７３問（後書き）

どうも、作者です。

理音と友香の会話に理音の険しさが取れました。ちょっと距離があるけど理音にとって良い友人なってるんだと思います。

しかし、恭二が頑張ってるのに写真集公開になるから……恭二哀れだ。（爆笑）

# 第１７４問

「リオ、お帰り」

「なぁ。アキ、これはおさわりおっけ～か？」

「……いいわけないでしょ」

理音は教室に戻ると瑞希、美波、秀吉がチャイナ服に着替え終えており、理音は３人を見て直ぐに目つきを鋭くして言うと理音の背後からお怒りの優子の声が聞こえる。

「ん？　なぜ、優子もチャイナ服に着替えて……康太、俺的にはスリットはもう少し深い方が」

「……あまり深すぎると趣にかける」

理音は優子の怒りなど気にする事なく優子のチャイナ服姿を見て康太に聞くと康太にもこだわりがあるようで理音の言葉には頷けないと言う。

「……理音、あんたは何をやってるのよ？」

「ん？　よく似合ってる。可愛いぞ」

「う、うん」

優子は理音の胸倉をつかむと理音は表情を変える事なく優子に似合うと優子は理音から今まで聞いた事のない言葉に顔を赤くすると、

「秀吉、俺は優子のならおさわりおっけ～だよな？」

「……場所を考えた方が良いと思うのじゃ」

理音は目つきを鋭くして秀吉に言うと秀吉はため息を吐く。

「……そうか。なら、ちょっと行ってくる」

「行かないわよ！？　あんたは何を考えてるのよ！？」

理音は秀吉の言葉に優子を連れて行こうとするが、優子は当然、声をあげる。

「……ねえ。前田。結局、あんたと木下さんって付き合ってるの？」

「ん？　言ってなかったか。この間から……」

理音と優子の様子に美波は目を輝かせて聞くと理音が首を傾げた後、優子と付き合っている事を話そうとした時、

『裏切り者に死の制裁を！！』

『諸君。ここはどこだ？』

『『『最後の侵犯を下す法廷だ！！』』』

『異端者には？』

『『『死の鉄槌を！！』』』

『男とは？』

『『『愛を捨て、哀に生きるもの！！』』』

『よろしい。これより――２－Ｆ異端審問会を開催する！！』

クラスメート達は怪しげな覆面を被り、理音にカッターを向けるが、

「……ほう。俺にケンカを売るか？　死ぬ覚悟はできてるんだろうな？」

理音の邪悪な笑みにクラスメート達は一瞬怯む。

……その一瞬がクラスメート達には命取りだった事は言うまでもない。

# 第175問

「高さが足りないな」

「……まだ積み上げる気？」

理音は動かなくなったクラスメート達を教室の一画に積み上げて言うと明久は苦笑いを浮かべる。

「それで、木下さん、前田と木下さん、どっちから告白したの？」

「えーと……あたしの方かな？」

「かな？　ってどういう事ですか？」

瑞希と美波は理音などどうでも良くなっているようで優子を捕まえ、優子にいろいろと白状しろと詰めよると優子はなんだかんだでなし崩しで付き合う事になった事を思い出す。

「えーと……あたしも理音からもきちんと告白してないかも」

「そうなの？」

「ダメですよ。そこははっきりとさせないと」

優子は苦笑いを浮かべながら言うと美波は首を傾げ、瑞希ははっきりとするべきだと言う。

「だけど、今更って気もするし……」

「瑞希の言う通りよ。前田は遠目から見れば、良い男なんだから近づいてくる娘を居るはずよ。はっきりさせとかないといつの間にか自然消滅とか」

「……島田、姉上におかしな事を吹きこまないでくれんかのう」

優子は苦笑いを浮かべながら言うと美波は優子の不安を煽るような事を言い、秀吉はため息を吐く。

「……確かに、あいつの場合、色仕掛けで簡単に落ちそうな気が」

「あ、姉上、その殺気をしまうのじゃ。まだ、理音は何もしてないのじゃ！？」

しかし、優子は美波の言葉に理音の日頃の行動が引っ掛かり背後から黒い殺意（もの）がはみ出し始め、秀吉は慌てて優子を止めようとするが、

「秀吉、邪魔するつもり？」

「邪魔も何も理音は何もしてないのじゃから、抑えるのじゃ、姉上は自分の彼氏を信用せぬのか？」

優子の殺意は秀吉に向けられ、秀吉は後ずさりながらも優子に抑えるように言う。

「……お前らは何をしてるんだ？」

「前田くん」

「ん？」

理音は積み上げた屍を見るのも飽きたようで戻ってくると瑞希が理音の名前を呼ぶと、

「優子ちゃんにキチンと告白してないってどういう事ですか？」

「そうよ。女の子はそう言う事をはっきりと言ってくれないと不安なの優子にキチンと告白しなさい」

瑞希と美波は優子を名前呼びで呼び始め、勝手に理音に詰め寄る。

# 第176問

「……お前らはいきなり何を言うんだ？」

「あはは。何か面白い事になってるね」

理音は瑞希と美波の様子に眉間にしわを寄せて言うと愛子がタイミングよくFクラスの教室を覗きにきたようで苦笑いを浮かべる。

「愛子、どうかしたの？」

「えーと、代表見なかった？　教室にいないから坂本くんなら何か知ってるかと思ったんだけど……坂本くんは？」

愛子に気づき優子は慌てて愛子がきた理由を聞くと愛子は翔子を探しているようで、知っていそうな雄二を探すが雄二は教室には見当たらない。

「前田くん、坂本くんってもしかしてあの中？」

「いや、雄二は俺が帰ってくる途中でどこかに行ったぞ」

愛子は教室の隅に積み上げられた屍のなかに雄二がいるかと聞くと理音は首を振り、

「そうなの？　困ったな。代表がいないと締まらないんだけど……優子も最近はうちのクラスの事なんてどうでも良いみたいだし」

愛子は優子を見てニヤニヤと笑う。

「そ、そんな事はないわよ！？」

「ホントに？」

「ホ、ホントよ！！　あ、あたしはＡクラスに戻るわね」

優子は愛子からからかわれた事で顔を真っ赤にしてＡクラスに戻ると言うと、

「あぁ」

理音は頷くが、

「ダメです。その前にはっきりとさせないといけません」

「そうよ。前田、はっきりとしなさい」

瑞希と美波は優子を帰す前に理音に優子にちゃんと告白をしろと言う。

「……１つ聞いて良いか。どうしてそんな話になってるんだ？」

「そ、それは……」

理音はこうなった意味がわからないとため息を吐くと優子は顔を赤くして簡単に理音に説明をすると、

「……それはお前らが首を突っ込む事じゃないんじゃないか？」

瑞希と美波に向かい酷くまっとうな事を言う。

「……確かにね」

「うん。ボクもそう思う」

優子の説明と理音の言葉を聞いて明久と愛子は苦笑いを浮かべるが、

「そう言う問題じゃないんです。これは前田くんと優子ちゃんのこれからを考えるにあたって重要な事です」

「そうよ」

瑞希と美波は納得するわけはない。

# 第177問

「……お前らは俺がここで優子に告白するのを見届けないと納得しないと？」

「はい」

「そうよ」

理音はため息混じりで言うと瑞希と美波は理音に食いつくように言うと、

「……ねえ。優子、なんで当事者の優子が外にいるんだろうね？」

「……あたしにはわからないわよ」

瑞希と美波の様子に愛子は苦笑いを浮かべ、優子も頭が冷えてきたようでため息を吐く。

「……なるほどな。お前らの期待に応えても良いが、よく考えろよ。俺と優子にそれを強要するって事はお前ら2人が同じ立場になった時には俺達にも見る権利と言うものが当然、あるんだろうな？」

「「うっ！？」」

理音は瑞希と美波に向かい同じ事をしてやると言うと2人は理音の言葉は予想外だったようで顔を引きつらせる。

「あはは。前田くんの方が1枚上だね。瑞希ちゃんも美波ちゃんも

負けを認めたら」

「勝ち負けではないだろうけどな。だいたい、それは俺と優子の問題であってお前らの問題じゃないだろ」

愛子は理音に言い負かされる瑞希と美波を見て苦笑いを浮かべるが、理音は表情を変えずに言った時、

「……お前ら、これはいったいどういう状況だ？」

「雄二、その言葉、そっくり返してやる」

腕に翔子をつけた雄二が教室に戻ってきて積み上げられているクラスメートを見てため息を吐くが、理音は雄二と翔子の姿を見て言う。

「俺はこれを取りに行ってたんだよ。そしたら、翔子に捕まった」

「あぁ、召喚大会のトーナメント表だね」

雄二はため息を吐きながら言うと明久は翔子に抱きつかれている雄二を嫉妬の視線で睨みつけながらも雄二からトーナメント表を受け取る。

「えーと、あたしと代表はみんなが順調に勝ち上がれば準決勝で吉井くんと坂本くんか姫路さんと島田さんと当たるのね」

「そうだな。まぁ、お手柔らかに頼むぜ」

「えぇ。まぁ、当たるとしたら姫路さんと島田さんでしょうけどね」

優子は明久の持っているトーナメント表を覗き込んで言うと雄二はニヤリと笑うと優子は不自然な会話にならないように言い、

「ふ。どうかな。勝負は水ものだぜ」

雄二は優勝までの道筋ができているようで優子の言葉を鼻で笑うと、

「……雄二、浮気は許さない」

「翔子、ちょっと待て!?　どんな流れだ!?　割れ。割れるぅぅぅ!!!??」

翔子は雄二と優子の会話に何を思ったのか雄二のこめかみをつかみアイアンクローを喰らわせる。

「……これは何なのじゃ？」

「さあな。霧島」

「……何？」

秀吉は雄二と翔子の様子にため息を吐くと理音は翔子の名前を呼ぶ。

# 第178問

「勘違いするな。こいつは俺のものだ」

「……わかった。信用する」

「そ、そう言うなら、手を緩めろおおぉぉ！！！！」

理音は雄二が優子と腹の探り合いをしているような会話を翔子は浮気と言っているためか理音は表情を変える事なく、翔子に言うと翔子は理音の言葉に頷くが雄二の頭をつかんでいる手を緩めることはない。

「へぇ。前田くんも言うね。優子は今の前田くんの発言に何か言わなくて良いの？」

愛子は理音の言葉に顔を真っ赤にしている優子をからかうようにニヤニヤと笑いながら言うと、

「な、何を言ってるのよ！？　愛子、代表、そろそろ、Ａクラスに戻りましょう」

「えぇ。もう少し居ても大丈夫だよね。代表」

「……私は優子と理音の詳しい話を聞きたい」

優子は恥ずかしいようで逃げ出したくなったようで翔子と愛子に戻ろうと言うが愛子は優子を完全にからかいに入り、翔子は雄二から手を放す事なく優子に聞く。

「あ、あの……り、理音」

「……」

優子は理音に助けを求めるように理音を呼ぶが、理音は興味無さそうに明久の持っているトーナメント表を覗き込み、

「……雄二、明久、2回戦は気をつけろよ。根本と小山は割と強いぞ」

「そうなの？　……あれ？　リオ、根本くんと小山さんと知り合いなの？」

明久と雄二の2回戦で当たる恭二と友香は強敵だと言うと明久は首を傾げる。

「あぁ。少しな」

「リオ、気をつけてよ。根本くんは」

「……卑怯者のゲス野郎か？　別に気にする必要もないだろ。だいたい、俺みたいな人間に近づいて来るヤツなんてほとんどがそうだ」

明久はBクラス戦に恭二がした卑怯な手に腹を立てているようで理音に気をつけろと言うが理音の表情は変わる事なくそう言った時、

『2年Fクラス、前田理音君、至急、教頭室に来てください』

校内放送で理音が呼び出される。

「……こう言う風にゲスな小物からな」

「教頭先生からの呼び出し？　理音、何かしたの？」

理音は校内放送を聞いて呟くと明久は首を傾げる。

「いや、俺は何もしてない……」

「理音、何をするのじゃ？」

理音はいつも持っているノートパソコンを取り出すと、秀吉は理音の行動がわからずに首を傾げるが、

「たいした事じゃない。礼儀を知らない小物に礼儀を教えてやるだけだ……マイクテスト、マイクテスト、俺に用があるなら、自分で来いよ。小者」

理音は秀吉に返事をすると学園の放送システムに侵入したようで教頭を挑発するように言うとその言葉は全校に発せられる。

# 第179問

「理音、お主、何をしておるのじゃ！？」

「そ、そうよ。教頭先生からの呼び出しよ。何かあったらどうするのよ？」

理音の突然の行動に場が一瞬、凍りついた後、秀吉と優子は慌てて声をあげるが、

「あのなぁ。俺は一応、学生としての身分ではあるが、ここのスポンサーの1人なんだ。ここの教師陣の給料を払ってる身の1人だぞ。当然の権利だろ」

理音は教頭など知らんと言い切り、

「優子、霧島、工藤、そろそろ戻らなくて良いのか？」

「……雄二、もう少し一緒にいたい」

時間を確認すると清涼祭開始の時間が近づいてきているため、3人に言うと翔子はぐったりとしている雄二に抱きつきながら言う。

「……霧島、雄二が落ちてるんだが」

「あはは」

理音は流石に翔子にやりすぎだと言うと愛子は苦笑いを浮かべていると、

「……待て。霧島、雄二が気絶している間に何をする気だ？」

「……前に理音は既成事実は必要と言った」

翔子が雄二のベルトを外し始め、いきなりの行動に理音は翔子の行動を止める。

「確かに必要だが、今から1～2時間も空けられると召喚大会やらクラスの喫茶店を運営するのに困るからな」

「……わかった。今日は諦める」

理音の言葉に翔子は素直に頷き、

「悪いな。本来なら応援してやりたいところだが、こうやって証拠の映像も俺自ら撮ってやろうと……」

「……理音、あんた、いきなり何を言い出してるのよ？」

理音は翔子と雄二の行為を見る気だったようでデジタルカメラを手に無表情だが少しだけ残念そうに言うと優子は額に青筋を浮かべながら理音の肩をつかむ。

「優子、言っておく。俺は男だからな。霧島のような美人の裸は当然見たい。あれだ。お前の趣味の薄い……」

「あんたは何を言うつもりよ！？」

理音は優子の怒りなど気にする様子も見せずに優子の手から抜け出

すと男として当然だと言い切りながらも優子の趣味を暴露しようとし、優子は声をあげる。

「ん？　優子が腐女子な事ならここのメンバーは全員知って……工藤と霧島には言ってなかったな」

「うん。ボクは初耳かな。まぁ、何となくは気づいてたけどね」

理音は優子が声をあげる意味がわからないと言いたげに首を傾げると愛子は苦笑いを浮かべ、

「……優子が雄二や吉井が」

「だ、代表、ストップです！？　何もないです。それは気のせいです！？」

翔子は優子の趣味に気づいていたようで話し始めると優子は慌てて翔子を止める。

# 第１８０問

「別に隠す事でもないだろ。今さらだしな」

「まぁ、優子は優等生を演じたい見たいだしね。仕方ないよ」

理音は慌てている優子の様子を見て表情を変える事なく言うと愛子は優子の考えを理解しているようで苦笑いを浮かべたまま言うが、

「理音、何で、余計な事を言うのよ！！　今まで努力してきたあたしのイメージはどうなるのよ！！」

優子は理音につかみかかる。

「優等生のイメージと俺をどっちを選ぶんだ？」

「……へ？」

理音は邪悪な笑みを浮かべると優子の耳元で言い、優子その言葉に間の抜けた表情をすると、

「優等生のイメージが大切なら、俺みたいなのがそばにいちゃいけないだろ」

優子をからかうように言う。

「そ、そんなわけないでしょ！！　あんたの方が……何を言わせるのよ！？」

優子は優等生のイメージより理音が良いと言おうとするが、途中で理音に嵌められている事に気づき声をあげる。

「……姉上、もう遅いのじゃ」

「優子ちゃんと前田くん、相思相愛です」

「羨ましいわよね」

秀吉は優子の様子にため息を吐きながらすでに遅いと言うと瑞希と美波は目を輝かせている。

「……優子」

「だ、代表」

翔子は優子の肩に手を置くと優子はどうして良いのかわからないようで慌てた様子で翔子を呼ぶと、

「……今度、私と雄二とダブルデート」

「は、はい」

「ちょっと待て!?　勝手に話を決めるな!?」

翔子は理音と優子にダブルデートに誘うと優子は勢いで頷くが、意識を取り戻した雄二は声をあげる。

「……雄二に拒否権はない。必ず、理音に連れて来て貰う」

「止めろ！？　割れるぅぅぅ！！！？？？」

翔子は雄二のこめかみをつかみ力を入れると雄二の頭は絞めあげられ悲鳴をあげていると、

「霧島、そろそろ、止めてやってくれ。アキと雄二は一回戦の時間だしな」

「代表も優子も1度、戻るよ」

理音が翔子を止めると愛子は苦笑いを浮かべながら翔子と優子にAクラスに戻ろうと言い、

「そ、そうね。代表、戻りましょう」

「……わかった」

優子はこれ以上、Fクラスでからかわれないように翔子を引きずって行き、

「じゃあね。前田くん、なんかいろいろとごちそうさま」

「あぁ。あれで、あいつも少しは取っ付きやすくなるだろ」

「あはは。前田くんはやっぱり、優しいね」

愛子は理音の言葉に理音が優子を気にかけている事を理解し、優しい笑みを浮かべるとAクラスに戻って行く。

# 第181問

（……こんな直接的にくるか？　Aクラスと言われても頭の悪い愚か者か）

「前田、あの人達、どうにか出来ないかな？」

清涼祭が始まり、しばらくすると中華喫茶『ヨーロピアン』は順調な客入りをしていたのだが、2人組が入って来るなりいちゃもんをつけはじめ、他のお客さんが店を変えようと言いだし始めており、美波は理音に声をかける。

「それはどこまで殺って良いんだ？」

「……殺しちゃダメよ。いろいろと問題があるから」

「そうか？　殺さなければ問題ないんだな」

理音は美波の言葉に邪悪な笑みを浮かべると美波は顔を引きつらせるが理音は関係なく、邪悪な笑みを浮かべたまま2人組の元に歩きだすと、

「……なるほど、顔と一緒で味覚もおかしいみたいだな。データとして写真も撮っておきたいがこんな汚いものをデータとして保管しておきたくないしな」

2人組の顔を見ながら失礼な事を平然と言う。

「あん？　てめぇ、お客様に向かってその態度はなんだよ？」

「……黙れ。珍獣、光栄に思え、お前らはこの俺様の研究材料に決定した」

2人組の1人は理音を怒鳴りつけるが、理音は邪悪な笑みを浮かべながら懐から注射器を取り出す。

「おい。お前、人の話を聞いてるのか？」

「……なるほど、この珍獣は自分を人だと思い込んでるわけか？確かに狼に育てられた人間は自分を狼と認識していたと言う。これもその貴重なサンプルか？　そうだな。まずは血液からどの生物に分類されるか確認をとって、この珍獣をここまで育てた奇特な人間に話を聞くとするか」

2人組のもう1人が理音の胸倉をつかもうとするが、理音はそれを簡単に交わすとぶつぶつと何かを考え込むと、

「まぁ、まずは人間以外の生物が飲食店に紛れこんでいるのは問題あるから、排除するか」

「「何じゃこりゃ！？」」

理音は懐から網を取り出して2人組に投げつけ、2人を捕える。

「……理音、お主は何をしたいのじゃ？」

「ん？　秀吉、見てみろ。人間じゃない生物が、日本語を話しているんだぞ。これは俺の知的好奇心を満たすのに充分な研究材料じゃないか」

秀吉は理音の行動に顔を引きつらせると理音は表情を変える事なく言い切る。

# 第１８２問

「てめえ、ふざけるな！？」

「どこまで、俺達をコケにするつもりだ！！」

２人組は網の中から声をあげると、

「知らんな。だいたい、変な難癖をつけて営業妨害するようなヤツの言葉を聞く気はない。確か、３年Ａクラスの夏川と常村で良かったんだよな。知ってるか？　俺はこれでも文月学園のスポンサー様でもあるんだ。その俺にケンカを売ったんだ。それなりの処罰はあるって事はわかるよな？」

理音は邪悪な笑みを浮かべながら、自分がそれなりに権力をもっていると言う。

「バ、バカな事を言うな。学生がスポンサーなわけ」

「そうだ。だいたい、そんな奴なら、Ａクラスにいるはずだろ」

「先輩、理音の言う事は本当だぜ。前田理音、小学校を卒業と同時に海外留学をした天才。その後、薬学を中心とした分野で功績を残す世界が誇る天才様だ」

２人組は噂の天才前田理音が２年Ｆクラスにいる事を知らなかったようで声をあげると雄二と明久が戻ってきて２人組に声をかける。

「ん？　勝ったか？」

「当然、それより、リオ、これはなんの騒ぎ？」

理音は明久と雄二に召喚大会の結果を聞くと明久は勝ったと言いながらも今の状況を聞くと、

「ただの営業妨害だ。ちょっと、このバカ２人が何のためにこんな事をしたのか３年Ａクラスに聞いてくる。クラス単位なのか、このバカ２人が個人的にやっているのか確かめてくる。クラスの恥をさらされた最上級生様にこのバカ２人の処遇を任せるさ」

「それで、ダメだったら、どうするつもりだ？」

理音は２人組の処置を同じクラスの奴らに一先ず任せると言うが、雄二は理音の言葉に首を傾げる。

「その場合は、この２人の召喚獣にフィードバックを付けて３年Ａクラスに模擬試召戦争を仕掛けてボコボコにする。流石に直接攻撃は気が引けるしな。学生や学校って言うのは連帯責任って言葉が好きだからな。こいつらのせいで３年ＡクラスはＦクラスの設備だ」

「そんな事できるわけ……」

「なるほどな。回復試験前に次から次としかけられれば、Ｆまで落ちるな」

理音は表情を変える事なく言い切ると雄二は頷き、２人組の顔は真っ青になって行く。

## 第１８２問（後書き）

どうも、作者です。

理音の制裁は割と力づく。（爆笑）

３年Ａクラスに模擬試召戦争を仕掛ける。当然、全滅まで追い込みます。あとは自然落下ですね。

頭脳労働派なわりに好戦的な理音はどうなんでしょうか？（苦笑）

# 第183問

「あ、あの。前田くん、少しやり過ぎじゃないですか？」

「良いか。瑞希、売られたケンカは買えが家の家訓なんだ。どんな手段を使おうと俺にケンカを売った人間は地獄に突き落とす。本人を潰した後は一族郎党だ」

瑞希は流石にやり過ぎじゃないかと苦笑いを浮かべるが、理音は表情を変える事なく言い切ると、

「一族郎党はやり過ぎではないのか？　非があるのはこの者達であって、ご家族には」

「勘違いするな。秀吉、これがこんなバカに育ったのは親、兄弟に問題があるからだ。他人の事を思いやりなさいだとかを教えないで自分だけが良ければ良いと言う考えを持っているんだからな。同罪だ。まずは俺の権力で圧力をかける、幸い、調べさせて貰ったら俺が株を押さえている会社の関係会社にいるようだしな」

秀吉は理音を止めるように言うが、理音は邪悪な笑みを浮かべたまま言い切ると、携帯電話を取り出す。

「「待ってくれ。俺達が悪かった!?　許してくれ!!」」

2人組は網の中で土下座をするが、

「お前らの土下座に価値があると思ってるのか？　調子にのるなよ。だいたい、本気で謝る気なのか？　ずいぶんと偉そうだよな」

理音は2人を見下し笑う。

「……何と言うか、今更だが、あいつは悪人だな」

「まぁ、今回は許してよ。ボクらの喫茶店を守るためなんだし」

雄二はため息を吐くと明久は苦笑いを浮かべる。

「そうだな。理音、それくらいにしておけ。ここで騒ぐ利点は俺達にはあまりないしな。先輩方、次、似たような事をしたら本気で理音に行動に移させるからな」

「あ、あぁ」

雄二は理音を止めると2人組に出て行けと言い、2人組はこの場から逃げ出そうとするが、

「待て。帰る前にちゃんと謝れせて行け」

「良いだろ。こいつらに謝られたって別に」

「違う。おかしな事をして不快に思ったのは俺たちじゃない。客だ」

「……そうだな」

理音の言葉に雄二は頷くと、

「って事だ。先輩方、よろしくお願いしますよ」

雄二は2人組の肩を叩く。

# 第１８３問（後書き）

どうも、作者です。

番宣です？

バカとテストと召喚獣でもう一作書き始めました。

『あたしと優菜と召喚獣』と言う作品です。

もしよろしかったらご覧ください。

# 第184問

「……良し」

「優子、気合いを入れて前田くんでも誘いに行くの？」

優子は休憩時間になると制服に着替えて気合を1つ入れると愛子は優子をからかうように言うと、

「そ、そんなわけないでしょ！？」

優子は声を裏返す。

「……あのさ。優子、もう前田くんと付き合ってるのはAクラスじゃ周知されてるんだからさ」

「……へ？」

愛子は優子の反応に苦笑いを浮かべながら、理音と優子の事をAクラスは誰もが知っていると言うと優子は愛子の言葉に呆ける。

「優子、何を驚いているの今更でしょ。あれだけ、前田くんと何かあった度に迷惑かけてればね。それにさっき、代表が言って回ってたし」

「代表！？」

愛子は苦笑いを浮かべて翔子が言って回っていたと言うと当然、優子は声をあげる。

「まぁ、前田くんと優子が上手くいった事を喜んでるのって、当人達を抜かしたら1番、喜んでるのって、吉井くんか代表だしね」

「それって、どういう事？」

愛子は翔子が優子と理音の事を喜んでくれてると聞かせれ、優子は呆気に取られながらも聞き返す。

「ほら、代表って、お世辞でも人付き合いが得意って言えないでしょ。うちのクラスは成績が良ければ良いって感じが少なからずあるから、代表はあくまで代表であって友達じゃないんだよ。その中で、優子と前田くんは少なからず、代表に友達だと思われてるんだよ」

「……」

「意外？」

愛子の言葉に優子はどう反応したらわからないと言う表情をすると愛子は優子の顔をのぞき込み笑うと、

「それにね。前田くんと関わるようになって優子は優等生の仮面をかぶっていない優子を見せてくれるようになったからね。みんなもとっつきやすくなったって言ってるしね」

「……えーと」

愛子は優子のAクラスでの評価が変わっていると言うと優子は照れ臭そうに笑い、

「と、言う事で、彼氏持ちはしっかりと楽しんで来なさい」

「う、うん。行ってくるね」

愛子は優子に楽しんで来てと言うと優子は笑顔でＡクラスを出て行く。

# 第185問

「理音、い……あんた達、何をしてるのよ!?」

優子がFクラスの教室を覗くと理音を中心としたいつものメンバーが3年生の2人組に土下座をさせており、優子は驚きの声をあげるが、

「ん？　優子、どうかしたか？」

「どうかしたかじゃないわよ。なんで、3年生に土下座なんてさせてるのよ？」

理音はまるでおかしな事はやっていないと言いたげに言うと優子は理音の胸倉をつかむ。

「まぁ、落ち着くのじゃ。姉上、これにはわけがあるのじゃ」

「わけって、何よ？」

「まぁ、これでも食って落ち着け」

秀吉が慌てて優子を止め、優子が秀吉を睨みつけた時、理音が優子の前にゴマ団子を出す。

「……何か企んでる？」

「疑うな。それを食って貰って素直な感想を聞かせろ。それからの方がわかりやすい」

「わかったわよ……うん。美味しい。これを作ったのって、理音？」

優子は理音を疑いの目で見るがゴマ団子を食べると幸せそうな表情をする。

「作ったのは康太と須川だ。俺は料理はできても菓子類はまだ作った事はない」

「そうなんだ。でも、理音なら作れるでしょ？」

「……お前ら、いちゃつくなら説明の後にしろ。もう直ぐ、理音の休憩時間だから」

理音と優子の様子に殺気だってきたFクラスをなだめるために雄二が割って入る。

「……それで、理音、どういう事よ？」

「それを不味いと言うからな。味覚がおかしいと言う事で実験材料にしようと思ったんだが、どうも、営業妨害みたいでな。まずは客に謝らせた後、俺の自白剤を飲ませようと思ってな」

優子は雄二の言葉にバツが悪そうな表情をした後、理音に聞くと理音は表情を変える事なく言い切り、懐から怪しげな薬瓶を取り出すと、

「ちょっと待て、そんな話、聞いてないぞ！？」

「これで終わりだって」

理音の怪しげな薬瓶を見て、Fクラスの生徒達は理音と距離をとって行き、2人組は怪しげな薬瓶に何かあるか察したようで顔を引きつらせると、

「リ、リオ、ちなみにそれの副作用は？」

「何、自白した後、個人差があるがだいたい1時間から2時間の間、声が女の声に変わるだけだ。女が飲んだ場合は男の声になる。特に面白い事ではないが……キモイな」

「そうだな。気持ち悪いな」

明久は恐る恐る理音に副作用を聞くと理音と雄二は同じ答えに行きつく。

# 第１８６問

「まぁ、それはそれか、別に自白させた後、これをつけて追い出せば問題ないしな」

「今度は何よ？」

理音はとりあえず、気持ち悪いのに対応するための何かがあるようで懐から怪しげな腕輪らしきものを取り出す。

「ん？　データを転送して俺達の半径１０メートル以内に入ると腕を締め付けるんだ。試しに……これで実験をするか？」

「前田くん、それってなんですか？」

理音は腕輪の性能を見せるために懐から金属を取り出すと瑞希は首を傾げる。

「ただの１０Φのステンレスだ」

「……なんで、そんなものを持ち歩いてるんだ？」

理音は見てわからないのかと言いたげに言うと雄二はため息を吐く。

「ん？　ちょっと、頼まれたものを作った残りだ。これに腕輪をセットしてデータは明久のデータを」

「何で、ボク？」

「気にするな。深い意味はない」

理音は気にする事なく、金属に腕輪をつけると、

「記念すべき、変態3年の腕（仮）を斬るボタンを誰が押す？」

「斬る？」

「ん？　大丈夫だ。切り口は綺麗になるように作ってあるから、きちんと手術すれば神経もくっつく」

理音は邪悪な笑みを浮かべながら笑う。

「……何だろう。凄く、怖いけど押してみたい気がする」

「……明久、気が合うな。俺も少しわくわくしている」

理音の邪悪な笑みに明久と雄二は興味が湧いてきたようである。

「……明久、雄二、お主達は何を言うておるのじゃ。理音も質の悪い冗談は……」

「お。本当に真っ二つだな」

「切断面も綺麗だね」

「これなら、硬いものも簡単に切れますから、お料理にも使えますね」

秀吉は明久と雄二を見てため息を吐き、理音にくだらない冗談はや

めろと金属は真っ二つになっており、明久と雄二は楽しそうに笑い、瑞希はずれた事を言っている。

「あ、あんたは何をやってるのよ！？　冗談にしても笑えないわよ！？」

「冗談？　俺は本気だぞ」

目の前で真っ二つになった金属を見て優子は理音の胸倉をつかむが理音の表情が変わるわけがない。

「あ、姉上、理音がここにいると事件になりそうじゃから、理音の休憩時間も近いし、連れてってくれんかのう」

「……優子、悪いんだけど、お願いできる」

秀吉と美波は顔を引きつらせると理音に危険物を手渡し、理音を優子に引き渡す。

「理音、行くわよ」

「待て。俺はあの２人に自白させると言う作業が」

「良いから、きなさい」

優子は秀吉と美波の言葉に理音を引きずって教室を出て行く。

# 第187問

「……なぁ。優子、そろそろ放してくれないか？」

「戻らないわよね？」

理音は優子に引きずられてしばらく歩くとため息を吐きながら優子に放せと言うが優子の目は理音を疑っている。

「あれだけ脅せば充分だろ」

「脅すにしたってあんな物騒なもの出さないでよ……って何をしてるのよ！？」

理音は2人組には充分なお仕置きをしたと言うと優子は理音の行動はやりすぎだとため息を吐いている隣で理音は手首に腕輪を付けており、優子は顔を青くするが、

「冗談に決まってるだろ。これは演劇部に頼まれた小物だ。ステンレスを真っ二つにするような物騒なものじゃない」

理音は平然とさっきのは嘘だと言い切る。

「で、でも、それなら、何で金属が真っ二つに？」

「だいたい。俺はステンレスとは言ったがそれを事実か確認した奴はいたか？」

「……」

理音は金属に見えたものはステンレスではないと言うと優子は一瞬、呆気に取られた後、

「最初に言いなさいよね！！」

「何だ？　気づいてなかったのか？　アキはどうか知らないが雄二は完全に気づいていたぞ。だいたい。それを本気でやってしまうと俺は人でなくなる。いつまでこの時が続くかはわからんが、俺はまだ人でいたい」

優子は理音につかみかかるが、理音はそんな優子の様子にため息をついた後、優子の顔を見てくすりと笑い、

「行くぞ。2人で歩けるのは貴重なんだからな。いつも怜生が一緒だからお前の妄想には付き合えてない部分も多いから少しは期待に応えてやる」

「う、うん」

優子に清涼祭を見て回ると言うと優子は顔を赤くした後、理音の腕に抱きつく。

「照れるなら、やらなければ良いんじゃないのか？」

「う。うっさいわよ。良いでしょ。やってみたかったんだから」

理音は優子の反応にため息を吐くと優子は口早に理音に言うと、

「い、行くわよ」

「わかっているから引っ張るな」

1度、大きく深呼吸をした後、理音を引っ張って歩きだす。

## 第１８８問（前書き）

ＰＶが１，０００，０００アクセスを超えました。まさかのミリオンです。

ありがとうございます。これからも頑張りますのでよろしくお願いします。

また、感想と評価をいただければ幸いです。

# 第188問

「……あんたはもう少し穏便にできないのかい？」

「何がだ？」

理音と優子はしばらく2人で清涼祭を見てまわっていたが、優子が召喚大会の出場する時間になり、理音は1人になると報告も兼ねて学園長室に顔を出す。

「竹原の呼び出しだったり、あんた達のクラスの騒ぎだったりだよ」

「ん？　耳に入ってるか。流石は妖怪ばばあ」

「……あれだけのバカ騒ぎだ。学園長であるあたしの耳に入るのは当然さね」

学園長は理音のふてぶてしい態度のため息を吐きながら、当然の事だと言う。

「俺はおかしな事はしていない。スポンサーの俺が、教頭とは言え、たかが一教師に呼び出しに従う理由がない。本来、用があるなら菓子折を持ってくるのが礼儀だ。変態コンビの3年は小者の駒だからな。吐かせるのが1番の手かとも思ったがあの2人が決勝に上がってこないと後がやりにくいだろうしな。あれだけ、熱くなりやすいなら雄二の手の中で踊るだけだろう」

「まったく、それでスポンサーのあんたがここに出入りすると竹原はどう動くさね？」

学園長は理音の言葉にため息を吐きながらも、教頭が次に仕掛けてきそうな手を理音に聞く。

「さあな。生徒がダメなら外から攻めてくるんじゃないか？　元々は文月の評判を落とす事だからな。ガラの悪い奴らを暴れさせるのが手っ取り早い」

「……確かにそうさね。しかし、いくらなんでもそんな単純な手でくるかい？」

「自分を優秀だと思っている小者は考えた手を潰されると最終的には力づくでくる事が多い」

理音は学園長に警戒するように言うと、

「そろそろ戻る。試召戦争を応援してやらなかったから埋め合わせをしないといけないしな」

苦笑いを浮かべながら立ち上がり、学園長室を出て行き、

「少しは年相応に笑うようになったじゃないか」

学園長は理音の背中を見てくすりと笑う。

# 第189問

「お疲れ。優子、霧島」

「理音」

理音は学園長室から出て召喚大会の会場に着くと優子と翔子のペアは余裕で勝利を収めたようである。

「まぁ、2人なら楽に勝てるか。負けるとしたら召喚獣の扱いになれたAクラス上位くらいだろうからな」

「……雄二と吉井は油断できない」

「まぁ、後は姫路さんかな？」

理音は2人の様子にこの2人は簡単に負けないと言うと翔子は明久と雄二を警戒しているように言い、優子はその2人に優勝して貰わないといけない事を知っているためか苦笑いを浮かべていると、

「ん？　その2人も2回戦みたいだぞ。相手は根本と小山か、それなりに面白い対決になりそうだな」

会場では『明久・雄二ペア』対『恭二・友香ペア』の戦いが始まりそうである。

「あの女装男？」

「ん？　女装男？」

優子は最初の試召戦争で恭二が雄二の戦略で女装してAクラスに来た事を思い出したようで顔を歪めると理音は優子に聞くと、

「後で秀吉から経緯は聞いたんだけどね。BクラスがFクラスに負けた後に……」

優子は理音に恭二が女装してAクラスに宣戦布告の用意があると言いにきたと言う。

「なるほど、根本がFクラスを嫌うわけだな」

「ねえ。理音、さっきも話しに出てたけど、あんたは根本くんと知り合いなの？」

「ん？　あぁ、恋愛と言うものの情報が俺には不足しているからな。あの2人には話を聞かせて貰った。その礼と言うわけではないが根本にはアキや雄二と同様に勉強を少し見てやった」

理音は優子の話で恭二がFクラスを嫌悪する理由に納得したようで頷くと優子は改めて理音と恭二の関係を聞くと理音は隠す事はなく、事実のみを告げる。

「何で、あんなのに？」

「いろいろあるんだ。別に話してはみたが噂ほど悪い奴ではないようだぞ。秀吉にも聞いてみろ」

「何で、秀吉？」

理音はくすりと笑いながら恭二は噂で聞くほど悪い奴ではないと言うと優子は首をか傾げると、

「……理音、優子、始まる」

翔子は理音と優子に召喚大会に集中しろと言うと理音に雄二の雄姿を記録しろと言いたげにデジカメを渡す。

「代表？」

「……私は機械関係が苦手」

「あぁ、これくらいはやってやる」

優子は翔子の行動の意味がわからずに首を傾げると翔子は恥ずかしそうに機械オンチと自白し、理音はくすりと笑うと翔子からデジカメを受け取るが、

「……棄権します」

「友香、待ってくれ！？　これにはわけがあるんだ！？」

雄二の雄姿を見る事なく、恭二・友香ペアは棄権する。

## 第１８９問（後書き）

どうも、作者です。

恭二はがんばってたのに結果は原作通りです。（爆笑）

哀れですが、ここは変えちゃいけないかな？と思ってました。

この後、恭二と友香はどうなるんでしょうか？

まあ、わかれるけどね。（爆笑）

# 第１９０問

「……何があったんだ？」

「さ、さぁ？」

友香が舞台を降りて行き、恭二が追いかけて行くのを見て理音は眉間にしわを寄せて首を傾げると優子も意味がわからずに首を傾げる。

「……雄二の雄姿が見れなかった」

「なら、勝利祝いを言ってきたらどうだ？」

翔子は残念そうに言うと理音は翔子に雄二の元に行って来いと言うと、

「……行ってくる」

「だ、代表!?　あたし達、直ぐにクラスのシフトが」

「……直ぐに戻る」

翔子は雄二の元に向かい歩きだす。

「……理音、あんた、どうしてくれるのよ？　代表の事だから戻ってこないわよ」

「大丈夫だろ。それより、戻るぞ。お前の休憩時間もないんだろう？」

「う、うん」

優子は翔子が行ってしまった事に理音を責めるようにため息を吐くが、理音は優子に行くぞと言い歩きだすと優子は理音の隣に並ぶ。

「そう言えば、理音の方は上手く行ってるの？」

「何がだ？」

「いろいろとよ」

「……少し場所を選べ、誰に聞かれてるかわからんからな」

優子は理音が学園長に協力している事の進行具合を聞くと理音は優子との距離を縮めてあまり迂闊な事を言うなと言う。

「……一応はお前の事を小物が俺をどこまで調べてるか知らんがもしかしたら人質とかバカな事を考える可能性があるからな。俺がいない時は絶対に1人になるな。1人になりそうだったら、必ず、俺を呼べ。わかったな」

「う、うん」

理音は優子に狙われる可能性もあるから気をつけろと言うと優子は理音の顔が近いためか顔を赤くして頷くと、

「で、でも、教頭先生だって、そんな力づくなんて行動に出るわけ……」

「でるな。昔から、プライドの高い小者は自分を過信してるからな。自分をバカにした奴を何としても這いつくばらせたがるからな」

「……わかる気がするわ」

優子は竹原がそんな行動に出るわけないと言うが理音は竹原の考えなど全て見えていると言い、優子は理音の言葉に昔の自分と竹原を重ねたようで表情を曇らせる。

「優子、覚えておけ。人が他の生命より、進化しているところは失敗から学ぶ事ができると言う事だ。昔の自分を恥じるなら、2度とそうならないように努力すれば良い」

「わ、わかってるわよ。そんな事」

理音は優子の表情に彼女の頭を優しく撫でると優子は顔を赤くして頷く。

# 第１９１問

「さてと……ん？」

「葉月は、バカなお兄ちゃんを探しているんです。おっきなお兄さんはバカなお兄ちゃんを知りませんか？」

「悪いな。ちびっこ、バカなお兄ちゃん達には心あたりがあるんだが、人数が多すぎてわからん」

「ちびっこじゃないです。葉月は葉月です」

理音は優子をＡクラスの教室に送り届けて、Ｆクラスの教室に戻ろうとすると美波の妹の葉月が雄二を捕まえて何かを言っている。

「……葉月、雄二と何をしているんだ？」

「あっ！？　怜生くんのお兄さん」

「ん？　理音、このちびっこと知り合いか？」

理音は２人の様子に声をかけると葉月は理音の顔を見て笑顔を見せ、雄二は理音と葉月の関係を聞く。

「一先ず、『バカなお兄ちゃん』は学年はわからないがＦクラスの誰かだろ。雄二、この小さな生物……」

「小さな生物じゃないです。葉月は葉月です」

理音は雄二に葉月の事を紹介しようとするが、葉月は理音が自分の名前を呼ばないため、頬を膨らませる。

「……葉月、悪かった。雄二、葉月は島田の妹だ」

「島田の？　でも探してるのは『バカなお兄ちゃん』なんだろ。島田に兄貴がいるなんて聞いた事はないぞ」

理音は葉月に謝った後、雄二に葉月を紹介すると雄二は首を傾げると、

「バカなお兄ちゃんは、葉月の本当のお兄ちゃんじゃないです」

「名前はわからないのか？」

「あう。わからないです」

葉月は肩を落として探している人間の名前がわからないと言う。

「そうか？　それなら、とりあえず、島田もいるし、Ｆクラスに連れてって見るか？」

「……そうだな。葉月が１人でＦクラスに入ってくると危険だからな。俺と雄二で守るしかないだろ。葉月、それで良いか？」

「はい。お願いします」

雄二が葉月を美波の元に連れて行くと言うと理音はクラスメート達の起こすであろう行動にため息を吐くが葉月は理音の心配をよそに笑顔で挨拶をすると雄二と理音の間に移動し、２人の手をつかむ。

「……雄二、霧島に見つからない事を祈るんだな」

「……言うな。お前が言うと翔子が現れる気がする」

理音は葉月の様子に雄二に言うと雄二は顔を引きつらせる。

## 第１９１問（後書き）

どうも、作者です。

いきなりですが、この作品は作者は清涼祭を終えてエピローグを書いて終わろうと考えています。
理由としては理音は原作沿いには向かないキャラクターであり、原作が終了していない作品のため、どこかで線を引かないといけないと考えているからです。

作者の考えとしてはこう考えているのですが、読者の皆様はどう考えているのかお教えいただきたいと思います。

アンケートとして
1．作者の考え通り、清涼祭とエピローグで完結する。
2．引き続き、強化合宿以降も書いて欲しい。
3．エピローグを終わらせて番外編と言う形で強化合宿を書いて欲しい。
4．その他意見

この作品は自サイトでも連載しているため、ここの意見だけではなく、自サイトの意見も聞いて考えたいと思います。
感想を書くのはちょっと恥ずかしいという方は自サイトの方では投票ができるため、そちらでお願いします。自サイトに人を呼び込みたいからって下心は若干ありますが、私のサイトには『悠久に舞う桜』で検索をかけるか私のユーザ情報からもいけますのでご意見をよろしくお願いします。

正直、理音と優子は清涼祭で一区切りしてしまうのでいちゃつくだ

けだから、強化合宿以降は微妙かな？という考えがあったりなかったり。（苦笑）

意見は２０１１．１．２５までと考えています。

# 第192問

「……雄二、浮気は許さない」

「しょ、翔子、待て!?　お前はとんでもない勘違いをしている」

「吉井だけじゃなく、理音と子供まで」

雄二が顔を引きつらせると直ぐに雄二の背後から黒い殺意(もの)をまとった翔子が現れ、雄二は完全に逃げ腰で翔子を説得しようとするが、翔子の勘違いはいつも以上に吹っ飛んでいる。

「怜生くんのお兄さん、あのお姉さんはどうしたんですか?」

「気にするな。ただの夫婦喧嘩だ」

葉月は2人の様子を見て首を傾げると理音は葉月の頭を撫でて雄二を見捨ててFクラスに移動しようとするが、

「待て。理音、見捨てるな!?」

雄二は理音に助けを求める。

「悪いな。そこで関わると霧島に疑われる上に、優子の趣味に巻き込まれそうだから遠慮する。何より、これから起きる惨殺シーンは葉月の教育上よろしくない」

「……私も鬼じゃない。子供には見せられない」

「翔子、お前、本当に何をするつもりだ!?　理音、笑ってないで助けろ!!」

理音はこれから雄二に起きる事は葉月には見せられないと言うと翔子は理音に頷き、彼女の明らかにおかしな言葉に雄二は声をあげると理音はその姿を見て楽しそうな笑みを浮かべる。

「怜生くんのお兄さん、おっきなお兄さんは困ってるみたいですけど、助けなくて良いんですか?」

「葉月、良いか。ああ言う愛の形もあるんだ」

「そうなんですか。勉強になるです」

葉月は雄二の様子に理音に助けてあげてと言うが理音は首を振り言うと葉月は感心したように頷くと、

「理音、ふざけるな。今の状況の方が、ちびっこの教育に良くないわ、わ、わ、割れるぅぅぅ!!!??」

雄二は理音に向かい叫ぶが雄二のこめかみには翔子の長くてきれいな指が伸び、雄二にアイアンクローをする。

「怜生くんのお兄さん、本当に良いんですか?」

「ん?　さっきも言ったがあれがあの2人の愛の形だから問題はないが、クラスの喫茶店もあるからな。霧島、そろそろ放してくれ。この小さな生物は……」

「怜生くんのお兄さん、葉月は葉月です」

「あぁ、葉月は島田の妹だ。だいたい、俺は男には興味がない」

理音は雄二はどうでも良いが、クラスの喫茶店に影響があると言い、翔子を止める。

「……本当？」

「あぁ。俺は雄二を押し倒すなら優子の足腰が立たなくなるくらいにめちゃくちゃにする」

「……信じる」

翔子は理音の言葉に頷くと雄二から手を放すと、

「足腰が立たなくなるですか？」

「ん？　良いか……」

「ちびっこ、今の理音の言葉は気にするな！？　理音、お前の言葉の方が教育上、よくないわ！？」

葉月は理音の言葉の意味がわからずに首を傾げると雄二は全力で理音の次の言葉を止め、

「ちびっこ、理音、戻るぞ」

理音と葉月を引きずって歩きだす。

## 第１９２問（後書き）

どうも、作者です。

翔子、強襲。（爆笑）

アンケートにご協力ありがとうございます。

連載を望んでくれている人が多いみたいでうれしい限りです。

個人的には強化合宿以降は理音の話を絡めにくいと言うか、ネタに走るなら番外編かな？という思いもあったりします。（苦笑）

# 第193問

『坂本、前田、その子はどうした……』

「近寄るな。葉月が汚れる」

「……理音、お前が言うな」

理音と雄二が葉月を連れてFクラスに戻ると葉月を見たクラスメートが血走った眼で葉月に駆け寄ってきたため、理音はクラスメートを表情を変える事なく蹴り飛ばすが雄二は先ほどの理音の言葉を聞いているためかため息を吐く。

『前田、貴様は木下優子だけでは飽き足らず、こんなロリっ娘にまで……』

「しつこい。ガキに興味などない」

『ぐふっ！？』

クラスメート達は理音に向かい殺意の視線を向け始めると理音は躊躇する事なく、理音に殺意を向けたクラスメートから順に口の理音特製の栄養剤を放り込んでいくと理音の花火や単体の攻撃力より生命の危険を感じたようでクラスメート達は1歩さがる。

「……姫路さんの料理はもう完全に兵器扱いなんだね」

「……そうじゃのう」

脅しに使われている栄養剤の基になったオリジナルを知っている明久と秀吉は顔を引きつらせると、

「あっ！？　見つけました。バカなお兄ちゃんです」

「君は誰？　見たところ小学生だけど、ボクにそんな年の知り合いはいないよ？」

葉月は明久の顔を見て明久に駆け寄り、明久に抱きつくが明久は葉月の事を覚えていないようで首を傾げる。

「え？　バカなお兄ちゃん……知らないってひどい……バカなお兄ちゃんのバカぁっ！　バカなお兄ちゃんに会いたくて、葉月、一生懸命、『バカなお兄ちゃんを知りませんか？』って聞きながらきたのに」

「葉月、仕方ないんだ。アキは『バカなお兄ちゃん』程度では収まりきらないグローバルなバカだからな」

「明久……バカなお兄ちゃんがバカでごめんな？」

「バカなお兄ちゃんはバカなんじゃ。許してくれんかのう？」

明久に忘れ去られていると言う事実に葉月は泣きだしてしまうと理音、雄二、秀吉が葉月に謝ると明久はさめざめと泣いている。

「アキ、本当に覚えてないのか？」

「う、うん」

理音は明久の様子にため息を吐きながら思い出せと言うと明久は改めて葉月の顔を見るが、

「……思い出せない」

明久は葉月の事が思い出せないようで首を傾げる。

# 第１９４問

「でもでも、バカなお兄ちゃん、葉月と結婚の約束もしたのに」

「……アキ、いくらなんでも小学生相手は不味いだろ」

葉月は自分の事を思い出せない明久に思い出して貰いたいようで、明久と出会った時の話を始めると理音は明久を見て汚物を見るような目で見ると、

「ちょっと待ってよ！？」

明久は葉月の言葉に流石に慌てた時、

「瑞希！！」

「美波ちゃん！！」

「「殺るわよ！！」」

タイミング悪く、葉月の言葉を教室に戻ってきた瑞希と美波に聞かれたようで２人から明久に向けて体重ののった拳が飛ぶが、

「……直ぐに暴力に移るな」

理音が瑞希と美波の首根っこをつかみ２人の拳が明久に届く寸前で止める。

「前田、ちょっと放しなさい！！　ウチと瑞希はアキにお仕置きを

しないといけないのよ」

「そうです。前田くん、放してください」

「お仕置きも何も今回の話じゃ、お前らは蚊帳の外だ」

瑞希と美波は理音に放せと言うが、理音はため息を吐くと、

「理音、なぜ、割って入るのじゃ？」

「子供の前での暴力は子供の教育上に良くないだろ」

「その割には、俺が翔子にやられてた時は止めなかったよな？」

秀吉は理音の行動に首を傾げ、理音は表情を変える事なく答えるが、雄二は先ほどの事もあるため、納得がいかなさそうに言う。

「お前と霧島の場合は夫婦喧嘩だからな。夫婦間の愛情表現の１つだ。俺に邪魔をする権利はないが、今回は違うだろ。この２人からのアキへの攻撃はただの暴力だ。正当性も何もない」

「放してください。私と美波ちゃんには吉井くんにお仕置きをする権利があるはずです」

「そうよ。前田、放しなさい」

理音は瑞希と美波に正当性はないと言うが、Ｆクラスに侵食されている２人には明久を殴る権利があると言い切り、

「……雄二、秀吉、俺はこの学園に来るまで俺は割と常識はずれな

人間だと思っていたんだが、そうでもなかったみたいだな」

「ワシの口からは何とも言えんのじゃ」

理音はため息を吐くと秀吉は何と言って良いかわからないと言うと、

「瑞希、島田、告白の1つもしてない奴が1人前に独占欲を出すな。お前らにその資格はない」

はっきりと言われた瑞希と美波は黙り込む。

# 第１９５問

「……島田、妹が遊びにきてるぞ」

「え？　葉月が」

「お姉ちゃん、遊びにきたよ」

雄二は理音が瑞希と美波を止めている様子に苦笑いを浮かべながら言うと美波は首を傾げると葉月は美波に手を振る。

「……お姉ちゃん、葉月ちゃん、ぬいぐるみ？　あれ？」

「何か思い出したか？」

「うん。もうちょっとで思い出せそうな気がする……」

明久は葉月が美波と話し始めたのを見て何かを思い出し始め、首を傾げていると、

「ああ！？　あの時のぬいぐるみの子か！！」

「ぬいぐるみの子じゃないです。葉月です」

思い出したようだが、葉月は名前で呼ばれない事が不服なのか頬を膨らませる。

「そっか。葉月ちゃんか。久しぶりだね。元気だった？」

「ハイです」

明久が改めて葉月と挨拶をすると、

「あれ？　葉月とアキって知り合いなの？　前田、アキに葉月の事を教えた？」

「いや、俺は何も教えてない」

美波が意外な繋がりに首を傾げながら明久と葉月の共通の知り合いである理音に聞くが理音は首を傾げる。

「え？　リオも美波も葉月ちゃんの知り合いなの？」

「知り合いも何もそのちびっこは島田の妹だ。さっき言っただろ」

明久は理音と美波の反応に首を傾げると雄二は明久のバカさ加減にため息を吐く。

「そうなの？」

「あぁ。俺は島田と夕飯の買い物をするのに一緒に商店街に行く事も多いからなその時に知り合った。タイムサービスの間に怜生の相手を良くして貰っている」

「怜生くんのお兄さんはいつもタイムサービス品をとって来るのです。凄い人です。葉月にはできないです」

明久の質問に理音が答えると葉月は理音を尊敬しているような目で言う。

「……理音、お前、金は持ってるんだよな？　なんでタイムサービスに行くんだ？　あんなところ行くと疲れるだろ」

「ん？　タイムサービスは戦場だ。血が騒ぐだろ」

雄二はタイムサービスの怖さを知っているのかため息を吐くと理音は雄二の質問の意味がわからないと首を傾げる。

「……騒がねえよ」

「前田と買い物に行くとタイムサービス品を必ず買えるから助かるのよね。でも、これからは優子の事を気にしないといけないから前田と買い物は行けなくなるかな」

雄二は理音の言葉にため息を吐くが美波は助かっていると言うが、理音と優子が付き合い始めたため、理音と買い物は行けなくなると言うと、

「お姉ちゃん、優子さんって誰ですか？」

葉月は『優子』の名前に食いつく。

## 第１９５問（後書き）

どうも、作者です。

今更ですが、理音はタイムサービスが大好きです。

自分で書いて言うのはなんですが意味がわかりません。（爆笑）

そして、優子の名前に食いついた葉月。

女の子は恋愛話に興味津々です。

## 第１９６問

「えーと、前田の彼女よ」

「怜生くんのお兄さんは彼女さんがいるんですか？」

葉月の質問に美波は苦笑いを浮かべながら答えると葉月は目を輝かせて理音に聞く。

「あぁ」

「どんな人ですか？」

理音は短く答えると葉月は興味が湧いているようで理音に食い入るように聞くため、

「一先ず、顔はこんな感じだ。こいつの双子の姉だからな」

「理音、何をするのじゃ！？」

「そうなんですか？　綺麗なお姉さん」

秀吉を葉月の前に出すと秀吉は驚きの声をあげるが、葉月は秀吉を女と判断し、

「ワシは男じゃ！？」

「秀吉、小学生相手に大人気無いぞ」

秀吉は葉月の言葉に声をあげるが、理音は表情を変える事なく秀吉に静かにしろと言う。

「じゃが、ワシは男なのじゃ」

「秀吉、何を言ってるんだよ。秀吉の性別はひ・で……むぐっ！？」

「葉月、こいつは間違いなく男だ」

秀吉は納得がいかないと言う表情をすると明久は秀吉の性別は『秀吉』だと答えようとするが理音は明久の口を塞ぎ、葉月に秀吉が男だと教えると、

「そうなんですか？」

「うむ。ワシは間違いなく男じゃ」

葉月は信じられないと秀吉の顔を見ると秀吉は大きく頷く。

「怜生くんのお兄さん」

「何だ？」

「葉月、怜生くんのお兄さんの彼女さんに会ってみたいです」

葉月は優子に興味があるようで目を輝かせて優子に会いたいと言うが、

「悪いな。俺はシフト中だ」

「そうですか。残念です」

理音は表情を変える事なく、無理と言うと葉月は残念そうに肩を落とす。

「でも、お昼もあるし行ってきても良いんじゃない？」

「そうですね」

「……お前らは何を企んでいる？」

葉月が落ち込む姿に美波と瑞希は理音に優子のところに行けと言うが理音は2人の言葉を当然疑うが、

「何も企んでないわよ」

「そうです。行きましょう。前田くんに吉井くん」

瑞希と美波は理音が逃げないように理音の腕をつかむと明久を誘う。

「……放せ」

「男らしくないわよ。彼女の働いている姿を見たいと思わないの？」

「邪魔になるだろ」

美波は理音に言うが理音はため息を吐くが、

「怜生くんのお兄さん、行くです」

「わかったから、放せ」

「あんた、やっぱり、子供に甘いわね」

葉月が楽しそうに笑うと理音はため息を吐き、美波はそんな理音に苦笑いを浮かべると、

「悪かったな。しかし、俺1人見世物になるのもしゃくだからな」

「ちょっと待て。理音、お前は何を企んでいる？」

理音は雄二を巻き込むと決めたようで邪悪な笑みを浮かべる。

# 第１９７問

「いらっしゃいませ。ご主人さま」

「メイド1人、もちろんテイクアウトで」

理音、明久、瑞希、美波、葉月の5人が網で捕らえた雄二を引きずって2－Aクラスのメイド喫茶『ご主人様と御呼び』へ顔を出すとメイド服姿の優子が笑顔で出迎え、理音は表情を変える事なく言い切ると、

「……理音、あんたは何を言ってるのよ」

優子はため息を吐くが、

「支払いは坂本雄二で頼む」

「……受けたまわりました。ご主人さま。優子、ご主人さまにご奉仕」

理音は雄二を翔子に引き渡し、翔子は雄二を受け取ると理音の元に行けと言う。

「……理音も代表もおかしな事を言わないの。坂本くんを解放してください」

「……今夜は帰しません。ダーリン」

優子は翔子の様子にため息を吐くが翔子はすでに優子の話を聞いて

いない。

「それで、理音はどうしたの？　休憩時間はしばらくないって言ってなかった？」

「ホントです。綺麗なお兄さんとそっくりです」

優子は翔子の様子に何を言っても無駄と判断するとため息を吐きながら、理音に聞くと優子を見上げた葉月が目を輝かせている。

「誰？　この子？」

「はじめまして、葉月です」

「ウチの妹よ」

優子は葉月を見て首を傾げると葉月は名乗るが名字を言わないため、美波は苦笑いを浮かべながら自分の妹だと説明する。

「そうなの？　葉月ちゃん、はじめまして」

「はい。怜生くんのお兄さんの彼女さん」

優子は中腰になって葉月に笑顔を見せると葉月は笑顔で優子に挨拶をするが葉月の優子の呼び方は微妙であり、

「長いな」

「そうですね」

理音は表情を変える事なく言うと瑞希は苦笑いを浮かべる。

「と言うか、リオは怜生くんのお兄さんで名前を覚えられないのかな？」

「まぁ、バカなお兄ちゃんよりは良いだろ」

明久は葉月の理音の呼び方にも苦笑いを浮かべると理音は表情を変える事なく言い切り、

「一先ずは、注文するぞ。秀吉は気にせず行ってこいとは言ったがそんな訳にもいかないだろ。調理の責任者の1人がそこにいるしな」

「ムッツリーニ！？」

「……人違い」

理音は席に座り、早く飯を済ませると言いながら、店の真ん中でシャッターが擦り切れる勢いでメイド服姿の女生徒の写真を撮っている康太を指差すが康太は人違いだと否定する。

# 第１９８問

「康太、別に止めないが優子の写真を売るのだけは止めておけ」

「……それは理音との取引用」

理音は無表情のまま、優子の写真を破棄しろと言うと康太は優子の写真は理音との取引に使うため、売る気はないと言うが、

「俺がその程度で取引に応じると思うのか？　だいたい、そう言うのは２人の時に着せて半分脱がせるから良いんだ」

「あんたはこんなところで何を言ってるのよ！？」

理音は表情を変える事なく言い切り、優子は当然、声をあげて理音の首をつかむ。

「何だ？　こう言うのを着せるなら反脱ぎが基本だろ？」

「……メイド服でのコスプレエッチ」

「ム、ムッツリーニ！？」

理音は優子の怒りの意味がわからないと首を傾げると康太は優子のそんな姿を想像したようで真っ赤な噴水が上がり、明久は康太を抱きかかえて叫ぶ。

「あんたはこんなところで何を言ってるのよ？」

「首を絞めるな。着せるならが前提の場合だろ。俺は何も着てない方が」

「そう言うのを言うなって言ってるのよ！？」

優子は額に青筋を浮かべて理音の首を絞めるが理音は気にする事なく続けるため、優子の手にはさらに力が込められて行くと、

「翔子、お前は何をする気だ！？」

「今、理音が教えてくれたから、基本を守る」

「そ、そうじゃない！？　こんなところで脱ぐな！？　おい。お前ら、俺をおいて行くな！？　誰か、翔子を止めろ！？」

店の奥から雄二の叫び声が聞こえ、Ａクラスの生徒達は事情を察し、ぞろぞろと奥から出てくる。

「……理音、あんた、どうするつもりよ？」

「別にかまわんだろ。それにあいつらの場合は誰かが雄二に観念させないと先に進まない」

「……そうだとしてもね。ここは学校なの。止めて来なさい」

優子は店の奥で2人っきりになったであろう2人の様子に顔を引きつらせるが理音は表情を変える事なく言い切るが優子は理音に止めに行けと言うと、

「康太、デジカメを借りるぞ」

「……任せた」

「行かすか！？」

理音は康太の手からデジカメを受け取り、優子は慌てて理音を止める。

「行けと言ったり、行くなと言ったり、どっちなんだ？」

「そんなものを持ってくんじゃないわよ」

「なぜだ？　２人の初めての行為をおさめる事で次の行為につながるかも知れないぞ」

「それは余計なお世話でしょ！？」

優子は理音におかしな事はさせないと言うと、

「怜生くんのお兄さんは彼女さんと仲好さんです」

「そうね」

「はい」

瑞希、美波、葉月の理音と優子を見る感覚はおかしい。

# 第１９９問

「……お前らは遊んでないで俺を助けようとは思わないのか？」

「……ちっ、無事だったか」

雄二が制服を半分剥がれた状態で戻ってくると理音は舌打ちをする。

「おい。理音、お前は何をするんだよ」

「何？　決ってるだろ。俺は友人としてお前と霧島を応援しているだけだ」

雄二は理音につかみかかり言うが、理音は邪悪な笑みを浮かべて言い切り、

「……理音はいつも私と雄二を応援してくれてる。やっぱり良い人」

翔子は理音にだまされているようで理音を味方だと言うと、

「これで俺が霧島の夫に興味がないと信じてくれるか？」

「ちょっと、理音、あんたは何をするのよ！？」

優子を引き寄せて言うと、優子の顔をは真っ赤に染まって行く。

「……信じる。理音と優子は私と雄二と一緒でラブラブ」

「ちょっと待て。他人の腕に関節技をかけるのはぁぁぁ！！！？？

？」

翔子は理音と優子には負けないと言いたげに雄二の腕に抱きつくはその抱きつき方はおかしく、雄二の腕に関節技を決める形になっているため、雄二は悲鳴をあげる。

「……リオ、さっきは霧島さん、普通に雄二の手に抱きついてたよね？」

「変なライバル心がついて周りが見えなくなってるんだろ」

明久は翔子に抱きつかれている雄二が羨ましい反面、悲鳴をあげる雄二を見て、顔を引きつらせながら言うと理音は楽しそうに邪悪な笑みを浮かべていると、

「……夏川、本当にやるのか？」

「仕方ないだろ。直接、仕掛けるわけにはいかないんだ」

どこかで聞いた事のある声が聞こえる。

「ん？　霧島、静かにしろ。雄二もいつまでも遊んでいるな」

「……お前が言うな」

理音は聞こえた声が先ほどFクラスに営業妨害をした2人組だと気づき、雄二の腕から翔子を引き離すと雄二は理音を睨みつけるが、

「気にするな。雄二、さっきのバカ2人はどうやらこりてなかったようだぞ」

「何？　本当だな」

理音は2人組を指差して雄二に言うと雄二の目は鋭くなる。

「……ねえ。理音、あたしはいつまでこのままなの？」

「気にするな」

優子は理音に抱きよせられたままなのが恥ずかしいため理音に放すように言うが理音は優子をまだ放すつもりはないようである。

# 第１９９問（後書き）

どうも、作者です。

まさかの常夏再登場。（爆笑）

次の記念すべき第２００問は常夏への制裁になるんでしょうか？

記念がそれで良いのか？（苦笑）

# 第２００問

「どうする？　しばらく、様子を見るか？」

「そうだな。まだ、何をするかもわからないし、何より、ここで騒ぐと翔子や木下姉達に迷惑がかかる」

「あれ？　ボクの名前は出してくれないの？」

理音と雄二は２人組の出方を見ようと話していると愛子が声をかけてくる。

「工藤か？」

「あの２人って何かあるの？」

「……さっき、Ｆクラスにも営業妨害にきてたのよ。理音に結構きついお灸をすえられてたみたいなんだけど」

愛子は２人組に何かあるかと聞くと優子は２人組がＦクラスに営業妨害に来ていた事を話す。

「前田くんのお灸か？　それはちょっと受けたくないよね」

「愛子もそう思うわよね」

愛子は理音のお仕置きがよほどのものだったと感じたようで苦笑いを浮かべると優子はため息を吐くが、

「まぁ、優子は前田くんにいじめられる事に悦びを感じるから気にならないかも知れないけど」

「ん？　いじめて欲しいのか？」

「ちょ、ちょっと、愛子も理音も何を言ってるのよ！？」

愛子はニヤニヤと笑いながら優子をからかいはじめ理音は首を傾げると優子は愛子の言葉を全力で否定すると、

「怜生くんのお兄さんの彼女さんはいじめられるのが好きなのですか？　葉月には良くわからないです」

「良いか。ちびっこ、愛情にはいろいろな形があるんだ」

葉月は意味がわからないと首を傾げ、雄二は理音への仕返しをしようと葉月に言う。

「……雄二もそう言う愛の形が良い？」

「ちがっ！？　止めろぉぉぉぉ！？」

しかし、雄二の仕返しはライバル心に火が点いたままの翔子の手により、雄二の頭蓋もろとも破壊される。

「理音、どうするつもり？」

「まぁ、しばらくは傍観だな。何もしないでこちらから仕掛けたら、悪者は俺達になっちまうからな。一先ず、工藤、俺はサンドイッチセットとホットコーヒーとメイド１人」

「うちと葉月はふわふわシフォンケーキ」

「私も美波ちゃんと一緒で」

明久は雄二と翔子の様子を気にする事なく理音にこの後、どうするかと聞くと理音は特に気にする事なくメニューを注文し、瑞希、美波、葉月の3人が続く。

「アキはどうする？」

「ボクは……」

「工藤、サンドイッチセットとホット追加」

「おっけ～。支払いは坂本くんで良いんだよね？」

「あぁ」

理音は明久にメニューを聞くと明久はメニューを覗きながら唸り声をあげるが何も出てこないため理音は明久に自分と同じものを頼むと愛子はメニューを復唱する事なく、奥に入って行く。

# 第２００問（後書き）

どうも、作者です。

前回のあとがきで常夏への制裁か？とか言っときながらまだ手を出していません。

代わりに翔子の手で雄二の頭蓋を破壊させていただきました。（爆笑）

そして、優子は理音に捕まったまま。

# 第２０１問

「……ねぇ。理音」

「何だ？」

「どうして、あたしはここに座ったままなの？」

愛子が注文の品を並べると優子はいつまでも自分が解放されないため、首を傾げる。

「ん？　まぁ、気にしなくても良いだろ」

「……気にするわよ。うちのクラスは広いんだから、人手もいるのよ。代表はあんな感じだし、あたしがいつまでも遊んでいるわけにはいかないのよ」

「仕方ないな」

優子は自分にもやる事があると言うと理音は優子を解放し、

「葉月ちゃん、ゆっくりしてってね。代表もいつまでも遊んでないで行きますよ」

「……わかった。雄二、また後で」

「はい。怜生くんのお兄さんの彼女さん」

優子は葉月に楽しんで行ってと言うと葉月は笑顔で返事をする。

「しかし……」

「リオ、どうかしたの？」

理音は優子を解放した後、改めてＡクラスの教室を見渡すと明久は理音の様子に何かあったのか聞くと、

「……もう少し、スカートは短い方が良くないか？」

「それはボクもそう思う」

真面目な表情で言うと明久も真面目な表情で頷く。

「吉井くん」

「アキ」

「バカなお兄ちゃん」

「ご、ごめんなひゃい。くひをひっぴゃらないれ」

明久の言葉に瑞希、美波、葉月の３人は明久の顔をつねる。

「……お前らは俺を心配する気はないのか？」

「ん？　無事だったか。つまらん」

翔子から解放された雄二は理音を睨みつけるが理音はつまらないとため息を吐き、

「てめえ、理音」

「待て。雄二、だいたい、お前がはっきりと霧島にお前の本音を伝えればこんなに揉めないはずだ。言わば自業自得だ」

雄二は理音の胸倉をつかむが、理音の無駄に鋭い他人に関しての恋愛感情を見透かす目には雄二が翔子を好きだと確定しているため、自分には関係ないと言い切ると、

「……ぐっ！？」

雄二は押し黙ってしまう。

「まぁ、これ以上言うと俺も瑞希や島田と変わらないしな。それにお前はアキ（バカ）と違って自分でどうにかするだろうしな」

「……そう思うなら煽るな」

理音は相変わらず、瑞希や美波の気持ちに気づかない明久を見てから雄二に向かいくすりと笑うと雄二は理音の顔を見てため息をついた時、雄二の頭にすっと翔子（よめ）の手が伸び、

「……雄二、浮気は許さない」

「ちょっと待て。だから、何でそうなるんだ！？　理音、笑ってないで止めろおぉぉ！！！？？？」

雄二は再度、翔子にアイアンクローを喰らい、理音はその姿を見て邪悪な笑みを浮かべる。

## 第２０１問（後書き）

どうも、作者です。

明久が制裁を受けている間に、雄二とマジ話、しかし、翔子の嫉妬に雄二落ちる。（爆笑）

作者は笑いなしで雄二、翔子の仲をオウエンシテイマス。ホントウデスヨ。

# 第２０２問

「……代表、いつまでも遊んでないでください」

「……雄二が浮気をするのが悪い」

優子は翔子がまた雄二の元にきているのを見てため息を吐くと翔子は雄二の浮気が原因だと言い切るため、

「何度も言わせるな。俺は雄二に興味なんてない。俺は雄二がどれだけ霧島を好きか聞いてただけだ」

「……理音、詳しい話を聞かせて」

理音は邪悪な笑みを浮かべたまま言うと翔子は雄二にアイアンクローを仕掛けたまま、理音の言葉に喰いつく。

「悪いな。男には男同志でしか話せない話があるんだ」

「……理音、代表で遊ばないで、代表、理音のペースに巻き込まれると大変ですから仕事に戻りますよ」

理音は楽しそうに翔子をからかっていると優子はため息を吐き、翔子を引きずって行くと、

「……理音」

「結果的には助けてやっただろ」

雄二は頭を押さえながら理音を睨みつけるが理音は自分は悪くないと言い切り、

「霧島は素直なんだ。きちんとお前の想いを言ってやれば、おかしな行動にはでないだろ。意地か何かは知らんがな。大切なものってのは割と簡単に手から零れおちるぞ」

「……うるせぇな。そんなもんは言われなくても知ってるよ」

「知っててやってるなら、霧島がかわいそうだな」

雄二にはっきりしてやれと言うと雄二は雄二なりに何か考えろ事あるようで苦虫を?み潰したような表情をするのを見て理音がため息を吐いた時、

「てめえ、何しやがるんだよ!?」

「俺達は客だぞ!!」

「……Fクラスをバカにしないで、雄二や理音はバカなんかじゃない」

2人組がFクラスの悪い噂を話しだし、Fクラスをバカにした刹那、翔子は持っていた水を2人組の1人に頭から被せ、

「だ、代表、何をしてるんですか!?」

優子は慌てて2人組におしぼりを持って行こうとするが、

「お前、Aクラスだろ。Fみたいな……ぐはっ!?」

「すいません。お客様、手が滑りました」

2人組がFクラスを再び、バカにしようとしたのを感じ取り、優子は思いっきり、2人組の顔におしぼりをぶつける。

「……リオ、ボク達が出る前に騒ぎが大きくなってない？」

「……そうだな」

理音と明久はそんな2人の様子にため息を吐くと、

「……ったく、これじゃあ、あの時と変わらねえじゃないか」

雄二は何かを思い出したのか疲れたようなため息を吐き、立ち上がる。

# 第２０２問（後書き）

どうも、作者です。

先日はアンケートにご協力いただきありがとうございます。

アンケートの意見を聞き、清涼祭以降も続けて行こうと思います。

まあ、いつまで続くかわかりませんし、先に進むとどうしても『本と勇気と演劇部』や『恋と理性と幼なじみ』、『秘めた想いと倒錯娘』のキャラクターとかかわってきてしまうと思いますのでどうなるだろう？

本編の話？

翔子と優子による、常夏への制裁。うちのＡクラスって割とＦクラスと言うか理音に好意的だから、常夏は完全に場所を間違えたと思います。（苦笑）

# 第２０３問

「てめえ、何をするんだよ!?」

「失礼しました。汚れを拭かせていただきます」

２人組の１人は優子を怒鳴りつけると優子は額に青筋を浮かべながらも、作り笑いを浮かべ、床に落ちたおしぼりで怒鳴りつけた生徒の顔を拭くと、

「てめえ、それは床に落としたヤツだろ!?　なめてんのか?　ここはどういう店だ!!　客に向かって」

自分達がしていた事をたなにあげて優子を怒鳴りつけるが、

「先輩方、いい加減にしてくれませんか?」

２人組と優子と翔子の間に利光が割って入る。

「……完全に出遅れたな」

「そうだね」

利光が現れたのを見て理音がため息を吐くと明久は苦笑いを浮かべて頷く。

「いい加減にしろ?　仕掛けてきたのはそっちの女どもだろ?」

「まったくだ。どうしてくれるんだ?」

利光の言葉に2人組は悪いのは優子と翔子だと威圧するが、

「ゴメンね。先輩方、ボク達は友達や彼氏をバカにされて『はい。そうですか』って頷けるほど、人間が出来てないんだよね」

愛子は笑顔で2人組に言うと理音がAクラスにくる度にいろいろとしていたせいか、Aクラスの生徒の中には理音に好意的な生徒も多いようで愛子の言葉にAクラスの生徒は2人組を囲っている。

「設備は確かに悪いけど、掃除をしっかりとして申請を出して許可がおりてたわ。味だって今回の飲食系じゃ上位の味よ」

「……瑞希や美波がしっかりと掃除してた。衛生面も問題はない」

「学園行事で食中毒を起こすわけにはいきませんからね。学園側もその点は十二分に注意しているはずですが、それなのにわざとらしく2年Fクラスを中傷して回るなんて、先輩達に悪意があるとしか見えませんが」

優子、翔子、利光が2人組に文句を言われる事はFクラスはやっていないと言うと、数の論理に押された2人組は少しずつ、後ろに下がるがAクラスの生徒に囲まれているため、逃げだす事は出来なく、

「お前ら、バカじゃねぇのか！！　Fクラスの味方何かしてどうするんだ……」

「……バカで悪かったな」

2人組がAクラスの生徒を怒鳴りつけた時に雄二が現れ、1人の頭

をテーブルに叩きつける。

「坂本!?」

「だけじゃないんだ。さっきはせっかく優子が助けてくれたのに懲りていなかったようだな。それにお前らみたいな下等な汚物にまさかバカ呼ばわるとは思わなった」

雄二の登場に2人組が驚きの声をあげるなか、理音は邪悪な笑みを浮かべて囲いの中に入って行き、

「バカなお兄ちゃん、おっきなお兄ちゃんと怜生くんのお兄さんはどこに行ったですか?」

「葉月ちゃん、この中は見ちゃいけない場所だから、大人しくケーキ食べていてね。姫路さんも美波も」

明久は理音と雄二の行った先に興味を持つ葉月をテーブルに座らせる。

## 第２０３問（後書き）

どうも、作者です。

Ａクラスは翔子と優子の味方。

理音は天才であり、割と聞かれた事は答えるため、Ａクラスの生徒にそれなりに顔が知れています。理音の気付かない間に理音の交友関係は広がって行く。（苦笑）

雄二はイラついていますね。自分が変わってないことへのイラつきか、常夏へのイラつきか、それはまたいつか。

# 第２０４問

「さてと今度はどんな罰が良いかな。少なくと他人に言いがかりをつけているくせに自分達を正当化しようとするんだからな。まぁ、後ろに付いている小者に察しはついているんだがな。一応は証言は取らせて貰おうかな。夏川に常村」

「ぐ……」

理音は邪悪な笑みを浮かべたまま、２人組の名前を聞くと夏川と呼ばれた生徒は苦虫を噛み潰したような表情をすると、

「前田くん、この２人に後ろに誰か繋がってるってどういう事？」

愛子は理音の言葉に首を傾げる。

「ちょっと、理音」

「ん？　あぁ、この学園の竹原って小物がな。他の私立と繋がって文月の評判を落とそうとしているんだ。裏も取れるしな。このバカどもは考えたらずで、小者の口車に乗って協力してるんだよ。条件は大学への推薦状ってところか？　まぁ、仮に推薦状が出ても評判の落ちた学園から推薦された生徒を合格させるバカはいないがな」

優子は理音を止めようとするが理音は楽しそうな笑みを浮かべながら、２人組を小バカにすると２人組は今初めて、教頭の推薦状が空手形だと気づいたようで肩を落とす。

「ちょっと待て。理音、お前、どこまで知っているんだ？」

「どこまで？　どこまでと言われれば全てだな。今回は割と大人しくするつもりだったんだがな。正直、頭にきた」

雄二は理音の言葉に、理音は最初から今回の事件を知っていたと気づき、理音に詰め寄ると理音はいつもの無表情に戻ると淡々とした口調で言うが背後には真っ黒なものが漂っている。

「……理音、竹原って教頭先生」

「あぁ。金の計算しかできない小物だ。学生の事なんて考えてないな」

翔子は理音に裏で動いているのは教頭の竹原だと聞くと理音は吐き捨てるように言い、

「ちょっと、理音、どうするつもりよ！？　あんたが学園長先生と話してた事も全部ぱあ……あ、あたしは何を言ってるのよ！？」

優子は理音が平然とばらした事に声をあげると、うっかりと口を滑らせる。

「……理音、全部説明してくれるか？」

「ん。教頭がいろいろとやってるからな。教頭の駒に召喚大会を勝たれるとわけのわからん事をやられそうだからな。たとえば、腕輪に不具合が有ったとか言って最先端の技術である白金の腕輪を破壊されるとかな」

雄二はため息を吐きながら言うと理音は平然と教頭側の生徒が難癖

を付けて白金の腕輪を壊すと言い、

「俺が手伝っている間に不正に召喚システムの腕輪のデータにも侵入してきた奴もいるしな。腕輪開発は俺の専門外だからな。データを改ざんされたものを直すのに協力していたんだ。まぁ、まだ時間がかかるんだがな」

腕輪に不具合が起きた場合の原因は全て教頭とその協力者にあると言い切る。

# 第２０４問（後書き）

どうも、作者です。

理音、教頭の悪事をばらす。そして、腕輪の不具合をなすりつける。（爆笑）

噂は拡大していきます。教頭を学園の敵にするのは簡単ですが効果的な方法だと思います。Ａクラスが発信源だとそれなりに信用もありそうですからね。

そして、理音は平然とばばあを裏切っていますがどうなるんでしょうか？（悪笑）

# 第２０５問

「おい。それって腕輪を取ると不味いんじゃないのか？」

「あぁ。だから、頑張れよ。雄二、明久」

雄二は理音の言葉に白金の腕輪が危ないものだと理音に聞き返すが理音は楽しそうに笑いながら明久と雄二に言う。

「ちょっと、待ってよ。それってボクと雄二に生贄になれって事？」

「あぁ。優子や瑞希、霧島を危険な目にあわせるわけにはいかないだろ」

「確かに、３人を危険な目にあわせるわけにはいかないけど」

明久は理音の言葉に理音が自分達ならどうなっても良いと思っていると思ったようで理音に言うが理音の言葉に頷くと、

「……前田、アキ、どうしてウチが入ってないのかしら？」

美波は自分の名前があげられない事に額に青筋を浮かべながら言う。

「ん。お前は大丈夫だ。腕輪はＣクラス程度の成績で暴走するように改ざんされてた。俺はばばあに協力してそれをＡクラスの成績上位じゃなければ暴走しないようにした。完全にバグを取り除きたかったが時間がなくてな。プログラム自体は簡単だったが時間がかかるものは仕方ないだろ。昨日、見た限りじゃ、雄二の今の成績はＢ上位程度、アキはＣ中位、島田はＢ下位だからな。何も起きん」

「それじゃあ。最悪、ボク達が優勝しなくても問題はないんだよね？」

「あぁ。反対ブロックはＡクラスはこのバカ２人だけだしな」

理音は明久、雄二、美波は腕輪の暴走の対象外だと言うと、

「……若干、バカにされてる気がするんだが」

雄二だけは納得がいかないと言う表情をする。

「何を言ってる。あんな短期間でそこまで成績をあげたんだ。バカにしているわけはないだろ」

理音はくすりと笑うと、

「雄二、悪いがばばあに俺から全てを聞いたと言って来い。俺は少し出てくる」

「リオ、どこに行く気？」

「ん？　悪者……害虫駆除？」

Ａクラスの教室を出て行く。

# 第２０６問

「……失礼するぞ」

「……ようやくお出ましかい？」

理音はノックをする事なく、教頭室のドアを開けると理音の放送での挑発がそれなりに頭にきているようで竹原は落ち着いた様子で声をかけるが、その声には怒気が含まれている。

「何だ？　せっかく、スポンサー様が無能な教頭の様子を見に来てやったんだ。茶の一杯でも出せないのか？」

「……１学生がずいぶんと偉そうだな」

理音は竹原の様子など気にする事なく、応接用に用意されている中央のソファーに腰をかけると理音の言葉が気に入らないようで竹原は理音を１学生と言い、自分が格上だと言いたげに言うが、

「人を見下して自分を保つ。くだらないバカの典型だな」

理音が竹原の安い挑発に乗るわけもなく、理音は用意していたであろう書類を竹原に向かい投げつけると竹原は何が起こったかわからないようで、呆気に取られるが、

「ばばあは金の計算では使えるとは言っていたが、経費や授業料の使い込み。上手く隠してあったつもりだろうがな。この程度に気づかないバカじゃないもんでな」

「貴様、そんな事をして、この学園が無事で済むと思っているのか!?」

理音が竹原に投げつけた書類は竹原が教頭の間に行っていた不正の証拠であり、竹原はそれが表に出た時に文月学園が無事ではないと理音を脅す。

「無事？　意味がわからんな。お前のようなクズな小物がいなくなるんだ。プラスだろ。お前が使い込んでいた経費やその他モロモロはきちんと回収もさせて貰う。言っておくがお前の家族がどうなろうと俺は知った事じゃない」

しかし、理音は些細な事だと言いたげに冷たい笑みを浮かべると、

「賢いって言うなら、敵に回してはいけない人間くらい見極めろよ。小者。ちなみにお前と繋がっている私立の経営者の不正も全部、抑えている。まぁ、簡単に言えば、終わりだよ。あんた、ウチの評判が落ちるかもしれないが周りの私立の評判も下がる。公立に人が集まる可能性もあるがウチの悪評の原因はあんたの使い込みだからな。学園自体の評判は直ぐに戻してやる」

竹原をあざ笑う。

「どういう事だ？」

「簡単な事だ。降りるスポンサーがいるなら降ろせば良い。お前みたいな奴を躊躇なく切る事で文月学園のクリーンさをアピールできる。クリーンさってのは結構重要でな。それを重要視する企業もあるな」

竹原の疑問に理音は直ぐにスポンサーも集まると言い切ると、

「……確かに、君ほどの能力を持っていれば簡単にできるかも知れないな。だが、君は迂闊すぎる。入れ」

竹原は理音の能力ならできると言うが、それでも理音を自分の下に見ているようでゲスな笑みを浮かべて、ガラの悪い男達を教頭室に招き入れる。

「結局、力で抑えつけようとするわけか。やはり、小者だな」

「ほう。この人数を見ても笑うか？　やはり、まともな人間ではないな」

理音は竹原の行動を鼻で笑うと、竹原は理音を役に立たないゴミを見るような目で見て、

「やれ」

『悪いな。俺達も仕事なんでな』

招き入れた男達に理音を始末するように言うと、男達はゲスな笑みを浮かべて理音との距離を縮めて行くが、

「……小者、１つ、教えておいてやる。俺はまともな人間じゃない。『壊れてるんだ』」

理音の口元は楽しそうに緩み、目には今までの理音とは明らかに違う異常な光が灯る。

# 第２０６問（後書き）

どうも、作者です。

１人で教頭室に入り、小物を挑発する理音に敵対する男達。

理音の目に光る異常な光は何を表しているのでしょうか？

壊れた理音は何をするつもりでしょう？

# 第２０７問

『壊れてる？　壊れるのは今からだろ！！』

男の１人は理音を痛めつける事に楽しさを見出しているようで高笑いを浮かべながら理音の頭を灰皿で殴りつけ、理音の額はぱっくりと割れ、赤い液体がどくどくと流れだしてくると、

「……まったく、切り替わるのが遅いよ」

理音の声の質は変わり、その声はここに出てきた事に対する喜びか、殴られた事にさえ歓喜の声をあげているように思える。

「ほう。殴られて笑うか。どうやら、君は変態のよ……！？」

竹原は理音のその様子に侮蔑するような視線を向けて言うが、その先には異常な光景が目に映り、理音だったものは制服で自分の額から流れている液体を拭うと、

「あれ？　私を壊すんじゃ無かったのかい？　大口を叩いた割に、自分達が先に壊れたんじゃ意味がないじゃないか」

理音だったものは楽しそうな笑みを浮かべたまま、男達の指を折り、膝を砕き、男達全員を床に這いつくばらせており、

「お、お前は何をやっているんだ！？」

「何？　あいつが言うわけだね。あなたは迂闊だね。あいつも言ったと思うけど、敵に回す人間はきちんと調べないと、足元をすくわ

れるだけじゃなく、生きたまま、首をかっ切られるよ」

竹原は目の前の光景が信じられないようで顔を青くして言うが、理音だったものは楽しそうに男の1人の腹を蹴り上げている。

「お、お前、こんな事をして自分がやった事の意味をわかっているのか！？」

「意味と言われても正当防衛だよ。私はこんなに多くの人間に囲まれて、あなたの指示でリンチに遭うところだった。私は自分の身を守るための行動。違うかい？」

竹原は異常なものを見て、意味がわからないと叫ぶが理音だったものは楽しそうに笑いながら自分の正当性をアピールすると教頭室に入って来た時から、ここでの会話を録音していたようで録音していた会話を流しながら楽しそうに笑うと、

「私に牙を剥いた事を死ぬまで……違うね。死なないようにちゃんといじめてあげるよ。まぁ、壊れるかは私の知った事ではないですけどね」

床に転がった男達の鼻の骨を折って行く。

「くそじゃり、そこまでにしな！！」

「リ、リオ、何をしてるの？」

教頭室に学園長、明久、雄二、康太の4人がなだれ込んでくると、

「藤堂さんの登場か？　つまらないな。タイプアップだ。良かった

ね。私に壊されなくて」

理音だったものは竹原の顔を見てクスクスと笑う。

# 第２０７問（後書き）

どうも、作者です。

あふれ出た理音の異常性。

いつもの理音は花火を使った射撃タイプ？ですが、こっちの理音は打撃と言った直接攻撃が大好きです。

理音が変わった理由は次回に続きます。（悪笑）

## 第２０８問

「……まったく、あんたは何をやってるんだい？」

「何？　と聞かれたら、オイタをした人間にお仕置きですよ」

「ちょっと、リオ、動かないでよ」

理音は教頭室に行く前に警察に通報をしていたようで、竹原と一緒に男達は逮捕され、理音はケガのためか事情聴取を逃れ、保健室でキズの手当をされている。

「……なぁ、お前、本当に理音か？」

「その答えはイエスでもあり、ノーでもあるよ。坂本くん」

雄二は教頭室から理音の様子がおかしいと感じていたようで、理音に聞くと理音はくすりと笑い答えるが、その笑みは理音のいつもの邪悪な笑みではなく、見た人間は背中に寒気が襲う異質さがあるが、

「ねえ、雄二、何を言ってるの？　リオはリオでしょ」

明久だけは意味がわからずに首を傾げている。

「……解離性同一性障害か？」

「解離性同一性障害？」

雄二は理音の様子に１つの答えを導き出したようで理音に向かい聞

くと明久は意味がわからないようで首を傾げる。

「……解離性同一性障害、バカなお前には多重人格、二重人格って言った方がわかりやすいだろ」

「あっ！？　それは聞いた事がある……って、ちょっと待って。ど、どういう事、リオ！！」

雄二は明久の様子にため息を吐くと明久は慌てて理音に駆け寄るが、

「どういう事と言われても、本来、説明は私の得意とするものではないのですよ。そう言う面倒な説明はあいつに任せたいところですが」

理音は明久の顔を見てくすりと笑うと、

「だけど、明久くんが私を忘れているのは少しショックですね。私が生まれた時にあなたも一緒だったはずですけど」

「えっ！？」

理音は明久が自分の事を知っていると言うが、明久は意味がわからずに首を傾げる。

「まぁ、別に思い出す必要はありませんよ。あいつも望みませんしね」

「それで解離性同一性障害って事で問題はないのか？」

理音は明久の顔を見てくすくすと笑ったまま言うと雄二は真剣な表

情で聞くと、

「どうですかね。解離性同一性障害は別人格と言いますが、私とあいつは同じ存在ですし、あいつは私が生まれた時から私の存在を理解しましたし、私もあいつから生まれた事を生まれた時に理解しましたから、強いて言うなら、私はあいつの攻撃性や狂暴性が1つにまとまったものと言った方が正しいでしょうか？」

「……あんたがわかれてるのに理音はあれだけの攻撃力を持っているのかよ」

理音は自分は『攻撃性や狂暴性』が具現化した存在だと言うと雄二は顔を引きつらせるが、

「あいつの攻撃性は私とは質が違いますよ。あいつが花火と言った火薬や薬品を使うのは相手が壊れないようにキチンと計算しているからです」

理音はくすくすと笑いながら言う。

「……お前は違うと言いたげだな？」

「そうですね。私はどこにどれだけの力を加えればそれが壊れればわかりますから、その壊れる様を見るのが好きなだけです」

雄二は理音の言葉に理音を睨みつけるが、理音は雄二の表情など気にする事なく笑っている。

# 第209問

「てめえ」

「あまり、敵意を向けないでください。いくら、坂本くんや明久くんがあいつの大切な友人でもそんな心地よいものを向けられると壊したくなります」

雄二は理音の言葉が気に入らないようで理音は音もなく雄二の首筋にそっと手を当てて言うと、

「冗談ですよ。私もあいつもまだ人でいたいんです。最後の一線を越えるつもりは『まだ』ありませんよ」

くすくすと笑う。

「……信じて良いんだろうな？」

「えぇ。さっきも言いましたが、最後の一線を越えるつもりはまだありません」

雄二は理音の様子に怯む事なく、睨み返して言うと理音はまだ人は殺さないと言うと、

「そろそろ時間ですね。明久くん」

「な、何？」

「……あいつをお願いします」

理音は明久を呼び、自分ではない理音の事を明久に頼み、

「う、うん」

「それじゃあ、また、会える事を無慈悲で残酷な神様にでも祈りましょうか」

明久は今の理音から出て来そうにもない言葉に驚いた表情をすると理音は今までとは違う笑顔を見せるが、

「……違いますね。私とはもう2度と会わない方が幸せですか？」

直ぐに今までの冷たい笑顔で笑った後、

「……ん？」

理音の顔はいつもの表情のない顔に戻る。

「戻ったか？」

「あぁ」

「ねえ、リオ」

雄二は理音の表情の変化で理音が元に戻った事を察すると理音は別に知られても困る事は思ってもいないようで表情を変える事なく頷くと明久は理音を呼ぶ。

「どうした？」

「さっき、もう1人のリオはボクはその時にいたって言ってたんだ。その時の事がボクにはまったく覚えがないんだけど」

明久はもう1人の理音が言った事が気になっているようで理音に聞くと、

「あいつは思い出せとでも言ったか？」

「……言ってない」

「なら、思いだす必要はない。あいつも望まないだろうしな」

理音は無理に思いだすが必要はないと言った時、

「理音、あんた、何してるのよ！？」

「ん？　何と言われても困るんだが、今は治療中か？　まったく、へたくそな包帯の巻き方をしたな」

優子が慌てて保健室に入って理音に詰めより、理音は自分の頭に巻かれている包帯に納得がいかないと言いたげに包帯を外し始め、

「ちょっと待て、理音。外すな。また、血が出るだろ！？」

「切れてるだけだからな。縫ってしまおうと思ってな。こんなへたくそな治療より、縫ってしまった方が傷も直ぐに治るだろ」

「……くそじゃり、学園の保健室でそんな事をするんじゃないよ。だいたい、そんな治療器具、学園にあるわけないだろ」

雄二は理音の行動に慌てるが理音は表情を変える事なく、傷口を縫うと言うと学園長はため息を吐くが、

「ん？」

「あんたは何をする気よ！？」

理音は懐から、医療用の縫い針と糸を取り出し、優子は理音の行動に慌てて理音を止める。

# 第２１０問

「さてとじゃりども、あんた達は時間だろ。あたしはこのガキと話したい事があるんだ。ちょっと席を外してくれるかい」

理音を保健室の縛り付けて学園長は明久、雄二、優子に召喚大会へ行けと言うと、

「……俺は妖怪ばばあと2人で話と言うのは精神的にキツイからゴメンなんだが」

「確かにな。明久以上に見るに耐えない顔だからな」

「雄二以上に性格も腐ってるしね」

理音は精神的によろしくないと言い、明久と雄二はお互いを罵りながら頷き、

「何だと。バカ久、やるつもりか？」

「上等だ。バカ雄二、表でろや！！」

睨みあいを始めだす。

「木下、このバカ2人を連れて行きな。あたしはむちゃくちゃな事をしてくれたこのガキに話をしないといけない事があるんだよ」

「はい。吉井くん、坂本くんも行くわよ」

学園長は明久と雄二の様子を見て、頭を押さえながらため息を吐いて優子に明久と雄二を連れて行くように言うと、優子は理音が取った行動に自分が口を滑らせた事も原因にあると思っているようで素直に明久と雄二を引きずって行く。

「さてと……あんたは何をしてくれたんだい？」

「何？　いろいろと面倒になったからな。さっさと退場して貰っただけだ」

学園長は3人が保健室から離れて行った事を確認すると理音の行動にため息を吐くが理音は気にする事なく言うと、

「……そのせいで、さっきから学園の電話は鳴りっぱなしだよ。会見だなんだと言うのもきてるしね」

「そうか。スポンサーはどうなってる？　金額で済んでるか？　止めて行ってるか？」

学園長はそのせいで大変な事になっていると言うが理音はスポンサーの動向しか気にしていないようでスポンサーの事を聞く。

「当然、減ってるさね」

「そうか、足りない予算は俺に請求しろ。後で振り込んでやる」

「……」

学園長はため息を吐くと理音は平然と言い放ち、学園長は呆気に取られるが、

「金の流れも水の流れと一緒だ。一ヶ所に留まると淀む。それがわからないバカが多いから景気が悪くなるんだ。それに俺と怜生、2人で暮らすには多すぎるしな。必要になったら、また稼げばいい。幸い、俺の頭があれば無一文からでもすぐに稼げる」

「……あんた、最初からそのつもりだったね」

学園長は理音の行動が計算されていたものだと理解したようでため息を吐く。

「あぁ。他に理事を辞めたいってヤツがいたら、理事席も買ってやる」

「遠慮するよ。そこまで迷惑をかけるわけにもいかないさね」

理音の言葉に学園長はため息を吐くと、

「竹原の代わりが見つかるまで、学園の金の管理はあんたがやりな。ここまで騒ぎを大きくした罰だよ。あたしは学園長の仕事をしてくるさね。少し休んだら、あんたを心配したじゃりどもを応援にでも行ってやりな」

「あぁ」

「じゃあね。くそじゃりども」

学園長は『2人』で文月学園を守ろうとした理音に声をかけて保健室を出て行き、

「……悪かったな」

理音はもう1人の自分に謝るように呟くが返事が返ってくる事はない。

# 第２１１問

「理音、大丈夫か？」

「……あぁ。勝ったな」

「……雄二がね。姫路さんも美波も腕輪を取るわけにはいかないってわかってるしね」

理音が召喚大会に会場に行くと明久と雄二は瑞希と美波に勝ったと言うが、明久はフィードバックの影響か頬を押さえている。

「雄二が？　アキ、お前は雄二と組んでるんだ。雄二が勝ったなら、お前も勝ったんじゃないのか？」

「……前田、アキの言った通り、坂本の独り勝ちよ」

理音は首を傾げるが瑞希と美波も理音の姿を見て駆け寄ってきて美波はため息を吐く。

「そうか」

「それより、前田」

「何だ？」

美波は理音に言いたい事があると言うと理音は首を傾げると、

「あんた、どうしてくれるのよ。学園がこんな騒ぎじゃ。瑞希、転

校しちゃうでしょ！！」

美波は理音の胸倉をつかみ、理音の行動で文月学園が大変な事になっていると言う。

「心配するな。勝算もないのにこんな騒ぎは起こさない。瑞希がいなくなるのは俺達も寂しいしな」

「そ、そうだよ」

理音は心配ないと言うと明久に話を振り、明久は大きく頷くが、

「本当ですか？　……あれ？　吉井くん」

「し、しまった！？」

瑞希は明久が頷いたのを見て、自分の転校の話を明久が知っている事に気づき、明久は自分が口を滑らせた事に気づき、頭を押さえて声をあげる。

「……明久、今更、騒ぐな。それで、理音、勝算ってのは何だ？」

「簡単な事だ。うちは教頭の竹原が毒でな。各教室に分けるはずの予算を使い込んでいたんだ。これで、Ｆクラスの改修費も出るしな。竹原が捕まった事で、瑞希の成績に合った私立も同じように評判が下がる。あっちは一教師じゃなく、経営者がやってた悪事が公になったんだからな。政治家と金で繋がっている奴もいるかも知れないが、その政治家が逆らえない大国の後ろ盾もある俺に逆らってまで、助けると思うか？」

「……つくづく、お前って悪党だよな」

理音は邪悪な笑みを浮かべて言うと雄二はため息を吐く。

「別に少なくとも、今回は方に触れる事は何もしてないぞ。不正アクセスをした奴らを調べ上げて情報を警察に引き渡しただけだ。ちなみにこんなものも貰ったぞ」

「これって」

「俗に言う、捜査協力費ってヤツだ」

理音は警察から封筒を取り出し、くすりと笑う。

「文月は不正をしていた人間を学園の評判を落とす事など考えずに警察に引き渡した。不祥事を隠す事なくな。今は一時的にスポンサーも減っているが直ぐに元に戻る。周りからねたまれて罠にはめられたが真面目な経営をすると宣言したのとトップが不正をやらかしたのに会見もする事なく保身に回ってる他の私立。お前らならどっちが環境が良くなると思う？」

「って言うか、今回の件で関係していた私立は下手したら潰れるんじゃないのか」

「その可能性もあるな」

理音の話に雄二はため息を吐くが理音はそれは自分の知った事ではないと言いたげに言う。

# 第212問

「それじゃあ、姫路さんの転校はどうにかなるんだよね？」

「勘違いするな。後はお前達しだいだ。クラスメートが瑞希の成績を競いあうに値するか見せるのに優勝して見せろ」

明久は安心したようにため息を吐くが理音はまだ終わってないと言い、

「少なくとも決勝でバカ2人はお前らに恥をかかせにくるぞ。腕輪の暴走がなかろうと俺達があの不細工2人を痛めつけた事に逆恨みをしてるだろうからな」

「だろうな。自分達は悪くないと最後まで言いたげだったからな」

3年の2人組は明久と雄二に恥をかかせるためだけに優勝を狙ってくると言うと雄二はくだらないと言いたげにため息を吐く。

「……まったく、くだらない人達ね。自分達の間違いくらい認められないのかしら」

「そうですね」

瑞希と美波も2人組の行動が頭にきているようで頬を膨らませると、

「少なくとも、お前らに言う権利はないと思うぞ」

「そうだな」

理音と雄二は2人の様子に普段、2人が明久にやっている理不尽な嫉妬の事を言うが、

「前田？　何を言ってるの？　うちも瑞希も自分達の間違いは素直に認めるわよ」

「はい」

瑞希と美波は理音と雄二が何を言っているかわからないようで首を傾げる。

「……まず、間違いだと気付かないようだな」

「……余計に厄介なのか？」

理音と雄二は2人の様子にため息を吐くと、

「リオ、木下さんと霧島さんの試合が始まるみたいだけど、行かなくて良いの？」

明久が優子と翔子の試合に気づき理音を呼ぶ。

「ん？　そうか。悪いな。ちょっと、行ってくる」

「はいはい。あんた達、ちゃんと優子と翔子を応援してくるのよ」

理音は応援に行ってくると言うと美波は理音と雄二に応援して来いと言い、

「ちょっと待て。俺は翔子の応援なんかに行かないぞ」

「行くぞ」

雄二は声をあげるが、理音が雄二の首をつかんで歩きだし、

「てめえ。理音、放せ!?　俺がなんで翔子を応援しないといけないんだよ」

「良いから行くぞ。霧島は俺達……お前のためにあのバカ2人に霧島は向かって行ったんだ。応援くらいしてやってもバチはあたらないだろ」

雄二は声をあげるが、理音は先ほどのAクラスの翔子の事を口に出すと雄二はだまり、理音の隣に並ぶと、

「……今回だけだ」

不機嫌そうに言い、理音と並んで歩きだす。

# 第213問

「なぁ、理音」

「ん？　どうかしたか？」

理音と雄二が並んで優子と翔子の試合を観客が少ない場所で見ていると雄二が理音を呼ぶ。

「……さっきのヤツは何なんだ？」

「あいつが説明しただろ。あいつも俺だ」

雄二は理音と2人になったせいか、優子と翔子の試合に集中できないようでもう1人の理音の事を聞くと理音は表情を変える事なく、もう1人の理音は自分だと言い切る。

「……お前がそう言ってもな。はい。そうですか。って信じられねえんだよ。それに、あいつは危険だ。お前くらいなら理解してるんじゃないのか？　治療法だってあるんだろ」

「……悪いな。俺はあいつを手放す気はない。あいつは俺だ。自分が引き裂かれるのは2度とゴメンだ」

「それはあいつに何かやらせるつもりだからか？」

理音はもう1人の自分を手放す気はないと言うと雄二は理音が考えている事が人の道から外れている事ではないかと思ったようで理音の胸倉をつかむ。

「……おかしな勘違いをするな。俺もあいつもまだ人だ……違うな。人でいたいと願うだけの化け物だ」

「おい」

「……俺もあいつも自分が化け物だと理解している。理解した上で人でいたいと願っている。お互いにな。今はそれがバランスを保っているから、無事なんだ。あいつが切れた時は俺があいつを抑え、俺が切れた時はあいつが俺を抑える。俺はお前らが思ってるほど冷静でも大人でもない」

理音は睨みつける雄二の手を自分の胸倉から放させると少しだけ困ったように笑う。

「だからと言ってな。あいつをお前が止め切れなかった場合はどうするんだよ」

「大丈夫だ。それにどちらかといえば、あいつより、俺の方が先にブチ切れる可能性が高い」

「……」

理音はもう1人の自分より、自分の方が切れやすいと言うと雄二は今までの理音の行動にどこか納得が言ったようで顔を引きつらせた時、

「……雄二、また、理音にちょっかい出してる？　許さない」

「だ、代表。落ち着いて」

背後に真っ黒なものを背負った翔子が理音と雄二を見て雄二に殺意を向ける隣りで優子は苦笑いを浮かべている。

# 第２１４問

「翔子、ちょっと待て。誤解だ。まずは話し合いと言うものを覚えろ」

「……浮気は絶対に許さない」

雄二は翔子の様子に後ずさりをするが直ぐに壁に追い詰められ、命乞いをしようとするが翔子は聞きいれるつもりもなく、雄二との距離を縮めて行くと、

「……理音、止めなさい」

「まぁ、仕方ないか」

優子はため息を吐き、理音はその言葉に頷く。

「……雄二、覚悟は良い？」

「良いわけあるか！？」

翔子の手が雄二の頭に触れる寸前で雄二が声をあげた時、

「霧島、そこまでだ」

「……理音、邪魔するなんてやっぱり」

理音が翔子の首をつかみ、彼女のを止めると翔子の勘違いは彼女の中で確信に変わり、理音を睨みつける。

「……何度も言わせるな。俺は雄二には興味などない」

「……証拠を見せて」

理音は翔子の視線にため息を吐くと翔子は理音の言葉を信じるために証拠を見せろと言うと、

「証拠か？　そうだな……優子」

「ちょ、ちょっと、理音、こんなところで何をする気？」

理音は優子を呼び、優子は理音の要雄に何かを感じたようで後ずさりをするが、

「まぁ、たいした事じゃない」

理音は邪悪な笑みを浮かべ、優子の逃げ道を塞ぐ。

「ちょっと、いや、あたしはいやよ！？　こんな人目の付くところで！？」

「……優子、前にも言ったが俺は見られて興奮する趣味はないんだが」

優子は理音にされる事を勝手にだいぶ先まで想像して、理音にため息を吐かれる。

「！？」

「……霧島、何か流石に人目が集まってきたしな。戻るぞ。俺を疑う前に雄二と一緒に清涼祭でも見てきたらどうだ」

「……雄二、２人でデート」

「ちょっと待て!?　何故、関節技を決める!?」

優子は理音に指摘され顔を真っ赤にすると理音はため息を吐き、翔子に雄二とデートでもして来いと言うと翔子は雄二の腕を取り、歩いて行き、

「優子、俺達も行くぞ」

「う、うん」

理音は優子の手を取り、歩きだす。

# 第２１５問

「……雄二、ここで決着をつける。私が勝ったら、約束通りこれに判子を押して貰う」

「ちょっと待て!?　状況を考えろ!?　何より、何で婚姻届（そんなもん）を持ってるんだ!?　だいたい約束の内容をすり替えるな!?」

召喚大会準決勝『明久・雄二ペア対優子・翔子ペア』の対戦は始まるなり、翔子は真っ直ぐと雄二に自分と雄二の名前が記入された婚姻届を見せて言うと雄二は声を上げる。

「……木下さん、約束って何があったの？」

「えーとね。さっきの試合が終わった後の事なんだけど」

雄二と翔子の様子に明久は顔を引きつらせて聞くと優子は苦笑いを浮かべ、

「……さっき、理音が坂本くんと代表を煽ったのよ。この勝負はあたし達が負ける予定になっているけど、『如月ハイランドのプレミアムペアチケット』は今はどう使うか決まってないでしょ？」

「うん。ボクも誘う相手もいないし、雄二とはリオと木下さんに上げようかとも話したけど、２人はチケットを持ってるみたいだしね。売っちゃおうかとかも話したんだけど……ペアチケットがどうかしたの？」

明久に『副賞のペアチケット』の事を聞くと明久は意味がわからな

いようで首を傾げる。

「……代表が坂本くんに勝ったら2人で行くようにって、理音が煽ったのよ。坂本くんは最初は渋ってたんだけど、あれよあれよと言う間になぜかのせられちゃってね」

「……その光景が目に浮かぶよ」

優子がため息を吐くと、明久はその光景が目に浮かんだようで顔を引きつらせて言い、

「……問題は霧島さんが勝ったらボクが勝てるかだよね？」

「……そうね。代表、こうと決めたら真っ直ぐだから、最悪、吉井くんにも勝っちゃうかも」

「……それが1番の心配事だよね」

明久と優子の心配は翔子が冷静でいられるかであり、2人は翔子が雄二に勝った後の行動が読めずにため息を吐く。

「まぁ、どれだけ、坂本くんが代表の点数を削れるかね。後は吉井くんの操作性に賭けるわよ」

「それは責任重大だね」

優子は雄二と翔子の戦いは翔子が絶対勝つため、雄二の粘り次第だと言うと明久は自分にかかる期待に苦笑いを浮かべるが、

「吉井くんならできるでしょ。理音も吉井くんなら大丈夫だと言っ

てたしね」

「そう言われると頑張るしかないんだけど……リオはボクに何をさせたいんだろう？」

優子は理音が明久ならどうにかなると言っていたと言うと明久は考えの読めない幼なじみの理音の顔を思い浮かべてため息を吐く。

「まぁ、あたしもできるだけ協力するから、頑張ってよ」

「う、うん。木下さんが協力してくれると心強いよ」

優子は明久の様子に苦笑いを浮かべ、明久が頷いた時、

『それでは召喚大会準決勝第１試合。開始』

「「「「試獣（サモン）召喚！！！！」」」」

準決勝の火ぶたが切って落とされる。

# 第２１５問（後書き）

どうも、作者です。

雄二に逃げ場なし。（爆笑）

優子が彼女ですし、清涼祭の裏を全員が理解しているため、理音に２人を煽らせました。

原作とは違う準決勝に成績の上がった明久と雄二は優子と翔子とどう戦うんでしょうか？（悪笑）

# 第216問

「……雄二、覚悟して」

「翔子、ちょっと待て!?　お前は何をやってるんだ?　割れ、割れるぅぅ!!!??」

召喚戦争準決勝が始まって直ぐに雄二は翔子に雄二の本体は翔子にアイアンクローをされている。

「……木下さん、これはどうしたら良いと思う?」

「……あたしにもわからないわよ」

明久と優子は目の前で行われているいつもの惨劇が本来あり得ない場所で起きている事に顔を引きつらせると、

「それじゃあ、木下さん、始めようか?」

「そ、そうね」

雄二と翔子に関わってはいけないと判断したようで2人で召喚大会を始めようとする。

「あ、明久、助けろぉぉぉ!!!??」

「……ごめん。雄二、ボクは自分の命が大切なんだ」

雄二は明久に助けを求めるが、明久は雄二を見捨てると、

「それじゃあ、木下さん、始めようか？」

「へぇ。吉井くん、本当に成績、上がってるのね」

明久は優子の前に立ち、優子は明久の召喚獣の上に表示されている明久の点数を見て感心したように言う。

「うん。リオのおかげだよ」

「ふーん……ちょっと、妬けるわね」

明久は苦笑いを浮かべて、理音のおかげで成績が上がったと言うと優子は自分は理音に勉強を見て貰った事もないせいか少しだけ不機嫌そうな表情をすると、

「それじゃあ、行くよ。木下さん」

「えぇ」

明久の召喚獣が優子の召喚獣に向かい突っ込んで行く。

「成績が上がったからって言っても、あたしに勝てるかしら」

「勝つさ。確かに木下さんに成績は大部、劣るけどね。ボクにはボクの戦い方があるんだよ」

優子の召喚獣は明久の召喚獣の木刀を自分の召喚獣のランスで弾き返すと明久の召喚獣は上手く着地して、召喚獣の戦いは成績だけじゃなく、自分には成績差を埋める事ができると笑う。

「そうね。理音の召喚獣の扱い方も上手いけど、吉井くんもずいぶんと上手いみたいだしね」

「それが観察処分者の利点だからね」

優子は今度は自分の番だと言いたげに明久の召喚獣に向けて、ランスを突き出すと明久の召喚獣はランスを上手く交わすと優子の召喚獣の足を払い、バランスが崩れた優子の召喚獣に木刀を振り下ろす。

「……吉井くん、ちょっと、あたしも頭にきたかも知れないわ」

「えーと、木下さん、できれば手加減してくれると嬉しいんだけど」

優子は明久に負けるつもりではあったが、自分の攻撃は全て明久に交わされる事にあまり気の長くない優子はムカついてきたようで、黒いものが溢れ出すと明久は苦笑いを浮かべるが、

「あたしの点数も削れて来たし、1発くらい当たってよ」

「無理、無理、ボクは観察処分者なんだから、攻撃が当たったら痛いんだからいやだよ!?」

優子の目には怪しい光が灯っており、明久に向かい凄い勢いで攻撃を始めだし、明久はその攻撃を当たるわけにはいかないため、全力で優子の攻撃から逃げていると、

「当たりなさい!!」

「いやだよ!?」

優子の背後から溢れ出したものに押されて明久の逃げ道は塞がれてしまう。

「1発だけよ」

「1発でも、ボクに取っては致命傷だよ!?」

優子は笑顔で明久の召喚獣を串刺しにしようとした時、

『そこまで、霧島翔子の反則行為により、勝者坂本雄二・吉井明久』

翔子の雄二本体への攻撃は反則となり、明久と雄二の勝利が宣言されると、

「木下さん、勝負はついたから、それを閉まって」

「そうね」

「ど、どうして、木下さん、止めてぇぇぇ!!!??」

明久は優子をなだめようとするが、優子は笑顔のまま、明久の召喚獣にとどめを刺し、

「……あいつらは何がしたいんだ?」

「わからんのじゃ」

観戦に来ていた理音と秀吉はため息を吐く。

# 第２１６問（後書き）

どうも、作者です。

翔子・優子ペア。反則負け。（爆笑）

翔子の攻撃は本体への攻撃しか思いつきませんでした。

そして、明久の召喚獣に攻撃が当たらないため、切れる優子。

……書きながら、本当に起こりそうだな。とか思ってしまったことは秘密。

そして、明久は勝ったのにフィードバックで沈む。

勝ったはずの２人が沈んでいるのはどうなんでしょうか？

# 第２１７問（前書き）

どうも、作者です。

『僕と歪んだ愛情表現?』で、光闇雪さんの『バカとテストと召喚獣～ツインズ～』の『吉井夕季』と理音と怜生でコラボ小説を書きました。

よろしければ、そちらもお楽しみください。

# 第２１７問

「痛いよ。痛いよ」

「ご、ごめんね。吉井くん」

明久は優子にやられたため、フィードバックの影響で涙を流していると優子は明久の召喚獣にとどめを刺した事で冷静になったようで明久に頭を下げている。

「……優子、お前は何がやりたかったんだ？」

「……まったくなのじゃ」

理音と秀吉は会場から出てきた４人を見つけて呆れたように言うと、

「……反省してるわよ」

優子は反省していると言う。

「まったく、アキはフィードバックでを受けてるし、雄二は嫁に頭蓋を砕かれて、勝者って感じはしないな」

「……見た目は敗者に鞭を打ったような感じじゃのう」

理音は明久と雄二の様子にため息を吐くと秀吉も頷き、

「一先ずは、霧島、しばらく、雄二へのアイアンクローは禁止だ。そろそろ、命に関わりそうだからな」

「……わかった。反省する」

雄二の状況を見て、翔子にドクターストップをかけると翔子は素直に頷く。

「とりあえずはこれで今日の召喚大会は終わりだな。優子、霧島、雄二は少し休ませないといけない状況だし、アキは意味もないところで補習室送りになるからな。２人の代わりにうちの手伝いをして貰うからな」

「……わかった」

「仕方ないわね」

理音は明久と雄二の代わりに２人にＦクラスの中華喫茶を手伝うように言うと２人とも反省しているようで素直に頷き、

「それじゃあ、戻るぞ。康太に霧島のチャイナ服を作って貰うか」

「……ムッツリーニの事じゃ、既に完成しておる気がするのじゃ」

「そんなわけないでしょ」

理音は優子のチャイナ服はあるため、翔子のチャイナ服を康太に作って貰おうと言うと秀吉は完成してる気がすると言い、優子はため息を吐くが、

「……できてるね」

「……そうだな」

雄二と明久はチャイナ服ができていると言った時、

「……俺の嗅覚を舐めるな」

6人の目の先には完成した翔子用のチャイナ服を持っている康太が仁王立ちしており、

「……Fクラスって何なの」

優子は顔を引きつらせる。

# 第２１８問

「……なんだ？」

「本当に何でもそつなくこなすなと思ってね」

『『『……ちっ』』』

理音が厨房で康太達調理班の手伝いをしていると優子が理音の働きを見て、悔しそうな表情をするとそんな２人の様子を見たＦクラスの生徒は舌打ちをする。

「……ねぇ、理音、あんたは気にならないの？」

「何がだ？」

優子は聞こえる舌打ちに思う事があるようで理音を呼ぶが、理音は全く気にしていないようで優子の言葉の意味がわからないと首を傾げる。

「何がだ？　じゃないわよ。あんな風に舌打ちされたりしたら、気分悪いでしょ？」

「別に」

「……そうよね。あんたはそう言う人間よね」

優子は理音にＦクラスは理音と付き合っている自分には居心地が良くないと言うが、理音は全く気にしておらず、優子はため息を吐く

と、

『『『……ちっ』』』

再度、舌打ちが聞こえる。

「……ねえ。理音」

「そうやって挑発にのるから、反応するんだ。負け犬は無視しろ」

優子はFクラスの生徒の舌打ちに嫌悪の表情を見せるが、理音は無視しろと言うと、

「ああやって、他人を妬んで原因を他人に押し付けている限りは上手く行くわけがないだろ」

「ちょ、ちょっと!?　理音、何するのよ!?」

Fクラスの生徒に彼女ができないのは足の引っ張り合いをしているからだと言い、優子の腰に手を回し、彼女を引き寄せる。

「ん？　気にするな。こうしたい気分なんだ」

「気分じゃないわよ!?」

「怜生くんのお兄さんと怜生くんのお兄さんの彼女さん、ラブラブです」

理音の突然の行動に優子は声をあげるが、その顔は嬉しそうに緩んでおり、そんな2人の様子に葉月は目を輝かせているなか、

『『『……ちっ』』』

三度、Ｆクラスの生徒からの舌打ちが聞こえた時、

「……お兄ちゃん、お姉ちゃん」

「あっ！？　怜生くんです」

ドアの方から、遠慮がちな怜生の声が聞こえ、怜生に気づいた葉月は笑顔で怜生に駆け寄る。

# 第２１８問（後書き）

どうも、作者です。

遅くなりましたが、怜生登場です。（爆笑）

怜生の教育によくないであろうＦクラスの運命は？

# 第２１９問

「……」

「……隠れたな」

「……隠れたわね」

葉月は怜生に駆け寄ろうとするが、怜生は葉月になれていないようでドアの陰に隠れてしまい。そんな怜生の様子に理音は事実だけを述べ、優子は苦笑いを浮かべる。

「怜生くん、どうして隠れるですか？」

「……」

葉月は怜生に避けられていると思ったようで悲しそうな表情をすると怜生は警戒をしながらも顔を出すと、

「怜生くん、お久しぶりです」

「……」

葉月は明久に突撃するよりは勢いを緩めながらも怜生に突撃して行き、怜生を捕まえると怜生はどうしていいのかわからないようで理音や優子に助けを求めるような表情をしているなか、

『『『……ちっ』』』

葉月に抱きつかれた怜生相手にまでFクラスの生徒は舌打ちをする。

「……葉月、怜生くん、ちょっと、出てようか」

「お姉ちゃん、どうしてですか？」

「葉月ちゃん、いろいろあるのよ。怜生くん、ちょっと、理音は忙しいから、あたし達とお散歩行こうか？」

Fクラスの生徒の舌打ちに優子と美波は次の理音の行動に予測がついたようで、これからこの場所で起きるであろう惨劇を怜生と葉月に見せるわけには行かないと思ったようで2人を連れて喫茶店を出ると、

「待ってください。私も行きます」

瑞希もこの場所じゃ危険だと理解したようで4人の後を慌てて付いて行く。

「……お前ら、死ぬ覚悟は良いな？」

教室に残ったブラコンは邪悪な笑みを浮かべて言うと、

『前田理音、お前は兄弟そろって、我らが血の盟約を破った。その屍を……まだ、話の途中だろ！？』

「なぜ、俺がお前ら負け犬の言葉を聞いてやらないといけないんだ？　時間の無駄でしかないだろ。良い事を教えてやる。『時は金なり』と言う言葉があるんだが、お前らに覚える容量はないな」

クラスメート達が理音に怨嗟の声を上げている途中で理音は定番となった花火を取り出し、躊躇する事なく、クラスメート達を撃ち抜いて行き、

「……やっぱりね」

「優子、振り返ったらダメよ。ウチ達は何も知らないの。ね。瑞希」

「はい」

優子、瑞希、美波の3人は顔を引きつらせるが、怜生と葉月は何があるかわからないようで首を傾げている。

# 第220問

「……高さが足りないな」

「……リオ、これは何？」

理音は積み上げた屍を見ていると、補習を終えた明久が理音と積み上げられたクラスメート達の屍を見て顔を引きつらせる。

「ん？　こいつらは怜生に舌打ちをしたからな。少し傷めつけようと思ってな」

「だけど、みんながいないとお店が回らないよ。そうなると姫路さんの転校が」

理音は当然の報いだと言うが、明久は瑞希の転校を阻止するためにも喫茶店を成功させないといけないため人手が足りなくなるのは困ると言うと、

「それもそうだな。ここの修繕費の計算や色々としないといけないからな。先行で作業を進める頭金くらいは稼いでもらわないと困るからな」

理音は明久の言葉に頷き、

「ほら、起きろ」

「ちょっと、リオ、それは危険だよ！？」

「気付けにはちょうど良いだろ」

屍達の口のなかにいつもの栄養剤を放り込んで行き、屍達は口から泡を吹き出し始め、明久は声をあげて理音を止めるが理音は明久の言う事など聞かずに次々と屍達に止めを刺して行く。

「ちょっと、リオ！？　だから、それは気付けにはならないから、それは毒だから！？　劇薬だから！？」

「何度も言わせるな。これは栄養剤であって人の生死には関係ない」

「なら、そんな邪悪な笑みを浮かべないでよ！？」

明久は理音の栄養剤はクラスメート達に止めを刺すだけだと叫ぶが理音は邪悪な笑みを浮かべており、明久は理音を止めようとするが、

「良いか。アキ、このバカどもにそろそろ、俺に逆らう事の意味を教えてやろうと思ってな」

「教える以前に死んだら元も子もないからね！？」

理音は邪悪な笑みを浮かべたまま言うと明久はそれでも理音を止めようとする。

「アキ、良い事を教えてやる。このバカどもはこの程度では死なん。こうすれば……」

『『『前田、それを寄こせ！！！！』』』

理音は明久の言葉を否定するように言うと懐からＵＳＢメモリーを

取り出すとクラスメート達はそれが何か理解したようで、理音に襲い掛かるが、

「ほらな」

理音は口元を緩ませると再度、クラスメート達を花火で撃ち抜いて行き、

「……清涼祭、見てこよう」

明久は理音を止める術はないと判断したようで教室を出て行く。

# 第２２１問

「ただいま」

「おう。戻ったな」

優子達が帰ってくると雄二と翔子を中心にして中華喫茶は順調に営業している。

「あれ？　坂本くん、理音は？」

「ん？　さっき、学園……ばばあ長から呼び出しがあってな」

「ねえ。理音もそうだけど、学園長先生って呼べないの？　それもわざわざ言いなおしたわよね？」

優子は理音がいない事に気づき、雄二に聞くと理音は学園長に呼び出しを受けたと言うと優子は雄二の学園長の呼び方にため息を吐くが、

「ばばあ長じゃ、不満か？　なら、『妖怪ばばあ長』？」

「……もう良いわ」

雄二は学園長の呼び方を変える気はなく、優子はため息を吐く。

「ん？　がきんちょ、来てたのか？」

「……はい」

雄二は優子の様子など気にする事なく、怜生の姿を見つけると少し乱暴に見えるが優しい笑みを浮かべて怜生の頭を撫でると怜生は大人しく雄二に頭を撫でられている。

「大きなお兄さん、ずるいです。どうして、大きなお兄さんは怜生くんに懐かれているんですか！！」

「ちびっこ、懐かれているかって言われてもな。俺は良く理音の家に行くしな」

「……雄二、浮気は許さない」

葉月は雄二と怜生の様子に怜生は自分には警戒心があるためか、不満そうに声をあげると雄二は苦笑いを浮かべながら、理音の家に良く行ってるせいだと言うと翔子の背後には真っ黒な殺意（もの）が溢れ出し、

「ま、待て！？　お前は勘違いをしている！！　って言うか、さっき、理音が止めろと言ったばかりだろ！！」

雄二は翔子の様子に声を上げながら後ろに下がる。

「……理音はアイアンクローは頭に直接ダメージが行くからダメだと言ったけど、他は止められてない」

「それは屁理屈だ！！」

翔子は雄二の頭にさえ攻撃しなければ問題ないと言い、雄二が声をあげた時、

「……霧島、雄二がきていたのは召喚大会の準備だ」

「……お兄ちゃん」

理音が中華喫茶に戻ってきて翔子を止めると怜生は理音に駆け寄る。

「……本当に？」

「あぁ、だいたい、俺は1人でも勉強をできるように問題集を渡した筈だ。それを邪魔していたのはお前だろ」

「……わかった。信じる」

翔子は理音に聞き返すが、理音はため息を吐くと翔子はしぶしぶ頷く。

「理音、学園長先生からの呼び出しって、何があったの？」

「ん？　ちょっとな。まぁ、明日の決勝を楽しみにしていろ」

優子は理音が学園長に呼ばれた理由を聞くと理音は楽しそうに笑うと、

「また、何か企んでいるのか？」

「何、ただのバカ2人へのお仕置きだ。頼むぞ。雄二」

雄二は自分も出る決勝戦に理音が何を企んでいるか不安なようでため息を吐くが理音は雄二に任せると笑う。

「……なるほど、そう言う事か？　それは面白い事になりそうだな」

「だろ」

「……また、あの2人は何を企んでるのよ」

雄二は理音の言葉に何かを理解したようで、2人で邪悪な笑みを浮かべるとそんな2人の様子に美波はため息を吐き、周りは苦笑いを浮かべる。

# 第222問

「おし、今日はここまでだな」

清涼祭1日目終了の鐘が鳴り響き、代表の雄二の声で解散になると、

「リオ、今日はリオの家に泊まっても良い？」

「あぁ。別にかまわない。怜生も良いな」

「……はい」

明久が理音の家に泊まりに行くと言うと理音と怜生は問題ないと言うが、

「吉井くん、不潔です！！」

「うちはアキを信じてたのに！！」

瑞希と美波はまたわけのわからない勘違いをしている。

「……姫路、島田、勘違いするな。俺と明久は今日は明日のためにまとめをして貰おうと思ってるんだよ」

「そうだよ。変な勘違いしないでよ」

雄二も理音の家に行くつもりのようで瑞希と美波の様子にため息を吐くと明久は慌てて瑞希と美波の考えを否定すると、

「って事だ。理音、がきんちょ。問題ないな」

「……はい」

雄二は自分も理音の家に泊まると言うと怜生の頭を撫でる。

「雄二は怜生くんの頭撫でるの好きだよね」

「ん？　そうか？　言われると結構撫でてるかも知れないな」

雄二が怜生の頭を撫でる姿に明久が雄二に疑問に思った事を言うと雄二は無意識だったようで苦笑いを浮かべた時、

「……雄二、まさかとは思ったけど、雄二の狙いは怜生くん」

背中に殺意をまとった翔子が教室に乱入してくる。

「ちょっと待て！？　何で、そうなるんだ！？」

「……霧島、何度も同じ事を言わせるな。だいたい、雄二の好きなタイプは」

「理音、余計な事を言うな！？」

雄二は翔子の登場に声をあげると理音はまたかと言いたげにため息を吐き、翔子に雄二の好きなタイプを話そうとすると雄二は理音を止めるが、

「……理音、詳しい話を教えて」

翔子は理音の言葉に食いつく。

「悪いな。雄二から口止めも入ったからな。今回は止めておく。霧島はさっきから俺の忠告も無視しようとするしな、罰だ」

「……理音の意地悪」

理音は雄二の顔を見てくすりと笑うと翔子に雄二の好みのタイプを話す事はなく、翔子は残念そうに肩を落とすと、

「前田くん、酷いです。翔子ちゃんがこんなに頼んでるのに」

「そうよ。教えてあげなさいよ」

瑞希と美波から非難を浴びるが、

「……怜生、帰るか。アキと雄二はこのままくるのか？」

理音は付き合いきれないと言いたげに2人を無視して明久と雄二に聞く。

「俺は1度、帰る。着替えも何もないからな」

「ボクは理音に服を借りるから、そのまま」

「吉井くん、ダメです。吉井くんが前田くんのYシャツ1枚だけ着てるなんて」

「……瑞希、お前のそのおかしな思考はどこから来るんだ？」

明久はそのまま理音の家に行くと言うと瑞希は明久が理音のYシャツ1枚だけきている姿を想像したようでおかしな事を叫ぶと理音はため息を吐き、

「……リオ、ボクも1度、帰るよ」

「あぁ、そうしろ」

明久は何となく、瑞希の想像の中で危険を感じたようで着替えを取りに帰ると言うと、

「……雄二と明久は理音の家に泊まりなのか？　ワシも行って良いかのう」

「ん？　別にかまわないが」

「秀吉も……」

「……それなら、俺も行く」

秀吉は自分が仲間はずれにされていると感じたようでさびしそうな表情で理音に自分も泊まりに行きたいと言うと理音は頷き、明久は顔を赤くし、康太はシャッターチャンスと言いたげに自分も理音の家に泊まると言い、男性陣?で理音の家に泊まりと言う流れになるが、

「ダメです」

「ダメよ」

「……木下と雄二が同じ部屋で寝るなんて許さない」

女性陣３人は秀吉が理音の家に泊まる事は許さないと背中に黒い殺(も)意(の)をまとい言う。

# 第２２２問（後書き）

どうも、作者です。

明日の召喚大会決勝の準備で理音の家で合宿の空気ですがそうは上手くいきません。

秀吉の参戦に女性陣の嫉妬。

そんななかヒロインは不在。（爆笑）

さあ、どうなるんでしょうか？（悪笑）

# 第223問

「……いつもの事だが、どうして、お前らは秀吉を女扱いするんだ？」

「そうじゃ！！　ワシは男じゃ！！」

理音はそんな女性陣3人の姿にため息を吐くと秀吉は自分を男だと主張するが、

「ダメったらダメです」

「そうよ、木下がアキや坂本に襲われたらどうするの？」

「……木下が止まるなら、私も泊まる」

瑞希と美波は理音や秀吉の言葉を聞きいれる気はなく、翔子に関してはすでに理音の家に泊まる気である。

「翔子、バカな事を言うな！！」

「……雄二の隣は誰にも譲らない。理音、それで良い？」

雄二は翔子の言葉に声をあげるが、翔子は考えを変えるつもりはなく、理音に確認すると、

「俺は別にかまわんが、怜生もいるんだ。夜中にセッ……」

「……あんたは何を言う気よ？」

理音は翔子が泊まるのは構わないと言うが行動は控えろと言いかけた時、優子が教室に入って来るなり、理音を止める。

「ん？　流石に実技を見せるのは早いと思ってな」

「……わかった。雄二、今日は我慢する。雄二も良い？」

理音は優子のお怒りの様子を気にする事なく言い、翔子はその言葉にまるでいつも雄二と夜の行為を営んでいると言いたげに雄二に聞くと、

「……2人とも大人です」

「やっぱり、付き合ってると当たり前なのね」

「そんなわけあるか！？　姫路、島田、おかしな勘違いをするな！！　翔子、お前もおかしな事を言うな！！」

瑞希と美波は顔を赤らめながら、進んだ2人を尊敬するように言い、雄二はその言葉を顔を真っ赤にして全力で否定するが、

「……雄二、死ね！！！！」

「……殺したいほど、嫉ましい」

『坂本を殺せ！！！！』

『そうだ！！　生きて帰すな！！』

雄二が翔子に襲いかかっている姿を想像したようで明久と康太の言葉を皮切りに教室に残っていたクラスメート達は殺意を垂れ流し、雄二に襲い掛かり、

「ふ、ふざけるな!?」

「……雄二、待って」

雄二はクラスメート達の殺意に身の危険を感じて教室から逃げるように出て行き、クラスメート達は雄二を全力で追いかけて行くと、その後ろを少し遅れて翔子が教室を出て行く。

「さてと、怜生。夕飯と朝飯の買い出しでも行くか?」

「……はい」

理音はそんなクラスメートの様子を気にする事なく怜生の手を取ると、

「優子、帰るぞ」

「う、うん。それじゃあ、また明日ね」

優子を誘って帰ろうとするが、

「待ってください。前田くん、翔子ちゃんが、前田くんのお家に泊まって良いなら、私も泊まります」

「そうよ。ウチも行くわ」

「……勝手にしろ」

瑞希と美波も理音の家に行くと言い始め、理音は流石に相手にするのも疲れたようでそう言うと優子と怜生と一緒に教室を出て行く。

## 第２２３問（後書き）

どうも、作者です。

今日の理音は雄二をからかう気力はありません。それなりに疲れているんでしょうか？

そして、きまったお泊まり会。

どんな騒ぎになるんでしょうか？

# 第２２４問

「ねえ。理音」

「何だ？」

理音は商店街でニンジンを手に何かを考え込んでいると怜生の手を握っている優子が理音を呼ぶ。

「さっきの話なんだけど、何で、理音の家にみんなで集まるの？」

「ん？　元々は明日の召喚大会の決勝に向けての短期合宿みたいなものだったんだけどな。瑞希、島田、霧島の３人がアキが俺のＹシャツを着るとか、またわけのわからない事を言い始めてな」

「……吉井くんが理音のＹシャツで……裸Ｙシャツ？　それは見に行かないといけないわね」

優子は話に付いて行けなかったため、理音に状況を聞くと理音は玉ねぎを１キロ買うか悩みながら瑞希、美波、翔子の３人がおかしな事を言ったと言うと優子は理音の言葉に何かに火が点いたようでぼそりと呟くと、

「……優子、仮にも彼氏の相手に男を持ってくないでくれるか？　それに個人的にはお前に着て欲しいんだが、もちろん事後でも事前でも可だ」

「あ、あんたは、な、何を言ってるのよ！？」

理音はセロリとキャベツを買い物かごに入れながらため息を吐くと優子は理音の言葉に現実に引き戻されたようで顔を真っ赤にして理音を怒鳴りつけるが、

「下は無しで、ボタンは2つ目まで外してくれ」

「……あんたはお店の中で何を言うのよ？」

理音は譲れない事があるようで表情を変える事なく言い切り、優子は理音の言葉にため息を吐く。

「少なくとも、俺の想像は健全だからな。お前には言われたくない……」

「……お兄ちゃん、お芋さんは？」

理音は優子にだけは言われたくないと言うとジャガイモの前で立ち止まり、怜生はジャガイモの袋を取り、理音に渡す。

「……ジャガイモは汁が濁るしな。怜生はあった方が良いのか？」

「……はい。お芋さん、美味しいです」

「濁るって？　カレーでしょ。関係ないでしょ。それにジャガイモのないカレーをあたしは認めないわ」

理音は怜生に必要かと聞くと怜生は使って欲しいと言い、優子は理音の買い物の材料からカレーを作ると思い込んでいるようで怜生に賛成だと言うが、

「……カレーライスですか？　お兄ちゃん、夜ごはん変わったんですか？」

「……優子、お前は何を言っているんだ？　今日の夕飯はポトフだ。見ればわかるだろ」

「へ？　ポトフ？」

怜生は首を傾げ、理音は優子の言葉にため息を吐くと、優子は理音の口から出たポトフと言うのは頭になかったようできょとんとすると、

「……優子、お前は少し料理を覚えたらどうだ？」

「う。うるさいわよ！？　あたしなら、直ぐに上達するわよ」

理音は優子の料理の知識の無さにもう1度、ため息を吐き、優子はそんな理音の言葉に直ぐに反論する。

# 第225問

「……ねえ。理音」

「なんだ？」

「何であたし、理音の家にいるの？」

優子は理音の家のキッチンで理音の料理をする姿を見ながら聞く。

「ん？　裸Ｙシャツを見せて暮れるんじゃなかったのか？」

「着ないわよ！？」

理音は優子の疑問に裸Ｙシャツを見せにきたんだろと言うと優子は声をあげると、

「……お姉ちゃんは、お泊りして行かないんですか？」

「そ、そんなわけないでしょ」

怜生は寂しそうに優子の顔を見上げ、優子はそんな怜生の愛らしさに怜生をギュッと抱きしめる。

「怜生、食われるなよ」

「理音、あんた、怜生くんの前でおかしな事を言わないで！！」

「お、お姉ちゃん、ボクを食べるですか？」

理音は後ろで何が起きてるのか想像が付くのか振り返る事なく言うと優子は声をあげるが、怜生は不安そうな表情で優子を見上げる。

「そ、そんなわけないでしょ！？　怜生くん、良い。理音からおかしな事を言われても信じちゃダメよ。この男は怜生くんにおかしな事しか教えないから」

「おい。俺は間違った事は教えてないぞ。特にうちの学園は変態が多いからな。康太が売れ筋とか言ってこんなものを撮っていたしな」

優子は怜生に理音が言うおかしな事は信じてはいけないと言うと理音は懐から今日の怜生の写真が数枚取り出し、

「……そうね。怜生くんに身を守る術を教えるのは必要な事ね」

優子はそれを懐にしまいながら言う。

「……優子、説得力がないんだが」

「うるさいわよ。だいたい、何で、あんたが怜生くんの写真を持ってるのよ？」

「怜生のアルバムを作るためだ」

理音は自分から怜生の写真を取りあげた優子を見てため息を吐くと優子は話をすり替えようとするが、理音の答えは正当であり、

「こ、これはあれよ。おとうさんとおかあさんも怜生くんの写真を見たいと思うからよ」

優子は慌てながら、自分の欲を満たすためではないと慌てて否定する。

「まぁ、そう言う事にしておくか。後は煮込んで終わりだな」

「もう終わりなの？」

理音は優子の様子にため息を吐くと料理の準備は一先ず、終わったと言うと優子は理音の手際の良さに少し驚いたような表情をすると、

「あぁ、瑞希が来る前に終わらせないとこの場が惨劇の場になるからな。後は煮込むだけ中だと言えば流石に何もしないだろ」

「ねえ。それって、姫路さん、お料理ヘタなの？」

理音は瑞希をキッチンに入らせないための処置をしたまでだと言い、優子は理音の言葉に１つの答えに行きつく。

「はっきり言えば、化学兵器だな。怜生に食わせるわけにはいかないからな」

「か、化学兵器？　ひ、姫路さんって、家庭的な印象なんだけど」

理音は瑞希の料理の酷さを優子に教えると優子は顔を引きつらせると、

「怜生も優子も間違っても口にするな。前に成分を解析したが一口で致死量だったからな。今日もアキが死にかけてた」

「止めなさいよ！？　食中毒騒ぎとか洒落にならないわよ！！」

「優子、勘違いするな。食中毒じゃなく、バイオテロだ」

「なお、酷いわよ！？」

理音は優子と怜生に忠告すると優子は声をあげるが理音はただ事実だけを述べる。

## 第２２５問（後書き）

どうも、作者です。

理音、瑞希に料理をさせないために先に行動する。

そして、優子と怜生に報告。

この報告は波乱を起こすんでしょうか？（悪笑）

# 第２２６問

「理音、吉井くんと坂本くんの勉強会って言ってたけど、勉強になるの？」

「さあな。だいたい、今日は勉強ってよりは……」

理音、優子、怜生の３人は居間に移動し、優子が集まる人数にお泊り会になっているため、理音に明久と雄二の勉強になるのかと首を傾げた時、インターホンが鳴り、

「悪いな。行ってくる」

「うん」

理音は優子と怜生を置いて玄関に向かう。

「お前らが最初か？　意外だな。よく逃げ切れたな」

「……何とかな」

理音が玄関を開けると翔子を腕に付けている雄二が立っている。

「まぁ、明久と康太が来る前にあがって霧島を引き離せ」

「……そうさせてくれ」

「……絶対に離さない」

理音は雄二の腕をがっちりとつかんでいる翔子を見て言うと雄二は早く解放されたいと言うが翔子は放す気はないと言うが、

「霧島、『離れている時間が2人の愛を強くする』と言う言葉を聞いた事はあるか？」

「……わかった」

「霧島、俺はこの後の事を雄二と少し打ち合わせをするから、居間に行っていてくれ」

理音は翔子に放すように言うと翔子は理音の言葉を聞いてしぶしぶ手を放すと理音の言葉に従い、優子と怜生のいる居間に移動する。

「……理音、お前、口が上手いよな」

「お前が霧島相手だと自分で選択の幅を狭めてるだけだ」

「……」

雄二は翔子の納得させた理音を見てため息を吐くと理音は表情を変える事なく、自分ではなく雄二の問題だと言うと、雄二も自覚があるのか言葉を詰まらせると、

「惚れた男の弱みか」

「う、うるせえ」

理音はそんな雄二の様子にくすりと笑うと雄二は気まずそうに理音から視線を逸らす。

「まぁ、それは俺がうるさく言う事じゃないな。お前はアキと違ってちゃんと自覚しているんだからな」

「……」

理音は雄二を見てからかうように言うと雄二は何も言わずにいると、

「雄二、今日はテスト勉強じゃなく、召喚獣の扱い方で良いんだな」

「あぁ。頼む」

理音は雄二が考えていた今日の事を聞くと雄二は頷き、

「俺は調整をしてくるから、アキ達が来たらでてくれるか？　後はキッチンのポトフを見ていてくれ。姫路が入ってこないように」

「……ポトフの事は任せろ。絶対に姫路はキッチンには入れない」

理音は家にある召喚システムを調節する間、夕飯を雄二に頼むと雄二は力強く頷く。

# 第227問

「……こんなものか？」

「理音、夕飯にしよう」

理音が家の召喚システムの調整が終わった時、優子が夕飯のために理音を呼びにくる。

「ん？　着替えたのか？」

「流石にあたしだけ制服ってわけにもいかないでしょ。秀吉に着替えを持ってきた貰ったのよ」

理音は優子の声に振り返ると優子は私服に着替えており、優子は秀吉に着替えを持って来て貰ったと言うと、

「……見逃したか」

理音は舌打ちをする。

「理音！！」

「冗談だ。着替えしてる姿に興味はない。俺は自分で脱がしたいんだからな」

「……あんたは、まったく」

優子は理音の言葉に声をあげるが、理音は脱がす事に意味があると

言い切ると、優子は流石に呆れたようでため息を吐く。

「男として、当然の主張だ。それで、全員、そろったのか？」

「えぇ。さっき、吉井くんが来て全員そろったわよ」

理音は優子の様子を気にする事なく優子に全員がそろった事を確認すると優子は明久が最後だったと言い、

「そうか。どうせ、アキの事だ。帰った後、1冊くらいマンガをと思って4、5冊読んで慌ててきたってところか？」

「……理音、あんた、なんでわかるのよ」

理音は明久の行動が手に取るようにわかっているのか表情を変える事なく言うと、明久の行動は理音の言う通りだったようで優子はため息を吐く。

「ん？　アキの行動パターンは昔から変わらないからな」

「ふーん。幼なじみか。ちょっと、そう言う関係って羨ましいかな」

「お前には秀吉がいるだろ」

理音は優子の様子に昔から変わらない明久の行動にくすりと笑うと優子は理音と明久の関係が羨ましいと言い、理音は優子には秀吉がいるだろと言うと、

「姉弟とは違うでしょ」

「そうか？　秀吉はお前の行動を何となく理解していると思うぞ。お前も同じだろ？」

優子は自分と秀吉の関係は違うとため息を吐くと理音はそんな事はないだろと言うが、

「まぁ、そうかもしれないけどね。やっぱり、違うわよ」

「理音、姉上、話し込んでないで下りてくるのじゃ」

優子はそれでも違うと苦笑いを浮かべると秀吉の声が部屋の外から聞こえ、

「行くか？」

「そうね」

理音と優子は2人で居間に下りて行く。

# 第228問

「それじゃあ、やるか？」

「そうだな」

「もう少しゆっくりしようよ」

夕飯を終えると雄二は席から立ち、理音と明久に言うと明久はまだゆっくりしたいと言う。

「……明久、お前、理音の家に来た理由を理解してるんだろうな？」

「当然だよ。だけど、みんなで集まったのに勉強ってのはさ」

「アキ、勘違いするな。雄二が俺の家に集まると言ったのは勉強のためじゃない。だいたい、決勝の日本史はお前も雄二もそれなりに良い点を取ってるんだ。下手に勉強してテストを受けて失敗したらどうするつもりだ？」

明久は勉強はしたくないと言い始めるが、理音と雄二は勉強をするつもりはないため、ため息を吐くと、

「まぁ、今日はアキの訓練ってよりは雄二の訓練だからな」

「まぁ、そうだな」

「え？　どういう事」

理音と雄二は明久に無理をさせなくても良いかと言う感じで言い、明久は2人の会話の意味がわからずに首を傾げる。

「吉井くん、夕飯前に理音が何をしてたか覚えてないの？」

「えーと、部屋で怪しい研究？」

「……あたし、ちゃんと説明したわよね？」

明久の様子に優子はため息を吐きながら明久に聞くが、明久は話を聞いていなかったようで首を傾げると、

「今日、やるのは召喚獣を扱う練習だ。雄二は代表だから召喚獣を操作する機会もお前らに比べれば少なかったしな。あの顔面汚物コンビは3年だからな。アキよりは捜査は上手くはないだろうが、雄二よりは確実に上手い」

「そう言う事だ。それに俺が召喚獣の扱い方を上手くなる事で試召戦争での選択の幅も広がるからな」

理音と雄二は召喚獣を動かす練習をすると言う。

「坂本くん、まだ、Aクラスの設備を狙ってるの？　坂本くんの成績が上がってきてるとは言え、あたし達Aクラスに勝てると思ってるの？　理音は試召戦争には出れないのよ」

「当然だ。俺と姫路、Aクラス並みが2人。それにCクラス並みの明久、島田。あの時よりは良い作戦が立てられる」

優子は雄二の様子にまたAクラスに戦いを挑むのかとため息を吐い

て雄二に聞くと雄二はニヤリと笑うが、

「確かに吉井くんの召喚獣の操作は厄介だって対戦してみてわかったけど、それでもあたし達は負けないわよ」

「どうかな？　やってみないとわからないぜ」

優子はため息を吐くが雄二はニヤリと笑う。

「知ってる？　理音がＡクラスにくるたびに、うちのクラスはちょっとした講義になるのよ。はっきり言わせて貰えば、今のＡクラスは単体教科の腕輪持ちが溢れてるわ」

「理音、お前は何をしてるんだ！？」

「ん？　俺は聞かれた事を教えただけだぞ」

優子は雄二の考えは甘いと言うと雄二は今のＡクラスの状況に理音の胸倉をつかむが理音は雄二の怒りの意味がわからずに首を傾げる。

「だから、無理にＡクラスを攻める必要はないでしょ。坂本くんが指揮をとればＢクラスは倒せるでしょ」

「優子、雄二がＡクラスを狙うのはそれなりに意味があるんだ。Ａクラスに勝つ事で……」

「理音、余計な事を言うな！？」

優子は雄二に向かいＢクラスとの設備交換で済ませる事を進めると理音は雄二がＡクラスを狙う理由を話そうとし、雄二は慌てて理音

の口を塞ぐ。

「ん？　悪かった。俺が言う事ではないな」

「……理音、お前、わかっててやってるだろ？」

「さあな。それより、霧島、わけのわからん殺意をしまえ。俺は雄二とはそんな関係じゃない」

理音と雄二の様子に翔子からは黒い殺意（もの）が溢れ出すが、理音はため息を吐くと、

「アキ、俺と雄二は先に行ってるから、お前は後でこい」

「やっぱり、ボクも行くよ」

理音は明久に後で部屋に来るように言い、雄二と居間を出て行き、明久は慌てて２人の後を追いかけて居間を出て行く。

# 第229問

「それじゃあ、始めるぞ」

「ねえ。前田、せっかく、ウチ達もきてるんだし、相手した方が良い？」

理音がシステムを起動させようと美波が明久と雄二の練習相手になると提案する。

「そうじゃのう。せっかく、きたのじゃ。それくらいはせぬと何しにきたのかわからんのじゃ」

「そうだな。相手がいた方が実践の感覚で練習できるか」

秀吉は美波の提案に賛成し、雄二が頷くと、

「まぁ、別にかまわないぞ。用意していたものは最後にするか」

「……ねえ。リオ、それっておかしな事じゃないよね？」

理音は用意したプログラムを止めると明久は苦笑いを浮かべる。

「別におかしなものじゃない。今日の召喚大会のデータは記録されてるから、わいせつ顔面コンビの戦闘記録と行動分析から、疑似プログラムと戦って貰おうと思っただけだ」

「ずいぶんと本格的なものを用意したのね」

理音は平然と言うと優子は理音の行動にため息を吐き、

「それじゃあ、アキと雄二の相手は一先ず、秀吉と島田で良いのか？」

「うむ。ワシはかまわんのじゃ」

「ウチも問題ないわ」

理音は秀吉と美波に確認すると2人は頷くが、

「理音、選択教科はどうするんだ？」

「別に今は召喚獣の操作を練習するんだ。教科はどうでも良いだろ。それじゃあ、始めるぞ」

雄二は理音に教科をどうするか聞くが、理音はシステムを起動させ、床には機械的な魔法陣が描かれ、４人の召喚獣が現れる。

「あれ？　点数が表示されてないよ」

「必要ないだろ。それとも、０点になって俺から補習を受けたいなら別だがな」

「……補習は遠慮するよ」

召喚された４人の召喚獣には点数が表示されてなく、明久は首を傾げると理音は必要がないと言い切り、

「なるほど、これなら思う存分、練習ができるな」

「こんな事もできるのね」

「あぁ。扱い方がメインだからな。攻撃力は関係ないしな。最初は召喚獣とのシンクロ率を上げる。フィードバックは外しておく。それになれたらシンクロ率を下げて行くぞ」

雄二は理音のシステムに頷くと優子は苦笑いを浮かべるが理音は気にする事ない。

# 第２３０問

「こうやって動かしてみるとやっぱり、明久の召喚獣は反則だな」

「そうね」

雄二と美波はシンクロ率が高く自分の思い通りに動く召喚獣を見て明久の召喚獣は反則だと言うと、

「ホントよね。今日もあたしの攻撃はまったくあたらなかったし」

「反則なわけないよ。その分、攻撃が当たったら、もの凄く痛いんだからね。雄二の体当たりも木下さんのランスに突き刺されたのだって死ぬかと思ったんだから」

優子は今日の召喚大会の準決勝を思い出したようで少し悔しそうに言うが、明久は自分は痛い思いをしてるのだから、そんな事を言われたくないと言うが、

「痛みだけでしょ。別に死ぬわけじゃないんだから良いじゃない」

美波はフィードバックの事をあまり深く考えていないようで明久に大袈裟だと言う。

「そうでもないぞ。痛みだけでも人は殺せる。何なら、試してみるか？」

「試さなくて良いから！？　と言うか、リオ、おかしな事を言わないで、リオが言うと冗談に思えないから！！」

「冗談？　何を言ってるんだ。俺は本気だ」

理音は邪悪な笑みを浮かべて言うと明久は悪い冗談は止めてくれと言うが、理音は本気であり、

「まぁ、拷問は死なない程度に心が折れるくらいに行うのが良いんだが」

「リオ、どこに行くの？」

「ん？　地下に移した拷問器具を持って来てアキの召喚獣に取り付けようと思ってな」

理音はこの洋館を買い取った時に一緒に置いてあった拷問器具を取りに地下に下りると言うと、

「止めて！？　無理だから！！　またあんな事されたら今度こそ死んじゃうから！！」

「……あぁ。そう言えば、始めてここに来た時に明久は姫路と島田に喰らってたな」

明久は顔を真っ青にして土下座をすると明久の隣で明久の召喚獣も明久と同じように土下座をし、雄二は明久の様子に何かを思い出したようで苦笑いを浮かべる。

「そうか？　まぁ、拷問に関する資料は後でまとめておくか」

「……理音、印刷をお願い。雄二のお仕置きの参考にしたい」

「翔子、お前は何を考えてるんだ！？」

理音は何かのスイッチが入ったようでそう呟くと翔子は理音の言葉に喰い付き、雄二は翔子の言葉に顔を青くして叫ぶ。

# 第231問

「……結構、疲れるわね」

「そうじゃのう」

練習が始まり、しばらくすると秀吉と美波は召喚獣を動かすのに疲れてきたようで苦笑いを浮かべると、

「そう？」

「アキ、お前が特別なんだ。雄二、秀吉、島田、1度、召喚獣をしまうぞ」

明久は疲れなどないようで2人の弱音に首を傾げると理音は明久だけが特別だと言い、3人の召喚獣を強制的に退場させる。

「ボクの召喚獣が特別って？　やっぱり、観察処分者だから？」

「あぁ。特に今回は3人のはシンクロ率も上げてるからな。いつも以上に疲れるはずだ」

「やっぱり、観察処分者って凄いんですね」

明久は理音が自分が特別だと言うのに1つしか心当たりもなく聞き返すと理音は頷き、瑞希は笑顔で明久を誉めるが、

「後はなれの問題だな。さてと、どうする？　1度、休憩に入るか？　アキは続けるなら」

「あたしが相手し……」

「ゴメンなさい！！？？」

理音はあまり興味がなさそうに明久に練習を続けるかと聞くと優子が明久の練習相手を買って出るが明久は今日の準決勝での事が頭をよぎったようで土下座で優子に謝り、

「えーと、吉井くん？」

「ごめんなさい。ごめんなさい」

「まぁ、あれだけの仕打ちをすれば当然の反応だな」

優子は明久の様子に首を傾げると理音は当然だと言うと、

「1度、休憩に入るか？　怜生、風呂でも入るか？」

「……はい」

休憩だと言い、風呂に入ってくると言うが、

「ちょっと、理音、あんた、頭、切れてるんじゃないの！？」

「ん？　そこら辺の3流医師と一緒にするな。この程度の」

「ダメに決ってるでしょ！！」

優子は理音を止める。

「お兄ちゃん、お風呂、入らないですか？」

「ん？　俺は何ともないんだけどな」

「ダメよ。怜生くん、お風呂は、あたしとで良いかな？」

「……はい」

怜生は理音とお風呂に入るのを楽しみにしているようで残念そうな表情をすると優子は変わりに自分が怜生とお風呂に入ると言うと、

「……理音、風呂場はどこだ？」

「……康太、カメラを設置しに行ってくるか。俺も手伝おう。やはり、完全防水の水中カメラも必要だな」

「……当然」

理音と康太はいろいろと準備をしはじめ、浴室に移動しようとする。

# 第232問

「……理音」

「何だ？　俺が優子の肢体（カラダ）を見たいのは当然の権利だろ」

「……理音、裏切ったな」

優子は理音の行動に青筋を浮かべると理音は表情を変えずに優子の裸を見たいと言い切りながらも懐から怪しげな液体の入った注射器を取り出し康太に突き刺すと康太は身体の自由が利かなくなったのか悔しそうに理音の顔を見上げながら膝を付く。

「悪いな。康太、優子の肢体（カラダ）は俺のものだ。お前に見せてやるつもりはない」

「……あんたのものじゃないわよ」

理音は康太の悔しそうな表情を見下すように言うと優子は頭を押さえるが、

「……雄二にもこれくらい言って欲しい。私の肢体（カラダ）は雄二のもの」

「しょ、翔子、お前は何、バカな事を言ってるんだ！？」

翔子は理音の言葉にまたも変なライバル心を出し、雄二に襲い掛かっており、

「翔子ちゃんも優子ちゃんも羨ましいです」

「憧れるよね」

瑞希と美波はまたも外れた恋愛感で目を輝かせている。

「霧島、バカな事をやるな。やるなら、雄二と一緒に風呂で済ませて来い。掃除はしてこいよ」

「……わかった、雄二、一緒にお風呂」

「行かねえよ!?　理音、おかしな事を言うんじゃねえ!?」

理音は雄二と翔子の様子にため息を吐くと翔子は雄二の首をつかみ部屋を出て行こうとするが雄二は何とか壁をつかんで叫ぶと、

「……理音、おかしな事を言わないで、代表、そう言うのは代表の家か坂本くんの家でして」

「……わかった。今日は我慢する。雄二、いつもみたく一緒にお風呂に入れなくてごめんなさい」

「そんな事実はねぇ!?」

優子はため息を吐きながら翔子を止め、翔子の口から出た言葉を雄二は全力で否定する。

「それなら、リオの家のお風呂は広いから女の子5人で入ってきたら、人数が多いから、怜生くんはボクが一緒にお風呂入るし」

「アキ、広いって言っても5人もいっぺんに入れるわけないでしょ」

明久は進まない話しに苦笑いを浮かべながら言うと美波は流石に一般家庭のお風呂で5人は無理と言うと、

「……ねえ。吉井くん、島田さん、何度も言うけど秀吉はあたしの『弟』だからね」

「そうなのじゃ！！　ワシは男なのじゃ！！」

優子と秀吉は人数が間違っていると言う。

「そうだね。秀吉は『性別秀吉』だから一緒じゃ不味いよね」

「明久、何度も言わせるでない。ワシは男なのじゃ！！」

「秀吉、言うだけ無駄だろ」

明久は流石に不味いかと言うと秀吉は自分が男だと全力で主張するが明久が聞きいれる様子はなく、理音は秀吉を止めると、

「4人くらいなら、普通に入れるように作ってある。まとめて入るならさっさと入ってこい」

「……あんた、覗く気じゃないでしょうね」

早くお風呂に入れと言うが当然、優子は理音を疑いの目で見る。

「もちろん見たいが今回はパスだ。俺がそっちに行くとアキも動くだろうからな。俺はまだ、アキを殺したくない」

「……大丈夫だよ。ボクも下手に木下さんの裸を見て、リオに殺されたくないから、覗かないよ」

理音は優子の裸に独占欲を出すと明久は目の前で倒れた康太を見ているためか、顔を引きつらせて頷き、

「雄二は覗いた時点で終わりだしな」

「……あぁ」

雄二も覗きに行く事はないと頷く。

「それじゃあ、行きま……」

「……」

優子は理音の言葉に女性陣だけで先にお風呂にしようとするが優子と美波の視線は瑞希の胸に集中し、２人で涙を流し始める。

## 第２３２問（後書き）

どうも、作者です。

康太、天国の前に沈む。（爆笑）

理音は優子に対して独占欲が強いですね。
他者と関わりを避けた過去の影響か。その分、大切な人は放したくないのかも知れません。

## 第２３３問

「……あれは反則よね」

「……ホントよ」

「えーと、そんなに良いものでもないですよ。肩もこりますし」

瑞希が胸を見て、優子と美波は涙を流していると瑞希は苦笑いを浮かべるが、

「瑞希にはウチと優子の気持ちなんてわからないわ！！」

「み、美波ちゃん！？　止めてください！？」

「そうよぉっ！？　だ、代表、突然、何をするんですか！？」

優子と美波の間にはおかしな連帯感が生まれ、美波が瑞希の胸を揉み始め、優子も瑞希に襲い掛かろうとした時、翔子が優子の腰に手を伸ばす。

「……優子と美波は細くてうらやましい」

「本当です。どうして、美波ちゃんも優子ちゃんもこんなにスレンダーなんですか？　優子ちゃんはやっぱり、前田くんと……」

「ちょっと、待って！？　姫路さん、何を考えての！？」

翔子の言葉に瑞希も優子の腰を触り、それどころかおかしな事を考

え始め、優子は顔を真っ赤にして瑞希の暴走を止めようとするが、

「……前田は野獣だから激しそうよね。野獣のくせに頭が回るから凄いとこを攻めてきそうだし」

「……私と雄二も負けてられない」

「島田さんもおかしな事を言わないで！？　だ、代表、どこに行くんですか！？　裸で出て行かないでください！？」

「そうです。翔子ちゃん、風邪ひいちゃいますよ！？」

美波まで真面目な表情をしておかしな事を言い始め、その言葉に翔子はまたもおかしなライバル心を出して裸で風呂場を出て行こうとするため、優子と瑞希は慌てて翔子を止めるが瑞希の発言は少しずれている。

「……疲れたわ」

「実際、優子ちゃんは前田くんとどこまで進んでるんですか！！」

「そうよ。白状しなさい！！」

優子は何とか翔子を思いとどまらせて浴槽に入って一息を吐いた時、瑞希と美波が優子に詰めより、

「えーと、あたし、頭洗おう」

「……逃がさない」

「ひゃう!?　だ、代表、どこに手を回してるんですか!?」

優子は2人から逃げ出そうと洗い場に行こうとするが翔子が優子の胸に手を伸ばし、優子を止め、

「……優子、白状する。理音とのデートコースとか参考にしたいから教えて」

「そうよ。逃げるなんて許さないわ」

「そうです。前田くんとの出会いから、今までの事を最初から最後まで聞かせて貰います」

瑞希と美波だけではなく、翔子までもがいつの間にか付き合っていた理音との話を聞かせろと優子に詰め寄り、

「えーと、どうして、そんな話になるの?」

優子は3人の様子に風呂に入っているはずなのに寒気がするが逃げ切る事は出来ず、

「さぁ、優子、白状しなさい。前田はこっちに戻ってきて知り合いだってほとんどいなかったのに、どうやって知りあったの?　ウチ達は詳しい事を知らないのよね」

「はい。しっかりと聞かせて貰います」

優子は理音との事を根ほり葉ほり聞かれる。

# 第２３４問

「……疲れたわ」

「ずいぶんと時間がかかったな」

女性陣がお風呂から戻ってくると瑞希と美波は何か妄想に入っており、翔子は雄二に襲い掛かるなか、優子は余程疲れたようでため息を吐くと理音が優子に声をかけると、

「……いろいろとあったのよ」

「ん？　ああ、そう言う事か。悪かったな。面倒な事を押し付けたようだ」

優子は理音を見てため息を吐き、理音は女性陣の様子に何があったか察しが付いたようで優子の頭を撫でながら謝り、

「べ、別に良いわよ」

優子は照れ臭そうに目を伏せる。

「霧島、雄二を放してやれ。アキと雄二の練習時間がなくなるからな」

「そうだね。怜生くん、お風呂、入ってこようか？」

「……はい」

理音は雄二の貞操より、練習時間の方が大事だと言いたげに言うと明久は怜生の前に手を出し、怜生は明久の手をつかみ、

「それじゃあ、ボクと怜生くんはお風呂に行ってくるよ」

「……俺も行く」

「待て、明久!?　俺も行く。翔子、放せ!!!??」

風呂に行こうとすると復活した康太も一緒に行くと言い、雄二は翔子から逃れるた目に風呂に行こうとした時、

「待つのじゃ。ワシも一緒に行くのじゃ」

秀吉も一緒に風呂に行こうするが、

「秀吉、何を言ってるんだよ!!　ダメだよ!!」

「……」

明久は顔を真っ赤にして秀吉とは風呂に入れないと言う隣で、康太は急いでカメラの準備を始める。

「ワシは男じゃ!!　なぜ、ワシはお主らと一緒に風呂に入る事もできんのじゃ」

「……木下、雄二に一緒にお風呂なんて許さない」

「止めろ!?　何で、俺の頭に手を伸ばすな!!」

秀吉は声を上げると翔子は秀吉を女扱いしているようでお仕置きと言いたげに雄二の頭に手を伸ばし、雄二は何とか翔子の手を止める。

「……霧島、頭に手を伸ばすな。秀吉、こいつらを説得するのは時間の無駄だ。秀吉、悪いがこっちを手伝ってくれるか？」

「しかし、せっかく、男同士の友情を深め、ワシを男じゃと知らしめる機会なのじゃ、それにワシだけ1人で風呂に入るのはさびしいのじゃ……」

「……アキお兄ちゃん、ボク、秀吉お兄ちゃんとお風呂に入ります」

理音は納得がいかない秀吉に諦めろと言うが、秀吉は1人は寂しいと言うと怜生は秀吉に気を使ったようで明久の手を離れて秀吉に駆け寄る。

「う、うん。わかったよ。雄二も行くよ」

「おう」

「……」

「康太、次に風呂に入る秀吉の姿を映そうと思っているんだろうが、カメラは置いておけよ」

明久は怜生の行動を疑問に持つ事なく雄二に風呂に行くと言うと雄二は翔子から逃げるように明久に並び、康太はいろいろと機材を持って行こうとするが理音は康太を止め、

「……仕方ない。今回は諦める」

「そう言うなら、懐にしまってある小型カメラも置いて行け。交換条件はこれだ」

「……その条件飲もう」

康太は理音の言葉に納得いかなさそうに頷き、用意していた機材を下ろすが、理音は他に隠し持っているものもおいて行けと言うと交換条件だと言ってＵＳＢメモリーを取り出し、康太は直ぐに頷く。

# 第235問

「しかし、理音、お主は凄いのう」

「ん？　そんな事はないぞ。俺から言わせて貰えば、お前の演技の方が凄いと思うしな」

秀吉は理音が召喚獣とのシンクロ率を下げているのを見て感心したように言うと理音は秀吉の言葉の意味がわからないようで首を傾げながら、秀吉の演技を褒めると、

「い、いきなり、お主は何を言うのじゃ！？」

「何を慌てているんだ？　俺は事実のみを言っているんだが」

秀吉は理音の突然の言葉に顔を真っ赤にして驚くが理音は秀吉の反応を理解できないようで眉間にしわを寄せて言う。

「それがわからんのじゃ。お主は薬学で多くの人間を助けておると聞いておるのじゃ、ワシは今までお主の作った薬がどのように使われてるかは知らぬが、お主はそれだけの結果を残しておるのじゃ。それに比べるとワシは何もできてなどおらぬのじゃ。姉上にも演劇部なぞ辞めるように言われておるしのう」

「……秀吉、優子がお前に演劇を辞めるように言ったのはいつだ？」

秀吉は自分の演技など理音の功績に比べるとたかが知れており、優子にも演劇部を止めるようにと言われてる事を言うと理音は秀吉に優子にいつ言われた事かと聞き、

「いつと言われると困るがのう……ずっと、言われ続けてきたのじゃ。覚えてなどおらぬ」

「……少し話をしてみろ。あいつは素直じゃないからな。どこかで意地を張る」

秀吉は理音の質問に困ったように笑うと、理音は彼にしては珍しく優しげな笑みを浮かべて言うと、

「それはどう言う事じゃ？」

「前に、優子に文月学園を選んだ理由を聞いた事が有ってな。あいつは自分と秀吉の高校以降の進学費用を考えていたぞ。お前は演劇の専門学校に行くだろうとだから、試験校で学費の安い文月を選んだと言ってたな」

秀吉は理音の言葉に首を傾げるのを見て、理音は以前、優子から聞いた文月学園を選んだ理由を話す。

「そ、それは本当なのか？」

「あぁ、秀吉、お前は演劇の専門学校の学費を調べた事はあるか？」

「ないのじゃ。ワシはパソコンとかはあまり得意ではないのじゃ」

「そうか……こんな感じだ」

優子が文月学園を選んだ理由を聞き、驚きの声を上げる秀吉に理音はインターネットを繋ぎ、演劇の専門学校の学費を見せ、

「こんなにするのか？」

「2人同時に進学だと大変だろうからな。優子は学費の安い公立か奨学金が出る私立か。あいつはそれなりに考えているぞ」

「う、うむ。知らなかったのじゃ。でも、それなら、なぜ、姉上はワシに演劇部を辞めるように言うのじゃ」

秀吉は優子が進学費用の事を考えていると知り驚くが優子が演劇をバカにする理由がわからないと言うと、

「お前がどれだけ本気か、見てるだけだろ。後はさっきも言ったが、素直に応援するのが恥ずかしいんだろ」

「……」

理音は表情を変える事なく言い切り、秀吉は理音から聞かされた真実に何かを考えているようで黙ってしまう。

「秀吉、吉井くん達が上がってきたわよ。あんまり遅くなると怜生くんが寝ちゃうから早く入ってきなさい」

「う、うむ。わかったのじゃ！？」

優子は明久達が風呂からあがってきた事を秀吉に知らせにくると秀吉は恥ずかしいようで慌てて部屋を出て行き、

「何？　理音、秀吉はどうかしたの？」

「いや、別に何もない」

優子は秀吉の様子に首を傾げると理音は優子と秀吉の様子にくすりと笑う。

## 第２３５問（後書き）

どうも、作者です。

理音と秀吉の少し真面目な話は皆さんにどう映ったでしょう？

原作の優子とはだいぶ考えが違うと思いますが、優子も彼女なりに秀吉のことを考えているとしておかないとこの先の話に影響があるのでこれで納得してください。（爆笑）

こうやってゆったりと真面目な話をしていると理音と優子の関係ってちゃんと彼氏彼女に見えてるんでしょうかね？

理音は理音なりに優子や怜生、明久達を気にしています。
昔、捨ててしまったものを必死で拾い集めている感じです。
それを優子は理解し、理音を支えてくれるのかな？（苦笑）

そして、最近の理音はやさしい人？と言う感じがあるから、どこかで修正しないとな。（爆笑）

# 第２３６問

「何があったのよ？」

「何もないと言ってるだろ」

「言いなさいよ！！」

優子は理音の表情に絶対に何かあったと思ったようで理音に聞くが理音は何もないと言い召喚システムに改めて向かうが、優子は理音に詰め寄ると、

「ちょ、ちょっと、理音！？　あんた、何を考えてるのよ！？　みんないるのよ！！」

「ん？　自分から近づいてきたんだ。当然、わかってたんだろ」

「そ、そんなんじゃないわよ！？」

理音は優子の腰に手を伸ばして彼女を自分の腕のなかに引きよせ、優子は理音の行動に顔を真っ赤にして声を上げる。

「まぁ、気にするな。せっかくだ。ゆっくりして行け」

「ちょっと、理音？　どうかしたの？　……っ！？」

理音は声を上げる優子を見ながらくすりと笑うと優子は理音の顔を見ていつもと違う何かを感じたようで心配そうに理音の顔を覗き込むと理音が優子の唇を塞ぎ、

「ちょっと、いきなり、どうしたのよ！？」

「何もない。ただお前が愛おしいと思っただけだ」

優子は理音の突然の行動に耳まで真っ赤にして理音の行動に驚きの声を上げると理音は優子から視線を逸らす事なく言い切り、

「そ、そうなんだ」

「……あぁ」

優子は理音の顔を直視できないようで理音から目を逸らして言うと理音は頷くと、

「それで、お前らはいつまでそこで覗いているつもりだ？」

「……へ？」

理音はドアの外で息を潜めてるメンバーに声をかけ、優子は理音の言葉にドアを方に視線を向ける。

「な、何で、みんなで見てるのよ！？」

「……なんでと言われると、いきなり始めたのはリオと木下さんだし」

優子は顔を真っ赤にして叫ぶと明久は気まずそうに言う隣で、瑞希と美波は顔を真っ赤にして妄想をしている隣で、

「……雄二、私もキスして欲しい」

「しょ、翔子、何を考えてるんだ!?　あいつらと俺達は違うだろ」

翔子は雄二にキスを強要しており、

「……理音、これ、どうするのよ？」

「さあな。霧島、雄二を解放しろ。アキ、雄二、始めるぞ。アキ、お前の召喚獣も一時的にシンクロ率を下げるからな」

「え？　ボクのも？」

優子はこの混沌とした状況に頭を押さえるが理音は気にする事なく、練習を再開すると言うと明久は理音の意図がわからずに首を傾げる。

「シンクロ率を下げる事でお前にも他の人間の召喚獣への対応速度を体で感じて貰う」

「それは何の意味があるの？」

「お前に説明しても理解できないだろ。説明するよりは体験した方が早い。瑞希と島田……は役に立たなさそうだな。霧島、点数差なしの召喚獣対決で雄二に勝ったら、『俺がＡクラスで雄二に聞いた事』を教えてやろう」

理音は明久には説明しても無駄だと言うと邪悪な笑みを浮かべて雄二の練習相手に翔子を指名し、

「……わかった。雄二、覚悟して」

「り、理音、お前、いきなり何を言いやがる!?」

「何を？　負けなければ問題もないだろ。それとも何か有利な状況にならないとお前は霧島に勝てないのか？」

翔子は理音に提示された餌に食いつき、雄二は声を上げるが、理音はくすりと笑い、

「……考えろ。最善がいつもベストとは限らないぞ。ちゃんと向きあうきっかけにでもしろ」

「……うるせぇよ」

雄二に耳打ちをすると雄二は苦虫を噛み潰したような表情をするが、理音の言いたい事も理解しているようで舌打ちをすると翔子の前に立ち、

「明久、遊んでないで始めるぞ」

「う、うん。リオ、ボクの相手はどうするの？」

「ん？　秀吉もいないからな。これだ」

雄二は始めろと言うが明久の相手がいないため、明久は理音に確認をすると理音は何かを企んだように笑うと、部屋の床に機械的な魔法陣が浮かび上がり、もう一体の明久の召喚獣が現れる。

# 第２３７問

「ボクの召喚獣？」

「理音、何をする気？」

明久は目の前に現れたもう一体の自分の召喚獣に首を傾げると優子も明久と同じように意味がわからないようで首を傾げると、

「特に意味はない。練習相手となると攻撃を喰らってやらないといけないからな。アキ相手に俺の召喚獣が攻撃を喰らうのは恥辱だからな。不細工な明久の召喚獣が二体で殴り合いをしてるとなると情けなくて面白いだろ」

「確かに不細工な召喚獣が惨めに這いつくばる姿は面白いな」

理音は表情を変える事なく、明久を小バカにすると雄二は大きく頷いて同意し、

「失礼な。３６５度、どこから見ても美少年じゃないか！！」

「……明久、前にそれだと5度多いと言わなかったか？」

「それだと実質5度よ」

明久は心外だと言いたげに叫ぶと雄二と優子はため息を吐き、

「し、しまった！？」

明久は頭を抱えて叫ぶが、

「くだらない事を言ってないで、始めるぞ。実際はそんなくだらない理由じゃないしな」

「そうなの？」

理音は明久が叫んでいるのを見てため息を吐くと遊んでないで始めろと言いたげに言い、明久は理音の様子に再度、自分の召喚獣が二体になった理由を聞く。

「当たり前だ。不細工なアキの召喚譲が地面に這いつくばる姿が見たいなら、本気の俺が相手をすれば良いわけだからな」

「確かにな。理音相手だと観察処分者の利点もなく、数秒でミンチにされそうだ」

「……うん。そうだね」

理音はくだらない事を言わせるなと再度、ため息を吐くと雄二は明久が理音にボロボロにやられる姿しか目に浮かばなかったようで楽しそうに笑うと明久も同意見なようで顔を引きつらせて頷くと、

「まぁ、戦ってみればわかるが、こっちはお前のさっきの戦闘データを取ったもの。簡単に言えば今のお前より動きが良い召喚獣が相手だと思え。経験ってのは戦いに反映されるからな。自分より、動きが速い相手と戦う時を計算に入れ置くのは悪い事じゃない」

「確かにそうかも、あたし達より、吉井くんが召喚獣の扱い方が上手いのは観察処分者で2年生の誰よりも召喚獣を使ってるからよね」

「あぁ。あの変態コンビはお前らより1年長く召喚獣を使ってるんだ。対等もしくはそれ以上に扱ってくる可能性もあるからな」

理音は明久相手では説明する意味はなさそうだと思いながらも説明をすると優子は理音の考えに頷く。

「なるほど」

「明久、わかってないのに頷くなよ」

「し、失礼な。ちゃんと理解してるよ」

明久は理音の説明を完全に理解していないようで目を泳がせながら頷き、雄二はそんな明久の様子にため息を吐くと明久は雄二に向かい声を上げるが、視線は相変わらず泳いでおり、

「だから、説明するだけ無駄だと言っただろ。始めるぞ。時間も限られてるからな」

「う、うん」

理音はこれ以上待っても無駄だと判断したようで練習を再開させる。

# 第238問

「……お兄ちゃん」

「怜生くん、待つのじゃ。きちんと頭を拭かないと風邪をひくのじゃ」

明久と雄二の練習が再開されてしばらくすると怜生と秀吉が風呂からあがってきたようで部屋に戻ってくる。

「秀吉、すまなかったな。怜生、頭はきちんと拭け、風邪をひくぞ」

「……はい」

理音は秀吉に礼を言うと怜生の首にかかっていたバスタオルで怜生の頭を拭くと、

「うむ。気にするでない。それより、なぜ、明久の召喚獣が二体もいるのじゃ？」

「ん？　良い練習相手がいなくてな。優子、瑞希、島田は単発で勝負を決めるタイプ。康太は手数だ。この2タイプはアキはやりなれてるからな。同タイプとってのも役に立つだろ」

秀吉は目の前で行われている明久対明久の召喚獣勝負に首を傾げ、理音は明久のレベルアップのためだと言う。

「確かに、勝手がわからぬようじゃのう。明久はどう戦って良いのか戸惑っているようじゃ」

「あぁ。アキは操作性を重視してカウンターを狙う。自分から攻撃して逆に攻撃されるなんて経験がないだろ」

「理音、あんた、いつ、吉井くんの戦い方を見てのよ?」

秀吉は明久の練習を見ていつもの明久とは違うと首を傾げると理音は怜生の頭を拭き終えたようで少しだけ優しげな笑みを浮かべて怜生の頭を撫でて明久に必要な練習だと言うが、優子は理音が明久の戦い方をどうやって調べたのかと聞くと、

「試験召喚戦争が始まってからのデータってのはデータバンクにあるからな。Fクラスがクラスにまで挑んだ最初の試験召喚戦争までのアキの戦闘記録に今日の召喚大会、さっきまでの練習データからだ」

理音は平然と答え、

「アキ、そいつはお前の戦闘データを基にしてるんだ。自分から仕掛けないと練習にならないぞ」

「わ、わかってるよ。でも、自分の攻撃がこんなにいやなものだとは思ってなかったよ」

「良いから、やれ。攻撃になれるためにフィードバックを外してるんだからな」

明久に向かいもっと積極的に戦えと言うと明久は自分が攻撃を狙って的確にカウンターを狙ってくるため明久は攻めきれないようであり、泣きごとを言うが理音は有無を言わさない。

「わ、わかってるよ。でも、ダメージを当てたら、痛そうだしさ」

「……やらないなら、今から１０分の間に倒さないと二体分のダメージがフィードバックするようにしてやる」

「やる。絶対に倒すよ！？」

明久は戦闘タイプが同じ以上に自分の召喚獣を倒しにくいと答えるが理音は平然と明久に脅しをかけ、明久は理音の脅しに慌てて頷く。

## 第２３９問

「まぁ、こんなものか？　時間も時間だし、そろそろ止めるか」

「……疲れたよ」

「……何とか逃げ切れた」

「……残念、これだと理音から話が聞けない」

理音は膝の上で寝息を立てている怜生の頭を撫でると練習中の明久と雄二に声をかけると２人はかなり疲れたようで膝を付くなか、翔子だけは雄二に勝てなかったため、理音からのご褒美がないため、残念そうな表情をしている。

「ねえ。理音、今更なんだけど、こんな人数が泊まれる数の布団ってあるの？」

「そう言えば、そうよね……前田と優子は一緒の布団で寝れば良いとして、まさか、アキと坂本が同じ布団で？」

優子は理音の家にこれだけの人数が泊まれるのかと首を傾げながら言うと美波はまたおかしな想像を始めだし、

「……雄二、浮気は許さない」

「坂本くんには翔子ちゃんがいるんです。そんな事はダメです！！」

美波のその一言に翔子は殺気立ち、瑞希はまたわけのわからない事

を叫び出すと、

「しょ、翔子、落ち着け。島田、お前もおかしな事を言うな!!り、理音、翔子を止めてくれ!!」

「……雄二、悪いな。今はこの状態だからお前を助けてやる事はできない。優子、変な妄想するな」

雄二は翔子の様子に背中に冷たい汗がつたい始め、理音に助けを求めるが、理音の膝の上には怜生が眠っているため、理音は動く事ができない。

「お、おかしな妄想なんてしてないわよ!?」

「……姉上、それはしていたと言ってるようなものなのじゃ。それで、理音、布団の数は足りておるのか?」

「あぁ。それなりにあるが部屋が限られてるが怜生は俺の部屋に連れて行くが男女別で良いか?」

優子は理音の言葉に慌てておかしな妄想はしていないと言うと秀吉はため息を吐きながら理音に布団の状況を聞き、理音は部屋割を提案すると、

「リオ、木下さんはリオと同じ部屋?」

「よ、吉井くん、な、な、何を言ってるのよ!?」

明久は首を傾げながら優子は女子部屋か理音の部屋に行くのかと言い、優子は明久の言葉に驚きの声を上げる。

「ん？　俺はどっちでもかまわんぞ。ただ、怜生がいるから何もできないのが残念だ」

「あんたは何をする気よ！？　あ、あたしも女子部屋に行くわよ」

理音は優子に何もできない事が残念だと言うと優子は顔を真っ赤にして自分は女子部屋に行くと言い、

「木下さんも女子部屋だと5人だよ。狭いでしょ」

「……明久、何度も言うておろう。ワシは男じゃ」

明久は優子が女子部屋に行くと言う事で首を傾げると秀吉はすでに何度もやっているやり取りに少し疲れたようなため息を吐いて言うが、

「……木下が雄二と同じ布団で寝るなんて許さない」

「そうです。木下くんが危険です！！」

「そうよ。木下、あんたはこっちよ」

秀吉が男子部屋に言う事が許されるわけはなく、

「秀吉、お前は1人で怜生の部屋に行くか？　俺の部屋にくるか？」

「……うむ。1人は寂しいのじゃ。お主の部屋に行かせて貰うのじゃ」

理音はため息を吐くと秀吉を自分の部屋に来いと言い、秀吉は理音の提案にのる。

「……優子、理音が浮気しようとしてる」

「……代表、理音はそっちの気はないですから」

翔子は優子に理音の浮気を責めるように言うが、優子は深いため息を吐く。

# 第２４０問

「あれ？　リオ」

「ん？　アキ、どうかしたのか？」

「いや、ちょっと寝付けなくてさ。喉も渇いたし、水でも飲もうと思ってさ。リオは朝ごはんの準備？」

「あぁ、お前達の練習に付き合ってて、すっかり朝の準備を忘れていてな。朝に準備をしてきて瑞希が手伝うとか言い始めても困るしな」

明久は寝付けなかったようでキッチンに水を飲みにくると理音がキッチンに立ち、朝食の準備をしている。

「そ、そうだね。姫路さんがキッチンに立ってたら大変だよね……ねえ、リオ、ボクも手伝おうか？」

「これで終わりだ……寝付けないなら、これでも温めるか？」

明久は理音に何か手伝うかと聞くが、理音はお米を研ぎ終わったようで炊飯器のスイッチを入れると冷蔵庫から牛乳を取り出して明久に温めるかと聞き、

「良いの？」

「別にたいした手間でもないだろ」

「それじゃあ、お願いしようかな」

明久の返事に鍋に牛乳を入れて温め始める。

「ねえ。リオ、今日はごめんね」

「ん？　何がだ？」

「いや、何かボクと雄二が泊まるって言ったから大変な事になったみたいだからさ」

「別に気にするな。１人だと怜生の相手もしてやれない事が多いからな。お前らがきてくれると怜生を１人にしなくて良い分助かる」

明久は多人数のお泊り会になった事を理音に謝るが、理音は特に気にしてないようでむしろ、優子や秀吉が怜生の相手をしてくれたため、助かったと言うと、

「しかし、どうしたんだ？　お前がそんな事を言うなんてまともな夕飯を食ったからどこかおかしくしたか？」

「それは酷くないかな？」

明久の様子に理音は眉間にしわを寄せて、食当たりでもしたかと聞くと明久は苦笑いを浮かべた後、

「いやさ。リオ、無理してないかな？　と思ってさ。学校での件もあるし、ボクはよくわからなかったけど、教頭先生の件でまたいろいろと抱え込んじゃったみたいだしさ」

理音を心配するように言う。

「別に無理などしていない。仮にしていたとしても、1人で無理をしていた時に比べると怜生や優子、お前の顔が見える分、苦にはならん」

「そっか。それなら良いんだ」

理音は表情を変える事なく無理をしていないと言うと明久は理音の言葉に笑顔を見せた後、

「そうだ。リオ、清涼祭が終わったら、おじさんとおばさんのお墓参りに行かない？」

「墓参り？　そんなものは必要ないだろ。あそこには骨があるだけで参って何になる？」

良い事を思いついたと言いたげに理音と怜生の両親のお墓参りに行こうと言うが、理音はあまり墓参りと言う風習に感心がないようで首を傾げると、

「何になるじゃなくてさ……ならさ。ボクがおじさんとおばさんに謝るのに付き合ってよ。おじさんの事を忘れてた事、リオが居なくなったとは言え、疎遠になってておばさんのお葬式にも出れなかったしさ。その事を謝りたいんだ」

「別に気にする事でもないと思うんだが」

「リオ、お願いできないかな？」

「……あぁ。わかった」

明久は理音を彼の両親のお墓に連れて行きたいようで理由付けをして理音に言うと理音は納得はいかなさそうだが頷き、

「……お前らはいつまで盗み聞きしてるつもりだ？」

「えっ！？　……姫路さんに木下さん！？」

キッチンの外に気配を感じたようで声をかけると優子と瑞希がバツの悪そうな表情をして顔を出す。

「べ、別に盗み聞きするつもりはなかったのよ。姫路さんと寝付けないねって話をして水を飲みにきただけだから」

「そ、そうです。たまたまです。偶然です」

優子と瑞希は慌てて弁明すると、

「別に聞かれて困るような話はしてない。アキ、もう少し時間がかかるが良いか？」

「うん。ボクはかまわないよ」

理音は自分と明久の分のホットミルクを優子と瑞希に渡すと改めて自分と明久の分の牛乳を鍋に注ぐ。

# 第２４０問（後書き）

どうも、作者です。

理音と明久の中に流れるやさしい空気にヒロインズは盗み聞き。（爆笑）

本編の理音は特別問題やｉｆとは違ってまともにお墓参りには行かないでしょうしね。

この後は何か会話があるのか解散かは考え中。

# 第２４１問

「えーと、木下さん、どうかした？」

「べ、別に何もないわよ！？」

「……優子、それは何かあると言っているようなものだ」

「リオ、ありがとう」

明久は理音が牛乳を温め終わるのを待っていると優子が自分を見ている事に気づき声をかけると優子は慌てて否定するが理音は優子の様子にため息を吐きながら明久にホットミルクを渡す。

「それで、今度は何を言いたいんだ？　何度も言っているが、いい加減、俺と明久がおかしな関係とか腐女子的な考えは止めろよ」

「そ、そんな事、考えてないわよ！？」

「……」

理音はまた優子がおかしな妄想をしていると思っていたようでため息を吐くと優子は全力で否定するが明久は優子に自分がおかしな目で見られていると思い、優子から距離を取ろうとすると、

「ちょっと、吉井くんも勘違いしないで！？　あたしだっていつもそんな事を考えてるわけじゃないから！？」

「……たまには考えてるんですね」

「まぁ、今更だな」

優子は慌てて明久に弁明するが墓穴を掘り、瑞希は優子の様子に苦笑いを浮かべ、理音はいつも通りだと言いホットミルクに口をつける。

「ちがっ！？　ちがうわよ！？　姫路さんもおかしな勘違いしないで！？」

「昼間も言ったが今更の事を言われて慌てるな」

「そうじゃないでしょ！！　どうするのよ！！　あたしにはあたしのイメージってものがあるのよ！！」

優子は慌てて瑞希に弁明しようとするが、理音は明久も瑞希も知っている事だと言うと優子は理音の胸倉をつかむと、

「ま、まぁ、人の趣味にあまりボクも口は出さないけど、できれば、ボクやリオでおかしな想像はしないで欲しいかな」

「ダメよ！！　あたしにだって好みの絵があるのよ！！」

明久は自分や理音を妄想の対象にしなければ良いと言うが、優子には優子のこだわりがあるようで拳を握り吠える。

「……あの、前田くん」

「ん？　まぁ、あいつの趣味を理解する気はないぞ。まぁ、頭の中で妄想するのは個人の自由だろ。現にアキだって頭の中では瑞希の

……」

「リオ、ストップ!?　な、何を言う気!?」

瑞希は優子の様子に顔を引きつらせると理音は別に優子の趣味を辞めさせる気もないと言い、明久の妄想を例えに瑞希に説明しようとすると明久は慌てて理音を止める。

「前田くん、私がどうかしたんですか?」

「ん?　アキが」

「言わなくて良いから!!　言う必要はないからね!!　わかった。ボクも木下さんの趣味にとやかく言わないからリオも何も言わないで!!」

「……理音、あんた、吉井くんの何を握ってるの?」

瑞希は理音の言葉に何があったかわからないため、首を傾げて聞くと理音は改めて明久の何かをばらそうとするが明久はそれ以上言わないでくれと懇願し、2人の様子に優子は顔を引きつらせると、

「ん。アキの性癖」

「最悪だ!!」

理音は表情を変える事なく言い切り、明久は声を上げる。

「ま、前田くん、今の話を詳しくお願いします」

「あぁ。アキの個人的の趣味は」

「ちょっと、何で、姫路さんは食い付くのさ!?　リ、リオ、そろそろ寝ないと寝坊しても困るしさ」

瑞希はなぜは理音の言葉に食い付き、理音は当然のように直ぐに答えようとするが明久は話を無理やり切ろうと理音を連れてキッチンを出て行き、

「姫路さん、あたし達も戻りましょうか?」

「はい」

優子は自分の事もあったせいか明久の味方をし、瑞希は残念そうに頷く。

# 第２４１問（後書き）

どうも、作者です。

この作品はと言うか作者は明久と瑞希を応援しています。

理音は応援しているかは微妙ですけど、美波も友人だとは思ってますからどちらかに肩入れはしてないと思うんですけどね。まあ、瑞希よりか中立かは４巻の部分になるまでで考えよう。（苦笑）

優子には優子のＢＬ論があります。異論は認めます。（爆笑）

# 第２４２問

「……康太、何をしてるんだ？」

「……人違い」

朝になり理音が目を覚ますと康太がシャッターが擦り切れる勢いで秀吉の寝顔を写真に撮っており、

「別にうるさく言うつもりはないが気持ちよく寝ているみたいだから、起こすなよ」

「……そんなへまはしない」

「一先ずは顔を洗って……時間を考えると夜這いじゃないが、普通は逆じゃないのか？」

理音は布団からはい出るとあまりうるさく言う事はなく、部屋に怜生、秀吉、康太をおいて部屋を出ると男子部屋のドアの前に立っている瑞希、美波、翔子を見つける。

「な、何を言ってるのよ！？　べ、別にアキの寝顔がみたいな？とかは思ってないわよ！？」

「そ、そうですよ！？」

「……夫を起こすのは妻の務め」

理音に見つかり、瑞希と美波は慌てるが翔子は雄二を起こすのは自

分の義務だと言い切りドアを開けると、

「そ、それなら、ウチだって」

「私も吉井くんの……」

瑞希と美波は自分達も明久の寝顔を見るのは当然だと言い、翔子の後を追いかけようとするが、

「……霧島はわかるがお前らにそんな権利はないからな」

「ちょっと、放してよ!?　あの中にアキのアキの幸せそうな寝顔があるのよ!?」

「そうです。翔子ちゃんだけずるいです!?」

理音は2人の首をつかみ歩きだすと2人は理音を責めるように言う。

「お前らはアキの彼女でもないんだ。そんな権利はない。そんなバカな事をやるヒマがあるなら、起きた順から学校に行く準備をしろ。洗面所は1つしかないんだ」

「で、ですけど」

「前田、今日だけなの、今日しかチャンスはないの」

理音は瑞希と美波を女子部屋に放り込み、暫く、ドアの前に立っていると瑞希と美波は今日を逃すわけにはいかないと理音に言うが、

「……そう言うなら、へたれてないでさっさと告白なりしろ。わけ

のわからないまま、嫉妬で暴力を振るっているとそのうち愛想を尽かされるぞ」

「「うっ！？」」

理音はそんな事を言う前に手順を踏めと言うと瑞希と美波は言葉を失い、

「わかったら、準備を始めろ」

理音は2人の反応にそれ以上は言わずに朝の準備をしに歩いて行く。

## 第２４２問（後書き）

どうも、作者です。

朝から騒がしいメンバーです。

雄二の運命はまあ、気にしない方向で、そして、理音はなんだかんだ言っても明久の味方です。瑞希と美波の暴走は正論で粉砕します。

（爆笑）

# 第２４３問

「……おい。理音」

「どうかしたか？」

理音がキッチンで朝食の準備を進めていると着衣の乱れかけた雄二が理音に声をかけると理音は首を傾げるが、

「どうかしたか？　じゃねえ！！　お前はなんで、翔子を止めないんだ！！」

「何度も言わせるな夫婦間の事は俺は知らん」

「勝手に入籍させるな！！」

雄二は理音が翔子を見逃した事を瑞希か美波に聞いたのか、理音を怒鳴りつけるが理音はそんな事は自分には関係ないと言い切ると雄二は叫ぶ。

「雄二、朝からうるさいよ。リオ、おはよう。手伝うよ」

「ん？　アキ、早いな。何かあったのか？」

明久は欠伸をしながらキッチンに入ってくると朝食の準備を手伝うと言い、理音は明久が起きてきた事に首を傾げると、

「せっかく気持ちよく寝てたのにさ。雄二が騒ぐから目が覚めちゃったんだよ。もう１度、寝ようかな？　とも思ったけどさ。昨日の

夜、理音が1人で朝の準備してたし、手伝おうと思ったんだよ。それになんかあのまま寝てるとなんか危険な気がしてさ」

「そうか？　なら、味噌汁に入れるネギを切ってくれ。雄二、そこで立ってるなら、さっさと学校に行く準備を始めるか、そろそろ、朝飯もできるし、秀吉と怜生を起こしてこい」

明久は勘で身の危険を感じ取っていたようで苦笑いを浮かべながら早起きした理由を話すと理音は一先ず、納得したようで明久に手伝いを頼み、雄二にそこに立っているなら、寝てる人間を起こしてくるように言い、

「……あぁ。わかった」

雄二は納得が行っていないようで不機嫌そうに秀吉と怜生を起こしに理音の部屋に向かう。

「ねえ。リオ、秀吉を起こしに行ったら、霧島さんに捕まんないかな？」

「そこまで知らん」

明久は理音に雄二が秀吉を起こしに行った事で翔子に浮気と判断されないかと聞くが、理音は知らないと言い切り、2人で朝食の準備を続ける。

その少し後に雄二の悲鳴が理音の家に響いた事は言うまでもない。

# 第２４４問

「……で、お前らは何がやりたいんだ？」

「……昨日は木下さんが手伝ったからだとは思ってたけど、やっぱり、美味しいわ」

「……自信無くなっちゃいます」

朝食を全員で食べ始めて直ぐに理音の作った味噌汁に口をつけた瑞希と美波は女の子としてのプライドを打ち砕かれたようで涙を流しており、

「優子が手伝った？　何をおかしな事を言っている。昨日のポトフは俺１人で作った。だいたい、優子は料理は何もできん」

理音は表情を変える事なく、優子が料理をできない事を話す。

「ちょ、ちょっと、理音、みんなに言う事ないでしょ！？」

「事実だろ」

「事実だとしてもよ！！」

優子は理音の言葉を止めに行けなかったため、理音を怒鳴りつけるが理音は気にする様子はなく、

「き、木下さん、本当に猫を被ってるんだね」

「うむ。理音は被っておる猫をすべてはがすからのう」

「……でも、私は前の優子より、今の優子の方が好き」

明久は苦笑いを浮かべると秀吉はうんうんと頷き、翔子は今の優子の方が良いと笑顔を見せる。

「まぁ、実際、優等生って周りと一線引いてるような感じもするしな……へえ、砂糖じゃないんだな」

「うん。ボクも不思議に思ったんだけど、怜生くんが砂糖よりはちみつ入りの方が好きなんだって、おばさんがはちみつを入れて作ってくれてたらしいんだ」

雄二は優等生は取っ付きにくいと言いたげに言うと理音の作った卵焼きは砂糖が使われていないと言いあて明久は理音と怜生の母親の姿を思い出しているのか昔を懐かしむように笑う。

「……美味い」

「本当に美味いのじゃ、しかし、雄二、お主、よく一口食べただけではちみつを使っているのがわかるのう」

「まぁ、俺も料理をするからな。それより、理音、今日はがきんちょはどうするんだ？　昨日も1人で学園にきてたみたいだし、1人で留守番か？」

雄二は理音が怜生と2人暮らしをしているため、学園祭のため休日の登校のため、怜生をどうするかと聞くと、

「ん？　あぁ。今日は学園に連れて行く。昨日、西村教諭と妖怪ばばあにも許可をもらった」

「そうなの？」

「……理音、あんた、手に入れた権力を使ったわけじゃないわよね？」

「少なくとも西村教諭と妖怪ばばあがそれを聞きいれるわけがないな。悪いな。俺は着替えてくるから、食器は下げておいてくれ」

理音は学園長と担任の西村教諭に許可をもらったと言うと優子は何か引っかかる事があったようで理音に聞き返すと理音は表情を変える事なく、脅して無いと言うと朝食を終えたようで食器をキッチンに持って行くと自分の部屋に戻って行き、

「……優子、行かなくて良いの？」

「……代表、意味がわかりません」

「……夫のネクタイを締めるのは妻の役目」

「しょ、翔子、ちょっと待て！？　俺はもう制服に着替えてるんだ！？」

翔子は優子に理音を追いかけ無くて良いのかと聞くと優子は意味がわからないようでため息を吐くが翔子には翔子の言い分があるようで優子に言うと雄二のネクタイに手を伸ばす。

# 第２４５問

「……お前らは朝から何がしたいんだ？」

「……ボクに聞かないでよ」

理音が着替えて帰ってくると雄二は翔子にネクタイで首を絞められ顔の血の気が引いており、明久は理音が目を離したすきに瑞希と美波が暴走したようでネクタイを締めるはずがＹシャツが破られさめざめと泣いており、康太はそんな明久の姿を止めを刺すように写真に撮っている。

「……瑞希、島田、お前らは俺の言った事を聞いてなかったのか？」

「き、聞いてなかったわけじゃないわよ」

「そ、そうです。吉井くんが私達にネクタイを締めさせてくれないから」

理音は明久が泣いている原因を瑞希と美波を原因と決めつけて２人を廊下に連れて行って聞くが、２人は自分達は悪くないと言い、

「……２人ともあまりおかしな事をするな。あんまりおかしな事をやり続けるとアキに愛想を尽かされるぞ。何度も言うが、お前らとアキは雄二と霧島とは違うんだ。関係性が変わってないのに同じような事を続けるなら、悪いが、俺はお前ら２人を応援してやる事はしないし、これからもお前らがアキに同じ事を続けるならお前らは俺お攻撃対象にさせて貰う。瑞希、お前は俺の過去を知っているんだ。この意味はわかるな？」

「は、はい」

「う、うん」

理音はいつもの邪悪な笑みとは違う見た人間は寒気すら感じるような冷たい笑みを浮かべて言うと2人は理音の異質さに声を震わせて返事をすると、

「今、言った事を忘れるなよ。俺は壊れているんだ。たまに全てがどうでもよくなる時がある。アキや優子、怜生、お前達は俺が人でいるために必要なピースだ。俺をまだ人でいさせてくれ」

「……ま、前田くん」

「ちょ、ちょっと、あんたは何を言っているの？」

理音は小さくため息を吐き、瑞希は理音が留学する以前の事を思い出したようで真剣な表情をして頷くが、理音の過去を知らない美波は首を傾げる。

「……別に気にするな。俺はアキに貸す。Yシャツを取ってくるから、ちゃんとアキに謝るんだぞ。良いな」

「はい。わかってます」

「うん。ゴメンね。前田」

理音は美波の様子にいつもの無表情になり、自分の呼びのYシャツを取りに部屋に戻って行き、瑞希と美波は理音の後ろ姿に小さな声

で謝ると、居間に戻って行き、

（……ずいぶんと優しいですね。姫路さんは島田さんや霧島さんに引きずられているんです。２人から引き離してしまえば簡単じゃないですか？）

（そう言うな。答えを出すのはアキだ。俺やお前が口を出す事じゃない）

（それもそうですね。まぁ、私は言う権利もありませんけどね）

もう１人の理音は理音の頭のなかで明久と瑞希を応援するのに美波と翔子を引き離せと言うが理音はそれを決めるのは自分ではないと言い切り、もう１人の理音はあまり興味もないようであり、そう言うと中に入って言ってしまうが、

「……自分で言うのもなんだが、素直じゃないな」

理音はもう１人の理音は口では興味はないと言っているが明久の事を心配してる事がわかるため、１人で苦笑いを浮かべる。

## 第２４５問（後書き）

どうも、作者です。

理音、瑞希と美波の行動に本気で呆れる。（爆笑）

瑞希は絶対に美波と翔子から間違った影響を受けていると思うのは俺だけではないはずです。

理音は現在はやっぱり瑞希派なのかな？

瑞希と美波は理音の言葉に原作より少しだけやさしくなれたら良いな。

……えっ？　そんなのバカテスじゃない？

……確かに。（爆笑）

## 第246問

「リオ、ありがとう」

「泣いてないで、さっさと着替えてこい」

「うん」

理音は明久に予備のYシャツを渡すと明久は半泣きのまま着替えるために居間を出て行く。

「……理音、あんたも朝から大変ね」

「……そう思うなら、暴走しはじめたあいつらを止めてくれ」

「……無理よ」

「だろうな」

優子は朝から瑞希と美波の暴走に巻き込まれて忙しそうに動いている理音に声をかけると理音はため息を吐きながら2人をどうにかしてくれと言うが優子は自分ではあの2人を止めるのは無理だと首を振る。

「でも、理音、あんた、姫路さんと島田さんは止めるのにどうして代表は止めないの？　坂本くん、死にそうよ」

「あ、姉上、そんな事を冷静に言うなら、霧島を止めるのを手伝うのじゃ！？」

「……木下が雄二をかばうって事は吉井だけじゃなく、木下にも手を出した？　雄二、許さない」

優子は理音が明久は助けるのに雄二を助けない理由がわからないと首を傾げると秀吉は雄二を助けようと翔子を止めようとしているが、その秀吉の行動は完全に逆効果であり、

「……その答えの前に流石にこれ以上は殺人事件になりそうだから止めてくる」

「……本当に、あんたは朝から大変ね」

理音はため息を吐くと翔子を止めに行くと言い、優子はもう1度、ため息を吐く。

「霧島、そこまでだ。それ以上、やると雄二が死ぬ。康太、悪いが俺の部屋からＡＥＤを取ってきてくれるか？」

「……俺のを使うか？」

「あぁ」

「待つのじゃ！？　それは雄二の心臓はすでに止まっておると言う事か！？」

理音は翔子を雄二から引き離すと心臓マッサージを始めだし、康太に部屋から自動体外式除細動器を取って来るように頼むと康太は自分の鞄から自動体外式除細動器を取り出して雄二に取り付け始め、秀吉は雄二の状況に声を上げるが、

「大丈夫だ。まだ、脳に酸素は回ってるはずだからな」

「……まだ、障害が出る時間じゃない」

理音と康太は慌てる事なく、雄二の治療を続けている。

「……代表、少し自重してください。坂本くんが死んだら元も子もないですよ」

「翔子お姉ちゃん、雄二兄ちゃんをいじめちゃダメです」

「……わかった。気をつける」

優子と怜生は翔子の行動はやりすぎだと言うと怜生に言われた影響もあるのか翔子は素直に頷く。

「6万だと？　バカを言え。普通、渡し賃は6文と相場が決まって」

「昔と違って貨幣価値も変わってきてるんだ。当然だろ」

「……自殺者も増えてるから人手不足もある」

「……そうか。それなら仕方な――――――はっ！？」

「よ、良かったのじゃ。目を覚ましたのじゃな」

雄二の心臓は動きだしたようで意識は混濁しているなか、理音と康太は気にする事なく治療を続けていると雄二は意識を取り戻すと秀吉は安心したようで胸を撫で下ろし、

「お、俺はどうしたんだ？」

「気にするな。助かったんだからな。それより、そろそろ、行くぞ。俺は朝、ばばあのところに行かないといけないから遅刻するわけにもいかないからな」

雄二は自分の状況に目を白黒させているが理音は気にする事なく立ち上がり、登校する時間だと言い、それぞれ、玄関に向かって行く。

## 第２４６問（後書き）

どうも、作者です。

雄二、三途の川を渡りかける。（爆笑）

このやり取りはやりたかったんですが瑞希のゴマ団子は回避したから他でと考えていたんですが入れてみました。（苦笑）

さあ、ようやく、清涼祭２日目です。どんな騒ぎが起こるんでしょうか？

# 第２４７問

「へぇ、みんなで前田くんの家に泊まったんだ。ぼくも誘ってくれたら良かったのに。ねぇ、怜生くん」

「……愛子、言うのは簡単だけど、大変だったのよ。吉井くんの制服は破かれるし、坂本くんは三途の川を渡りかけるし」

理音が学園長室に言っている間、優子と翔子は怜生をＡクラスに連れて行くと昨日の話を聞いた愛子は怜生を抱きしめながら自分もお泊り会に参加したかったと言うが優子はいろいろとあったためか疲れたようなため息を吐く。

「大変って？　……前田くんにとうとう押し倒された？」

「……優子、いつの間に、私も雄二に」

「代表、ストップ！？　そんな事実はないから止まって！？　そんな格好で出て行かないで！？　愛子も朝からおかしな事を言わないで！？」

「あはは。代表、冗談だから止まってよ」

「……本当？」

「本当よ」

「本当だよ」

「……わかった。２人がそこまで言うなら信じる」

愛子はニヤニヤと笑いながら優子をからかうと翔子はおかしなライバル心に火が点いたようでメイド服に着替えている途中で更衣室にしている一室を出てこうとし、優子は慌てて翔子を止めようとするが翔子は止まりそうもなく愛子は苦笑いを浮かべて、優子と一緒に何とか翔子を止める。

「それにしても、前田くん、付き合う前はキスに優子の胸を揉んだりしてたのに付き合い始めての方が紳士的じゃない？」

「そ、そんな事はないと思うけど、今は学園長先生の手伝いもあるし、クラスの出し物もあるし、忙しいからよ。それに相変わらず、スケベで表情がないから何考えてるかわからないし」

「……お姉ちゃん、お兄ちゃんの事、嫌いですか？」

翔子を止めた後、着替えを終えて朝のＨＲが始まるのを待っていると愛子はニヤリと笑い優子いじりを再開させ、優子は恥ずかしいため顔を赤くしながら理音の事を悪く言うと怜生は優子の言葉に悲しそうな表情をすると、

「ちが！？　違うわよ！？　怜生くん、泣かないで、あたしは理音の事、嫌ってないから、嫌いだったら付き合わないから」

「むしろ。大好きと」

「そう！！　……あっ！？」

優子は怜生に泣かれそうになったため、慌てて言うと愛子はニヤニ

ヤと笑いながら優子が理音を好きな事を確認すると優子は勢いに任せて返事をしたところでここがAクラスの教室の真ん中だと言う事を思い出し、彼女の顔は凄い勢いで耳まで真っ赤に染まって行く。

「……工藤さん、あまりからかい過ぎるのもどうかと思うよ」

「いや、何か優子を見てるとからかいたくなるんだよね。少しだけ、前田くんの気持ちがわかるかも」

「……愛子」

「あはは。ちょっと、やり過ぎたかな？」

利光がため息を吐きながら愛子をいさめると愛子は理音の気持ちがわかると言うと優子は余程恥ずかしいようで額に青筋を浮かべながら愛子を呼ぶと愛子は優子の様子に流石にやり過ぎたと思ったようで苦笑いを浮かべ、

「怜生くん、任せた」

「……お姉ちゃん、本当ですか？」

「うん。本当よ」

「……良かったです」

優子の前に怜生を出すと怜生は不安そうな表情で優子に聞き返し、優子は怜生の不安を取り除くために優しげな笑みを浮かべて怜生の頭を撫でると怜生は嬉しそうに笑顔を見せた時、

「怜生」

理音が学園長室での用事を済ませたようで怜生を迎えにＡクラスの教室に入ってくる。

「おはよう。前田くん」

「あぁ……何か、あったか？」

「な、何もないわよ！？」

愛子は理音の顔を見てニヤニヤと笑いながら挨拶をすると理音はＡクラスの生徒から向けられる視線に首を傾げると優子は慌てて何もないと言い、

「そうか？　優子、霧島、工藤、久保、怜生を預かって貰って助かった。礼を言う」

「……ありがとうございました」

理音は特に気にする様子もなく、怜生の手を握り２人でＡクラスの教室を出て行く。

# 第２４８問

「さてと。行こうか。雄二」

「そうだな。俺達は抜けるが大丈夫か？」

召喚大会の決勝戦の時間も近づき、明久と雄二は喫茶店をクラスメート達に任せて出て行こうとするが、雄二はクラス代表として店の状況を心配するように聞くが、

「大丈夫じゃなくても行かないとダメでしょうが。決勝戦なんだからね。頑張ってくるのよ」

「まぁ、そりゃそうだな」

美波は２人は喫茶店を気にしている状況ではないとため息を吐き、雄二は美波の返事に苦笑いを浮かべ、

「……アキ兄ちゃん、雄二兄ちゃん、頑張ってきてください」

「当然」

「あぁ。ここまできて負けるわけにはいかないからな」

怜生が２人に声をかけると明久と雄二は交互に怜生の頭を撫でて勝利を怜生に約束する。

「……瑞希、怜生に美味しいところを持っていかれてるぞ。何か言ってやらなくて良いのか？」

「は、はい。吉井くん、坂本くん、後で私達も応援に行きますので頑張ってください」

理音は明久、雄二、怜生の様子を見てくすりと笑った後、恥ずかしいのか2人に応援の言葉をかけれなさそうにしている瑞希に声をかけると瑞希は2人に声をかけ、

「あぁ。ここで、しっかりと勝って姫路の転校も阻止してくるさ。なぁ、明久」

「うん。姫路さんの転校阻止のために、後は昨日、ボクと雄二の勉強や練習に付き合ってくれたみんなのためにも負けられない」

明久と雄二は苦笑いを浮かべながら、負けられないと言い切り、

「それなら、しっかりと勝ってくるのじゃ。ぬかるでないぞ」

「……優勝」

秀吉と康太は明久と雄二を激励するためか2人の前に拳を突き出し、明久と雄二は2人の行動にくすりと笑うと2人の拳に自分達の拳を合わせ、

「おい。理音」

「ん？　どうかしたか？」

雄二は理音を呼び、理音は雄二が自分を呼ぶ理由がわからないようで首を傾げる。

「リオからは応援の一言はないのかな？　って思ってさ」

「ん？　必要か？」

「お前、ノリが悪いぞ」

明久は理音の様子に苦笑いを浮かべると理音はあまり必要性を感じていないようで首を傾げ、雄二はそんな理音の様子にため息を吐くと、

「……俺から特に言う事もないんだ。無理な事は俺は言わないからな」

理音のなかでは2人が優勝する事は確定しているようで特に言う事はないと言う。

「おいおい。召喚システムは成績の勝負だぞ。明久（バカ）がいるんだ。負ける可能性だって」

「大丈夫だ。アキはバカじゃない。グローバルなバカだからな」

「って、何で、そこでボクをバカにするの！？」

雄二は理音が自分達の勝利は絶対的だと言い切るのを見ての苦笑いを浮かべて明久が不安要素だと言うが、理音は表情を変える事なく明久はバカだと言い切り、明久は2人の言葉に不満げな声を上げるが、

「事実を言っただけだ」

「リオなんかキライだ！！」

「明久、１人で行くな。とりあえず、しばらく頼むな」

理音の表情は当然、変わるわけもなく、理音に止めを刺された明久は泣きながら教室を出て行き、雄二は明久の背中を見てため息を吐いた後、明久を追いかけて行くと、

「悪いな。俺もばばあから頼まれた作業があるから席を空ける。怜生の事を任せる」

「うむ」

「……いってらっしゃい」

理音はやる事があると言い、教室を出て行く。

# 第２４９問

「あれ？　理音、何をしてるの？」

「お前、店の方にいるんじゃないのかよ」

理音は学園長室で用事を済ませると明久と雄二の控室に顔を出し、理音の登場に２人は首を傾げるが、

「前に言っただろ。召喚大会のためにいろいろとしているってな。せっかくの決勝だし、余興は派手じゃないといけないだろ。召喚大会の決勝はこれをつけて出て貰う」

理音は何か企んでいるのかにやりと笑うと明久と雄二に『青色の腕輪』を渡す。

「これは何だ？」

「常夏コンビとの戦いに有利になるもの？」

雄二と明久は理音から渡された腕輪が何かわからないため、首を傾げると、

「召喚大会で有利になるようなものじゃない。実際、これからあの変態コンビにも同じものを渡してきた。まぁ、召喚大会を戦うお前達よりは見に来てくれた人達に楽しんで貰うためのものだ。遊びで作ったものだが、今の文月の状況だと出し惜しみはしていられないからな。白金の腕輪と同様に文月の新技術として発表する技術だ」

理音はその腕輪は新技術として発表するものだと言う。

「……観客を楽しませるもの？　映像系か？」

「何だ。せっかく腕輪をくれるなら、何か有利になるものを作ってくれたら良いのに」

雄二は理音の言葉に何か考え付いたようで苦笑いを浮かべ、明久は自分達が有利になる腕輪ではないと知り、少し不満げな表情をすると、

「いくつかオリジナルの腕輪の案はあるけどな。数を作るとチート臭いしな。うちの経営や教育方針を考えると簡単に腕輪は作れないんだ。腕輪を与えるなら、与えるなりの理由がないといけない。俺が作りたいから作った腕輪をFクラスにばらまくと戦力のバランスが崩れる。それはデータを取る上であまり面白くないからな。作るなら、作るで無作為に選んだ人間や召喚大会のように優勝者に渡すようにしないといけない。腕輪が欲しいならまずは自分の基礎学力をあげろ」

理音は明久の考えは甘えであり、腕輪は簡単に作るわけには行かないと言う。

「だろうな。せっかく、理音がいるんだ。多少なりは期待したが、そう言うわけにはいかないか」

「当たり前だ。それに昨日から経営や経理の事もやらないといけなくなったからな。開発費や色々と捻出しないといけなくなったからな。まぁ、腕輪はいくつか作ろうと思ってるその時はお前らが自分の力で勝ち取れば良い」

雄二は少しは期待していたようで苦笑いを浮かべると理音は世の中はそんな簡単に行かないと笑うと、

「腕輪か？　ボクや雄二が４００点超えたら、どんな特殊能力が使えるのかな？」

「さあな。知りたかったら、超えて見れば良いだろ。上手くやれば日本史と世界史なら近いうちに超えられるだろ」

「む、無理だよ。ボクが４００点オーバーなんて無理だよ」

明久は自分の召喚獣にあるはずの腕輪の能力が気になったようで首を傾げ、理音は明久にならできると言うが明久本人は苦笑いを浮かべながら自分には無理な点数だと言う。

「明久が腕輪持ち？　それは世も末だな」

「どうかな？　こいつは特殊能力とかの言葉に燃える人種だからな」

「……うん。ちょっと、否定できない」

雄二は明久が腕輪を持つ事などあり得ないと言うが、理音は明久の性格ならあり得ると笑い、明久は理音の言葉が否定はできないが勉強もしたくないため苦笑いを浮かべると、

「ん？　時間のようだな」

「あぁ。それじゃあ、この新技術がどんなものか見せて貰うぜ」

「行ってくるよ」

舞台から明久と雄二を呼ぶ声が聞こえ、２人は召喚大会の決勝の舞台に歩いて行く。

# 第２５０問

「理音、遅いわよ」

「あぁ。悪かった」

「しかし、決勝にもなると立ち見でも見える場所がないのう」

理音は観客席に移動するといつものメンバーが集まっているが観客が多すぎて会場の明久と雄二を見る事はできない。

「場所を移動するか？」

「移動するって言ってもどうするのよ？　前になんか行けないでしょ」

「まぁ、色々あってな空いている良い場所がある」

理音は足元にいた怜生を抱き上げると場所を移動しようと言うが、美波はどこも一緒だと言いたげにため息を吐くが、理音は気にする事なく歩き出し、

「ちょっと、理音、待ちなさいよ」

「別にそこにいたいならそこにいろ。少なくともそこよりは見える場所だ」

「……私は行く」

優子は慌てて理音を引き留めようとするが理音は止まる事はなく、翔子は理音の後を追いかけ始めるとメンバーも続いて行く。

「前田くん、屋内に入ってきてどうするんですか？　こんなところじゃ……」

「良いから付いてこい」

「……ねえ。理音、こっちってもしかして」

理音は召喚大会を見るため多くの生徒達が移動して静かになっている屋内を歩いているが瑞希は会場から離れているため不安そうな表情をすると優子は理音が向かっている先に心当たりがあるようでため息を吐くと、

「姉上、どこに行くのかわかるのか？」

「えぇ。たぶん、学園長室の奥よ」

「……はぁ？　前田、どう言う事よ！！」

秀吉は優子に目的の場所を聞き、優子は目的の場所は学園長室の奥の部屋だと言い、美波は驚きの声をあげる。

「今回、白金の腕輪以外にも俺が個人的にやっていた事があってな。それのデータを取るためにそこにいろいろと準備していたんだ。会場にはカメラもセットしてあってなその映像を見れるようにしてある。俺と怜生だけならスポンサー席に入れるがそれだとお前らは納得しないだろ」

「……理音、その映像は後でコピーしてくれ」

「あぁ。販売用にするんだな。編集なら俺も手伝おう。それと康太、俺も多くのデータが欲しいんでな。代りにお前の盗撮用で取った映像もくれ」

「……わかったが、理音のカメラに比べると解像度が良くない」

「それはどうにかするから問題ない」

理音は学園長室の奥でも見る事ができると言うと康太は召喚大会の決勝の映像に商品価値を見出しているようで理音に映像提供を求めると理音は問題ないと言い切り、

「……土屋、理音、それお願い」

「しょ、翔子ちゃん、ずるいです。土屋くん、私にもお願いします」

「ウチにもよ」

直ぐに3本の予約が入る。

「ばばあ、奥を借りるぞ」

「……くそじゃり、あんたはせめてノックくらいしてきなよ。ん？ずいぶんとお人数だね」

「すいません。学園長先生、怜生くんもいたので会場では決勝戦を見れなさそうだったんで」

「……確かにね。まぁ、仕方ないね。くそじゃり、あたしは会場に行くから、おかしな事をするんじゃないよ」

理音は学園長室に到着するとノックをする事なくドアを開けるため、学園長はため息を吐き、優子は慌てて説明をすると学園長はため息を吐くと学園長室を出て行く。

# 第２５１問

「……えーと、理音、なんか増えてない？」

「当たり前だ。作業をする上で必要なものだからな。まぁ、多少手狭になってきたからな。せっかく、小者を追い出したわけだから、後で俺が持ち込んだものは元教頭室に移動させておく」

学園長室の奥のドアを開けると以前、優子が入った時より物が増えており、優子は中の様子にため息を吐くが理音は気にする事なく、召喚大会の様子を見るのに必要な機器の電源を入れている。

「……教頭室、あんたのものになるのね」

「まぁ、元々、金勘定に有能だと言う建前で引っ張ってきた小者だからな。周りの目が行かないところに押し込んだ分、さらに好き勝手やったんだろ。少なからず、金勘定の得意な奴は人目のないところに置くと使い込みやらをするからな。今度はそうならないように俺が使う」

優子は理音の言葉にため息を吐くが理音は気にする事なく、教頭室は自分のものにすると言い切ると、

「……確実にあんたも好き勝手やるわね」

「まあな。基本的に俺は授業を聞く意味がないから必要なデータ処理や演算をする場合に集中できる部屋の１つや２つや３つ」

優子は理音が元教頭室で怪しげな実験をしている姿が目に浮かんだ

ようでもう1度、ため息を吐くが理音が気にする事はなく、さらに空き部屋を占拠して行くつもりのようである。

「あの、前田くん、それは多すぎませんかね？」

「……理音、私と雄二の部屋も1部屋欲しい」

瑞希はそんな理音の言葉に苦笑いを浮かべるが、翔子は空き部屋があるなら自分も欲しいと言い始め、

「別にかまわないが、タダでやるといろいろと面倒だからな。せっかくだ。霧島家で文月学園に出資してみないか？　それなら、スポンサーとしての特権で必要な部屋だと言って拡張工事くらいできるんだが」

「……代表、おかしな事を言わないでください。理音、あんたも自分の私欲でお金を使いこんだら教頭先生と変わらないでしょ」

「まぁ、あの小者ようなへまはしないがな。ばれると面倒だからな。止めておくか。と言う事だ。霧島、すまないな」

理音は何かを企んでいるのか邪悪な笑みを浮かべて翔子を通じて霧島家を文月学園のスポンサーに引き込もうとするが、優子はため息を吐きながら理音に竹原教頭と変わらないと言うと理音は少し考えるような素振りをした後、優子の言葉に納得したのか頷き、

「……わかった。理音と優子が言うなら我慢する」

「悪いな。他の事を用意してやるから待っててくれ」

「……わかった」

翔子は残念そうに頷き、理音はそんな翔子に代わりになるものを用意すると言うと翔子は嬉しそうに返事をするが、その様子を優子は頭を押さえて見ている。

「理音、霧島、始まるから静かにするのじゃ」

「へぇ、結構、様になってるわね」

「そうですね」

「……雄二、かっこいい」

スクリーンが決勝に参加する2組を映しているのを見て、秀吉が理音と翔子に声をかけるとスクリーンに映る明久と雄二の様子に瑞希、美波、翔子の3人は頬を赤く染めた時、

『この決勝の映像は現在在学中の前田理音博士の新技術により、舞台上空にも映し出されますので無理に前方に出てこないようにお願いします。事故の原因になりますのでご理解お願いします』

「……初期動作は正常。後はあいつらしだいか」

司会進行を行っている教員から理音の名前が呼び出され、会場の上空を映したカメラは上空に参加者4人とその召喚獣が映し出されており、その様子に理音は邪悪な笑みを浮かべている。

## 第２５１問（後書き）

どうも、作者です。

理音の腕輪は映像系。（苦笑）

ただ、空に映るだけなんでしょうか？（悪笑）

腕輪は多くの小説家さんが作っていますが、理音は戦わない主人公なので『無駄』なところに力を入れます。（爆笑）

スポンサーとして召喚システムに興味を持ってもらうために動かないといけないですしね。

改めて、異質な主人公だと思います。

# 第252問

「……あのさぁ。前田くん、確かに凄い技術なのかも知れないんだけど、これなら、ここまで移動する意味ってなかったんじゃないかな？」

「……確かにそうね」

愛子は苦笑いを浮かべながら理音の作った腕輪があれば学園長室までくる必要はなかったんではないかと言うと優子は愛子の意見に納得したようでため息を吐くが、

「何を言ってる。あそこでは怜生の身長では見れないだろ」

「……確かにそうね」

理音は会場では怜生がが見れないと言い切ると優子はスクリーンのなかで動き回っている召喚獣に目を輝かせている怜生を見て頷くと、

「それに俺がただ、上空に召喚バトルを映し出す事しかしないと思うのか？」

「……他にも何か企んでるんだね」

理音の顔は邪悪な笑みを浮かべたままであり、愛子が苦笑いを浮かべた時、

「バカが調子に乗ってんじゃんねぇよ！！」

「前田って言ったか？　あいつがどんな理由でお前らバカクラスに紛れこんでるか知らねえけどな。あいつだって腹の底じゃ、お前らバカと一緒にいられねえって思ってるぜ！！」

夏川と常村は明久と雄二に向かい、理音は心の中ではお前らをバカにしていると叫ぶ。

「……理音？」

「……何だ？」

「怒ってる？」

「……どうだろうな。最初はモルモットとしか見ていなかったのは事実だしな」

優子はスピーカーから響いた理音をバカにするような言葉に理音の表情が小さく歪んだ事に気づき、理音の手を握ると理音は直ぐにいつもの無表情な顔に戻り、小さく首を振ると、

「……先輩方、あんたらは言っちゃいけねえ事を言ったよ。うちのバカに火を点けちまったんだからな」

スピーカーからはため息交じりの声で夏川と常村をバカにするような雄二の声が聞こえる。

「は？　火を点けた？　だから、どうした？」

「どんなに火が点いたって言ったってな。バカはバカだろ」

雄二の言葉を夏川と常村が鼻で笑った時、

「……前に、前にクラスの子が言っていた」

「何だ？　晒し者にされた時の逃げ方でも教えてくれたのか？」

明久は何かを思い出しているのか話し出すが明久の言葉の途中で夏川は下品な笑い声で明久の言葉を遮るが、

「『好きな人のためなら頑張れる』って、ボクも最近、心からそう思った。好きな人のためなら頑張れる。大切な仲間のためなら頑張れるって……だから、ボクの仲間を、親友のリオを。どんな辛い事があっても、あの日、１人で泣くのをこらえて立っていたあいつを、あいつの事を何も知らないお前らがあいつの事をバカにするな！！」

明久は自分の事より、理音の事をバカにされた事が許せないようで夏川と常村に向かい叫ぶと、

「な、何!?」

「ちょ、ちょっと待て!?　何だ!?　何があったんだ!?」

明久の召喚獣は明久とともに咆哮を上げ、その咆哮に夏川と常村の召喚獣は２人の意思に反して１歩下がる。

「……これだから、バカ（アキ）は面白い」

「り、理音、吉井くんの召喚獣に何があったの？」

理音は会場で召喚獣に起きている事が予想通りなのか、それとも明久の言葉が嬉しかったのか小さく口元を緩ませると優子はスクリーンに映っている様子に疑問の声をあげると、

「……簡単な事だ。あの４人につけて貰った腕輪は操縦者の感情に連動して召喚獣の性能をあげる。簡単に言えば、アキの怒りがあの変態２人を委縮させたって事だ」

「……それって簡単なの？」

理音はすでにいつもの無表情に戻っており、簡単に腕輪の説明をすると優子が簡単すぎる説明に顔を引きつらせた時、

「くたばれえぇっ！！」

「ま、お前にしては上出来だな。明久」

何故か劇画風になった明久の召喚獣が夏川の召喚獣の喉元に木刀を突き刺し、変態コンビの点数は『０』と表示され、

『坂本・吉井ペアの勝利です！！』

「いぃぃよっしゃぁああー！！」

「……よくやった。アキ」

スクリーンには勝利の雄叫びをあげる明久が映し出し、理音は明久の事を小さな声で誉めた後、部屋にあるパソコンのキーボードをいくつか叩くとスピーカーからは夏川と常村の叫び声が聞こえ、

「……理音、お主、何をしたのじゃ？」

「ん？　ちょっと、お仕置きに召喚獣の痛みをフィードバックさせてやっただけだ。これで少しは人の痛みがわかるだろ」

「……敗者にムチを打つって」

「まぁ、あの２人がやった事を考えるとい薬じゃないのかな？」

理音は邪悪な笑みを浮かべたまま、変態コンビにお仕置きをしたと言うと学園長室は微妙な空気になる。

## 第２５２問（後書き）

どうも、作者です。

理音が作った腕輪の効果。

1．上空に召喚大会を映し出す。

2．操縦者の感情を召喚獣に反映させる。

3．いいところは『劇画』タッチ。（爆笑）

この腕輪は書き始めた時から召喚大会の時に出そうと思っていました。

3番目はアニメを見て追加しましたけど。（苦笑）

理音は敗者にムチを打つ。

そして、理音と明久の距離はみなさんにはどう映ったでしょうか？

# 第253問

「優子、工藤、俺は少しやる事があるから、しばらく怜生を預かっていてくれるか？」

「別にかまわないけど、また、おかしな事じゃないでしょうね？」

学園長室が微妙な空気になっているなか、理音はやる事があるため、優子と愛子に怜生の事を頼むと優子は理音がまた何かをするのではないかと疑いの視線を向けるが、

「別におかしな事をする気はない。お前ら、ばばあが戻ってくる間に出るぞ。それにここにいるよりは直接、『おめでとう』の一言でも行って来い」

「……行ってくる」

「翔子ちゃん、待ってください」

「待って。ウチも行くわ」

理音は学園長室から早く追い出したいのか、瑞希、美波、翔子を煽ると3人は直ぐに学園長室から出て行き、

「……あはは。また、吉井くんと坂本くん、痛い目に遭わないと良いけどね」

「……間違いなく遭うのじゃ」

愛子は3人の後ろ姿に苦笑いを浮かべ、秀吉は大きくため息を吐く。

「……理音、あんた、吉井くんと坂本くんをどうしたいの？」

「何をわけのわからない事を言っているんだ？　どうしたいも何も先を決めるのはあいつらだろ」

優子は理音の言葉にため息を吐くが理音は自分には関係ないと言いたげに言うと1人で学園長室を出て行こうとし、

「ちょっと、待ちなさい。流石にあんたも学園長先生もいない状況で一般生徒がここにいたらなんて言われるかわからないでしょ」

「そう思うなら、さっさと出ろ」

「そうだね。怜生くん、行こう」

「……はい」

優子は理音を引き留めると理音はため息を吐きながら、早く出て来いと言い愛子は怜生の手を引きながら廊下に出る。

「それでは理音、ワシとムッツリーニは店に戻っておるのじゃ」

「……そろそろ、明久と雄二の優勝を見てお客が押し寄せてくる」

「あぁ。俺も用が終わったら直ぐに戻る。たいした時間はかからないはずだからな」

全員が廊下に出ると秀吉と康太は先に教室に戻ると言うと理音も用事を終わらせたら直ぐに戻ると言うが、

「頼むのじゃ。須川とムッツリーニだけでは厨房もまわらなくなるじゃろうしのう。人手が不足して姫路が張り切ると大変な騒ぎになるのじゃ」

「……そうだな。念のためにこれを持って行くか？」

「……うむ。念のために預かっておくのじゃ。姫路が何かしたら、粉にしてふりかけておくのじゃ」

秀吉はお客が増える事で瑞希のおかしなやる気に火が点いてしまい、大惨事になる事を考えてしまったようで理音に早く用事を済ませるように言うと理音は以前、秀吉と康太に飲ませた事のある怪しげな錠剤を取り出すと秀吉は最悪の状況を考えたようで錠剤を受け取り、

「ムッツリーニ、お客が押し寄せる前に、下準備を済ませるのじゃ」

「……了解」

秀吉と康太は急いで教室に戻って行き、

「……姫路さんの料理ってどこまで酷いのよ？」

「何度も同じ事を言わせるな。あれは炭疽菌と同程度の兵器だ」

「えーと？　流石に言い過ぎじゃないかな？」

理音と秀吉のやり取りに優子は冗談にしても言いすぎだと言うが、

理音は表情を変える事なく瑞希の料理は兵器だと言い切ると愛子は苦笑いを浮かべるが、

「事実だ。悪いな。俺はそろそろ行く。怜生、２人の言う事をしっかりと聞くんだぞ」

「……はい」

理音は誇張していないと言い切り、怜生の頭を撫でた後、１人で歩きだす。

## 第２５３問（後書き）

どうも、作者です。

久しぶりに表れた瑞希の料理を無効化する謎の錠剤。（爆笑）

瑞希の料理より、作者的にはこっちの方が謎です。

そして、理音は1人でどこに行くんでしょうか？（悪笑）

# 第２５４問

「……酷い目にあったぜ」

「……吉井に坂本、バカのくせに調子に乗りやがって、絶対、思い知らせてやる」

常村と夏川は自分達の体が痛む理由がわからなく、体を押さえながら明久と雄二に仕返しを考えながら廊下を歩いていると、

「……変態コンビ、まだ、こりていないようだな」

理音は２人を見て汚物を見るように見下した口調で言う。

「げっ！？　ま、前田！？」

「な、何のようだよ？」

「……フィードバックを味あわせれば、少しはアキにやった事を反省するかとも思ったんだが無駄だったようだな」

常村と夏川は理音の登場に顔を引きつらせるが理音は２人に召喚獣から痛みをフィードバックをさせた意味に気付かないバカな２人組を見てため息を吐くと、

「あの痛みはてめぇのせいか！！」

「何しやがるんだよ！！」

2人は理音を怒鳴りつけるが、

「……決まってるだろ。仮にも召喚大会は文月学園の宣伝のためにやった事だ。それを他の人間が気づかなかったとは言え、卑怯な事までして勝とうとするのは最上級生で模範学生ではないといけない３－Ａの人間のやるべき事ではないと思ってな」

「て、てめえ、気づいてやがったのか？」

理音は冷たく感情のない瞳で、2人が明久にした反則を責めるように言うと夏川は驚きの声を上げて理音に聞き返す。

「……当たり前だ。操縦者に砂利で目つぶしなどぬるい」

「「おい！？」」

理音はその程度の反則は反則のうちに入らないと言うと理音の言葉にさすがに2人はツッコミを入れるが、

「……やるなら、これくらいはやらないといけないよな」

理音は邪悪な笑みを浮かべると3人の周りには召喚フィールドが広がって行く。

「て、てめえ、何をするつもりだ？」

「決まってるだろ。お仕置きだ。悪いな。バカの言葉でガラにもなく、俺もあいつもお前らが許せないらしい」

常村は理音が何をするか予想が付かないようで声をあげるが理音は

くすりと笑うと明久の言葉で自分達のなかに押し込めた何かに火が点いたと言うと、

「召喚獣を呼べ、俺がお前らの腐った性根を叩き直してやる」

2人に召喚獣を呼べと言うと理音の前の床には召喚獣を呼び出すワードを唱えていないにも関わらず、機械的な魔法陣が浮かび上がり、ドラゴンに乗り巨大なランスを手に持ち頭上に『∞（インフィニティ）』と表示された理音の召喚獣が現れる。

「そんな事を言われて、呼びだすバカがどこにいる」

「お前もあのバカと一緒かよ。天才様もあのバカに関わって！？」

「……次は当てる」

2人は理音の言う事など聞かないと言い、逃げだそうとするが2人の間を理音の召喚獣がすり抜けて行くとその後に起こる風で2人は体勢を崩し、床に尻餅を付き、

「な、何だ。これは？　召喚獣がなんで俺達に攻撃できるんだよ！？」

「し、知るか！？」

状況を理解しようとするが目の前で起きた事に頭が付いてこないようだが、

「早くしろ。流石に俺も直接攻撃は気が引ける」

理音は邪悪な笑みを浮かべて2人に召喚獣を呼ぶように言い、

「な、夏川」

「よ、呼ばないと殺される?」

「殺す?　死などに逃がしてやるわけがないだろ」

2人は怒らせては行けない理音の逆鱗に触れた事にそこでようやく気付いたようで顔を引きつらせるが理音は邪悪な笑みを浮かべながら殺す程度では済まさないと言い、フィードバックを強制的に付加された2人の召喚獣の四肢を理音の召喚獣は引き裂いて行き、夏川と常村はフィードバックで起こるあまりの激痛に叫び声を上げ、床を転がる。

# 第２５４問（後書き）

どうも、作者です。

最近、切実に感想が欲しいです。気が向いたら一言でも良いのでお願いします。（苦笑）

理音、ガラにもなく明久をバカにした事を怒る。
お仕置きは最初からここまでやるつもりでした。
そして、今回の理音の召喚獣はドラゴンナイト。理音の召喚獣が召喚されるたびに形を変えるのは理音の趣味です。理音はどこかで子供っぽいから次に召喚される時はまた違う形でしょう。

宣伝？
活動報告にバカとテストの召喚獣の二次創作の原案を書きました。
更新するかは反応しだいかな？

# 第２５５問

「……理音、あんた、何をしてきたのよ？」

「ん？　調整を失敗してな」

理音は常夏コンビに制裁を加えた後、怜生を迎えにＡクラスの教室に行くと理音の様子を見て優子はため息を吐くが理音は気にする事はないが、

「前田くん、何の調節を失敗したら、ドラゴンに乗った召喚獣が頭にのるのかな？」

「……本当よ。それに、どうして前にあたしと戦った時と召喚獣の装備が違うのよ」

「お兄ちゃん」

理音の頭の上にはドラゴンとセットの理音の召喚獣が静かにのっており、そんな理音の姿に愛子は苦笑いを浮かべると優子は以前に学園で見た理音の召喚獣の装備が違う事にもう１度、ため息を吐く隣りで怜生は理音の召喚獣を触りたいようで手を伸ばし、

「ん？　ドラゴンは何となくだが、優子の武器がランスだったからな。何となくそろえて見たんだが、気に入らないか？」

「そ、そうなんだ」

理音は頭から召喚獣を下ろすと怜生に召喚獣をあずけてから、装備

を変えた理由を優子の召喚獣と同じ武器にしたかったからと言い、その言葉に優子は顔を赤くして理音から目を逸らす。

「前田くん、君って、よくそんな恥ずかしい事を簡単に言えるよね」

「……理音、私も雄二と同じ装備が良い」

愛子は理音と優子の様子に2人をからかうように言うと翔子が雄二とお揃いの装備にして欲しいと言ってくるが、

「悪いな。俺以外の装備品をいじるのは不公平だとばばあに止められているんだ。装備品でもそれなりに戦術が変わってくるからな」

「……残念」

理音は試召戦争にも関わってくるため、自分以外の装備品は簡単に変えられないと答えると翔子は残念そうに肩を落とす。

「……霧島、良い事を教えてやる。定期テストを終えたら召喚獣の装備の変更を予定している。Fクラス程度の成績だと装備は貧層になるが、今の雄二ならある程度は融通が利くはずだ。その時にどうにかしてやる」

「……わかった。それまで、我慢する」

「あはは。前田くん、完璧に代表の手綱を握ってるよね。って言うか、前田くんって、どこか代表に甘いよね」

「……甘いと言うか、坂本くんが代表に攻撃を受けるのを楽しんでいるだけよ」

理音は翔子の様子にそれなりに罪悪感を感じたのか、召喚獣の装備の変更が予定されている事を教えると翔子は嬉しそうに笑い、その様子に愛子は笑いながら理音は翔子に甘いと言うと優子は雄二の不幸が理音は好きなんだとため息を吐くが、

「優子、勘違いするな。俺は雄二と霧島を心から応援しているぞ」

「……ありがとう。やっぱり、理音は良い人」

理音は柔らかい笑みを浮かべて2人で遊んでいるつもりはないと言い、翔子は理音の言葉が嬉しいそうに微笑む。

「……そのわりには坂本くんの生傷が増えている気がするんだけど」

「それは雄二が悪いからな。昔、何があったかは知らんが自分の心（おもい）にふたをしようとしてるのが、誰の目から見ても明らかだろ」

「まぁ、確かにそんな気はするけどね」

優子は理音の言葉と行動が合致しないとため息を吐くと、理音は雄二がヘタレだから悪いと言い切り、愛子は理音の言葉に苦笑いを浮かべると、

「大切なものがわかっているのに手を伸ばせない。大切であればあるほど失った時の喪失感は大きいからな。そこで躊躇する」

「それって、優子と付き合う前の前田くんと一緒？」

「類似点は多いな……悪いな。そろそろ、俺も戻らないといけない

時間だ。怜生、教室に戻るぞ」

「……はい」

理音は雄二の考えもわかると言うと愛子は少し前の理音と雄二の話が重なったようで理音に聞き返し、理音は苦笑いを浮かべた後、教室に戻ると言い、怜生を2人でAクラスを出て行く。

# 第２５５問（後書き）

どうも、作者です。

理音の召喚獣は学園だと素直に戻りません。（苦笑）
そして、理音の頭の上がお気に入り。（爆笑）

理音が雄二と翔子をどう思っているか少しだけ出しました。
この２人の応援は理音なりにしているんだと思います。

番宣？
番外編で書いていた『本と勇気と演劇部』の応用問題を活動報告に載せました。
楽しんでいただけると幸いです。

そして、作者は引き続き感想を求めています。やさしい方はお願いします。感想があれば、がんばれますので。（苦笑）

# 第256問

「リオ、お帰り。早速だけど、厨房を手伝って！！」

「吉井くん、人手が足りないんです。私も手伝います」

「待て。姫路、客はお前のチャイナ服姿を見にきている人間もいるんだ！！　厨房は須川とムッツリーニ、理音にどうにかして貰う。必要なら、俺と明久が手伝うから接客に集中してくれ」

理音と怜生がFクラスに戻ると厨房の入口で瑞希が厨房に入るのを明久と雄二が必死に抑えている。

「あぁ。迷惑をかけて悪かったな。瑞希、お前はホールに戻れ。アキ、お前もホールだ。召喚大会の優勝者を見に来た奴らも多いんだからな。雄二は少しの間、厨房を手伝ってくれ」

「おう。明久、そっちは任せるぞ」

「そ、そうだね。姫路さん、行くよ。お客さんを待たせるわけにはいかないからね」

理音は瑞希を厨房に入れるわけにはいかないため、明久に瑞希を押し付けると明久は瑞希を引きずってホールに戻って行き、

「……理音、助かった」

「まぁ、俺は他で用事を済ませてきた事で生じた事だしな。これくらいはどうにかする。それにあいつの料理で食中毒騒ぎは文月の評

判を下げる事になるからな。今は世間の評判では微妙なところだ。なるべく、評判を落とす事は避けたい」

雄二は瑞希がいなくなった事に安堵のため息を漏らすと理音は文月学園の評判を考えているようで眉1つ動かす事なく言い厨房の奥に入って行き、雄二は苦笑いを浮かべて理音の後を追いかけ厨房の仕事を始める。

「……しかし、お前、本当に今は経営者の考えだな」

「今は必要な事は全部して行かないといけないからな。悪いがここも落ち着いたら、また少し開ける事になる。清涼祭にかかった費用に小者が文月の予算からどれくらい使い込んだかを確認して、後夜祭の予算の見直しもしないといけないからな。最悪、後夜祭は縮小する可能性もあるしな」

雄二は理音と並び、厨房の仕事をやっている途中で理音が文月学園の経営に関わっている事を改めて思い知らされたようで苦笑いを浮かべると理音は厨房の仕事をしながらも次の事を考えており、

「……あぁ。頑張ってくれ」

「あぁ……変態コンビは最悪だが、最後の清涼祭だと言って頑張っていた先輩方もいるようだしな。それくらいはやるさ」

「……他人の事もあれだが、がきんちょと木下姉の事も気にかけてやれよ。お前にだって初めての学祭なんだろ」

雄二は理音を応援すると理音は竹原のせいで問題が起きた清涼祭を他の3年のためにも成功させてやりたいと言い、雄二は理音の変化

を感じ取っているようで苦笑いを浮かべたまま、理音にも清涼祭を楽しめと言う。

「……十分に楽しませて貰ってる」

「それなら、良いんだけどな」

理音は雄二の言葉にくすりと笑うと雄二は安心したのか口元を緩ませると、

「おし、一先ずは経営者様の手助けをするためにも教室の改修費の頭金でも稼ぐか？　明久、姫路、ゴマ団子、上がったぞ」

「うん。今、行くよ」

「土屋、坂本、ゴマ団子、3人前追加」

「……了解」

喫茶店の中は雄二やクラスメート達の威勢の良い声が響き始める。

# 第２５６問（後書き）

どうも、作者です。

今更ですが『強化合宿編』をどうしよう？

もともと清涼祭で終わる予定で書いていたため、明久の女装も雄二の愛の告白もつぶしちゃってるんですよね。（苦笑）

美春に明久は脅されるネタがないからな。まあ、別に脅迫される必要もないかも知れませんけどね。まあ、まだ、清涼祭が終わるのはもう少し時間がかかるし、如月グランドパークやプールもあるし、しばらく考えます。

# 第２５７問（前書き）

今回はあの人が登場します。（悪笑）

# 第257問

「できるかい？」

「まぁ、元々のプログラムが出来上がってるんだ。白金の腕輪にダウンロードすれば良いだけだからな。問題はないが流石にダウンロードにもそれなりに時間がかかるからな。デモンストレーションを終えてからだな」

「あぁ。それじゃあ、任せるよ。くそじゃり」

理音は学園長室に顔を出すと白金の腕輪のデモンストレーション前に学園長から理音の作った腕輪の『操縦者の感情を召喚獣に反映させる』能力を白金の腕輪に追加するように言われ、理音は特に難しい作業ではないため承諾するが直ぐにプログラムの書き換えは無理だと言い、学園長も承諾する。

「それじゃあ、俺は戻るぞ」

「あぁ。一応はデモンストレーションには主催者側で参加して貰うから覚えておきなよ」

「……あぁ」

「嫌そうな顔をするんじゃないよ。お前さんはここまでなると理解していてあの竹原を切ったんだろ。それなら、自分の役割くらい果たしなよ。それが社会のルールってヤツだよ」

理音は用件を済ませたため、教室に戻ろうとすると学園長は理音を

引き止めて新技術発表のデモンストレーションに参加するように言い、理音は顔を歪めると学園長は小さくため息を吐く。

「……わかってる。さっきの腕輪の能力の説明もあるしな」

「……そうかい。時間に遅れるんじゃないよ」

「あぁ」

理音は自分のやるべき事も理解しているため、ため息を吐くと学園長は文月学園に来たばかりの理音から変わってきている理音の様子に柔らかい笑みを浮かべ、理音は学園長の事など気にする事なく学園長室を出て行き、

（……面倒だな）

教室に戻る途中で当然のようにデモンストレーションに参加するのが面倒だとため息を吐くと、

「理音くん」

理音の名前を呼び制服を引っ張る人物がいる。

「ん？　……お久しぶりです。瑞穂さん」

理音は振り返るとその先には見た目は小学生の女の子だが瑞希の母親である『姫路瑞穂』が立っており、理音は瑞穂に頭を下げると、

「お久しぶりね。怜奈さんのお葬式以来ね。後は昨日は瑞希が迷惑をかけたみたいでゴメンなさいね」

「あの時はお世話になりました。瑞希にも怜生の相手をして貰っている事も多いですし、こちらの方こそ迷惑をかけています」

瑞穂は理音の様子ににっこりと笑うと会うのは理音と怜生の母親である『前田怜奈』の葬式以来と言い、理音はもう1度、頭を下げる。

「良いのよ。私もあの人の前田先生にはお世話になったんだからね」

「ありがとうございます……どうかしましたか？」

理音は瑞穂が自分の顔を覗き込んでいるのを見て首を傾げると、

「この間から、見ないうちに立派に成長したと思ってね。怜奈さんのお葬式の時はわがままで周りの事なんて気にしない男の子って感じだったのに」

「そうですか？　そこに関しては俺自身はそれほど変わったつもりもないんですが」

「そんな事はないわよ。やっぱり、男の子も良いわね。もう1人くらい産んでおくべきだったかしら、なんならあの人に頼んで今からでも。理音くん、男の子を産むのにはどうしたら良いの？」

「……高齢出産はお薦めしませんが」

瑞穂は理音が成長していると言い、嬉しそうに笑うと理音は瑞穂の言葉の意味がわからずに首を傾げるなか瑞穂は息子が欲しいと言い始め、理音は瑞穂のペースに頭を押さえる。

# 第２５７問（後書き）

どうも、作者です。

瑞希の母親『姫路瑞穂』の登場に理音は彼女のペースに引きずりこまれる。（爆笑）

一応、裏の設定として理音の父親が教師だった事は書かせてもらいましたが瑞希の両親は理音の父親の教え子とさせていただきました。

そして、理音の母親が死んだという事を理音に知らせたのは瑞希の父親とさせていただいてます。

まあ、瑞希は理音の父親と自分の両親が知り合いだと言う事は知らないでしょうけどね。（苦笑）

理音と瑞穂の会話は着地点があるのか書いててひどく不安ですが気にしない方向で。（爆笑）

## 第258問

「そうね。男の子は瑞希の子供に期待しましょう」

「……そうしてください」

瑞穂は理音の反応が面白いのかくすくすと笑うと理音は完全に瑞穂のペースに巻き込まれている事に疲れたようにため息を吐くと、

「それで、どうして瑞穂さんはお1人なんですか？　旦那さんはどうしたんですか？」

「あの人は瑞希のところに行ってるわよ。わたしと一緒だと警備の人に止められるから」

「……あぁ。なるほど」

瑞穂に1人でいる理由を聞くと瑞穂は苦笑いを浮かべ、理音は見た目が小学生の瑞穂を見て納得したようで頷く。

「理音くん、それは少し失礼じゃない？」

「すいません。本音が出ました」

瑞穂は理音の反応に頬を膨らませると理音は表情を変える事なく言い切ると、

「それで、瑞希の転校はどうなりそうですか？」

「心配？」

「まぁ、気にはなりますね」

瑞穂に瑞希の転校の事を聞く。

「そうね。クラスの設備も最悪だったし、あんな問題が起きた学校じゃ、親としては心配よね」

「そうでしょうね」

「でも、わたしもあの人も高校時代の友達や生活がどれだけ後の人生の中で大切な思い出になるか知ってるしね。理音くんのお父さんの前田先生がわたし達に教えてくれた事だから、瑞希にはこの学園に大切な友達にそれ以上に大切な男性（ひと）もいるみたいだし」

瑞穂は瑞希がどれほど文月学園を好きか理解しているようでくすりと笑うと、

「わかっているなら、転校騒ぎなど起こさないでください」

理音は瑞希が文月学園にいたい理由を知っているなら転校をさせると言わないで欲しいとため息を吐く。

「さっきも言ったでしょ。親としては心配なのよ。あの子は体も弱いしね。それに……」

「バカばかりですしね」

「そんなにはっきり言わなくても」

瑞穂はわかっていても親として譲れない事もあると苦笑いを浮かべて転校を考えた理由をクラスメートの成績だと言おうとするが、流石にはっきり言うのに気が引けたようで言葉を濁すが理音は表情を変える事なく、Fクラスはバカだと言い切り、瑞穂は困ったように笑うと、

「理音くんが居れば、瑞希の体調も見てくれるかな？　とは思ったけど、怜奈さんのお葬式に会った時の理音くんじゃ、瑞希の体調なんて気にしてもくれなさそうだったしね」

「……否定はできませんね」

この街に戻って来たばかりの理音では他人の事など気にかけるような事はしなかったでしょうと聞き、理音は表情を変える事なく頷く。

「理音くん、ごめんなさいね。理音くんは瑞希を許してないんでしょう？　あの時にあなたを見捨てた人達を許せないんでしょう？　瑞希もあなたにとってはその1人だから……」

「……どうでしょうね。自分には理解できません。あの日、壊れたのは俺自身のせいですし、壊れていない自分があの時の壊れた俺を客観的に見ていたら同じように見捨てたと思います。それに瑞希の場合はアキを見ていたから、それでも手を伸ばそうとしてくれました。たぶん、手をつかまなかったのは俺ですし、瑞希の手を引っ張り抑えつけたのは周りの人間ですから」

「……ありがとう。理音くん、あの子を責めないでくれて」

「……俺には責める資格もありませんよ。それに文月に来た時、ア

キと瑞希に救われた気もしますから、あの2人が俺に『おかえり』と言ってくれましたから」

瑞穂は理音の様子に昔、理音に起こった時の事を謝ると理音は悪いのは自分だと瑞穂の言葉を否定すると瑞穂は理音の言葉に礼を言い笑顔を見せると理音も瑞穂につられるように笑顔を見せた時、

「……理音」

理音の後ろから不機嫌そうな優子の声が聞こえる。

「ん？　優子？」

「理音くん、誰？　彼女？」

「えぇ。まぁ」

瑞穂は優子の登場に理音をからかうように聞くが理音がその程度の言葉で動揺する事はなく直ぐに頷くと、

「優子、瑞希の母親の瑞穂さんだ」

「瑞希ちゃんがお世話になっています」

理音は優子に瑞穂を紹介すると瑞穂は優子に向かい頭を下げるが、

「う、うそ？」

優子は見た目が小学生な瑞穂の様子に顔を引きつらせる。

「うーん。理音くん、この街に帰って来たばかりなのに、こんな可愛い彼女まで捕まえて、やっぱり、前田先生のお子さんね」

「……その評価は嬉しくないんですが」

瑞穂は顔を引きつらせている優子を気にする事なく理音をからかうように笑い、理音はため息を吐くと、

「それじゃあ、そろそろ、あの人との待ち合わせの時間だから、わたしは失礼するわね」

「はい」

瑞穂は理音の表情にくすくすと笑うと旦那さんとの待ち合わせ時間だから行くと言い、理音は瑞穂の背中を見送るが、

「……り、理音、あの人って本当に姫路さんのお母さんなの？」

優子は聞かされた事実を信じられないようで顔を引きつらせたまま理音に聞き返す。

# 第259問

「……お兄ちゃん」

「理音、お疲れさま」

「あぁ……優子、お前はクラスの打ち上げは良いのか？」

理音は白金の腕輪のデモンストレーションを終えてから明久と雄二から1時的に白金の腕輪を預かり、『感情反映能力』のダウンロードを始めていると学園長の許可を得てきたようで怜生と優子が学園長室の奥の部屋に入ってくる。

「まぁ、色々とあってね」

「工藤か？」

「……うん」

優子は学園祭のクラスでの打ち上げに参加できなくなったと苦笑いを浮かべると理音は愛子が自分の元へ行けと言ったと思ったようで聞き返すと優子は頷き、

「で、怜生くんをFクラスの打ち上げに混ぜてるとおかしな事になりそうだから連れてきたのよ」

「そうか……俺はこれがある程度進んだら、打ち上げに参加するつもりなんだが」

怜生の教育にはFクラスはあまり良くないと思っているようで怜生を連れてきたと言うが理音は気にする事なく、ダウンロードに手が要らなくなったら怜生を連れて打ち上げに行くと言う。

「そうなんだ？　それなら、あたしはクラスの打ち上げに戻ろうかな？」

「なんだ？　こないのか？」

優子は理音がFクラスの打ち上げに出ると聞き、自分のクラスの打ち上げに出ると部屋を出て行こうとすると理音は優子にFクラスの打ち上げに参加しないかと聞く。

「あたしがFクラスの打ち上げに出るわけには行かないでしょ？」

「気にするな。女が増える事にうちのバカどもは何も言わない。どうせ、しばらくしたら、霧島も合流するだろ」

「……確かに合流しそうね」

優子はFクラスの打ち上げに自分は参加できないとため息を吐くが理音は気にする必要はないと言うと優子は理音の言った通りになると思ったようで苦笑いを浮かべると、

「ん？　優子、Aクラスはどこで打ち上げをするつもりなんだ？」

「それがまだ決まってないのよ。あたし達って割と勉強ばかりしてる人間が多いでしょ？　良さそうなところはもう抑えられてるし、場所もなかなか決まらなくてまだ教室で話し合いしてるわよ」

「それなら……工藤か？」

「前田くん、どうしたの？」

理音はＡクラスの打ち上げの場所を優子に聞くと遊び慣れていないＡクラスは未だに打ち上げの場所が決まらずに教室に残っていると言い、理音は携帯電話を取り出すと愛子に電話をかける。

「ん？　優子からＡクラスは打ち上げの場所も決まってないと聞いたからな」

「そうなんだよ。良い場所ある？」

「いや、霧島もいるし、Ｆクラスは近くの公園で飲み物やお菓子を買って始めているぞ。と伝えてくれ」

愛子は理音に打ち上げに適した場所はないかと聞くと理音はＦクラスが打ち上げをやっている公園を教える。

「公園か？　確かにそう言うのも楽しいかも、それにそこでＡもＦも一緒に打ち上げしたら、優子は前田くんと一緒に言われるしね」

「まぁ、そう言う事だ」

愛子は理音の意図に気づき、クスクスと笑うが理音は隠す気もないため頷き、

「そうだね。確かにＦクラスと一緒だと怜生くんとも遊べるし、候補に入れてみるよ」

「あぁ。先に行っているぞ」

「だから、どうなるかわからないって」

愛子はクラスメートに提案してみると言うと理音は公園で待っていると言い、愛子は理音の言葉に苦笑いを浮かべる。

「……もう良いな。怜生、優子、行くぞ」

「……はい」

「……同じ場所で打ち上げ？　騒がしくなりそうね」

理音は愛子との電話を切ると怜生と優子に打ち上げに行くと言い、優子は公園でおかしな騒ぎが起きる事が目に浮かんだようでため息を吐く。

## 第２５９問（後書き）

どうも、作者です。

活動報告にまた思いつきでバカテスの二次創作の思いつきの原案を書きました。興味がある方は覗いてみてください。

# 第２６０問

「差し入れだ」

「ん？　すまないな」

理音はＦクラスが打ち上げを始めている公園に来る途中でコンビニにより、ジュースなどを買ってくると雄二はそれを受け取る。

「坂本くん、何を見てるの？」

「あぁ。昨日と今日の収支報告だ。２日で稼ぐ額としては上出来かな。ちゃぶ台と畳にくらいには戻せそうだ」

優子は明久、雄二、美波の３人が集まって何かを覗き込んでいるため、何をしているかと聞くと雄二は清涼祭の売上を確認していると言い、

「リオ、ボクらの教室の改修費用って少し出るんだよね？」

「あぁ。畳とちゃぶ台をそっちで買って貰えるなら、ひび割れた窓や壁、後はエアコンくらいは設置しないと夏は厳しいよな」

「エアコンまでつけれるのかよ」

「まぁ、Ｄより下は付いてないからな。ある程度、性能に差はつけるが仮にも教育機関なんだ。最低ランクでも設備は用意しないといけないだろ」

明久は理音が経営側に回った事で設備の改修に予算が出ると言う事を思い出し、理音に確認すると理音の考えは雄二の予想以上だったようで驚きの声をあげると、

「これで姫路さんの転校も防げるかな？」

「そうね。きっと大丈夫よ」

明久は設備を直せる事で瑞希の転校を防げるかと言うと美波は明久の言葉に賛成する。

「……理音、姫路さんのお母さんが言ってた事、教えてあげないの？」

「ん？　そう言うのは瑞希の口から聞いた方が良いだろ」

優子は理音に瑞穂との話の内容を聞いているようで理音を肘で突き、理音は柔らかい笑みを浮かべて自分が言うより瑞希の口から直接、聞いた方が良いと言い、

「……それもそうね」

優子は理音の言葉に納得したようで頷いた時、

「すいません。遅くなりました」

「あ、瑞希。どうだった？」

瑞希は両親と転校の話をしていたようで遅れて公園に現れ、美波は結果が気になるようで直ぐに瑞希の転校の件を聞くと、

「はい。お父さんもわかってくれました。美波ちゃんの皆さんの協力のおかげです」

瑞希は笑顔で転校しなくて済んだと言い、

「……良かった」

「そこで1人で喜んでないで声をかけてきたらどうだ?」

「そうね」

明久は瑞希の転校が阻止できた事に安堵のため息を漏らす姿に理音は瑞希の元に行けと明久の背中を押し、優子も明久に瑞希のところに行けと言うが、

「で、でも、今は美波と話してるしさ」

明久は恥ずかしいのか今は行きずらいと逃げようとする。

「行け。少なくとも瑞希の転校を防いだ1番の功労者はお前だ」

「ボクが? 違うよ。リオだって、美波だって」

「俺は瑞希の転校意外で動いてたからな。結果的に瑞希の転校を防ぐために動いただけだ」

「そうよ。理音は腕輪の事しかしてないんだから、早く、行ってきなさいよ」

理音は逃げようとする明久の首をつかむと再度、明久に瑞希の元に行くように言うが、明久は1人で行くのに照れているようであり、

「……アキ兄ちゃん、みずきお姉ちゃんにおめでとうって言いに行きましょう」

「そ、そうだね」

怜生は気を使ったようで明久に一緒に瑞希のところに行こうと言うと明久は怜生の手を取り、2人で瑞希の元に歩きだして行き、

「……相変わらず、怜生くんは良い子じゃのう」

「……そうだな」

秀吉は怜生の様子を見て、眉間にしわを寄せながら理音と優子に声をかけてくる。

# 第261問

「……もう少し、わがままを言ってくれても良いのにね」

「そうだな」

優子は周りに気を使い過ぎる怜生を心配しているようで表情を険しくして言い、理音が頷いた時、

「姫路さん、大丈夫!?」

「お姉ちゃん?」

「あ、はい。大丈夫れす……」

瑞希がバランスを崩し、明久と怜生は瑞希に駆け寄るが瑞希の言葉はどこかおかしく、

「……理音、あんた、買い物してきた時、お酒とか買ってないわよね?」

「ん?　俺はこれしか買ってきてないぞ」

「あんたは何を考えてるのよ!!」

「そうなのりゃ」

優子は理音に疑いの視線を向けるが理音は瑞希が飲むような酒は買ってきていないと言うと懐から『大吟醸鬼虐殺』とラベルの付いた

日本酒を取り出し、優子と秀吉は理音につかみかかろうとするが、

「そうなのりゃ？」

「……先に酒を混ぜてたヤツがいるんだろうな」

理音と優子より先に打ち上げに参加していた秀吉も気づかない間にそれなりに酒を飲んでいたようで呂律が回らなくなってきており、理音と優子は今の状況を理解すると、

「ど、どうするのよ！？　制服でお酒を飲んでるなんてバレたら停学よ！！」

「まぁ、気にするな。高校生活に飲酒は付き物と所長も教授も言っていたしな」

『ま、前田、こ、この酒は？』

『ま、幻の鬼虐殺だと！？』

優子は理音につかみかかり叫ぶが理音は気にする事なく、それどころか理音が持ってきた日本酒に数名のクラスメートが食いついてきている。

「ちょ、ちょっと、どうして、こんな反応なのよ！？」

「まぁ、そう言うもんだ。優子もこれでも飲んで落ち着け」

「……な、何よ。これ！？　……り、理音、あんたは何をするのよ！！」

「2度も同じ手に引っ掛かるのはどうかと思うんだが……熱燗もいるよな？」

『『『『当然だ！！』』』』

優子は自分の考えがおかしいわけはないと叫ぶと理音は紙コップに注いだ日本酒を優子の前に差し出し、優子は日本酒を飲んでしまい声をあげるが理音は気にする事なく、懐からガスコンロを取り出し、日本酒を冷で飲みながら熱燗の準備を始め出した時、

「あはは。何か、凄い事になってるね」

「……雄二、待った？」

「しょ、翔子！？　お前がなんでここに！？」

愛子と翔子を先頭にしてAクラスが公園に現れる。

「ん？　遅かったな」

「り、理音、これはどう言う事だ！？」

「前田君が打ち上げの場所が決まらないなら、Fと合同でどうだと提案してくれてね。恥ずかしながら、僕達はあまりなれてないから、Fクラスに便乗させて貰おうと思ってね」

理音はAクラスの生徒達に遅かったなと言い、雄二は理音にこの状況を問い詰めようとすると利光が自分達がこの公園にきた理由を話すと、

『『Aクラスと合同打ち上げだと！！』』

『前田、よくやった！！』

Fクラスの生徒から理音を褒め称える声が響くが、

「はしゃぎすぎるな。前のめりになると上手く行くものも行かなくなるぞ。良いか、こう言う時はお互いの足を引っ張ろうとするな。まずは男友達としてでも良いから好印象を与えるんだ」

『そ、そうか。それなら』

理音はクラスメートにアドバイスを始めだし、FクラスだけではなくくAクラスの男子生徒もやはり彼女は欲しいようで彼女持ちの理音を囲うように集まり始め、

「……こんなんで良いのかしら？」

「良いんじゃない？　前田くんもみんなも楽しそうだし」

優子はため息を吐くと愛子は楽しまなきゃ損だと言いたげに言うと、

「前田くん、確かにそれもあるけど、女の子ってのはさ」

「ん？　どうした、工藤……優子、愛してる？」

「へ？　い、いきなり何を言い出すのよ！？」

「そう。そう言う風に言って欲しい時もある」

愛子は理音とともに優子をいじりだし、ＦとＡクラス合同の打ち上げの時間は過ぎて行く。

# 第２６１問（後書き）

どうも、作者です。

一先ず、清涼祭編は終了でしょうか？（苦笑）
明久の瑞希と美波のイベントは明久にまかせて理音は酒宴。（爆笑）
そして、始まる理音と愛子の恋愛講座？　科学的に乙女チックな講座でしょう？
まあ、どうせ、Ｆクラスに春が来ることはないので気にしない方向で
そして、次からは如月グランドパーク？
ではなく、理音と明久のお墓参りです。

# 第262問

「……お兄ちゃん、アキお兄ちゃん、遅いですね」

「そうだな。どうせ、アキの事だ。俺との約束を忘れて夜中までゲームでもしていたんだろ」

理音と怜生は明久と約束した両親の墓参りに行くために待ち合わせをしている駅前で明久を待っているが明久は待ち合わせの時間になっても現れる事はなく、

「……で、お前らは何がしたいんだ？」

「お姉ちゃん、瑞希お姉ちゃん、おはようございます」

「べ、別にどうでも良いでしょ。ぐ、偶然よ。ねぇ、姫路さん」

「そうです。偶然です！！」

理音は先ほどから一定の距離を取ってこちらをちらちらと見ている優子と瑞希に声をかけると2人は理音に気づかれているとは思っていなかったようで慌てて偶然だと言うが、

「この間、俺とアキの話を立ち聞きしていたんだ。その言葉を信じれると思うか？」

「「……」」

理音は2人の言葉は信じられないと言うと優子と瑞希は理音から視

線を逸らす。

「……まったく、俺に墓参りに行こうと言ったアキは遅刻に興味本位で人の休日に後を付いて回ろうとする。お前らは常識と言う言葉を知っているか？」

「し、知ってるわよ。良いでしょ。あたしだって、理音と怜生くんのご両親に挨拶くらいしたいじゃない」

「そ、そうですよ。優子ちゃんにはその権利があると思います」

理音は2人の常識外れの行動にため息を吐くと優子は亡くなった理音の両親に挨拶をしたいと言い、瑞希は優子にはその権利があると言うと、

「……仮に優子はそれで納得するとして、瑞希、お前は全く関係ないだろ」

「そ、それは」

理音はため気を吐きながら瑞希に言うと瑞希は慌てて何かを考えようとするが、すぐにいい考えなど浮かぶわけもなく、

「あう……」

「……お兄ちゃん、瑞希お姉ちゃんをいじめちゃダメです」

目を伏せると怜生が理音に瑞希をいじめるなと言う。

「冗談だ。別に見られて困るようなものはない。だいたい、俺は墓

参りなどの必要性がわからん。どうして、お前らが付いてきたいかも、アキがとうさんとあの人に謝りたいと言う理由もな」

「理音？」

理音は怜生の言葉に別に瑞希をいじめているつもりはないと言うと優子は理音が母親の事を『あの人』と言った事に違和感を覚えたようで理音の名前を呼ぶと、

「どうかしたか？」

「う、うん。何でもないわ」

理音はいつも通りの無表情で優子に聞き返すと優子は何となくだがこれ以上の事を聞いてはいけないと思ったようで首を振り、

「前田くん、明久くん、遅いですね。電話でもしてみます」

瑞希は理音が『自分は母親に売られた』と言っていた事を思い出したようで話を変えようと明久が待ち合わせ時間を過ぎてもこの場所にこないため、電話をかけようと携帯電話を取り出す。

「そうだな。瑞希、頼めるか？　まぁ、アキの場合、携帯も止められている可能性もあるから繋がらないかも知れないがな」

「流石にそれはないですよ」

理音は瑞希に明久への電話を頼むと理音の言葉に瑞希は苦笑いを浮かべるが、

「……秀吉から聞いた吉井くんの話から考えると否定できないのが、痛いわね」

「そ、そんな事はないですよ」

優子は明久なら電話を止められている可能性もあると言うと瑞希は首を振りながらも少しだけ不安になって来たのか直ぐに明久に電話をかける。

# 第２６３問

「姫路さん？　……どうかしたの？　何か約束してたっけ？　無理だよ。ボクは姫路さんと美波にクレープを奢ったら、仕送りまで生きていけなくなるから」

「あの。明久くん、今日って、前田くんと約束していたんじゃないんですか？」

「……リオと約束？　何かしてたっけ？　……そうだ！？　今日はおじさんとおばさんのお墓参りだ！？　姫路さん、ゴメン！！　リオに直ぐ行くって伝えて！！　いだっ！？」

「吉井くん、落ち着いてくださ……切れました」

瑞希は明久に電話をかけると明久は今の今まで寝ていたようで電話の先からは明久は寝ボケているのか電話の先で首を傾げているが瑞希が理音と約束があったんじゃないかと言うと明久は寝起きで動いていない頭をフル起動させて理音との約束を思い出し慌てて準備を始め出したようで慌てて動き始め、電話の先からは明久の騒がしい声が聞こえるが突如として電話が切れてしまい、

「……明久くん、今、起きたみたいです」

「まぁ、予想通りだな」

瑞希は苦笑いを浮かべながら、明久は今、起きたばかりだと言うと理音は明久の遅刻を予想していたため、表情を変える事なく言うと、

「……わかってるなら、ここに来る前に理音が電話すれば良かったでしょ」

「た、確かにそうですね」

優子はため息を吐き、瑞希は優子の言葉に苦笑いを浮かべたまま頷く。

「アキがくるまで２０分くらいか？　どこか、店にでも入るか？」

「そこまでの時間はないんじゃないの。それに、あんた、お墓参りに行くのに手ぶらで行く気？」

「ん？　何かいるのか？」

理音は明久がくるまでの時間を喫茶店で潰そうとするが優子はそんな時間はないと言うと優子は理音が手ぶらなため、お墓に供える物を買いに行こうと言うが理音は首を傾げ、

「そうですね。お供え物は最近は持ち帰るように言われますけど、やっぱり持って行った方が良いと思いますよ」

「そんなものか？」

「そうよ。ご両親が生前好きだったものとか、何かないの？」

優子と瑞希は理音に両親の好きだったものはないかと聞くと、

「……これか？」

「……あんたはなんで、そんなものを持ち歩いてるのよ？」

理音は懐から『大吟醸鬼虐殺』を取り出し、優子は先日のＦとＡクラスの打ち上げの惨状を思い出したようでこめかみにはぴくぴくと青筋が浮かべる。

「ま、前田くん、他にないですか？　流石に私達は学生ですし、お酒を持ち歩くのは」

「そうか？　とうさんが好きだったものと言ったらこれしか思い浮かばないんだが」

「……お兄ちゃん」

瑞希は優子の様子に苦笑いを浮かべると理音に他のものはないかと聞くと理音は他には何も思い浮かばないと首を傾げると怜生が理音のズボンを引っ張ると、

「どうした？」

「……おかあさんがおとうさんはおにいちゃんと一緒にあそこのおかしを食べるのが好きだったって言ってました。おかあさんもあそこのおかしは大好きでした」

「……」

理音が怜生に聞き返すと怜生は母親から父親の話を聞いていたようで近くにある和菓子屋を指差して言い、理音は怜生の言葉に小さく顔が歪むが、

「そうなんだ。理音、それで良いわね？」

「ん？　あぁ。元々、俺は何も買うつもりはなかったんだ。反対する理由はない」

「それなら、行きましょう」

優子と瑞希は理音の表情の変化に気づかずに怜生の手を引いて和菓子屋に歩いて行き、理音は3人の後ろを付いて行く。

# 第２６４問

「……」

「理音？」

「ん？　どうかしたか？」

理音は瑞希が怜生の手を引いて和菓子を選んでいるのを眉間にしわを寄せているのに優子が理音に声をかけると理音は直ぐに表情を元に戻すと、

「いや、何か、ちょっとおかしかったから、何かあったのかな？と思って」

優子は心配そうに理音の顔を覗き込む。

「……たいした事ではない。俺はあの人の事を何も知らなんじゃないかと思っただけだ」

「あの人？　って理音のお母さんの事だよね？」

「あぁ」

理音は無表情のまま、優子の質問に答えると優子は理音が母親の事を『あの人』と呼んでいる事が気になっているようで理音に聞くと理音は頷き、

「……ねえ。何で、お母さんの事をそんな風に呼ぶの？」

「……何故？　その質問の意味がわからないんだが？」

優子は理音が母親を『あの人』と呼ぶ事に以前に理音が言っていた『自分は壊れている』と言う理由があると感じたようで理音に聞くが理音にはその質問の意味がわからないようで首を傾げると、

「……やっぱり、家族なんだしさ。そんな言い方はやめなよ。理音は気づいてたかわからないけど、理音がお母さんの事をあの人って言う度に怜生くんが悲しそうな顔をするのよ」

「……悪いな。俺にとっての家族は怜生ととうさんだけだ。あの人と俺はあの人にとっても俺にとっても『家族ではない』」

「……ねえ。理音、あんたとお母さんに何が有ったの？」

「優子には……」

「関係ないなんて言わないでよ。あたしはあんたの彼女なの。あんたは1人でなんでもできるし、こんな時じゃないと彼女らしい事なんてできないんだから、話くらい聞きなさい……怜生くん？　姫路さん？」

優子は怜生の表情を見ていたようで、理音に母親と呼ぶように言うがその優子の言葉に理音の視線は冷たく凍り付き、理音は感情などなく淡々とした口調で『母親は家族ではない』と言い切ると優子はそんな理音の変わりように一瞬、怯むが理音の手をつかみまっすぐと彼の瞳を見詰めて聞くと、理音は優子には関係ないと言おうとするが優子は理音の言葉を遮り、理音の彼女として理音の力になりたいと言おうとするが、自分と理音の事を直視している怜生と瑞希に

気づき、一気に顔を真っ赤にする。

「れ、怜生くん、お兄ちゃんと優子ちゃんの邪魔をしちゃいけないですよ。お姉ちゃんとお金払ってきましょうね」

「……はい」

瑞希は2人の事が気になりながらも見つかってしまったため、バツが悪そうな表情をした後、怜生の手を引きずって行き、

「ちょ、ちょっと、姫路さん、い、いつから見てたのよ!?」

「見てません!! 私も怜生くんも何も見てません!! 優子ちゃんが『何かあったのかな?』って言って、前田くんの顔を覗き込んだところなんて見てないです!! ちょっとはここでキスしちゃうのかな? やっぱり、そう言うのを見ると彼氏彼女の関係って良いなとかは思ってません!!」

「最初からじゃないの!?」

優子は顔を真っ赤にしたまま瑞希に聞くと瑞希は見ていて彼女の頭の中でいろいろな妄想が膨らんだようで顔を真っ赤にして何も見ていないと言うが、確実から最初から見ており、優子は顔を真っ赤にしたまま瑞希を怒鳴りつける始めると、

「怜生、それで良いのか?」

「……はい。これが良いです」

理音は怜生の持っている和菓子を見て怜生に聞くと怜生は頷き、2

人をそのままにして理音と怜生は会計を済ませる。

## 第２６４問（後書き）

どうも、作者です。

優子の勇気。瑞希と怜生の手によって砕かれる。（爆笑）

今回の優子の言葉で理音は何を思うんでしょうか？

お知らせが２つ。

１つ目、活動報告にバカとテストと召喚獣の二次創作の原案を１本書かせていただきました。今度の主人公は『教師』です。

２つ目、以前、活動報告に書かせていただいた『バカとテストと勤労少年』を投稿しました。理音、伐、深秋、優菜達ともどもよろしくお願いします。

# 第２６５問

「ご、ごめん。リオ、怜生くん……あれ？　何で姫路さんと木下さんがいるの？」

明久は起きてから走って待ち合わせの場所まできたようで息を切らして理音と怜生に謝った後。優子と瑞希がいる事に首を傾げ、

「……この間に盗み聞きしていて気になったんだろ。瑞希から電話が有ったんだ。普通は予想が付くだろ」

「そ、そうだよね」

理音は明久の言葉にため息を吐くと明久は理音の家で墓参りに行くと約束した時の事を思い出して頷き、優子と瑞希はバツが悪そうに視線を泳がせると、

「まぁ、帰る気もないだろうしな。さっさと行くぞ。ただでさえ、予定より遅れてるんだしな」

「う、うん。そうだね」

「優子、瑞希、行くぞ」

理音は怜生の手を引いて歩き始めると3人は理音と怜生の後を追いかけて歩き出す。

「あっ！？　リオ、お供え物、あそこの和菓子にしたんだ。おじさんもおばさんも好きだったよね」

「……そうらしいな」

明久は理音が持っている和菓子を見て、理音と怜生の両親が好きだったと言うが理音は覚えていないため、小さく頷くと、

「リオ、どうかしたの？」

「いや、俺はその事を覚えていなかった」

「そうなんだ」

明久は理音の様子に首をかしげ、理音は和菓子を選んだのは自分ではないと首を振り、明久はそんな理音の表情に一瞬、顔を歪ませるが、

「リオも好きだったよね。おじさんが遊んでよく買ってきてくれてさ」

「……そうだったか？」

「覚えてない？　リオは昔から甘いもの好きだったろ。ボクはこれが原因なんだと思うけど」

「……そうか？」

明久は理音の甘いモノ好きの原点がここにあると笑うと理音は首を傾げる。

「お墓参りが終わったらみんなで食べようよ」

「それはお前がカロリーを欲しいだけじゃないのか？」

「そ、そんな事はないよ」

明久は首を傾げている理音を見て、墓参りの後に食べようと言うと理音は明久の笑顔にくすりと笑い言うと明久は理音から目を逸らすと、

「そうだな。和菓子は日本に帰ってきてからは食べてないな。あっちで食ったものはあまり美味いとも感じなかったしな。洋菓子の方が多かったな。こっちに戻ってきてからも葉月もいるから、パフェやケーキが多い」

「葉月ちゃんと？」

「……優子、なぜ、俺の肩をつかむ。俺はロリコンじゃないぞ。タイムサービスに怜生を1人で置いておくわけにはいかないからな。商店街で会った時に怜生の相手を頼むからその礼だ」

「……」

理音は留学している間は和菓子はあまり食べていなかったようでその間に洋菓子の方が好きになったかもしれないと言うと優子は理音の言葉が何か気に入らなかったようで理音の肩をつかむが理音はため息を吐きながら優子の手を外し、葉月に怜生が世話になっている礼だと言うのを明久はそれなら自分が怜生の面倒を見ると言いたげに見ており、

「……そして、前田くんは美波ちゃんに怒られるんですね」

「……あぁ。夕飯前にそんなものを食べさせるなとな」

瑞希は美波からその話を聞いているようで苦笑いを浮かべると理音は美波に怒られる理由がよくわかっていないようで首を傾げ、

「……理音、あんた、怜生くんにだけ甘いんじゃないくて小さい子全般に甘いの？」

「それに関しては良くわからん。現状で言えばデータが不足している」

優子は理音が子供に甘いと思ったようでため息を吐くが理音は意味がわからないようで首を傾げている。

# 第２６５問（後書き）

どうも、作者です。

理音と優子より、美波に怒られている理音は子供の教育方針で怒られる旦那に見えます。
まあ、美波は秀吉と一緒に怜生の世話に協力してくれると言ってますしね。
美波は姉として葉月や怜生を甘やかしすぎるなと言いますが理音は甘い。
何と言うかこの２人はこの２人で面白い気もしますね。（苦笑）

そして、理音が甘いものが好きな理由は心の片隅に幸せだった過去があるから？
まあ、本人は忘れてますけどね。（苦笑）

# 第２６６問

「……怒られるかな？」

「怒られるでしょうね」

理音達は理音と怜生の両親の墓前に着くと墓参りの作法など知らない理音に優子と瑞希で作法を教えたりしながら一通り、お参りを済ませて帰る前に明久は理音が持ってきた『大吟醸鬼虐殺』を手に苦笑いを浮かべると優子は以前に理音から聞いた事のある『理音の父親と理音、明久３人の約束』を思い出したようでため息を吐くが、

「まぁ、せっかくだしさ。まだ、おじさんとの約束にはちょっと早いかも知れないけど、せっかくきて、こんなに良いものがあるんだから」

明久は苦笑いを浮かべながらも『大吟醸鬼虐殺』の栓を開けると理音と怜生の両親の墓石にその酒をかけ、

「おじさん、おばさん、まだ約束の日よりはちょっと早いんから、ボクもリオも付き合えなくて悪いんだけどね。結構、良いお酒みたいだから、楽しんでよ」

「ん？　なんだ？　アキは飲まないのか？」

「リオ、あんたは何をやってるのよ！？」

まだ二十歳になっていないため、あの日の約束にはまだ早いと謝るが理音は残った酒を紙コップに注ぎはじめ、優子に止められる。

「……まったく、もったいないな」

「えーと、前田くん、そう言う問題じゃないと思いますよ」

理音は優子に止められてため息を吐くと瑞希は苦笑いを浮かべ、

（……おじさん、おばさん、リオはまたあの頃見たいに笑えてるよ。だから、心配しないで、ボクだけじゃ、リオの笑顔を守れるかわからないけど、今は木下さんがいてくれるし、姫路さんや美波、秀吉、ムッツリーニ、霧島さん、ついでに雄二もいるし、リオも怜生くんも1人にしないから、だから、リオと怜生くんの事を2人で見守っててください）

明久は自分の両親の墓前でも周りの事を気にしない理音を横目に2人に理音の事を報告すると、

「さてと、こんな事をやったってばれる前に帰ろうか？」

「……そうね。お墓にお酒をかけるのってあんまり良くない事って聞いた事もあるしね」

ばれる前に逃げようと言うと優子は止めなかったため、頭を押さえて明久の言葉に頷き、

「理音、姫路さん、帰るわよ。片づけて」

「は、はい。わかりました」

「……面倒だな。とりあえず、これは返してこないといけないのか

？」

「そうよ」

遊んでいる理音と瑞希に声をかけて後片づけを始め、理音はブツブツと言いながらも水おけを返しに行く。

「吉井くん、ずいぶんと長い間、手を合わせてたけど」

「うん。まぁ、いろいろとね。やっぱり、ボクも4年ぶりだしさ。いろいろと報告する事があるわけだよ。そう言う木下さんこそ、結構、長かったでしょ」

「あ、あたしはやっぱり、報告しないといけない事もあると思うし、理音はそう言うの報告してくれないだろうし」

「まぁ、たぶん、今だに何のためにお墓参りに来たかもわかってないだろうしね」

理音がいなくなったのを見て、優子は明久に理音と怜生の両親に何を話してたかと聞くと明久は口に出すのが照れくさいようで苦笑いを浮かべると優子にも同じ内容を聞き返すと優子は理音は2人に自分が彼女ですと言う事を報告していないと思ったいるため、報告をしたと言うと明久は優子の意見に納得したようで頷き、

「木下さん、リオの事をお願いね」

「ど、どうしたのよ。いきなり？」

真剣な表情で優子に理音の事を頼むと頭を下げ、優子は明久の突然

の行動に驚きの声をあげるが、

「たぶん、ボクも姫路さんもリオの過去を知ってるから、どこかであいつの背中を押す事も手を取る事もできない時がくると思うんだ。その時、リオを支える事ができるのは木下さんだけだと思うから、リオをよろしくお願いします」

「わ、わかったわ」

明久は顔をあげると優子から視線を逸らす事なく優子に理音の事を頼み、優子はその言葉に慌てて頷くと、

「で、でも、きっとあたしだけじゃ、無理な時もあると思うから、その時は吉井くん、助けてよ」

「もちろん」

明久に自分からも理音の事で何かあったら助けて欲しいと言い返し、その言葉に明久は迷う事なく頷く。

# 第２６７問（前書き）

どうも、作者です。

今回から『本と勇気と演劇部』の主人公『本宮葵』が合流します。
まあ、今回は名前だけですけど、葵の物語は番外編でお楽しみください。

# 第267問

「……ん？」

「理音、どうかしたの？」

「……電話だ」

墓参りを終えて5人で帰る途中に理音の携帯電話が鳴り、

「……何故、俺がそんな事をしないといけない？　勝手に決めるな……切りやがった」

「リオ、誰からの電話？」

理音は電話に出ると電話の相手は一方的に話を終わらせると電話を切り、理音は眉間にしわを寄せると明久は理音に電話の相手の事を聞くと、

「あぁ。如月グループの広報担当のヤツだ。清涼祭の騒ぎでモデルが付かないとか何とか言い始めてな。ウェディング体験のモデルになる人間を紹介しろとな。男女で2組紹介しろとな」

「それって召喚大会の賞品になってたものよね？　吉井くん、そう言えば、あのチケットってどうなったの？」

理音は電話の内容を話し、優子は理音の話から召喚大会優勝者である明久に如月グランドパークのプレオープンのプレミアムペアチケットの行方を聞き、

「あれ？　あれは必要としている人にあげたよ」

「そうなんですか。少しだけ、明久くんが誘ってくれる事を期待したんですど」

「……瑞希お姉ちゃん、大丈夫ですか？」

「うん。大丈夫だよ。怜生くん」

明久は人にあげたと言うと瑞希は残念そうに言うと怜生は心配そうに瑞希の顔をのぞき込み、瑞希は笑顔を見せて大丈夫だと言う。

「霧島か」

「リオ、よくわかるね」

「他にいないでしょ」

理音は瑞希の様子など気にする事なく明久がチケットをあげた相手を翔子だと言うと明久は驚いたような表情をするが優子は他にいないと言い、

「それで、リオ、さっきのモデルってどう言う事？」

「ん？　モデルが捕まらないならしくてな。スタッフでどうにかしようと思ったらしいんだが、見栄えの良い女性スタッフの多くは結婚前にウェディングドレスを着ると婚期が遅れるとか言って誰も着たがらないそうだ。男性スタッフも見栄えが悪いだ。似合わないから嫌だとか言ってな。それでモデルを探しているとな。バイト料も

出すから知り合いに声をかけろと言う内容だ」

理音に『ウェディング体験のモデル』の件を聞くと理音はスタッフが嫌がる理由がわからないと言いたげに首を傾げる。

「まぁ、確かにその気持ちはわからなくもないけどね」

「そうですね。女の子なら着てみたい気持ちと結婚が遅れるのはやっぱり嫌ですから」

優子と瑞希は女性スタッフの気持ちがわかると頷き、

「何だ？　婚期を気にしていると言うのか？　それだと、女は着ないと言う事か？　なら……秀吉に頼むか？」

「確かに秀吉なら似合うよね。ねぇ、リオ、それ、ボクも見たいんだけど、行けるかな？」

理音はウェディングドレスを着ても婚期に関係ない秀吉に頼むかと言うと明久は秀吉のウェディングドレス姿を見たいと言うが、

「……吉井くん、お願いだから、あんまり、秀吉に女装をさせないで、そのせいでFクラスの生徒達が暴走しているのも多いんだから」

「流石に冗談だ。秀吉にウェディングドレスを着せると本宮に悪い気がするしな」

優子は明久の言葉に大きなため息を吐くと理音は理音と明久の昔からの友人の『本宮葵』に悪いと言う。

「そうなの？　残念だな……あれ？　どうして、秀吉がウェディングドレスを着ると葵ちゃんに悪いの？」

「ん？　アキ、お前は気づいていなかったのか？　あの2人はこの間から付き合っているぞ。まったく、今は秀吉はあのたわわな果実を揉み放題なんだぞ。羨ましいと思わないか？」

「そうなんだ。秀吉が葵ちゃんの胸を？　美少女同士の絡み……なんですと!?　秀吉と葵ちゃんが付き合ってる!?」

「ほ、本当ですか!?　い、いつの間に!?」

明久は理音の言葉に残念そうな表情をした後、何かが引っかかったようで首を傾げると理音は秀吉と葵が付き合っていると言うと明久と瑞希は驚きの声を上げると、

「……2人とも気づいてなかったの？」

優子はため息を吐く。

「秀吉がダメなら、どうする？　優子、着てみるか？　お前は俺のところに来るんだ。婚期は関係ないだろ」

「へ？　な、何を言ってるのよ!?　あんたは!?」

理音は表情を変える事なく優子にウェディング体験のモデルをやらないかと聞くと理音の言葉に優子は一瞬、呆気に取られた後、顔を真っ赤にして理音を怒鳴りつけるが、

「ん？　何か問題あるか？」

「前田くん、それってプロポーズですよね？」

理音は優子の反応の意味がわからずに首を傾げ、瑞希は理音の言葉に顔を赤くすると、

「別に問題ないだろ。それで、どうする？」

「着るわよ。着れば良いんでしょ！！　その代わり、理音、あんた、ちゃんと責任とりなさいよ！！」

理音は何の問題もないと言い切り、優子は理音にいろいろと責任を取れと吠える。

「優子、お前は何を怒っているんだ。後は１組だな。アキ、男の方をやらないか？　さっきも言ったがバイト料も出るぞ」

「バイト料っていくら？」

「１人２万」

「やる！！」

理音は優子の様子など気にする事なく、明久に話を持ちかけると明久はバイト料の高さに直ぐに返事をし、

「男のもう１人は俺がやる事が決定しているらしいから、後は女１人か？　島田にでも」

「前田くん、私が着ます」

「ん？　婚期が気になるんじゃないのか？」

「大丈夫です」

理音は瑞希が嫌がっていたため、美波にでも頼むかと言うと瑞希は明久の隣でウェディングドレスを着たいため、そのバイトを受けると言う。

## 第２６７問（後書き）

どうも、作者です。

理音、優子にプロポーズ。（爆笑）

そして、瑞希は美波の１歩先を歩くが明久は気付かない。（苦笑）

ここで如月グループと関わり合わせる事で明久達を雄二と翔子のデートに乱入させるつながりを持たせようと思いましたが、それ以上に明久は美波がこの件を知ったときに殺されるでしょう。（爆笑）

# 第２６８問

「……工藤さん、木下さんは今度は前田くんと何が有ったんだい？」

「わからないけど……登校してきてからずっと、写真を見てるんだよ。でも、ちょっと怖くて近づけないんだよ」

優子は理音と一緒に並んだ自分のウェディングドレスの写真を見てニヤニヤと笑っている姿を見て利光は近くにいた愛子に声をかけるが愛子も今の優子には声がかけづらいようで首を振ると、

「……こう言う時は前田くんに聞きに行くに限るよね」

「確かにね。と言うか、木下さんがこうなっている原因の１０割が前田くんが原因だからね」

愛子と利光は優子がこんな風になっている原因であろう理音に話を聞きに行こうとＡクラスの教室を出た時、

「葵に弟くん、おはよう。朝から仲良いね」

「お、おはよう。愛子に久保くん」

「おはようなのじゃ」

「あぁ。おはよう」

廊下で登校してきた秀吉と葵を見つけて声をかけると４人は挨拶を交わす。

「あ。弟くん、今日も朝から、優子がおかしいんだけど、前田くんと何が有ったか知らない？」

「う、うむ。昨日、理音と明久、姫路と４人でバイトをしてきたようなのじゃが、家に帰ってきてから、ずっとあの調子なのじゃ。写真を手に持っておるのじゃが、近付くのも少し怖くてのう」

「確かに、いつも以上に近寄りにくいね」

愛子は優子に何があったのかと秀吉に聞くが秀吉は優子がおかしいのは昨日からだと言い、利光は眉間にしわを寄せながら言うと、

「……一線越えちゃったとか？」

「あ、愛子、朝から何を言ってるんですか！？」

「……工藤さん、言葉はもう少し選ぶべきだと思うよ」

愛子は真剣な表情をして言うと愛子の言葉に葵は顔を真っ赤にし、利光は頭を押さえながら愛子をいさめる。

「冗談だよ。弟くんも知らないのか？　それなら、やっぱり、前田くんに聞いてくるしかないのかな？」

「うむ。昨日、何かあったとしか思えぬのじゃ」

「木下くん、昨日は前田くん達と木下さんは……」

愛子は秀吉が優子に何が有ったか知らないと首を振ったため、理音

に聞くしかないと言うと葵は秀吉に何かを聞こうとするが、

「葵、何で、弟くんの事を名字で呼んでるの？」

「あう……」

「う、うむ」

愛子は葵の秀吉の呼び方に首を傾げて、名前で呼ばないのかと聞くと葵と秀吉は気まずそうな表情をし、

「……もしかして弟くんも葵の事を名字で呼んでる？　２人は付き合ってるんだよね？」

「う、うむ。何と言うか、きっかけと言うものが……」

「はい……」

愛子は秀吉と葵がお互いに名字で呼び合っている事にため息を吐くと秀吉と葵は気まずそうに目を伏せる。

「……２人ともおくてだから少し時間がかかるのかな？　でも、早めに名前で呼ばないとどんどん呼びづらくならないかな？」

「そ、そうなのかも知れませんけど、や、やっぱり」

「まぁ、それは２人の問題だから、僕達が言う事ではないと思うよ」

愛子は秀吉と葵に早めに名前で呼び合うように言うと利光は愛子が口を出す事ではないと言い、

「それもそうだね。前田くん、登校してるかな？　と言うか、前田くんも優子と同じようになってたらどうしよう？」

「その時は吉井くんや姫路さんに聞いてみれば良いんじゃないかな」

愛子は頷く秀吉と葵を置いて利光と一緒にＦクラスの教室に向かう。

# 第２６９問

「おはよう。リオ」

「あぁ。おはよう。今日は朝飯を食ったのか？」

明久は玄関で理音を見つけて声を理音は明久の血色が良い事に気づき、朝食を食べたかと聞くと、

「昨日、リオのおかげで臨時収入が入ったからね。仕送りまでの余裕ができたし、今月はもう欲しいゲームもないから食費に回したんだよ」

「そうか。遊びに使うのも止めないが、どうせ、やる時間は限られてるんだ。新品を買わずに中古を買うとかして出費を抑える事も考える事を覚えればもう少し食費に回せるんじゃないのか？」

「リオ、何を言ってるんだよ。新作は当日に買う事に意味があるんだよ。中古なんて考えられないよ」

明久はウェディング体験の広報用のモデルを行った事で得た収入のおかげだと笑うと理音は明久にもう少し考えてお金を使えと忠告するが明久には明久なりのこだわりがあるようで理音の忠告は聞けないと言う。

「あまり、おかしな生活を続けて玲さんが帰ってくるような事にならないようにな」

「大丈夫だよ。召喚大会用にリオが作ってくれた資料もあるから、

成績は下がんないだろうし、姉さんがきても約束を破ってないからね」

「不純異性交遊は昨日の瑞希の写真を見られたら終わりだろうけどな」

「……まぁ、姉さんが帰ってきてないんだ。ばれる事はないよ」

理音は明久の返事に明久が1人暮らしの条件を思い出して明久に忠告すると明久は玲に昨日のバイト姿の写真を見られたら終わりだと思ったようで顔を引きつらせながら大丈夫だと言い、

「それにしても、昨日の姫路さんも木下さんも綺麗だったよね」

「そう言うのは本人に言ってやれ」

「そうだね……リオ、あれって来週の本番で霧島さんも着るんだよね」

「あぁ。俺達はあくまで広報用のモデルだからな。プレオープンの本番は客も多く集まるしな」

明久は昨日の瑞希と優子のウェディングドレス姿を思い出して理音に同意を求めると理音は瑞希に言うように言いと明久は照れ臭そうに頷いた後、来週の如月グランドパークのプレオープンのプレミアムチケットを使って雄二と翔子のウェディング体験が見れる事に何か企んでいるような笑みを浮かべるが理音は興味無さそうに頷き、

「……あまり、おかしな事をするなよ。雄二の場合は周りが変に気をまわすと意地になる気がするぞ」

「何を言ってるんだよ。ボクは何もおかしな事は企んでないよ」

「それが信じられないんだが、お前らが変に動くとあの2人はまとまらない気がするんだが、それにウェディング体験は企業が企画しているものだからな。下手な事をして台無しにしたら、訴えられる可能性もあると言う事だけは覚えておけよ」

「大丈夫だよ。そんなおかしな事はしないから」

理音は明久と瑞希が昨日、如月グランドパークの社員に来週のプレオープンの臨時バイトにねじ込んで欲しいと言っていた事を思い出し、明久に忠告するが明久は笑顔で何も企んでいないと言い切るがその顔は酷く胡散臭く、理音は頭を押さえるが明久は笑顔で変な事はしないと言い切った時、

「おはよう」

「おはよう」

『『『総員狙え!!』』』

理音と明久は教室に着き、挨拶をしながら教室のドアを開けると2人に向けてカッターが投げられるが理音は冷静にドアを閉め、ドアにはカッターが刺さる音が聞こえ、

「リ、リオ、何があったのかな?」

「さあな。昨日のバイトを異端者だと言い始めたバカがいるくらいだろ」

明久は顔を引きつらせるが理音は興味がないのか無表情のまま言う。

# 第270問

「そ、それって不味いよね？」

「だろうな。バイトとは言えウェディングドレス姿の瑞希の横に並んだんだからな」

「ちょっと待ってよ。リオだって一緒でしょ。木下さんと一緒に写ったんだから」

明久は自分がクラスメート達に命を狙われている事を感じ取って顔を引きつらせるが対象的に理音はあまり興味がなさそうであり、

「一先ず、現状で考えればこの中は瑞希と秀吉以外は敵だろうな」

「う、うん。そう思う。雄二は絶対に面白がってるだろうし、ムッツリーニは本気でボク達を殺しに来る可能性が高いよ」

「後は島田はお前を殺しにくる……ん？」

冷静に中の状況を確認すると、理音の携帯電話が鳴る。

「……どうした？　工藤」

「今、どこ？」

「教室の前の廊下だ」

「そう。姫路さんと弟くんはＡクラスで預かってるから、それだけ」

「わかった」

愛子はFクラスの教室を訪ねて殺気だったFクラスの生徒を見て瑞希と秀吉は避難させていると言うと、

「どうする？　ここに突っ込むか？」

「……入りたくないね」

「そうか。なら、職員室に行って、西村教諭に任せるか。あいつら相手に無駄玉は使いたくないしな。俺は今日からしばらく経理に集中しないといけないから授業は受けないし」

理音はFクラスの生徒を殲滅するのが面倒なようで西村教諭に任せると言うが、

「それなら、ボクはどうしよう？　ここで授業なんて受けられないよ」

「なら、手伝うか？　簡単な計算と帳簿の見直しだからな。今のお前の成績なら西村教諭とばばあもそれなりに話を認めてくれるだろう。バイト料はでないが昼くらいは奢ってやる」

「そうだね。あんなところで命に危険にさらされるのは嫌だからリオの手伝いするよ」

「なら、一先ず、職員室だな」

明久はこの中に入りたくないと言うと理音は明久に自分の仕事を手

伝うかと聞き、明久は身の安全を優先すると理音は明久の返事を聞いて教室のドアに何かを仕掛ける。

「リオ、何をしてるの？」

「ん？　俺達を異端者とか言ってるから、どこからが異端者か調べようと思ってな」

明久は理音の行動に首を傾げ、理音が邪悪な笑みを浮かべた時、

『須川を殺せ！！』

『ちょっと待て！？　こんな事実はない』

『告白しただとあいつも裏切り者だ！！　異端者には死の鉄槌を！！』

『待て。俺はふられて……違う。認めなければふられてなんていないんだ！！　俺はふられてなどいない！！』

『死ね！！　須川！！』

教室の中から仲間割れが始まった声が聞こえる。

「リオ、これって？」

「ん？　召喚システムの戦闘データが記録されてる事は言った事があるよな？」

「うん」

「それは学園全体に設置されてるカメラや録音機に記録されているんだが、それは通常時も動いていてな。生徒のプライバシーもあるから確認はあまりしないんだが確認すると面白いものがなかには記録されているんだ」

理音はFクラスの生徒の恋愛事情を教室内に流し込んだと言い、

「理音、それって犯罪じゃないの？」

「大丈夫だ。俺は直接聞いてはいない。うちのバカどもの声を声紋認識で拾って抜きだしたものから、他に女子の声が混じっているものを抜きとり、まとめたものだ。それを確認したら俺が転入してきて今日まで３７６件あってな。全部、告白、玉砕だったぞ」

明久はため息を吐くが理音は気にする様子もなく楽しそうに笑うと、

「行くぞ。アキ」

「う、うん」

２人はFクラスの生徒の処刑を西村教諭に任せるために職員室に向かい歩き出す。

# 第271問

「へぇ、それじゃあ、優子と姫路さんは前田くんと吉井くんのタキシード姿にやられちゃったわけか」

「……よ、吉井くんのタキシード姿」

理音と明久は一時的に理音の部屋に使用している元教頭室で作業を行っていると愛子と利光が訪れ、優子と瑞希がおかしい理由を聞き愛子は納得したようで頷き、利光は何かあるのか血涙を流している。

「あぁ。優子は妄想型だから、しばらくはまともに起動していないと思ったが瑞希までなっているとは思わなかったな」

「姫路さん、そんなにウェディングドレスがきたかったんだ」

「吉井くん、姫路さんは隣に誰が居たかが重要だったと思うよ」

理音は優子が妄想している事は予想していたようだが瑞希が優子並に妄想の世界に旅立っているとは思っていなかったようでため息を吐くが明久は瑞希の想いに気づいていないためか首を傾げ、愛子は明久の様子に苦笑いを浮かべると、

「まぁ、しばらくすれば元に戻るだろ。それより、工藤、久保、今は授業中のはずだが、こんなところにいて良いのか？」

「うん。何か3年生が試召戦争をやってるみたいで先生方、立ち会いに出てて自習なんだよね。だから、姫路さんと弟くんもAクラスにいるよ。それで、ぼくも教室で自習しようとも思ったんだけどや

っぱり原因も気になったしさ。それに前田くんなら作業をやりながらでもわかんないところがあったら教えてくれるだろうし」

「あぁ、それくらいならかまわないが、やはり、立ち会いに教師がいると言うのは効率の面を考えると良くないな。ある程度、上位のクラスなら自習はしているだろうがFクラスのような下位クラスは確実に遊んでいるだろうからな」

「……遊んでるだけならまだ良いよ。今、教室じゃ、ボクとリオをどんな残酷な手段で殺すか話し合ってるはずだから」

理音は授業時間にも関わらず、愛子と利光がここを訪れた事に首を傾げ、愛子は3年が試召戦争中のため自習中だと言うと理音は以前から感じている試召戦争の効率の悪さに眉間にしわを寄せ、明久は今、Fクラス内で議論になっているであろう事に大きなため息を吐く。

「吉井くんも前田くんも大変だね」

「そうだな。通常時なら、撃破して埋めれば良いんだが、スポンサーが戻ってくるまでの一時金に回しているからな。俺もなるべく、無駄な出費は抑えたいんだ」

「……それは前田くんが今の文月学園の予算のほとんどを出しているって事かい？」

明久の言葉に愛子は苦笑いを浮かべると理音はFクラスの生徒の相手をしている暇も金もないと言い、時間が空き利光は正気に戻ったようで眉間にしわを寄せながら理音に聞くと、

「3割くらいだ。流石に個人ではこれ以上は出せなかった。他に使っている金は回せないものもあったからな。だから、なるべく出費を抑えたい無駄なものは削る必要もあるし、それでも削れない部分はある。まぁ、白金の腕輪のデモンストレーションも上手く行ったからスポンサー料は減少したが下りるスポンサーが少なかったのが救いだな。後は小者をバッサリと切った事で小口だがスポンサーも付いてきている」

「前田くん、完全に経営者だね」

「まぁ、必要だからな。現状でやれる人間がいない。俺もばばあもつてで探しているが今の条件で引き受けてくれる人間はいないんだ。現状で言えば文月学園はいつ沈むかわからないボロ船だからな。沈むかも知れない船に好んでのる人間はいないだろ」

「……それって僕達、学生の前で言って良い言葉なのかい？」

理音は現状の文月学園の懐事情を隠す事なく話すと利光は顔を引きつらせるが、

「別に事実を知る権利は誰にだってあるだろ。この状況では転校する人間だって出てくると言うか、まぁ、近所の私立は文月の転覆を謀った事がばれて少しは大人しくしているからな。問題は来年度の新入生だ。学費をあげるわけにもいかないが規模を縮小するわけにもいかない」

理音は表情を変える事なく知る権利は学生全員にあると言う。

「確かに学費の安さは魅力だしね。これって他の公立くらいまで上げるとやっぱり不味いんだよね？」

「あぁ。大学への進学を考えている人間にはウチの学費の安さは魅力の1つだからな。後はもっと召喚システムを表に出した広報をして行く必要があるな」

「……本当に経営者だね」

明久は文月学園の魅力の1つの学費を引き上げるわけにはいかないのかと聞くと理音は文月学園の評判をあげる事を考え始め、愛子が苦笑いを浮かべた時、

「アキ、前田、詳しい話を教えなさい！！」

「美波？」

額に青筋を浮かべた美波が勢いよくドアを開ける。

# 第２７１問（後書き）

どうも、作者です。

完全に経営者化している理音と明久の鈍さに苦笑いの愛子。

そして、お怒り美波の襲撃に理音と明久は？

明久はひとまず間接技だろうけど。（爆笑）

# 第272問

「何の用だ？　くだらないようなら帰れ。見ての通り、アキにまで手伝って貰ってるんだ。俺は暇じゃない」

「何の用だ？　って、どうして瑞希なのよ！！」

理音は作業を続けながら美波の用事は何か予想はついているが相手をするのが面倒なため忙しいと言うが、美波は理音を怒鳴りつけると、

「姫路さんも？　美波も今月苦しかったの？」

「……吉井くん」

明久は美波はバイト料が欲しかったのだと思っているようで首を傾げ、愛子は明久の様子に苦笑いを浮かべる。

「どうして？　この話がきた時に瑞希がいたから声をかけた。アキも優子も同じだ。選別に他意はない」

「だとしても、誘うくらいはしてよ！！」

「お前をか？　……考えろよ。広報用のモデルを頼まれたんだ」

「そ、そりゃ、優子や瑞希みたく可愛くないかも知れないけど、ウチだって、それなりには……」

理音は美波に向かい、居合わせた人間に頼んだと言うが、美波は納

得いかなさそうに言うと、

「島田、お前は勘違いしている。俺が言いたいのはモデルに『貧乳は2人もいらない』と言う事だ」

「確かにそうだね」

「……前田くん、優子が聞いたら怒るよ」

「前田、アキ、あんた達、殺すわ」

理音は表情をかける事なく言い、明久が理音の言葉に頷くと2人の言葉に美波の背後からは真っ黒な殺意(もの)が溢れ出し、

「ちょっと待って!?　胸がないから肋骨が!?」

「当然だろ。広告用のモデルなんだ。それなりに数を着るんだ。同タイプの人間だと衣裳が偏るだろ」

「前田くん、もう少し言葉を選ぶべきじゃないかな」

明久をつかみ関節技をかけ出し、部屋には明久の悲鳴が響くが理音が考えを変える気はなく、利光は眉間にしわを寄せて理音を注意する。

「意味がわからん。クラスのバカどももそうだが、バイト1つで人の生き死にを決めるような奴らに俺がフォローをする意味がない。それも物を訪ねに来ておいてケンカ腰なんだぞ。答えてやっただけでもありがたく思え。用は終わったな。俺もアキも忙しいんだ。出て行け」

「また、バッサリと」

理音は美波に人に物を聞く態度ではないと言い、部屋を出て行けと言うと愛子は苦笑いを浮かべると、

「事実だろ。島田、邪魔をするな。こっちは忙しいんだ。お前の暇つぶしにつきあう時間はない」

「ちょっと、前田!!　放しなさいよ!!　アキが悪いのよ」

「……バイトを斡旋したのは俺だ。お前がアキに攻撃するのは筋違いだ。それにこの間も言っただろ。お前はアキに好かれたいのか？　嫌われたいのか？」

理音は美波の行動に呆れたようにため息を吐き、明久から美波を引き離し、小声で美波に聞く。

「……それは好かれたいわよ」

「そう思うなら、態度を改めろ。前も言ったと思うがお前の攻撃はやりすぎだ。下手するとそのうちアキが女に甘いとは言え、拒絶されるぞ」

「……うっ」

美波は理音の問いに明久を1度、見た後、小さな声で言うと理音はため息交じりで美波に言い聞かせるように言うと美波はバツが悪そうな表情をすると、

「用が終わったなら出て行け」

「わ、わかったわよ」

少し冷静になれと言う意味を込めて美波に出て行くように言い、美波はしぶしぶ出て行き、

「前田くん、優しいじゃない」

「……島田が少し冷静になってくれると対処が楽なんだがな」

愛子は理音をからかうように笑うと理音は表情を変える事なく言う。

# 第273問

「……やはり無理だな」

「何が？」

理音は美波を追い払った後に作業を続けているとどうしても予算が足りないようで眉間にしわを寄せると愛子が理音に聞くと、

「来月に予定している『学力強化合宿』の件何だが」

「1週間、卯月高原でやる勉強合宿だね？」

「それが、どうかしたのかい？　まさか、中止になるとかかい？」

理音は来月に予定している『学力強化合宿』の予算に問題があったようで愛子と利光は中止になるんじゃないかと思たようで理音に聞き返し、

「中止にはならないが、予算の関係上Fクラスにはバスが出せないな」

「そ、それってどう言う事？」

「自費で現地集合になると考えておけば良いだろうな」

理音は表情を変える事なく、Fクラスにはバスがでないと言い切る。

「ちょ、ちょっと待ってよ！？　自費なんて無理だよ。来月には新

作ゲームがたくさん発売されるんだよ。リオ、どうにかならないの？」

「無理だな」

「前田くん、ちなみにぼく達Ａクラスは？」

「リムジンバスだ」

明久は無駄な出費を抑えたいようで理音にどうにかして欲しいと言うが理音は直ぐに首を振り、愛子はＦクラスが現地集合になったため、Ａクラスの移動方法を聞くと理音は表情を変える事なく答え、

「差が有りすぎだよ！！」

「それが文月のルールだ」

明久は納得がいかないと声をあげるが理音はその言葉をバッサリと切り捨てると、

「前田くん、仮にも学園の行事なんだ。さすがに現地集合は不味くないかい？」

「確かにＦクラス人達を現地集合にしたら合宿所に着くまでに問題起こしそうだよね」

「それは否定できないな」

愛子と利光はＦクラスを現地集合にするのは危険だと言い、理音は今朝の件もあるため２人の言葉に眉間にしわを寄せる。

「そ、それなら、どうにかしてバスを」

「無理だ。現状のスポンサー料ではどうしようもできない。それに下手にそれを聞きいれると3年の方でも問題になるだろ。強化合宿は3年にもあるんだ。うちのFクラスがバスが出たのに3年がでないとなるとな」

「2年生にバスを出すなら3年生にも出さないといけないわけだね」

「そう言う事だな。2学年分のバスを確保できる分のスポンサー料が入れば問題ないがそう上手くはいかないだろ」

明久は自費で強化合宿に行きたくないようで理音に泣きつくが理音は首を振ると、

「……スポンサー料か。ねぇ、理音、ウェディング体験が成功したらスポンサー料って上がるかな？」

「ウェディング体験か？　確かに如月グループが力を入れている事だからな。雄二と霧島の事だから、雄二はウェディング体験の事を知っているからごねて当日に来ないと言う事も考えられるしな」

「ねえねえ、前田くん、吉井くん、ウェディング体験って、召喚大会の副賞だよね。それって何かあるの？」

「あぁ……」

明久は如月グループからのスポンサー料を増やせないかと理音に言うと理音はそう上手くは行かないと言い、2人の会話に愛子はウェ

ディング体験の裏で如月グループが考えているジンクス作りを知らないためか2人に説明を求め、理音は隠す事なく如月グループが召喚大会の副賞のプレミアムチケットを使ったカップルを強引に結婚まで運ぼうとしている事を告げる。

## 第２７３問（後書き）

どうも、作者です。

理音は相変わらずの経営者。

そして、ウェディング体験の事が愛子と利光に知られました。
雄二と翔子のウェディング体験に２人も巻き込まれるんでしょうか？
そして、スポンサー料は上がり、バスは出るのか？

と言うか、バス２台借りるのにそんなにスポンサー料はいらないか？（苦笑）

まあ、気にしない方向で。

## 第２７４問（前書き）

お気に入り登録が５００件を超えました。ありがとうございます。
これからもがんばりますので引き続きよろしくお願いします。

# 第２７４問

「それは問題がないのかい？」

「まぁ、多少は問題があるが雄二と霧島だからな。問題はないだろ。あの２人の場合は雄二がおかしな勘違いを止めれば直ぐにまとまるはずだからな」

「坂本くんの勘違い？　どう言う事？　坂本くんの様子で言えば勘違いなら、代表の方じゃないのかな？」

利光は如月グランドパークが計画しているウェディング体験を使ったジンクス作りの内容を聞いて眉間にしわを寄せると理音はあまり興味がなさそうに雄二と翔子なら問題はないと言うがその言葉に愛子は首を傾げて聞き返す。

「……確かに霧島は猪突猛進型だが、そうなるにはそうなる理由があるだろ。たぶん、雄二は霧島が雄二を好きだと言っている理由に負い目か何かがあるから、霧島に離れるように言っているんだ。雄二は『霧島の想いは勘違いなんだ。だから、自分は霧島を好きになってはいけない』くらいに考えているんだろ」

「それって、ボク達は坂本くんも代表の事が好きって事で考えて良いんだよね？」

「問題ない。ただ……」

「ただ？」

理音は雄二が自分の想いを閉じ込めようとしていると言うと愛子は真剣な表情で理音に聞き、理音は何かを考えるような素振りをすると、

「周りがどこまでおせっかいを焼いて良いかだ。アキもそうだが、瑞希に島田、間違った応援しかしない気がするんだ。アキに至っては応援するような素振りを見せておいて途中で嫉妬に飲み込まれる」

「……そんな事はないよ」

「確かにね」

理音は雄二と翔子を間違った応援をすると言うと明久は理音から視線を逸らし、愛子は苦笑いを浮かべる。

「だけど、両想いなら応援してあげたいでしょ。前田くんと優子の時だってみんな応援してくれたでしょ？」

「……いや、工藤や久保、秀吉は応援をしてくれたかも知れないが、他は明らかに興味本位で聞いていたに過ぎないんだが」

「……うん。確かにそうだね」

愛子は雄二と翔子を応援したいのは当然だと言い、周りは理音と優子の時も応援してくれたと言うが、理音は自分と優子の時とは違うと首を振ると愛子は瑞希と美波は応援などしていなかったと言い切ると愛子は理音の言葉に頷き、

「それならどうするつもり？　姫路さんと島田さん抜きでこの４人でウェディング体験用の作戦でも立てる？」

「……工藤さん、どうして、僕もメンバーに入れられているんだい？」

「アキがいると作戦を覚えきれないから無駄だろ。それにここで作戦を立てても当日に瑞希と島田が入ってきて全てをぶち壊す。それなら、当日にあの2人の手綱を取るように人員を配置するのが重要だ」

「姫路さんと美波の手綱を取る？　無理じゃないかな」

「……否定できないのが怖いね」

このメンバーで雄二と翔子をまとめる作戦を立てようかと聞くと利光は眉間にしわを寄せてメンバーに入れられている事に不満をこぼすが誰も気にする事はなく、理音はここで作戦を立てる必要は無意味だと言い切ると明久と愛子は苦笑いを浮かべると、

「一先ずは坂本くんを如月グランドパークまで引っ張り出さないといけないね」

「それなら、大丈夫だよ。霧島さんがプレミアムチケットを手に入れたら雄二は一緒に行ってくれると約束してくれてるって言ってたから」

「……以前から思っていたんだけど、坂本くんは代表が関わってくるとどこか迂闊だね」

「まぁ、惚れた弱みだろ」

雄二をどのようにウェディング体験に引っ張り出すかと首を傾げると明久は問題ないと言い切ると利光は雄二は翔子相手だと考えが足りないと言い、理音はその言葉に表情を変える事なく頷く。

# 第２７５問

「すまないな。工藤、久保、お前らにも手伝ってもらう事になるとは思っていなかった。この恩は何かで返す」

「気にしないでよ。勉強も教えて貰えたし、代表と坂本くんの話も聞けたからね」

「そうだね。前田くんに教わるとわかりやすいし、他にも専門的な事を聞けるから自分達で実習を行うよりは身に入ったよ」

３年の試召戦争も終結したようで愛子と利光は教室に戻ると言うと理音は２人にも明久と同様に作業を手伝って貰ったようで２人に頭を下げるが２人は気にする様子もなく、

「それより、代表と坂本くんの事、上手くやろうね」

「……まったく、僕まで巻き込まれる事になるとは思わなかったよ」

「ゴメンね。工藤さんも久保くんも」

愛子はウェディング体験の日の雄二と翔子の事を考えて楽しそうに笑うが対象的に利光は眉間にしわを寄せ、明久は苦笑いを浮かべて２人に謝ると、

「べ、別に吉井くんが謝るような事じゃないよ」

「ありがとう。久保くんって良い人だね」

利光は明久の言葉に頬を赤くして言い、明久は利光の変化に気づく事無く利光に礼を言うが、

「……工藤、俺は久保をアキから引き離した方が良いと思うか？」

「どうかな。久保くんも幸せそうだし、実害があるわけじゃないしね」

「……なんで、この学園は清水も久保もだが秀吉に告白したり同性愛者や優子と言った同性愛者を推奨する奴らが多いんだ？」

「えーと、わかんないかな？　と言うか、ムッツリーニくんや漫研影響じゃないかな」

明久と利光の様子に理音は明久の身の危険を感じ取っているようで眉間にしわを寄せながら聞くと愛子は苦笑いを浮かべる。

「……少し、どうにかしないといけないか？」

「それって規制するの？　優子の楽しみを取るのは彼氏としてどうなの？」

理音は眉間にしわを寄せたまま、同性愛者に関する騒ぎをどうにかしたいのか首を傾げると愛子は流石に規制するのはやりすぎだと聞くが、

「……いや、普通に考えると彼女が自分と友人で可笑しな妄想をしている事の方が彼氏としては考えないといけない事だとは思うんだが、それに最近は本宮が秀吉と付き合いだした事で優子が本宮にそう言う本にも挑戦しろと言っているらしくてな」

「……優子は何をしてるんだろうね」

「あぁ。少しは自制をして欲しいんだが、あいつも瑞希と一緒でFクラスに毒されてきた気がするな」

「た、確かにね。そ、それでも規制は不味いと思うよ。生徒からあんまり不満が多くなると面倒だし」

理音は優子の妄想に歯止めをかけたいと言うと愛子は顔を引きつらせながらも

「いや、そうじゃない。学園内で商売をしているからな。少し学園側にバックさせるかな。その分、それに関する規制、持ち物検査などを緩くして実際、持ち物検査など必要はないだろうしな。それを解除する事を条件にしてやれば、後は康太から販売権を取り上げて購買で」

「……ぜ、税収？」

理音は学生からもお金を集めようとしており、愛子は顔を引きつらせると、

「不味いか？」

「流石に、色々と問題ないかな？　税金扱いもだけど、購買にそう言う本が並ぶのは良くないよ」

「そうか。人の欲望にかける執念は金になるからいい考えだと思ったんだがな」

理音は無表情なまま首を傾げる。

## 第276問

「さてと、キリも良いし、1度戻るか？」

「ホントに？　教室は危ないよ」

理音は作業がキリの良いところまできたと言うと明久に1度、教室に戻ろうと言うが明久は教室は危ないから行きたくないと言うと、

「しかしな。ここにいて時間を潰しているよりはどこかでぶつかっておいた方が楽だ。時間が空けば更なる殺意を向けてきそうだしな」

「……もう遅いと思うんだけど」

「かも知れないが今は1つ、良い手が浮かんでいるんだ。試す価値はあると思うんだが」

「ホントに？」

「あぁ、行くぞ」

「うん」

理音はクラスメートからの攻撃を防ぐ手立てを思いついたと邪悪な笑みを浮かべると明久は理音の言葉に頷き、2人は教室に向かい歩き出す。

「……」

『『『総員、狙え！！』』』

理音が教室のドアを開けると待ち構えていたのかクラスメート達は理音と明久に向けてカッターを投げるが、理音は慌てる事なくドアを閉めるとドアと壁にカッターが刺さる音が聞こえ、

「リ、リオ、本当に大丈夫なの？」

「あぁ、一先ずは黙らせるか」

「ちょ、ちょっと、ダメだよ！？　中には姫路さんや秀吉もいるんだから」

明久は顔を引きつらせながら理音に本当に作戦は大丈夫かと聞くと理音は教室の中の人間を黙らせると言うと懐から以前、使用した事がある煙幕を取り出すと明久は理音を止めようとするが、

「大丈夫だ。あくまで視界を遮るためのものだからな。害はない。ただ、康太には依然に暗視スコープを渡してあるからな。すぐに蹴散らさないといけないがな」

理音は邪悪な笑みを浮かべると明久の静止など気にする事なく、煙幕を教室に投げ込み、

『こ、これは、また、あの煙幕か！？』

『落ち着け。これはあくまでも！？』

「落ち着いてるほどの時間はないがな」

教室内にはクラスメートの慌てた声が響くなか、理音は平然とクラスメート達を撃ち抜いて行く。

「……俺を忘れるな」

「別に忘れているつもりはない」

しかし、康太だけは以前に理音から受け取ったスコープを付けて理音の背後に回り、理音にスタンガンを押し当てようとするが理音は康太の腕をつかむとニヤリと笑い、

「お前以外は警戒していない。他はザコと考えたらずだけだからな」

「……だが、一歩遅い」

康太に向かい言うと康太は隠し持っていたもう1つのスタンガンを理音に向かい投げつけるが、

「何度も言わせるな。それも予想済みだ」

理音はそれを平然と交わすと懐から怪しげな色をした液体の入った注射器を取り出し、躊躇する事なく康太に突き刺すと、

「……雄二、康太と同じ目に遭うか、霧島に引き渡されるか、選ばせてやる」

「ちょっと待て!?　俺への選択肢がおかしくないか!?」

「おかしくはないだろ。他のバカどもは嫉妬と言うくだらない理由があるが、お前1人はただ面白いからと言う理由だしな。それにダ

メージを与えると言う行為はそいつに1番、ダメージが行くようにしないといけないだろ」

他のクラスメートを沈めながら雄二に命の選択を迫り、雄二は声をあげるが理音は邪悪な笑みを浮かべながら第3の選択肢は認めないと言い切り、

「ふ、ふざけるな!?」

「そうか。おやすみ。雄二」

雄二は声をあげると理音の銃口からは雄二の腹に向け花火が打ち出される。

## 第２７６問（後書き）

どうも、作者です。

手があると言った割に力ずくの理音です。

まあ、いつものことだから仕方ない。（苦笑）

# 第277問

「……雄二」

「翔子、離れろ！！　理音、これはどう言う事だ！！」

「……リオ、ボクは雄二を殺しても良いかな？」

理音はクラスメートを蹴散らした後、全員を石の上に正座させて足の上に重石をのせているが雄二だけは足の上に翔子が座っており、明久を先頭にクラスメートからは殺意の視線が雄二に送られている。

「ん？　何となくだ。アキ、その無駄な殺意はしまえ、邪魔をするとあのバカどもと同じ目にあわせるぞ」

「仕方ないね。雄二、今日のところは生かしておいてやる」

理音は何となくだと言うと明久を静止し、明久は雄二に殺意の視線を送ったまま頷き、

「それで、リオ、良い手段があるって言ってたけど、結局は力技？」

「いや、そうでもないが、まずは雄二や俺とアキに殺意の視線を向けてる奴から順に重石を増やすか。反省が足りないからな。アキ、手伝え。後、島田、お前も反省していないなら、こいつらと同じ目にあわせるぞ」

理音にこの後の事を聞くと理音は邪悪な笑みを浮かべながら、未だに優子と瑞希とのウェディング体験の広報用のモデルをした理音と

明久に向けて殺意を込めた視線を送っている人間への重石を増やし、同じように理音と明久を睨んでいる美波にも同じ罰を与えると言う。

「な、何でよ。ウチは女の子なのよ。そんな事する気？」

「島田、最初に言っておく、お前の攻撃力は男の比じゃない。それに今は男女平等だ。何だと言うのに、こう言う時にだけ性別を持ち出すのは汚くないか？」

美波は理音に向けて女の子に手をあげるのは男として問題があると言おうとするが理音はその言葉を鼻で笑うと、

「……」

「理音、それは言い過ぎではないのかのう？」

「それにな。性別以前にお前の暴力は友人間の小突き合いと言うレベルじゃないからな。無論、このバカどももな。言っても効果がないなら罰を与える。動物のしつけと変わらんな」

美波は理音を睨みつけ、秀吉は苦笑いを浮かべながら理音に言いすぎだと言うが理音が気にするわけはなく、美波やクラスメートの斬り捨て、

「さてと、そろそろ、黙ったな」

「と言うか、屍じゃのう」

クラスメート達に平均5枚の重石が乗った時、クラスメートは静かにを通り越し、ぐったりとしており、秀吉は顔を引きつらせる。

「さてと、本題に入るか。お前ら、あまりおかしな事をするなら、お前らの大切なものを潰させて貰おう」

『貴様らが我らが盟約を破るからだろ！！』

理音はクラスメートの顔を見渡した後、淡々とした口調で何かを言おうとするがクラスメート達は直ぐに復活して理音を罵倒するが、

「だいたい、俺はお前らと盟約を結んだ事などない。勝手な事を抜かすな」

「……確かに、そうじゃのう」

理音はＦＦＦ団の盟約など誓った覚えはないと言い切り、秀吉は大きく頷きと、

「まぁ、今はそれはどうでも良い。お前らがくだらない事を続けるなら、俺は文月学園の経営者の１人としてムッツリ商会を潰す」

「……理音、どう言う事だ？」

「ちょ、ちょっと、リオ、何を言ってるんだよ！？」

理音は表情を変える事なく、『ムッツリ商会を潰す』と告げると康太は理音を睨みつけ、明久を筆頭にしてクラスメート達は理音に向かい真相を聞く。

「当然だろ。経営者としてはこんな写真を売って回っている生徒がいるのを見過ごせるわけはない。それに康太が取り扱っている商品

で同性愛者や腐女子、ＦＦＦ団とか言ったバカどもが調子づくんだ。つぶせば、それなりに大人しくなるだろ」

「……理音、お前に俺を止められると思っているのか？」

理音はこのバカ騒ぎの原因の一端をムッツリ商会が担っていると言い切るが康太は理音を睨みつけながら、自分を止める事はできないと挑発すると、

「康太、最初に言っておく、お前の設置している盗撮カメラ、盗聴器の場所はすでに全部、把握している。学園以外からうちの弱みを探そうとしてい奴らが仕掛けたものを全部外させて貰った時にお前のものは取り外さないでやっただけだ。今はデータがあるから立ちまわれるだろうがな。新く設置しようが全て排除してやる。そうすればそのうちネタ切れだ。当然、取引しているところは西村教諭をけしかけて潰す。嘘だと思うなら、今日中にすべて取り外してやろう」

理音は淡々とした口調で挑発には乗らないと言うと康太を挑発し返す。

「どうする？　俺は一向に構わんぞ。康太の商品に頼らなくても良い身分だしな」

「リ、リオ、汚いぞ。ボク達の楽しみを奪うなんて」

「そうよ。あんたは鬼よ」

「……何故、島田と明久までもがダメージを受けておるのじゃ？」

理音はクラスメート達にどうするか選ばせてやると言うとムッツリ商会の危機に明久と美波は膝をつき、その姿に秀吉はため息を吐くと、

「……やれるものならやってみろ」

「そうか」

康太は理音は自分の盗撮カメラや盗聴器の場所を把握しているのは嘘だと思っているようで理音を挑発すると理音は頷き、懐から怪しげなスイッチを取り出し、

「一先ずは全部役立たずにさせて貰うか」

「……どう言う事だ？」

「何、こう言う事もあるだろうかと思ってな。以前にお前のカメラと盗聴器には仕掛けを施している」

「……そんなものは発見できなかった」

「俺がその程度のへまをすると思っているのか？　まぁ、このスイッチを押せばわかる事だがな。信じられないならこの場で押してやろうか？」

「……今回は引こう」

理音はあまり興味もなさそうに康太のカメラや盗聴器を壊すと言うと康太は理音の言葉に膝を屈する。

# 第２７７問（後書き）

どうも、作者です。

理音、康太を脅す。（爆笑）

文月学園の性にオープンすぎる一端は絶対にムッツリ商会が関係しているはずですから。（苦笑）

## 第278問

「これで一先ず、落ち着いたか？」

「そう思うなら、この状況をどうにかしろ」

康太が屈した事で、ムッツリ商会に世話になっているクラスメート達は理音の前に気持ち悪いくらいの男泣きをしながら屈すると理音は興味がなくなったようで自分の席に座ると雄二は翔子を膝の上にのせたまま、理音にお仕置きから解放するように言うが、

「何を言っている？　それはそれ、これはこれだ。しつけとお仕置きは別物だろ。それに他はまだしも、霧島の幸せそうな顔を見たら、止めるわけにはいかないだろ」

「……理音はやっぱり良い人」

理音は雄二を切りすてると翔子は雄二に抱きついている手に力を込める。

「しかし、ムッツリ商会を交渉に使うとはのう」

「前から考えてた事だ。まぁ、どうせ、2、3日もすれば忘れるようなバカばかりだからな。しばらく、大人しくしていれば良いさ」

「それって、本当は潰す気はないって事？」

秀吉は雄二と翔子を1度見てから、理音の行動に呆れたようなため息を吐くと理音はクラスメート達が大人しくしているのはせいぜい

2、3日だと言うと明久は理音の言葉に首をかしげ、

「まぁな。流石にあそこまで見せられると気が引ける。と言うと気持ち悪い」

「……確かにね」

理音は教室の後ろで理音にお仕置きをされながらもムッツリ商会が潰れた時の事を考えて泣いているクラスメート達を見てため息を吐き、美波は理音の意見に頷く。

「だいたい。他人の足を引っ張らないで自分を磨く努力をすると言う発想はないのか」

「……ないのじゃろうな」

「……耳が痛い」

理音はため息を吐きながら、クラスメート達には考えを変える気はないのかと言うと秀吉はため息を吐き、明久は理音から視線を逸らすと、

「まぁ、見てる奴はちゃんと見てるから、少し余裕を持っていろ」

「それって、どう言う事？」

理音は他のクラスメートとは違い、瑞希と美波からの好意を寄せられているのに気づきもしない明久を見てため息を吐くが明久はまったく意味がわからないためか首を傾げる。

「……いい加減、気づけ。お前も雄二も康太もおかしな事を考える前にいろいろと考えろ」

「まったくなのじゃ」

理音は明久の反応にもう1度、ため息を吐くと秀吉も理音と同じ事を考えているようで大きく頷き、

「考える事はそれぞれ違うがな……鈍いと言うのは罪だな」

「……理音、お主が言う事ではないのじゃ。だいたい、お主も姉上の時は似たようなものであったであろう」

理音は眉間にしわを寄せて明久に鈍感と言うと秀吉は理音だって優子の時は変わらなかったと言うが、

「勘違いするな。前にも言ったが、優子の気持ちには気づいていた。俺になかったのは前に進むきっかけだ。それを自分なりに探そうとしただけだ。認めてはいけないと思う気持ちと認めたい気持ちでな。それを分析していたにすぎん」

理音はあくまでも自分の場合は自分と向き合うための時間だったと言うと秀吉はため息を吐く。

「だから、俺は俺なりに似たような事を思っている奴の背中を押してるつもりなんだが」

「……」

理音はくすりと笑い、雄二を見ると雄二は苦虫を噛み潰したような

表情をし、

「それにな。秀吉」

「何じゃ？」

理音は秀吉を呼び寄せると秀吉は理音のパソコン画面を覗き込む。

「良いか？　雄二が素直に認めれば、霧島の行動は少なからず落ち着いてくる。そうなると霧島の行動を参考にしている瑞希と美波の間違った考えは変わってくる」

「なるほどのう。と言う事は原因は雄二と言う事じゃな？」

「そう言う事だ」

理音は今の状況を変えるには雄二と翔子をまとめる事だと秀吉に説明すると秀吉は雄二を見てため息を吐き、理音は表情を変える事なく頷く。

# 第２７９問

「と言う事で、こうなるんだが……のるか？」

「……ふむ。なるほどのう。ワシは問題ないのじゃ。むしろ、協力させて欲しいのじゃ。ワシも本宮との件では雄二にも世話になったしのう」

理音はパソコンの画面に雄二と翔子のウェディング体験の内容を見せると秀吉は目を通して頷いた時、

「そ、そうだ。秀吉、葵ちゃんと付き合ってるって本当なの！！」

明久は先日、理音と優子から秀吉と葵が付き合っていると聞かされた事を思い出して声をあげる。

「う、うむ」

「ちょっと、それ、本能なの？　い、いつからよ？」

「清涼祭の少し前からじゃ」

秀吉は誰にも言っていなかったため、少し気まずそうに頷くと美波が驚きの声を上げて秀吉につかみかかり、秀吉はバツが悪そうに清涼祭前からだと答えると、

『『『『美少女同士の絡み合い！？　眼福じゃ！！！！』』』』

Ｆクラスの生徒達は秀吉と葵の様子を思い浮かべたようで理音のお

仕置き用の重石をのせたまま叫び声を上げ、

「お前ら、黙れ」

『『『『ぐふっ！！？？』』』』

理音はその叫び声に不快感を表し、眉間にしわを寄せながら懐から栄養剤を取り出してクラスメート達の口のなかに放り込んでいく。

「……相変わらずの威力だね」

「うむ……しかし、なぜ、ワシは男扱いされんのじゃ？　明久や雄二のように攻撃対象になるのはイヤじゃが、それはそれで納得がいかんのじゃ」

明久は顔を引きつらせながら、理音の栄養剤の威力を再認識している隣で、秀吉は自分を男扱いしないクラスメートの様子に大きなため息を吐き、

「……平和だしな。良いんじゃないか。それはそれで」

「……そうかもね」

「……納得がいかんのじゃ」

理音と明久は自分達はクラスメートに攻撃対象にされているためか秀吉の方が楽で良いと言うが秀吉は納得がいかないと言うと、

「そ、それより、どういう経緯で、木下と葵が付き合うようになったのよ！？　と言うか、何で、前田、あんたは知ってるのよ？」

美波は1人だけ置いて行かれているのが納得いかないようで理音につかみかかる。

「何で？　と言われると秀吉が本宮と何かある度に家に来て落ち込んでいたからな。正直、ウザかった」

「……理音、もう少し気を使ってはくれんかのう」

理音は無表情で秀吉が家に来ていた時の事を思い出して言うと秀吉はため息を吐くが、

「なぜだ？　事実だろ。俺以外にも優子や巻き込まれた人間に聞いてみろ。雄二、正直、ウザかっただろ？」

「……お前は俺のこの状態を無視したまま言うな」

理音は雄二に同意を求め、雄二はため息を吐くと、

「霧島、そろそろ、雄二を解放しろ」

「……わかった。私も木下と葵の事を詳しく聞きたいから、雄二とのデートの参考にするために」

理音は翔子に雄二から離れるように言い、翔子は秀吉と葵の事が気になったようで雄二の足の上から下りると雄二の腕をつかんで話しに混じり、

「……翔子、放せ」

「そのくらいは付き合ってやれば良いだろ」

「……」

雄二は解放はされたがそれでも翔子に捕まったままのため、もう１度ため息を吐くと理音は雄二と翔子の様子にくすりと笑うが明久は雄二を殺意の混じった視線で睨みつけており、

「無駄な殺意を垂れ流すなら、お前にもあいつらと同じ目にあわせるぞ」

「な、何を言ってるんだよ。ボ、ボクは何もおかしな事は考えていないよ」

理音は明久の様子にため息を吐くと明久は理音のお仕置きは受けたくないため、慌てて何もないと答える。

# 第２８０問

「それで秀吉と本宮さんは捕まったわけね」

「あはは。代表も島田さんも熱心だね」

理音は明久と雄二とともに放課後になると未だに妄想の世界に沈んでいる瑞希を引きずりながらＡクラスの教室に顔を出すと優子と愛子は秀吉と葵が翔子と美波に捕まった事を聞いて苦笑いを浮かべる。

「そうだな。少し、本宮に話を聞いて、間違った方向性を考え直してくれると助かるんだが」

「そうだな……あいつはどうしてあんなに攻撃的なんだ？」

理音は表情を変える事なく、翔子と美波が葵から何かを学んでくれる事を希望すると雄二は翔子から受ける攻撃にため息を吐くと、

「お前が素直になれば霧島の攻撃は少なからず減るだろ」

「そうね。坂本くんが素直になれば少なからず、代表は落ち着くわよ」

理音と優子から雄二が態度を改めれば良いと言われ、

「……ぐっ」

「あはは。坂本くんの負けだね」

雄二は優子からも攻撃される事は考えていなかったようで苦虫をかみつぶしたような表情をすると愛子は雄二の顔を見てニヤニヤと笑う。

「それで、姫路さんはどうしたの？」

「ん？　さっきまでのお前と一緒で妄想の世界に沈んでいるだけだ。瑞希は良くも悪くも他人に影響されるからな。お前の影響だろうな」

「何よ。それ？」

優子は理音に引きずられながらも昨日の明久のタキシード姿の写真に視線を移したままニヤニヤと笑っている姿に首を傾げると理音は表情を変える事なく、優子のせいだと言い切ると優子は理音を睨みつけるが、

「アキから『天然』、霧島から『間違った恋愛感』、島田から『暴力性』、そして、優子から『妄想』……濃いな」

「確かにそうかもしれないが……天然は元からだろ」

理音は瑞希は周りから悪影響を受けていると言い、雄二は納得できる部分もあるためか頷くが『天然』と言う部分は瑞希の元から持っている才能であると言い、

「確かにね。姫路さんは天然だよね」

「そうかね？」

愛子は苦笑いを浮かべるが明久は首を傾げる。

「まぁ、優子から受け継いだ妄想は初心者には強力すぎたようでな。この状況だからな。一先ずは家まで送ろうと思ったんだが」

「リオ、今更だけど、姫路さんの家って知ってるの？」

理音は瑞希を家まで送るつもりだったようだが、何かあるのか眉間にしわを寄せるが明久は理音が眉間にしわを寄せている理由がわからないため首を傾げると、

「あぁ、知っているが、さっき、瑞穂さんに連絡したら今日は家を空けるから、預かってくれと言われたんだが」

「理音」

「こうなるわけでな」

理音は瑞穂に連絡したが、瑞希の両親は今日は家にいないと言うと事もあろうか理音に瑞希を任せると言ったようでその言葉に優子は笑顔で理音を睨みつけ、理音は優子の様子にため息を吐く。

「瑞穂さん？」

「瑞希の母親だ」

「何で、リオが姫路さんのお母さんと知り合いなの？」

「ん？　清涼祭であってな。優子もあっているぞ」

「えぇ……姫路さんとそっくりだったわ」

「そうなんだ」

明久は理音の口から出た『瑞穂』と言う名前に首を傾げると理音は清涼祭で会ったと言い、優子は瑞穂の持つ巨乳を思い出したようで血涙を流すが、

「それで、どうしようかと思ってな。流石に優子に睨まれたままと言うのも困るんだが、この状況では俺は対処できない事も多くてな」

「それなら、前田くんの家にお泊まりだね。前回はボクは不参加だったんだから、参加するよ」

「そして、こうなるわけか」

「みたいね」

理音は瑞希をどうするかと聞くと愛子は理音の家でお泊り会だと言い、理音と優子はため息を吐く。

# 第２８１問（前書き）

今回から『恋と理性と幼なじみ』の清瀬大樹が合流します。
大樹のデータをオリキャラデータに追加しました。

## 第２８１問

「それじゃあ、メンバーはどうするの？　美波達も呼ぶ？」

「……秀吉と本宮は良いが、島田と霧島には言うな。また騒ぎになると面倒だ。雄二、お前も帰れ。お前がいると霧島が絶対に嗅ぎつけてくる」

「確かにね」

愛子の提案したお泊り会に明久はメンバーはどうするかと言うと理音は先日のお泊り会の件もあるため、美波と翔子は却下だと言い、雄二にも帰れと言うと優子は理音と同じ意見のようで頷き、

「……あぁ。お前達の言いたい事もわかる。それに翔子が同じ屋根の下にいると俺の身が危険だ。今日は遠慮しておく」

「そうしてくれ。秀吉と本宮はメールを出しておくか？　２人には話をするなと書いて」

「もしくはみんな１度、帰るだろうから、お母さんに伝言を頼んでおくかね」

雄二は理音と優子が言いたい事がわかるようで頷くと理音と優子は美波と翔子に捕まっている秀吉と葵に連絡するかと言うと、

「リオ、ムッツリーニは？」

「却下だ。あいつがくると面倒だ」

「そうかも知れないけど、こんなに女の子が集まるんだよ。呼ばなかったら、狙われないかな？」

「そうかも知れないが、今の瑞希を目の前にあいつがおかしな行動にでないとは言いきれないからな」

明久は康太に声をかけるかと聞くと理音は直ぐに却下する。

「そうれもそうだね。ムッツリーニくんの事だから途中で鼻血噴いちゃうだろうけど」

「それを処理する身にもなれ。掃除に応急処置。充分に呼ばない理由になる。ただでさえ、この状況だぞ」

「確かにそうかも」

愛子は苦笑いを浮かべながら康太が鼻血を吹きだしながら倒れている姿を想像したようであり、理音はうんざりとした様子で瑞希の世話に康太の世話までしてられるかとため息を吐くと明久は苦笑いを浮かべて頷くと、

「それに康太は携帯を持ってないからな。連絡は取れない。盗聴器も少なからず、俺の周りにいる場合は機能しないしな」

「……何？　理音、あんた、おかしな電波とか出してるの？」

「少なくとも市販されてる盗聴器の妨害電波くらいは出しているいろいろと面倒な事に巻き込まれたくないからな」

理音は康太と連絡が取れないと言うと優子は理音の言葉に眉間にしわを寄せるが、理音は表情を変える事なく言い切り、

「……改めて、前田くんって有名人なんだね」

「うん。そう考えると凄い事だね」

「……今更だけどな」

明久と愛子は苦笑いを浮かべ、雄二はため息を吐き、

「悪いな。俺はそろそろ帰るぞ」

「あぁ。俺も怜生の迎えの時間になるからな。そろそろ行く、あまり遅くなると清瀬に迷惑もかかるしな」

「そうだね……それじゃあ、ボクはこのまま行くけど、木下さんと工藤さんはどうするの？」

雄二はお泊り会に参加しないため、帰ると言うと理音も時間を確認して怜生を迎えに行かないといけないと言う。

「ボクは途中まで一緒に行くよ。家は前田くんちと同じ方向だし」

「あたしは1度、帰るわ。お母さんに理音のところに泊まるって言ってくるわ。後は秀吉への連絡もあるし、」

「そうか？　それなら、後でだな」

「えぇ」

「優子、彼氏との別れがそんなあっさりで良いの？」

愛子は途中まで理音達と行くと言うが優子は家に帰ると言い、愛子にからかわれる。

# 第282問

「げっ!?　豚野郎!!」

「し、清水さん?　な、何でこんなところに?」

理音達が怜生を迎えに行くとそこには美春がおり明久を見て威嚇をはじめ、明久は理音の後ろに隠れると、

「……美春、何度も言わせるな」

「いた!?　ヒロ、何をするのよ!?」

理音達と美春の様子に大樹が気づき、美春の頭を軽く叩くと美春は文句ありげに大樹を睨みつけるが、

「前田に吉井、どうした?　今日はずいぶんと多人数だな。木下さんもいないし」

「あぁ。優子は1度、帰った」

大樹は美春の視線を気にする事はなく、怜生を迎えにきた人数の多さと優子がいない事に首を傾げ、理音は優子が帰ったと言い、

「1度?　何かあるのか?　……って、姫路さんはどうしたんだ?」

「ちょっとな。いろいろあったんだ」

「そうなのか?　……えーと、工藤さんだったよね。どうかした?」

大樹はそこで初めて瑞希の様子に気づいたようで首を傾げると理音は話すのが面倒だと眉間にしわを寄せると大樹は理音が大変だった事は理解したようで苦笑いを浮かべると愛子が自分の事を見ている事に気づき、愛子に声をかける。

「あれ？　ぼくの事を知ってるの？」

「そりゃあ、俺達はＡクラスに試召戦争負けたしね。工藤さんは覚えてないかも知れないけど、俺、工藤さんに補習室に送られたんだけど」

「あれ？　そうだったかな？　ごめん、覚えてないや」

愛子は大樹が自分の名前を知っている事に首を傾げると大樹は苦笑いを浮かべながら、愛子と試召戦争で戦ったと言うが愛子は覚えていないようで苦笑いを浮かべると、

「まぁ、そんなもんだろ。えーと、清瀬大樹。Ｃクラス」

「Ａクラスの工藤愛子です。趣味は水泳と音楽鑑賞で、スリーサイズは上から７８・５６・７９、特技はパンチラで好きな食べ物はシュークリームだよ」

「……工藤さん、冗談は場所を考えて言った方が良いと思うよ」

「えっ！？　どう言う事？」

大樹と愛子はお互いに自己紹介をするが愛子は大樹をからかうつもりだったようで挑発的な笑みを見せるが大樹は愛子の挑発に乗る事

なくため息を吐くが愛子は大樹の言葉の意味がわからないようで首を傾げた時、

「きゃあぁぁ！？」

「……スパッツだと、酷いよ。工藤さん、ボクを騙したんだね」

残っていた園児が集まってきて愛子のスカートをめくり、愛子は驚きの声をあげると明久はしっかりと愛子のスカートの中身を確認したようでスカートのなかはスパッツだったため、膝を付き血涙を流す。

「わかった？」

「……うん。気を付ける」

「……ヒロ、ちょっと良い？」

「何だ？　って、腕を引っ張るな！？」

大樹は愛子から視線を逸らしながら言うと愛子は反省したようで頷くと美春は不機嫌そうな表情で大樹を呼ぶと大樹の腕を引っ張って奥に入って行き、

「……アキ、立て。工藤も少し反省しろ」

「う、うん。気を付けるよ」

「……愛子お姉ちゃん、大丈夫ですか？」

理音はため息を吐くと明久に立つように言い、愛子には反省するように言うと大樹の母親が怜生を連れて来て、怜生は顔を伏せている愛子の顔を心配そうに覗きこむ。

「大丈夫だよ。怜生くん」

「……そうなら、良いです」

愛子は怜生の登場に笑顔を見せて何でもないと言うと怜生は笑顔を見せ、

「……ありがとうございました。清瀬と清水にもよろしく伝えておいて下さい」

理音は大樹の母親に頭を下げると幼稚園を後にする。

## 第２８３問

「そう言えば、吉井くんは家に帰らなくて良いの？」

「うん。リオの部屋着を借りれば良いしね」

理音の家に向かう途中で愛子は制服のまま、一緒に歩いている明久に聞くと明久はそのままでも気にしない様子であり、

「でもさ。下着を借りるのはいやじゃないの？　男の子ってそんな感じなのかな？」

「まぁ、洗濯はしてるし。別に気にしないかな？」

「なんか、優子が喜びそうな状況だね」

愛子は明久の様子に苦笑いを浮かべながら気になっている事を聞くと明久はあまり気にしていないようで愛子の質問の意味がわからないのか首を傾げると愛子は優子（ふじょし）が喜びそうと言う。

「……久保は羨ましいとか言って血涙を流すだろうけどな」

「それはそうかも」

理音は明久と愛子の会話に利光の顔が思い浮かんだようで眉間にしわを寄せると愛子は頷き、

「なんで、久保くんが出てくるの？　そう言えば、雄二と霧島さんの話もするんだよね？　それなら、久保くんも呼ぶ？」

「……いや、いろいろと面倒だから遠慮する」

「優子に知られたら大変だからね」

明久は意味がわからないようで首を傾げると理音と愛子は何も知らない明久を可哀想なものを見る目で見て言うと、

「何、2人してその反応は!?　久保くんに何かあるの!?」

「別に何もないが、ただ……アキ、お前は1人で久保には近づくな」

「そうだね。それが良いよ」

明久は利光にあると感じたようで理音と愛子に聞くと2人は首を振る。

「何、その反応は!?　絶対に何かあるよね?　ボクには言えない事なの?」

「……と言うか、だいたいの人間が気づいてるだろうな。むしろ、自分で気づけ」

「うん。そうした方が良いよ」

明久は理音と愛子の反応に自分の身の危険に関わる事だと感じたようで声を上げるが理音と愛子は答える気はなく、

「あっ!?　ぼくはこっちだから、怜生くん、また後でね」

「……はい」

「あぁ……そう言えば、工藤は家に来た事ないが場所はわかるか？」

「うん。あそこの洋館に人が住むって話になった時、ご近所で結構な騒ぎになってたから、場所はわかるよ」

愛子は自分の家と理音の家に別れるところに着いたようで怜生に手を振ると理音は愛子が自分の家に来た事がない事に気づき聞くと愛子は理音の家は有名だと笑う。

「そうか。それなら、後でだな」

「うん。優子から聞いてるけど、前田くんは料理が上手らしいから夕飯、期待してるよ」

「あぁ、期待していてくれ。ちゃんと、2度と立ち上がれないようにプライドを粉砕する料理を作っておこう」

理音が頷くのを見て、愛子は理音が作る夕飯に期待すると笑うと理音は表情を変える事なく美味いものを作ると言うが、

「……やっぱり、手加減して、ぼくも女の子だから、あまりに差を見せつけられると立ち直れないかも知れないから」

「そうか？」

「うん。お願い。それじゃあ、また後でね」

愛子は理音では女の子に配慮する事なく美味しい料理を作ると思っ

たようで顔を引きつらせると理音は首を傾げると愛子は改めて手を振ってから自分の家に向かい歩きだし、

「アキ、俺達も行くぞ」

「う、うん。わかったけど、久保くんは？」

理音は明久に自分達も帰ると言うと明久はまだ利光の事を聞くが理音は気にする事なく瑞希を引きずって歩いて行く。

# 第２８４問

「リオ、木下さん達って何時頃くるのかな？」

「さあな。工藤は近いからもう直ぐくるとは思うけど……優子は秀吉と本宮と一緒にくるそうだ」

理音と明久はキッチンに並んで夕飯を作っていると明久は集まっていないメンバーが何時頃にくるのか理音に聞くと理音は愛子はしばらくしたらくるだろうと言った時、理音の携帯電話にメールが届いたようで、優子は秀吉と葵と一緒にくると話す。

「それじゃあ、少し時間があるね。どうしようか？」

「そうだな……ん？　どうした。怜生」

「……瑞希お姉ちゃんが」

明久はメンバーが集まらないため、理音に何をして時間を潰すかと聞くと怜生がキッチンに現れて瑞希の名前を呼ぶと、

「どうした？　妄想の世界に入り込み過ぎて笑いだしたか？　とうとう、優子の領域まで入ったか」

「姫路さんもどこまで行くんだろうね……って、ちょっと待ってよ。リオ、木下さんってそんな事もするの？　そんな人だったんだ」

「あぁ。秀吉の話じゃ、家では割と隠す事はなかったけどな。最近はあいつもＦクラスのおかしな空気にあてられてきたみたいで所か

まわずみたいだ」

「……そう考えるとFクラスって凄いね」

「あぁ、あそこまで本能に忠実なのはある意味、才能だな」

理音は瑞希の妄想が次の段階に進んだと言うと明久は優子の妄想壁の酷さに顔を引きつらせるが理音は原因はFクラスに関わった事だと言うと明久と2人で改めてFクラスはおかしいと言う。

「……違います。瑞希お姉ちゃんが気づきました」

「あ、あの。前田くん、どうして、私は前田くんの家にいるんですか？　……よ、吉井くん！？」

「ん？　正気に戻ったか」

怜生は首を振ると瑞希は今の状況がわからないようで恐る恐るキッチンを覗き、理音に声をかけると明久がいる事に驚きの声を上げ、理音は表情を変える事なく瑞希に正気に戻ったかと言うが、

「あ、あの。正気にってどう言う事ですか？」

「まぁ、説明は居間でしようよ。ゆ、夕飯の準備も終わったし」

「そうだな。飲み物を用意するから、居間に戻ってろ」

瑞希は意味がわからないようで首を傾げ、明久は瑞希がキッチンに入る事を危険と判断しているためか瑞希を居間に戻そうとし、理音は先に戻れと言うとインスタントの紅茶の準備を始め出し、

「前田くん、私が変わりま……」

「ひ、姫路さん、リオに任せて居間に行ってよう」

「は、はい。わかりました」

瑞希は理音の代わりに自分が紅茶を淹れると言うと明久は瑞希と怜生の手を取って居間に戻ろうとすると瑞希は顔を赤くして3人で居間に戻る。

「アキは相変わらず、命がけだな……良く考えたら瑞希に料理を教えた方が良いのか？」

理音は転校してきてから何度か瑞希の料理の餌食になっている明久の様子を思い出したようで首を掻き、

「まぁ、アキの問題か？　瑞希が傷つかないためと言っているがそのうち、それじゃあダメだと気づくだろ……何かお茶菓子ってあったか？　ん？　そう言えば、瑞希に着替えも渡さないといけないか？　……後であの人の荷物を探してみるか？　いや、サイズ的に合わないか」

明久と瑞希の関係が変わって行った時の事を考えるが結局は2人の問題だと言うとお茶菓子になりそうなものを探し始める。

## 第２８５問

「ご迷惑をおかけしました」

「別にかまわん。それより、制服のままと言うのもなんだろ」

「そうですね。お願いします」

理音は瑞希に今の状況を話すと瑞希は自分が妄想世界に飛び立っていた時の事を思い出したようで理音に謝ると理音は表情を変える事なく泊まりになるため、瑞希に何か着替えになるものを探してくると言う。

「リオ、手伝う？」

「いや、手伝うと言ってもな……」

「どうかしましたか？」

明久は理音の言葉に手伝うか聞き、理音は明久の言葉に何かを考えるように瑞希を見ると瑞希は首を傾げると、

「……いや、一応、あの人の服もあるんだが……瑞希が着るようなものがあるかもわからないし、仮にあったとしても瑞希の胸のサイズでは入らないと思ってな。となるとやっぱり、俺の服か？」

「……そ、そうですね」

理音は母親の服を漁ろうかとも思ったようだが瑞希が着るような服

がないと思ったようで頭をかくと自分の服で良いかと言うと瑞希は苦笑いを浮かべ、

「まぁ、多少でかいが制服よりはマシだな。付いてこい」

「はい」

理音は瑞希に部屋へ付いて来いと言い、２人で理音の部屋に向かう。

「……とりあえず、瑞希が着るようなものはスウェットくらいしかないな。これとかこれか……どうした？」

「えーと、同じ年の男の子の部屋って入るのが初めてなんで、少し緊張を」

「悪かったな。アキの部屋じゃなく」

「そ、そう言う事じゃないです！？」

理音は瑞希を部屋に連れて瑞希が着れそうな服を出していると瑞希は同年代の男性の部屋が物珍しいようできょろきょろと見回しており、理音は表情を変える事なく瑞希をからかうと瑞希は顔を赤くして慌て、

「それで、何か面白いものでもあったか？」

「いえ、面白いも何も……さっぱりとしすぎてますよね」

「当然だろ。怜生もいるんだ。１人でこの部屋にいる事の方が少ないんだからな」

「それもそうですよね……」

理音は瑞希の反応にくすりと笑い、何か変わったものがあるかと聞くと瑞希は改めて理音の部屋を見回すと理音の部屋には必要最低限のものしか置いてないが瑞希は写真立てに1枚の写真が入っている事に気づき写真立ての中の写真には理音が留学してしばらくたった頃の写真なのか不機嫌そうな顔をした小さな頃の理音と1人の老紳士が写っている。

「前田くん、この写真って？」

「ん？　あぁ、俺が世話になった教授だ。その人は俺に薬学や今の俺の考えのもとになるものを教えてくれた人だ」

「そうなんですか。写真を飾っていると言う事は尊敬しているんですか？」

「……尊敬？」

瑞希は写真立ての写真が気になったようで理音に写真の人物の事を聞くと理音は隠す必要などないと思っているようであっさりと答えると瑞希は理音の答えに写真の男性が理音の恩師だと思ったようで聞き返すが理音の眉間にはしわがより、

「違うんですか？」

「……いや、その人の教えは俺の中で生きてはいるが尊敬と言われるとわからないな。ここに戻ってきて、怜生と一緒に住むようになってその人の教えは偏っていると実感するからな。優子にもよく、

それは違うと言われる。改めて、考えると……多分、変人と言う部類に確実に分類される人間だろう」

「そ、そうなんですか？」

理音は眉間にしわをよせたまま、その男性の事を話すと瑞希が理音の反応に苦笑いを浮かべると、

「まぁ、世話になった事は確かだ。瑞希、荒されても別に困るようなものはないが後は自分で選べ」

「は、はい。ありがとうございます」

理音は瑞希に着替えを選べと言うと居間に戻って行く。

# 第２８５問（後書き）

どうも、作者です。

理音の恩師の写真に興味を示す瑞希。だから、こういうのは優子とやれよと言うツッコミが聞こえますが気にしない方向で行きましょう。

宣伝？

以前に活動報告にも書かせていただきましたがツイッターを始めました「ｍａｓｉｏｎｎ」で登録していますのでツイッターをやっている方はフォローしてくれると嬉しいです。

# 第２８６問

「……」

「あ、あの。明久くん、どうかしましたか？」

「気にするな。ダボダボの男ものの服を女がきてるのはそれなりに男心をくすぐるらしい。まぁ、俺はその姿より、裸Ｙシャツが良いがな」

明久は理音の服を着て戻ってきた瑞希を見て言葉を失い、瑞希は首を傾げると理音は表情を変える事なく瑞希に今の明久の心境を話すと、

「それって、どう言う事ですか？」

「ん？　簡単に言えば……」

「な、何でもないから！！　ひ、姫路さんも気にしないで」

瑞希は理音の言葉の意味がわからなかったようで理音に聞き返し、理音が答えようとした時、明久は正気に戻り、理音の口を塞いで瑞希に何もないと言い、

「そうですか？」

「そ、そうだよ。姫路さんは全然、気にしなくて良いから、リ、リオもおかしな事を言わないでよ」

瑞希は首を傾げ、明久はもう1度、瑞希に向かい何もないと言うと理音にも余計な事を言わないように言うが、

「アキは瑞希の格好に見とれていたんだ」

「止めたのに言い切ったよ!?」

「そうなんですか……」

理音は表情を変える事なく、明久が瑞希に見とれていたと言い切り明久は理音の言葉に声を上げ、瑞希は顔を赤くしてうつむく。

「……瑞希お姉ちゃん、良かったですね」

「はい」

怜生は瑞希の服を引っ張り言うと瑞希は嬉しそうに返事をするが、

「リ、リオ、どうして、止めたのに言うんだよ!!　ボクがまた、姫路さんにおかしな人間だと思われるじゃないか!!　ひ、姫路さんに嫌われたらどうするんだよ」

「アキ、お前がおかしいと言うのは世界標準だから、今更、気にするな。それに今の状況でそんな反応をするから小さな生物にまでバカなお兄ちゃんと呼ばれるんだ」

明久の目には瑞希の反応は映っていないようで理音に余計な事を言うなと言い、理音は明久と瑞希を見比べてからため息を吐き、

「何、そのため息は!?　ひどくバカにされてる気がするんだけど

！！」

「ん？　アキ、お前にバカにされてる事に気づく知能があったのか？」

「あるからね！！　ボクにだってそれくらいの知能はあるからね！！」

明久は理音の様子にバカにされてる気がすると言うと理音は明久の反応に驚きの表情をし、明久は全力で理音の言葉を否定する。

「……アキ兄ちゃん、それなら、瑞希お姉ちゃんの気持ちにも気づいてください」

「怜生くん、姫路さんの気持ちって、何？」

怜生は理音に全力で突っかかってる明久の服をつかみ明久に聞くが明久は怜生の言葉の意味がわからないようで首を傾げると、

「……瑞希、前から言おうと思ってたんだが、お前ならアキより良い男が捕まると思うんだが、俺が言うのも何だが、将来性や人生設計と言うものは皆無の人間だぞ」

「そ、それでも、明久くんが良いです……」

「そう思うなら、はっきりと言え、島田に気を使ってるのもわかるが、本気なら遠慮するな……お前にこんな事を言うと島田に文句を言われるかも知れないが俺はお前との付き合いが長いせいか俺の中の理解できない部分ではでお前の味方をしたいようだ」

理音は瑞希に明久は考え直した方が良いと言うが瑞希はそれでも明久が良いと言うと理音はくすりと笑うと瑞希よりだと言い、

「はい。頑張ります」

瑞希は笑顔で理音の言葉に返事をする。

## 第２８７問

「おじゃまします。怜生くん、遊ぼう」

「……はい」

「……工藤、騒ぎすぎて物を壊すなよ」

愛子が到着すると愛子は怜生がお気に入りのようで怜生に声をかけると理音はため息を吐きながら言い、

「壊さないって、ぼくはそれくらいの常識は持ってるよ。怜生くん、まずは前田くんの部屋のガサ入れから……」

「……言ってるそばからおかしな事をするな」

「ノリが悪いよ。せっかく、前田くんの部屋から優子の残り香を探そうと思ったのに」

愛子はおかしな事をしないとは言いながらも理音の部屋を物色しに行こうと言い、理音は愛子の首をつかむと愛子は理音にノリが悪いと言う。

「木下さんの残り香？　……」

「や、やっぱり、そうですよね。前田くんは木下さんとお付き合いしているわけですし」

「アキ、おかしな殺意を出すな。瑞希、お前もおかしな妄想をする

な」

愛子の話に明久は割り切っていたはずだったのだが殺意が抑えきれなかったようであり、瑞希は再び、妄想の世界に飛び立とうとしはじめ、

「工藤、おかしな事を言うな。ここには怜生がいるんだ。簡単にそんな状況持っていけるわけがないだろ」

理音はため息を吐くと愛子は理音の言いたい事も理解出来たようで苦笑いを浮かべる。

「だけど……」

「何だ？　男の家に上がるのが初めてだからと言ってもおかしな事をするなよ」

「な、何を言ってるの？　ぼくは」

愛子は物珍しそうに理音の家の中を見回すと理音は愛子が『保険体育の実技』が得意と言っているのは嘘だと思っているため、愛子におかしな事はするなと言うと愛子は慌て始めるが、

「……康太の興味を引きたいなら、そんな風にからかってないで素直に言ってみたらどうだ？」

「な、な、何を言ってるんだよ。前田くん、ぼ、ぼくはムッツリーニくんのことなんかなんとも思ってないよ」

「……以前から思ってたんだが、工藤、お前は俺の時には自分に素

直になれだと言っていたわりになぜ、自分の時は素直に動こうとしないんだ？」

理音は表情を変える事なく、愛子に素直になれと言うと愛子の顔は真っ赤に染まって行き、理音は愛子の考えが理解できないようで眉間にしわを寄せると、

「く、工藤さんって土屋くんの事が好きなんですか？」

「……ムッツリーニは異端者、異端審問会に……ぐふっ！？」

「……アキ、お前は黙っていろ」

瑞希は理音と愛子の様子に目を輝かせると明久は康太への殺意を背中にまとい始め、理音は面倒になったようで明久の口に『栄養剤』を放り込むと明久は意識を持って行かれ倒れ込み、

「……アキ兄ちゃん、大丈夫ですか？」

「……これで記憶を失えば良いんだけどな」

怜生は倒れ込んだ明久の顔を覗き込むが理音は表情を変える事なく言い切り、

「それで、工藤さん、どう言う事ですか？」

「ちょ、ちょっと、姫路さん、落ち着いてよ！？　ま、前田くんも助けて！！」

「工藤、良いか？　そう言う時は、瑞希、それを聞くならお前も全

部吐くんだよな？　と言えば収まる」

愛子は瑞希の様子に戸惑っているようで理音に助けを求めると理音は瑞希にも同じように話せと言うと瑞希は視線を泳がせる。

# 第２８８問

「そう言えば、優子達、遅いね？」

「ん？　そうだな。まぁ、そろそろ、来るころだろう」

「噂をすれば、と言うやつですね」

愛子が到着してから、栄養剤で意識を奪われて倒れている明久を横目に世間話をしていたのだが、愛子は時計を見て優子達が遅いと言った時、家のインターホンが鳴り、

「ちょっと出てくる」

「うん」

理音は玄関に向かい、

「ずいぶんと遅かったな」

「こんにちはです。怜生くんのお兄さん♪」

「……ごめん。理音、見つかっちゃった」

理音が玄関のドアを開けると葉月が顔を覗かせ、優子は申し訳なさそうに理音に謝ると、

「……」

「そうか。とりあえず、島田以外はよく来たな」

美波は理音が自分を故意に外していると思っているようで理音を睨みつけており、理音は表情を変える事なく美波以外に家に入るように言い、

「何よ。その反応は！！」

「……島田、俺はお前を呼んだ記憶はないんだが」

美波は理音を怒鳴りつけるが理音は表情を変える事なく、美波は呼んでいないから帰れと言う。

「葉月ちゃん、ここは長くなるからなかに入ってようね」

「お姉ちゃんと怜生くんのお兄さんは良いですか？」

「うむ。２人は少し話があるようなのじゃ。本宮もなかに行くのじゃ」

「は、はい」

理音と美波の様子に優子は葉月の手を引いて家に上がって行き、秀吉と葵は２人に続いて行くと、

「前田、あんた、どう言うつもり？」

「どう言うつもり？　それは俺の言葉じゃないのか？　今日はお前は頭数に入っていなかったんだ。いきなりきて因縁をつけられる理由がわからん」

美波は今朝の明久のバイトの件もあるためか理音は完全に瑞希の味方をしていると思っているようで理音を睨みつけるが理音は意味がわからないと言い切り、

「何で、ウチだけ仲間はずれなのよ！！　あんたにウチをアキから引き離す権利があるの？」

「……待て。まず、お前が前提にしている話がおかしい」

美波は理音を威嚇するように言うと理音はため息を吐く。

「だいたい。お前だけ、仲間はずれと言うが今回は雄二、霧島、康太は不参加だ。お前もその場にいなかった」

「なら、何で、木下と葵は参加なのよ？　あの2人はウチと一緒にいたでしょ」

理音は美波以外にも呼んでない人間はいると言うが美波は納得がいかないと理音を怒鳴りつけると、

「2人には協力して貰いたい事があったから優子に頼んで秀吉に都合が悪くなければ合流してくれと頼んだだけだ」

「なら、それにウチを協力するわよ」

理音は表情を変える事なく秀吉と葵には協力して欲しい事があると言い、美波はそれに自分も協力すると言うが、

「断る。感情で動き過ぎるお前は役立たずだ。それに人の話も聞か

ずに勝手に暴走されたら打ち合わせの意味もなくなるからな」

理音は表情を変える事なく、美波の協力はいらないと言い切る。

「……」

「島田、昼にも言ったが、お前は感情的に動き過ぎだ。今回に関してはお前の感情で俺は八つ当たりを受けてるにしか過ぎないからな。正直、アキがお前と瑞希、もしくは他の誰かを選ぶかは俺の口の出す事じゃないが、それでもそんな事ばかりしていれば愛想を尽かされるぞ」

理音はため息を吐きながら言うと、

「せめて、最初に人数に入ってないんだ。連絡くらい入れろ。まったく、2人分追加か……飯、足りるか？　まぁ、簡単なものを追加するか」

「う、うん。ゴメン」

理音は用意した夕飯が足りるかと首を傾げ、美波は理音の様子に納得はいかなさそうだが謝ると2人で家の中に入って行く。

# 第２８９問

「それで、これって何の集まりなの？」

「気にするな。さっきも言ったが、お前がいる事でこの集まりの意味がなくなった」

夕飯を食べ始めてしばらくすると美波は今日のお泊り会の事を聞くと理音は表情を変える事なく、美波が来た事で話し合いなど無意味だと言い、

「だから、それは何なのよ!!　ウチにケンカ売ってるの!!」

「……何度も言わせるな」

「ねえ。理音、島田さんにも聞いて貰わない？　どうせ、あたし達が何かしようとしてる事は島田さんにばれちゃったわけだし、下手にあたし達が何か考えてるって事を代表や坂本くんに話されても困るし」

美波は理音の態度が気に入らないと言いたげに言うが理音が感情的になるわけもなく、美波の言葉を斬り捨てると優子はため息を吐く。

「……確かにそうじゃのう。雄二と霧島にばれるのもじゃが、島田がワシらを変に疑うとＦＦＦ団がおかしな暴走をしても困るのじゃ」

「……それも考えられるか。仕方ない。島田、話に加えてはやるが、学園で余計な事を言ってみろ。お前のドイツ時代の過去を面白おかしくねつ造してやる。そうだな。清瀬には悪いが、清水が喜びそう

な噂にしてやろう」

「……前田くん、その脅し方はどうなのかな？」

秀吉は優子の意見に頷くと理音も優子と秀吉の考えにも納得する要素があったようで、美波に今日の事を言いふらすなと言うと愛子は理音の言葉に苦笑いを浮かべるが、

「……わかったわ。だから、間違っても美春がおかしな真似に出るような噂は流さないで」

「……それで、納得するんですね」

「まぁ、清水さんが相手じゃね」

美波は理音の脅しに屈服し、葵と明久は苦笑いを浮かべると、

「それで、理音、結局、どうするつもりなの？　あたしも本宮さんも詳しい話は聞いてないんだけど」

「わ、私もです」

優子は理音に詳しい事を話せと言い、瑞希も今日1日は妄想の世界に飛んでいたため、話に付いて行けてないため、優子に続く。

「ん？　そうだな。元々、この話は俺とアキと」

「ぼくと久保くんから始まったんだよ」

理音は状況を理解していないメンバーに説明を始めようとすると愛

子が手を上げ、

「どう言う事ですか？」

「うん。ちょっと、いろいろと思う事があってさ。まずはどこから話そうかな？」

「まずはウェディング体験の事からだな」

葵は最初のメンバーを聞いて首を傾げると愛子は苦笑いを浮かべると理音にどこから話そうかと聞き、理音はウェディング体験からがわかりやすいと言うと、

「そうだね。そこからがわかりやすいね。最初は如月グループからの文月学園のスポンサー料を増やすのにウェディング体験を成功させれば増えるかな？　って話になって、吉井くんに召喚大会のペアチケットはどうしたのかって聞いたら代表に上げたっていうでしょ」

「それで、せっかくだから、２人のデートをプロデュースしようって話になってね」

「……プロデュースと言う名の野次馬になったわけだ」

愛子は召喚大会の副賞のチケットが翔子の手に渡ったと言うと明久は無責任に楽しそうに笑い、理音はため息を吐く。

## 第２９０問

「野次馬ですか？」

「あぁ、俺は個人的にはあの2人は2人っきりにしていた方が進展すると思うんだけどな」

瑞希は理音の言葉に首を傾げると理音は雄二は周りに知り合いがいる間は素直にならないと思っているため、眉間にしわを寄せるが、

「そんな事ないよ。ボクはどうしてもこれを成功させないといけないんだ」

「……こんな感じでな」

明久はウェディング体験の結果で強化合宿の移動費が出るかもしれないと本気で思っているようで絶対に成功させると言い、理音がため息を吐くと、

「前田くん、今更だけど、これが成功したとして移動費って出るの？」

「……出すわけないだろ。移動費がでないのは文月のクラス間で差をつけると言うシステムの一環だ。アキに教えたのは先に言っとかないと当日に移動費がないって事もあり得るからだ……それがこの状況、バカの考える事は俺には理解できない」

愛子は理音に移動費の事を確認し、理音は考えがあって強化合宿の移動費を明久に教えたと白状すると明久の行動が自分の考えとは大

幅にずれているため、眉間にしわを寄せたまま言う。

「ねえ、前田。アキがやる気になっているのはわかったわ。でも、どうやって如月グランドパークに潜入するのよ？」

「そうです。プレミアムチケットがないと入場ができないはずです」

「それなら、任せてよ。この間、リオ達とバイトした時にオープン初日は多くの人が来るはずだから、臨時のバイトに入れるようにスタッフさんと話をしてきたから」

美波と葵は自分達は如月グランドパークに入場する事はできないと言うと明久は先日のバイトの時に許可をもらってきていると言い、

「……こう言う時の吉井くんの行動力って誉めて良いのかしら？」

「……わからんのじゃ」

優子と秀吉はため息を吐くが、

「それで、リオ、怜生くん、木下さんは元々、行く予定だったわけだし、雄二が逃げないようにしてもらってさ」

「怜生くん、ノインちゃんに会えるですか？」

「……はい」

明久は気にする事なく、理音、怜生、優子の３人の役どころを話すと葉月は自分も如月グランドパークに行きたかったようで残念そうな表情をすると、

「葉月、我慢しなさい」

「わかってるです」

美波は葉月を叱り、葉月は自分が我がままを言ってると理解しているようで小さな声で返事をする。

「ボクも葉月ちゃんを連れてってあげたいけど、休憩はあるとは言えバイトだから、高校生じゃないとね」

「そうですね。流石に無理がありますね」

明久は美波と葉月の様子に苦笑いを浮かべると瑞希も明久の意見に同意するが、

「……お兄ちゃん」

「……あぁ」

「まぁ、あんたなら、そうなるわね」

怜生は理音の服をつかむと理音は頷き、優子は理音と怜生の様子にため息を吐くと、

「葉月ちゃん、あたし達と一緒に遊びに行きましょうか？」

「ホントですか！！」

「えっ！？　ちょっと、優子」

優子は葉月を如月グランドパークに誘うと葉月は嬉しそうに返事をするが美波はいきなりの優子の提案に驚きの声を上げる。

「チケットは理音がどうにかするわよ」

「あぁ、子供1人くらいならな」

「ありがとうです。怜生くんのお兄ちゃんと彼女さん」

理音と優子は葉月1人ならどうにでもなると言うと葉月はよほど、嬉しかったようで理音と優子に飛び付き、

「……危ないから飛び付くな。怪我するからな」

「はいです」

理音はしっかりと葉月を抱きとめると無表情だが優しい声で葉月の事を叱る。

## 第２９１問

「それで、具体的な方法はどうするのじゃ？」

「それなんだけど、まずは２人で記念撮影をして少し２人で見て回って貰って、お化け屋敷、そして、ウェディング体験で」

秀吉は理音の様子に苦笑いを浮かべながら、具体的な方法を聞くと明久は真剣な表情で雄二と翔子のために考えたプランを話し始め、

「……えーと、前田くん、愛子、本当にこれで成功すると思いますか？」

「まず、無理だろうな。基本的に危機的状況の意味を履き違えてるからな」

「うん。ぼくも前田くんと同じ意見かな」

明久の口から出たお化け屋敷で『翔子が本気で雄二にお仕置きをすると言う状況』に葵は顔を引きつらせると理音と愛子はため息を吐くが、

「はい。それなら、２人の距離は縮まると思います」

「お化け屋敷でデートよ。女の子は頼りになる男の子と一緒なのよ。当然、上手く行くわよ」

「うむ。記念撮影はムッツリーニにも手伝ってもらうのじゃ」

「当然、そのつもりだよ」

Fクラスはやはり、どこかずれているようで理音以外のFクラスは明久の作戦に頷いており、

「本宮さん、今更だけど、本当にあのバカが相手で良いの？」

「は、はい。む、むしろ、本当に私が木下くんの相手で良いんでしょうか？」

優子はため息を吐きながら、秀吉で本当に良いのかと葵に聞くと葵は顔を赤くして頷き、

「メガネのお姉さん、真っ赤です」

「そうだね」

葉月は顔を赤くしている葵を見て言うと愛子は葵の反応に苦笑いを浮かべる。

「まぁ、お化け屋敷はたぶん、どうしようもないだろうからな。記念撮影はきちんとしたのを撮らせてやりたいな」

「そうだね。あの2人の事だから、坂本くんが余計な事を言って、代表にアイアンクローをされてる様子が目に浮かぶからね」

理音はすでに明久達の暴走に関しては諦めているようで優子、愛子、葵の常識の通じるメンバーだけで雄二と翔子にキチンとしたデートをさせてやりたいと言うと愛子は理音と同じ意見なようで苦笑いを浮かべたまま頷くと、

「そうね。坂本くんのテレ隠しもどうにかしないとあの2人はまとまらない気がするわ」

「おおきなお兄さんは素直じゃないですか？」

「そうだな。まぁ、雄二にも雄二の考える事があるんだろ……素直になれない何かがな」

優子は雄二が素直になれば直ぐにまとまると言うと葉月は雄二が素直じゃないと首を傾げ、理音は雄二が翔子の事を大切に思っている事は理解できているが雄二の踏み出せな理由がわからないためか少し何かを考えるように呟き、

「……お兄ちゃん、どうかしましたか？」

「……いや、何もない」

怜生は理音の表情に何かを感じたようで不安そうな表情をして理音の服を引っ張ると理音は直ぐに表情を戻して怜生の頭を優しく撫でる。

「まぁ、問題は代表と坂本くんより、あのメンバーよね」

「そうなんだよね。弟くんはこっち側かな？　と思ってたんだけど、どっぷり、Ｆクラスの志向だったし、吉井くんだけなら、ぼく達で制御できるかな？　とも思ったんだけど」

優子は明久達が雄二と翔子のデートの邪魔にしか思えないようでため息を吐くと愛子は秀吉が明久側に付いた事に苦笑いを浮かべると、

「……島田の乱入で戦力的には五分、むしろ、勢いでは完全に負けてる」

「はい。そうですね」

理音は美波さえ乱入してこなければどうにか話を戻せたと言い、葵は苦笑いを浮かべる。

「まぁ、経路はどうなるかわからないが俺と優子が居れば雄二もこっちに便乗してくるだろ。そこでなるべく霧島の暴力を抑える事が重要だな」

「そうよ。理音、面白いからって言って、代表を煽るような事は止めてよね」

「わかってる。流石に怜生や葉月の前で惨殺風景は見せられないからな」

理音はため息交じりで雄二をどう生かして行くかと言うと優子は理音をジト目で睨みつけるが理音は怜生と葉月の前ではそんな事はしないと言うと、

「怜生くんのお兄さんと彼女さんはとっても仲好さんです」

「……はい」

そんな2人の様子を見て怜生と葉月は嬉しそうに笑う。

## 第２９１問（後書き）

どうもです。

次回は当日まで飛びます。

番宣

リトルバスターズ！の二次小説を投稿しました。
『～あの日の約束～』と言う作品です。
神北小毬の幼なじみが主人公な作品です。リトルバスターズ！もやったよ。って人たちは見てくれると嬉しいです。

# 第292問

「……理音、これは何の嫌がらせだ？」

「……変な因縁をつけるな」

理音と優子は如月グランドパークのプレオープンの日に怜生と葉月を連れて駅でキップを買っていると翔子を腕につけた雄二が理音を見つけるなり、理音を睨みつけるが理音は気にすることなく、

「……怜生は幼稚園児だからキップはいらないんだよな？」

「そうです。怜生くんのお兄さん、葉月のキップ代です」

「葉月ちゃん、今日はお金を出さなくて良いわよ」

理音達は雄二を気にする事無く、キップを買うと、

「……混んでるな」

「まぁ、プレオープンだしね」

「楽しみです。怜生くんのお兄さんと彼女さん、今日はありがとうございますです」

「……」

理音は混んでいる駅を見てため息を吐くと優子は苦笑いを浮かべ、怜生と葉月は楽しみなようで笑顔を浮かべている。

「……おい。完全に無視か？」

「無視も何もお前らはデートだろ。俺達は元々、如月グランドパークに行くと言っていただろ」

「あたし達もデートだけど、この通りだから」

雄二は眉間にしわを寄せながら理音と優子に声をかけると理音と優子は自分達の事は気にするなと言うと、

「せ、せっかくだ。どうせなら、一緒に行こうぜ。しょ、翔子もそれで良いな？」

「……雄二が言うなら、それで良い。清涼祭の時に優子と理音とはダブルデートをしようって約束もしたし」

雄二は翔子と2人っきりより、怜生や葉月がいた方が安全だと判断したようで理音達と一緒に行動したいと言い、翔子に同意を求めると翔子は頷き、

「俺は別にかまわないが、怜生と葉月は問題ないか？」

「……はい」

「おおきなお兄さんもキレイなお姉さんもみんな一緒の方が楽しいです」

理音は絵おと葉月に雄二と翔子が一緒でも良いかと聞くと2人は大きく頷く。

「それなら、早くキップを買って来い。せっかくのイベントなんだ。怜生と葉月の座る場所くらいは確保したいから俺は先にホームに行っているぞ」

「……なあ、木下、前から思ってたんだが、理音って人混みとかになぜか火が点くタイプの人間だよな？」

「今更ね。実際、顔に出てないけど、怜生くんや葉月ちゃんと同じくらいに楽しみにしてると思うわよ」

理音は雄二と翔子に早くしろと言うと怜生と葉月を連れて改札を通って行き、雄二は理音の様子に優子に理音の事を聞くと優子は苦笑いを浮かべると、

「あたしも先に行ってるから、代表も坂本くんも急いでよ。プレオープンだから遊ぶ時間がないくらい混んでるとは思わないけど、せっかくだし、時間一杯楽しまないと損だしね。坂本くんも『いやだ』とか言ってないで楽しみましょう」

「……まぁ、そうなんだけどな」

自分も先に行くと言い、雄二におかしな意地をはるなと言って改札を通って行き、雄二は優子の背中を見送りながら何かを考え込むような表情をする。

「……雄二、キップを買ってきた。私達も行く」

「あぁ。わかった！？　しょ、翔子！？　腕を放せ！？　決まってる。それは関節技だ！？」

「……でも、カップルはみんな腕を組みものだって」

「違う！？　そうじゃない！？　前に、清瀬がそうじゃないって言ったろ！？」

翔子は自分と雄二のキップを買ってきたようで理音達を追いかけると言うと雄二の腕に抱きつくがその抱きつき方はいつも通り関節技であり、雄二が声を上げると、

「……そうだった。こう？」

「……あぁ。行くぞ」

翔子は前に大樹に教わった抱きつき方に直して雄二の顔を覗き込み、雄二は気まずそうに翔子から目を逸らして2人で改札を通って行く。

## 第２９３問

「なぁ、理音」

「何だ？」

「今更だけど、何で、島田の妹がいるんだ？」

電車を降りて如月グランドパークに向かう途中に雄二がどうして葉月が一緒にいる理由を聞くと、

「ん？　アキ達がな。お前らのデートを個人的にプロデュースすると言ってな。その時に葉月も一緒でな。行きたいと言うから連れてきたんだ」

「……おい。その発言の詳細も聞きたいところだが、それを口に出すのはどうなんだ？」

理音は隠す事なく、明久達が如月グランドパークで何かを企んでいると言い、雄二は眉間にしわを寄せるが、

「大丈夫だ。どうせ、着けばすぐにどこに誰がいるかわかるだろ」

「そうね。それに坂本くんが逃げようとしても力づくで戻されるしね」

「……お前らは俺を逃がさないためにいるわけだな」

理音と優子は別にばれてたって変わらないと言い、雄二は理音と優

子が自分を逃がさないためにいると思ったようで顔を引きつらせる。

「勘違いするな。俺はお前が霧島が本気で泣くような事をしないと思ってるからな」

「おおきなお兄さん、どうかしたですか？」

「……何か、ありましたか？」

「な、何でもない」

理音はくすりと笑うと雄二は翔子を泣かせるような事はしないと言うと雄二はバツが悪そうに理音から顔を逸らすと怜生と葉月が雄二の顔を見上げ、雄二は慌てて何もないと言い、

「俺と優子、工藤と本宮、久保の5人は普通にデートを楽しませた方が良いと思ってるんだが……」

「……おい。何人いるんだ？」

「後は秀吉、吉井くん、姫路さん、島田さんに……土屋くんにも声をかけるって言ってたかな？」

「……みんな良い人」

理音は表情を変える事なく、自分と優子と同じ考えを持っている人間が3人いる事を伝えると雄二は眉間にしわを寄せ、優子は他にも明久達5人がいると言うと翔子は自分と雄二のデートを成功させるために全員が協力してくれていると思っているようで嬉しそうに言う。

「まぁ、危機的状況で2人の距離を縮めると言っていたから死ないようにしろよ」

「おい！？　それは明らかにおかしいだろ！！」

「大丈夫よ。坂本くん、あのＦＦＦ団って言うわけのわからない人達に連絡する事はあたし達で止めたから、たぶん、大丈夫よ」

理音は雄二に死なないように気をつけろと言うと雄二は声を上げるが優子は自分に言い聞かせるように雄二が死ぬような事はないと言うが、

「それで、納得できるわけないだろ！？」

「まあ、気にするな。ちゃんと応急処置のセットは持ってきている」

「凄いです。怜生くんのお兄さん、魔法使いさんみたいです」

雄二は納得いくわけもなく声を上げ、理音は雄二に何かあっても自分が処置をすると言うと懐からいろいろな医療セットを出し、葉月は理音の懐から出る見た事もない道具に目を輝かせると、

「葉月、おかしな事を言うな。世の中には魔法なんて非科学的なものは存在しない。俺はただ科学者だ」

「そうなんですか？」

「……そこは葉月ちゃんに夢を見せるところじゃないの？」

理音は表情を変える事なく魔法など存在しないと言い切り、優子は理音の言葉に大きなため息を吐く。

# 第２９４問

「到着です♪」

「……着いちまった」

６人は如月グランドパークの入場口に到着すると葉月は嬉しそうな笑顔を見せるが対象的に雄二はここで起きる出来事に不安しか感じないようでため息を吐くと、

「坂本くんもここまできたんだからそんな事をいわない。あたし達でなるべくおかしな事にならないようにフォローするから」

「それはお願いするが……いまいち、理音が信用できないんだが」

優子は雄二の様子に苦笑いを浮かべながら言うと雄二は理音だけは面白い方向に動きそうだと思っているようでもう１度、ため息を吐くが、

「早くするです」

「……」

怜生と葉月には雄二の不安など関係ないため、楽しみにしていたであろう如月グランドパークに到着した事に目を輝かせている。

「雄二、霧島、チケットを出せ」

「……はい」

理音はスタッフに自分達４人分の入場チケットを渡すと雄二と翔子にもチケットを出すように言い、翔子はプレミアムチケットをスタッフに渡すと、

「……おい。こら、今の不穏当な会話は？」

プレミアムチケットを確認したスタッフは無線で『ウェディングシフト』を用意するようにと連絡を入れ、その会話を聞いた雄二は声を上げるがスタッフ達は雄二の言葉を気にする事なく、雄二と翔子に記念撮影をするように言い、

「そんなもん誰がやるか！！」

「写真撮影くらいしてやれば良いだろ。霧島、カバンを預かろう」

「……お願い。横にしないで」

雄二はスタッフの無線を聞いたためか、写真撮影などしないと言うが理音はそれくらいかまわないだろと言い、翔子の持っていたカバンを預かる。

「おおきなお兄さん、頑張ってくださいです」

「……あぁ」

葉月の応援に雄二は逃げるわけにもいかなくなったようで苦々しく翔子の隣に並ぶと、

「……雄二」

翔子は雄二の腕に抱きつき、嬉しそうな翔子と照れくさそうにカメラから視線を逸らす雄二の写真をスタッフが撮り、

「こ、これはなんだ!?」

「ちょっと、気が早いわよね」

スタッフから渡された写真を見て雄二が声を上げ、優子が写真を覗き込むとそこには2人のツーショットをハートで囲み『私達、結婚します』と文字が書かれており、それだけではなく、如月グランドパークの写真館に飾られると言う。

『そちらのカップルも記念にどうですか?』

「えっ!?　あたし達?」

スタッフは理音と優子の事を知っているため、サービスだと言いたいようで理音と優子にも記念撮影をしないかと聞くと優子は驚きの声を上げると、

「そうだな。理音、写して貰えよ」

「ん?　俺は別にかまわないぞ。霧島、返すぞ」

「……理音、ありがとう。優子」

「う、うん」

雄二は自分達だけ見世物になるのはゴメンだと言いたげに理音と優

子にも生贄になれと言うが理音は気にする事なく翔子にカバンを返してカメラの前に移動すると優子は顔を少し赤らめながら理音の隣に立ち、2人で写真を撮った後、スタッフは怜生と葉月にも並ぶように言う。

「……あの2人にもこの加工はされないよな？」

「それくらいの常識はあるだろ」

雄二は怜生と葉月の写真にも自分達と同じ加工がされないかと理音に聞くと理音は表情を変える事なく言い、

「しかし、失敗したな。優子が妄想の世界に飛び立つとは思っていなかった」

「と、飛んでなんかないわよ！？」

理音は自分達の写真を嬉しそうに眺めている優子がまた妄想の世界に飛び立ったと言うと優子はそこまでは言っていなかったようで声を上げて否定した時、

『あぁっ！　写真撮影してる！　アタシらも撮ってもらおーよ！』

『オレたちの結婚記念に、か？　そうだな。おい係員。オレたちも写ってやんよ』

頭の悪そうなカップルが偉そうな態度でスタッフに声をかけてくる。

# 第２９５問

『すいません。こちらは特別企画のお客様と上が招待をした特別なお客様への……』

『ああっ！？　いいじゃねーか！　オレたちゃ、オキャクサマだぞコルァ！』

『きゃーっ。リョータ、かっこいーっ！』

スタッフは理音達が特別なお客様である事を頭の悪そうなカップルに伝えようとするがカップルは見た目通り頭が悪かったようでスタッフの言葉を聞きいれる様子はなく、

『だいたいよぉ、あんなダッセぇジャリどもより、オレたちを写した方がココの評判的に良くねえ？』

『そうよっ！　あんな頭の悪そうなオトコたちより、リョータの方が１００倍カッコイイんだからぁ！　……何よ？　このガキ？』

頭の悪そうなカップルは理音達をバカにしはじめると怜生はカップルの女性の持っている鞄をつかみ、

「……お兄ちゃんはバカじゃないです」

「はいです。怜生くんの言う通りです」

怜生と葉月は頭の悪そうなカップルに抗議をしようとするが、

『何だ？　このガキ』

「……お前がなんだ？」

カップルの男性は自分に逆らうように声をかけてきた怜生を威圧するように言うと理音はその男性の特徴的な頭を潰す。

『て、てめえ、何しやがるんだよ。ケンカ売ってるのか？　コルァ！』

「……木下、止めなくて良いのか？」

「必要ないわよ。怜生くんや葉月ちゃん相手に怒鳴りつけたあの人達が悪いんだし。怜生くん、葉月ちゃん、そっちは危ないから戻ってきなさい」

男性は理音を威圧するように理音を怒鳴りつけるが理音の表情が変わるわけもなく、無表情なまま男性を見下ろすと雄二は理音があの程度の男性に負けるわけはないため、優子に理音を止めなくても良いのかと言うと優子もカップルの態度に腹を立てているようで理音に任せろと言うと怜生と葉月を呼び寄せ、

「……理音、その2人は雄二をバカにした」

「……あぁ」

翔子は理音に2人のお仕置きを任せると言う。

『あ？　ちょーしにのってんじゃねえぞ！』

『そうよ。リョータは強いんだからね。こんなコーボーに負けるわけない』

男性は理音を殴りつけようとするが理音は男性の拳を表情を変える事なく交わし、

「……お客様だと言うなら、ルールくらいは守れないのか？　ルールを守れないのは客とはいわん。クレーマーと言うんだ。俺達の事を頭が悪いと言うなら、それくらいは知っているだろ」

『あ？　おまえこそバカじゃねえのか？　お客さまは神様って言葉を知らねえのか？』

『やっぱり、頭悪いじゃない』

頭の悪そうなカップルにお前らは客じゃないと言うが頭の悪そうなカップルは理音をバカにするように笑うと、

「そうか……理解できないなら、教えてやろう。お前らのようなバカどもにな」

理音は邪悪な笑みを浮かべて頭の悪そうなカップルに教育してやろうと言う。

「……やっぱり、止めた方が良くないか？」

「まぁ、大丈夫でしょ。理音もそれくらいの常識はあるし、それにあたしもああ言うの嫌いなのよ」

「……なんだかんだ言って、お前と理音は良いカップルだよ」

雄二は理音の様子に苦笑いを浮かべながら優子に止めるかと確認すると優子は止める必要はないと言うと雄二は理音と優子はお似合いだとため息を吐いた時、

『リョータ!?　あ、あんた、リョータに何をしたのよ?』

「何?　知らんな」

理音は男性の口のなかに栄養剤を放り込むと男性は倒れ込み、女性は理音を見上げて文句を言うが理音は知らんと言い切ると、

「行くぞ。バカにかまっているほど、時間はない」

「そうね」

頭の悪そうなカップルを置いて歩き出すと5人は理音の後を付いて行く。

# 第２９６問

「怜生くん、葉月ちゃん、楽しんでる？」

「……はい」

「はいです」

「……普通に出てくるんだな」

記念撮影を終えて怜生と葉月がいるため、絶叫系を避けて回っているとスタッフジャンバーを着た愛子と利光が理音達を見つけて声をかけてくると雄二はため息を吐くが、

「隠れても仕方ないしね。僕達はあくまでバイトとして紛れ込んでいるわけだし、それにデートを邪魔するほど野暮でもないつもりだよ」

「そうそう。ぼくらの役目はどちらかと言うと吉井くん達の暴走を止める事だからね。坂本くんと代表はデートを楽しんでよ」

愛子と利光はデートを邪魔するつもりはないと言うと、

「ん？　そうだ。記念撮影のスタッフは正規スタッフか？　バイトか？」

「確か、記念撮影は正規の社員とバイトが一緒だったと思うけど、どうかしたのかい？」

理音は利光に記念撮影のスタッフの配置を聞くと利光は理音の言葉の意味がわからないようで首を傾げる。

「変なカップルが難癖つけてたから理音が静めたのよ」

「一応、写真も撮っておいたから、スタッフに回してくれ。あのバカどもはまたどこかで問題を起こすだろうからな」

「おっけー。預かるよ。本部に届けてくるね」

優子はため息を吐きながら記念撮影時の事を簡潔に話すと理音は愛子にデジカメを渡すと愛子は快く理音の頼みを聞き、

「しかし、そんな人達がいるのかい？」

「あぁ。たぶん、正論は通じない。俺が思うにアキと同程度か、それ以上のバカだ」

利光はため息を吐くと理音は頭の悪そうなカップルは明久以上に頭が悪かったと言うと、

「……いや、吉井くん、大部、成績上がったでしょ」

「優子、良い事を教えてやる。頭の良さ＝成績ではない」

優子は清涼祭の召喚大会で努力をしていた明久とあのカップルを比べるのは流石に明久には失礼だと言うが理音は表情を変える事なく、明久はバカだと言い切り、

「……そこがかわいいんだよ」

「「……」」

利光はぼそっと一言、明久がバカなところが可愛いとつぶやき、その言葉に雄二と愛子はそのつぶやきが聞こえたようで眉間にしわを寄せ、

「……え？　久保くんって、そっちなの？」

「……優子、妄想の世界に飛ぶなよ」

優子は利光の言葉に妄想の世界に飛び出そうとし、理音は優子に釘を刺す。

「わ、わかってるわよ！？」

「……そんな反応する時点でわかってないだろ」

優子は理音の言葉を否定しようとするが、理音は優子の反応にため息を吐き、

「変な事を言わないで、前にも言ったでしょ！！　あたしにだってあたしのタイプの絡みがあるのよ。久保くん×吉井くんも吉井くん×久保くんもあたしの好みじゃ無いわ！！」

「絡みってなんですか？」

優子は全力で妄想の世界になど飛んでいない言い、明久と利光は自分の好みではないと叫ぶと葉月は優子の言葉の意味がわからないようで首を傾げると、

「久保くん、前田くんから預かった写真、届けに行こうか？」

「そうだね」

愛子は巻き添えにされるのを避けようとしたようで利光に声をかけ、2人で歩いて行き、

「怜生くんのお兄さんの彼女さん、絡みってなんですか？」

「そ、それは……」

「自業自得だ。怜生、次はどこに行きたい？」

葉月はもう1度、優子に聞くと優子は理音に助けを求めるような視線を向けるが理音は懐から如月グランドパークの地図を取り出し、怜生に次に行きたいアトラクションを聞いた時、

「ねえねえ。そこのラブラブなカップル達、キツネのフィーが面白いアトラクションを紹介してあげるよ？」

「フィーちゃんです♪」

「……」

如月グランドパークのマスコットであるキツネのフィーの着ぐるみを着たスタッフが声をかけて来て、それを見た怜生と葉月はフィーに駆け寄り、

「……理音、姫路の声じゃなかったか？」

「……まったく、ボイスチェンジャーくらい付けられないのか」

雄二はフィーの中に入っているのが瑞希だと気づき、理音に確認すると理音はため息を吐く。

# 第297問

「おい。姫……」

「坂本くん、怜生くんと葉月ちゃんの前なの。気を使うところよ。中身の人なんていないわ」

「……わるかった」

雄二はフィーのなかにいる瑞希に声をかけようとすると優子は雄二の肩を叩き、子供の夢を壊すなと言うと雄二は理音と違って子供達の夢は壊せなかったようで優子に謝ると、

「じゃあ、フィーとやら。お前のオススメを教えてもらえるか？」

「フィーちゃんのオススメはどこですか？」

「あ。う、うんっ。フィーのオススメはねっ。向こうに見えるお化け屋敷だよっ」

雄二はフィーにオススメを聞くと葉月は雄二に続き、フィーはお化け屋敷を薦めるが、

「そうか。ありがとう。よし、翔子。お化け屋敷以外のアトラクションに行くぞ」

「ままま待ってくださいっ！　どうしてオススメ以外のところに行くんですか！？」

雄二はお化け屋敷は危険だと判断したようで翔子の背中を押して歩き始めるとフィーは雄二の腕をつかみ、お化け屋敷に行くか行かないかでもめ始め、

「……普通は何かあると考えるわよね」

「だろうな」

理音と優子は雄二とフィーの様子にため息を吐いた時、

「……アキ、タイミングは良いんだが、頭が逆だ」

「そ、そうか！？　通りで前が見えないと思った！！」

「……吉井くん」

理音の視界にはフィーと同じく如月グランドパークのマスコットキャラであるキツネのノインの着ぐるみが駆け寄ってくるが首が間後ろを向いており、理音はため息を吐くと着ぐるみの中身は明久のようで驚きの声を上げ、優子は肩を落とす。

「ノ、ノインちゃん、お首はどうしたですか？」

「……お兄ちゃん、ノインちゃん、おケガですか？　治してあげてください」

「……そうだな。治療してくるから、待っててくれるか？」

怜生と葉月は首が後ろを向いているノインを心配そうに見上げるとノインに周りに子供達が集まりだし、ノインがケガをしたと思って

いるようで泣きだし始める子供達も現れ、理音はノインを引きずって歩きだすと、

「……アキ、お前は何がやりたいんだ？」

「ご、ごめん」

理音はノインの首を半周させ、元に戻してため息を吐き、明久は理音に謝り、

「リオ、雄二と霧島さんがお化け屋敷に行くように協力してよ。行って貰えないとせっかく、用意したものが無駄になっちゃうんだよ」

理音に協力を仰ぐが、

「……そこに行くとろくな事が起きない気がするんだが」

「そんな事はないよ。ボク達の作戦は完璧だよ」

理音は眉間にしわを寄せ、明久は自分達の作戦は完璧だと言い切り、

「……まぁ、お化け屋敷に行かせるくらいの策は教えてやるか」

「ホント？」

理音はため息を吐く。

「それじゃあ、今は雄二が霧島を引っ張っている感じだけどな。霧島に決定権を移せば良い」

「どうやって？」

「雄二と瑞希が揉めてる間に霧島に『お化け屋敷は抱きつき放題』と言ってみろ」

理音は翔子に無理やり雄二を引っ張って行かせろと言うと、

「なるほど……秀吉、作戦、変更。ターゲットを雄二から霧島さんに変更」

「ラジャーなのじゃ」

明久は秀吉に連絡を取り、秀吉は明久の言葉に返事をするが、

「……やっぱり、不安でしかないな」

理音は明久を見て眉間にしわを寄せて不安しか感じないと言う。

## 第２９８問

「ノインちゃん、大丈夫ですか？」

「うん。大丈夫だよ」

理音と明久が戻ると葉月は明久に駆け寄り、明久は返事をすると、

「優子、あいつらはまだやってるのか？」

「えぇ。坂本くんはあれで女の子に甘いからね。姫路さんを振りきれずにいるわ」

理音は未だにフィーを腕に付けたままお化け屋敷に行くかどうかを口論している雄二を見て眉間にしわを寄せ、優子はため息を吐いた時、

「……あれ？　秀吉？」

「そうみたいだな」

スタッフジャンバーを着た秀吉が翔子に何か耳打ちをし、

「……雄二、お化け屋敷に行きたい」

「翔子！？　いきなりなんだ！？　キサマ！？　ひ、秀吉、お前、翔子に何を言った！？」

翔子は雄二の腕をつかみ、お化け屋敷に行きたいと言い始め、雄二

は翔子の言葉に翔子に何か吹き込んだ奴がいると考え、近くにいたスタッフに声をかけようとすると視線の先には秀吉が立っており、雄二は秀吉に説明をするように叫ぶが、

「私は如月グランドパークのスタッフでございます。お客様のお知り合いである秀吉と言うものではございません」

秀吉はただの1スタッフでしかないと言う。

「……お化け屋敷は抱きつき放題」

「ちょ、ちょっと待て!?　しょ、翔子、俺の話を聞け」

「……理音、付いて行く？」

翔子は雄二の腕を引っ張り、お化け屋敷に向かい歩き出し、優子は2人の姿を見て理音に聞くと、

「一先ずはお化け屋敷の前まで行くか。中に入るかは……無理みたいだな」

「そうね」

理音はお化け屋敷までは様子を見に行くかと言い、お化け屋敷に雄二達と一緒に入るかと怜生と葉月に聞くが2人は全力で首を横に振り、優子はそんな2人の様子に苦笑いを浮かべ、

「……これで、第1段階はクリア。次の段階に移る」

「はい」

キツネの着ぐるみを着た明久と瑞希は雄二と翔子の姿に作戦が成功する事を確信しているようで大きく頷いているが、

「……理音、酷く不安なんだけど」

「気が合うな。俺も激しく不安しか感じん」

理音と優子はため息を吐く。

「怜生くんのお兄さんと彼女さん、おおきなお兄さんとキレイなお姉さんが行ってしまいますけど、追いかけなくて良いですか？」

「そうだな。一先ずは行くだけ行くか」

「そうね。あまり、おかしな事だったら止めないといけないだろうし」

葉月は雄二と翔子を追いかけなくて良いかと理音と優子に聞くと2人はため息を吐きながら、怜生と葉月の手をつかみ、雄二と翔子を追いかけて行く。

「お、お前ら、遅かったじゃないか」

「ん？　まぁ、俺達はお化け屋敷には興味がないしな」

「そう言うな。『みんな』で行こうじゃないか」

雄二は理音達が合流したのを確認して、怜生や葉月のような小さな子供が一緒なら、明久達も無茶な事はしないと思っているため、全

員を巻き込もうとするが、

「……お化けは怖いです」

「ハイです」

怜生と葉月は理音と優子の後ろに隠れてお化け屋敷は行きたくないと首を振り、

「あたし達はここで待ってるわ。怜生くんと葉月ちゃんを置いとくわけにもいかないしね」

「そ、そう言うのはここのバカなスタッフに任せておけばいいじゃないか」

優子は雄二に翔子と2人で行けと言うが雄二はお化け屋敷の中は確実に何か仕掛けられていると思っているため、どうしても理音と優子を巻き込みたいように見える。

# 第２９９問

「往生際が悪いぞ。だいたい、聞けば、最初からチケットを手に入れられれば、霧島に付き合うと約束してたんじゃないのか？」

「それはそれだ。こんな、状況で納得できるか！！」

理音は雄二にさっさと行って来いと言うが雄二はお化け屋敷の中で、何が起こるかわからないため声をあげ、

「……雄二、選んで、約束を破ったら、即挙式って約束してくれた」

「教会と神前か？　霧島はどちらでも似合いそうだな」

「……理音、ありがとう。神前だとおばあさんとお母さんが着た着物がある。ウェディングドレスはお義母さんが着たのを直して着る」

翔子は持っていたカバンから式場のパンフレットを取り出し、理音は翔子ならどちらの衣装でも似合うと言うと翔子は嬉しそうに微笑み、

「その時は如月グループが全面的にバックアップさせていただきます」

「……ありがとう。みんな良い人」

秀吉は雄二と翔子の結婚式を如月グループがバックアップすると言うと翔子は嬉しそうに言うが、

「……雄二、逃げるな」

「は、放せ。俺はここは危険なんだ！？」

新郎であるはずの雄二は逃げ出そうとして、理音に首を捕まれる。

「それでは、お化け屋敷に入場前にこちらの誓約書にサインをお願いします」

「……おい。本宮、お前なら常識が通じるだろ。こいつらをどうにかしろ」

スタッフジャンバーを着た葵が遠慮がちに誓約書を出すと雄二は話が通じそう葵に助けて欲しいと言うが、

「す、すいません。こ、これがお仕事なんです。バイトと言う条件で中に入れて貰ってますので、私は指示通りに働かないと他のスタッフさんにご迷惑がかかりますし……そ、それに休憩時間は木下くんと一緒にグランドパーク内を回っても良いって」

「う、うむ」

「……おい。理音、本宮まで懐柔されてるのか？」

葵は頬を赤く染めて秀吉とのデートのためだと言うと秀吉は葵の言葉に頬を赤く染め、２人の様子に雄二は理音に葵も敵かと聞くと、

「バカップルの事など知らん」

「……お前もそれを言う立場じゃないだろ。いや、どちらかと言え

ばすでに夫婦だな」

理音は秀吉と葵の事など知らないと言い切り、雄二は理音と優子も変わらないと言うが、怜生と葉月の面倒を見ている2人を見てため息を吐く。

「そ、そんな事ないわよ!?　坂本くん、おかしな事を言わないで」

「……理音と優子はどっちにするの？」

「ん？　俺はどちらでも構わないが、優子は胸がないから着物の方が……」

優子は雄二の言葉に慌てるが理音は翔子と自分と優子の結婚式の話を始めており、

「理音、あんた、殺すわ」

「ん？　そうだったな。それまでに優子の胸は俺の手で育てないと行けなかったんだな」

優子は理音の言葉に殺意を込めた視線を向けるが理音は気にする事なく、

「まぁ、日本の法律では男は満18歳まで籍も入れられんからな。それまでにか……」

「……理音、それじゃあ、これはどうしたら良いの？　来年の雄二の誕生日まで市役所に持っていけない」

理音は優子との結婚式はもう少し先だなと言うと翔子は残念そうにカバンから雄二と翔子の婚姻届を取り出して聞くと、

「一先ずは信用できる弁護士に預けるのが妥当だな」

「……わかった。そうする」

「理音、お前、おかしな事を吹き込むな!?」

理音は翔子にアドバイスをし、翔子は大きく頷き、2人の様子に雄二は声を上げる。

# 第３００問

「それより、坂本くん、代表、時間も限られているんだから、どうするの？　あたし達は早くしないなら他に行くわよ。怜生くんと葉月ちゃんは他に行きたいみたいだしね」

「そ、そうだな。翔子、ここじゃなくても」

「……雄二、お化け屋敷に行きたい」

優子は雄二がお化け屋敷に入るかどうか揉めている姿に怜生と葉月が飽きてきていると言うと雄二は翔子に他の行こうと言うが翔子は雄二に懇願し、

「うっ！？　……わかったよ。い、行けば良いんだろ」

「……うん」

雄二は翔子の願いに断る事も出来ずに頷くと翔子は嬉しそうに笑い、

「それでは、こちらにサインしてください」

「何だ？　これは？」

２人の様子にノインの着ぐるみを着たままの明久が先ほどの誓約書にサインをするように雄二にボールペンを渡すと、雄二は名前を書きかけるが誓約書の内容を読み固まる。

「……お兄ちゃん、何が書いてあるんですか？」

「ん？　1．私、坂本雄二は霧島翔子を妻とし生涯愛し、苦楽を共にする事を誓います。2．婚礼の式場には如月グランドパークを利用する事を誓います。3．どのような事になろうとも、離縁しない事を誓います」

「……はい。雄二、実印」

怜生は雄二の書いている誓約書に何が書いてあるのかと理音に聞くと理音は雄二の後ろから誓約書を読み上げると翔子はカバンから雄二の家の実印を取り出すと、

「朱肉はこちらです」

「用意が良いな」

「俺だけか！？　俺だけがこの状況がおかしいと思っているのか！？」

フィーの着ぐるみを着た瑞希が朱肉を出し、理音は感心したように頷くが雄二は声を上げる。

「……理音、ここに居ても時間の無駄よ。あたし達はあたし達でどこか行きましょう」

「ん？　そうだな」

「ま、待て。すぐに行ってくるから、待っててくれ」

優子はここにいるのは時間の無駄だと判断して理音に他を見て回ろ

うと言うが、雄二は怜生と葉月と離れるのは危険と判断しているため、直ぐにお化け屋敷を脱出してくると言うと、

「……理音、優子、カバンを預かって貰って良い？」

「わかったわ」

「……零れちゃうから、横にしないで」

翔子は持っていたカバンを優子に預けて2人でお化け屋敷に入って行く。

「理音、代表のカバンって何が入っているのかな？」

「ん？　零れると言っていたんだ。今日のために弁当でも作ってきたんじゃないのか？」

「お弁当……」

優子は翔子が大切そうに持っていたカバンの中身が気になるようで理音に聞くと理音は翔子の言葉から中身を弁当だと言うと優子は自分は何も昼食の事を考えていなかったため、考え込むが、

「優子、別に昼食は気にする必要はないぞ。俺達はウェディング体験を見学できるから、そこで飯が食えるようになっている。雄二と霧島もそのはずだったんだがな。霧島はどうやら、本当に楽しみにしていたようだな……」

「そうみたいですね」

理音は自分達や雄二と翔子には昼食が用意されていたはずだが、翔子は用意されていたものではなく雄二に自分の手作りの弁当を食べて貰いたかったんだろうと言うと葵は翔子の気持ちがわかるようで頷き、

「……アキ、瑞希、お前らが協力したいと言う気持ちもわからなくはないが2人に任せるのも時には必要なんだと思うぞ」

「……うむ。たしかにそうなのかも知れんが、理音、2人ならすでに中じゃ」

理音は明久と瑞希に間違った応援はしないように言うがすでに2人は次の行動に移っており、秀吉はため息を吐く。

# 第３００問（後書き）

どうも、作者と

理音「主人公だ」

祝３００話です。

理音「応用問題を入れるととっくに超えているがな」

まあ、そういわないでください。本来は終わってるはずだったのにずいぶんと遠くに来たものです。

理音「清涼祭で終わる予定だったんだよな」

そうですね。そのあと、少しオリジナルを書いて数年後に理音と明久で墓参りをする予定でした。

理音「それはネタばれにならないのか？」

まあ、完結あたりにはこの話は読者さんに忘れ去られているから大丈夫です。

理音「そんなものか？」

そんなものです。

３００問の節目を超えましたが例の如く、特別な事はしないと思います。

理音「それも言うのか？」

まあ、いつもの事です。

# 第３０１問

「……まったく、人が真面目な話をしているのに、何で、あいつらは人の話を聞かないんだ？」

「……理音、あんたが言う事じゃ無いわよ」

「た、確かにそうですね」

理音は明久と瑞希がいない事にため息を吐くと優子は理音は人の事を言う資格はないと言い、葵は苦笑いを浮かべると、

「……お兄ちゃん」

「ん？　どうした？」

怜生が理音の服をつかみ、理音は怜生に聞き返す。

「……お水、飲んできます」

「水？　待て。何か飲み物を買ってくるか。葉月、優子」

怜生は喉が渇いたようで水を飲んでくると言うと理音は何か買ってこようと思ったようで優子と葉月に声をかけるが、

「あたしは良いわ。ここで代表と坂本くんを待ってるから、怜生くんと葉月ちゃんを連れて行ってきて」

「ん？　そうか。それなら、適当に何か買ってこよう」

優子は翔子からカバンを預かっているため、ここで待っていると言うと理音は優子の分の飲み物を買ってくると言い、

「えぇ。任せるわ……ネタ系はいらないわよ」

「……ちっ」

「怜生くんのお兄さんの彼女さん、葉月が選ぶのですから、安心してください」

優子は理音に任せると言いながらも理音におかしな物を買ってこないように釘を刺すと理音は舌打ちをし、葉月は優子の飲み物は自分が選んでくると言う。

「えぇ。お願いね。葉月ちゃん」

「はいです。任せるです」

優子は葉月にお願いをすると葉月は笑顔で返事をし、

「それじゃあ、ちょっと、行ってくる」

理音は怜生と葉月の手を握り、3人で歩いて行く。

「……秀吉」

「何じゃ？　姉上」

優子は理音の背中を見ながら秀吉の名前を呼ぶと秀吉は自分が名前

を呼ばれた理由がわからないようで首を傾げると、

「吉井くんと姫路さんは代表と坂本くんにかまってないで、自分達がデートしようって気にはならないのかしら？」

「……無理じゃないかのう。仮に2人で出かけると言う話になると島田も付いてくるじゃろうしのう。何より、明久はどこかに出かけるような。お金を持っておらぬのじゃ」

優子は理音と付き合ってから、明久と瑞希と一緒にいる時間も長いためか、疑問に思った事を口にするが秀吉はわからないと首を振り、

「……確かにそうね。どうして、マンガとゲームだけにお金を使えるのか、あたしには理解できないわ」

「あはは。む、昔はそんな事もなかったんですよ。小学生の頃は前田くんと一緒に外でばかり、遊んでたと思うんですけど」

優子は明久の生活が理解できないようで頭を押さえると葵は苦笑いを浮かべながら、昔はゲームをやっているような子供では無かったと言う。

「そうなんだ」

「はい。でも、小学校卒業間近になると前田くんが留学の準備とかで忙しくなって、1人でいる時間も長くなってしまいましたし……後は吉井くんのご両親は海外赴任、お姉さんは留学と言う話で自由になったからとか言って昔は笑ってましたけど……」

「……」

優子は葵の言葉に頷くと当時の事を思い出しながら言うが、秀吉は葵の言葉に何かが引っかかったようで眉間にしわを寄せると、

「……以前に本宮が話してくれた。明久は友人が多かったと言う話とは食い違ってこぬのか？」

「……はい。あの、吉井くんの問題と言うよりは」

「問題は理音の方ね」

秀吉は明久は小学校の頃は友人が多かったはずだと言いと葵は言いにくそうな表情をし、優子は葵の様子に原因は理音にあるのではないかとため息を吐く。

## 第３０２問

「い、いえ。原因は前田くんと言うか……」

「……周りの視線じゃな」

「……はい」

葵は優子の言葉に首を振ると秀吉は原因は理音に向けられるようになった人々の視線だと言うと葵は小さく頷き、

「……本宮さん、その話、聞いても良いかしら？」

「はい。あの、やっぱり、木下さんは知っていた方が良いとは思うんです。前田くんも吉井くんも教えてくれなさそうですし」

優子は葵にその時の話を教えて欲しいと言うと葵は優子は知っていた方が良いと思ったようで頷くが、

「……姉上、それは理音から直接聞いた方が良くないのかのう？」

「……そうかも知れないけど、理音は過去の事って話してくれないから、たぶん、吉井くんも姫路さんも教えてくれないと思うから、きっとあの２人は理音の過去に触れすぎているから、どこかで迷ってしまう」

秀吉は葵から理音の過去を聞くのは卑怯ではないかと言い、優子はそれでも理音の真実の断片を葵に教えて欲しいと言い、

「……私は前田くんが奇異の視線を向けられるようになってから、知り合いましたから噂しか知りませんし、詳しい事は知らないんですけど」

葵は優子の視線に同じ意見のようで頷く。

「前田くんの周りから、吉井くん以外がいなくなってしまった原因は2つあります」

「事件？」

「は、はい。1つは前田くんのお父さんがなくなった事」

葵は理音の父親が亡くなった事が1つの原因だと言うが、

「確かに理音の父親が亡くなったのは理音の性格を変える原因になったのかも知れんが、それで理音が周りから無視をされる理由がわからんのじゃ」

「……私は噂しか知らないんで事実かはわかりませんけど、前田くんのお父さんは前田くんのせいで亡くなったって、前田くんのお父さんは前田くんが殺したって……」

秀吉は首を傾げると葵は言いにくそうに理音の父親が死んだのは理音が殺したと言う噂があったと言うと、

「どう言う事？」

「き、木下さん、落ち着いてください。私はそんな噂は信じていません。でも……私は真実を知らないんです。前田くんのお父さんが

亡くなった時に前田くんは一緒で前田くんのお父さんの血で顔を染めていた笑っていたとか、小学生の時に前田くんと吉井くんと一緒にいた時にそんな噂ばかり聞かされました。そのたびに吉井くんはそんな事を言った人達に向かって行って、前田くんは何も言わずに表情を変える事なく吉井くんを引きとめていました。私は真実を聞くのが怖くて聞けませんでした。前田くんはそんな事する人じゃないのに」

優子は葵につかみかかるように言うと葵は自分の知っている噂を話し、当時の事を恥じるように言う。

「……本宮、止めるのじゃ。本宮が自分を責める必要はないのじゃ。理音も明久も本宮が自分を責める事は望まぬのじゃ」

「で、ですけど……私は何もしてないんです。友人なのに前田くんを信じ切る事もできてなかったんです」

秀吉は葵は何も悪くないと言うが葵はずっと思っていたようで悲しげに自分のキズをえぐるように話すと、

「ねえ。本宮さん、昔の事を後悔してるのよね？」

「……はい」

「それなら、良いんじゃない。あたしは理音に前に言われたのよ。『人が他の生命より、進化しているところは失敗から学ぶ事ができると言う事だ。昔の自分を恥じるなら、2度とそうならないように努力すれば良い』ってね」

「そうですね」

優子は笑顔で葵に言うと葵は優子の心使いが嬉しかったようで少し無理をしながらも笑顔で頷いた時、

「ただいまです。お姉さん、オレンジジュースです」

「ありがとう。葉月ちゃん」

優子の分のジュースを持ってきた葉月が優子に駆け寄り、

「秀吉、本宮、奢りだ」

「うむ。すまんのじゃ」

「前田くん、ありがとうございます」

遅れて歩いてきた理音が秀吉と葵にジュースを渡す。

# 第３０３問

「ん？　どうかしたか？」

「な、何でもないわ」

理音は優子の視線に気づき、優子に声をかけると優子は葵から理音の過去を聞いていたなどとは言えないため何もないと言うが、

「そうか。秀吉、本宮、何があった？」

「……何で、そんな反応よ？」

理音には優子が嘘を吐いている事などお見通しのため、正直に話しそうな秀吉と葵に声をかけると優子は理音の反応に不満そうな表情をすると、

「この２人の方が簡単に吐きそうだからだ」

「「……」」

理音ははっきりと言い、理音の言葉に秀吉と葵は理音に何を話していたか聞かれると直ぐに話してしまいそうなため、顔を見合わせると少しずつ後退して行く。

「まぁ、別に無理に聞く気もないがな……お前らの反応から見れば、俺の過去の話……とうさんが死んだ時の話と言ったところだろう」

「「「……」」」

理音は3人の様子に表情を変える事なく3人が話していた内容を推測して言うと3人の顔は引きつるが、

「何だ？」

「り、理音、怒らないの？」

「意味がわからん。別に隠す事でもない上に、それなりに話題にもなったはずだから、当時の記事でも探せば簡単に見つかる」

理音は3人の反応の意味がわからないと首を傾げると優子は勝手に理音の過去に踏み入ろうとした事を怒らないのかと聞くが理音は事実を事実と理解しているためか別に隠す気はないと言うと、

「それじゃあ、あたしは理音に昔、何があったかを聞いても良いの？」

「ん？　別に聞きたいなら聞いても良いが……吐くなよ。俺は包み隠して話すと言うのは苦手だからな。覚えている全てを話すぞ」

「「「……」」」

優子は理音に真実を聞いても良いのかと聞くと理音は表情を変える事なく、その日に起きた事を話すと言い、3人は理音の言葉に聞く事を迷った時、

「ま、待て。翔子、落ち着け！？」

「……雄二、浮気は許さない」

釘バットを握った翔子に追いかけられた雄二がお化け屋敷から出て来て翔子に命乞いを始め出し、理音達の中に漂っていた空気はブチ壊される。

「……雄二、今度は何をした？」

「俺は何もしてない！！　無実だ！！　明久や姫路がわけのわからない事をしたんだ！！」

理音は雄二の様子に何をやって翔子を怒らせたのかと聞くと雄二は自分は無実だと主張し、

「……雄二が私より、瑞希がタイプだって言った。瑞希のように胸の大きい娘が好みだって、胸のない娘は生きる価値がないって言った。許さない」

「……そう」

「ちょっと待て！？　木下、落ち着け。俺はそんな事を言ってない！！」

翔子は雄二が浮気したと判断した理由を話すとその言葉は明らかに優子や美波のような胸が残念な娘達にケンカを売っており、翔子だけではなく優子からも殺意を向けられ始めるが、

「秀吉、お前も変わったな」

「……違うのじゃ。明久やスタッフの方々がそう言えと言ったのじゃ」

理音は雄二の言葉が秀吉の声真似だと判断して秀吉に言うと秀吉は自分のせいではないと首を振り、

「……お兄ちゃん」

「怜生くんのお兄さん、大きなお兄さんを助けてくださいです」

「ん？　あぁ、優子、霧島、落ち着け」

怜生と葉月は理音に雄二を助けるように言うと理音はため息を吐いた後、雄二を助けるために優子と翔子に声をかける。

# 第３０４問

「あたしは落ち着いているわ」

「り、理音、助けてくれ！！　なんか、洒落にならなさそうだ」

優子は理音にまで殺意を垂れ流しながら落ち着いていると言うが雄二は翔子以上に優子に危険を感じているようで理音に助けを求めると、

「２人とも落ち着け。まず、霧島、雄二は言いたいのはあれだ。『だから、お前の胸を俺の手で育てたい』と続くはずだったんだ。『お前を俺の好みにしたてあげる』とな」

「……雄二がそう望むなら」

理音は一先ず、翔子を説得しようとしながらもより面白くなる方を選び、理音の言葉に翔子は顔を赤らめ、

「誰がそんな事を言うか！？　俺は翔子の胸を育てるつもりはない！！」

「……それは許さない」

雄二は理音の言葉を全力で否定し、結局、翔子からアイアンクローを喰らいそうになるが、

「……それは、今のサイズが好きだと言う事だな」

「……雄二」

理音は更なる追い討ちをかけて雄二の逃げ場所を潰し、翔子は嬉しそうに雄二の腕に抱きつき自分の胸を雄二に押し当て、

「そ、そうじゃないだろ！！」

「霧島、今が攻めどきだ」

「……わかった。理音のアドバイスはいつも的確」

雄二は顔を真っ赤にしてして翔子から逃げようとするが理音は翔子に手を放すなと言う。

「……理音、あんたは何がしたいのよ？」

「ん？　少しは冷静になったか」

「……ええ」

優子は雄二と翔子の様子に少し冷静になったようでため息を吐くと理音はくすりと笑い、

「だいたい、巨乳好きはアキと秀吉の趣味だ。俺はサイズは一先ず保留にしたからな」

「な、何を突然、言い出すのじゃ！？」

秀吉に飛び火させると秀吉は顔を真っ赤にして否定するが、

「き、木下くん、私の胸しか見てないんですか？」

「……葵お姉ちゃん、落ち込まないでください」

葵は理音の言葉に落ち込むように言うと怜生は葵の顔を心配そうにのぞき込み、

「ち、違うのじゃ！？　ワ、ワシは本宮の胸を見て好きになったわけではないのじゃ！？」

「キレイなお兄さんはメガネのお姉さんのどこを好きになったですか？」

秀吉は葵の様子に全力で巨乳が目的ではないと否定すると葉月が目を輝かせながら秀吉に葵のどこを好きになったのかと聞く。

「予想以上に面白い展開になったな」

「……あんたは何をしたいのよ？」

理音は揉めはじめた秀吉と葵を見て邪悪な笑みを浮かべると優子はため息を吐き、

「ん？　俺もそれなりに考えているんだ。と言うか、はっきりさせるべきだろ。秀吉は特にな」

「どう言う事よ？」

「あいつは付き合い始めても、本宮にどこが好きとか言うわけでもないだろ。お前は俺にどこが好きだとか言われないと不安になった

りしないか？」

理音は優子を見てくすりと笑うと、

「た、確かにそうかもしれないけど……一緒に居てくれるだけで良かったりもするのよ。それにあんたはしっかりとかわいいとか好きだとか言ってくれるし」

優子は理音の顔を直視するのが恥ずかしいようで理音から目を逸らしながら言う。

「俺は事実しか言う気もないからな。あいつらは少しでも素直になれば揉めるような事もなくなるだろ。言える時に必要な言葉を言えないと後で後悔することもあるからな」

「……そうね」

理音は何かを考えるような表情で言うと優子は自分も素直に言葉に出す事は苦手なためか理音の言葉に頷く。

# 第３０５問

「しかし、自分で言うのもなんだがプチ修羅場だな」

「……爆弾を落としたあんたが言う事じゃ無いわよ」

理音は慌てて葵に弁明をしようとしている秀吉と翔子に襲われている雄二を眺めて言い優子がため息を吐いた時、

「……木下くん、本宮さん、君達は何を遊んでいるんだい？　ウェディング体験の時間だよ」

「前田くん、何があったの？」

ウェディング体験の時間が近づいてきているのに雄二と翔子が現れないため、利光と愛子が２人を迎えにくる。

「そ、そうなのじゃ。次に移る時間なのじゃ！？」

「……秀吉、逃げたな」

「……あたしの弟として情けないわ」

秀吉は利光と愛子が現れた事に助かったと言う表情をして声を張り上げると理音と優子は秀吉の行動にため息を吐き、

「し、仕方ないのじゃ。こんなところで言えるわけがないのじゃ……ワシは理音とは違うのじゃ。人前では恥ずかしいのじゃ」

「1度、言えば楽になるぞ。演技だと思って言ってみろ」

秀吉は人前では恥ずかしいと顔を赤くして言うと理音は演技するように言えと言うが、

「そんなことできんのじゃ!?　演技とは違うのじゃ!?」

「……木下くん」

秀吉は理音の演技でも良いと言う言葉は納得できないと叫び、その言葉に葵は顔を真っ赤に染める。

「余計に恥ずかしい展開ね」

「そうだね。弟くんと葵も落ち着いたところで代表、坂本くん、移動してお昼ご飯、如月グループで用意してくれてるから」

優子はバカップル化している秀吉と葵を見てため息を吐くと愛子は苦笑いを浮かべて雄二と翔子に声をかけ、

「しょ、翔子、飯の時間だ。放せ!?」

「……うん」

「……どうかしたのか？」

雄二は翔子に放せと言うと翔子は自分のお弁当ではなく、雄二が如月グループが用意した昼食に行くと言うのが残念なようで少しだけさみしげな表情をすると雄二は翔子の表情の変化には気づいたようだが翔子が弁当を用意している事には気づいていないようで翔子に

聞き返すが、

「……何でもない。お昼ご飯、楽しみ。雄二、急がないとはぐれる」

「おう」

翔子は優子と怜生、葉月と一緒に利光と愛子の後に付いて歩き出し、雄二は翔子の反応に何か考え込むが答えは出ず、

「……バカ雄二」

「な、何だよ。理音」

理音は翔子の弁当に気づいているため、ため息を吐きながら雄二を呼ぶと雄二は意味がわからずに理音に聞き返すと、

「霧島が大切に持っていたカバンには何が入っていたか考えろ。霧島のそばにずっといたお前ならわかるだろ」

「……あいつ」

理音は翔子のカバンに何が入っていたか考えろと言うと雄二は翔子のカバンに何が入っていたか想像が付いたようで気づいてやれなかった自分を責めるように苦虫をかみつぶしたような表情をする。

「後できちんフォローしてやれ。それをできるのはお前だけなんだからな」

「……うるせえよ」

理音は翔子のフォローは雄二にしかできないと言うと雄二は不貞腐れたように言い、

「行くぞ。せっかくの高い飯が食えるんだしな。俺みたいなガキが食えるないような良い飯なんだろ」

「そうだな。行くか。あまり遅くなると怒られそうだ」

雄二は理音に先に行ったメンバーを追いかけると言うと2人で歩きだす。

## 第３０５問（後書き）

どうも、作者です。

今回は感想の話です。今まで、感想の返信を更新時にしていたのですが、これからは気付いたときにさせていただきます。ご了承ください。

# 第３０６問

「……なぁ、理音。お前はマナーとかわかるのか？」

「ん？」

雄二は運ばれてくる料理が予想していたランクより上だったようで後ろの席にいる理音に声をかけると理音は気にする気もないようでスタッフを呼び箸を貰っており、

「……おい」

「何だ？　別に気にする必要はないだろ。客の要望に答えるのがサービス業であり、客を選ぶのは１流気取りの店でしかない」

雄二はツッコミを入れるが理音は気にする事はなく、

「言い切るのもどうかと思うけど、使い慣れないものだと楽しめないしね」

「はいです」

優子や葉月も理音に頼んで箸を貰ったようで苦笑いを浮かべると、

「……理音、俺の分も頼めるか？」

「あぁ……と言うか、霧島はマナーを知っているようだから教わったらどうだ？」

雄二も使い慣れた箸にしたいようだが、自分で頼むのは抵抗があるようで理音に頼むと言うと理音は頷くがマナーを守って食事をしている翔子を見て雄二に翔子に教わるように言う。

「……雄二、私がマナーを教える」

「いや、今は良い。何かいろいろやってる間に味がわからなくなりそうだ」

「……そう」

翔子は理音の言葉に嬉しそうな表情をするが雄二は苦笑いを浮かべながら断ると翔子は残念そうに顔を伏せ、

「……雄二、お前はもう少し空気を読め」

「……言うな。俺だって今のは悪かったと思ってる。だけどな。お前は食い慣れてるのかも知れないけどな。俺らみたいな1学生が食えるよなもんじゃないんだから、普通に味わってみたいだろ」

理音はため息を吐くが雄二は雄二なりに普段、食べない料理を食べてみたいと言い、食事を続けて行く。

「……怜生、帰りに牛丼でも食って帰るか？　俺はこう言うのは苦手だ。何か腹にたまるものが食いたい」

「……はい」

食事もデザートまで食べ終えると理音は堅苦しい食事は苦手だったようで怜生に夕飯は牛丼でも良いかと聞くと怜生は大きく頷き、

「そんなものなのか？　……確かに、食い慣れてないから、美味いのかよくわからなかったが」

「坂本くんも？　実はあたしも」

「美味しかったですけど、葉月もお姉ちゃんやお母さんのご飯の方が好きです」

雄二は運ばれてきている料理を口に運ぶがどうも口に合わないようにあり、優子と葉月も雄二と同じ意見なようで苦笑いを浮かべると、

「これなら、翔子の作った弁当を食ってれば良かったな」

「……雄二、気づいてたの？」

「う、まぁな」

雄二は優子と葉月から同じ意見が出た事で翔子が弁当を作ってきている事を口を滑らせると翔子の顔はほころび雄二は理音から教わった事もあるために気まずそうに翔子から視線を逸らした時、

『皆様、本日は如月グランドパークのプレオープンイベントにご参加頂き、誠にありがとうございます！』

会場に大きなアナウンスの声が響き渡る。

「り、理音、まさか、これって、あれか？」

「ん？　だろうな。そう言う流れとなっているからな。タイムスケ

ジュールならあるが見るか？」

雄二はこのアナウンスが自分と翔子を無理やりくっつけるウェディング体験の一環だと気づき、顔を引きつらせながら理音に聞くと理音は表情を変える事なく、懐からウェディング体験のタイムスケジュールを取り出し、

「そんなもんを持ってるなら先に言えよ！？」

「何を言ってるんだ？　俺は招待客だぞ。イベントを見る義務があるんだ。時間に遅れるわけにはいかないだろ」

「そうじゃねえ！！」

雄二は理音が最初からウェディング体験の予定を知っている事に声を上げるが理音の表情が変わるわけはない。

# 第３０７問

「俺は行かないぞ。こんな騙し討ち見たいなもので将来を決められてたまるか！！」

「良いから行け。これを見にきている客もいるんだ。ここまで大勢の人間が期待しているなかでお前の『形だけ』のわがままなど無意味だ」

スタッフがウェディング体験の説明をしているなか、雄二は会場から逃げ出そうとするが理音は雄二の首をつかむと、

「……お前らの使ったチケットだとウェディング体験させられるのはわかっていたはずだ。それを使った時点でここのスタッフはお前達がこの企画を了承したと認識している……それを壊してただで済むと思っているのか？」

「ぐっ！？」

雄二の耳元で今の雄二に如月グループを敵に回す権力や覚悟があるのかと言い、雄二は理音の言葉に顔を歪ませる。

「……別に直ぐに結婚だどうだとなるわけじゃないんだ。それまでに霧島と向き合えるお前になれば良いだけだろ。少なくとも入籍までには１年あるんだ」

「……そのリアルな数字を出すのは止めろ」

理音は雄二の反応にくすりと笑って背中を押すと雄二は理音にはす

でにいろいろなものが見透かされている理解しているため、ため息を吐いた時、

『それでは坂本雄二さん&翔子さん!!　前方のステージへとお進みください!!』

スタッフが雄二と翔子の名前を呼び席を示し、観客の視線は2人に集まり、

「……ウェディング体験……頑張る……!!」

「綺麗なお姉さん、頑張ってくださいです」

「……ゆうじお兄ちゃん、頑張ってください」

翔子は小さな声だがしっかりと気合を入れ、怜生と葉月は純粋な目で雄二と翔子を応援するため、さらに雄二の逃げ所は塞がれてしまい、

「……これはただの体験だ。それ以上でも以下でもない」

「……坂本くん、大丈夫かな?」

「そこまで、責任は持てるか。だいたい、口では霧島の事を突き放そうとしているが本心は違うだろ。雄二もアキと一緒で根本は一緒だ」

雄二は自分にこれはあくまで体験だと言い聞かせるようにぶつぶつとつぶやきながら翔子と一緒にステージに向かって歩き出し、優子はそんな雄二の様子に苦笑いを浮かべるが理音は表情を変える事な

く言い切ると、

「坂本くんが吉井くんと一緒？　全然違うでしょ？」

「雄二は表面は自信過剰で全てを見下しているような感じにも見えるが、それは自分に自信が持てないからだ。だからこそ、霧島の隣にいて良いのか考える。自分に自信がないから、霧島が自分の事を好きと言っていてもそれは昔にあった事に対しての勘違いだと思っている。アキはまぁ……あいつの家系は女傑だから、アキやおじさんは家での発言権は低いからな。自分が何か言っても聞いて貰えないとか思ってる事もある」

「……理音、あんたって、坂本くんと代表に過去に何かあったのか知ってるの？」

優子は明久と雄二が一緒だと言われても納得がいかないようで首を傾げると理音は表情を変える事なく言うと優子は理音が２人の過去を何か知っていると思ったようで理音に聞き返すが、

「ん？　何があったかは知らん。ただ、雄二と霧島の反応と最初の試召戦争の経緯と結果。その他、いろいろと推測できるようなものは多くあった」

「……あんたは何をしてるのよ」

理音は出会ってからの雄二と翔子の様子からの予想だと言い切ると優子は理音の様子にため息を吐く。

# 第３０８問

『ちょっとおかしくなーい？　アタシらも結婚する予定なのに。どうしてコーコーセーだけがトクベツ扱いなワケー？』

「ん？　あれはさっきのバカップル？　どうやら、こりていなかったようだな」

雄二と翔子にウェディング体験を行って貰うための出来レースのクイズ大会が始まり、最終問題に入ろうとした時、観客席からイベントを中断させる迷惑な声が聞こえ、理音はその声の主に視線を向けると先ほど理音に沈められたはずのバカップルであり、

「……埋めてくるか？」

「……止めなさい。あんたが出て行ったら、イベント会場が爆発するでしょ」

「ん？　何を言っている。跡形など残すか」

「……それを止めなさいと言ってるのよ。少しはスタッフに任せなさいよ」

理音はため息を吐いて立ち上がろうとすると優子は少し、スタッフに任せてみようと言っている間にバカップルはずかずかとクイズ会場に移動し、自分達が出題した問題に雄二と翔子が答えられなかったら、自分達がウェディング体験をすると話を勝手に決めている。

『えーと、待ってください。これは特別なチケットで体験できると

言う特典であって』

『うっせぇんだよ。オレたちゃ、オキャクサマだぞコルァ！』

『わー、リョータ、かっこいい』

スタッフはバカップルの意見は聞けないと言うがバカップルはスタッフを威嚇しはじめ、

「……雄二」

「……あぁ」

翔子は不安そうな表情で雄二を見つめると雄二は頷くがこれで逃げられると言う考えも浮かんでいるようであり、

「……優子、やっぱり、行ってくるぞ。このままでは雄二が逃げる」

「……ええ。きちんと思い知らせて来なさい」

理音は雄二の考えている事に気づいたようで立ち上がると優子はスタッフを困らせているバカップルと雄二の考えに少し頭にきているようで理音に許可を出すと、

「……マイクを借りるぞ」

「理音！？」

理音はクイズ会場の舞台に上がり、スタッフから予備のマイクを借り受け、雄二は理音が会場に上がってきた事に驚きの声を上げ、

『リョータ、こいつ、さっきの』

『あ？　てめぇ、さっきは良くもやってくれたな』

バカップルは理音を見て、バカップルの男の方は理音にガンをつけ始めるが、

「……黙れ。こんな時代遅れの髪型とセンスのない服装をして空気を読むと言う事はできんのか？」

理音は表情を変える事なく言うとバカップルの男の姿をバカにし、

「イベントをお楽しみの皆様、はじめまして、私は如月グランドパークの遊具の設計、安全装置の設計をさせていただきました。前田理音と言います」

自分の名前を名乗ると会場の中には理音の事を知っている人間もいたようで会場はざわざわとし始める。

「おい。理音、お前、何をする気だ？」

「ん？　決まってるだろ。俺は如月グランドパークの協力者としてこのイベントを成功させる義務があるんだ。誰の目から見てもこんな時代遅れで常識知らずのバカップルでプレオープンでの売りイベントを行ったら、如月グループの恥になるだろ」

『ま、前田博士！？　せめて、そう言う事を言う時はマイクの切ってください！？』

雄二は理音に何をするつもりだと言うと理音は表情を変える事なくこのバカップルにウェディング体験を受けさせるわけには行かないと言うとスタッフは理音がマイクの電源を入れたままのため慌てるが、

「気にするな。わざとだ」

『あん？　てめぇ、オレたちゃ、オキャクサマだぞコルァ！』

理音は表情を変える事なく言うとバカップルの男は理音にバカにされてため、理音を威嚇する。

# 第３０９問

「客か？　そう言い切るなら、それでも良いが、少なからず、ここにいるスタッフは自分の仕事をしようとしている。特別なチケットを持ったこの２人とウェディング体験を見に来たお客様相手に楽しいで貰うようにな。ただのプレオープンのチケットのお前達がウェディング体験を受けたいと言うのなら、それに見合ったものを出せ。サービス業とは金に見合ったサービスをする事だお前達にウェディング体験を受ける資格も邪魔をする資格もない。イベントの邪魔をするならかまわんがそれならそれで出るところに出てもこちらは一向に構わんぞ」

『あ？　何、わけのわかんねえ事を言ってるんだ？　しめんぞ。おらあ！！』

理音はバカップルにイベントが失敗した場合にバカップルが不利になると『優しく』教えるがバカップルには理解する事の頭はなく、理音の胸倉をつかんで理音を威圧すると、

「……理解するだけの知能は無しか。まさか、アキより頭の足りないバカがいるとは思わなかった」

『何をわけのわかんねえ事を言ってんだ？』

『前田博士！？』

理音はバカップルのバカっぷりにため息を吐き、男は理音の顔に向かい拳を放ち、スタッフが声をあげるが、

「……それで？」

「り、理音、お前、何でわざわざ喰らってるんだ？」

理音は表情を変える事なく、その拳を受けるとバカップルの男性を見下して言い、雄二は本来ならあの程度の拳を受ける理音ではないと思っているため、理音が拳を受けた意味がわからないため驚きの声をあげる。

「……決まってるだろ」

「すいません。警備員が通ります。通してください」

「前田くん、大丈夫かい？」

理音はバカップルの男の行動が予想通りだったようで小さく口元を緩ませると会場で起きた暴力行為に利光と愛子は理音が何をしたいか直ぐに理解したようで警備員を引きつれてくると、

『て、てめえ、何しやがるんだ!?　放しやがれ!?　オレたちゃ、オキャクサマだぞコルァ!』

『ちょっと、何するのよ!?』

警備員達はバカップルを連れて会場を出て行き、

「……理音、大丈夫？」

「気にするな。新郎役の顔が殴られるよりは見栄えが良い……雄二、イベントを失敗させてみろ」

「……」

翔子は理音に声をかけるが理音は表情を変える事なく、雄二にイベントを失敗させたらどうなるかと理解できるなと言うと雄二は眉間にしわを寄せながら頷く。

「……一先ず、イベントを邪魔する人間は片付いたな。会場に集まりになった皆様には不快な思いをさせてしまい申し訳ありません。お詫びに私の方からお集まりの方々にサービスをさせていただきましょう」

理音は警備員に連れて行かれるバカップルの背中を見送った後、目の前で起きた事にざわついている客にサービスをすると言うとスタッフの中には理音の考えに気づいた人間もいるようでスタッフは各テーブルに向かうと、

「後は任せるぞ」

『はい。ありがとうございます。前田博士』

スタッフにマイクを返すと自分のテーブルに戻って行き、

「……お兄ちゃん、大丈夫ですか？」

「リオ、大丈夫なの？」

「あぁ。あんなものは何ともない」

テーブルに戻るとスタッフの衣装に着替えた明久と怜生が理音の顔

をのぞき込み、理音は怜生の頭を撫でながら返事をする。

## 第３１０問

「ねえ。吉井くん、お仕事しなくて良いの？」

「う、うん。そうなんだけどさ」

優子は理音がバカップルの男に殴られたせいもあるのか直ぐにこの席に駆け付けてきた明久に声をかけると明久は苦笑いを浮かべるが、

「ここはかまわんぞ。他で聞いてこい。だいたい、サービスは酒の追加か１回分の入場チケットだからな。俺の場合はくる時に連絡を入れれば良いだけだしな。優子と葉月のチケットは後で渡してやる」

「別にあたしは良いわよ。それにくる時って、理音と怜生くんとだしね」

「……はい」

理音はサービスの内容は予想が付いているため、明久にここにいる必要はないと言うと優子は自分１人ではくる事もないため、怜生にまた一緒に来ようと言い怜生は頷くと、

「怜生くんのお兄さんの彼女さん、葉月もまた一緒に来たいです」

「そうね。理音」

「あぁ。また誘ってやるが、葉月は島田や両親とも来たいだろ」

葉月もまた一緒に遊びに来たいと言うと理音は今度来る時も葉月を

誘うと言いながら葉月の頭を撫でる。

「うん。それじゃあ、ボクは仕事に戻るよ」

「あぁ」

明久は理音の様子に安心たようで苦笑いを浮かべて仕事に戻ると言った時、

『それでは最終問題に移ろうと思いましたが、ウェディング体験クイズ大会参加者である。坂本雄二さん&翔子さんにも不快な思いをさせてしまいましたのでお詫びの意味も込めまして最終問題を省略してウェディング体験を体験していただこうと思います』

「な、何!?」

スタッフは気を利かせて最終問題を省略すると言うと雄二は理音と話をしながらも未だにどこかで逃げる算段を立てていたようで驚きの声を上げ、

「……坂本くん、まだ、諦めてなかったのね?」

「あいつも諦めが悪いな」

優子は雄二の驚きの声にため息を吐き、理音は眉間にしわを寄せると、

「まぁ、でも、逃げ道は塞がれたみたいだし、良かったんじゃない？　……霧島さんのために我慢だ。なんで、霧島さんみたいなきれいな人が雄二みたいなゴリラに」

「確かにな。まぁ、ウェディング体験も無事に済みそうだが……アキ、あまり、無駄な殺意を垂れ流すな。それを言っているとお前が殺されるぞ」

明久は逃げ道を塞がれた雄二に割り切れない部分があるようで嫉妬全開の視線を送ると理音は明久に向けられる2つの嫉妬の視線に気づき、明久を止める。

「う、うん。何か、よくわからないけど危険な気配がする」

「それに気づけば充分だろ。アキ、雄二が逃げる可能性があるから、動きを封じた方が良いと思うんだが、栄養剤（これ）と麻酔薬（これ）、どっちが良い？　それともスタンガンにするか？」

「うん。スタンガンにしとくよ」

明久は理音の言葉で冷静になったようで自分に向けられる殺意に気づき顔を引きつらせると理音は雄二が逃げないようにするために何か使うかと言いながらテーブルの上にいろいろな怪しげなものを出して行き、明久はその中からスタンガンを手に取ると、

「……理音、坂本くん、大丈夫？」

「ん？　大丈夫だ。死なないように威力は調節してあるからな」

「……いや、そうじゃなくてね」

優子はこの後、雄二に起きる事に顔を引きつらせるが理音が気にする事はなく、

「雄二、往生際が悪いよ」

「あ、明久、お前、その手のものはなんだ！？」

明久はスタッフに取り押さえられている雄二にスタンガンを強く押し当てると雄二はぐったりとし、会場の裏に運ばれて行く。

# 第３１１問

「綺麗なお姉さん、キレイです」

「……はい」

会場にウェディングドレスに着替えた翔子が入ってくると会場は翔子の美しさに静まりかえり、葉月は翔子の姿に目を輝かせている。

「……なんだ？」

「別に」

静まり返っている会場で理音は優子の視線に気づき、声をかけると優子は理音が翔子を見ているのが気に入らないようである。

「……おかしな勘違いをするな。霧島は霧島だろ。それ俺が見てるのは雄二のほうだ」

「坂本くん？　……」

「……優子、おかしな勘違いをするなよ」

理音はウェディングドレス姿の翔子に見とれている雄二の反応を見ていると言うと優子はおかしな事を妄想しようとしはじめ、理音は優子の様子にため息を吐くと、

「……あの姿で霧島の夢まで聞かされて、あのバカは何を思うんだろうな」

「理音？」

翔子が会場で涙を流しながら『雄二と2人で結婚式をあげるのが夢だった』と言う言葉に理音は何か考える事があるのか少しだけ表情をしかめると優子は理音の様子に何かを感じたようで心配そうに理音の服をつかみ、

「あんた、大丈夫？」

「意味がわからんぞ」

優子は理音の顔を覗き込むが理音は優子が何を心配しているのかわからずに首を傾げる。

「何か、いつもと表情が違ったから、何かあったのかな？　って」

「別に何もない。ただ……少なくとも坂本や霧島にはなりたい自分と言うものがある。それを目指し前に進んでいるものやなりたい自分になれなくてあがいているもの……本当になりたい自分になれるのはどちらだろうな」

優子は理音に何かあったのかと聞くと理音は意味深な事を言うと苦笑いを浮かべ、

「なりたい自分か……ねぇ、理音って小さい頃、何かなりたいものってあったの？」

「どうしたんだ？」

「前に召喚システムをカリキュラムに取り組んでいる理由を教えて貰った時に理音は『自分には選択肢がなかった』って言ってたでしょ。でも、本当は今の薬学系の研究者じゃなくてなりたいものがあったんじゃないかな？　って」

優子は理音に昔の将来の夢を聞くと、

「……昔、小学生の低学年の時はアキと一緒に合体ロボになりたいと」

「……そんなんじゃなくてと言うか、そんなものになれるわけないでしょ。子供とはいえ、あんたも吉井くんも考えがおかしな方向に飛びすぎよ」

「何を言っている。５体合体だぞ」

「……それは良いわ。だいたい、何で戦隊もののヒーローじゃなくて、ロボットになりたいのよ」

理音は昔の事を思い出したようで苦笑いを浮かべたまま言い、優子は呆れたようで肩を落としてため息を吐く。

「……教師になりたかった。とうさんと同じな」

「先生か？　なんか似合いそうね。あんた、人に物を教えるのわりと好きだし……そして、余計な事も教えるんでしょうね」

理音は優子が呆れている隣で父親の事を思い出しているのようだが、その表情には複雑な感情が混じっているようであり、優子はそんな理音に気づいたのか理音の昔の夢を笑う事はせず、

「そうだな。生徒の質問に答えるのが教師と言う職業だからな」

理音は優子の言葉に柔らかな笑みを見せる。

# 第３１２問

「葉月、キレイなお姉さんのところに行きたいです」

「そうね。理音」

ウェディング体験も無事に終わり、会場のお客が出て行くなか葉月が翔子の元に行きたいと言い始め、優子は理音に裏に回れないかと聞くと、

「そうだな。まぁ、連絡しなくても通れるだろ。アキ達もいるしな」

「それもそうね。理音が関係者なのはスタッフ全員知ってるわけだし」

理音は特に話をする必要もないと言うと怜生と葉月を連れて奥に入って行き、

「優子、俺は雄二の方に行ってくるが」

「えぇ、怜生くん、葉月ちゃん」

理音は雄二をからかうつもりなのか新郎側の準備室のドアの前で止まると優子は頷いて怜生と葉月を連れて新婦側の準備室に入って行く。

「……雄二、入るぞ」

「理音か？　あぁ」

理音はドアをノックすると中から雄二の声が返ってくるため、理音はドアを開けると着替えずに何かを考えている雄二が座っており、

「霧島のウェディングドレス姿に惚れなおしたか？」

「ち、ちげえよ！？　いきなり、何を言うんだよ！？」

理音は反応の薄い雄二の核心を突くと雄二は慌てて否定するが、

「……それは認めてると変わらん」

「……」

理音はため息を吐き、雄二には理音には見透かされているとも理解しているせいか黙ってしまう。

「余韻に浸っているのも良いが、早く着替えろ。まだ時間もあるんだ。この後は霧島をちゃんとエスコートでもしてやれ。お前と2人で結婚式をあげるのが夢とまで言っていた霧島の事を少しは考えろ」

「……でもよ。あいつの俺への想いは勘違いなんだ」

理音はこの後は翔子のためにも2人でデートをしろと言うが雄二はまだ何かが引っかかっているようで首を振り、

「雄二、勘違いだと何か問題があるのか？」

「あるだろ！！」

理音は雄二の言葉に首を傾げると雄二は声をあげるが、

「勘違いと言っているが、それはただ『お前自身が傷つくのが怖いだけ』だろ？」

「ぐっ！？」

理音は表情も変える事無く雄二のなかにある核心を突いて行く。

「霧島がいつかお前への想いを勘違いだと思ってしまった時に自分から霧島が放れて行ってしまうから、お前の中で霧島が特別になる前に自分の気持ちにふたをしてしまおうと……言っておくぞ。そんな事を考えてしまっている時点でお前にとって霧島は特別な存在なんだ」

「……そんな事はわかってるよ」

理音は雄二に翔子への想いを認めろと言うと雄二は頷くが歯切れは悪く、

「……雄二、放してしまった手は思いのほか遠くにあるものだぞ」

「理音、大丈夫か？」

理音は自分の過去を思い出しているようで少しだけ寂しそうに笑うと雄二は理音が何を考えているのか想像は付き理音を呼ぶと、

「……俺は昔、差し伸べられた手を振り払った。それでも、また手を差し伸べてくれたヤツがいる。ここに戻ってきた時に新たに手を差し伸べてくれたヤツがいる。やり方は間違っているかも知れない

がお前にだって手を差し伸べてくれるヤツ、背中を押してくれるヤツがいる。お前は霧島とそいつらを……そして、自分自身を裏切るつもりか？　……言っておく、そこには何もないぞ」

「……あぁ。そうならないようにするさ。俺にも背中を押してくれるバカがいるみたいだしな」

理音は雄二にしっかりと考えるように言い、雄二は理音の言葉に照れ隠しなのかため息を吐き、

「そうか。なら、さっさと着替えろ。俺は優子や霧島に変な疑いをかけられたくないから外にいるぞ」

「あぁ」

理音は雄二の反応を見てくすりと笑うと廊下に出て行く。

# 第３１２問（後書き）

どうも、作者です。

相変わらず、原作を破壊していますが皆さんはどう思っているのでしょうか？

ウェディング体験の無事の終了に……翔子のヴェールのイベントはなくなりました。

明久の女装もつぶしたし、雄二の翔子への告白（秀吉の声真似）もつぶしてありますが、この後はどうなるんでしょうか？

まあ、ただ、原作に沿うのはオリキャラを入れてる意味もないと思ってますし、大筋を変えない程度に何かを考えますがこの作品の作り方を皆さんはどう思っているんでしょうか？

原作からずれすぎてるからダメと思う人も多いのかな？

# 第３１３問

「……おい」

「……言うな。それに今は今で別れられないだろ」

雄二と翔子の着替えが終わり、改めて、如月グランドパークを歩いていると理音はいつまでたっても翔子を誘わない雄二に声をかけるが雄二は雄二で怜生や葉月と一緒に歩き楽しそうな表情をしている翔子を見て今は言い出す時ではないと首を振ると、

「理音、坂本くん、内緒話なんてして何かあるの？」

「な、何でもねえよ」

優子は２人の様子に気づいて何かあったかと聞き、雄二は慌てて何もないと言おうとするが、

「ん？　雄二が霧島と２人で歩いて……」

「理音、余計な事を言うな！？」

「へぇ、坂本くんも素直になる気になったんだ」

理音は先ほど雄二と話した事を隠すような事はせずに話しだそうとするため、雄二は慌てて理音の口を押さえると優子は２人の行動で雄二の想いを察したようでニヤニヤと笑う。

「……木下、最近、理音に似てきてないか？」

「そう？　そんな事はないと思うわよ。それにあたしは代表の味方だから、坂本くんが素直になるなら、その方が良いのよ」

雄二は優子にからかわれている気がしてならないようでため息を吐きながら、優子に理音の性格の悪さが移ってきていると言うが優子はそんな事はないと言うと、

「それなら、協力しようか？　怜生くんと葉月ちゃんなら、あたし達が引きつけておくから」

「……いや、このままで良い。帰りに何とかする。もう少し時間が欲しいから」

優子は怜生と葉月を翔子から放そうかと言うが雄二はまだ決心が付いていないようで苦笑いを浮かべ、

「ヘタレ。なんだかんだ言って、お前も秀吉と変わらないじゃないか」

「う、うるせえ。俺にだっていろいろとあんだよ！！　男が全部が全部、お前みたいに言いたい事を直ぐに口に出すと思うなよ！！と言うか、お前は少し言葉を選べ！！」

理音はそんな雄二を『ヘタレ』と切り捨てると雄二は理音に向かって言葉を選べと言う。

「……坂本くん、それは逆切れだからね。まぁ、確かに理音は少し言葉を選んだ方が良い時はあるけど間違った事は言わないし」

「……俺だってそれくらい、わかるがなんか全てを見透かされてる気がしてたまにそうなるように誘導されている気がするんだ」

「……確かにそれはあるかも」

優子は雄二の様子に苦笑いを浮かべると雄二は優子から指摘されている事もわかっていると言い、優子は雄二の言葉に理解出来る事も多いためかため息を吐くが、

「何を言っている？　そんなもので簡単に他人の心を動かせるなら、直ぐにでもアキと瑞希をどうにかする」

「ん？　お前、姫路派なのか？　俺はお前は中立かと思っていたんだが」

理音は2人の言葉の意味がわからないと言うと雄二は理音の言った『明久と瑞希をどうにかする』と言う言葉に食いつき、

「ん？　まあな。瑞希の行動は島田に引きずられている事も多いしな。島田の行動を見ているとたまに本当にアキの事が好きなのかわからなくなる。それに俺の場合は昔の事も知っているわけだしな」

「確かにね。あたしも最近、姫路さんと一緒の事が多いけど、島田さんがいると攻撃力が増すけど」

「……確かにな」

理音は美波の行動が理解できないのと瑞希の昔からの想いを知っているからだと言うと優子は瑞希とも話す機会が増えてきたため、瑞

希の方が応援しやすいと頷くのを見て雄二は苦笑いを浮かべる。

## 第３１３問（後書き）

どうも、作者です。

また、活動報告にバカテス二次創作の原案を書きました。

今回の主人公は明久の従妹の女の子です。

# 第３１４問

「そろそろ、閉館の時間ね……今日はないけど、もう少ししたら、夜はパレードがライトアップされるのよね」

「はいです。今度はおとうさんとおかあさん、おねえちゃんとくるです」

閉館時間も近づき優子は少しなごり惜しそうに言うと葉月は次に如月グランドパークにくる時の事を思い浮かべているようで笑顔を見せた時、

「……お兄ちゃん」

「ん？　どうしたんだ？」

「……」

怜生は何かあるのか理音の服を引っ張り、理音が怜生の顔を覗くと怜生は何か言いたいようだが言え出せないようである。

「……どうした？」

「……」

理音はもう1度、怜生に聞くと怜生は目を伏せており、理音はそんな怜生の様子に少しだけ困ったように笑うと、

「おい。言いたい事は口に出さないと伝わらないらしいぞ」

「……坂本くんがそれを言う？」

雄二は怜生の頭に手を伸ばし、少し乱暴だが怜生の頭を撫でながら、怜生に言いたい事を言えと言うが優子は雄二の言葉に苦笑いを浮かべ、

「……」

「……怜生くん、理音は怒らない。ちゃんと話して」

怜生は雄二の顔を見上げると翔子はしゃがみ込み怜生と目線を併せて優しげな笑みを浮かべる。

「……俺は怒ると思われているのか？」

「怜生くんのお兄さんは眉間にしわを寄せ過ぎです。だから、怒ってると思われるです」

理音は翔子の言葉に少なからずショックなようであり、眉間にしわを寄せると葉月は理音の不機嫌そうな表情を良くないと言い、

「確かにね」

「あぁ、理音は基本的に機嫌が悪そうだ」

優子と雄二は葉月に注意されている理音の様子に苦笑いを浮かべると、

「……怜生、言いたい事があるなら、言ってくれ。俺はそう言うの

は苦手だ。言ってくれないとわからない」

「……迷惑にならないですか？」

「ならない」

理音は少し困ったように笑うと怜生に改めて言いたい事を教えて欲しいと言うと怜生は不安そうな表情で理音の迷惑にならないかと聞き返し、理音は直ぐに迷惑になどならないと言い切る。

「……あれが欲しいです」

「あれ？」

「ノインちゃんとフィーちゃんのキーホルダーです」

怜生は通路の脇にある売店を指差すと理音は何があるかわからないため、首を傾げると葉月は如月グランドパークのマスコットのノインとフィーのキーホルダーが売っていると言い、

「これが欲しいのか？」

「……はい。お兄ちゃんとおそろいが良いです」

理音は怜生の手を引いて売店まで歩き、優子達も理音と怜生の後を付いて行き売店を覗いていると何種類かあるキーホルダーを選ぶと怜生は理音の服をつかんで不安そうな表情で聞くと、

「……俺もか？」

「理音、空気を読みなさい」

「……わかってる」

理音は自分が持つにはあまりにファンシーなものに眉間にしわを寄せると優子が理音をジト目で睨み、理音は苦笑いを浮かべて怜生とおそろいのキーホルダーを手に持ち、

「理音、あたしのもね。葉月ちゃんはどれにする？」

「良いですか？　怜生くん、キレイなお姉さんどれが良いですかね？」

優子は当然のように理音と怜生とおそろいのキーホルダーを追加して葉月にもどれが欲しいかと聞き、葉月は嬉しそうに怜生と翔子とどれが良いかと選び始め、

「……で、雄二、お前は何を買っているんだ？」

「い、いきなりなんだ！？」

理音は1人でお土産を見ている雄二に声をかけると雄二は完全に気を抜いていたようで驚きの声を上げた時、

「……坂本くん」

「……言うな言いたい事はわかるから」

雄二は探していたものを床に落とし、優子は雄二が落とした物を見て生温かい視線を雄二に送り、雄二は気まずそうに理音と優子から

視線を逸らす。

# 第３１５問

「……理音、怜生くんと葉月ちゃんがおねむの時間」

「あぁ、まぁ、仕方ないだろ」

帰路の電車の中で何とか座席を確保できたのだが、怜生と葉月は遊び疲れたようで降りるはずの駅の前で小さな寝息を立て始めており、

「しかし、どうする？　２人も連れて帰らないだろ。俺達も一緒に行くか？」

「どうしようか？　怜生くんならあたしでも背負えるけど」

雄二は２人の様子に苦笑いを浮かべると優子は怜生を自分が背負い、葉月を理音に任せると言うが、

「まぁ、大丈夫だろ。どうにもならなかったら、タクシーでも捕まえれば良いわけだしな。それに雄二には雄二でやる事があるだろ」

「それもそうね。坂本くんはこれからやる事もあるだろうし」

「……」

理音は表情を変える事なくどうにかすると言うと優子は先ほど雄二が売店で買っていたものを思い浮かべニヤニヤと笑うと雄二はバツが悪そうに優子から視線を逸らす。

「……雄二？」

「何もない！？　翔子は気にしなくて良い！！」

そんな雄二の様子に翔子は何かあったのかと思い首を傾げて雄二の名前を呼ぶと雄二は慌てて何もないと言うが、

「ん？　雄二、先に言っておくぞ。決心がつかないからとか考えるなよ。今日しかないからな」

「な、何がだ？」

慌てる雄二の事など気にする事無く、理音は雄二がやろうとしている事は今日の方が良いと言うと雄二は意味がわからずに首を傾げると、

「須川に如月グランドパークでアキが瑞希と島田とデートをしているとメールを出しておいた。バカどもは今、全力でアキを始末しに如月グランドパークに向かっているはずだ。これで街中でバカどもに見つかる事はない」

「……理音、あんた、何で、吉井くんを餌にしてるのよ」

理音は表情を変える事なく、明久を餌にＦＦＦ団と名乗る嫉妬の塊を街から排除したと言うと優子は呆れたようなため息を吐く。

「ん？　今日もたいした役に立たなかったんだ。これくらいは役に立って貰わないといけないだろ。と言う事で雄二身の安全を考えるなら今日しかないぞ。いくら、幼なじみだと言っても家に帰れば親の１人や２人、湧いて出てくるだろ」

「……あぁ。協力感謝すると言いたいところだが、確実に逃げ道を潰されている気もするのは気のせいか？」

理音は明久が全く役に立たなかったから最後ぐらいは役に立たせてやると言うと雄二は気の利きすぎる理音の行動に顔を引きつらせるが、

「当たり前だ。お前はそれくらいしないと逃げ出すだろ。決心をしたならグダグダ言う前に決めてこい」

「確かに、あたしも理音の意見に賛成よ。待たせるにしたって待たせ方があるんだからね」

理音はくすりと笑い雄二に言うと優子は翔子にはまだ聞かせない方が良いと思っているため、小さな声で雄二に言い、

「お、おう」

雄二が頷くと翔子は雄二の反応に何が起きているのかわからないようで首を傾げた時、

「……お前ら、頭を下げろ」

「え？　何？」

理音は何かを感じたようで3人に頭を下げるように言うと、

「……見つかると面倒な事になったろうな」

「どうしたんだ？」

上下線の電車とすれ違い、電車の中にはおかしな覆面をかぶったクラスメート達が溢れかえっており、理音はため息を吐き雄二は何があったかと理音に聞き、

「ん？　嫉妬の塊がのっていたんだ」

「……いや、普通は見えないからな」

理音は表情を変える事なく言うが雄二は大きなため息を吐く。

## 第３１６問（前書き）

続けて第３１７問も投稿します。

## 第316問

「……理音、流石にその運び方はダメでしょ」

「ん？　そうか？」

理音は電車から降りる時に両腕を怜生と葉月の胴体に回し抱え込むと2人の手足は重力に従っており、そんな3人の姿は気絶した子供2人を誘拐しようとしている男であり、優子は流石に理音を止めると、

「……理音、一先ず、駅を出るまでは俺が1人運ぶ」

「そうか？　……」

雄二も優子と同じ意見のようで理音に怜生か葉月のうち1人を渡せと言うと理音は少し考えた後、怜生を雄二に預けようとし、

「理音、普通は逆でしょ」

「……私も優子と同じ意見」

優子と翔子は理音を非難するような視線を向けるが、

「……いや、雄二に葉月を預けると霧島に雄二がお仕置きされそうだからな。そのせいで葉月が落とされたら困るからな」

「……そんな事はしない」

「翔子！？　今の間はなんだ！？」

理音は雄二が翔子からお仕置きされる事を前提で考えたようで葉月より怜生の方がお仕置きになる確率が低いと言い、翔子は理音の言葉に視線を逸らすと雄二は驚きの声をあげる。

「坂本くん、２人が起きるでしょ」

「お、おう。理音」

「あぁ」

優子は雄二に少し静かにしろと言うと雄二は頷き、理音から葉月を受け取ると６人は電車を降り、

「それじゃあ、代表、坂本くん、また明日ね」

「……うん」

「……」

理音と優子は眠っている怜生と葉月を連れてタクシーのドアが閉まると雄二は翔子は２人っきりになり、

「翔子、少し歩くか？」

「……うん」

雄二は気まずそうに頭をかいた後、直ぐに家に帰るような事はせずに翔子を散歩に誘い、翔子は雄二からの誘いが嬉しいようで嬉しそ

うに頷き、２人はゆっくりとした歩調で歩きだし、

「……あの２人を追ってくれ」

「理音、バカな事を言ってないの。運転手さん、気にしないで行ってください」

理音はタクシーの運転手に雄二と翔子の後を追うように言うと優子はため息を吐き、タクシーを走らせて貰うと、

「ねえ、理音、坂本くん、ちゃんと代表に告白すると思う？」

「ん？　無理だな。絶対にへたれる」

優子は理音に雄二が翔子に告白ができるかと聞くと理音は表情を変える事なく言い切る。

「……理音」

「まぁ、それなりに何かはするだろう」

優子は理音の予想にため息を吐くと理音は告白して付き合いだすまではいかないと思っているようであり、

「それじゃあ、何も変わらないじゃないの？」

「まぁ、覚悟だけでも決めるのは重要な事だろう。後は雄二の覚悟と受け止める霧島の問題だ」

優子は煽ったわりには理音は無責任だと言いたげだが理音は結局は

2人しだいだと言うと、

「……まぁ、今日の霧島を考えると受け止める側の準備はできているだろうが、長く待たされると不安は膨らんでいく、1度、不安を感じてしまうと暗く悪い事しか考えられなくなる時もあるからな…言いたくはないが霧島のように純粋に誰かを想っている人間こそ、その傾向は強く表れる。付き合いだすとかは二の次だとしても雄二がせめてそれを和らげる事を言ってやれば良いんだがな」

「そうね。まぁ、そこは坂本くんを信じるしかないわね」

「……そうだな」

理音は表情には出ないが2人の事を心配しているようであり、優子はそんな理音を見て雄二を信じようと言い、理音は頷く。

# 第３１７問（前書き）

第３１６問も同時投稿です。

# 第３１７問

「……雄二、こんな時間に食べて大丈夫？」

「あぁ、やっぱり、あの昼飯じゃ食った気がしなくてな」

雄二と翔子は２人で河原まで歩くと雄二は腹が減ったと言い始め、２人で河原の草むらに腰をかけると雄二は翔子が今日のために作ったお弁当を頬張り始め、

「……お義母さんの夕飯が食べられなくなる」

「……翔子、何かニュアンスがおかしいからな。それにどうせ、帰ったって直ぐに飯になんかあり付けねえよ。最悪、帰ってから、俺が夕飯の買い物をしに行かないといけないかも知れないしな」

翔子は雄二が夕飯を食べられなくなる事を心配しているようだが、雄二は翔子の心配など気にする事なくお弁当を食べて行くが、

「……なぁ、翔子」

「……何？」

雄二は不意に箸を止めると翔子の名前を呼ぶ。

「お前はどうして、そこまで、純粋に俺の事を想えるんだ？」

「……雄二？」

雄二は覚悟を決めたようで翔子にどうしてそこまで純粋に自分の事を好きだと言えるのかと聞くと翔子は雄二の質問の意味がわからないようで首を傾げ、

「……言っておく。お前のその気持ちは過去に対する責任感を勘違いしたものだ」

「……ゆう、じ……」

雄二は翔子を傷つけるとは理解しているようだが言わないといけない事だと思っているようで翔子の自分への想いを『勘違い』だと言うと翔子は息を飲むと、

「……俺はどうしようもないクズだ。あの日、お前を傷つけた事から目を逸らそうとした。どこかで、お前を守れなかった事は自分が弱いからだと決めつけて強さの意味もわからずに、お前を俺から引き離すためにケンカばかりしてたバカ野郎だ。自分の弱さも認めずにその弱さもきっとどこかでお前になすりつけてたんだ。そんな俺にお前の隣に立つ資格があると思うか？」

「……」

雄二は自分の過去の弱さを吐き出すように言い、翔子はこの後に雄二の口から出る言葉が自分の事を拒絶する言葉だと思ったようで立ち上がり、その場から逃げ出そうとするが、

「……待ってくれ。話はまだ終わってない。翔子、お前には最後まで聞いて欲しいんだ」

雄二は逃げ出そうとする翔子の手をつかむ。

「……いや、聞きたくない」

「聞いてくれ。お前に聞いて貰えないと俺は先に進めない」

翔子は目に涙を浮かべながら雄二の言葉を聞きたくないと首を振り、雄二は真っ直ぐに翔子を見つめて言い、

「翔子、今の俺にお前の隣に立つ資格はないと思っている。お前の隣を歩く自信がないんだ……だから、『待っててくれないか？』」

「……えっ！？」

雄二は翔子に自分が翔子の隣を歩く自信が持てるまで待っていて欲しいと言い、翔子は雄二の言葉に驚きの声を上げ、

「……理音に言われたんだ。お前の俺への想いは勘違いだと言ったら、勘違いで何が悪いってな。そんな風に考える時点で俺はお前に惚れているんだって、資格や自信がないと言うなら成長しろって」

雄二は理音の言葉を思い出して苦笑いを浮かべると、

「あいつに言われっぱなしもムカつくけどな。確かにその通りなんだ……俺はお前の隣に立てると思うまでお前と付き合う気はない。これは俺の男としての意地だ。我がままでちっぽけなプライドだ。だからこそ、翔子に……」

「……待つ。ずっと」

雄二は改めて翔子に待っていて欲しいと言おうとすると翔子は雄二

の言葉の途中で雄二にだ抱きついて待っていると言う。

「良いのか？」

「……私は雄二が良い。雄二じゃなきゃいや。だって、それが私の小さな頃からの夢だから、今日は体験だったけど、いつの日か夢を叶える。『雄二と一緒』に」

「……そうか」

雄二は翔子の言葉に照れくさいようで翔子から視線を逸らすと徐にポケットの中を探ると、

「……雄二」

「……悪いな。売店で子供が記念に買うようなものだけど、今日の俺の覚悟の証だと思って持っていてくれ」

翔子の手に小さなおもちゃの指輪を置き、

「帰るぞ。そろそろ日も落ちるしな」

逃げるように立ち上がろうとするが、

「……雄二」

「待て！？　どうして左手の薬指に付けようとする！？」

翔子は雄二から貰った指輪を左手の薬指に付けようとすると雄二は翔子の行動に慌てて止める。

「……ダメ？」

「ダメと言うか、それはおもちゃだぞ」

「……でも、雄二が私のために選んでくれたものだから」

翔子は雄二の顔を見上げると雄二は翔子から視線を逸らして言うが翔子はおもちゃでも雄二の気持ちが嬉しいと言うと、

「……1度、だけだぞ。すぐに外すからな」

「……うん」

雄二は今から自分がする行動がよほど恥ずかしいのか乱暴に頭をかき、翔子の手から指輪を取ると彼女の左手の薬指に指輪をはめ、翔子は雄二の行動に嬉しそうに雄二の腕に抱きつき、

「しょ、翔子!?　放れろ!?」

「……いや、家に帰るまでがデート」

雄二は翔子の行動に驚きの声をあげるが翔子は幸せそうに笑う。

## 第３１７問（後書き）

どうも、作者と、

理音「主人公だ」

反論はあると思いますが一先ずは雄二、翔子の関係は幼なじみ以上、恋人未満と言う状況で。

理音「告白してるとかわらないだろう」

まあ、後は雄二の性格ですね。

他に売店の雄二の行動で何となく予想はついていたと思いますが『指輪』です。

理音「ヴェールは潰したしな」

そうですね。そうなると対抗するのは指輪くらいしか浮かびませんでした。

しかし……

理音「書いてて恥ずかしくなかったか？」

めちゃくちゃ恥ずかしかったですよ。

雄二の出した答えに対する誹謗中傷は例の如くやさしくお願いします。

そして、一言でも感想をいただけると嬉しいです。

個人的なことなのですがちょっとテンションが下がり気味なので。

（苦笑）

## 第３１８問

（……一先ずは理音には礼を言うべきなのか？　後は明久、お前にも地獄って奴を味あわせてやる）

雄二は翔子との関係を一段落させたため、協力してくれた理音に礼を言った方が良いかと考えながらＦクラスの教室のドアを開けると、

「……これでどうだ？」

「うむ。大部、良くなってきたのじゃ」

理音がいつも持ってきているノートパソコンにヘッドホンを取り付けて秀吉と何かをしており、

「おはよう。理音、秀吉、昨日は世話になったな」

「ゆ、雄二！？　お、おはようなのじゃ！？」

「おはよう。そうだな。昨日は大部、世話をしたな」

雄二は少し皮肉を込めて２人に朝の挨拶をすると理音に皮肉が通じるわけもなく言い、秀吉は雄二が声をかけてきた事に慌てて声をあげる。

「秀吉、どうかしたのか？」

「な、な、何でもないのじゃ！？」

雄二は慌てる秀吉の姿に何かあったかと首を傾げると秀吉は何かあるのか慌てて何もないと言うがその時に理音のノートパソコンに取り付けられているヘッドホンの端子が外れ、

『今の俺にお前の隣に立つ資格はないと思っている。お前の隣を歩く自信がないんだ……だから、待っててくれないか？』

ノートパソコンからは雄二の翔子への告白の1部分が『雄二の声』で響き、

「理音、お前、後をつけてたのか！？」

「そんなわけないだろ。俺はタクシーで追いかけようとも思ったが優子に邪魔をされたからつけてなどいない」

雄二は理音が自分の告白を録音していたと思ったようで声をあげるが、理音は表情を変える事なく、優子に止められたせいで決定的なところを見逃したと言うと、

「それなら、何だ。これは！？」

「ん？　これか？　昨日、霧島からメールがきてな。せっかくだから、雄二の声を再現してどんな感じか検証してみようと思ってな。秀吉には不自然にならないアクセント位置を見て貰っていたんだ」

雄二は理音に詰めより、理音が翔子からのメールを元に作っていると言い、

「何で、そんなメールが送られてるんだ！？」

「気にするな。少なくとも俺以外に優子、秀吉、本宮、工藤、久保はお前の告白を一字一句知っている」

「何だ!?　その辱めは!?」

雄二は声をあげるが理音は自分以外にも翔子からメールを送られた人間がいると言うと雄二はかなり恥ずかしいようで畳の上をのたうちまわり、

「理音、わかっておったが、お主、鬼畜じゃのう」

秀吉は理音と雄二の様子に冷静になったようでため息を吐く。

「ん?　何を言っているんだ。雄二、お前も何をやっているんだ?」

「誰のせいだ!!」

「少なくとも俺のせいではないな」

理音は秀吉のため息に意味がわからないと言うと畳の上でのたうちまわっている雄二に声をかけると雄二は理音が原因だと言うが理音は自分のせいではないと言い切った時、

「……理音、頼んだものはできてる?」

「しょ、翔子!?」

翔子が理音に何かようがあるのかFクラスの教室のドアを開けると雄二は自分の告白を思い出したようで声を裏返し、

「悪いな。残念ながら、アクセントがな。とりあえず、現時点で出来上がっているものだ。修正、改良をしたものは完成したら渡そう」

「……ありがとう」

理音はノートパソコンから雄二の告白のデータを取り出して翔子に渡すと翔子は大事そうにそれを抱きしめ、

「待て!?　お前達は何をしているんだ!?」

「……雄二のこ……」

雄二は理音と翔子の行動に声をあげると翔子は雄二の告白が嬉しかったと言おうとするが雄二は翔子が言おうとした言葉がこの教室では『死』を意味すると理解しているため翔子を連れて教室を出て行き、

「秀吉、続けるぞ」

「う、うむ。しかし、雄二は良いのかのう?」

「気にするな」

理音は2人の事など気にする事なく、作業を続けて行く。

# 第３１８問（後書き）

どうも、作者です。

一先ず、遊園地編は終わりです。
こんな閉め方でいいのか？と思いながらも気にしない方向で、そして、この後に雄二は明久にペアチケットを渡しているはずです。

番宣？
以前から書かせていただいている特別問題を『繋ぐ絆と境界破壊』と言うタイトルで投稿します。この作品以外で書いた特別問題も一緒に投稿します。
第１問には『勤労少年』の特別問題を投稿しました。興味がある方は除いてみてください。

# 第３１９問

「……アキ、雄二、お前らは休日に何をしてるんだ？」

「アキお兄ちゃん、雄二お兄ちゃん、どうしたですか？」

理音は休日に学園長から頼まれた召喚システムの調整等を終えて一緒に付いてきていた怜生の手を引いて帰ろうとした時、プールから西村教諭の声が聞こえて顔を出すと明久と雄二がパンツ一丁で正座をさせられ、西村教諭に説教を受けており、

「リ、リオ、助けて」

「断る。どうせ、バカな事をやって勝手にプールを使いバカ騒ぎをして西村教諭に捕まったと言ったところだろ」

「確かにそうなんだが」

明久は理音に助けを求めるが理音は何となく、明久と雄二がどうしてこんな状況になっているのか予想が付き、断ると雄二は理音の言葉にため息を吐くと、

「……お兄ちゃん、西村先生」

怜生が理音と西村教諭に2人を解放して欲しいと言い、

「……仕方ない。今日は怜生くんに免じてこのくらいにしてやろう。その代わりに明日の朝までに反省文と課題、来週の土曜日にお前達はプールの掃除だ。わかったな」

「「わかりました」」

西村教諭は怜生の様子にため息を吐くと明久と雄二に罰を与え、２人は怜生のおかげでいつもより早くお説教から解放されたため、口元を緩ませるが、

「前田、２人への課題は任せるぞ。今日は眠る事が出来なくなるようなものを作ってやれ」

「了解しました。西村教諭」

「「何だと！？」」

西村教諭は明久と雄二は清涼祭の召喚大会で成績が上がってきている事もあるため、理音に２人を任せると言い、理音は頷くと明久と雄二は驚きの声をあげる。

「ほら、行くぞ。今日は今までよりレベルを上げた問題を解かせてやろう。これができれば１００メートル離れた位置から無能な政治家を撃ち殺す事ができるくらいになるような計算を教えてやろう」

「おい！？　何だ。その危険な発想は！？」

「何を言ってる？　いつか必要になるかも知れないだろ。政権だ。何だと言ってたいした役にも立たないんだ。国民すべてがそれくらいの事ができるようになれば真面目に仕事をするようになるだろ」

「どんな物騒な国だ！？」

理音は明久と雄二に勉強させる内容を考え始めるとその内容は明らかにおかしく、雄二は声をあげると、

「……前田、そう言うのは止めておけ。このバカどもは余計な事にしか使わんからな」

「そうですか。まぁ、仕方ありませんね」

西村教諭は流石に問題にあるため、理音を止めると理音は素直に頷き、

「ほら、さっさと服を着ろ。帰るぞ」

「う、うん」

理音は明久と雄二に帰るから着替えろと言うと明久は頷いて持ってきたカバンからバスタオルを取り出して服を着ようとするが、

「おっと」

「げふっ！？」

雄二がわざとらしく明久にぶつかり、明久は着替えが入ったカバンままプールに落ち、

「バカ雄二！！　何をするんだ！！」

「あ？　バカ久、やる気か？」

明久はプールから這い上がると雄二とにらみ合いを始めだし、

「……前田、どうにかしろ。俺は頭が痛くなってきた」

「そうですね」

「「なんじゃ、こりゃあ!?」」

西村教諭は2人のバカさ加減に頭を押さえて理音に2人を連れて帰ってくれと言うと理音は懐から投網を取り出し、明久と雄二をからめ捕ると、

「バイクを取ってくるか」

「ちょっと待て!?　引きずる気か!?」

「リ、リオ、ごめん。反省するから!?　それだけは死んじゃうから!!」

理音は今日はバイクできていたようで駐輪場にバイクを取りに行くと言い、理音の言葉に明久と雄二は身の危険を感じたようで網の中で土下座をして謝る。

# 第３２０問

「……ってな事があって、おかげで散々な週末だったよ」

「そうじゃったのか。それは災難じゃったのう……」

週明けの朝、明久は秀吉と康太を相手に勝手にプールを使い、西村教諭からの説教と理音からの課題があって大変だった事を話していると、

「……他人に罪をなすりつけるな。だいたい、この間のバイト代でガス代くらい払っておけ」

「そうだ。明久がガス代を払っていればプールに忍び込まなくても良かったんだからな」

「うっ！？　し、仕方なかったんだよ。古本屋に行ったら、ずっと探していたマンガが全巻そろってたんだよ。買わないといけないだろ」

理音と雄二が登校してきて理音はちゃぶ台にノートパソコンの入ったカバンを置いて明久に自業自得だと言い、雄二は明久に罪をなすりつけると明久は気まずそうに視線を逸らす。

「あぁ。週末は罰掃除かよ。面倒だな」

「ホントだよ。理音からは英語で反省文とか言われて朝まで辞書と睨めっこだったし」

「……重労働」

雄二は週末にある罰掃除にため息を吐くと明久は雄二の言葉に頷いた後、明け方まで時間がかかった課題を思い出してため息を吐くが康太は人事のため、どうでも良さそうに言うと、

「……文句を言うな。さっき、お前らの課題を出しに行ったら西村教諭から罰掃除の代わりに掃除をきちんとするなら、1日、プールを好きに使って良いと伝えておけと言われた」

「本当か？」

理音は西村教諭から週末にプールの使用許可をもらったと言うと雄二は理音の言葉に聞き返し、

「あぁ。俺は午前中はばばあの仕事を手伝わないといけないからな。午前中、怜生の相手をしていてくれるなら、掃除を手伝ってやる」

「それは助かる。秀吉、ムッツリーニも今週末、プールにこないか？　ただし、ムッツリーニには掃除を手伝って貰うけどな」

「……」

理音は怜生の相手をしていてくれれば掃除を手伝うと言うと雄二は掃除に秀吉と康太も巻き込もうと思ったようで2人に声をかけると康太は掃除をするのが面倒なためかあまり乗り気ではないが、

「ちなみに、姫路や島田にも声をかけるつもりだ」

「……ブラシと洗剤を用意しておけ」

雄二は瑞希と美波にも声をかけると言うと康太は即答で返事をする。

「うむ、そうじゃな。貸し切りのプールなぞ、こんな時でなければなかなか体験できんじゃろうし、相伴させてもらうかの。無論、ワシも掃除を手伝おう」

「え？　結構大変だと思うけど、良いの？」

「うむ。お安い御用じゃ」

秀吉は滅多にない機会だし自分も掃除を手伝うと言うと、

「秀吉、本宮とデートじゃないのか？　それとも本宮も誘うつもりか？」

「……」

理音は秀吉に週末だが葵の事は良いのかと聞くと康太は瑞希を超えるポテンシャルを持つ葵の水着姿を想像したようで畳を真紅に染めて行くが、

「いや、本宮は今週は家族で出かける用事があってのう」

「……」

「アキ、悔しそうに畳を叩くな」

秀吉は苦笑いを浮かべながら葵は今週末は用事があると言うと明久も康太と同様に葵の水着姿を期待していたようで悔し涙を流しなが

ら畳を叩き、理音はため息を吐く。

# 第３２１問

「お主達は、何を想像しておるのじゃ！？」

「お前が夜な夜な想像している事と同じ事だろ」

「ワ、ワシはそんな事は想像などしておらんのじゃ！？」

秀吉は明久と康太の様子に葵が汚されたような気がしたのか声をあげるが理音は落ち着いた声で『秀吉が考えている事』と同じと言うと秀吉は顔を真っ赤にして全力で否定するが、

「……秀吉、それは肯定と変わらないんじゃないか？」

「まぁ、最近、判明した事だが秀吉もアキと一緒で『巨乳好き』だからな」

「ちが、違うのじゃ！？　ワ、ワシは明久とは違うのじゃ！？　本宮をそんな風になど見ておらぬのじゃ！？」

「止めて！？　ボクにも被害が出るような事を言わないで！？」

雄二は秀吉の様子に苦笑いを浮かべると理音の攻撃は拡散され、秀吉以外にも明久が恥ずかしさのあまり、畳の上をのたうちまわっていると、

「……アキ、今の話を詳しく教えて貰おうかしら？」

「よ、吉井くん、あ、あの。今の話って本当ですか？」

背後に禍々しい殺意をまとった美波が明久の肩をつかみ、対照的に瑞希は気恥ずかしそうに明久から視線を逸らして明久が『巨乳好き』と言う事を確認する。

「ひ、姫路さん!?　み、美波!?　ち、違うんだ!?　こ、これはリオがボクをはめようとしているんであって、そうだよ。これは違うんだ!!　２人の聞き間違いだよ!!」

「……アキの部屋にある『保険体育の参考書』及び『インターネットでの自主学習』、他にウチにきた時に興味を示すＤＶＤから推測できるのは……」

「ちょ、ちょっと、リオ、ストップ!?　それ以上はダメだから!?」

「……胸のサイズはＥからＦ、髪型はポニーテールを好む」

「言いきったよ!?　こんちくしょう!?」

明久はＦクラスの数少ない女性陣に自分の性癖がばれる事を恐れ、慌てながらも何とかごまかそうとするが理音は止まる事はなく明久の好みの女性のタイプを言い切り、明久は血涙を流して吠えるが、

「そ、そうなんですか?」

「ちょ、ちょっと、瑞希、どうして髪型を変えようとしてるのよ?」

「い、いえ、たまには変化を付けるのも良いかな?　って」

「それなら、ウチが変えてあげるわよ」

瑞希は髪型をポニーテールに変えようとすると美波は胸では確実に分が悪いため、瑞希を明久の好みのポニーテールに変えないように邪魔を始めると、

「な、何だよ。そこまで言うなら、ボクだって木下さんに言ってやる！！　リオは巨乳好きだって」

「……明久、お前は子供か？」

「まったくだ。アキ、それに言っておくぞ。俺はサイズに関係なく『大好き』だ！！」

明久は自分に好意がある2人が揉めている事など気にする事なく、理音に仕返しをしようとすると雄二は明久の様子に頭を押さえ、理音は雄二の言葉に同意すると表情を変える事なく、むしろ、男前なほどはっきりとサイズなど関係ないと言い切り、

「……あれは姉上の事か、それとも胸のサイズの事かわからぬのじゃ」

「……絶対に後者」

秀吉は明久に矛先が向かった事で落ち着いたようで理音の言葉に眉間にしわを寄せながら姉の優子に聞かせて良い言葉か悩むようなしぐさで頭を抱えると康太は言わない方が秀吉のためだと首を振る。

## 第322問

「プールですか？」

「土曜日に？」

「……」

雄二は瑞希と美波に土曜日にプールで遊ばないかと聞くと明久は美波の手によってお団子頭になった瑞希を見て黙ってしまい、

「あ、あの。明久くん、どうかしましたか？」

「な、何でもないよ！？　姫路さん！？」

瑞希は明久の視線に気づいて明久に聞くと明久は慌てると、

「お団子頭もそれはそれで良いと考えているんだ。気にするな」

「そ、そうですか……」

理音は直ぐに明久が瑞希の髪型を変えた姿に見とれていたと言い、瑞希は頬を赤く染め、

「リオ、どうしてそういい言う事ばかり言うんだよ！？」

「何だ？　何も言わないで呆けているより、似合ってるとかかわいいとか言ってやれないのか？」

明久は直ぐに自分の考えを見透かして答える理音に文句を言うが理音は表情を変える事なく、自分に文句を言う前に瑞希を誉めるのが筋だろと言い、

「……理音のああ言うところは羨ましいのじゃ」

「……そうだな」

秀吉は思った事を素直に言う事が出来る理音が羨ましいと言うと雄二は秀吉の言葉に頷く。

「ど、どうして、そんな話になるんだよ？」

「ん？　特に理由はないが何となく、そうした方が好感度は上昇すると思うぞ」

明久は理音の言葉に瑞希の髪型を誉めた方が良いのかと考え始めた時、

「瑞希、そろそろ、髪戻そうか？」

「えっ！？　美波ちゃん、待ってください！？」

瑞希が明久が誉めてくれるのを期待して目を輝かせるが不機嫌そうな表情をした美波が瑞希のお団子頭をほどいて行き、

「不毛な戦いだな」

「……火種を点けたお前が言うな。それで、姫路、島田はどうするんだ？」

「2人とも予定があったりする？」

理音は瑞希と美波の様子に眉間にしわを寄せると雄二がツッコミを入れた後、改めて2人に土曜日にプールで遊べるかと聞き、明久は雄二に続いて瑞希と美波の予定を聞く。

「そうじゃのう。予定があるのに無理に誘うわけにもいかんしのう」

「い、いや、別に予定はないんだけど、その、どうしようかな……？　プールと言うと、やっぱり水着だし……」

「そ、そうですよね。水着ですよね……その、えっと……」

秀吉は反応が悪い瑞希と美波の様子に葵と同じように2人にも予定があるのだと思ったようだが、2人は気にする事があるようで瑞希は自分の腹部、美波は胸部に視線を向けると、

「気にするな。瑞希は俺がこの学園に入学してきてからウェストが1．5センチ増量、島田のバストは変化なしだが、充分に良い身体だ」

「ま、前田くん、何を言ってるんですか！？　わ、わたしはふ、太ってなんかないです！？」

「そ、そうよ。ウチだってちゃんと成長してるわよ！！」

理音は表情を変える事なく、2人の心配事を言い当て2人は顔を真っ赤にして反論しようとするが、

「そうか？　……いや、俺の目に狂いはない。瑞希は体重にすると」

「それ以上はダメです！？」

理音は目を鋭くして制服の上から瑞希のサイズを分析し始め、瑞希は慌てて理音の口を塞ぎ、

「……公開、セクハラだな」

「……なぜ、そんなものを言い当てられるのじゃ」

雄二は理音の様子に顔を引きつらせて言うと秀吉は大きく肩を落とす隣で、

「……できれば、胸のサイズを先に言って欲しかった」

「……同感」

明久と康太は悔し涙を流し、多くのクラスメート達も聞き耳を立てていたようで明久と康太の言葉に同調して膝を付いている。

# 第323問

「……別に気にするほどではないだろ。増えたとは言え標準体重以下なんだ。健康を考えるともう少し……そうだな。後」

「だから、ダメです！！　標準体重とか言われても気になるのは気になるんです！！　だから、ダメなものはダメなんです！！」

「……理音、それが乙女心と言うものなのじゃ」

理音は膝を付いている明久達の事など気にする事なく瑞希にもう少し増量しても良いと言うが瑞希は全力で理音を止めると秀吉はそれ以上、言ってやるなと理音の肩を叩き、

「……意味がわからん」

「まぁ、男の俺達にはわからないだろ」

理音は眉間にしわを寄せると雄二は苦笑いを浮かべ、

「それで、どうするんだ？　一応、メンバーは俺、明久、ムッツリーニ、がきんちょ、理音は時間ができたら。そして、秀吉が明久に水着姿を見せにくる」

「ひ、卑怯よ。木下！！　自分は自信があるからって！！」

「そうです！！　木下くんはずるいです！！」

秀吉を引き合いにして瑞希と美波にどうするかと聞くと2人は何故

か秀吉を非難し、

「……お主らは何を言っておるのじゃ？」

「気にするな。どうせ、お前が未だに第３の性別と思われているだけだ」

「ワ、ワシは男じゃ！！」

秀吉は自分が非難される理由がわからないと首を傾げると理音は秀吉は未だに第３の性別扱いされていると告げると秀吉は声をあげる。

「で、どうするんだ２人とも？」

「い、行くわ。その、いろいろと準備をして……」

「そ、そうですね準備は大事ですよね」

雄二は理音を相手に声を上げている秀吉を横目に改めて瑞希と美波に聞くと２人は考える事があるようで頷いているが、

「島田、１週間では成長しないし、見栄を張って余計な事をするのは意味がないぞ」

「……前田、やっぱり、あんたを殺すわ」

理音の攻撃対象は美波に変わり、美波の背後から真っ黒な殺意（もの）が溢れ出し、理音を捕まえようとすると、

「リ、リオ、どうして、美波の逆鱗に触れる事を言うの！？　謝っ

て、直ぐに謝って!?」

「ん？　そんなつもりはないがだいたい、おかしな事に努力をするよりは今ある素材を最大限に引き出す方が俺は重要だと思うんだが」

明久は自分に向けられた殺意ではないにも関わらず、美波の殺意に当てられているようで顔を引きつらせながら理音に謝るように言うが理音は美波の攻撃を交わしながら、美波ふが力を入れようとしている事は間違ってると言い切り、

「確かに、美波の胸は見栄を張ったくらいで大きくなるとは思えないっ!?　いだだだ!?　胸がないから肋骨が!?」

「アキ、あんた殺すわ?」

明久は理音の言葉に頷くと美波の攻撃対象は理音から明久に変更されて美波は明久にコブラツイストをかける。

「……実際はないと言っても感触はあると思うんだが、雄二と秀吉はどう思う?」

「同意を求めるな」

「……まったくなのじゃ」

理音は明久が美波にコブラツイストをかけられている姿を見て雄二と秀吉に同意を求めると2人は気まずそうに明久と瑞希から視線を逸らすと、

「後は翔子と……秀吉の姉貴や工藤にも連絡した方が良いか?」

「うむ。そうじゃな。そうしてやった方が霧島も喜ぶのじゃ」

「そうだな。お前の口から誘えば霧島は喜ぶだろ」

「……あぁ。ちょっと行ってくる」

雄二は翔子にも声をかけるのは気恥ずかしいのか眉間にしわを寄せて言うと理音と秀吉は雄二の様子にくすりと笑いながら翔子が喜ぶなら誘えと言い雄二は自分からではなく2人から了承が取れた事で照れ隠しなのか頭をかきながら教室を出て行く。

# 第３２４問

「おはよう。怜生くん」

「おはようございます」

週末になり、理音はなるべく早くに用事を済ませようと待ち合わせ時間より早めに怜生を連れて文月学園にくるとちょうど愛子も学園に着いたようで怜生を見つけて駆け寄ってくる。

「ん？　工藤、おはよう。ずいぶんと早いな」

「おはよう。前田くん、いやさ。ぼくは元々水泳部だし、目覚ましをさ。いつも通りにかけちゃったんだよね。それで自主練も兼ねて先に泳がせて貰ってようかなって」

理音は愛子がこんなに早い時間に学園にくる理由がわからないために首を傾げると愛子は苦笑いを浮かべながら目覚ましの時間を間違えたと言い、

「そうか。それなら、鍵は工藤に任せれば良いか。一応、雄二が受け取るようになっていたんだが西村教諭に話を通しに行くか」

「そうだね。代表にメール入れとけばみんなプールに来るよね？」

理音は愛子にプールの鍵を任せようと言うと3人は職員室に向かって歩き始め、愛子は先にプールに行っている事を翔子に連絡しようとするが、

「いや、それなら一斉送信しとけば良いだろ。まぁ、康太は携帯電話を持ってないが、そこら辺は誰かが何とかするだろ。それに霧島はたまに間違えてメールも見ないで消す時もあるしな。霧島だけにメールを送るのは危険だ」

「それもそうだね。代表、機械関係苦手だからね。あれだけ、勉強できるのにどうして覚えられないのかな？」

理音は翔子だけに連絡するのは危険だと言うと愛子も納得したようで苦笑いを浮かべながら学年主席の翔子がどうして機械オンチなのか理解できないようで首を傾げると、

「まぁ、人には得手不得手もあるからな。仕方ないだろ。それに雄二はそう言うところにも惚れていると思う」

「それは確かにあるね。絶対、代表のああ言うところ、坂本くんは可愛いと思ってるよね」

理音は雄二が聞いていたら絶対、慌てて否定するような事を言うと愛子は慌てる雄二の姿が目に浮かんだようでニヤニヤと笑う。

「ん？　前田に工藤、怜生くん、ずいぶんと早いな」

「おはようございます。西村教諭」

「おはようございます。西村先生」

「……おはようございます」

3人が話をしながら職員室に向かっていると西村教諭が3人を見つ

けて声をかけ、3人は西村教諭に朝の挨拶をすると、

「うむ。おはよう。それで、約束の時間にはまだ早いがどうしたんだ？」

「それですが……」

西村教諭は挨拶を返すと3人が時間より早く学園に来た理由を聞き、理音は簡単に今の状況を説明し、

「うむ。そうか。別にかまわんが工藤1人で怜生くんの相手は流石に不味いだろう。メンバーが集まるまで前田はプールにいた方が良くはないか？」

「確かにそうだね。どうしよっか」

西村教諭は小さな怜生に何かあったら困るため、理音にプールに行くように提案すると愛子も西村教諭の言葉に納得したようで頷き、

「……そうだな。工藤は自主練したいと言っていたしな。そうします」

「あぁ。そうしろ。学園的にも何かあったら困るしな。お前が居ればある程度対処もできるだろうしな。よし、話もきまったな。鍵を渡すから職員室に来てくれ」

理音は怜生の頭を撫でてプールに行くと言うと西村教諭は安心したようで頷くと3人に付いてくるように言う。

# 第３２５問（前書き）

今回より、番外編『秘めた想いと倒錯娘』の主人公。『弓永深月』に参加します。今回は名前だけの登場です。
データはオリジナルキャラデータに更新しました。
彼女のお話は『強化合宿の裏』で進んで行く予定です。

## 第325問

「……シャチ？」

愛子は水着に着替えてプールへ出るとすでに着替え終えた理音が怜生のためにシャチの形をした浮き輪を膨らませており、愛子は予想外だったようで苦笑いを浮かべる。

「どうかしたか？」

「いや、怜生くんの身長じゃ、足が届かないから浮き輪は必要だとは思ったけど、これはちょっと場違いかな？　って」

理音は愛子が苦笑いを浮かべている理由がわからずに首を傾げると愛子は学校のプールには向いてないのではないかと言うと、

「ん？　そうなのか？　深月が浮き輪と言ったらこれだと言うんでな」

「深月？　あぁ、この間の弓永さんだっけ？」

「あぁ、怜生が水着を持ってなかったから、買いに行ったら、会ってな。浮き輪と言ったらこれしかないと」

「そ、そうなんだ。これはどっちかと言うと海とかじゃないかな」

理音は友人の『弓永深月』に薦められて良くわからずに買ったようで首を傾げ、愛子は優子が良く言っている理音は常識がないと言っている事を思い出したようでクスクスと笑う。

「そうか。海か……どうした？　怜生？」

「……海、行ってみたいです」

理音は愛子の言葉に眉間にしわを寄せていると怜生が理音の顔を見上げて海に行ってみたいと言うと、

「あれ？　怜生くん、海に行った事ないの？」

「……はい」

愛子は怜生が海に行った事がないと思ったようで怜生に聞き、怜生は小さく頷き、

「そっか。前田くん、前田くん、夏休みにみんなで海に行く計画とか立てない？」

「ん？　海か？　俺は構わないぞ。メンバーはいつものメンバーだとすると……問題はアキの旅費等だな」

「確かにね。吉井くんのお金の使い方ってもう少しどうにかならないのかな？」

愛子は良い事を思いついたと言いたげに理音に夏休みに海に行く計画を立てようと言うと理音は表情が変わらないため、乗り気かどうかはわからないが頷きながらも明久が参加できるかと言い、愛子は早めに言っておかないと当日に旅費がないと叫んでいそうな明久の顔を思い浮かべて苦笑いを浮かべる。

「それじゃあ、これは一先ず、お預けだな」

「……はい」

理音は海に行く事に決まったため、シャチを片付けようとするが怜生はシャチの浮き輪が気に入っているのか名残惜しそうな目でシャチを見ており、

「……この広さに１０人くらいだし、良いか？」

「そうだね」

理音と愛子は怜生の様子にそのままシャチで遊ばせておいても良いかと言い、

「しかし、普通の浮き輪もあった方が良い事は確かだな」

「あるんだ」

理音はプールサイドに置いてあったカバンから普通の浮き輪を取り出すと愛子は苦笑いを浮かべ、

「あぁ。久保がこっちも必要だと言ってな」

「なら、先にそっちを膨らませようよ。せっかくの広いプールなんだからそれを膨らませて少し泳ごうって気にならない？」

理音は利光からアドバイスをもらっていると言うが愛子はメンバーが集まりきる前に一泳ぎする気分にならなかったのかと聞くが、

「そうか？　サイズから見るとこっちを膨らませたくなるだろ？」

「はい。　シャチさん、大きくてかっこいいです」

理音と怜生は普通の浮き輪よりシャチにひかれていたようであり、

「……時々、前田くんと怜生くんが本当に似た兄弟だと思うよ」

愛子は2人の様子に苦笑いを浮かべる。

## 第326問

「しかし、前田くんって何でもできるね？」

「ん？　何が言いたいんだ？」

理音が怜生に泳ぎ方を教えている姿を見て自主練を中断した愛子が理音に声をかけるが理音は意味がわからないようで首を傾げる。

「いやだって、泳ぎ方を教えてるのは良いんだけど……立ち泳ぎはおかしいからね」

「？」

理音が怜生に教えている泳ぎ方はクロールなどと言った一般的な泳ぎ方ではなく愛子は苦笑いを浮かべるが怜生はすでに浮き輪が必要ないのか水面から顔を出しながら愛子が苦笑いを浮かべている理由がわからなく首を傾げた時、

「リオ、怜生くん、工藤さん、遅くなってごめん」

「待たせたな」

残りのメンバーもプールに到着したようで制服の明久と雄二がプールサイドに顔を出し、

「あぁ。早く着替えてきてくれ。俺は1度、ばばあの手伝いをしないといけないから」

「うん。待ってて」

理音は学園での仕事が残っているため2人に声をかけると明久は頷き、更衣室に着替えに入って行く。

「前田くん、本当に戻るんだ。怜生くん、お兄ちゃんは冷たいね」

「……お兄ちゃん、お仕事頑張ってください」

愛子はプールから上がろうとする理音を見て怜生に理音に残って欲しいとわがままを言わせたいようだが怜生はいつも通り聞きわけが良く、

「……前田くん」

「あぁ。まぁ、少しずつな」

愛子は怜生が心配なようで理音に声をかけると理音は困ったように笑うと、

「工藤、悪いな。迷惑をかけてる」

「うん。まぁ、気にしなくても良いんだけどね。ボクも優子や代表から前田くんと怜生くんの事は少しは聞いてるし、それにボクも怜生くんが大好きだからね♪」

「？」

理音は愛子に謝り、愛子は理音の様子に苦笑いを浮かべた後、浮かんでいる怜生を抱きしめると怜生は愛子の行動の意味がわからない

ようで首を傾げるが、

「工藤、おかしな事はするなよ。怜生は暴れないから良いが、その行為はプールでは危ないぞ」

「そう？」

理音は愛子の行動に少し考えろと言い、愛子は理音の言葉の意味がわからないようで首を傾げ、

「あぁ。暴れる子供相手なら、外れるぞ」

「……うん。気をつけるよ」

理音は愛子の水着を指差して忠告すると愛子はその時の事を考えてしまったようで苦笑いを浮かべる。

「理音、怜生くん、愛子、おはよう」

「あっ！？　優子、おはよう」

「……おはようございます」

優子は急いで着替えてきたのか理音達3人を見つけて駆け寄ってくると怜生と愛子は優子に挨拶をするが、

「……」

「な、何よ？」

理音は優子の水着姿に視線を送り、優子は理音の視線に気づいて理音の次の言葉を待っていると、

「前田くん、いとしい優子が水着姿を誉めてみたいだよ。何か言わなくて良いの？」

「ん。そうだな」

愛子は理音と優子をからかいたいようでニヤニヤと笑いながら理音に何か言うように言い、理音は頷き、

「やっぱり、無いな」

「死ね！！」

理音は水着の感想より、優子の胸を再確認していたようで眉間にしわを寄せて言い、優子からは理音の顔面に向かい右ストレートが飛ぶ。

「まぁ、似合ってるし、可愛いぞ」

「う、うん」

しかし、理音は表情を変える事なく優子の右ストレートを交わすと優子の耳元で彼女を誉め、優子はその言葉に耳まで赤くすると、

「優子、悪いな。怜生を頼むぞ」

「う、うん。頑張ってきなさいよ」

理音は優子に怜生を頼むと更衣室に戻って行き、

「優子、誉めて貰えて良かったね」

「……」

愛子は優子を見てニヤニヤと笑う。

# 第327問

「理音、いる？」

「……お兄ちゃん」

「ん？　どうかしたか？　……怜生、眠そうだな」

理音が自分の研究室代わりに使っている元教頭室に戻り、学園長から頼まれた作業を行っていると優子と怜生が顔を出し、理音は2人が中に入ってきた理由がわからずに首を傾げるが怜生の顔が眠そうな事に気づき、

「怜生くん、先に来て遊んでたでしょ。それでちょっと疲れちゃったみたいでプールサイドだと日差しが強いし、まだ遊びたいみたいではあるんだけど」

「そうか……怜生」

優子は苦笑いを浮かべながら怜生を連れてきた理由を話すと理音は怜生を抱き上げるとソファーの上に運ぶが、

「……まだ、遊びたいです」

「まぁ、少し休んでからにしろ。まだ時間もあるしな」

怜生は眠いのだがまだプールで遊びたいようであり、理音はそんな怜生の様子に優しげな笑みを浮かべて怜生の頭を撫でると、

「……はい」

「……寝ちゃった？」

「……あぁ」

怜生は限界がきたようで理音に抱きついたまま寝てしまう。

「……しかし、参ったな」

「何？」

「……動けん」

理音は自分に抱きついて寝息を立てている怜生を起こすわけにもいかずにため息を吐くと、

「良いじゃない。少しくらい、そのままでもそのうち放してくれるでしょ」

「……いや、怜生は寝ている時に1度、つかんだものは起きるまで放さないんだ」

優子は少しくらい怜生に付き合ってやれと言うが理音は苦笑いを浮かべ、

「それじゃあ、作業、終わりそうにないの？」

「いや、プログラムはある程度、組んだからある程度は勝手にやってくれるから問題ない」

「それなら良いじゃない」

優子は理音の仕事の進捗状況を確認し、理音はキリの良いところまでは進んでいると答え、優子は理音の隣に座る。

「まぁ、そうなんだが……他にもやる事もあってな」

「何？　また、おかしな事？」

理音は他にもやる事があるようで困ったように笑うと優子は理音に疑うような視線を向けると、

「いや、強化合宿で希望者に医療関係や語学関係の特別講義をやるように言われてな。その資料作りをしないといけないんだ」

「特別講義？　そんなのもやるの？」

理音は疑われるような事はしていないと言うと優子は首を傾げ、

「あぁ、一応は薬学や医療関係が俺の専攻分野だからな。そっちに進む人間から考えると貴重な体験になるだろうからって、ばばあが言ってな」

「確かにあんたの専攻分野だけど……受けた人間がトラウマになるようなおかしな事をするのだけは止めてよね」

「何を言ってる話程度でトラウマになるなら、そこで諦めて他の道を探した方がそいつのためだろ」

理音は学園長から頼まれた理由を話すと優子は納得がしたようだが、理音の特別講義の内容が心配のようでありため息を吐くが理音が気にする事はなく、

「まぁ、語学の方は島田に手伝わせるとして」

「ドイツ語？　普通は英語じゃないの」

「英語もやる。ドイツ語はせっかく島田がいるんだ。本場の物を知るのは重要だろ。後は中国語か？」

理音は美波がいるからドイツ語を組み込んで見たと言った後、中国語もやりたいと言い、

「何で、中国？」

「ん？　人口を考えれば中国語を覚えれば１０億人以上と話をできるんだ。当然だろ」

優子は意味がわからないようで首を傾げるが理音は人口で選んだと言い切る。

その後、２人は怜生が起きるまで２人で話をして行く。

## 第328問

「前田くん、おはようございます」

「やっと戻ってきたわね。どう、仕事は終わったの？」

怜生が目を覚まし、理音と優子は怜生を連れてプールに戻ると瑞希と美波が理音に声をかける。

「いや、もう少しやる事もあるんだけどな。今日である必要もないかと思ってな」

「そうなの？　それなら、最初からそうしなさいよ。その方が怜生くんも喜ぶでしょ」

理音は怜生の事もあったため、強化合宿の資料作りは後に回したと言うと美波は苦笑いを浮かべ、

「そうだな……ん？　清水？」

「何を言ってるのよ？　美春がいるわけ……」

理音は美波の言葉に頷き、優子とプールに入ろうとしている怜生に視線を送ると視線の先には本来いるはずのない『清水美春』の姿が映り、首を傾げると美波はそんなわけないと言おうとするが、

「お姉さまっ！！　どうして、プールに行くのなら美春に声をかけてくれないのですか！？　美春はこんなにもお姉さまの事を愛していますのに！！」

「美春!?　あんたがどうしてここにいるのよ!!　プールで遊ぶなんて誰にも言わなかったはずなんだけど!!」

美春は間違いなくそこに立っており、美波への愛の告白をしながら彼女に襲い掛かって行き、美波は全力で逃げだし始め、

「……一先ず、清瀬に連絡してみるか?」

「そ、そうですね」

理音は2人の様子を見てカバンから携帯電話を取り出し、美春の幼なじみである『清瀬大樹』に連絡を入れると言うと瑞希は苦笑いを浮かべる。

「……もしもし、前田、どうかしたか?」

「あぁ。清瀬、休日に悪いな。今、俺達は学園のプールにいるんだが」

「……あぁ。わかった。今から美春を引き取りに行く」

大樹は理音からの電話の内容と電話の先から聞こえてくる美春から逃げているであろう美波の声に全てを察したようでため息交じりの声で言うと、

「いや、別に引き取りにくる必要はない。せっかくだし、お前も遊びにこないか?　お前がくると清水もある程度は大人しくなるだろうし、怜生も喜ぶ」

「プールか？　確かに今日は暑いし、魅力的な誘いだな……前田と島田さんがいるって事は姫路さんや霧島さんもいるわけだろ……それはみたいな」

「……素晴らしい眺め」

理音は大樹に美春を引き取ると言う事だけではなく大樹を誘うと大樹はプールにいるメンバーに予想が付いたようで男の子な反応をすると理音の携帯電話から康太が大樹の心を揺さぶる攻撃をし、

「他には優子と工藤もいる」

「せっかくのお誘いを断るのは悪いよな」

「……人間、素直が１番」

理音は優子と愛子もいると言う話をすると大樹は女性陣の水着姿をみたいようで電話先で頷いた時、

「ヒロ！！　何、鼻の下をのばしてるのよ！！　ヒロも豚野郎になり下がったのですか！！　見損ないましたわ！！」

「べ、別に伸ばしてなんかいない」

美春が理音の携帯電話を取り上げて大樹を罵倒しはじめ、

「平和だな」

「そ、そうですね」

理音は微妙な距離を保っている幼なじみカップルの様子にため息を混じりで言うと瑞希は苦笑いを浮かべる。

# 第329問

「……殺気だってるな」

「そ、そうね。何があったのかしら」

大樹が合流してしばらくすると瑞希、翔子ペア対美波、美春ペアのビーチバレー対決が始まっているが瑞希と美波は真剣な勝負をしているのを通り越して殺気だっており、大樹はその姿を見て苦笑いを浮かべると優子は顔を引きつらせて原因を知らないかと聞き、

「ん？　原因は雄二の嫌がらせだ」

「……当然の権利だろ」

理音は原因は雄二にあると言うと雄二は自分は悪くないと言い切ると、

「ん？　そうだ。坂本、霧島さんと！？」

「き、清瀬！？　い、いきなり、何を言うんだ？　理音、お前は余計な事を言って回るな！！」

大樹は雄二に言う事がある事を思い出して雄二の名前を呼ぶと雄二は本能的に大樹が言おうとした事を理解して大樹の口を塞ぐと理音を怒鳴りつける。

「雄二、お前が何を勘違いしているかはわからんが『俺』はお前と霧島の事は話してないぞ」

「それじゃあ」

「あ、あたしも違うわよ！？」

理音は大樹には何も話していないと言うと雄二は優子に視線を送るが優子も身に覚えがないため大きく首を振ると、

「いやぁ。２人が上手く行ったと言うのを俺は怜生くんから聞いたんだけど」

「……意外なところから漏れてるな」

「そうね」

大樹は苦笑いを浮かべながら怜生から聞いたと言うと理音と優子は苦笑いを浮かべながら葉月と一緒に明久と秀吉に遊んで貰っている怜生に視線を送り、

「……俺はどんな反応をしたら良いんだ？」

「さあな。まぁ、おめでとうくらいは言わせてくれよ」

「お、おう」

雄二は流石に怜生を怒るわけにはいかないようで眉間にしわを寄せると大樹は笑顔で雄二と翔子を祝福し、雄二は照れ臭そうに頭をかく。

「それで、坂本くんの嫌がらせって何をしたの？」

「この間の如月グランドパークのお礼に明久に映画のペアチケットをやったんだよ。誰か誘えって言ってな。それで姫路と島田が食いついたんだけどな」

「アキは2人が行きたいなら2人で行けと言ってな。どうやら、勝った方がチケットを手に入れてアキを誘うようだ」

優子は雄二に瑞希と美波の対決の理由を聞くと理音と雄二は明久の鈍さにため息を吐き、

「姫路さんも島田さんも大変だ」

「そうね……と言うかあの様子だと負けた方も付いてきそうな気がするわ」

大樹は苦笑いを浮かべながら瑞希と美波の想い人に視線を送ると優子は瑞希と美波の次の行動が目に見えているのか肩を落として言うと、

「清瀬はそれでどうなってるんだ？　清水と」

「ん？　現状維持の幼なじみ。別に慌てる必要もないしな。ゆっくりと行くよ」

雄二は大樹に反撃をしたいようで美春との関係に進展はあるのかと聞くがだいぶ前から自分の気持ちを認めている大樹の方が1枚も2枚も上手であり、雄二の反撃をさらりと交わし、

「……」

「坂本くんの負けね」

「あぁ。と言うか同じ時間を歩んできたわりには雄二の完敗だな」

雄二は大樹の反応に納得がいかなさそうな視線を送るが理音と優子は雄二に勝負を挑むだけ無駄だと言って雄二の肩を叩き、

「ち、ちくしょう。何で、俺だけ攻められるんだ？」

「それは素直じゃないからじゃないか？」

「雄二はツンデレと」

雄二は自分だけからかわれていると思っているようで叫ぶように言うが大樹は苦笑いを浮かべ、理音は雄二をツンデレと言い切る。

## 第３３０問

「パアンッ！！」

「な、何？　何の音？」

雄二をからかった後、しばらくすると何かが割れたような音がして優子が声をあげると、

「……欲望の力とは恐ろしいものだな」

「……美春」

ビーチバレーで美春がサーブを打った時にボールが割れたようであり、理音はボールを割った美春を見て感心したように頷くが大樹は大きく肩を落とし、

「ボールが割れるなんて凄いね」

「まったくなのじゃ」

遊び疲れたのか明久、秀吉、怜生、葉月は苦笑いを浮かべながら理音達に合流する。

「怜生くん、葉月ちゃん、身体を拭きましょうね」

「はいです」

「……はい」

優子は怜生と葉月にタオルを渡すと、

「ほら、アキ、秀吉」

「ありがとう」

「すまぬのじゃ」

理音も明久と秀吉に向かいタオルを投げて渡し2人は上手くキャッチすると頭を拭きながら礼を言い、

「あれ？　木下、どうして女物の水着なんだ？」

「……言わないでほしいのじゃ」

大樹は頭を拭いている秀吉の水着が女物だと言う事に気づいて首を傾げると秀吉は落ち込んだように言う。

「……水着を買いに行って店員に女の子と間違えられたのよ」

「優子、殺意をまき散らすな。だいたい、お前も一緒に行ったんだろ。文句を言うならその時に言え」

優子は秀吉が女物の水着を着ている理由を話しながらもその時の事を思い出したようで眉間にしわを寄せると理音は今更怒るなと言い、

「まぁ、2人とも美少女だから仕方ないよな」

「清瀬くん、わかってる。そうだよね。秀吉は美少女だよね」

「ワ、ワシは男なのじゃ！？」

大樹は理音と優子の様子に苦笑いを浮かべながら冗談で秀吉を『美少女』と言うと明久は拳を握りながら大樹の言葉を肯定するが秀吉は声をあげると、

「このやり取りもお約束だな」

「まぁな。と言うか、秀吉、彼女持ちのはずなんだけどな」

「と言うか、この反応を見てるとクラスの男どもからの木下の人気もわかるな」

理音は明久の反応に眉間にしわを寄せると雄二は自分から攻撃の対象が秀吉に移ったため苦笑いを浮かべながら頷くと大樹は秀吉が男子生徒から人気のある理由がわかると苦笑いを浮かべるが、

「……」

「お姉ちゃん？」

優子のこめかみにはぴくぴくと青筋が浮かんで行き、怜生は心配そうに優子の顔を覗き込む。

「な、何でもないわよ」

「そう言うなら、殺意を抑えろ」

優子は怜生に向かい笑顔を見せるがこめかみから青筋は消える事は

なく、理音はため息を吐きながら優子にもう1度、殺意を抑えろと言うと、

「と言うか、木下さんは気にしすぎだと思うけど俺は学校での優等生の木下さんより、前田や怜生くんと一緒にいる木下さんの方が話しやすいし、楽でいいよ。肩っ苦しいの疲れるし」

「確かにな。俺も最初の試召戦争の時はこんな風に話す事になるとは思わなかったしな」

大樹は優子は気にしすぎだと言うと雄二も2学年になった時に持っていた優子の印象からは考えられないと苦笑い浮かべ、

「そうかな？」

「それ、ちょっとわかるわ。やっぱり、試召戦争の時はきつい人だと思ったしね」

「美波ちゃん、あの、もう少し」

優子は雄二と大樹の言葉に戸惑っているのか苦笑いを浮かべると瑞希と美波も会話に参加してくる。

## 第３３１問

「あ、あたしって、そんな印象なの？」

「今更だろ。俺が転校してきた初日からケンカ売ってきてたしな」

優子は優等生を上手く演じる事ができていたと思っていたようで少しショックなようだが理音は気にする事なく、優子との初めての接触の時の事を話すと、

「あれはあんたがケンカを売ってきたんでしょ！！」

「『……あなた、Ａクラスを覗いて何をしてるの？』と睨みつけられたんだ。ケンカを売られてると勘違いしてもおかしくない言葉だろ」

優子は理音は先にケンカを売ってきたと言うが理音は表情を変える事なく言い切り、

「どう思う？」

「微妙かな？　リオは考え事を始めると１人でぶつぶつと言ってるし」

雄二はその時の理音と優子の様子を思い浮かべたようで明久に声をかけると明久も雄二と同じ事を考えたようで苦笑いを浮かべる。

「まぁ、出会いが最悪から変わったってのはよくあるパターンだしな」

「幼なじみも充分によくあるパターンだと思うよ」

大樹は最初の出会いでケンカを売ったのはどっちだと言う話で一方的に理音に向かっている優子を眺めながら言うと愛子は苦笑いを浮かべながら大樹と美春の関係の事を言うと、

「そうよ。清瀬、あんた、いくら幼なじみとは言え、何で、美春を選んだのよ。あまり良くない言い方だけど、あんたなら、もっと良い子が見つかるでしょ？」

「うーん。もっと良い子が見つかるってのがよくわからないけど、強いて言えば……」

「「「「強いて言えば？」」」」

美波は大樹と美春の関係に納得がいかないと言うと大樹は苦笑いを浮かべて誤魔化そうとするが瑞希、美波、翔子、愛子は興味津々のようで大樹との距離を近づけて行き、

「……顔」

「……清瀬、ウチはあんたを見そこなったわ」

大樹はじ４人の食いつきに気恥ずかしいのもあるようで頭をかきながら誤魔化すと美波は大樹の答えを信じたようで大樹を軽蔑するように言う。

「まぁ、それで良いよ」

「他にあるわけだね。さあ、言ってみようか？」

大樹は美波の反応に苦笑いを浮かべたまま、これで終わらせようとするが愛子はまだ聞ける事があると判断したようで大樹に詰め寄り、

「そうだな。せっかくだし、吐いちまえよ」

「……そうか。ここで仕掛けてくるか」

雄二は大樹への反撃の目を見つけたため、愛子の言葉にのっかり、大樹は先ほど雄二の攻撃を交わしたせいもあるため苦笑いを浮かべ、

「まぁ、付き合いも長いからね。何と言うか……ほっておけないってのが1番かな？　実際は良くわからないよ。ただ、美春の行動は正直ムカつくし、何度も見捨てようとは思ったんだけど……勝手に目が追うわけだよ」

「そ、それ、わかります。好きな人の事は無意識に見てしまいますよね」

「……今更、言うのも何だけど、吉井ってどこまで鈍いんだ？」

大樹は用具室から代わりのボールを持ってこっちに向かってきている美春を見て言うと瑞希は大樹の意見に頷きながらちらちらと明久へ視線を送るが瑞希の想い人である明久は康太と一緒に秀吉の水着姿を横目でチラチラと覗いており、大樹はそんな明久の様子に頭を押さえると、

「まぁ、後は認めてしまえばそれまでと……なぁ、坂本」

「うっ！？」

雄二に仕返しをし、雄二は大樹からの仕返しに目を泳がす。

# 第３３２問

「ところで、どうしてプールを借りることができたんですか？」

「お、そうだな。１学生に貸してくれるなんて事は……前田が居ればそうでもないのか？」

瑞希は思い出したかのようにプールを借りるに至った経緯を聞くと大樹も瑞希の言葉に同じ事を疑問に思ったようだが理音の顔を見て何となく納得するが、

「今回の件に関しては俺は関係ない。アキと雄二がバカな事をやった結果だ」

「豚野郎どもはまたおかしな事をやったわけですね」

理音は表情を変える事なく自分は関係ないと言うと美春は明久と雄二を睨みつけ、

「雄二が悪いんだよ」

「あ？　お前が悪いんだろ。バカ久」

明久も雄二もお互いに自分が悪いと思っていないようでにらみ合いを始め出し、

「まぁ、こんな感じだから、清水の言っている事もあながち間違っていない」

「……そうみたいですね」

理音は明久と雄二の様子にため息を吐くと瑞希は苦笑いを浮かべる。

「で、実際はあの2人は何をしたんだ？」

「夕方にプールに侵入してパンツで泳いでいるところを西村教諭に見つかった」

「……何をしてるんだ？」

大樹は明久と雄二の様子に2人からは話は聞けないと思っているようで理音に聞き、理音は簡単に説明すると大樹は眉間にしわを寄せ、

「それで罰掃除を言い渡されて、その代わりに遊んでも良いとなったわけだ」

「やれやれ。それじゃあ、俺は人手として呼ばれたわけか？」

「いや、別にそう言うわけでもない。清瀬を呼んだのはあくまでも清水の手綱取りと怜生が喜ぶからだ」

理音はプール掃除は罰だと言うと大樹は苦笑いを浮かべながら、自分は人手と判断したようだが理音はそんな目的で大樹を誘ってはいないと言うが、

「気にするな。迷惑もかけてるしな」

「ヒロ、放しなさい！！　オネエサマ、オネエサマ」

大樹は苦笑いを浮かべながら美波の水着姿に興奮し始めて人外化を始めた美春の首をつかんで言うと、

「手伝ってくれるのはありがたいのじゃが、道具は5人分しか用意してこなかったのじゃ、力仕事もあるしのう。女子には辛いじゃろうし」

「道具を用意してきたの？　用具室にあるよ」

秀吉は掃除用具は5人分しか持ってこなかったと言うと愛子はプールの掃除用具をわざわざ用意してきた事の意味がわからないようで苦笑いを浮かべる。

「「確かに！？」」

「……お前ら、気づいてなかったのか？」

明久と雄二は愛子の言葉に初めて学園に掃除用具がある事に気づいたようで驚きの声をあげると理音は眉間にしわを寄せ、

「一先ずは、これで道具は足りるな。それで坂本、いつから掃除を始めるんだ」

「ボクは転校前の学校でプール掃除もした事があるけど水抜きも考えるとそろそろ始めないとダメだよね」

大樹は苦笑いを浮かべたまま、掃除をどうするかと聞くと愛子はそろそろ掃除の時間だと言い、

「そうだな。そろそろ、始めないとダメか……どうした。がきんち

よ？」

「お兄ちゃん達で１番早く泳げるのは誰ですか？」

雄二は掃除をしないといけないと思ったようで苦笑いを浮かべると怜生が雄二の顔を見上げながら男性陣で誰が１番、早く泳げるのは誰かと聞く。

## 第３３３問

「そりゃあ、俺だろ」

「は？　雄二、何を言ってるんだい？　ボクが雄二なんかに負けるわけがないだろ」

怜生の質問に雄二はこの中で運動神経で負ける要素は見当たらないと言いたげに言うが明久は雄二の言葉を鼻で笑い、

「あ？　なんだ。明久、まさか、お前が俺に勝てるとでも思ってるのか？」

「当然だろ」

明久と雄二はお互いを罵倒し合いながらにらみ合いを始め出し、

「何を言ってるんですか？　あなた方豚野郎にヒロが負けるわけはありませんわ」

「清水さんはあぁ言ってるけど、清瀬くんって泳ぐの速いの？　中学は水泳部だったとか？」

「あぁ、まぁ、それなりにね。うちの中学は部活は必須だったんだよ。それで何となくね。高校に入ってからは家の手伝いとか美春の家の手伝いもあるから辞めちゃったけど」

美春は明久と雄二など大樹の敵ではないと2人で鼻で笑うと愛子は大樹に聞くと大樹は苦笑いを浮かべながら、中学までは水泳部に所

属していたと言うと、

「へぇ、あれ？　清瀬大樹？　……ねえ、清水さん、清瀬くんって出身中学って芥菜（からしな）二中？」

「はい。そうですけどどうかしましたか？」

愛子は大樹の名前に何かを思い出したようである中学校の名前を出すと美春は頷き、

「……吉井くん、坂本くん、清瀬くんには勝てないから変に争うのやめなよ」

「愛子、どうかしたの？」

愛子は不毛な戦いを繰り広げている明久と雄二に声をかけると優子は首を傾げて愛子にどうしたのかと聞く。

「芥菜二中の清瀬大樹って言ったら、この地区の中学自由形２５メートルの記録保持者だよ……何で、水泳を辞めてるのかぼくは知りたいよ。あれだけの記録を残してたらスポーツ校推薦だって取れたでしょ？」

「いや、強制で入った部活だし、好きでやってる人間の邪魔したら悪いと思って、それに目を放すと危なっかしいのがいるから」

「清瀬、その手を放したらダメよ。み、美春も落ち着きなさい」

「オネエサマ、オネエサマノミズギスガタ。ソノヌノナカミハドウナッテイルノカミハルニミセテイタダケマセンカ？」

愛子は大樹が中学水泳ではかなりの実力者だったと説明するが大樹は苦笑いを浮かべながら再び、始まった美春の人外化を防ぐために美春を後ろから羽交い絞めにしており、

「……うん。何となくわかったよ。清水さんのためだね」

「下手したら人殺しとかになりそうだからね」

愛子と優子は昔から変わっていないであろう大樹と美春の関係に顔を引きつらせて頷くと、

「なるほど、清瀬の身体能力の高さは人外親娘の相手をして鍛えたものか？　確かにあれに睨まれて追いかけ回されていれば良いトレーニングにもなるだろうしな。プレッシャーにも強くなる」

「……プレッシャーの種類は違う」

理音は何か納得できる部分もあったようで頷き、康太は理音の言葉の1つを否定する。

「それじゃあ、清瀬くんが1番速いって事で良いのかな？」

「いや、勝負は水ものだしわからないよ。俺も泳ぐのはずいぶんと久しぶりだしね。それに前田は速そうだ」

「ん？　そうか？　確かに身体能力の高さでは康太も侮れないしな」

愛子は勝負をするまでもなく、大樹の勝利だと言おうとするが大樹はやってみないとわからないと言い、理音は首を傾げながら康太に

視線を向けるが、

「そうかも知れないけど、今日のムッツリーニくんは敵じゃないんじゃないかな？　さっきから女子達の水着姿に興奮して鼻血出しすぎてふらふらしてるし」

「……そんな事実はない」

愛子は康太は戦う以前の問題だと言うと康太はスタート台の１つに立ち、

「これは勝負の流れだな」

「まぁ、遊び程度に最後の一勝負と行きますか？」

「うむ」

理音と大樹は立ち上がると康太に続いてスタート台に立ち、秀吉も後を追いかけて行き、

「……雄二、吉井と遊んでないで準備する」

「お、おう。明久、決着をつけてやるよ」

「望むところだ」

翔子は雄二を応援するように声をかけると雄二は短く返事をして明久にもスタート台に着くように言うと男性陣はスタート台に並ぶ。

「そう言えば、優勝者には何か賞品がいるわよね？　どうする？」

「それなら……実は今朝作ったワッフルが3つ」

美波は賞品がないと盛り上がらないと言いだすと瑞希は遠慮がちにカバンからワッフルを取り出すと、

「第1回っ！！」

「最速王者決定戦っ！！」

「「ガチンコ、水泳対決っ！！」」

瑞希が何かを言いきる前に明久と雄二が叫び、続くように秀吉と康太が合の手入れるため、

「……なぁ、前田、不味いのか？」

「ん？　食いものじゃないだけだ。気にするな」

「い、いや、気にするだろ」

大樹は瑞希のワッフルの出来に不安を感じて理音に耳打ちをすると理音は表情を変える事なく、瑞希の料理を斬り捨てると大樹は顔を引きつらせるが、

「瑞希、それを賞品にしたいのは良いが、炎天下の中で外に置いてあったワッフルを俺は食えるとは思えないぞ」

「そ、そうですね。すいませんでした」

理音は表情を変える事なく言うと瑞希は理音の言葉に納得したようでしゅんと肩を落とす。

## 第３３３問（後書き）

どうも作者です。

美春の出身中学を勝手に名前を決めました。

芥菜（からしな）はバカテスの学校名や団体名、地名が月の異名を使ってるのがそれで選ぼうかな？とも思いましたが出尽くしているので４月の季語からとりました深い意味はございません。

そして、瑞希のワッフルを潰し、水泳勝負はどうなるんでしょうか？

# 第３３４問

「リオ、よくやってくれた」

「あぁ」

瑞希が肩を落としているのとは対照的に瑞希の料理の腕を知っている明久、雄二、康太、秀吉の４人は理音を褒め称えると、

「そ、そんなに不味いのか？」

「……うむ。強いていうなら、冥府に落ちるような味なのじゃ」

４人の反応に大樹は顔を引きつらせると秀吉は女性陣に聞こえないように大樹に耳打ちをする。

「それじゃあ、賞品はどうしよっか？　優勝者にはぼく達女性陣の誰かからほっぺにキスとか？」

「キ、キスですか？」

「優勝した人が選ぶって事？」

「……それは秀吉にキスをして貰えるって事？」

「ワシは男じゃ！？」

そんななか、愛子が１つの爆弾を落とし、瑞希と美波は頬を赤く染めながら明久の顔をちらちらと目線を送っているが当の明久は２人

の視線に気づく事はなく、

「……雄二、負けたら許さない」

「や、止めろ!?　翔子!?　わ、割れるぅぅぅ!!!!!??????」

翔子は雄二にご褒美のキスをしたいようで雄二を激励しているがその方法はいつものアイアンクローであり、雄二の生命力は大幅に削られ、

「……ヒロ、おかしな事を考えてないでしょうね？」

「……睨まれる理由がわからないんだけどな」

美春は大樹に向けて殺意混じりの視線を向け、大樹は美春の様子にため息を吐くと、

「それは止めよう。面倒な事になるし、坂本の生死に関係しそうだしな」

「そうだな。俺にも特に旨味もないし、康太も死にそうだからな」

大樹は愛子の提案を却下しようとすると理音も妄想で鼻血を流している康太に視線を向けながら言う。

「ムッツリーニくんは誰にキスして貰いたかったのかな？　今、考えてたのは誰だったのかな？」

「……俺は何も考えていない」

「顔逸らさないでよ。傷つくよ」

愛子は康太の反応にニヤニヤと笑いながら康太の顔を覗き込むと康太は鼻血を流したまま愛子から視線を逸らそうとするが愛子は康太の行動を先読みして彼の腕をつかむと、

「……愛子、何をしてるのよ？」

「えーと、ごめん」

康太は腕から伝わる愛子の胸の膨らみに鼻血を大量に吹きながらプールの中に落ちて行き、優子は眉間にしわを寄せて愛子を非難するように言うと愛子は苦笑いを浮かべながら謝り、

「……一先ずはこれじゃあ、勝負は無理だな」

「いや、その前に土屋を回収しないと不味いだろ」

理音は動じる事なく康太の鼻血で染まって行く水面を見つめて言うと大樹は苦笑いを浮かべながらプールに入って康太を回収しに行く。

「……ぼくが言うのもなんだけどお掃除大変そうだね」

「血液の掃除は大変だからな。何かあった時のルミノール反応で康太の血液が反応しても困る……あれだけ、輸血してるとどんな反応が出るんだ？　康太と血液で認識できるのか？」

「……今はそんな事を言ってる場合じゃないでしょ。早く、土屋くんの応急処置の準備をしなさい」

愛子は申し訳無さそうに言うと理音はふとした疑問が思い浮かんだようで楽しそうに笑うが優子は眉間にしわを寄せながら康太の応急処置の準備をするように言い、

「そうだな……とりあえず、輸血と……今更だが、輸血後にプールに入って良かったのか？」

「良いから……早くしなさい。土屋くんが死んじゃうでしょ」

理音は輸血パックの準備を始めながら首を傾げると優子は大きなため息を吐く。

## 第335問

「……疲れたよ。鉄人にも怒られるし、ムッツリーニはドクタストップで仕事量が増えるし」

「まぁ、プールが血だらけになってればそれは怒るだろう」

プール清掃を終えて明久がため息を吐くと大樹は苦笑いを浮かべると、

「清瀬、康太の血で汚れた水着はどうする？　何なら血液を落とす洗剤も用意するが」

「……いや、その洗剤は怪しそうだから遠慮する」

理音は康太を救出しに行った大樹の水着が真っ赤に染まっているため、洗剤を用意するかと聞くが大樹は首を横に振り、

「理音、遊んでないでそろそろ帰るわよ。西村先生もあたし達が残ってると帰れないって言ってたし」

「ん？　あぁ、そうだな。どうする？　どこかで休憩して帰るか？」

「ん。そうだな。結局は手伝ってもらったし、喫茶店で何か奢るくらいはするか」

優子は遊んでいる男性陣に声をかけると理音と雄二は結局全員で掃除をしたため、そのお礼はしないといけないと言うが、

「……本気？」

「……明久、お前は本当に少し考えろ。今回だって元はと言えばお前がガス代を払っていなかったのが原因なんだからな」

明久は手持ちがないため顔を引きつらせると雄二は明久に生活を改めろと言う。

「理音、明久が生活を改めるようにする良い方法はないかのう？」

「ん？　そうだな……玲さんか」

「ご、ごめんなさい！？　それだけは勘弁してください！！」

秀吉は理音に明久の生活を改めさせる方法はないかと言うと理音は少し考えた後、明久の姉である『吉井玲』の名前を出すと明久はその場で土下座をして謝り、

「……アキ、あんた、何をしてるのよ？」

「吉井くん、どうしたんですか？」

明久の突然の行動に今までの事を見ていなかった瑞希と美波は首を傾げるが、

「……理音、玲さんって確か、明久の姉貴だったか？」

「あぁ」

雄二は以前、理音と明久の会話に出てきた名前だと思いだして理音

に聞くと理音は頷き、

「アキ、結局はお前しだいだからな。別に俺はうるさく言うつもりもないが、ただ、あまりおかしな生活をしていて玲さんに知られた時は俺は知らんぞ」

「う、うん。気をつけるよ」

理音は明久を少し突き放すように言うと明久は直ぐに頷く。

「……アキ、口だけの返事かどうかは直ぐにわかるんだからな。言っておくぞ。お前は1人暮らしが終わるだけと考えているがおじさんもおばさんもお前のために日本に戻ってくると言うわけにはいかないんだ。玲さんも同じとなると1番、動かすのが簡単なのは誰だ？」

「そうだな。普通に考えるとそうなるよな」

理音は明久の返事から口だけだと判断したようで眉間にしわを寄せながら1人暮らしができないと判断された時の事を話すと雄二は理音が何を言いたいかを理解して頷くが、

「え？　どう言う事？」

「……」

当の本人が理解していないため、理音と雄二は頭を押さえると、

「……お前が転校する可能性がもっとも高いと言う事だ」

「そ、それは不味いよ！？　ど、どうにかならないの？　リオ！！」

「……だから、生活を改めろ」

理音は明久が１人で生活ができないと判断された場合に考えられる話をすると明久はそこで重大さを理解したようだが具体的に直す方法を考えずに慌て、理音は明久の様子に肩を落として大きなため息を吐く。

## 第336問

「ホントに奢ってくれるの？」

「あぁ、結局、掃除も手伝って貰ったしな」

学園を出て直ぐに雄二が掃除を手伝って貰ったお礼に喫茶店でも行こうと言う話をすると愛子は康太を沈めたせいか苦笑いを浮かべるが雄二は気にするなと笑うと、

「どうする？　清水の家の売り上げに協力した方が良いのか？」

「……いや、そうすると逆に疲れるから他に行こう」

「そうですわね」

理音は店を選ぶのに美春の父親が経営している喫茶店に行くかと聞くと大樹と美春は疲れるから止めようと言い、

「それなら、適当に歩くか？」

「……そうする」

特にひいきにしている喫茶店もないため、商店街をぶらつきながら決めようと言う話になり、全員で商店街に向かい歩き始めるが、

「明久くん、どうかしたんですか？」

「な、何でもないよ」

明久だけは無駄な出費を抑えたいようで表情は浮かないようであり、瑞希は明久の様子に明久の顔を覗き込むと明久は慌てて瑞希から距離を取る。

「何？　アキ、どうかしたの？」

「な、何でもないよ！？　美波も姫路さんも気にしないで！？」

美波は明久の反応に何かあったかと思ったようで瑞希の反対側から明久に声をかけると明久は慌てて飛びのき、

「……豚野郎、殺しますわ」

「美春、おかしな殺意を出すな」

美春は明久と美波の様子に2人がいちゃついていると感じたようで明久に殺意を向け始め、大樹はため息を吐くと、

「ん？　そうだ。島田」

「何？」

「……豚野郎、貴様もお姉さまに色目を使うつもりか？」

理音は美波を呼び、美波が振り返ると美春は理音に向けて殺意を放つが、

「清水、おかしな殺意を向けるな。俺は島田を何とも思ってない。俺には優子がいるからな」

「……あんたは、こんな街中で何を言ってるのよ」

理音は表情を変える事なく、自分には優子がいると言い、優子は恥ずかしいようで顔を真っ赤に染めながら理音に言う。

「信用できませんわ！！　そんな事を言って、貴様もお姉さまのペったんこを狙ってるに違いませんわ！！　現に彼女と言っている木下さんもお姉さまに負けず劣らないぺったたたったたた！？　な、な、何をするのですか！？」

「……清水さん、少しお話しましょうか？」

「は、はい！？　わ、わかりました！？」

「……理音、清瀬、止めなくて良いのか？」

しかし、美春は理音の言葉など信じないと言い、理音の彼女である優子と美波の共通点をあげると優子はこめかみに青筋を浮かべながら美春の腕をつかみ関節技をきれいに決め、優子は美春を路地裏に引きずって行き、雄二は理音と大樹に2人を止めなくても良いかと聞くが、

「……一先ずはあれで少しは反省するかも知れないから放置しようか」

「そ、そうね。あれで、美春も反省したら良いんだけど」

大樹は美春を反省させるためにはちょうど良いと言うと美波は大樹の意見に全面的に賛成の湯で大きく頷き、

「怜生、葉月、何が食いたい？」

「ケーキが良いかな？　それともパフェが良い？」

「怜生くんのお兄さん、葉月、パフェが食べたいです」

「……はい。僕もパフェ食べたいです」

理音と愛子は暴力シーンを怜生と葉月に見せないようにしている。

# 第337問

「それで、前田、さっき、何かありそうだけど何かあったの？」

「お姉さまに色目を使う豚野郎。殺します。殺します」

「……美春、いい加減にしないと連れて帰るぞ」

「……仕方ありませんわ。話くらいは聞いてあげますわ」

適当な喫茶店に入り、注文を終えると美波は理音に声をかけるが美波の隣を陣取っている美春は理音に向けて殺意の視線を送ると大樹は眉間にしわを寄せて美春の行動を制限すると美春は一先ず落ち付き、

「ん。そうだな。強化合宿の事なんだが」

「強化合宿？」

理音は気にする事なく、美波に自分がやる語学の特別授業の手伝いを頼もうとするが美波は考えてもいなかった言葉に首を傾げる。

「あぁ、強化合宿で何時間か特別講義をしないといけないんだ、語学でドイツ語をやろうと思っているんだ」

「……それって、ウチに手伝えって言う事？」

「あぁ」

「む、無理に決ってるでしょ！？　な、何で特別講義がドイツ語なのよ！！　英語とかもっと役に立つのにしなさいよ」

理音は強化合宿での特別講義の話を簡単に話すと美波は顔を引きつらせてできないと言い、ドイツ語を講義でやる意味がわからないと言うが、

「なぜ、ドイツ語かだと？　俺の専攻分野を考えろ。まぁ、一応は考える時間はやる。考える時間だけはな」

「あぁ。確かに理音の専攻分野を考えるとドイツ語だな」

「……カルテはドイツ語で書くと聞いた事がある」

理音は自分の専攻分野を考えろと言うと雄二と翔子は理音の言葉に頷き、

「理音、特別講義って何をする予定なんだ。語学はドイツ語と英語ってところだろ？」

「あぁ。一応は医療系と語学、希望者だけだけどな」

「そうか。語学は何かと役に立つ気もするんだけどな」

美波は理音が自分に話を持ってきた理由に納得はしたようだが納得できない部分もあり、顔を引きつらせているが雄二は気にする事無く理音に特別講義の内容を聞く。

「確かに語学は受けたいな、最近はウチにくる子達も塾に行ってるとか言って英語を習ったとか話をしてて……付いて行けない事があ

る」

「ヒロ、あんた、バカじゃないの？　幼稚園児が話すくらいでしょ」

大樹は苦笑いを浮かべて語学は受けてみたいと言うと美春は大樹をバカにするが、

「いや、子供の方が頭は柔軟だからな。早く覚える可能性もあるな。怜生も英語は通常会話くらいはできる」

「そ、そうなの。怜生くん」

「……はい。お兄ちゃんに教えて貰いました」

理音は子供の方がいい事もあると言うと怜生に英語を教えていると言い、明久は顔を引きつらせて怜生に確認すると怜生は大きく頷き、

「……理音の教え方が良いのか。怜生くんも頭が良いのかわからぬのう」

「たぶん、両方よ。怜生くんは理音と違って素直だから、きちんと教えた事はできるし」

秀吉は怜生の将来性に顔を引きつらせると優子は普段の理音と怜生の会話を聞いているせいもあるのか苦笑いを浮かべる。

「……幼稚園児以下か」

「ちょ、ちょっと、雄二！？　どうしてボクの顔を見て言うんだよ！？」

雄二は怜生と明久の顔を見比べた後、ぽつりとつぶやくと明久はバカにされた事に気づき声をあげるが、

「雄二、勘違いするな。頭の良さは成績は違う。実際、今の成績でアキより成績が下の人間はいるが」

「……そうだな。それでも、明久以上のバカはいないと思うな」

理音は雄二に召喚大会で明久の成績は向上していると言うがその場にいる怜生、明久、葉月を抜かした人間はこの中でやっぱり明久がバカだと言う空気になる。

# 第338問

「そうだ。リオ、強化合宿でボクらにはバスが出るようになるの？」

「でるわけないだろ」

「どうして！？　あれだけ頑張ってウェディング体験を成功させたのに！！」

明久は何となく自分がバカにされている空気を察したようで話を変えようと強化合宿でバスが出るようになったかと理音に聞くが理音は元々、Ｆクラスにバスを出す気もないため、直ぐにでないと言うと明久は声をあげるが、

「クラス設備に差を付けるのは文月学園のルールだ。お前に最初に話したのはその分を残しておかないで当日に移動費がないって話になるのは困るからだ。実際、バスのレンタルくらいはそんなに費用は大した額ではない」

「それなら、バスくらい出してよ！！」

理音はコーヒーを一口飲んだ後にバスは文月学園では頼まないと言い切り、明久は理音にバスを出せと声をあげる。

「……理音、それなら、希望者を募ってバスを借りても良いのか？話を聞いてると俺達Ｆクラスは現地集合だろ？」

「あぁ。現地集合だ。バスレンタルはかまわないが、俺は乗らないぞ。移動にまでお前らはまだしもバカどもの相手はしたくない」

「……うん。Fクラスだとなんだかんだ言って、前田くんがまだ常識人だから必然的にそうなるよね」

雄二は理音と明久の話にFクラスにバスがでないと知るとクラスで費用を折半してバスをレンタルしようと言うが理音はそのバスには乗らないと言うと愛子はバスの中の様子が目に浮かんだようで苦笑いを浮かべると、

「……確かにそうだな。卯月平原だったよな。ってなると電車だな」

「それも楽しそうだな。クラスでバスだとうるさそうだ」

雄二も肩書は代表であり下手にバスをレンタルすると西村教諭からクラスをまとめるように言われると思ったようで電車にすると言い、大樹は苦笑いを浮かべながら電車も良いと笑うが、

「……豚野郎、強化合宿中は怜生くんはどうなるのですか？」

「そうよ。理音、怜生くんはどうするの？」

「理音、強化合宿中はうちで怜生くんの面倒を見て貰えるかを父上と母上に聞いてみるのじゃ」

「そうね。うちなら融通も利くわね」

美春は理音と怜生が２人暮らしだと言う事を思い出して理音に強化合宿中の怜生をどうするのかと聞くと優子と秀吉は家で怜生を預かって貰えるように両親に話してくれると言う。

「ん？　あ、別に気にしなくても良いぞ」

「気にしなくて良いわけないでしょ。怜生くんを1人にする気！！」

理音は優子と秀吉の言葉に首を振ると優子は理音に怜生を1人で置いて行くのかと聞くと、

「連れて行くからな」

「……それで、怜生くんは長期休みの届けが出てた訳か」

理音は怜生を強化合宿に連れて行くと言うと大樹は苦笑いを浮かべるが周りは意味がわからないようで呆気に取られ、

「……理音、どう言う事だ？」

「ん？　怜生を連れて行く代わりの特別講義だ」

康太はなぜ、強化合宿に怜生を連れて行く理由を聞くと理音は表情を変える事なく言い切り、

「ばばあ、侮れないな」

「……坂本くん、実は学園長先生、怜生くんをかわいがってるって気がするわ」

「……おばあちゃん、優しいです」

「そ、そうなのか？」

「あの、ばばあ、何か企んでるに違いないよ」

雄二はカヲルが理音を特別講義に引っ張り出した方法に眉間にしわを寄せるが優子は怜生とカヲルが2人でいるところを何度か見ているようで苦笑いを浮かべると怜生はカヲルに懐いているようであり、明久と雄二はその事実が信じられないようである。

# 第339問

「それじゃあ、また明日ね」

「あぁ」

喫茶店での休憩も終わり、喫茶店を出ると解散の流れになるが、

「優子はあっちじゃないの？」

「別に良いでしょ！？」

優子はまだ理音と怜生と一緒にいるつもりのようで秀吉に荷物を預けていると理音と怜生と一緒の方向の愛子にツッコミを入れられ、優子は慌てて声をあげるが、

「優子、工藤、俺と怜生は買い物をして帰るからな」

「……はい」

理音は優子の事など気にする事なく買い物に行こうとし、

「ちょっと待ちなさいよ！？」

「あはは。優子も大変だ。前田くん、怜生くん、ぼくもお母さんから買い物を頼まれてるんだよね。一緒に行こう」

「ん？　そうなのか？　それなら、早くしないとタイムサービスに遅れるぞ」

優子は慌てて2人の後を追いかけると愛子も苦笑いを浮かべ、4人で商店街の中を歩いて行く。

「……優子、怜生くん、前田くんは？」

「あそこよ」

「……タイムサービス？　前田くんって、確か、お金持ちだよね？　さっきも結局、前田くんの奢りになってたし」

「……血が騒ぐらしいのよ」

「そ、そうなの？」

4人はしばらく商店街を歩いていると理音は突然、駆け出して行き愛子は首を傾げると優子は苦笑いを浮かべながら人ごみを指差すと愛子は理音がタイムサービスが好きな事が意外なようで苦笑いを浮かべていると、

「あれ？　怜生くん？」

「……ゆうかお姉ちゃん」

「小山さん？」

「木下さんに工藤さん」

怜生を見つけた少女が3人に声をかけてくるがその少女はFクラスの策にハマり、感情でAクラスに試召戦争を仕掛けたCクラス代表

の『小山友香』であり、優子は少しだけ気まずそうに友香の顔を見ると友香も優子と愛子がいる事に気づき気まずそうな表情をするが、

「木下さん、遅くなったけど、試召戦争の件はごめんなさい！！」

「ちょ、ちょっと、小山さん！？　あ、頭上げてよ！？」

「ごめんなさい。あの時は頭に血が昇って確認もせずに失礼な事を」

「良いから、あれはウチのバカな弟がやった事だし、そんな事をここで謝られても困るわよ」

友香は突然、優子に最初の試召戦争で優子にバカにされたと勘違いしてＡクラスに試召戦争を仕掛けた事を謝り、優子は友香の行動に慌てて頭を上げて欲しいと言う。

「小山さんも頭あげなよ。優子もぼくも気にしてないし、それが試召戦争って言ったらそれまでなんだからさ」

「許して貰えるかしら？」

「えぇ。あたしこそ、ウチの弟が失礼な事を言ってごめんなさい」

「……仲直りです」

愛子は２人の様子に割って入り、友香に頭を上げさせると怜生は優子と友香の手を取ると２人の手を繋がせ、

「これで仲直りだね。怜生くん」

「……はい」

愛子は怜生の行動に笑顔を見せると優子と友香も怜生がまとめてくれたため、これ以上、続けるのも悪いと思ったようで顔を見合せて苦笑いを浮かべると、

「ん？　小山、買い物か？　工藤、これで良いんだよな？」

「うん。ありがとね」

「えぇ、前田くんも……相変わらず、大漁みたいね」

大量に荷物を抱えた理音が戻ってきて友香に気づくと友香は理音の手の中にある荷物を見てため息を吐くが、

「……いや、俺の買い物かごから卵を抜き取ったばばあが居てな。今からお仕置きをしてくるところだ」

「……おかしな事は止めなさい。小山さん、悪いけど、こいつを連れて行くわ。こんな人の多いところでおかしな事をさせられないし」

「それじゃあ、怜生くんも帰ろう」

「えぇ。木下さん、任せるわ。工藤さん、怜生くんもまたね」

「……はい」

理音はルール違反をした人間に制裁を加えに行くと言いだし、優子はため息を吐くと友香に別れを告げて４人は商店街を後にする。

# 第３４０問

「おはよう」

「……おはようございます」

強化合宿の朝、理音と怜生が駅に着くといつものメンバーがすでに集まっており、

「……アキの偽物がいるな」

「理音、お前もそう思うか？」

「ちょっと、リオ、雄二、どう言う意味だよ！？」

理音は明久が自分より、早く着ているのを見て眉間にしわを寄せて明久を偽物と言うと雄二は理音の言葉にのっかり、明久は２人の言葉に声をあげると、

「……理音、雄二、あまり明久をからかうでない。明久だって早く起きる事もあるのじゃ」

「……３０年に１度くらい」

「それ、フォローじゃないよね！？　ムッツリーニ、いくらなんでも酷いよ！？」

秀吉と康太は明久をフォローするが康太のフォローはフォローになっておらずに明久は声をあげる。

「前田くん、怜生くん、おはようございます……前田くん、荷物、少なくありませんか？」

「と言うか、ほとんど手ぶらじゃない」

明久が声を上げている様子に苦笑いを浮かべながら瑞希と美波が理音に声をかけるが理音の荷物はリュック１つであり、２人は首を傾げると、

「あぁ。昼飯しか持ってきてないからな。怜生の着替えや特別講義の資料もあるからな。昨日のうちに西村教諭に渡しておいた」

「鉄人にか？」

「あぁ。俺の場合は特別講義の話あるからな。車に乗せてくれるとも言われたんだが」

「……電車に乗りたいです」

「と言う事だ」

理音は必要な荷物は西村教諭に預けてあると言い、雄二は西村教諭が理音に荷物を預かってくれている事に首を傾げると理音は怜生の意見を聞いたと言うと怜生の様子に苦笑いを浮かべる。

「しかし、他の奴らは何で行ったんだろうな？」

「さあな……昨日の帰りはヒッチハイクで行くとか行っていた奴らもいたぞ」

「……雄二、集合時間に全員がそろっていると良いな。一応は代表だからそろってないと面倒な事になるぞ」

「……言うな。考えないようにしてるんだから」

理音は駅に他のFクラスのメンバーがいない事に不安しか感じないようで眉間にしわを寄せると雄二も同じ事を考えているようでため息を吐き、

「ワシらだけでも遅れぬようにしないと行けんのう。少なからず、現地集合にした学園側にも問題があるのじゃ」

「悪かったな。普通はここまで成績で環境に差を付けられればある程度は努力しようとするんだ。それが秀吉、お前を始めとしてほとんどの奴らが成績などどうでも良いと思っているんだからな」

「……」

秀吉は理音も経営側に回っているため、それなら明久の言う通り、バスの1台でも借りて欲しかったと言うが理音は表情を変える事なくFクラスの学習態度を責めると秀吉は口を閉ざし、

「……秀吉、お前には清涼祭の日に言ったとは思うが演劇だけで食っていけると思うな。それで食っていける人間は一握りなんだ。夢をあきらめる時だってあるかも知れない。お前はその時にどうするつもりだ？　お前は演劇だけしてれば良いと思うが本当にそれだけで食って行けるほど世の中は優しくない。そうだな。1つだけ良い事を教えてやろう。成績は確かに必要ないとは思えるだろうが雇う側から見れば重要なんだ。成績が良いと言うのは努力の結果だから

な。就職した先でも努力してくれるだろうと言う期待を持って会社は人を雇う。それが社会のルールであり、Fクラスは社会のルールで言えば不適合者の集まりでしかない」

「あんた、ずいぶんとはっきり言うわね」

「当然だろ。仮に島田、お前が会社を経営する立場になった時にAクラスの人間とFクラスの人間、どちらを選ぶ？」

「……Aね」

理音は淡々とした口調で秀吉に言うと美波は理音に言いすぎだと言うが理音は美波へ簡単な質問をすると美波は眉間にしわを寄せて答え、

「そう言う事だ。そこで選ばれてからさらに人格や会社への適合性を見られてまた震いにかけられるそれを考えないうちは将来や夢を語る資格はないと俺は思うぞ。少なくともAやBには成績を維持しながらも夢を目指している人間もいるわけだしな。そのままだと本宮に置いて行かれるぞ」

「う、うむ。気をつけるのじゃ」

「リオ、秀吉、電車、きたよ」

理音は葵を例に出して言うと秀吉は理音が自分を心配してくれている事を理解したようで頷いた時、電車が到着したようで明久が理音と秀吉に声をかけ、メンバーは電車に乗って行く。

## 第３４１問

「前田くん、吉井くんは大丈夫ですか？」

「電車酔い？　アキも情けないわね」

「……邪魔だ。歩きずらい。何度も言わせるな」

電車の中で明久は瑞希のお弁当を雄二に無理やり食べさせられ、気を失ったため理音は明久を背負って宿舎まで向かっているのだが少し歩くたびに瑞希と美波が明久の顔を心配そうに覗きこむため、なかなか進まないようで理音は機嫌が悪そうに言うと、

「しかし、駅からだと結構、距離があるな。がきんちょ、足は痛くないか？」

「……大丈夫です」

「ムッツリーニ、お主は電車酔いはもう大丈夫かのう？」

「……問題ない」

雄二は理音達の様子を見て苦笑いを浮かべた後、怜生に足は痛くないかと聞くと怜生は大丈夫だと言い、康太は電車酔いしていたようで秀吉は康太の体調を心配すると康太はまだ具合は悪そうだが大丈夫だと頷く。

「ねえ。前田、あれが目的地？」

「あれが宿舎ですか？　何か凄く立派ですね」

「あぁ。元々は旅館だからな。買い取って強化合宿用の宿舎にしたと言う話だからな」

「……おい。それってかなり費用がかかってるんじゃないのか？」

しばらく、歩いていると立派な旅館が見え、理音は簡単に自分が知っている宿舎の話をすると雄二は眉間にしわを寄せ、

「あぁ。無駄な出費だが、召喚システムは不思議な所があってな。土地と相性があるんだ」

「そうなのか？　それがオカルトって言われる部分か？」

「オカルトに分類されるかはわからないがな。まぁ、そのうち、はっきりさせる。今はシステムで他に見るところもあるからな。それに場所の特定が先に終わるとスポンサーから試験場所を増やせと要望が出たりもするからな。システムが安定する前に数を増やしてもスタッフが足りないんだ。後回しにしても良い部分だ」

理音には召喚システムにある不思議な箇所があると言い、雄二は首を傾げると理音は表情を変える事なく言うと、

「怜生くん、みんな、ここだよ」

「……お姉ちゃん、翔子お姉ちゃん、愛ちゃん、こんにちは」

「……怜生くん、こんにちは」

宿舎の入口には優子、翔子、愛子が待っており理音達に手を振ると怜生は3人に駆け寄って行くと愛子に抱きつき、

「愛ちゃんですか？　工藤さんの事ですよね？」

「うん。ぼくと怜生くん、仲好だもんね」

「……はい」

瑞希は怜生の様子に優しい笑みを浮かべると怜生と愛子は笑顔で仲良しと言っている隣で、

「……理音、秀吉、吉井くんに何があったの？」

「ん？　まぁ、あれだ」

「……姉上、聞かないで欲しいのじゃ」

「……わかったわ」

優子は理音が明久を背負っている事に気づいて理音と秀吉に明久の事を聞くが2人の言葉に視線を瑞希に向けた後、それ以上は何も聞かずに頷くと、

「雄二、アキを任せるぞ。俺はこのまま西村教諭のところに荷物を取りに行ってくるから」

「あぁ……理音、がきんちょの部屋は俺達と一緒で良いんだよな？」

「あぁ。西村教諭とばばあから怜生が同じ部屋に居ればお前らも余

りおかしな事はしないだろうから、一緒の部屋に泊めるとな」

「あの妖怪、言ってくれるじゃねえか」

理音は明久を下ろすと雄二に任せると言うと雄二は頷きながらも怜生の部屋割を聞かされていないため自分達と同じ部屋に連れて行って良いのかと聞き、理音は怜生が同じ部屋になった理由を話すと雄二は学園長や西村教諭の考えにも一理あるとは思いながらもやられっぱなしは気に入らないようで口元を緩ませるが、

「それじゃあ、俺は行ってくるからな」

「……お兄ちゃん、僕も行きます」

理音は雄二の事など気にする事なく、西村教諭の元に荷物を取りに行こうとすると怜生は理音の後を付いて歩き出し、

「あたしも行ってくるわ」

「うん。それじゃあ、姫路さん、島田さん、お部屋に行こう。Fクラスの女子は2人だけだから、ぼく達と一緒の部屋にして貰ったんだよ」

「はい。工藤さん、翔子ちゃん、よろしくお願いします」

「よろしくね」

優子は理音と怜生を追いかけて行き、愛子は瑞希と美波を部屋に案内して行く。

「さてと、俺達も行くか？　と言っても部屋の鍵を取りに行かないといけないんだったか？」

「……うん。雄二はその後、私と一緒」

「……クラス代表の打ち合わせだからな。秀吉、ムッツリーニ、俺と明久の荷物を頼めるか？」

「うむ。任せるのじゃ」

「……了解」

雄二は自分達も部屋に移動しようと言うと翔子は雄二の腕に抱きつき一緒にいようとするが雄二は翔子の手を交わすと明久を背負い、部屋に移動して行く。

# 第３４２問

「ホントにやるのね。特別講義」

「言っただろ。それにＨＲでの連絡もあったはずだ」

「あったわよ。Ａクラスは参加者も多いし」

西村教諭から荷物を受け取った理音、優子、怜生の３人は部屋に戻ろうと廊下を歩いていると、

「ま、前田くん、木下さん、お願いです。みんなを止めるのを手伝ってください」

「ん？　本宮、何かあったのか？」

葵が息を切らせながら理音と優子に声をかけて来て、理音は葵の様子に首を傾げる。

「あ、あの。私も詳しくは聞いていないんですけど、女子のお風呂場にカメラが取り付けられていたらしくて、Ｅクラス代表の中林さんを中心にした女の子達が犯人はＦクラスだと決めつけて騒ぎ始めて、吉井くんや坂本くんに制裁を加えるって言い始めて、私と愛子とＣクラスの小山さんとＥクラスの弓永さんが必死に止めたんですけど、止まらなくて」

「女子風呂に監視カメラだと？」

「……理音、あんたじゃないわよね？」

葵は女子風呂に盗撮カメラがあったと言うと優子は理音をジト目で見るが、

「確かに見たくないと言えば嘘になるが優子、俺はここに着いた後はお前と一緒だっただろ。それに少なくとも俺達はそんな時間はないからな。本宮、1つ聞いて良いか？　瑞希と島田、霧島は何をしている？」

「そ、それが3人とも女の子達と一緒に」

「……制裁に走ったわけか？　まったく、そろそろ、本気で瑞希を島田から引き離さないといけなさそうだな」

「……姫路さん、本当に島田さんや代表に引っ張られるわね」

理音は表情を変える事なく、自分達にはそんな時間はないと言うと葵に瑞希、美波、翔子3人の行動を聞くと葵は申し訳なさそうに2人の行動を話し、理音と優子は眉間にしわを寄せると、

「優子、本宮、怜生を預かっていてくれるか？　俺は止めに行ってくる」

「待って、理音。あんた1人だとケンカになりそうだから、あたしも行くわ。本宮さん、怜生くんをお願いね」

「は、はい。気をつけてください」

理音と優子は葵に怜生を任せると2人で明久達が制裁を受けているであろう部屋に向かって行く。

「……これは酷いな」

「……そうね」

理音と優子は部屋に着くとどこから持ってきたかわからない石畳の上に座らせられて膝の上に石を乗せられている明久、雄二、康太の3人の姿に眉間にしわを寄せると、

「リオ、木下さん、助けて！？」

「助けてくれ。俺達は盗撮なんてしてない！？」

「……無実」

3人が理音と優子を見つけて助けを求めるが、

「前田よ！！　あいつがカメラを持っている可能性も高いわ」

「ちょっと、代表、待って！？　理音はそんな事はしないから、理音は覗く気だったら、正面突破するから！！」

「……深月、その信頼のされ方もどうかと思うんだが」

「……そうね」

Eクラス代表『中林宏美』は理音も犯人の1人だと決めつけて女子生徒に指示を出すが深月が宏美を止め、深月の言葉に理音と優子はため息を吐いた後、

「瑞希、霧島、島田、お前達は何をしている？　お前らもこれはどう言う事だ？」

「そうだよ。みんな止まってよ。Ｆクラスが犯人だって決まったわけじゃないのよ」

「姫路さん、島田さん、代表も落ち着いてよ」

理音は珍しく声を張り上げると女子生徒達は１度、動きを止めそのスキに秀吉、愛子、友香の３人が先頭になって明久、雄二、康太の制裁をしている瑞希、美波、翔子を引き離す。

# 第３４３問

「……瑞希、島田、霧島、出てろ」

「な、何でよ！！　ウチはアキにわからせないといけないのよ！！」

「そ、そうです。前田くんに言われる事ではありません！！」

「……雄二にはお仕置きが必要」

理音は明久達から引き離された瑞希、美波、翔子の３人には話が通じないと判断したようで部屋から出て行くように言うが３人は理音に喰ってかかると、

「……いい加減にしてくれませんか？　話もできないような低脳に付き合うほど『私』は暇ではないのですが」

「り、理音！？　止まれ！！」

「姫路さん、島田さん、霧島さん、逃げて！！」

３人の行動に理音のまとっている空気が一気に冷たくなり、明久と雄二は理音の変化に気づき声をあげ、

「な、何よ？」

「あ、あ、あなたは？」

理音の変化に美波は戸惑いながらも理音に文句を言おうとするが瑞

希は理音の変化に気づいたようで腰が抜けたのか座りこんでしまう。

「り、理音？」

「何ですか？」

優子は理音の変化に何があったかわからないようで首を傾げるともう1人の理音は理音とは異なり、柔和な笑みを浮かべるがその笑みにはこの部屋に押し掛けている女子生徒全てを気落とすような暴力性が紛れ込んでいるのが見え、女子生徒達は息を飲むと、

「な、何で、あなたがまだいるんですか？」

「み、瑞希、何を言ってるのよ？」

瑞希は顔を恐怖に歪ませながらももう1人の理音に聞き、美波は瑞希の言葉の意味がわからずに首を傾げるが、

「何で？　質問の意味がわかりませんよ。私はあいつであって、あいつは私です。同じ存在（もの）なんですから、あいつがここにいるんです。私がここにいてもおかしくないですよ」

「ちょ、ちょっと、理音、どうしたのよ？」

理音は瑞希の質問をくすくすと笑いながら何を言っているのかと聞くと優子は理音の変化に戸惑いながらも理音の服をつかむ。

「何にしませんよ。一先ずは中林さんと言いましたか？　あまり、敵意を見せないでくれませんか？　……壊したくなりますから」

「秀吉、これを避けてくれ！！　理音を止めるぞ！！」

「う、うむ」

理音はそれでも理音達Ｆクラス男子生徒に敵意を向ける宏美に向かい言うと雄二はこのままでは理音が暴走すると思っているようで秀吉に自分の足に乗せられている石を避けるように言うと秀吉は慌てて明久、雄二、康太の足の上に乗せられている石を避ける。

「坂本くん、大丈夫ですよ。この程度の悪意には私は反応しませんから、あくまでもあいつも私も今は話し合いを望んでいます」

「本当だろうな？」

「えぇ。こんなものを壊したって私は満たされませんし、あいつが納得するとも思えませんから」

理音は雄二に向かい暴力には移行しないと言うと雄二は目の前にいる理音の様子に背中に冷や汗が流れているが目を逸らした時の理音の次の行動を予測できないためか理音の次の行動を見極めようとしているが理音はくすくすと笑いながら、何もする気はないと言うと、

「話し合いをする気のある人間は残りなさい。それができない低脳は私の前から直ぐに消えなさい。これは忠告でも警告でもなく、命令です」

「理音、脅すんじゃないわよ！！　話し合いにもならないでしょ！！」

理音は逆らう事は許さないと言い、その場にいた人間が息を飲んで

しまうが優子だけには効いていないようで優子は理音を怒鳴りつけ、

「ん？　そうだな。それで、話し合いに参加するのは誰だ？　言って置くが、瑞希と島田、霧島は却下だ。中林はここまで女子達を煽ったんだ。参加して貰う」

「も、戻ったな？」

「う、うん」

理音は優子の言葉に反応したのかもう1人の理音は息をひそめ、明久と雄二は安心したように息を漏らす。

## 第３４４問

「それで、どうして俺達が盗撮したってなったんだ？」

「あんた達以外にそんな事するわけないでしょ」

部屋には理音達Ｆクラス男子を擁護するメンバーと犯人だと決めつけているメンバーが半々くらいになっており、雄二は女子生徒の代表格である宏美に聞くと宏美はただの決めつけのようでＦクラス以外犯人はあり得ないと言うだけであり、

「……話し合いにもならないな」

「そうね」

「……代表、それはあまりに直情的だからね」

理音と優子は眉間にしわを寄せ、深月は苦笑いを浮かべるが、

「他にいないでしょ！！　ただでさえ、学園でもある盗撮の犯人はそこにいる土屋くんだって噂よ！！」

「中林、勘違いするな。それに関しては」

「それも濡れ衣だって言うの？」

宏美はムッツリ商会の噂からだと言うが理音は眉間にしわを寄せたまま宏美の言葉を遮ると宏美は理音の様子に康太が犯人ではないのかと首を傾げると、

「噂ではなく事実だ」

「それなら、決まりでしょ！！」

理音は表情を変える事なく、学園での盗撮の犯人は康太だと言い切ると宏美は一気に頭に血が上ったようで顔を真っ赤にして叫ぶ。

「中林、一先ず、聞いてくれ。俺達は今さっき、部屋に着いたばかりだ」

「そうなのじゃ。そんなものを取り付ける暇などなかったのじゃ」

「理音はあたしと一緒に西村先生のところにいたわ」

「そうだよ。ぼくは姫路さん達と部屋に戻ったけど、坂本くん達は代表と……あれ？　坂本くん達って今まで代表と一緒だったんだよね？　どうして、代表は坂本くんにお仕置きしてたの？」

雄二と秀吉は自分達は盗撮カメラを設置するような時間はなかったと言うと優子と愛子は理音達の無実を証明しようとするが愛子は今の今まで翔子が明久達と一緒にいた事に気づき、

「……代表、どうして一緒に坂本くんにお仕置きしてるのよ」

「……なんか、すまん」

優子は翔子の行動にため息を吐くと雄二は頭を押さえながら翔子の行動を謝ると、

「これで無実は証明できたんだよね？」

「でしょうね。中林さん、もう良いわね」

「……信じられないわ。木下さんは前田くんの彼女だし、彼氏を庇っている可能性だってあるわけだしね」

明久と友香は優子や愛子の証言で自分達にはそんな時間はなかった事が証明されたと言うが宏美を中心とした女子生徒は納得がいかないようであり理音を睨みつける。

「中林、言っておくぞ。盗撮カメラを設置すると言うなら、俺達だけではなく少なくとも男子生徒全部……違うな。生徒、教師、関係者すべてが容疑者なわけだ。それなのに俺達を名指しでくる意味がわからん」

「意味？　決まってるでしょ。あんた達の日頃の行いよ。生活態度、その他モロモロ、疑われる条件はそろってるでしょ。だいたい、何で女子生徒まで容疑者にされないといけないのよ？」

理音は宏美の態度に話しにならないと思いながらも犯人を決めつけるなと言うが宏美はＦクラスの普段の態度は疑われるだけのものだと叫ぶと、

「女子生徒が容疑者なのは売れるからだ。後は言っておくぞ。俺も康太も女子風呂になどカメラは設置しない。確かに中林の太ももや深月の鎖骨、小山のヒップラインも魅力的だがな。俺や康太が無差別に録るような趣にかける事をするわけがないだろ」

「……理音の言う通り、無差別に狙うなんて俺の沽券にかかわ

る」

理音と康太にはこだわりがあるため、真剣に表情でそんな事はしないと言うが、

「……理音、それはどうなんだろうね」

「ムッツリーニくん」

理音と康太の言葉に微妙な空気が部屋を包んで行く。

# 第３４５問

「……理音、土屋くん、どうして話をおかしな方向に持って行くのよ」

「ん？　なんだ。俺は優子の腰のくびれもみたいぞ」

「今はそんな事は言ってないわ！！」

優子は眉間にしわを寄せながら話をややこしくしないでと言うが理音にはそのつもりはなく、

「……こんな事を聞かされて納得するわけないでしょ」

「……確かにのう」

理音と優子の様子に宏美は眉間にしわを寄せながら疑いが晴れるわけはないというと秀吉はため息を吐き、

「話がそれたな。確かにＦクラスの行動はおかしいが男たるもの、女子風呂は覗きたい。それに関しては否定はしない」

「……この場合は否定した方が良くないかな？」

理音は表情を変える事なく覗きたいと言うと愛子は苦笑いを浮かべるが、

「だが、時間の事も言ったがＦクラスの他の連中は知らないが俺達にはカメラを設置する時間などない。だいたい、大浴場はカギがか

かっていたはず……今更だが、どうして誰も気づかないんだ？」

「確かにそうだな」

「な、何よ？」

理音は自分達はアリバイがあると話している途中で何かに気づくと雄二も同じ考えに行きついたようでため息を吐き、宏美は2人の様子に何があったかわからないようで首を傾げると、

「お前達が大浴場に行った時にカギはどうなっていたんだ？」

「それは開いてたけど」

「なら、それは誰が開けた？　今はまだ入浴時間ではないだろ。俺は清涼祭から経営面にも口を出しているから学園として覗きなど起こされても困るんだ。だから、カギの管理は西村教諭と高橋教諭の2人のみに任せてある。あの2人の仕事を考えると今の時間に大浴場のカギが開いているなんて事はありえないんだ。だいたい、入浴時間外は汗を流したかったら各部屋に付いている個室風呂を使うようにとなっているだろ。それなのにお前達は大浴場に行ってカメラを見つけた。そのカメラを見つけるように大浴場に女子生徒を行かせたのは誰だ？」

「それはわからないわ。みんなが大浴場に行こうと言ってて私も便乗したわけだし、他の子もだいたい一緒よ」

理音は女子生徒達に大浴場に行くきっかけになった時の話を聞くが女子生徒達は最初に誰が大浴場に行こうと言い出したかはわからないと答える。

「何か、ややこしくなってきたね」

「でも、前田くん、そんな事をして女子を誘導した人は何がしたいの？　盗撮なんて犯罪のわけでしょ。もし、何かあったら処罰はあるでしょ」

愛子は理音の話に苦笑いを浮かべると友香は犯人の意図がわからないと言うと、

「考えられる事はいくつかあるが中林達が一直線にここにきたと言う事はＦクラスをはめたい人間が仕掛けてきた可能性が１番高いだろうな。後は処罰はウチは出しにくいんだ。スポンサーを多く抱えているからな。生徒の行動１つでスポンサーを降りると言う企業も出てくるしな。今は微妙な時期だし犯人を処罰しにくい。そこまで犯人が考えているかはわからないがな」

「ちょっと、待ってよ。リオ、何で、ボク達がそんな目に遭わないといけないんだよ」

理音は表情を変える事なく、犯人の目的はＦクラスかも知れないと言うと明久はそんな事をされる理由がわからないと言うが、

「簡単だ。お前らの日頃の行動。わけのわからない覆面を被ってカップルを攻撃、教室設備の破壊等、普通に考えて迷惑に思っている奴らは多いだろ。実際、最初に煽ってしまえば中林達を見ればわかるようにＦクラスを犯人だと思ってほとんどの女子生徒が向かってきたんだしな」

「そうね」

理音は犯人に仕立て上げられた原因はFクラスには充分にあると言うと優子は大きく頷き、Fクラスを犯人だと言っていた女子生徒も理音の言葉に納得する人間も多いようで気まずそうに下を向く。

「で、でも、あなた達が犯人じゃないって決まったわけじゃないでしょ。前田くんが言うように容疑者が全員なら、今、この時に平気で嘘を吐いている可能性だってあるわけでしょ。他に犯人を仕立て上げようとしている事だって考えられるわ」

「……代表、そろそろ、見苦しいよ。現状で言えば理音達を犯人だと特定できる証拠もないわけだし」

しかし、宏美は先陣を切って来たせいもあるようでそれでは納得ができないと言い、深月はため息を吐くと、

「ねえ。リオ、清涼祭で持ってた自白剤ってある？」

「ん？　あるがどうかしたか？」

「それを飲んで真実だけを話せば、中林さんも納得してくれないかな？」

明久は嘘を吐いていない事を証明するために理音の自白剤を飲むと言い始め、

「ちょっと待て。明久！？　いくらなんでもそれは危険だろ」

「そうなのじゃ、副作用があるのじゃぞ」

「副作用は1時間くらい女の子の声になるだけだよね。たぶん、中林さんは責任感が強いから女子のためにはっきりとさせないといけないと思うんだ。それなら、ボク達もこれくらいしないと、リオ」

「……まったく、お前は言い出したら止めるだけ無駄だしな」

「それはリオには言われたくないかな」

雄二と秀吉は明久の言葉に驚きの声をあげるが明久は苦笑いを浮かべて理音に自白剤を出して欲しいというと理音は明久の様子に止めても聞かないと思っているようで懐から小さな薬瓶を取り出し、

「ちょ、ちょっと待ちなさいよ。自白剤に副作用って洒落にならないから止めてよ!?　何かあったらどうするつもりよ？　責任なんて取れないわよ」

「慌てなくても責任を取れなんていわないよ。これはリオが作ったものだし、大丈夫だよ」

「それがおかしいわよ。前田くんはグラウンドに大穴を空けたり、クラスメートを平気な顔して花火で撃ち抜くような人よ。何で、信用出来るのよ？　吉井くん、あなたバカじゃないの？」

「うん。バカなのは否定できないかな。実際はこんな状況になってるのはボク達のせいだろうし、でも、これは安全だって言える。ボクはリオを信じてるからね」

宏美は明久の行動が信じられないと言うが明久は真っ直ぐと宏美を見て理音を信じると言うと薬瓶を開けて自白剤を飲み干す。

# 第３４６問

「ぐっ！？」

「よ、吉井くん、理音、本当にこれ大丈夫なの？」

明久は飲み干した後、口を押さえると優子は自白剤の製作者である理音に聞くと、

「あぁ。小学生でも飲みやすく甘めに作ってあるからな」

「リオ、甘すぎだよ。すっごい胸やけしそうだよ」

「そうか。それは悪かった」

理音は表情を変える事なく言うと明久は予想していた味とは違ったようで力なく笑いながら答え、

「本当に女声になっておるのう」

「本当に自白剤は効果があるのか？」

「いや、ボクは今のところはよくわからないよ」

明久の声が変わっている事に雄二と秀吉は自白剤の効果を確認すると明久は首を振り、

「一先ずは質問してみたら良いんじゃないかな。吉井くんって姫路さんと島田さん、どっちが好きなの？」

「それ……」

「工藤、それはルール違反だ。だいたい、今、やるべきなのは俺達の無実を証明する事だろ」

愛子は何かを思いついたようで明久の本心を聞こうとすると明久は言いたくないようで首を大きく振りながら誤魔化そうとするが口は動きだし、理音はその様子に明久を捕まえて口を塞ぎ、

「それじゃあ、中林、今回の盗撮の事をアキに質問してくれるか？」

「そうね……と言いたいところだけど、もう良いわ。何となく、吉井くんと前田くんの事もわかったし、今回の件に関しては前田くん、吉井くん、坂本くん、土屋くん、木下くんの５人は関係してなさそうだし」

理音は宏美に盗撮騒ぎの事を聞けと言うが明久の行動を見て宏美は一先ずは矛を収めると言うと残っている女子生徒達も同じ意見のようで宏美に続くように返事をし、

「良いんだな？」

「えぇ。むしろ、疑ってしまってごめんなさい」

雄二は宏美の行動に確認をすると宏美は頭を下げる。

「そうなの？　良かったよ。中林さんが信じてくれて」

「まぁ、あんな行動を見せられればね……前田くん、坂本くん、そ

れでお願いなんだけどこれの犯人って見つけられないかな？　このままだとたぶん、男子と女子の間でいざこざが起きると思うのよ。虫のいい話だとは思うけど冷静に対処してくれる人間がいないといけないから」

「そうだな。疑われたなら、本当に覗いてやれと思う奴らはウチのクラスにも当然いると言うか」

「そんな奴らしかいないだろ」

明久は心から思っているようで笑顔を見せると宏美はこのままでは男子と女子の関係に亀裂が走ると考えたようで理音と雄二に頭を下げ、2人は宏美の危惧している事が理解出来るようでため息を吐くと、

「うん。否定できないよ。だって、直ぐそこに楽園があるんだよ。姫路さんや美波、霧島さんに木下さん、工藤さん、弓永さんだって、それに小山さんも中林さんもちょっときつそうだけど美人だし、他にもかわいい子だって多いし……それに姫路さんを超える逸材と言われている葵ちゃんの胸は絶対に見たい。この間は水着姿も見逃したし」

「……同感」

「明久、ムッツリーニ、お主達は何を言うておるのじゃ！！　本宮の事はワシが守るのじゃ！！」

明久は本音をだだ漏らしながら覗きたいと言うと康太も同意し、秀吉は2人の言葉に何があっても葵の事を守ると叫び、

「……薬の効きは証明されたわね」

「吉井くん、本音駄々漏れだね。しかし、どうして、弟くんのかっこいいところに葵はいつもいないんだろうね」

3人の様子に優子はため息を吐くと愛子は懐から小さな録音機のようなものを取り出しながらニヤニヤと笑いながら頷いた時、

『だから、俺達じゃねぇって言ってるだろ！！』

『他に誰がいるのよ！！　覗きなんて恥ずかしいマネしないでよ。この犯罪者ども！！』

廊下からは男子生徒と女子生徒が言い争いをする声が響きはじめ、

「……遅かったわね」

「そうだね。ちょっと、困ったね」

友香は肩を落としてため息を吐き、深月は苦笑いを浮かべると、

「一先ずは各代表はクラスメイト達を部屋で待機するように伝えてくれ。これは学年の問題だから、この後の代表間の打ち合わせで話をするぞ。俺達だけの話し合いだと信用されない可能性もあるため、代表以外にも1名か2名、参加するようにしてくれ。理音、お前も参加してくれ」

「あぁ」

「わかったわ」

雄二はこの後に予定されている代表の集まりで話をしようと言うと一先ず、この場所は解散する事になる。

# 第３４７問

一室にはＦクラスは理音と雄二、Ｅクラスは深月、宏美、Ｄクラスは代表である『平賀源二』と美春、Ｃクラスは友香と大樹、Ｂクラスは恭二、葵、Ａクラスは翔子の暴走を抑えるためなのか優子と利光が翔子の両隣りに座っており、

「そろったな？」

雄二は代表の打ち合わせに集まった面々を見て全員がいるかと確認すると返事が返ってくる。

「１３人か？　思ったより少ないな」

「あまり居ても仕方ないからね」

理音は集まったメンバーを見て言うと優子は頷き、

「前田、坂本、代表から聞いたんだけど覗きの犯人探しって事だけど」

「どうせ、Ｆクラスのバカどもだろ。俺達をくだらない事に巻き込むんじゃねぇよ」

大樹は友香から話を聞いているようで状況を説明してくれと言うが恭二は自分達はＦクラスのおかしな事に巻き込まれたと言いたげに舌打ちをする。

「根本、話を聞いてくれ。犯人が誰かはわからないが現状で言えば

何かしらの対処をしないといけないだろ。それじゃあ、中林、事の説明をしてくれるか？」

「私？　前田くんや坂本くんの方がよくないかな？」

「代表がその場にいたわけだし、状況説明はした方が良いよ。ボク達は代表からのまた聞きだしね」

「わかったわ」

理音は恭二の様子に表情を変える事なく言うと宏美にカメラを見つけた時の話をして欲しいと言うと宏美は最初は躊躇するが直ぐに割り切ったようでカメラを見つけた時の状況などをその場で話すと、

「女子の大浴場に盗撮カメラね……」

「な、何ですか？　ヒロ」

大樹は宏美の話から何か感じるものがあったようで眉間にしわを寄せながら美春に視線を送ると美春は自分の幼なじみであり、保護者のようになっている大樹の視線から目を逸らし、

「……平賀、１つ聞いて良いか。どうして、美春はこの場に参加する事になったんだ？」

「どうして？　質問の意味がわからないんだけど、まぁ、覗きの話し合いとなれば男女の意見がいると思ったし、もう１人は女子が良いかなと思っていた時に清水さんが自分が出てはっきりさせるって言ったらクラスの女子達が納得したからだよ」

「……そうか。美春」

大樹は源二に美春がこの場にきた理由を確認すると源二から聞かされた美春の参加理由に大樹の眉間のしわはより一層深くなって行き、

「み、美春は用事を思い出しましたわ！！」

「まて、清水、清瀬が話があるみたいだぞ」

美春は大樹の様子に顔を引きつらせるとこの場から逃げ出そうとするが理音は美春の首をつかみ、

「は、放しなさい！？　豚野郎！！」

「……美春、いろいろと聞きたい事があるんだ。この間、おばさんにお仕置きされてたよな。カメラとか盗聴器とかで」

「ヒ、ヒロ、落ち着きなさい！！　み、美春は無実ですわ！！」

「それなら、どうしてそんな風に慌てているんだ？」

美春は理音の手を振り払おうとするが理音から逃げきる事はできずに大樹に捕まり、

「……全部、納得が行ったな」

「そうだな。清水ならカメラを設置する理由もあるし、何より、アキやＦクラスを落としいれたい理由も充分だ」

「ちょ、ちょっと、前田くん、坂本くん、２人で納得してないで説

明してよ」

理音と雄二は大きく肩を落とすが美春と美波の関係を知らないメンバーは意味がわからないようで2人に説明を求める。

## 第３４８問

「本当に申し訳ない」

「き、清瀬くん、頭を上げてよ」

大樹の問い詰めに美春は女子の大浴場にカメラを仕掛けた事とＦクラス男子を犯人に仕立て上げようとした事を白状したため大樹はこの場にいる全員に向かって頭を深々と下げ、大樹の様子に宏美は苦笑いを浮かべながら大樹に頭をあげるように言うと、

「これで一先ずは問題解決ね」

「まったく、バカらしい。本宮、戻るぞ。クラスの奴らに真相を話さないといけないからな」

「は、はい。代表」

友香は苦笑いを浮かべながら問題が解決した事に安心したように言うが恭二はくだらない事に付き合わされたと言いたげに舌打ちをして席を立とうとするが、

「待て。まだ、話は終わってない」

「犯人は見つかったんだ。これ以上、何を話す事がある？」

理音は恭二に止まるように言うと恭二は意味がわからないようであり、

「このまま、清水を犯人として突き出してもなんの決着にはならないだろ」

「そうだな」

理音と雄二は次の事を心配しているようで眉間にしわを寄せた時、

「リオ、雄二、大変だよ。須川くんを中心としたFクラスの男子と他のクラスの男子が何人か集まって覗きの疑いをかけられたんだ。それなら、本当に覗いてやるって言いだしてる」

「……こうなるんだ」

「……前田、坂本、すまない」

なぜか女子の制服に着替えさせられた明久がドアを開けて男子生徒達が不当な疑いに行動に移したと言うと理音はため息を吐き大樹は胃が痛くなってきているようで腹をさすりながら謝る。

「吉井くん」

「何？　弓永さん」

「何で、そんな素敵な格好を？」

「そ、それは」

明久からの報告にこの場は微妙な空気になるが深月だけは明久の格好が気になるようであり、明久の格好に付いて聞くと明久は気まずそうに視線を逸らした時、

「アキちゃん、逃げないで！！　次はこれにお着替えしようね」

「着ないよ！？　ボクは男の子だからね！？」

「た、玉野さん？」

「……友香、知り合いか？」

巫女服を手に持った女子生徒が乱入してきて明久に着替えを強要し始め、友香は女子生徒と知り合いのようでため息を吐くと恭二は眉間にしわを寄せながら友香に女子生徒の事を聞くと、

「ええ。彼女は『玉野美紀』さん、Ｄクラスの生徒よ。趣味は服作りかな」

「た、玉野さん、落ち着いて！？　吉井くん男子なんだよ。そんな服は着ないよ！！」

「代表、何を言ってるんですか？　ここには吉井くんなんていません。いるのはアキちゃんと言う美少女です」

「ち、違うよ！？」

友香は美紀の様子に顔を引きつらせながら言い、美紀のクラスの代表である源二が必死に彼女を止めようとするが彼女は止まる事はなく、

「……少し黙っていろ」

「ちょ、ちょっと、理音!?」

理音は眉間にしわを寄せたまま、懐から怪しげな色をした液体の入った注射器を取り出すと美紀の首筋に打ち、優子は驚きの声をあげるが、

「ただの鎮静剤だ。それより、話を進めるぞ」

「ええ」

理音はぐったりとした美紀を隅まで運ぶと話を再開させると言い、宏美は顔を引きつらせながらも頷き、

「まぁ、対立するなら思いっきり対立させてみるか。他に目が行けば落ち着くだろ」

「……また、おかしな事を考え付いたわけね」

理音は邪悪な笑みを浮かべると優子は理音の次の行動に不安しか感じないようで大きなため息を吐く。

# 第３４９問

「と言う事です」

「……前田、坂本、どうして、お前達は騒ぎしか起こせないんだ？」

「ま、まぁ、西村先生も落ち着いて下さい。今回の件に関しては前田くんも坂本くんにも原因はありませんし」

理音は学年主任とＡクラスの担任である『高橋洋子』教諭と生活指導とＦクラスの担任の西村教諭を呼ぶと今、施設内で起きている男子生徒と女子生徒の亀裂の原因になった話を素直に話すと西村教諭は眉間にしわを寄せ、高橋教諭は理音と雄二をフォローしようとし、

「それで、清水への処罰はどうするつもりだ？」

「いえ、特に処罰はしません。これは男女間にひびを入れるために使わせて貰います」

「それは試召戦争の事などを考えると問題があるでしょう」

西村教諭は高橋教諭のフォローにこれ以上は何を言わない事を決めたようで理音達が何を考えているかと聞くと理音は楽しそうに口元を緩ませると高橋教諭は意味がわからないようで眉間にしわを寄せるが、

「文句があるなら、戦わせれば良い。男女に分けて思いっきり、罵倒しながらでも良いです」

「それは覗き騒ぎを容認しろと言っているのか？　そんな事ができるわけがないだろ！！」

理音はこの険悪な空気を煽るつもりのようであり、西村教諭は理音の言葉に声を荒げると、

「落ち着いて下さい。西村先生、覗きはさせません。ルールを決めて戦って貰おうと思います」

「……簡単に言えば男子対女子の試召戦争ってところです」

優子と翔子が西村教諭に簡単に『男子対女子の試召戦争』をすると言う。

「男女間の試召戦争ですか？」

「はい。犯人は捕まえましたが公表はしないと宣言すれば男女からもちろん文句が出ます」

「女子は男子をかばうな。男子は自分達を疑って罵倒した女子に謝罪しろと言った感じでな」

高橋教諭はまだ意味がわからないようで首を傾げると雄二と深月から犯人が捕まったとしてもこの騒ぎは収まらないと言うと、西村教諭も高橋教諭も文月学園の生徒の事をよく知っているためか眉間にしわを寄せてこの騒ぎが簡単に終結しないことは納得するが、

「それで、なぜ、試召戦争になるんだ？」

「それはお互い文句があるんです。ぶつかり合えばそれなりに落ち

着きますから全てを押さえつけるよりは試召戦争を使った方が危険もないし、ルールを設ける事で本当に覗きに移ろうとしている数名の男子生徒を牽制する。それをやったらどうなるかを思い知らせた後に」

「……何をするつもりだ？」

理音はルールを守らせるために見せしめに明久から聞かされた男子生徒に制裁を加えると言うと西村教諭は眉間にしわを寄せたまま聞き返し、

「一先ずは今日は俺が女子風呂の監視に付きます。感情に任せた行動をしてくるバカどもが相手ですから、俺が張ったフィールドで俺の召喚獣に倒された人間にはフィードバックが付くようにします。もちろん、明日からの試召戦争時でも痛みだけはフィードバックするようにしておきます」

「……死人が出なければ良いわね」

「そうだな」

理音は表情を変える事なく言いきると優子は理音の様子にため息を吐き、雄二は苦笑いを浮かべると、

「ルールは各代表にこの後、クラスに説明して貰いますが、明日の朝の朝礼で確認として２人にはルールの説明をしていただきます。ルールとしては午後２時から４時の間に行う事、それ以外に行動に移ったものは俺の手で制裁を加える事。もちろん、召喚獣ではなく直接の攻撃は禁止です。参加生徒全員には１～６点の点数を与える。基本はＦクラスは１点、Ｅクラスは２点後はクラス事に点数が上が

りAは6点となり、この試召戦争内で試召戦争内で倒した相手の点数は生徒事に計算され、最終日に1番高得点の者が生徒1人に1つ命令ができる。この命令は常識内である事、簡単に言えばデートは許すが合意でなければセ……」

「おかしな事を言わないで」

理音は簡単なルール説明を始めるが途中で下ネタが入りそうだったため、優子が理音の口を押さえつけ、

「基本点数はクラスで決めるが、それでも点数では測れない相手もいるから、明久とかムッツリーニとか状況によってはAクラスでもすぐに倒せないような生徒には特別に点数を与える。ここら辺は理音がシステムで管理してくれるから問題ないと思う。個人戦ではあるが協力は可とするから状況を上手く使えばFでも上位クラスを倒す事ができるだろうしな。それともう1つは男子と女子に1人ずつ大将を置く事、2時間以外でも決着をつけるためだ。大将を討ち取った人間は10点加算される事こうすれば戦術も広がるからな面白みが出てくる。後は細かいルールはこれを読んでください」

理音と優子の様子に雄二は苦笑いを浮かべると理音が作ったであろうルールが書いてあるプリントを西村教諭と高橋教諭に渡し、

「これで納得しない生徒が出てきた場合はどうするつもりだ?」

「どうもしませんよ。これはあくまでも本音をぶつける場ですから、それで合わない人間がいるなら仕方ないですから」

「それでも餌があるからまとまると言いたいのか?」

「はい。うちのクラスのバカどもは女子生徒に命令できると本気で向かって行きますから、それを抑えるために女子生徒は協力して防戦、反撃に入る。そうなると戦争の火は飛び火して行きます」

「いくらなんでもそこまではないだろ」

「転入してきて感じた文月学園の関係者に共通する点は感情で突っ走るところがある……こう言う風に」

西村教諭はそれでも納得がいかない部分もあるようであり理音に聞くと理音は騒ぎは広がると言い切り、雄二と翔子を指差すと、

「……合意なら問題ない。雄二、私は最高得点を取る」

「ちょ、ちょっと待て!?　翔子、お前は何を考えているんだ!?や、止めろ!?　ズボンに手をかけるな!?」

「……坂本、霧島、先生はお互いが合意ならあまりきつくは言わないが人前では止めるように後はきちんと守るものは守るんだぞ」

「ちょっと待て!?　鉄人、止めろよ!?」

翔子は雄二に襲い掛かっており、西村教諭は眉間にしわを寄せながら2人を注意すると雄二の叫び声が響くがすでにこの光景は2学年では当たり前の光景になっているようで誰も突っ込みはいれず、

「まぁ、後は初めて見てのお楽しみです」

理音は口元を緩ませて言うと解散になる。

その後、女子風呂を覗きに走った５４名の男子生徒が理音１人の手により、補習室に送られて西村教諭と理音の補習を受けさせられ魂が抜けた状態で部屋に帰還した。

# 第３５０問

「雄二、理音、男子の代表ってどうするの？　……根本くん！？」

「……何だ？」

朝の朝礼時に西村教諭から代表会議で決まった試召戦争のルールが発表され、自習時間が開始されて直ぐに明久が男子の大賞を誰にするかを理音と雄二に聞きにくるとそこには利光、恭二、大樹、源二とＥクラスの男子生徒１人が集まっており、明久は驚きの声をあげると恭二は不機嫌そうな表情をする。

「な、何で根本くん達が？」

「大将を決めるのに各クラスで男女での代表を立てたんだ。女が代表のところは話し合いをするのが面倒だからな。ウチのクラスは瑞希と美波だけだから代表の話し合いに参加していると思うが各クラスの男女の代表で話し合いをして大将を決めて欲しいってな」

明久はあまり恭二に良い印象がないため、警戒するように理音に聞くが理音は大将を決める集まりであると言うと、

「それで、どうするんだい？　大将はやっぱり、Ａクラスからの方が良いと思うんだけど」

「いや、男子の大将は決まっている。なぁ、清瀬」

「……何となくだけどそうなると思ってた」

源二は大将を誰にするかと言うと雄二は大樹の肩を叩き、大樹は事の原因が美春にあるため自分になる事を予想していたようでため息を吐き、

「まぁな。大将が簡単に負けると暴動になるがこの場合は仕方ないだろ」

「……そうだね」

「……胃が痛い」

理音は雄二の言葉に納得すると利光と恭二は代表会議に出席していたため、美春が犯人だと言う事を知っているため納得し、

「決まりだな」

「根本、どこに行くんだ？　作戦会議をしたいんだが」

「どこだって良いだろ」

恭二は大将も決まったため立ち上がり、自分の自習室に出て行こうとすると雄二は恭二に声をかけると恭二は不機嫌そうに言う。

「雄二、気にするな。根本は最高得点を取って小山にもう1度、アタックするつもりだから回復試験を受けるのに忙しいんだ」

「て、てめえ、前田！？」

「なるほど、ずいぶんとかわいいところがあるじゃないか。根本」

理音は恭二が考えているか理解しているようで表情を変える事なく、恭二が友香に未練があると言うと恭二は理音を怒鳴りつけ、雄二はそんな恭二の反応にニヤニヤと笑うと、

「う、うるせえ!!　だ、だいたい、あんなふられ方納得がいくか!!」

「何だよ。後半は割とノリノリだったじゃねえかよ。昨日の明久みたいに」

「ふざけるな!!　あんなのと一緒にするな!!」

「そうだ!!　あんな汚い女装と一緒にするな!!　バカ雄二!!」

恭二は友香にふられる原因を作った雄二を怒鳴りつけると雄二は恭二をからかうのが楽しいようで笑いながら明久にも攻撃を仕掛け、明久と恭二はお互いを罵り合い、

「……こんなので勝てるのかな？」

「さあな。結局は初日は個人戦だしな。連携を取り始めるのは3日目か最終日と言ったところだ。平賀、お前もデートに誘いたい奴がいるなら頑張ってみたらどうだ？」

「い、いや、そんな人はいないけど」

「そうか？　なら、友人のフォローにでも回ってやれ」

源二はまとまりに欠ける様子にため息を吐くと理音は今はまだ慌てる時ではないと言う。

## 第３５１問

「さてと、それじゃあ、女子の大将を決めましょうか？」

「女子側を仕切るのは優子なんだね」

「仕方ないでしょ。代表はあんな感じだし」

優子は女子生徒側の代表会議を始めようと言うと愛子はＡクラス代表である翔子ではなく、優子が仕切っている事に苦笑いを浮かべると優子は最高得点を取って雄二に命令をする事だけを考えている翔子を見てため息を吐くと、

「それでどうするの？　普通に考えると学年主席がいるんだから霧島さんに任せるのが妥当だとは思うんだけど」

「……無理そうね」

友香は早く大将を決めて回復試験に移りたいようで翔子を大将にしたいようだが翔子は見るからに先陣に立つ気のため眉間にしわを寄せると宏美は苦笑いを浮かべ、

「そうね。そうなると負けたら責任を取ると考えると原因である清水さんに任せるのが筋だとは思うんだけど……」

「最高得点を取ってお姉さまとデート、それに公認で豚野郎を始末するチャンス」

「ちょ、ちょっと、美春！？　放しなさい！？　な、何度も言って

るでしょ！？　ウ、ウチは男の子が好きなのよ！！」

「そんな事ありませんわ！！　お姉さまは美春を愛してるはずです！！」

優子は眉間にしわを寄せてこの試召戦争の原因である美春を見るが彼女は彼女で思惑があるようで美波に飛びついており、美波はギリギリで美春の攻撃を交わしている。

「……まとまりないわね」

「そ、そうですね」

優子はクラスの代表者の話し合いのはずなのにまとまりのない様子に肩を落とすと葵は苦笑いを浮かべ、

「と、なると代表の次に点数の高い姫路さんかな？」

「わ、私ですか？」

「工藤さん、瑞希は外してあげて、命令って言い方は悪いけど、デートに誘いたい相手もいるだろうし」

愛子は翔子と美春がダメなら、点数で瑞希を押すが深月が瑞希は外して欲しいと言うが、

「弓永さん、あたしは姫路さんが大将で良いと思うわ。言い方は悪いけど、男子との軋轢は考えずに吉井くん達を攻撃した生徒にもあるわけだし」

「あう」

「そ、それを言われると私も責任があるのよね」

優子は瑞希や美波、宏美と言った直ぐに攻撃に移った女子生徒にも責任があると言うと瑞希と宏美は気まずそうに視線を逸らすと、

「中林さんや他のクラスの子達は吉井くん達と交友が深いわけじゃないけど、姫路さんや島田さんは違うでしょ。清涼祭や最初の試召戦争の時に吉井くんが頑張ったのは誰のため？　それなのに姫路さんは吉井くんを疑ったわけよね。それなのに最高得点を取って吉井くんをデートに誘おうってのは都合良すぎるでしょ。個人的な意見としては姫路さんと島田さんにはルール違反にならないようにして男子と戦わないでいて欲しいんだけど」

「……」

優子はこの状況でも反省の色の見えない瑞希と美波の様子に腹を立てているようであり、瑞希は優子の言葉にうつむいてしまう。

「ゆ、優子、でも、それを言ったら、代表だって」

「愛子、代表と坂本くんと吉井くんとこの2人は違うでしょ。理音はずっとこの2人に言い聞かせてるし、あたしもそう思う。お互いの想いも確認してないのに変な独占欲出してるのよ。この2人はFクラスのおかしな覆面を被った迷惑な連中と変わらないわ」

愛子は優子の怒りもわかるようだがこの場を治めようとするが優子は瑞希と美波をＦＦＦ団と変わらないと切り捨てようとするが、

「ゴメンね。木下さん、それ以上は止めさせて貰おうかな」

「み、深月ちゃん？」

深月は真剣な表情で優子と瑞希の間に割って入り、

「瑞希はちゃんと反省できる娘だよ。ちょっと、周りに流されるけど、人の事も思いやれる優しい娘、私はそんな瑞希が友達だと言う事を誇りに思ってる。だから、これ以上、瑞希をバカにする事は私が許さない」

「……そうね。理音もなんだかんだ言って同じ評価をしてるわ。あいつはあまりそう言う事を口に出さないけど吉井くんと姫路さん、本宮さんが文月にいる事に救われてる気がする。姫路さん、友達としての忠告よ。あなたは吉井くんが甘いところに甘えてるだけ、本当に吉井くんが好きならキチンと自分で考えて、あまり、理音や弓永さんの気持ちを踏みにじるような事をしないでそれは最低の人間がする事よ」

「は、はい。気を付けます」

深月は視線を逸らす事なく優子に向かい言うと優子は深月の様子を見てため息を吐きながら瑞希に友人としての忠告をすると瑞希は大きく頷き、

「話がまとまったなら、姫路さんが大将って事で良いかしら」

「は、はい。私が」

「瑞希、大将は私がやるよ。だから、頑張りなよ。瑞希の想いを届

けなさい」

友香は3人の様子に少し呆れた様子ではあるが何となく気持ちもわかるようで話を戻そうとすると瑞希は大将を引き受けると言うと深月が瑞希の代わりに大将をやると言いだし、

「ちょ、ちょっと、弓永さん、あなたの成績じゃ」

「大丈夫、大丈夫。どうにかなるよ。それに恋に頑張る友達の背中くらい押せなきゃ、女がすたるでしょ」

「……まったく、それじゃあ、あたしは別に最高得点を取る気もないから、弓永さんと高みの見物でもしましょうか」

「わ、私もお手伝いします」

宏美は深月の成績じゃ大将としては役不足だと言うが深月はくすりと笑うと優子と葵は瑞希のために深月の護衛に付くと言い、

「それじゃあ、決まりかな？」

「……仕方ないわね」

愛子と友香は深月のペースに巻き込まれ始めた女子生徒達の様子に苦笑いを浮かべる。

## 第３５２問

「ほう。深月が女子の大将か？」

「そうよ。意外？」

「なっちゃった♪」

男女の大将が決定されて自習時間が始まると優子と深月は試召戦争前にわずかでも点数を補給しようとしているようで理音に勉強を見ている。

「いや、意外でもないな。それに深月なら真面目にやれば直ぐにＡクラス程度の成績になれるだろ」

「過大評価はいらないからね。ボクはそんなに賢くないから」

理音は深月のノートを眺めながら深月は真面目にやれば成績など直ぐに上がると言うと深月は苦笑いを浮かべながら理音の評価は荷が重いと言うが、

「そうか。そう言うならそうしておこう」

「理音、性格、悪いよ」

「ん。よく言われるな。そんなんつもりはないんだが、優子、そこ、間違ってるぞ」

理音は表情を変える事なく頷き、深月はそんな理音をジト目で見て

性格が悪いと言うと理音は少しだけ困ったように笑いながらもしっかりと見ているようで優子の間違いを指摘すると、

「あ。ホントだ……ねえ、理音」

「ん？　どうかしたか？」

優子は直ぐに間違いに気づき、消しゴムで間違っている個所を消しながら理音を呼ぶ。

「特殊な点数を付けるのって誰？」

「ん？　今、考えてるのは瑞希と根本はＡクラスと同じく６点、康太は保健体育時に倒せば８点、工藤は７点、雄二、美波は現状の成績なら５点にして問題ないと思う。アキは成績はＣクラス相当の成績に観察処分者の操作性を考えれば６点をやっても良いと思う。後は本宮も文系なら６～７点はやれるな」

「……本宮さんの文系？」

「現状で言えば文系だけなら霧島を超えるぞ。ずいぶんと秀吉が支えになっているようだ」

「秀吉が？」

理音は順に特殊な点数を付与する人間を上げて行くと優子は葵の成績が上がっている原因に秀吉の名前が出た事に首を傾げると、

「ん？　お前は秀吉の今の成績を知らないのか？　……ほら、見てみろ」

「え？　あいつ、いつの間に文系の成績を上げたの？」

理音はノートパソコンのキーボードを叩き、秀吉の点数を表示すると秀吉の現代文と古典はＤクラス相当まで上がってきている。

「本当に物事を理解している人間はそれを他者に教える事ができる。秀吉は本宮と一緒にいる事も多いしな。それなりに教えて貰ったんだろう。本宮も秀吉に理解できるように勉強したわけだ」

「うーん。好きな人のために努力してるわけか？　良い傾向だね」

理音はくすりと笑うと深月はうんうんと頷き、

「春がきてる人達は良いなぁ……今更だけど、ボクって邪魔？」

「ゆ、弓永さん、な、何を言い出すのよ！？　今はあなたの成績を上げないといけないんでしょ！！」

「別にかまわんぞ。まぁ、優子をからかって追い出されたと言って他に行きたいならそうしろ」

深月は理音と優子の顔を交互に見た後、ニヤニヤと笑うと優子は顔を真っ赤にして深月に言うが理音は優子とは違う反応をすると、

「うん。理音相手じゃ分が悪いからそうする」

「え？　ちょっと、弓永さん？」

深月は理音の言葉に少しだけバツが悪そうに苦笑いを浮かべると自

習道具を持って立ち上がり、優子は何があったかわからなような表情をするが、

「じゃあ、優子、お邪魔して悪かったね。今から好きなだけ、理音といちゃ……つけそうにないね」

「そうだな……人外化した清水と暴走した玉野には9点をつけても良いな。普通の人間には倒せなさそうだしな」

「リ、リオ、ボクに勉強を教えてよ!?　た、玉野さんを倒さないとボクは危険なんだよ!!」

深月は優子を名前で呼び、ウィンクをしてこの場所を離れようとするが美紀に何か言われたのか明久が理音に泣きつく。

# 第353問

「……午後の1時間はリオは特別講義なんだよね？」

「あぁ。今日は単体教科の補給試験を申請した生徒も多いみたいだから参加者がどうなるかわからんがな」

「そうだよね。何か、みんな殺気立ってるし」

昼食時間になるが明久は時間が惜しいようで理音に勉強を見て貰いながら昼食を食べていると、

「アキお兄ちゃん、頑張ってください」

「うん。ありがとうね。怜生くん、どれだけできるかわからないけど頑張るよ。まずは日本史と世界史だけでも戦える状態にしないとこの2教科で玉野さんを倒して彼女が最高得点を取る事だけは絶対に阻止しないといけないから、それに彼女と戦って負けたら試召戦争の途中だろうと着替えさせられそうな気がするから」

怜生明久を応援し、明久は怜生からの応援を無駄にしないようにと笑顔で返事をするが美紀への恐怖はぬぐい切れないようでかなり追い込まれた状況に見え、

「理音、吉井くんを助けられないのさすがにこの状況じゃまともに戦えないでしょ」

「そうだな。アキ、時間が惜しいなら今日は捨てる事になるが時間を稼ぐ方法はあるぞ」

「え？　それってどう言う事？」

優子は明久の様子に理音に落ち着かせる事はできないかと聞き、理音は明久に時間稼ぎをする方法があると言うと明久は食いつくように理音に聞く。

「落ち着け。まずは今のお前の精神状態では補給試験を受けても点数が上がるかはわからん。だいたい、日本史と世界史は現状では頭打ちのところまで伸びてるだろ。補給試験を受けて今の点を超えられる自信はあるのか？」

「そ、それは」

「確かにそうよね。その2教科はAクラス並みになってるわけでしょ。それに吉井くんの場合は観察処分者の利点である操作性もあるから、下手したらその2教科だと腕輪を持っている人くらいしか倒さないんじゃないかしら？」

理音は明久が受けようとしている日本史と世界史の補給試験は無駄だと言うと優子も理音の言葉に頷き、

「そ、それなら、どうしたら良いの？」

「まずは苦手教科なら、いくつかでもポイントを押さえれば点数は上がるだろ。今から2時までは苦手教科をやる。清涼祭の件で土台は出来上がってるんだ。問題を読む力は備わっているはずだしな」

「で、でも2時までやってたら補給試験を受けるヒマがないよ」

「……そう言うことね。吉井くん、あたしは理音の言いたい事がわかったわよ」

明久は得意教科は伸びしろがないため苦手教科を潰せと言われたためか不安そうな表情をすると優子は理音が何を言いたいか理解したようであり、

「ホント!?　木下さん、ボクは何をしたら良いの？」

「吉井くんは2時から補給試験を受ければ良いのよ。そうすれば少なくとも今日は負けないから点数は0点にならないでしょ」

「そう言う事だ」

明久は優子に理音の言いたい事を聞くと優子は明久に2時からの補給試験を提案し、理音は優子の言葉を肯定すると、

「玉野はお前を探して動き回るはずだ。あの勢いだっていつまでも続かない。お前が見つからなければ途中でAかBの成績上位組に狩られるだろ。後はお前の命を狙っている清水も一緒だ。まぁ、あいつの場合は人外化していれば誰も近づかない気がするが点数が取れなくなったら大物の清瀬を倒しに行って確実に返討ちに遭う」

「……うん。清水さんが清瀬くんに返討ちに遭ってるところは想像できるよ」

「そうね」

理音は明久の注意しないといけない美春と美紀の目を欺くためでもあると言うと明久と優子は美春が大樹に負けている姿だけは想像出

来るようで顔を引きつらせて頷く。

「だいたい、今日は個人で好き勝手に動くだろうからな。ある程度、頭の回る人間は下手には動かないはずだ」

「そうなの？」

「あぁ。連携の取れそうな人間を探したり、他の生徒の戦力分析とかな。初日からまともに動くのは昨日、覗きに走ったバカくらいだろ」

理音は今日は大きな戦いにならないと言うと、

「悪いな。そろそろ、特別講義の用意をしないといけないから先に行くぞ」

「待って、理音、あたしも行くわ」

「……」

理音は自分と怜生の食器を持って立ち上がると優子と怜生は理音に続くように立ち上がり、

「ちょ、ちょっと待てよ。リオ、ボクに勉強を」

「後は自分でどうにかしろ。１人でできないなら……瑞希」

「は、はい！？」

「俺は忙しいから、アキの勉強を見てやってくれ」

「えっ！？　で、ですけど」

明久は自分1人では苦手教科はどうにもならないと言おうとすると理音は先ほどから明久に謝りたいようでこちらを見ていた瑞希を呼び寄せて明久を押しつけると怜生と優子と並んで歩き出し、

「……理音、あんた、甘いわね」

「まぁ、島田と離れて謝るタイミングを見計らってたんだ。これくらいしてやらないと深月に悪いだろ」

「……はい。ケンカはダメです」

優子は理音の行動にため息を吐くと理音は深月の行動に習ったと言い優しげな笑みを浮かべ、怜生は理音の言葉に頷く。

# 第３５４問

「……やはり少ないな」

「そうだね」

理音は特別講義の教室に入り、参加者を確認するが今日の試召戦争に目が言っているようで参加者はほとんどいなく利光は理音の言葉に頷き、

「理音、どうするの？　この人数でもやるの？」

「そうだな。それでも良いが、自習にしてわからないところの説明でもするか？」

優子はこの人数では特別講義の意味がないと理音は自習にするかと参加者に聞き、参加者からも賛成の声が上がり始め自習時間になり、

「試召戦争はどうなるのかな？」

「久保くんはどうするつもりなの？」

理音は特別講義参加者の質問に答えていると利光はあまり試召戦争に乗り気ではないのかため息を吐くと優子は利光にこの後の試召戦争はどうするのかと聞く。

「実際、参加をする意味がないからね」

「そうなのか？　弓永さんとか誘わなくて良いのか？」

「……何で、弓永さんの名前が出てくるんだい？」

利光は表情を変える事なく言うと特別講義に参加していた大樹が利光に深月を誘わなくても良いのかと聞くと利光のこめかみはぴくりと動き、

「何でと言われると……勘か？」

「疑問形で返されても返事のしようがないわよ。それに久保くんは……いたっ！？」

「……優子、余計な事を言うな。久保がどうするかは久保の考えだろ。実際、騒ぎにはなっているが今日は下位クラス男子が何も考えずに1発狙いの上位クラスの女子に仕掛けて終わりだ。久保がやる気になるとしたら、3日目くらいだろ」

大樹は利光の疑問に苦笑いを浮かべると優子は少し目を輝かせながら利光に何か言おうとした時、理音が持っていた資料で優子の頭を叩き、利光がやる気になるのは3日目からだと言う。

「どう言う意味だい？　僕は今回の試召戦争に参加する意味を感じてないんだけど」

「それでも気になってくるとは思うぞ。獲得点数が高くなってくれば誰が誰を誘いたいって話も出てくるだろうからな」

「確かにな。それはある」

「その面で言えば、清瀬は安牌だからな。少なくとも人外化した清

水を見て誘おうとするのは命知らずかドMだ」

しかし、利光は理音の言葉の意味がわからないと首を傾げると理音と大樹は試召戦争後半になってくると各人の思惑が見えてくると言うと、

「……理音、あんた、本人を目の前にしてそれを言うのはどうなのよ」

「いや、木下さん、気にしなくて良いよ。俺もそう思う」

優子は理音の言葉は大樹に対して失礼だと言うが大樹本人が気にしなくて良いと笑い、

「前田、お前は最高得点者の予想って立ててるのか？」

「立ててはいるが聞いてどうするつもりだ？　一応、経営者としては学生間のノミ行為は禁止するぞ。それは俺がやる」

「……あんたは何を言ってるのよ？」

大樹は理音に最高得点者の予想を聞くと理音は賭けは自分が主体でやると言うと優子は眉間にしわを寄せるが、

「まぁ、冗談だが何かあっても良いとは思うな。下手に禁止すると裏で絶対にやる人間が出てくる。禁止されたものをやりたくなるのは人の真理だからな。２日目終了時点で上位１０名でも当てて貰って正解者が居れば最高得点者と同じ権利をやっても良いんじゃないか？　何より、面白そうだからな」

「前田、かなり、今の状況を楽しんでるよな」

「そうだな」

理音の言葉に大樹は理音が楽しそうだと言い、理音はその言葉に口元を緩ませるが、

「……」

利光は何か考える事があるようで理音達の話は耳に入っていなさそうである。

# 第３５５問

「結構、圧巻だな」

「そうだね……清瀬くん、胃は大丈夫なのかい？」

「あぁ。前田が胃薬くれたからな」

男女間の試召戦争が始まって直ぐに雄二、大樹、源二の３人は男子本陣である男子の大浴場の前に布陣しており、

「しかし、何で本陣が大浴場の前なんだい？　女子も同じなんだよね？」

「わかりやすいしな。何より、施設の配置から考えると本陣を替えれるようにすると不公平だってな」

「でも、この場所だとなんか男子女子入り混じってお互いの風呂を覗こうとしてるみたいじゃないか？」

源二は自分達がいる場所と女子の本陣の位置を確認して首を傾げると雄二は理音が決めた本陣の意味が理解できているようで苦笑いを浮かべると大樹は少しだけ困ったように笑い、

「……たぶん、それも理音の作戦だ。ウチのクラスの奴らは向かう場所が女子風呂だと言う事で勝手にテンションが上がって行く」

「……確かに上がってるな」

「改めて、凄いクラスだよね」

「明久がラブレターをもらっただけでクラスでよりグロテスクに殺す方法を考えるような奴らだからな」

雄二は男子、主にFクラスのやる気をあげて周りのやる気もあげるのに理音が考えた事だと言うと大樹と源二はFクラスの行動理念に顔を引きつらせるが雄二は気にする事なく言うと、

「それじゃあ、高みの見物とでも行こうか？」

「坂本は本当に今日は何もしないつもりなのか？」

「あぁ。最高得点を取る気もないしな。翔子を最高得点にさえしなければ良い。そのためには明日からの作戦を立てるのに味方に引き入れれそうな人間や女子のやる気具合、調べないといけない事はたくさんあるからな。２時間でどこまで情報を集められるかだ」

雄二は今日はデータ収集に回るようであり、ニヤリと笑う。

「まぁ、実質、霧島さんが最高得点者になっても問題ないしな。卒業後に入籍が坂本の来年の誕生日の入籍に変わるだけだろ」

「て、ちげえよ！？　清瀬、お前、いい加減にしろよ！！」

雄二の様子に大樹は雄二自体は試召戦争の結果はあまり関係ないと言うと雄二は大樹の言葉に声を上げ、

「しかし、こんなに緩い感じで良いのかな？」

「平賀、どう言う事だ？」

源二は雄二と大樹の様子にため息を吐くと雄二は源二に聞き返し、

「一応は俺達は女子達から覗き疑惑をかけられてるわけだからね。状況しだいでは罵られる事もあるわけだし」

「平賀、その言い方だと罵られたいみたいだぞ」

「……平賀、そっちか、確かにそれなら、代表会議に清水を連れてきたのも頷ける」

源二は男子が女子に覗き疑惑をかけられている事には変わりないと言うが大樹は源二をからかいに移り、雄二も楽しそうに笑い大樹の言葉に乗っ掛かると、

「……いい加減にしてくれないかい？」

「冗談だ。でも、こう言うのも面白いだろ。ウチの学校って召喚システムって特殊なカリキュラムで動いているから、他のクラスと交友を深めにくいだろ？」

「確かにそうだね。去年、同じクラスの友達とも何となく話しにくいのは確かだね」

源二は眉間にしわを寄せて不機嫌そうに言うが大樹は同じクラス以外との奴らとも仲良くなる良い機会だと笑い源二は頷く。

「なら、せっかくの機会なんだし、Ｆクラスみたいに全力でバカをやるのも面白そうだ」

「おいおい。ここで俺達を引き合いに出すなよ」

「でも、清瀬くんの言いたい事も確かだしね」

大樹は楽しそうに笑ってバカをやろうと言うと雄二と源二は苦笑いを浮かべるが大筋で賛成のようであり、

「しかし、清瀬が小山をフォローするとCクラスも厄介そうだな」

「ないない。俺は基本的に人をまとめる能力はないから」

「そんな事もないと思うけどな。まぁ、せっかくの祭りだ。最初は3日目くらいからだと思ってたが、全力で相手をしてやるか」

雄二は大樹の言葉に乗せられてきたようで楽しそうに笑う。

# 第３５６問

「始まったな」

「そうですね」

「……」

試召戦争が始まり、理音はシステムの管理、補給試験の採点を行うために補給試験用の教室でノートパソコンの前に立っていると西村教諭は理音に声をかけるがその膝の上には怜生が座っており、

「鉄人！！　怜生くんをどうするつもりだ！！　怜生くん、そこは危ないからこっちにくるんだ」

本日は参加を見合わせている明久はその異様な光景に怜生が危険だと勝手に判断したようで西村教諭に向かい怒鳴りつけると、

「……アキお兄ちゃん、先生は優しいです」

「……怜生くん？　鉄人、命拾いしたな。怜生くんに免じて今日は許してやろう」

「……吉井、言いたい事はそれだけか？」

怜生が明久の言葉を否定すると明久は舌打ちをしながら上から目線で西村教諭を許してやると言うと西村教諭はこめかみをぴくぴくとさせながら言うが膝の上に怜生がのっているため、動く事は出来ずにいる。

「しかし……初日から、雄二が動き出したのは意外だな」

「そう？　こう言う騒ぎは雄二は好きだし、意外でもないんじゃないかな？」

理音は明久と西村教諭の様子など気にする事なくノートパソコンのディスプレイで試召戦争の様子を確認しており、自分の予想に反して雄二が男子生徒達に指示を出しながら女子生徒の撃退している姿に眉間にしわを寄せると明久は意外でもないと言うが、

「いや、雄二の場合は勢いで動く事も多いが状況を分析したり、勝てる見込みがないと動かない事があるからな……まぁ、勝ったと思った時点で相手がどう返してくるかを考えないから不覚を取るんだが、それに実際はあいつ自体はこの試召戦争自体に旨みがないんだ。補習室に送られる危険性があるのにわざわざ参加すると思うか？」

「確かにそうだけど、霧島さんが最高得点を取っちゃうと雄二の人生が終わりだからじゃないかな？」

「……」

「ちょ、ちょっと、リオ！？　今のため息は何！？」

「……気にするな。お前には全く関係ない」

理音は男子代表格3人の会話を聞いていないため、雄二がらしくない動きをしていると言い、明久は先日の如月グランドパークでの1件を知らないため、翔子に最高得点を取らせないためだと言うと理音は明久の顔を見てため息を吐き、

「実際、このルールで最高得点は狙うにしてもしっかりと策を考えないと取れないんだ。いくら、霧島の成績が良く立ってAクラスやBクラスの男子に囲まれれば苦戦する。もしくは負けてしまう事もあるはずだ。それにアキ、お前だってわかるだろ。ゲームで絶対に倒せないと思う敵が出てきたらどうする？」

「それは逃げるかな？　負けちゃうとどうしようもないし」

「あぁ、絶対に勝てないラスボス級の人間が目の前にきて策も何も立てずに戦うなんて愚策はFクラスのバカしかしない。となると霧島が稼げる点数は伸びない。本気で最高得点を取りたいなら戦況を見極める事、相手の点数が下がったのを確認してそれを見逃さない事、引く時は引き、攻める時は攻める。そのメリハリを付けられないと最高得点を取るのは難しいな。雄二はそれをわかっているから雄二と平賀が指揮している部隊は勝手に戦っている奴らより、明らかに消耗が小さい。苦戦してる奴らを助けて恩を売って味方にも引きいれるつもりだから、戦力はまとまって行く。個人と部隊となった時に強いのは確実に部隊だからな。女子勢もこれに気づかないときついぞ」

「確かにそうかも知れないけど女子にだってAクラスの人達はいるんだ。それくらいの事に気づくよ」

理音は個人での戦いをしているうちは最高得点を取る事は難しいと言い、今の状況では女子生徒達が不利だと言うと明久は女子生徒達も雄二がやっている事にくらいは気づくと言う。

# 第357問

「すぐには難しいだろうな。今回の件はFクラスが犯人だと焚きつけた人物もいるがそれでも女子の半数以上がFクラスが犯人だと思うのは普通じゃあり得ないだろ。どういう経緯でこんなメンバーが文月に集まったかは知らんがFクラスだけじゃなくてこの学年自体が単純（バカ）なんだ」

「……前田、言い切らないでくれないか」

理音は女子生徒達は直ぐには気付かないと言い、文月学園の2学年全体をバカだと言い切ると西村教諭は理音の言いたい事も何となく察していたようだが認めたくないようで頭を抑えるが、

「事実ですからね。実際、エサが目の前にぶら下げられたらやる気を出したのがほとんどです。まぁ、教師陣にも嬉しい誤算じゃないんですか？」

「……まったく、前田、お前は……怜生くん、すまんが降りてくれないかい？　俺は補習者を捕まえに行かないといけないからな」

「……はい」

理音は表情を変える事なく言い切るとこの試召戦争には教師陣にもメリットがあると言うと西村教諭は理音の言うメリットも理解しているようで話を終わらせると怜生に膝の上から降りて欲しいと言い、怜生は素直に頷いて西村教諭の膝の上から降りる。

「それじゃあ、俺は補習者を捕まえに行ってそのまま補習の監督を

するからな。吉井、前田にあまり迷惑をかけるんじゃないぞ」

「鉄人、何を言ってるんですか？　ボクがリオに迷惑をかけるわけがないじゃないですか！？」

「……西村先生と呼べ」

西村教諭は立ち上がり、明久に忠告をして教室を出て行こうとすると明久は余計な事を言って西村教諭に拳骨を喰らい頭を押さえると、

「……怜生、これが『口は禍の門』と言うんだ。意味としては『うっかりしゃべった言葉が大きな災難を招く事がある』。まぁ、あの程度が大きな災難と言うかはわからんが考えずに話すと相手の怒りを買うくらいで覚えておけ」

「……はい」

理音は明久と西村教諭の様子を見ながら言い、怜生は理音の言葉に頷く。

「リ、リオ、それで先生方にとっても嬉しい誤算って言うのはどう言う事？」

「……アキお兄ちゃん、大丈夫ですか？」

「う、うん。大丈夫だよ。ありがとうね。怜生くん」

明久は西村教諭に拳骨を喰らった頭を押さえながら理音が西村教諭と話していた『嬉しい誤算』と言う言葉が気になるようであり、理音に聞くと怜生が明久が頭を押さえているため明久の隣に椅子を運

ぶとその上に立ち明久の頭を撫で、明久は怜生の様子に笑顔を見せると、

「ん？　たいした事じゃない。この試召戦争のおかげで本来、お前を始めとした自習なんかしないであろう人間までしっかりと自習を始めたと言う事だ」

「……な、何を言ってるんだい？　ボクは真面目に自習をしているじゃないか」

「玉野や清水からの身の危険を感じなければ自習時間も遊ぶつもりだっただろ？　監督官はいても自習してますと言えば強く言えないからな」

「……」

理音はＦクラスが欲望を叶えるために自習に取り組んでいる事を話すと明久は自覚はあるようだが理音から目を逸らして言うが理音は明久の行動などお見通しだと言い、明久は完全に白旗を振り黙ってしまうが、

「Ｆクラスの鬼気迫る自習風景は女子生徒には恐怖しか生まない。あいつらがあり得ないけど最高得点を取ってしまったら、命令は常識的な事と言う話だったけど『Ｆクラスのおかしな常識』で来られたら？　と考えて自分や友人の身を守るために自習に身を入れる。男子はＦクラスに当てられて自分の欲望に忠実に動こうとするのとＦクラスに最高得点を取られて自分の好きな娘に何かあったら？と考える。不安と言うのは個人の中で拡大していくからな。それを払拭する方法が今回の場合は自習であり、最高得点を取って自分が命令権を手に入れると言う事だからな」

「そうか。みんな最高得点が欲しいから勉強しているわけだね」

「あぁ。まぁ、お前みたく、自分の身を守るための奴もいるからな……アキ、死ぬなよ」

「な、何!?　その不吉な言葉は!?」

理音は明久の様子を気にする事なく説明を続けると明久は理音の説明に頷くと理音は例外もいると言いながらノートパソコンのディスプレイに映る人物を見て明久を生温かい目で言うと明久は理音の言葉に声をあげる。

# 第３５８問

「……島田さん」

「どうして、頭に血が昇ってるんでしょうね？」

理音が見ていたディスプレイの先では美波が明久の召喚獣を血祭りにあげる事を宣言しながら試召戦争を始めておりその姿に瑞希は苦笑いを浮かべ、友香は大きなため息を吐いている。

「な、何で、いつも瑞希なのよ！！　数学ならウチだって教えられるのに、今なら他の教科だってアキより良いのに！！」

「……そうやって、青筋立てるからだと思うよ。それに姫路さんは吉井くんに謝ったけど、島田さん、まだ謝ってないよね？」

「そ、それはウチだって、疑うなんて悪い事をしたとは思ってるけど、アキが悪いのよ」

美波は明久が瑞希に仲良く自習をしていた姿を見てしまったようで過激すぎる嫉妬心をまき散らしながら明久を探しているようだが、明久は教室で補給試験を受けているため見つかるわけはなく、美波の様子に愛子はため息を吐くと美波は恥ずかしくて謝れなかったようだが最終的には明久に責任転嫁を始めると駆け出して行き、

「……言っても無駄なのかな？　吉井くんもだけど前田くんも大変だね」

「えーと、ご迷惑をかけてすいません」

愛子は美波の様子に大きく肩を落とすと瑞希は今は冷静なようで美波の考えも理解できるようで小さくなり謝ると、

「口で謝るだけなら誰でもできるわ。それを態度で見せないとね」

「は、はい。深月ちゃんや木下さん、葵ちゃん、前田くん、信じてくれたお友達のためにも」

「お願いするわよ。少なくともFクラスの男子に最高得点を取らせるわけにはいかないんだから、女の子達を守るためにもね。頼りにしてるからね」

友香は瑞希に暴走は勘弁して欲しいと言うと瑞希は先ほどの優子と深月の言葉に考える事があるようで小さく拳を握り気合いを入れると友香は冷静に戦況を見ようとしているようで瑞希に向かい言う。

「小山さん、ずいぶんと冷静じゃない？」

「冷静にもなるわよ。私も頭に血が昇りやすいからね。そのせいで、最初の試召戦争でクラスのみんなに迷惑もかけたわ。だから、今日は私は女子の代表格の1人として女子を守るために戦わないといけないのよ。最高得点は二の次よ」

愛子はAクラスに怒鳴りこんできた友香の姿を思い出したようで友香をからかうように言うと友香は代表としてやらなければいけない事があると言い、

「本来は木下さんとか冷静に対処してくる人が指揮した方が良いとは思うんだけど、そう言うわけにもいかないしね……勝手に動く人

もいるし、まったく、誰が原因でこんな事になってるか理解してるのかしら」

「し、清水さん？」

「ブタヤロウ、ドコニカクレタ？　ミハルノテデヤツザキニシテクレル」

友香は女子生徒をまとめようとしているようであり、細かくCクラスの女子生徒達に指示を出しているなか、背中に黒い殺意をまき散らしながら明久の命を狙っている美春を見つけて大きく肩を落とすが美春は友香の心配など気にする事なく駆け出して行き、美春の禍々しさに男子生徒の防衛ラインには穴が空いて美春は奥に消え、

「よ、吉井くん、大丈夫かな？」

「は、はい。今の時間は吉井くんは補給試験を受けてますから大丈夫だと思います」

「えーと、それじゃあ、一先ずは大丈夫って事で良いのよね？　それならボク達も頑張ろうか？」

瑞希、愛子、友香の３人は美春の様子に顔を引きつらせながらも試召戦争を続けて行く。

# 第359問

「良いか。1対1で戦うな。必ず、人的優位に立って戦うんだ。例え、Aクラスが相手でも腕輪持ち以外じゃ複数人を相手にはできない」

雄二は男子生徒で頭に血が昇っていない生徒達をまとめながら戦線維持していると、

「ブタヤロウヲドコニカクシタ!!　ミハルノテデヤツザキニシテクレル!!」

『坂本、清水だ!!　Dクラス3名、戦死。すぐそばのBクラス2名に襲い掛かっている!!』

「清水の相手はするな!!　残念だが清水に捕まった時点で見捨てるしかない!!　あいつは成績で倒せる相手じゃない。召喚フィールドを展開させないように距離を取るんだ!!」

すでに人外化を終えた美春が男子生徒を蹴散らしながら単身で中央突破をしてきて、雄二は美春の相手をするなと叫ぶが、

『おい。清水ってDクラスのくせに倒せば9点も貰えるんだよな?』

『9点は俺のものだ!!』

何も考えないFクラスの男子生徒が美春に向かい突撃して行き、

「……ちっ、今更だが、バカしかいないな」

『坂本、どうする？』

「決まってるだろ！！　清水に襲い掛かったバカどもを捨て駒にして清水から距離を取れ！！　清水を倒せるのは清瀬だけだ！！　大将を討ち取らせないために戦線をあげて維持するぞ！！　清瀬に清水強襲の伝令を送れ！！」

雄二は戦況を見ずに暴走を始めたＦクラスの様子に舌打ちをすると美春を倒せるのは大樹だけとすでに割り切っているようで大将である大樹に伝令を送り、

「やっぱり、清水さんを倒せるのは清瀬くんだけなのかな？」

「現状で言えば清瀬しかいないだろ……平賀、遊んでる時間はないぞ。状況は最悪だ」

「そうみたいだね」

源二は雄二のように美春を倒せるのは大樹だけだとは割り切れていないようで苦笑いを浮かべると雄二は最善の手だと言い切るが美春が空けた穴を見逃さすに後を追ってきた『霧島翔子（がくねんしゅうせき）』の姿に雄二と源二は顔を引きつらせる。

「……雄二、私が雄二に勝ったら、即挙式」

「ま、待て。翔子！？　ルールが変わってるぞ！！」

「……些細な事、きっと、理音（ルール）も納得してくれる」

「そ、そんなわけあるか！！」

翔子は左手に婚約届を持っており、雄二に見せながら言うが完全に試召戦争のルールを無視しており、雄二は驚きの声を上げるが翔子は『召喚獣を召喚する事なく』雄二との距離を縮めて行き、

「しょ、翔子、や、止めろ！？　わ、割れるぅぅ！！！？？？」

「……結婚したくなった？」

「な、なるかぁぁぁぁ！！！！？？？？」

翔子の右手は雄二の頭に伸ばされ、いつも通りのアイアンクローが奇麗に決められ、

「……こ、これってルール違反にならないのかな？」

「いや、普通にルール違反だ。霧島、アウトだ。退場しろ」

源二は雄二と翔子の様子に顔を引きつらせてつぶやくと放送で理音の声が響き、翔子の退場を告げると、

「……どうして？」

「直接攻撃はルール違反だ。止めないなら獲得した点数を没収する……０点？」

翔子は雄二への攻撃の手を緩める事なく理音が自分を止める理由がわからないと首を傾げ、理音は雄二への攻撃を止めなければ翔子の

獲得点数を没収すると言いかけるがなぜか翔子は1点も獲得しておらず、理音は首を傾げ、

「……雄二以外、目に映らなかった」

「なら、仕方ないな」

翔子は顔を赤らめながら言うと理音は翔子の言葉に納得するが、

「そんなわけあるか！！」

「……えーと、こんなので良いのかな？」

雄二は声を上げ、源二は目の前の光景に顔を引きつらせる。

# 第３６０問

「……初日からか」

「清瀬、お主も大変じゃのう」

雄二からの美春強襲の伝令を受けて大樹がため息を吐く姿に秀吉は苦笑いを浮かべると、

「一先ずは行くか」

「待つのじゃ。確かに清水を倒せる可能性はお主が１番高いのかも知れないのじゃがお主が清水に負けてしまえばこの試召戦争自体が終結してしまうのじゃぞ」

大樹はポリポリと首筋を書いて立ち上がると秀吉は大樹が負けた場合、男子生徒側から暴動が起きるため大樹を止めようとするが、

「その時はその時、それに美春をほっておいた方が指揮に影響が出るからな。それより、木下はここに居ても良いのか？　坂本に頼まれたとは言え、点数を稼がないと本宮さんにいろいろな事をして貰えないぞ。本陣は点数を稼ぎにくいしな」

「わ、ワシはそんな事は考えておらんのじゃ！？」

「いや、その反応を見ればいろいろと考えているってわかるからな」

大樹は苦笑いを浮かべると自分の警護に付いてくれている秀吉をからかうように言うと秀吉は顔を真っ赤にするがその反応に大樹はニ

ヤニヤと笑い、

「それじゃあ、俺は行ってくるから、美春を倒したら直ぐに戻ってく……きたか」

「し、清水!?」

「コロ、コロ、コロス。ミハルトオネエサマノジャマヲスルブタヤロウドモミハルノテデヤツザキニシテクレル」

「……まったく、みんなは下がってくれ。被害に遭いたくはないだろ」

美春討伐に出ようとした時、人外化した美春が大樹の前に立っており、美春の様子に秀吉を始めとした大樹の警護の男子生徒達は顔を引きつらせるが大樹だけは美春の様子に呆れた様子でため息を吐いて警護に付いていてくれている男子生徒達に下がるように言う。

「き、清瀬、大丈夫なのじゃな?」

「まぁ、どうにかなるだろ」

「ヒロ、ミハルトオネエサマノジャマヲスルツモリナラヒロデモユルサナ……ヒロニチカヅクブタヤロウゴトミハルノテデシマツシテクレル」

「待つのじゃ、清水!!　ワシは男なのじゃ!?」

秀吉は大樹に勝てるかと確認すると大樹は負ける気は全くないようでくすりと笑うとそんな2人の様子に美春から秀吉に向けて真っ黒

な殺意が向けられ、秀吉はおかしな美春の殺意に声を上げるが、

「……木下、言うだけ無駄だ。それより下手に動くなよ。背中を見せると襲われるぞ」

「う、うむ。わかったのじゃ。し、しかし、明久はいつもこんなものを受けおるのか？」

「後は島田さんもな」

大樹は秀吉を守るように前に立つと秀吉は大きく頷き、大樹は苦笑いを浮かべるとそんあ2人の様子が人外化美春に更なる嫉妬（ちから）を与える事になり、

「……コロス」

「……逆効果だったな」

「わ、笑い事ではないのじゃ！？　ど、どうして、ワシは男なのにこんな扱いをされないと行けないのじゃ！？」

美春はただ一言だけ発するがその一言には先ほどまでより、純度の濃い殺意が込められているのがわかり、美春の人外化になれている大樹ですら背中に冷たい物が伝い、秀吉は自分が男扱いされない事に声を上げると、

「まぁ、仕方ない。とりあえずは美春を補習室に送るか。この状況の美春がいると戦意に影響が出るからな」

「……ヒロ、ウラギリモノハドウナルカワカッテマスワネ」

大樹は美春の前に出てため息を吐くと美春の殺意はどうやら秀吉ではなく大樹に向けられており、

「別に裏切った記憶はないんだけどな。俺が好きなのは美春だけだし」

「ヒ、ヒロ、いきなり何を言うのですか!?　そ、それもこんな人前で!?」

大樹は真っ直ぐと美春を見て美春が好きだと言うと美春の殺意は一気に霧散し、美春は顔を真っ赤にして慌てはじめるが、

「男子大将、清瀬大樹がDクラス清水美春に化学勝負を挑む。試獣召喚(サモン)」

「へ？　サ、試獣召喚(サモン)」

大樹は美春の様子を気にする事なく召喚獣をすると美春は慌てながらも召喚獣を呼び出すがすでに人外化のとけた美春が上位クラスの大樹に勝てるわけもなく、

「ヒ、ヒロ、美春をだましましたわね!?」

「いやいや、俺が美春を好きな事に嘘偽りはないから」

「……」

美春は西村教諭に抱えられながら大樹を罵倒しようとするが大樹は少しだけ照れくさそうに言うと美春は顔を赤く染め黙り込み。

「さてと、そろそろ、時間だから終結時間だから打ち合わせ通り全軍で攻めるぞ」

「う、うむ」

大樹は男子の代表格の生徒達と決めた時間になったと言うと全軍に指示を出し、男子生徒を前線に押し出すと、

「……雄二がこの場所にワシ以外のFクラスを配置しなかった理由がわかったのじゃ」

「……悪かったな」

秀吉はあまり見る事のない大樹の反応の様子に苦笑いを浮かべると大樹は照れ臭いようで秀吉から視線を逸らす。

# 第３６０問（後書き）

どうも、作者です。

番宣です。
オリジナルファンタジーの小説を投稿しました。『性悪魔術師と白銀の歌い手』と
言う作品です。相変わらず、主人公の性格はよくないですがまあが作る新たな世界を楽しんでいただければ幸いです。

興味がある方は作者のページから探してみてください。

# 第３６１問

「予想以上に男子も手ごわいね」

「……理音が言うには欲望にまみれた人間は強いらしいわよ。まったく、何なのよ。そうそうに清水さんがＦクラスの男子の半分を倒してくれたのにＦクラスの暴走が感染してるじゃないの」

男子軍の総攻撃に深月は苦笑いを浮かべると深月の補佐をしながら女子軍の指揮を執っていた優子が不機嫌そうにため息を吐く。

「まぁ、仕方ないでしょ。やっぱり、せっかくの学生生活だし、優子や葵みたいに恋人が欲しい人も多いんだよ。勉強ばかりも部活ばかりも支えになってくれると張りあいもあるしね」

「は、はい」

「弓永さん、あまり、本宮さんをからかわないで」

「そんなつもりはないんだけどね……それより、ボク達も前に行こう」

深月は気持ちもわからなくはないと言ってほほ笑んだ後、真剣な表情をすると女子生徒の予備勢力を投入すると言うと、

「ちょ、ちょっと待ってよ。それは危険よ。指揮ならあたしと小山さんでどうにかするわ。本宮さんは弓永さんの護衛をお願い」

「は、はい。わかりました。」

「守ってくれるのは嬉しいんだけどね。今は危険でもここはやるところ。相手は大将の清瀬くんが先陣に立って指揮をしてる。清瀬くんが清水さんを討ち取った事もあるけど指揮は高いし、1人じゃ指揮を執りきれないけど、それを坂本くんと平賀くんが上手くフォローしてる。はっきり言って、兵力を出し惜しみしてると勝てる相手じゃないよ。今の獲得点数がどうなってるかはわからないけど、初日で男子と女子の最高得点者に差がありすぎると明日から戦意が下がるからね。ここは引けない」

優子は深月が出る事に賛成はできないと言うが深月はここで引くのは得策ではないと言い、

「女子全軍、出ます。優子は押され始めてる左側に言って代表を援護して、葵はボクに付いてきて。ごめん、もしかしたら彼氏と戦って貰う事になるけど我慢してね。他の子達は……」

「は、はい」

「……理音の言ってる事は正しいのね」

深月は残っている女子の予備兵力を即座に振り分けて行き、優子は理音が深月は大将に相応しいと言っていた事を思い出して苦笑いを浮かべる。

「狙うべきは坂本くんと平賀くん、清瀬くんは大将としての器ではあるけど指揮能力はこの2人に劣る。両翼を指示しているこの2人を倒せなくても押さえられれば押され始めてる戦況も変わるよ。みんな、力を貸して」

「……まったく、頼もしい大将ね」

「そうですね」

深月は女子生徒達に笑顔で力を貸して欲しいと言うと女子生徒達は深月の言葉に指揮が上がりだし、そんな深月の様子に優子と葵は苦笑いを浮かべると、

「木下優子、出るわ。あたし達の相手は坂本くんよ。Ａクラス代表が退場してしまったから、たぶん、１番、厄介な相手よ。覚えておいて、弓永さんの言った通り、倒す必要はないわ。男子の指揮を執っている人達の連携を切る事、あたし達のやるべき事はそれだけよ。それじゃあ、葵。深月の護衛は任せるわよ」

「は、はい。わかりました。優子さん」

「いや、葵、ここは『お姉ちゃん』と」

「……締まらないわね」

優子は葵に深月の警護を頼み、自分の与えられた仕事をしてくると言うと深月は先ほどとは打って変わって葵をからかい始め、優子はその様子に肩を落とす。

## 第３６２問（前書き）

勝手に康太の加速の腕輪に弱点を付けました。これはあくまで私の考えでありますのでご了承ください。

# 第３６２問

「中林も思ったより、上手く指揮を執るじゃないか。お前の性格だ。挑発すれば直ぐにしかけてくると思ったんだけどな。それなりに責任を感じてるわけか？」

「まぁ、そんなところね。本来なら、この試召戦争の原因を作った私達が責任を取って大将とか責任のある位置に就かないといけなかったのに。大将を買って出てくれた弓永さんのためにも簡単には負けられないの」

「……そっちの大将も頼りになりそうだ」

雄二は徐々に押してはいるものの攻めきれない状況に女子軍の指揮を執っている宏美と対峙すると彼女の前のめりの性格がこの戦況を崩すきっかけにしようと宏美を挑発するが彼女にも引けない理由があるようで雄二の挑発には乗らず、雄二は女子軍の大将を買って出た深月の人望に小さくため息を吐いた時、

「……雄二、女子の本陣が動いた」

「おいおい。攻めてくるのかよ」

康太が雄二の隣に突如として現れ、雄二に女子の本陣が動いたと話すと雄二はため息を吐くが口元は小さく緩んでおり、

「……ずいぶんと楽しそうだな」

「まあな。クラス間の試召戦争とは違った面白さがあるからな……

それより、ここからは総力戦だ。本陣が動くなら俺達もここで遊んでるわけにはいかないな。頼りにしてるぜ。ムッツリーニ、まずはここを蹴散らして本陣の後ろに回り込むぞ」

「……任せろ。Fクラス土屋康太が女子軍に保健体育勝負を挑む。試獣召喚（サモン）」

「土屋くんがきたわよ。距離を取ってタイミングを取って召喚フィールドを変更するわよ！！」

康太は雄二の様子に少し呆れたように言うが雄二は康太に頼りにしていると言うと康太は召喚フィールドの隙を付いて保健体育のフィールドを展開し、召喚フィールドの変化にいち早く気が点いた宏美が女子軍に指示を出す。

「まったく、理音、やってくれる。まさか教師なしで召喚フィールドを張れるようにしてくれるなんてな。ムッツリーニや特化した人間には都合が良いじゃないか。まぁ、あいつの場合はその方が面白いからとか思ってるんだろうけどな。行くぜ。ムッツリーニ」

「……了解」

「そうも行かせないんだよね。Aクラス工藤愛子」

「Fクラス姫路瑞希がFクラス土屋くんに保健体育勝負を挑みます」

「「試獣召喚（サモン）！！」」

雄二は理音が教師無しでも生徒の任意でフィールドを展開できるようにシステムを変更している事に単体教科では最高得点を取ってい

るであろう康太を主軸にして女子軍を押し返そうとするが康太を瑞希と愛子が挟み込み、

「おいおい。まさか、お前達2人でムッツリーニを止めにくるのかよ」

「まあね。小山さんがムッツリーニくんが坂本くんの方に行くのを見たって言うから、ボク1人じゃ、勝てないのは悔しいけどね。ムッツリーニくん、悪いけどボクと姫路さんの2人でキミの動きを封じさせて貰うよ」

「中林さん、土屋くんは私と工藤さんで押さえます。みなさんと一緒に他の男の子達をお願いします。土屋くん、覚悟してください」

「えぇ、任せるわ」

雄二は突如として現れた2人に驚いたような表情をするがそれでも康太の勝利を確信しているようであり、

「……たった2人で俺を止める気なんて俺も舐められたものだ」

「そうでもないよ。ボクと姫路さんは言っちゃえば捨て駒みたいなものかな？　いくら、ムッツリーニくんの点数が高くても」

康太は腕輪の能力を発動させようとするが瑞希と愛子の召喚獣は康太の召喚獣との距離を一気に縮めて2人で康太を完全に挟み込んだ時、

「不意打ちの3人目は防げないわよね。Aクラス木下優子がFクラス土屋くんに保健体育勝負を挑みます。試獣召喚（サモン）！！」

「……！？　加速！？」

優子の声が響き、完全に挟み込んだ康太の召喚獣の上にランスを構えた優子の召喚獣が突進してくると康太は慌てて腕輪の能力を発動しようとするが、

「やっぱりね。いくら、何でも最初の踏ん張りか助走がなければあれだけの加速は無理でしょ」

愛子は康太の腕輪は０からの加速は無理と予想を立てていたようで、その予想は的中しており、康太の召喚獣は加速をする事が出来ず、

「ムッツリーニ！？」

「……不覚」

優子の攻撃から致命傷は避けるが腕輪を使える４００点を切ってしまう。

# 第３６３問

「愛子はそのまま土屋くんの相手を姫路さんは中林さんの指示で押されてきてる子達の援護をお願い。坂本くん、代表が相手じゃなくて悪いけど、付き合って貰うわ」

「はい。わかりました」

「優子、そっちは任せるよ。と言う事でムッツリーニくん、ボクと保健体育の勝負の続きをしようか？　もちろん、じ・つ・ぎでね♪」

「……実技！？」

「……おいおい。何で、女子軍の主力をこっちに持ってくるんだよ。こっちは目立った生徒はムッツリーニだけだぞ。本陣は良いのかよ？」

優子は雄二の前に立つと瑞希と愛子に指示を出すと愛子は康太と対峙し、瑞希は押され始めている女子軍左翼を支えるために駆け出して行くが雄二は流石に康太の戦力がそがれた状態での兵力ではこの３人の相手をするのはきついと言いたげあるが何か策を考えようとしているようで時間を引き延ばそうと優子に声をかけると、

「えぇ、ウチには頼りになる大将がいるからね。それに目立った生徒もいないのにここまで男子生徒をまとめてる坂本くんがいるのよ。ここに主力を持ってくるのは当然でしょ」

「なるほど、もう少し上手く指揮を執るべきだったな」

優子はFクラス男子生徒の9割が全滅した中で上位クラスの男子生徒のほとんどを大樹と源二に預け、Eクラス、Dクラスの生徒を中心とした部隊をまとめあげている雄二を警戒するのは当然だと言い切り、雄二は予想以上に指揮を執るのが楽しかったようでやり過ぎたと言いたげに頭をかき、

「女子とは基本的に地力が違うんだ。ここは退かせて貰うぜ」

「そう言って、油断させるつもり、そんな言葉に騙されると思ってるの？」

「全軍、撤退！！　本陣、平賀にも聞こえるように叫べ！！　良いか！！　補習室送りになりたくなかったら全力で逃げろ！！　俺達が討たれた分、女子の点数になるんだ！！　逃げるぞ！！」

「へ？」

「……工藤愛子、勝負は明日にお預けだ」

「えっ！？　ムッツリーニくん？」

雄二は苦笑いを浮かべると撤退すると指示を出し、優子は雄二が自分達女子生徒を油断させる気だと思ったようだが雄二は男子生徒全員に声が届くように叫ぶと雄二に指揮を預けていた男子生徒達は全員で『撤退』と叫びながら後退して行き、優子や愛子は男子生徒達の行動に一瞬、呆気に取られるが、

「ちょっと、本気で逃げる気！？」

「……雄二、殿は俺が持つ。下がれ」

「いや、今の召喚フィールドは保健体育だからな。お前が負けると後が面倒になる」

優子は直ぐに正気に戻ったようで驚きの声を上げると康太は雄二の立ち位置を理解しているようでここは自分に任せろと雄二の前に立つと雄二は苦笑いを浮かべながら康太を後ろに下がらせる。

「ムッツリーニくんを下げたかったの？　でも、もう少し早く下がるべきだったかな？」

「……工藤愛子、卑怯だぞ」

しかし、雄二と康太のやり取りは時間との勝負である撤退では命取りであり、愛子と数名の女子生徒は雄二と康太を囲むが、

「やれやれ、そこまで殺気立つなよ。ムッツリーニ、遅れるなよ」

「……了解」

すでにこれは撤退の中に織り込み済みであったようで雄二は口元を緩ませて康太に目配せをすると康太は頷き、

「悪いな。撤退させて貰うぜ。起動（アウェイクン）！！」

「し、白金の腕輪？　そんなもので？　え？　ど、どう言う事？」

「召喚フィールドが消えてく？」

雄二はポケットから清涼祭の召喚大会の優勝賞品である『フィール

ド展開』の白金の腕輪を手に付けると白金の腕輪を発動させると展開されていた保健体育の召喚フィールドは消え去り、優子と愛子は驚きの声を上げるなか、

「それじゃあな。勝負は明日に預けておくぜ」

「……撤退完了」

雄二と康太は女子生徒の間を駆け抜けて雄二の指揮していた男子生徒軍は被害を最小に抑えて撤退を完了させ、

「……これはどうしたら良いのかしら？」

「追いかける？」

「いえ、坂本くんの事だから伏兵を用意している可能性も充分に考えられるわ。周りの撤退状況の確認もあるから、ここの指揮は中林さんに戻して私は本陣に戻るわ。愛子は小山さんのフォローに姫路さんは引き続き、中林さんのフォローをお願い」

優子は眉間にしわを寄せながらも女子生徒達に指示を出して女子本陣に戻って行く。

# 第３６４問

「……平賀くんもやるわね」

「まぁ、坂本が俺の指揮下に参加してるＡクラスとＢクラスを回してくれたからね」

源二と友香はお互いに指揮を執りながら戦線を維持していると友香は予想以上に源二が手ごわいため、不機嫌そうな表情をすると源二は苦笑いを浮かべ、

「それに工藤さんと姫路さんがいなくなったから、大部、指揮が執りやすくなったよ」

「そう……それは私が舐められてるって事かしら？」

「そんなつもりはないよ。俺と坂本の予想じゃ、今日は女子は連携なんて取れないと思ってたんだけどね。それをまとめてる小山さんは充分に評価できると思うよ」

「その言葉、そっくり返しても良いかな？　私も平賀くんがここまで指揮を執れるとは思ってなかったわ。最初のＦクラスとの試召戦争の件もあったしね……清水さんの事と言い、美紀の事と言い苦労してるわね」

「……そう言って貰えると嬉しいよ」

源二は瑞希と愛子が抜けた事も戦線を維持できている原因だと言うと友香は源二にとって自分の評価はあまり高くないと思ったようで

ムッとしたような表情をするが源二は友香の様子に慌てて友香の事を舐めていないと言うと友香は源二の様子にくすりと笑った後、明久を探し回っている美波と美紀を見てため息を吐くと源二は力なく笑う。

「まぁ、でも、本陣も動いてるし、ここで私達が立ち往生しているわけにはいかないのよね。だから、蹴散らせて貰うわ」

「悪いね。そうも行かないよ。俺達もここで」

『『『『男子全軍、撤退！！』』』』

友香は目つきを鋭くして男子生徒に攻めかかろうとするが男子生徒から撤退の声を響き、

「悪いね。勝負はお預けみたいだよ。このまま戦線を維持しながらゆっくりと後退！！　点数の減りの激しい人間から下がるんだ！！」

「えっ！？　ちょ、ちょっと、平賀くん！？　女子軍、攻めるわよ！！」

源二はその声に直ぐに男子生徒をまとめて撤退を始め出し、友香は直ぐに退き際の指示を出す源二の様子に慌てて攻撃の指示を出すと女子軍は前のめりになり、

「……まったく、俺をここに配置しやがって、俺は最高得点を取るんだぞ」

「きょ、恭二！？」

女子軍が飛び出したところに教室のドアが開き、恭二が指揮する伏兵部隊が女子軍に襲い掛かり、女子軍は完全に浮足立ってしまう。

「良し。ここまでも作戦通りだね。男子軍、反転、攻めるぞ！！」

「坂本の作戦通りと言うのが面白くないけどな」

源二は恭二の女子軍への攻撃に撤退させていた男子軍を攻撃に転じさせると恭二は雄二の立てた作戦が上手く行っている事に少しムッとするがそれでもこの状況では点数を獲得するのには必要な状況のため、女子生徒達を蹴散らして行き、

「伏兵？　みんな、落ち着いて！！　１人で戦うと危ないわ。必ず、２人１組になって後ろからの攻撃を警戒して！！」

「完全に混乱しているなかじゃ、流石の小山さんも指揮が執れないね」

「……忘れてたわ。伏兵や奇襲、坂本くん達Ｆクラスが得意な作戦よね。それを堅実な指揮を執る平賀くんがするなんて」

友香は必死に女子生徒に指示を出すが浮足立っている女子生徒達は友香の指揮に反応する事が出来ず、友香は悔しそうに舌打ちをすると、

「それでも指揮官を失えば、戦況は変わるわ！！　Ｃクラス代表小山友香がＤクラス……」

「待って。小山さん、冷静になって、このままじゃ思うつぼだよ！！」

「工藤さん？」

「ここで小山さんが討たれたらここは持たないよ。今は指示を出す事に集中して！！」

「わ、わかったわ。工藤さんは……」

友香は戦況を立て直すのに源二を倒す事だと思ったようで源二に試召戦争を挑もうとするが優子の指示により戻ってきた愛子が友香を止め、友香は大きく深呼吸をして自分を落ち着かせると指示を再開させ、

「援軍がきたね。本陣も上手く下がれたようだし、ここまでかな？」

「あぁ。お前ら、退くぞ。欲は出すなよ」

「根本もな」

「わかってる」

主戦力である愛子が戻ってきた事と友香の冷静な指示が戻った事により、１部の女子生徒がまとまり始め、その状況を見た源二と恭二の２人は引き時と判断したようで男子生徒を撤退させて行く。

# 第３６５問

初日の男女間試召戦争も男子軍が鮮やかな撤退を行う事でその後は小競り合い程度しか起きず、終了時間になったメンバーは各自習室に集まり始め、

「やられたわ。まさか、平賀くんの方に伏兵を置いているなんて、逆を突かれたわ」

「そう言うなよ。こっちも大部、被害が出たんだから、嫌になるぜ。明らかに戦力的には男子の方が不利なんだぞ」

「……まったくなのじゃ。Ｆクラスはワシと雄二、ムッツリーニ、今日は参加しなかった明久の４人だけなのじゃ」

「それはＦクラスの人達が誰も指示を聞かないからじゃないかな？」

「そ、そうですね」

攻めきれなかった優子は雄二を見て悔しそうな表情をするが男子軍も相当の被害が出たようであり、雄二は苦笑いを浮かべ、秀吉は戦術も聞かずに走りだしたＦクラスの男子生徒にため息を吐くと瑞希と愛子は欲望のままに走り、美春に蹴散らされていたＦクラス男子の事を思い出して苦笑いを浮かべる。

「あ、あの。前田くん、初日の獲得点数ってどうなってますか？」

「そうよ。誰が最高得点でウチとどれだけ放れてるか教えなさいよ」

「ん。まだ、計算中だ。それより……」

「何？　前田くん、どうかしたの？」

瑞希と美波はノートパソコンで生徒の獲得した点数を計算している理音に今の状況を聞くと理音は眉間にしわを寄せており、愛子は何かあったのかと理音の顔を覗き込み、

「愛子、近いわよ」

「そう？」

優子は不機嫌そうな表情で愛子を理音から引き離し、愛子は優子の行動にニヤニヤと笑うと、

「……点数の再分配をしないといけないな」

「ん？　どう言う事だ？」

理音は優子と愛子の事など気にする事なく、試召戦争を見ていて各人に与えた点数が妥当ではないと言い、雄二は首を傾げる。

「……いや、個人戦がメインになると思っていたんだが、各クラスの代表格や瑞希、工藤が生徒達をしっかりとまとめた事により、それなりに面白い戦いになっただろ。各部隊が連携をとって戦っている。それなら、各部隊の部隊長の点数は上げても良いんじゃないかと思ってな」

「確かに平賀や小山はクラスでの点数じゃもったいないよな」

「うん。平賀くん、強敵だったよ」

理音は上手く指揮をしていた人間達がクラスでの分けられた点数では釣り合わないと言うと雄二と愛子は理音の意見に頷き、

「……後は指示を聞けないような奴の点数は下げた方が良いとも思った」

「……そうね。暴走するのは勝手だけどそのせいで他の女子に被害が出るのはどうかと思うわね。そのせいで小山さんや中林さんがどれだけ苦労したか」

「……反省する」

「……わかってるわよ。ごめんなさい」

理音は点数を上げる人間の他に様子を見ていて点数を下げたい人間もいると言うと優子は指揮をしていた立場から翔子と美波の暴走を責めるように言うと2人は反省しているようで小さな声で謝り、

「……今日、上手く指揮をしていた各部隊長は10点に格上げして、大将を15点に変更するか？　そうした方が面白そうだしな」

「待て。待て。確かにそうなると面白いのかも知れないけどな。さすがに無茶だ。結局はこの設備内でしかできないだろ。作戦なんて限られてくるんだ」

「そうだな……となると、この設備……なく、この……を使って……」

理音は部隊長の点数を上昇させようとするが雄二は点数を上げても設備内では作戦が限られてくるから点数をあまりあげられても困ると言うと理音は何かを考え付いたのかぶつぶつと言い始め、

「何か、リオのスイッチが入ったね」

「おかしな事にならなければ良いんだけど」

明久は理音の様子に苦笑いを浮かべると優子はため息を吐く。

# 第３６５問（後書き）

どうも、作者と

理音「主人公だ」

初日の結果は保留状態で理音は何かを企んでいる。

理音「まあ、察しの良い読者は気付くだろうな。ここはバスと電車を乗り継いでくるそれなりに広い場所なわけだしな」

そうですね。しかし、こんな感じの強化合宿は大丈夫なんですか？

理音「まあ、お前に原作に沿うと言う高度な事は出来ないしな」

そうですね。原作どおり書くのはつまらないんですよ。それにそっちは大手さんがやってるから中堅は同じ舞台で戦っても勝てないので裏道を探して細々と書いて行こうと思ってます。

理音「確かにまともに原作を沿っているのがない」

伐がまだ原作に沿ってるかな？　と言った感じです。理音は清涼祭はそれなりに沿おうと思いましたが次々とフラグを折ると言う暴挙。（爆笑）

理音「もともと、清涼祭、オリジナル、完結の予定だったしな」

そういう事です。だから、これもどこまで続くかわからないし、面白いネタが考え付いたら入れて行こうと思ってます。最高得点者あ

りの男女間の試召戦争もそのためです。

理音「しかし、この最高得点者はどうするつもりだ？」

どうしましょうか？　現状で考えてるのは久保君に取らせて番外編の『秘めた想いと倒錯娘』に丸投げ。

理音「……それも暴挙だな」

今更ですしね。まあ、今のところは考え中と言うかこういう感じです。

アンケート『最高得点者は誰？』

男女間の試召戦争の最高得点者をアンケートで決めようと思っています。

選択肢

1．姫路瑞希
2．島田美波
3．霧島翔子
4．本宮葵
5．木下優子
6．吉井明久
7．坂本雄二
8．弓永深月
9．久保利光

そして

10．玉野美紀（爆笑）

理音「……いや、アキは笑えないだろ」

気にしない方向で、最後に

１１．その他（名前）

となります。現状で言えば第３７５問まででお願いします。

まあ、現状で考えている話では
瑞希は明久をデートに誘う。
美波は明久に疑ったことを許して欲しいと言う。
翔子は雄二に婚約届けに判を押すように迫る。
葵は秀吉に名前で呼んでほしいと言う。
優子は理音とデートかな？
男性陣は考えてません。投票されると思ってないし。
深月と利光はまあ、番外編で考えてるのを少しいじるだけです。
美紀は明久が被害を受ける。

こんな感じです。

理音「作者が迷ってるから意見が欲しいみたいだ。よろしく頼む」

お願いします。

# 第３６６問

「しかし、今日は平賀がいてくれて助かったぜ」

「俺だってそうだよ。坂本がいなかったら、今日の試召戦争はどうなってたか」

ＤＥＦの入浴時間になり、大浴場に移動すると源二もちょうど入浴にきたようで雄二と源二は今日の試召戦争でお互いに認める事があったようで話し始めるなか、

「……康太、覗く方法を考えていないだろうな？」

「……そんな事はしていない」

理音は隣の女子の大浴場との壁をジッと見ている康太に気づき、おかしな行動は止めろと言い、康太が首を振った時、

『行くぞ！！　この先は楽園だ！！』

『男なら立ち上がれ！！』

数名のＦクラス男子生徒が叫び声をあげて桶を壁際に積み上げて行き、

「……お兄ちゃん」

「……わかってる」

怜生は覗きは悪い事だから理音に止めるように言うと理音は桶を1つ手に持ち、

「ナイスコントロール」

『うぎゃ！？』

積み上げていた桶の山に当てると桶は崩れて行き、覗きを行おうとしていた男子生徒は浴槽に落下していき大きな水しぶきを上げ、明久は自分も参加しようと考えていたのかその様子に顔を引きつらせる。

「アキ、前田、あんた達、また、おかしな事をしてないわよね？」

「み、美波！？」

男子の大浴場から聞こえる騒ぎに女子の大浴場から呆れたような美波の声が聞こえると明久は驚きの声を上げると、

「吉井くん、理音、ボクや瑞希、代表もいるよ」

「ん？　そっちも風呂か」

「は、はい。流石に今日はいっぱい汗をかいてしまいましたから」

「前田くん、男子達が覗きをしないようにしっかり見張っててよ」

瑞希、深月、宏美も一緒のようであり、理音に男子生徒が覗きに回らないようにしっかりと見張って欲しいと言う声が聞こえるが、

「……悪いな。逆効果だ」

「え？　前田くん、どう言う事？」

理音はため息を吐き、宏美が疑問の声を上げた時、

「行くぞ。野郎ども！！　ここで立ち上がらなければ男じゃない！！　あの壁の向うには楽園があるんだ！！」

『島田や弓永のぺったんこは俺のものだ！！』

『俺は姫路のあのたわわな果実が』

『あれで、ウチの代表だって捨てたもんじゃねえぞ』

壁の向こう側から聞こえる女子生徒達の声に明久が吠えるとFクラスの男子生徒だけではなくほとんどの男子生徒が呼応するように叫び声を上げ、

「ちょ、ちょっと、前田くん！？　どうにかしてよ！？」

「……頭が痛いな」

「……まったくだね」

壁越しに聞こえる男子の咆哮に宏美は身の危険を感じているようで理音にどうにかするように言うと男子生徒の様子に冷静な雄二と源二は呆れたようなため息を吐き、

「雄二、平賀、これであのバカどもを狙い撃て」

「水鉄砲？　こんなものをどこから出したんだい？」

「……平賀、それに関しては気にしたら負けだ」

理音は雄二と源二の２人にどこから出したかわからないが水鉄砲を渡し、源二は首を傾げるが雄二は気にするなと言う。

「これで、撃ったってたいした威力はないよね？　牽制にもならないよ」

「……発射」

「ごばっ！？」

源二は理音から渡された水鉄砲では覗きに参加している男子生徒を止められないと言おうとした時、怜生が明久を水鉄砲で撃つと明久は勢いよく吹っ飛んで行き大浴場の壁に打ち付けられて白目をむき、

「……へ？」

「……威力はもう少し上げても良いか？」

「いや、充分だろ」

源二は何があったかわからないようで顔を引きつらせるが理音は威力が弱いと思ったようで首を傾げる隣りで雄二は苦笑いを浮かべるなか、

『『『すいませんでした！？　命だけは勘弁してください！？』』』

』

明久が水鉄砲に吹き飛ばされる姿を見た男子生徒達はその場で土下座をして命乞いをする。

## 第３６６問（後書き）

どうも、作者と

理音「主人公だ」

最高得点者のアンケートですがその他は考えられない場合は排除します。

理音「さすがにイベントの起きていない人間の話を書くのは無理があるからな」

そうですね。ですので、ウケ狙いのその他はおやめください。

## 第３６７問

「……前田と怜生くんって、本当におかしなところでそっくりよね」

「あはは」

「……なんだ？」

理音と怜生は風呂上りに廊下に設置してある自動販売機の前で腰に手を当ててフルーツ牛乳を飲んでいるとその姿を見た美波はため息を吐き瑞希は苦笑いを浮かべ、理音は意味がわからずに首を傾げると、

「……どうして、２人並んで腰に手を当ててフルーツ牛乳なのよ」

「ん？　風呂の後はこの形でフルーツ牛乳かコーヒー牛乳を飲むのが正式な作法と聞いていたんだが」

「えーと、それも、前に言ってた教授さんの教えですか？」

美波は大きく肩を落とすが理音は意味が理解できないようであり、理音の様子に瑞希は理音の留学時代の教授の教えかと聞き、

「あぁ。そうだが」

「や、やっぱり、そうなんですね」

理音が頷くと瑞希は顔を引きつらせて笑う。

「それで、どうかしたか？」

「え？　良いの？」

「……別にたかが牛乳の1本や2本だろ。ん？　島田、言っておくぞ。牛乳で大きくなると言うのに科学的な根拠はないからな」

「……あんた、殺すわ」

理音は瑞希と美波が声をかけてきた事に何か用があるのかと聞くと2人に牛乳代を渡しながらも美波に向かい余計な事を言い、美波は理音に向かい拳を振りまわすが理音を打ち抜く事ができるわけもなく、

「島田、せっかく、風呂に入ったのにわざわざ、汗をかく必要があるのか？」

「……ええ、失敗したわ。せっかく、清瀬が美春を押さえてくれたおかげでゆっくりとお風呂に入れたのに」

美波は捕らえきれない理音の動きに悔しそうに理音の顔を見上げる。

「ん？　清水はどうしたんだ？」

「あ、あの。どうしてか、西村先生が清水さんは個室風呂に入るようにと言って、それで見張りに清瀬くんを使うと」

「そうか。清瀬も大変だな」

理音は美春が大浴場で入浴をしなかった事に首を傾げると西村教諭

が先手を取ったようであり、理音は美春に迷惑をかけられ続けている大樹の顔を思い浮かべて苦笑いを浮かべると、

「それで、何のようだ？　俺はこれからシステムの調整をしないといけないんだが」

「そうなの？　自習に付き合って貰おうと思ったのに」

理音はこれから召喚システムの調整を行うと言うと美波は最高得点を狙っているようで理音に勉強に付き合って欲しいと言うが、

「悪いな。俺はこれから徹夜になると思うから付き合えない」

「て、徹夜ですか？」

「あぁ。勉強なら自習室が開いているからそこでやれ。優子やアキもそこにいる」

理音はそんな時間はないと言うと瑞希と美波に優子達が自習室にいると教える。

「明久くんが優子ちゃんと一緒にですか？」

「……そう」

「……お前ら、何度も言わせるな。おかしな嫉妬心を出すならせめて告白くらいしてからにしろ。だいたい、人の彼女を勝手に相手にするな」

瑞希と美波は明久が優子と一緒だと言う事で2人は背後からおかし

な嫉妬心を燃え上がらせると理音はため息を吐き、

「雄二や秀吉、だいたい、いつものメンバーも一緒だ。他の人間も自習をしてる人間もいれば寝てる人間もいるからな。騒ぐなよ……おい、人の話を聞くと言う事を覚えろ」

理音はいつものメンバーが集まっていると言うが2人は話を聞かずに駆け出そうとし、理音は2人の首をつかむと、

「……仕方ない。システムの調整をしながら自習に付き合うか。怜生、お前はどうする？」

「……お姉ちゃんのところに行ってます」

「そうか。ちゃんとアキ達の言う事を聞いていろよ」

「……はい」

怜生についてくるかと聞くが怜生は首を振ると明久や優子のいる自習室に行くと言い駆け出して行き、理音は怜生の背中を見送った後、

「さてと。お前らはこっちだ」

「は、放して！？　ウチはアキにお仕置きをしないといけないのよ！？」

「前田くん、放してください。このままじゃ、明久くんが坂本くんや木下くんに」

「……頼むから、おかしな事を言わないでくれ」

おかしな事を叫ぶ、瑞希と美波を引きずりながら理音はシステム管理に使用している部屋に歩いて行く。

## 第367問（後書き）

どうも、作者と

理音「主人公だ」

理音、フルーツ牛乳派。（苦笑）

理音「いや、コーヒー牛乳派なんだが、怜生もいたからな」

……別々でよくないですか？

理音「まあ、気にするな」

理音は徹夜なのに爆弾を2つ、抱えました。このまま無事に時間はすぎるんでしょうか？

理音「どうだろうな」

アンケート

1票。瑞希、優子、美紀ですね。無理な意見はすいませんが外させて貰いました。

## 第３６８問

「……姫路さん、またなの？」

「あはは。どうして、島田さんに引っ張られるかな？」

怜生から理音が瑞希と美波を引きずって行った事を聞いた優子は瑞希の行動が美波に引っ張られた事に大きく肩を落とすと愛子は怜生に抱きつきながら苦笑いを浮かべる。

「……怜生くんくらいの年なら、工藤さんが抱きしめてくれるんだよね。リオに頼めばあれくらいの子供になれる薬とか……いや、リオの場合、副作用が怖いよね？」

「……まぁ、姫路だからな。明久、おかしな事を考えるな。仮にそんな薬があったとしたら、元に戻るかどうかも怪しいけどな。後、がきんちょにおかしな敵意を見せると理音から攻撃が飛んでくるぞ」

「そ、そんな事を考えているわけないじゃないか！？　ボ、ボクは怜生くんが工藤さんに抱きつかれて羨ましいなんて思ってないよ！！」

「……明久、それは白状してるのとかわらんのじゃ」

明久は愛子の腕の中にいる怜生の姿に何かおかしな事を始めると雄二は明久の言葉に呆れたように言うと明久は慌てながら雄二の言葉を否定するがまったく否定できておらず、秀吉は大きなため息を吐き、

「あれ？　吉井くんもぼくに抱きついて欲しいのかな？」

「もちろん！！」

「……愛子、吉井くん、バカな事を言ってないで真面目にしなさいよ。だいたい、吉井くん、あたしは吉井くんが島田さんや清水さん、玉野さんから逃げきるために勉強を教えてるんだからね。やる気がないなら、あたしは帰るわよ」

愛子は明久を挑発するように笑い、明久はその挑発に簡単に乗ると優子は明久が真面目に勉強をしないなら自分は部屋に戻ると言うと、

「そうだよね。前田くんが姫路さんや島田さんと一緒にいるのが気になるよね？」

「ち、違うわよ！？　あ、あたしは別にそんな事は」

愛子はニヤニヤと笑いながら優子をからかうと優子は顔を真っ赤にする。

「……理音は獣だからな」

「……雄二、なぜ、お主は煽るのじゃ？　だいたい、何を企んでいるかはわからぬのじゃが徹夜まですると言っておったのじゃ。かなり、忙しいはずじゃ。ムッツリーニも明久も慌てて見に行こうとするでない」

「……そんな事実はない」

「ひ、秀吉、ボ、ボクがそんな事をするわけがないじゃないか！？」

雄二は最近は優子にもからかわれているため、仕返しをしたいと思ったようでわざとらしいくらいの真剣な表情で言うと秀吉は呆れたような表情をしながら自習室を出て行こうとしている明久と康太を止めるが、

「……本当なら、手伝えれば良いんだけど理音の言う事は難しくてわからない。徹夜は身体に良くない」

「うん。徹夜は良くないけど、さすがに何も手伝えないよね。行くと邪魔になっちゃうだろうし」

男性陣の会話を気にする事なく、翔子は理音の健康を心配すると愛子も翔子の意見に賛成のようであり、大きく頷いた後、

「まぁ、前田くんを癒すのは優子の役目だからぼく達が口を出す事じゃ無いよね？」

「……優子、ちゃんと理音の疲れをとってあげて」

「個室風呂で汗を流してあげるとかしてあげたら良いよ。ぼくと代表が怜生くんと遊んでるから」

「……愛子、それはとっても良い意見。怜生くん」

愛子は優子をからかって遊びたいようでニヤニヤと笑うが翔子は本気で愛子の意見に賛成のようであり、怜生を呼び寄せると、

「そんな事はしないわ！！　愛子も代表もおかしな事を言わないで！！」

優子は顔を真っ赤にして愛子と翔子を怒鳴りつける。

# 第３６９問

「……それじゃあ、ウチと瑞希は帰るわね」

「あぁ」

「あ、あの、前田くん」

瑞希と美波はしばらく、理音に勉強を見ていて貰ったのだが消灯時間が近くなってきたため、美波は部屋に戻ろうとするが瑞希は理音に何か聞きたい事があるようで理音の名前を呼び、

「瑞希？　帰らないの？」

「美波ちゃん、ごめんなさい。ちょっと、前田くんに聞きたい事があるんです」

「それって、ウチがいない方が良い？」

美波は瑞希に部屋に戻らないのかと聞くと瑞希は何かを決意したような真剣な表情をしており、美波は瑞希の様子に遠慮がちに聞き返す。

「そ、そうですね。で、できれば」

「そう？　わかったわ。先に帰ってるわ……だけど、前田、あんまり、瑞希に肩入れしないでよ。最近のあんたの態度、不公平よ！！

この間のバイトもあんたんちにみんなで集まった時だってウチは仲間はずれだったし、今日だってのアキと瑞希を２人で勉強させた

りしてるのもそうよ！！」

瑞希は美波には聞かせない話の方が良いと思ったようで美波に遠慮して欲しいと言うと美波は瑞希が明久の事を理音に聞こうとしていると勝手に思い込んでおり、理音を威嚇するように言うと、

「……不公平だ？　悪いな。正直、自分に非があるのに謝りもしないような人間の味方をするほど俺も物好きではない」

「ウ、ウチだって悪いとは思ってるわよ。だ、だけど、アキだって」

「今回に限ってはあいつに非はないな。責任転嫁をするのは勝手だが以前にも言ったが自分の都合のいい事ばかり、アキに押し付けているとそのうち愛想を尽かされるぞ」

「う……」

理音は美波に威嚇される意味がわからないと言い切り、美波は優子や愛子にも同じ事を言われているせいか冷静にはなっているようでバツが悪そうな表情をするが、

「な、何で、ウ、ウチだけが前田に怒られないとイケないのよ。瑞希や霧島さんだって同じ行動をしたでしょ？」

「……瑞希はあの後、謝っただろ。それに霧島と雄二は合意でのそう言うプレイだ」

「あ、あの。前田くん、それもちょっと違う気が」

美波は理音に言いくるめられるのが悔しいと思ったようで反論をし

ようとするが理音は美波に何度も言わせるなと言いたげに言うと瑞希は今は冷静なようで引き合いに出される雄二と翔子の話も少し違うのではないかと苦笑いを浮かべる。

「少なくとも付き合ってもいないクラスメートを疑い。暴力での自白の強要、普通に考えれば傷害や脅迫と言われてもなんの反論もできないだろ。それも今回は学園の事情で伏せさせては貰ったがアキや雄二、康太が犯人ではない事が証明されているんだ。それなのに島田、お前は謝ってもいないだろ。お前の性格だ。時間が経てば経つほど謝りにくくなるぞ……ん？　よく考えると夫婦間でもＤＶの問題も出てくるな。霧島にどこまでがプレイかはっきりさせておくように言っておかないとダメだな」

「えーと、前田くん、暴力はいけない気がするんですけど」

「ん？　瑞希、何を言っている。少なくとも俺はお前や島田にそれを指摘される覚えはまったくない」

「あう。そ、そうですよね」

理音は今回は明らかに悪いのは美波達だと言うと美波に早めに明久に謝るように言うがその途中で翔子の雄二へのお仕置きをどこまで夫婦間の合意の問題かはっきりさせる必要性があると言うと瑞希は苦笑いを浮かべたまま、理音の言葉を否定しようとするが理音は当然、瑞希の言葉を斬り捨て瑞希は反省しているようで肩を落とすと、

「島田、お前がこれからもその態度を続けるかどうかはお前の考え方だから俺はきつく言うつもりはないが冷静に分析させて貰えばそのままなら、俺は瑞希を応援する形になると思うぞ」

「な、何でよ！？」

「……そこで驚く理由がわからん。お前と瑞希の今日の態度だけでも充分に肩入れする理由になるだろ」

理音は瑞希の様子など気にする事なく美波に態度を改めなければ、自分は中立の立場から瑞希を応援する形に変えると言うと美波は驚きの声を上げるが理音は美波が声を上げる理由がわからないと言い切り、

「せめて、中立を守っていて欲しいなら、早く、アキ達に疑って悪かったと謝ってこい」

「わ、わかってるわよ！！　行ってくるわよ！！」

理音は美波に再度、明久達に謝るように言うと美波は理音に宣言するように吠えてドアを勢いよく開けて部屋から出て行き、

「……だから、どうして、頭に血を上らせるんだ？」

「え、えーと、前田くんの言い方にも少し問題があるような気がしますけど」

理音は美波が出て行ったドアを見てため息を吐くと瑞希は理音と美波の様子に苦笑いを浮かべる。

# 第３７０問

「それで、何だ？」

「あ、あの……」

「……まぁ、『あいつ』の事か？」

「……はい」

理音は瑞希に何を聞きたいのかと聞くと瑞希は少し言い出しにくそうな表情をし、理音は彼女の様子に表情を変える事なく『もう１人の理音』の事かと言うと瑞希は小さな声で頷き、

「あ、あの。あの人は消えたんじゃないんですか？」

「いや。逆に聞きたいんだが、瑞希、お前はどうしてあいつが消えていたと判断したんだ？」

「そ、それは……前田くんは昔よりは表情はなくなってますけど、昔みたいに吉井くんと一緒に笑っていて、２人の周りにはみんなが集まっていて」

昨日、見たもう１人の理音の存在が嘘だと願うように理音に聞き、理音は瑞希の様子になぜその答えに行きついたのかと聞き返すと瑞希はただ、理音と明久の様子が昔の２人のように映っていたからだと言う。

「……確証もなく、推測で自分勝手に結果を決めつけるのはどうか

と思うんだがな」

「で、ですけど、前田くんが戻ってきた後に、あの人は今まで現れなかったわけですし」

「お前の前には現れてないだけだろう。あの時の明久と雄二の反応を見ただろ」

「そ、それじゃあ、明久くんも坂本くんも知っているんですか！？」

理音は瑞希の勝手な思い込みで決めつけるなと言うと明久と雄二はもう1人の理音と会っている事を告げると瑞希の顔は真っ青になって行くが、

「……瑞希、アキは忘れている。あの日、遭った事、あいつが生まれた日の事を……バカの自己防衛本能？　……いや、才能だな。辛い事、嘘だと信じたい事を記憶の片隅に抑え込み、拒絶し、閉じ込め、鍵をかける。それがたまに酷く羨ましく感じる。俺にはできない事だから……あいつは俺に会うまで俺の事もとうさんの事も忘れていたんだからな」

「そ、それだけ、明久くんにとって、前田くんは大切で掛け替えのない友達だったんです……私は2人が凄く羨ましく思えます」

「そうだな。そうだと思いたいが……だとしても若干、納得がいかないんだ。アキは昔から俺の予想の斜め上をはるかに超えて行くからな。いくら、何でも4年ぶりにあった時にアキが昔、俺を女だと思っていたと言う新事実を聞かされる羽目になるとは思わなかったしな」

「えーと？」

理音は瑞希に安心するように言うと少しだけ羨ましいと思いながらも再会してしばらくしても自分や父親の事を完全に忘れていた明久の態度を思い出したようで大きく肩を落とすと瑞希は理音の様子に苦笑いを浮かべ、

「話を戻すか。瑞希、聞いてくれ。お前が恐れているあいつは俺だ。あの日からずっと2人で1人なんだ。それはこれから先も変わらない」

「で、ですけど、それを」

「……あの日から2人で乗り越えてきた。時間はあった。あいつと2人でたくさんの話をした。とうさんの事、アキの事、お前や本宮の事、ここに帰ってきてからは怜生や優子、他の奴らの事も……2人で導き出した答えだ。俺とあいつは2人で前田理音なんだ。これは変えられない、変える事のできない事実だ」

理音は瑞希に心配ないと言うが瑞希の心配は拭いきれるわけもなく、理音はそんな瑞希の頭を優しく撫でると柔らかい笑みを浮かべる。

「信じても良いんですよね？」

「……俺は科学者だからな。その言葉に頷く事はできないが、知ってるか？　俺は約束は割と守る。それがアキととうさんとの約束の1つだから」

「それなら、私と約束してください。私と2人の前田くんとの約束。明久くんを怜生くんを優子ちゃんを悲しませないでください」

瑞希は理音の言葉を信じて良いのかと聞くと理音は少しだけ考えるような素振りを見せた後、理音はくすりと笑い約束を守ると言うと瑞希は真剣な表情で理音に1つの約束をして欲しいと言い、

「わかった。その代わり、俺にも1つ条件があるんだが、良いか？」

「はい。何ですか？」

「これから、料理をする時は薬品を使わないでくれ」

理音は瑞希と約束する代わりに1つの条件として瑞希に料理の時に薬品を使わないように言うが、

「はい？　私、前田くんにMP（みずきぽいんと）の事を話した事ってありましたっけ？」

「……いや、無いが科学者から言わせて貰う。薬品を口に入れないのは基本であり、最も重要なルールだからな」

「で、でも、甘味を増やしたりとか、他にも期待される事が」

「その分、毒性が上がると言う事に気づけ」

瑞希は理音に自分が隠し味に薬品を使っている事を話した記憶がないため、首を傾げると理音は瑞希に薬品の取扱いルールについての話すが瑞希はなかなか納得せず、2人の口論は西村教諭が見回りにくるまで2時間ほど続いた。

# 第３７１問

「……おはよう」

「……お兄ちゃん？」

朝食の時間になり、理音が食堂に現れるＦクラスが集まっている席に座るがやはり徹夜の影響なのか理音は眠そうに欠伸をすると怜生は心配そうに理音を呼び、

「あぁ。大丈夫だ……」

「前田、本当に大丈夫なの？　瑞希もあの後、遅くまであんたと話をしてたから寝不足見たいだし」

「だ、大丈夫ですよ。私は眠くないれすよ。美波ちゃん」

「あ、あの。姫路さん、美波はあっちなんだけど」

「あ、明久くん！？　ご、ごめんなさい！？」

理音は大丈夫だとは言うがやはり眠そうであり、美波は理音だけではなく理音と遅くまで話をしていた瑞希も寝不足だと言うと瑞希も理音と同じように眠くないとは言っているが確実に寝ボケており、

「姫路と話？　何の話だ？」

「あぁ……化学の話だ」

「家庭科の話です」

雄二は2人の様子に苦笑いを浮かべながら、2人で何の話をしていたのかと聞くと理音は『化学』と答え、瑞希は『家庭科』と答えるため、

「何？　2教科も質問してたの？　それは時間がかかるわね」

「……理音、お前、言ったのか？」

「そ、それで、姫路はどんな反応をしたのじゃ？」

「リ、リオ、姫路さんを傷つけるように言ってないよね？」

美波は意味がわからずに首を傾げるが明久、雄二、秀吉は2人の答えから瑞希の料理に付いて理音が話をしたのだと気づき、瑞希に聞こえないように理音に結果を聞く。

「……道は交わらなかった」

「……姫路瑞希、恐るべし」

理音は首を横に振ると康太の一言に続くように明久、雄二、秀吉の顔には絶望の色が現れ、

「おい。理音、お前の専攻は薬学だろ。専門分野だろ。どうにかしろよ」

「そ、そうだよ」

明久と雄二は瑞希の猛毒をどうにかできるのは理音しかいないと言うが、

「……最初にお前らが逃げた結果だろ」

「ちょ、ちょっと、前田、ストップ！！」

理音は自分に責任を押し付けるなと言うとコーヒーに砂糖を入れようとするが美波は理音を止めると、

「ん？　どうした？」

「それ、塩よ。砂糖はこっち」

「……あぁ。すまない」

理音はコーヒーに入れようとしていたのは塩だったようで美波は理音に砂糖を渡し
理音は素直に礼を言う。

「リオ、ちょっと、本当に大丈夫なの？」

「ん？　あぁ。久しぶりの徹夜だったからな。頭が付いてこないだけだ。昔はこんな事はなかったんだが……年は取りたくないな」

「……まだ、そこまで、年はとってないのじゃ」

明久は理音の様子に大丈夫かと改めて聞くと理音は久しぶりの徹夜で感覚がつかめないようであり、秀吉は理音の言葉にため息を吐くと、

「まぁ。怜生と暮らすようになってからはずいぶんと規則正しい生活になったからな。昔は徹夜の2週間や3週間……」

「……いや、それは確実に死ぬぞ」

「ちょっと、リオ、コーヒー、零れるよ!?」

「ん？　悪い」

理音は怜生と暮らす間に自分の生活時間も変わってきたと苦笑いを浮かべるがその間にも身体は睡眠時間を求め始め、

「前田、召喚システムの調整って終わらないの？」

「……いや、1時間くらいはどうにかなりそうだから、少し寝てくる」

「あぁ。そうしろ」

美波は理音の様子にため息を吐くと理音は立ち上がり、ふらふらとした足取りで部屋に向かって行く。

# 第372問

「……姉上、理音を襲うでないぞ。怜生くんもいるのじゃからな」

「お、襲わないわよ！？」

朝食を済ませると優子は理音が部屋で寝ている事を聞き、部屋に顔を出すと怜生が理音と一緒に入れなかったのは不安だったようで理音の布団に潜り込み、理音と怜生は並んで小さな寝息を立てており、秀吉はそんな理音の寝顔をまじまじと覗きこんでいる姉の姿に何かを感じたようで先手を打つと優子は声を上げて秀吉の言葉を否定するが、

「……説得力がない」

「ホントだね」

優子に付いてきた翔子と愛子は優子の様子に首を振り、

「……1枚５００円。１５種類。怜生くんがセットのは1枚１０００円、こっちは3種類」

「土屋くん、全種類、お願い」

「……俺達が言うのもなんだが、木下姉も毒されてるな」

康太はいつ写したかわからないが理音の寝顔の写真を取り出すと優子は即座に返事をし、雄二は優子と康太の様子にため息を吐く。

「あ、あのさ。ムッツリーニ、木下さんはリオの彼女なんだし、５００円は高くない？」

「……サービス価格、理音の無防備な寝顔は１枚１５００円だす人間もいる。量も少ないからレア商品」

「……前田、実は人気あるのね」

明久は優子と康太の様子に苦笑いを浮かべるが康太はそれでも優子にはサービスをしていると言い、美波は康太から聞かされた事実に苦笑いを浮かべると、

「……そうなると理音を狙う人間も多い？」

「確かにあるかも知れないね。略奪愛は燃える子もいるだろうし」

翔子は女子生徒達の中には最高得点をとって理音とのデートを望む人間も出てくると言い、愛子は大きく頷き、

「そう……」

「あ、姉上、お、落ち着くのじゃ。理音は姉上の彼氏なのじゃ、わざわざ、理音を狙ってくるような人間は」

「秀吉、何を言ってるの。あたしは落ち着いているわ」

翔子と愛子の言葉で優子の背中から一気に黒い物が溢れ出し、秀吉は優子に落ち着くように言うが背中から溢れ出す黒い物はさらに純度を上げて行く。

「……おい。明久、お前、余計な事を言ったな。どうしてくれるんだよ？」

「で、でも、木下さんがトップなら他に被害は起きないよね？　これはこれで良いんじゃないかな？」

明久と雄二は目の前の優子の様子に顔を引きつらせながらも、おかしな人間が最高得点を取るよりは安全ではないかと言うが、

「ちょ、ちょっと、優子まで参戦する気？　それなら、ウチも頑張らないと」

「そ、そうですね。優子ちゃんは、強敵です」

「……私も負けてられない。今日も頑張る」

愛子を抜かした女性陣は優子のおかしなやる気にあてられ始め、

「……今日も、荒れるな」

「……うむ。しかし、その原因を作った本人は気持良さそうに寝ておるのう」

「と言うか、姫路さんと話をしてなければ、もう少しゆっくり眠れていたんだろうね」

雄二はこの後の試召戦争がひどく不安になってきたようで大きく肩を落とし、明久と秀吉は周りの騒ぎなど気にする事なく気持良さそうに寝息を立てている理音の顔を見て苦笑いを浮かべ、

「……」

「……ムッツリーニくん、それはどうかと思うよ。前田くん、疲れてるんだし」

康太は周りの状況など気にする事なく、理音と怜生の寝顔に商品価値を見出しているためシャッターを切り、愛子は康太の様子に大きなため息を吐く。

# 第373問

「理音、調整は終わったのか？」

「ん。あぁ、大丈夫だとは思うがな。本当はもっといろいろとやってみたいんだがな。予算が足りない。しかし、来年の強化合宿には使えるようにしたいな」

「……前田くん、何をするつもりなの？」

「と言うか、この男女間の試召戦争を毎年恒例にでもするつもり？」

自習が始まり、昼食も近くなった時間に理音が自習室に戻ってきたため、雄二は理音に調整の進行状況を確認すると理音は他にも改善案があるが予算が足りなかったと言うと理音の言葉に明久と愛子は大きく肩を落とすが、

「別に男女間にする必要はないが何か使いようがあるだろ。人間ってのは欲望に忠実だからな」

「特にうちの学年はな」

「学年と言うか、リオが言うにはうちの生徒だよね？」

理音は他にも何か考えがあるようで口元を緩ませると雄二は苦笑いを浮かべ、明久は昨日、理音が試召戦争を見ながら西村教諭と話をしていた内容を思い出してため息を吐くと、

『最高得点をとって、木下を……いや、俺の秀吉を』

『島田のぺったんこは俺のものだ』

『木下優子を前田から取り戻して秀吉を2人をこの俺のものに』

「あぁ。見ればわかるようにやる気になりすぎだろ」

「……なぜ、ワシは男扱いされんのじゃ」

理音は自習室内を見回して自分の欲望のためにおかしな集中力を出して自習を行っているFクラス生徒を見て眉間にしわを寄せると秀吉は聞こえてくる言葉におかしな悪寒がしているようで顔を青くする。

「……雄二、覚悟していて。私は雄二を倒して雄二を必ず手に入れる」

「翔子、ちょっと待て!?　その発言はおかしいぞ!!」

「……何の問題もない」

翔子はFクラスに当てられているのかおかしなやる気を維持したままであり、

「ん？　霧島にまで伝染したか？」

「代表と言うか……あれ」

「ん？　瑞希と島田は何となくわかるが優子もか？」

理音は翔子の様子に首を傾げると愛子は苦笑いを浮かべて、優子、瑞希、美波の3人を指差し、理音はその様子に首を傾げると、

「うん。なんか、やる気になっちゃってさ。何でだろうね？」

「ん？　工藤が言っている理由はよくわからんが」

愛子は優子がやる気を出している理由が理音だと知っているため、ニヤニヤと笑いながら理音に言うが理音はまったく意味が理解できないため、首を傾げながらも優子に近づき、

「真面目にやる気になっているなら、協力してやる」

「り、理音！？」

優子の隣まで歩くと彼女のすぐ横から顔を出して優子の自習しているノートを覗き込み、優子は突如、隣に出てきた理音の顔に驚きの声を上げる。

「ん？　どうかしたか？」

「ど、どうしたのよ？　ちょ、調整は終わったの？」

「あぁ。元々、徹夜をすれば終わるものだったんだがな。仮眠をしたから時間がかかっただけだ」

理音は優子の反応に驚きの声を声を上げると声を裏返しながら、理音が徹夜をしてまで調整していた召喚システムはどうなったかと聞くと理音は平然と答え、

「それで、何をやる気になってるかは知らんが、せっかくだ。少し付き合ってやる」

「い、良いの？　特別講義までまだ時間があるんだから、もう少し寝たらいいんじゃないの？」

「ん。気にするな。寝る以外にも疲れを癒す方法はある」

「う、うん。それじゃあ、お願い」

理音は優子の勉強を見てやると言うと優子は理音の身体を心配するが理音はくすりと笑い、優子のそばにいたいと言うと優子の顔は真っ赤に染まって行き、

「……うん。ああ言うところは海外生活の長い、前田くんの強みだね」

「う、うむ」

理音と優子の様子に愛子と秀吉は見ている方が恥ずかしくなってきたのか2人から視線を逸らす。

## 第３７３問（後書き）

どうも、作者です。

最高得点者アンケート締切間近ですが。

投票が少ないです。ご意見、お待ちしてます。

# 第374問

「……ずいぶんと派手にしたな？」

「ん？　たいした事はしてないぞ。うちでやった召喚システムのフィールド固定の応用だ。場所の範囲指定に多少時間はかかったけどな」

召喚戦争の時間になると理音は全生徒を宿舎の外に呼び出しており、雄二は理音がこの広い土地を使っての試召戦争になると理解したようで眉間にしわを寄せるが理音は気にする事はなく、

「説明は西村教諭にお願いしているから、ここにいても仕方ないぞ。戦域も広がったし、視界も広くなった。戦術もかなり試せるだろうしな。面白い物を見せてくれるんだろうな？」

「……いや、流石にこれは考えてなかったからな。平賀や清瀬と話をしないといけないだろ……後はついでに根本ともな」

理音は雄二を見てニヤリと笑うと雄二はいきなり押し付けられた難問にため息を吐くがその目はこれから起きる試召戦争を楽しみにしているようで輝きを増して行き、

「……その割にはずいぶんと楽しそうだな？」

「まあな。木下姉もやる気になってたから大変になるかも知れないが、今日はこっちには明久（バカ）がいるからな。戦術の幅は広がる」

「アキの操作性は遊軍に最適だからな。それより、雄二、どうして、

優子は無駄にやる気を出していたんだ？　あいつは別にやる気を出す必要がないだろ？」

理音は雄二の様子に小さくため息を吐くと雄二は明久を上手く使おうとしているようであり、理音も明久の特性を理解しているため頷くと理音は優子が急にやる気を出した理由をを聞く。

「ん？　あぁ、簡単に言えば、お前を守るためだ？」

「守る？　常識的な命令だけだぞ」

「いや、そうじゃなくてな。それでもいろいろと考える奴もいるだろ。木下姉からお前を奪おうとする奴とか」

雄二は優子がやる気になった理由を簡単に説明するが理音は意味がわからないと言いたげに首を傾げると雄二は苦笑いを浮かべるが、

「いや、意味がわからん。仮に俺を狙っている人間がいるとしても優子がいる俺がデートなりに付き合うのは常識的にあり得ないだろ」

「……お前、そう言うところは真面目なんだな」

理音はそれでも雄二の言う優子が心配している事がわからないと言うと雄二は理音の意外な言葉に小さく笑うと、

「それより、ここまでやるなら点数をいじってお前も参加しろよ。平均点くらいでもかなりの戦力になるんだ。はっきり言って、俺達は女子に比べると地力にかなり差があるんだぞ」

「それも考えたがそれだといまいち面白みに欠けるからな。それに

代わるものは用意してあるが今日、使うかは戦況を考えてだな」

雄二は理音に男子側で参加できないかと聞くが理音は他にも考えている事があるようであり、ノートパソコンのキーボードを叩く。

「これで調整は完成だ。西村先生、お願いします」

「うむ。坂本、お前もそろそろ戻れ。怜生くん、俺も仕事をしないといけないからここまでだ」

「……はい。ありがとうございました」

「……あぁ。それじゃあ、また、後でな。理音、がきんちょ」

理音は準備が終わった事を西村教諭に告げると西村教諭は理音の言葉に頷き、雄二は西村教諭の言葉に返事をするが西村教諭は怜生を肩車しており、このままでは流石に生徒に示しもつかないと思ったようで怜生を肩から下ろすと雄二は見てはいけないものを見たと思ったようで目をそらすと自分の持ち位置に戻って行き、

「よし、良いか。これから」

西村教諭はマイクを手に試召戦争開戦を告げようとするとその姿は理音が清涼祭の召喚大会で使った技術の流用なのか西村教諭の姿が空に映し出されており、

『何で、鉄人だよ！！』

『交代を要求する！！　鉄人みたいな汚い絵面ではなく。洋子先生を希望する！！』

その姿を見た男子生徒達が不満の声を上げ出し、

「貴様ら、話も聞けんのか！！」

「……試召戦争開戦します」

西村教諭は騒ぎはじめた男子生徒達に向かって行くと怜生が小さく頭を下げて試召戦争開始を宣言すると怜生の姿を見た女子生徒からは歓喜の声が上がる。

# 第３７５問

「……バカクラスが」

「……根本、すまぬのじゃ」

西村教諭を罵倒したＦクラスの男子生徒達は開戦前に補習室に連れて行かれ、いきなり戦力が低下した事に恭二は舌打ちをすると秀吉は申し訳なさそうに頭を下げ、

「まぁ、切り替えようよ。それに言い方は悪いけど作戦を無視して駆け出して行く人達はいなくなったわけだし、わずかな点数でも女子達にあげなくて済んだと考えようよ」

「バカなんだ。捨て駒くらいには役に立って貰わないといけなかっただろ」

「……まぁ、それで戦術の幅が広がる事は確かだね。囮ってゲームでも有効な手段だし」

源二は苦笑いを浮かべながら恭二に落ち着くように言うが恭二は腹の虫が治まらないようであり、明久は苦笑いを浮かべながら頷くと、

「おし、集まってるな。作戦会議を始めるぞ。時間は１０分しかないからな急げ」

「各部隊長は集まってくれ。吉井と木下、後は土屋も」

雄二と大樹が各部隊長の他に明久、秀吉、康太を呼ぶ。

「……結局、軍師の位置は坂本かよ。納得がいかねえな」

「根本、そんな事を言ってる時間はないんだ。早くしてくれ。だいたい、お前の得意な手段は使えないんだからな。今日の作戦に関してはお前も納得しただろ？」

「わかってる。今日はこれしかねえよ……まあ、相手の配置次第で使えるかもわかんねえけどな」

恭二は雄二が自分より上だと認めたくないため、不機嫌そうに言うと雄二は苦笑いを浮かべて恭二の作戦は使えないと言うと恭二も雄二の言いたい事を理解しているようで不機嫌そうに返事をすると、

「理音が戦場を広げたからな。昨日は前だけの女子に当たれば良かったけど今日はそうもいかない。側面からの攻撃にも対処しないといけないと言う事を各自、理解してくれ。後は秀吉と明久は今日は俺と一緒に清瀬の警護だ。ムッツリーニは根本や平賀と前線に配置」

「雄二も清瀬の警護なのか？」

「雄二が清瀬くんのそばにいると霧島さんが突っ込んできて、清瀬くんが危なくないかな？」

雄二は明久、秀吉、康太の３人に指示を出し、明久と秀吉は雄二が大樹の警護に当たるのは危険だと言うが、

「今日は良いんだよ。ムッツリーニ、今日は最初から飛ばして行くぞ。昨日の借りも返さないといけないしな」

「……当然、借りは返す」

「土屋、やる気だな」

雄二は考えがあるようでニヤリと笑うと康太は昨日、優子、瑞希、愛子の3人に得意教科である保健体育で後れをとってしまった借りを返すつもりのようでやる気は充分であり、大樹はそんな康太の様子に苦笑いを浮かべ、

「今日も2時間、全力で行きますか？」

「……清瀬、大将がそんなに緩くて良いのかい？」

大樹は彼なりに各部隊長を鼓舞するが源二は大樹のあまり気合いが乗っていないような鼓舞の仕方にため息を吐く。

「いや、俺、形だけの大将だしな。戦術や戦略は根本や坂本、指示は平賀、他の部隊長達にも敵うものってないしな」

「……大将がそれで勝てるのかよ」

しかし、大樹は自分を過大評価しておらず、困ったように頭をかくと恭二は不機嫌そうに舌打ちをすると、

「と言う事で、俺が討たれないようにみんなが頑張ってくれると嬉しいかな」

「まあ、こんな事を言っても清瀬が頼りになるのは昨日でみな理解しておるのじゃ」

「まぁ、そう言う事だ。それに女子の大将も成績じゃない強さを持ってるんだ。うちの大将も負けちゃいねえよ」

大樹はくすりと笑い仲間を信じると言うと雄二と秀吉は昨日の大樹の活躍を思い出せと言うと昨日の美春を返討ちにし、大将でありながら前線でも指示も行っていた大樹の力は認めているようで大きく頷き、

「各自、配置に付け！！」

雄二はその様子にニヤリと笑うと男子生徒達に持ち場に着くように言う。

# 第376問

「あいつは何をしてるのよ！！」

「ま、まぁ、優子も落ち着いてよ」

「そ、そうです。せっかく、前田くんが頑張って変更した設定なんですから怒っちゃダメです」

優子はまさか男女間の試召戦争を外でやる事になるとは全く思っていなかったようで拳を握り締めながら、この設定に変えた自分の彼氏である理音への怒りを叫ぶとそんな優子の姿に瑞希と愛子は苦笑いを浮かべながら優子の怒りを鎮めようとすると、

「一先ずは状況を見極めようか？　広くなったし、視界を遮るような障害物もないって事は見渡す限りがフィールドって事でしょ。戦域は拡大するよね」

「そうね。男子の指揮官としては恭二、坂本くんに平賀くん。そして、清瀬くん。失敗したわ。まさか、清瀬くんがこんなに指示とかを的確に出せる人だったなんて」

深月は大将らしく状況をまとめ始め、友香は昨日、男子軍を上手くまとめていた男子生徒４人の名前を挙げながらも同じクラスの大樹の能力に昨日、初めて気づいたようで少し悔しそうな表情をし、

「ヒロは自分から何かをするより、他人のフォローの方が得意ですわ。まったく、もう少し自分でやる気を出せば良いのに」

「……それは清水さんが言って良いセリフじゃないと思うわ」

「……そうね。確実に清瀬くんがあんな正確になったのは清水さんのせいだろうし」

美春はまだ落ち着いているようで大樹の性格について言うと宏美と友香は大樹がきっと美春と一緒に育った事であの性格になってしまったと思ったようで少しだけ大樹を哀れむように言う。

「まぁ、彼氏持ちの彼氏自慢は置いといて」

「ヒロは彼氏なんかじゃありませんわ！！」

「はいはい。それじゃあ、旦那様ね」

「あんな告白をされてたら、反論するだけ無駄だよ」

深月は美春をからかうように言うと美春は納得がいかなさそうな表情で良い返すが深月と愛子は美春の反論を聞き入れるわけもなく、

「そ、そんな事はありませんわ。それを証明するために美春は今日、お姉さまにヒロの首を差し上げますわ！！　そして、お姉さまへの美春の愛を証明して見せますわ！！」

「い、いらないかな？」

「どうせ、また返討ちになるだろうしね。今日はどんな愛の告白が見れるのかな？」

「そうだ。前田くんにキチンと音を拾っておいて貰わないと」

美春は大樹との関係を生温かい感じで応援されている事に反抗するように声を上げて大樹を倒すと言うが美波は美春の愛は重たいからいらないと答え深月と愛子はニヤニヤと笑いながら美春に追い打ちをかけ、

「音を拾っておく？」

「うん。『別に裏切った記憶はないんだけどな。俺が好きなのは美春だけだし』、『いやいや、俺が美春を好きな事に嘘偽りはないから』。こんな事を好きな人から言われるとやっぱりドキドキしちゃうよね」

美春は愛子の言葉に首を傾げると愛子は懐からボイスレコーダーを取り出して昨日、美春が大樹に討ち取られるきっかけになった言葉を再生し、

「な、何で、工藤さんがそれを！？　あの場所にいなかったはずなのに！？」

「試召戦争の様子って録画されてるんだけど、それを前田くんからもらちゃった♪」

「あの豚野郎は何をしてるんですか！？」

美春は声を上げると愛子は理音から貰ったと笑い、美春の顔は理音への怒りと昨日の大樹の告白を思い出したようで顔を真っ赤にして叫ぶと、

「はいはい。遊んでないでそろそろ準備するわよ。戦域が広がった

わけだし、各部隊、しっかりと連携を取る事。弓永さんも遊んでないでそろそろしきって」

「はいはい。それじゃあ、そろそろ真面目にやりましょうか。霧島さん、坂本くんはどんな作戦でくると思う？」

「……わからない。雄二だけで作戦を決めるなら、戦域が広くなった事でどこかに目を行くように戦況を動かして少数精鋭で奇襲だと思う。粘り強い指揮を執れる平賀や清瀬がいるから戦況を維持する事でできたスキを突いてくる。これが1番濃厚。だけど……きっと、今日は1人では作戦を立てていないと思う。だから、読み切れない」

「そう？　一先ずは受け身になっちゃうけど仕方ないかな。みんな、小山さんの言う通り、連携に気を付けて戦おう」

友香は深月に女子軍をまとめように言うと深月は翔子に雄二がどんな作戦を立ててくるかと聞くが翔子は首を横に振り、深月は翔子の意見に少し考えたような素振りをするが良い作戦が思い浮かぶ事はなく苦笑いを浮かべる。

## 第376問（後書き）

どうも、作者と

理音「主人公だ」

アンケートですが
1位　優子3票
2位　瑞希、葵、美紀1票となりました。

ヒロイン強し？

理音「3票じゃ変わらないだろ」

まあ、そうですね。と言うか、優子は最高得点より面白い演出を考え吐いちゃったりしますんで最高得点は優子に取らせますが話はいじります。（悪笑）

理音「アンケートの意味がないな」

まあ、総数5票ですしね。ぶっちゃけいじけてます。

理音「子供か」

まあ、この後、どうなるか楽しみにしていただけると幸いです。

# 第377問

「見事に広がってるな」

「昨日の平賀と根本の奇襲も上手く行ったからな。警戒してくれてるんだろ」

男子軍本陣で雄二と大樹は広がったフィールドを全てカバーするように横長に布陣している女子軍を見てニヤリと笑うと、

「雄二、本当に良いのか？　この作戦は無謀な気がするのじゃが」

「うん。これは囲まれたら終わりだよ。清瀬くんが討ち取られちゃうと暴動が起きる可能性もあるんだよ」

「大丈夫だ。見ての通り、女子軍は横の連携を重要視しているからな」

「まぁ、今日は昨日、暴走した美春も霧島さんも最初は大人しくしてるだろうし、2人に火が点く前に仕掛けるのは悪い手じゃないと思うぞ」

本陣に参加している明久と秀吉は今から男子軍が仕掛ける作戦は無謀だと思っているようであり、雄二に思いとどまるように言うが雄二だけでなく、大樹もなぜか雄二の作戦に乗り気であり、

「……昨日もそうだったのじゃが、なぜ、清瀬はそんなに楽しそうなのじゃ？　明久も言った通り、お主が討ち取られると終わりなのじゃぞ」

「いや、せっかくだし、楽しまないと損だろ。それにこう言うピリピリする空気って嫌いじゃないんだよな」

秀吉は昨日も大樹のそばにいたせいか大樹の様子に苦笑いを浮かべると大樹は楽しそうに笑い、

「……理音が清瀬がプレッシャーに強いとは言ってたけどここまでとは思ってもいなかったけどな……恐るべきは清水父娘か？」

「……うん。あのプレッシャーは受けないとわからないよ。雄二も受けてみるべきだよ。きっと霧島さんとは違う何かがあるから」

「……いや、遠慮する。俺は翔子だけで充分だ」

雄二は理音がプールで大樹はプレシャーに強いと言っていた事を思い出して苦笑いを浮かべると明久は美春から受ける禍々しい殺意にも似たプレッシャーの怖さを雄二にも体験してみれば良いと言うが雄二は流石に遠慮したいと顔を引きつらせる。

「しかし、本当に上手く行くのか？　女子軍はワシらと違って壁は厚いのじゃ、大将の弓永を始め、部隊長も姉上や小山、中林、工藤に姫路と上手く指揮を執っている上にムッツリーニを保健体育で退けるくらいに連携も上手いときておる。何より、雄二、お主の予想では霧島が今日はまともに戦うと言うではないか、それに本宮も強敵なのじゃ」

「確かに本宮さんは強敵だよな。昨日はずいぶんと本陣を削られたし」

秀吉はもう1度、雄二に作戦を行うかと確認すると女子軍の人材の豊富さにため息を吐き、大樹は昨日、本陣同士でぶつかった時の葵の活躍を思い出したようで苦笑いを浮かべるが、

「大丈夫だ。目的は翔子や本宮、他の奴らの首じゃねえんだ。俺達が狙うのは女子軍大将の弓永の首だけだからな。明日の士気を高めるためにも今日は絶対に倒さないといけないんだよ。例え、どれだけの犠牲を出してもな。秀吉、準備だ。そろそろ開始だ」

「うむ……あぁ、あぁ。どうだ？　似てるか？」

「へぇ、前に1度、やられたけど本当に凄いな」

「えーと、あの時は悪かったな」

「うん。ごめん」

「まぁ、気にするな。過ぎた事だしな。それでウチの代表も少し冷静になる事を覚えたんだ。元は取れたよ」

雄二はニヤリと笑うと今日は全力で深月を倒すと言い、秀吉は雄二の指示なのか発声練習を始めると秀吉の声は大樹の声、そっくりになり、大樹は感心したように言うと明久と雄二は大樹と知り合った事でCクラスをAクラスにけしかけた事に多少なりに罪悪感が出てきたようで気まずそうに謝り、大樹は2人の様子に苦笑いを浮かべた時、獅子試召戦争を開始する鐘が響き、

「行くぞ。清瀬、秀吉」

「「あぁ。男子全軍！！　女子本陣を目指して突撃！！　狙うは女

子軍総大将弓永深月の首、ただ1つ！！」」

試召戦争が開始される時間になった瞬間、大樹と秀吉は声を合せて男子全軍に突撃指示を出し、その声に応えて男子全軍は目の前に配置されていた女子軍を無視して女子軍本陣の前に配置されていた女子生徒達に襲い掛かる。

# 第378問

「……Fクラス、土屋康太が保健体育勝負で挑む。試獣召喚（サモン）」

「良いか。土屋を中心に一気に攻めろ！！　止まった奴は置いて行く！！　止まってしまったら、脇からの攻撃に対処するんだ！！　後列を本陣まで連れて行くぞ！！」

『ちょ、ちょっと、いきなり、土屋くん！？』

前線に配置していた康太、恭二、源二の3人は突撃の指示が出た瞬間に康太の保健体育を1番槍に女子軍に襲い掛かり、この攻撃は予想していなかったようでこの場を任せられていた女子生徒の指揮官は難なく康太に討ち取られ、男子軍の勢いは増して行く。

「……まさか。いきなり中央突破？　でも、坂本くんの事だから他を呼び寄せるとそこを狙ってくる可能性が」

「優子、落ち着いてよ。相手はムッツリーニくんなんだよね。ぼくが相手をしてくるよ」

「……えぇ。愛子、お願い。任せるわ。でも、無理はしないで土屋くんに保健体育で戦わないでタイミングを狙えば」

「ゴメンね。優子、それはちょっと無理かな。昨日は女子軍のために我慢したんだし、今日は代表もいるから、少しだけぼくにもわがままを言わせてよ」

女子本陣の前に陣取っていた女子軍が康太を中心にした男子軍に蹂

躙されて行く様子に優子は戦域を広げ過ぎた事が間違いだと思ったようだが、昨日の伏兵や翔子が危惧していた奇襲も考えられるため、次の手を打てないでいると愛子は康太を抑えるために援護に行くと言うと優子は愛子に康太相手に保健体育で戦わないように言うが愛子は苦笑いを浮かべながら駈け出して行ってしまい、

「ちょっと、愛子！？」

「……優子、今日は愛子の好きにさせて、その分、昨日、迷惑をかけたから私が頑張る」

「代表、でも、わざわざ、土屋くん相手に戦う必要はないですよ。坂本くんが何をしてくるかわからないのに愛子を失うわけにはいかないんですから」

「……愛子が土屋に負けたら、雄二は私が絶対に止める」

優子は愛子を追いかけて行こうとするが翔子が優子を止めると優子は康太と保健体育で戦う必要はないとため息を吐くが翔子は愛子を信じて欲しいと言う。

「……仕方ないわね。えーと、左側は小山さんの部隊、右側は中林さんの部隊を残して両脇から押しつぶすように攻撃を仕掛けて、弓永さん、本陣を少し下げましょう。代表、本宮さん、弓永さんの警護をお願い」

「……了解」

「はい。弓永さん」

優子は翔子の言葉をむげにはできなかったようでもう1度、ため息を吐くと翔子と葵に深月を任せて本陣を下げるように言い、

「姫路さん、島田さんはあたしに付いてきて本陣の前に1枚、壁を作りましょう」

「はい」

「わかったわ」

自分自身は瑞希と美波とともに中央突破を防ぐ、防波堤になると言うと瑞希と美波は大きく頷き、

「……後はこれは使いたくなかったんだけど。清水さん、玉野さん、今日、吉井くんは男子本陣にいるらしいわよ」

「……あの。豚野郎。今日は逃げずにいるわけですね」

「アキちゃんが本陣にいるの？」

優子はあまり使いたくない策ではあるが男子軍を混乱させるためには野性を解放させるべきだと思ったようで明久をエサに2匹の獣を呼び覚ますと美春は背中に真っ黒な殺意をまとい始め、対照的に美紀の眼は輝きを増し始め、2人は本能のままに男子本陣の中にいる明久を目指して突撃して行く。

「えーと、優子ちゃん？」

「……今は仕方ないのよ。良いわね。男子軍を本陣まで攻め込ませてはダメよ。守りきるわよ！！」

瑞希は優子の執った作戦に苦笑いを浮かべると優子は雄二に先手を取られた事に苦虫を噛み潰したような表情しながらも女子軍に指示を出すと前に進んで行き、

「いやぁ。頼りになる軍師がいるとボクは何もしなくて良いから楽でいいね」

「……優子は頼りになる」

優子の姿を後ろから見て深月と翔子はくすりと笑う。

# 第３７９問

「ムッツリーニくん、待った♪」

「……工藤愛子、今日は１人か？」

「そうだよ。警戒なんかしなくても良いよ」

「……そうか」

康太は先陣を切り、女子本陣に向かっているところで優子達から別れた愛子が立ちふさがり、康太は昨日の不意打ちも件もあるためか一瞬、周囲を警戒するが愛子はくすりと笑って警戒する必要はないと言い、康太は愛子相手では勢いだけで抜けきれないと理解しているようで真っ直ぐと愛子を見据える。

「土屋！！　何をやってるんだ！！」

「……根本、平賀、先に行け。こいつは他の奴らとは違う」

「根本、行くぞ。最初に言った通りだ。土屋でも例外じゃない」

康太とともに先陣を切っていた恭二は康太が止まった事に苛立っているようで康太に向かい叫ぶが康太は恭二と源二に先に行けと言うと源二は恭二の腕を引っ張って行き、

「ムッツリーニくん、雌雄を決する時だね？」

「……雌雄？　漢字にすると雄と雌」

「あ、あれ？　ムッツリーニくん？　ちょ、ちょっと？　そ、そっか、いつもこの状況だと吉井くんか前田くんが処置してるんだっけ？　あはは、ちょっと困ったかな？」

愛子は康太を挑発するように笑うと康太は愛子の言葉に反応したようで大量の鼻血を吹きだし、頭から床に倒れ込み、愛子はいきなりの事で驚きの声を上げるとこの状況の康太の処置をしているのが理音や明久だと気づいて鼻血まみれで倒れている康太をどうしたら良いのかわからないようで顔を引きつらせると、

「……」

「ムッツリーニくん、大丈夫？」

「……何の問題もない」

康太は鼻血を流しながらも何事もなかったかのように立ち上がる。

「問題ないって言うけど、酷い鼻血だよ」

「……ただの寝不足」

「寝不足は寝不足でムッツリーニくんの場合は何かありそうな気がするんだよね」

愛子は一先ず、康太が立ちあがった事に安心したようではあるが康太の体調を心配するように聞くと康太の言い訳はおかしく、愛子は康太の返答に苦笑いを浮かべると、

「それじゃあ、しゆ……決着を付けようか？　ムッツリーニくん」

「……来い。工藤愛子」

愛子は康太との決着を付ける事を楽しみにしているようで真っ直ぐに康太を見据えて言うと康太も愛子を見返すとお互いに仕掛けるタイミングを見計らっているのかピリピリとした空気が流れるが康太は鼻血を流したままであり、

「……悪いな。ドクターストップだ。しかし、康太の場合は鼻の中の毛細血管を焼いても無駄だよな？」

「……愛ちゃん、このままだとこうたお兄ちゃん、死んじゃいます」

「前田くんに怜生くん？　ちょ、ちょっと、怜生くん、泣かないで！？　ま、前田くん、ど、どうしたら良いの！？」

その２人の空気をぶち壊すように理音が２人の間に割って入り、怜生は康太の身体を心配しているようで泣きだしそうな表情で愛子に言うと愛子は怜生の様子に慌てだし、理音に助けを求め、

「……怜生、康太は大丈夫だから、泣くな。悪いな。康太」

「……仕方ない。俺も怜生くんを泣かせるのは本意じゃない」

「怜生、ここは危ないから出るぞ」

「ま、待って。ぼくも行くよ」

理音は怜生に泣くなと言うと康太はこのままでは怜生が泣きやまな

いと判断したようで理音の指示に従うと頷き、理音は康太と怜生を両脇に抱えると何事もなかったかのように出て行き、愛子は慌てて3人の後を追いかけて行く。

## 第３８０問

「だけど、どうして中央突破なのかな？」

「ん？　何か引っかかるのか？」

理音は屋外に設置しているテントに康太を運ぶと数名の生徒が試召戦争で転んだりもしているようでちょっとした休憩場所になっており、理音は康太を始めとした生徒達の治療をしていると愛子は女子本陣を目指して真っ直ぐに向かって行く男子軍の考えがわからないようで首を傾げる。

「だって、男子っててだでさえ、久保くんとか不参加の生徒もいるし、さっき、Ｆクラスの男子もほとんどが西村先生に連れて行かれたでしょ。圧倒的に人数で不利なんだから、もっと、何かなかったのかな？　って」

「ん。別におかしな策じゃないぞ。と言うか、今の男子軍が取れる手段で最善の手段だと思うが」

「そうなの？　どうしてなの？」

愛子は男子軍の突撃が無謀だと言うが理音は男子軍の作戦は間違っていないと言うと愛子は理音に説明して欲しいと言うと、

「ん。別に説明しても良いんだが、工藤や康太を含めて、ここにいる奴らは一応は補習室送りになったわけでもないだろ。ケガの治療を終えたら試召戦争に戻れるわけだしな」

「そうなると流石に不味いよね？」

「普通はな……しかし」

『俺達の事なら気にするな。むしろ、聞かせろ』

「何か説明をしないといけない空気だね」

理音はこの場にいる生徒達は試召戦争に戻る資格があるため、決着がつくまでは話せないと言うがすでにここにいる生徒は乱戦になっている戦場に戻る気はないようで愛子の言葉に同調する。

「そうか。まずは工藤が言った通り、男子軍は戦力的に不利だ。しかし、戦域が拡大した事で女子軍は広く陣取ったわけだ。その分、広く守れるが厚みがなくなった。１点に集中すれば瞬間的には兵力が増える。康太を先頭に保健体育で女子本陣の前に陣取る部隊をつぶせば女子軍は動揺するだろうしな」

「でもさ。優子もいるし、今日は代表もいるんだよ。他にも中央突破なんて簡単にできるわけがないよ。足止めされたら挟まれて終わりでしょ。代表を倒せる生徒って男子じゃ。久保くんかムッツリーニくんくらいだし」

理音の説明でも愛子は男子軍が女子軍を倒す事はできないと言うと、

「工藤、勘違いするな。女子の大将は霧島じゃない。深月だ」

「それくらい知ってるよ。でも、その前の代表や葵、優子や姫路さん、抜けられるとは思えないんだけど」

「工藤、なぜ、優子や瑞希を倒す必要がある？　必要なのは清瀬が討たれる前に誰か1人でもDクラス以上の生徒を深月に直接ぶつける事だ。最初に、そう言って襲いかかってきただろ」

「……あ、足止めできれば良いわけ？　で、でも」

理音は雄二が狙っているのは大将である深月だけだと言うと愛子は男子軍の被害の事を考えていない雄二の策に顔を引きつらせるが、

「雄二の事だ。指揮を執っているのが優子だと理解した上で仕掛けてきているだろうな。だから、深月までに行くまでに強力な女子生徒は囲んでしまえば良い。勝てはしなくても時間は稼げる。昨日の試召戦争で平賀は勝てなくても負けない指揮を執れる事がわかったしな」

「う。うん。確かに平賀くんの指揮する部隊は強いって」

「それにな。工藤、お前は霧島を倒せる可能性があるのは久保か康太だけと言ったがもう1枚、男子軍は強力なカードを持っているぞ」

「それって、誰？　他に目立った男の子っていたかな？」

「いるさ。とっておきの『バカ』がな」

理音は中央突破は本当の策まで持って行くための布石であると口元を緩ませるが愛子は理音が誰の事を言っているのかわからないようで首を傾げる。

# 第３８１問

「ヒロ、覚えていなさい！！　豚野郎ども明日こそ、明日こそは美春の手で八つ裂きにしてあげますわ！！」

「アキちゃん、アキちゃん！！　西村先生、放してください。アキちゃんがすぐそこにいるのに」

「だから、人殺しは犯罪だ」

「鉄人、早くその２人を補習室に連れて行っていくださ い」

男子本陣に襲い掛かった２人の人外を何とか討ち取り、明久は自分の身の安全が確保できた事に安心したようであり、大樹は美春の様子に苦笑いを浮かべていると、

「まさか、ここで清水と玉野を切ってくるか。木下姉、少しは頭が回るじゃないか。まぁ、それも無駄な策だけどな。明久、清瀬、止まっている時間はないぞ」

「……雄二、お主、悪い顔をしておるのう」

雄二は男子本陣の勢いを止めるために美春と美紀と言う札を切った事を評価はしているようではあるが策としては甘いと言いたげにニヤリと笑うと立ち止まるヒマはないと言い、秀吉は雄二の様子にため息を吐く。

「うん。わかっているよ」

「あぁ。男子本陣、進むぞ。立ち止まるな！！」

明久と大樹は大きく頷き、大樹は男子軍に改めて突撃指示を出し、

「行くぞ。この先には木下姉が立ちふさがっているはずだ。一気に抜けるぞ。今日は短期決戦にしないと明日の勝ち目がないんだからな」

「……姉上を簡単に抜けるのであろうか？」

「うん。きっと時間がかかるよ。後は姫路さんや霧島さんも」

雄二は美春と美紀を放ったのが優子の時間稼ぎだと理解しているようであり、自分達の作戦は時間をかけられないと言うが明久と秀吉は心配そうな表情をする。

「行くぞ。別に倒す必要はないんだ。俺達の目的は清瀬を弓永にぶつける事だ。大将同士の戦いでの決着。最高に盛り上がるだろ？」

「坂本って、結構、演出にこだわるよな」

雄二は優子達を倒す必要はないと言うと大樹は苦笑いを浮かべた時、

「ちょっと、逃げないで戦いなさいよ！？」

「良いかい。無理に倒す必要はない。俺達の目的はあの３人を足止めする事だ！！」

「良いか。連携を上手く取れ！！」

目の前には優子が率いている女子軍と源二、恭二が率いている男子軍の対決が見え、

「いたな。本陣、一気に抜けるぞ！！」

「清瀬くん？　待ちなさい。Ａクラス木下優子が」

「本陣をフィールドに引き込ませさせるな！！」

大樹は男子本陣を移動させると優子は大樹に気づき、大樹を召喚フィールドに引きずり込もうとするが恭二は直ぐに指示を出し、男子生徒が女子軍と男子本陣の間に割って入り、

「木下さん、君達の相手は俺達のはずだよ」

「平賀くん、そう。それなら、あなた達を倒して本陣に戻らせて貰うわ。姫路さん
島田さん、行くわよ！！　平賀くんと根本くんを倒すわよ」

「わかってるわ。アキ、待ちなさい！！」

「み、美波ちゃん、落ち着いて下さい！？」

源二は男子本陣に指一本触れさせないと言うと優子は頭に血が昇ってきているようで少し声を張り上げて瑞希と美波に指示を出すと２人は男子軍に遅いかかって行き、

「ど、どうしよう！？　な、何か、美波から殺意を感じるよ！？
き、清瀬くん、雄二、秀吉、早くここから離れよう！！」

「……島田が吉井を殺しに来る前に逃げるか？」

美波は何故か明久を倒す事を考えているようで優子の指示通りには動かず、明久は美波の殺意から逃げるように駆け出し、大樹は美波の様子に苦笑いを浮かべる。

# 第382問

「……雄二、ここは通さない」

「翔子、きたか。明久!!　行くぞ!!　秀吉、清瀬、お前らは一気に駆け抜けろ!!　起動(アウェイクン)!!」

「うむ」

「あぁ。任せるぞ」

男子本陣が優子達を抜けた時、本陣の先頭を切っていた男子生徒数名が一気に補習室送りにされ、男子生徒は向かってきた女子生徒を避けるように左右に動き、そこには深月を守る最後の砦なのか翔子と葵が立っており、雄二はここまでは計算通りだと言うと自分達の有利なフィールド展開をするために白金の腕輪を起動すると翔子と葵が展開していたフィールドは姿を消し、

「Fクラス吉井明久」

「同じく坂本雄二が」

「「Aクラス霧島翔子、Bクラス本宮葵に日本史勝負を挑む!!　試獣召喚(サモン)!!」」

2人は休む間もなく日本史のフィールドを展開すると、

「に、日本史ですか?」

「……葵、落ち着く。私がフォローする。２人で雄二と吉井を倒して深月を守りに行く」

「は、はい」

葵はあまり自信がないのか少し驚いたような表情をするが翔子は葵に落ち着くように言う。

「さてと、翔子、清瀬が弓永を倒すまで付き合って貰うぜ」

「……そうはいかない。雄二を倒してこれに判子を押して貰う」

「だ、だから、それは今回は関係ないって言ってるだろ！！　事ある毎に持ち出してくるんじゃねえよ！！」

雄二は深月の前に立つ２枚の強力な札を切らせた事に口元を緩ませるが翔子の手には婚姻届が握られており、雄二はそれを見て声をあげると、

「……大丈夫。私、信じてる。雄二の言葉を『今の俺にお前の隣に立つ資格はないと思っている。お前の隣を歩く自信がないんだ……だから、待っててくれないか？』。この言葉を私と雄二の２人のお父さんとお母さんに聞いて貰ったら、正式に許婚にしようって４人とも賛成してくれた」

「翔子をお前は何をしてるんだ！？」

翔子は以前に理音と秀吉の協力により再現した雄二の告白を自分と雄二の両親に聞いて貰ったと言うと話は雄二の知らないところで先に進んでおり、雄二が驚きの声を上げた時、

「死ね。ゴリラ！！」

「よ、吉井くん！？　い、いきなり、何をしているんですか！？　さ、坂本くんは味方なんじゃないですか？」

明久は雄二の顔面に向けて拳を向けると葵はいきなりの明久の行動に声を上げ、

「て、てめえ、明久、何をしやがる？」

「雄二、知ってるかい？　ボクは貴様の幸せが何より許せないんだ！！　総員、霧島さんをたぶらかせたあのゴリラを始末するんだ！！」

雄二は明久から攻撃が来るなどと思ってもいなかったようではあるがギリギリで明久の攻撃を交わすと明久を睨みつけるが明久は拳を握り締めて雄二を攻撃するように言うと、

「え？　ど、どう言う事ですか？」

「ちょ、ちょっと待て！？　これは何の冗談だ！？」

女子生徒にも翔子のファンがいたようで男子生徒だけではなく、女子生徒までが雄二に殺意のこもった言葉を向け始め、信じられない状況に葵は顔を引きつらせ、雄二はクラスメート達から向けられる殺意以上のものを感じたようで背中には大量の汗が流れだす。

「良いか。ボク達の目的は倒すべき相手は誰だ！！」

『坂本を殺せ！！』

『そうよ。私達の霧島さんに手を出す男には死を！！』

明久は雄二を殺すために生徒達をまとめ始め、その言葉に多くの賛成の声が上がり始め、

「ふ、ふざけるな！？」

「……待って。雄二」

「逃げたぞ。総員、進め！！」

雄二はこの状況に命の危険を感じたようで全力で逃げだし、翔子は雄二の後を追いかけて行くと明久からは雄二追撃の指示が出て雄二討伐隊は全力で雄二を追いかけて行き、

「あ、あの。これってどうしたら良いんでしょうか？」

1人取り残された葵は呆然と立ち尽くす。

# 第３８３問

「……えーと、前田くん？」

「……あれだな。バカはいつも俺の予想の斜め上を突き抜ける」

理音が試召戦争の様子を見るために設置している画面と周りから聞こえる雄二憎しの声を聞き、愛子は顔を引きつらせると理音はこれは流石に考えていなかったようで眉間にしわを寄せ、

「ど、どうなるのかな？」

「……」

「康太、お前はドクターストップだと言っているだろ」

「……ダメです」

愛子は頭を押さえてこの次の事を考え始めると康太も明久率いる雄二討伐隊に参加する気のようですっと立ち上がるが理音はため息を吐き、怜生は康太を行かせたくないようで彼の前に立ちはだかると、

「……良いか。怜生くん、男には何を犠牲にしても行かなければいけない時があるんだ」

「……でも」

「……何より、俺は明久もだが雄二の幸せは許せない」

康太は男には何を犠牲にしても良いと言い、怜生は康太の様子にどうして良いかわからないようであり、康太を止める事は出来なかったようで康太は真剣な表情で怜生の横をすり抜けて行こうとするがその理由は嫉妬であり、

「……良いわけあるか」

「……理音、汚いぞ」

「……ムッツリーニくん」

理音は呆れたようにため息を吐くと康太の背後に回り、怪しく毒々しい色をした液体の入った注射器を康太に突き刺すと康太は崩れ落ち、理音は康太を抱きかかえて簡易ベッドに康太を運んで行くと愛子は康太の行動にため息を吐くが理音と康太の様子に女子生徒からは黄色い声が上がる。

「それで、前田くん、あれ、どうしようか？」

「……知らんと言いたいところだが、このままだと優子達のところにぶつかって行くな。工藤、手伝うか？」

「仕方ないよね。手伝うよ。怜生くん、ちょっと待っててね」

「……はい」

愛子は苦笑いを浮かべたまま、理音に雄二討伐隊をどうするかと聞くと理音はあまり関わり合いたくないようではあるが雄二の逃げる先には優子、瑞希、美波の率いる女子軍と恭二、源二の率いる男子軍が戦っており、理音は呆れたようにため息を吐いて試召戦争のな

かに入って行くと言うと愛子は理音に付いて行くと言い、

「……行くか」

「おー♪」

理音が歩き始めると愛子だけではなく、理音に治療を受けていた生徒達にも雄二討伐隊の姿を快く思っていない人間もいるようで理音と愛子に続くように後を追いかけて行く。

「いい加減にしなさいよ!!　避けなさい!!　ウチはアキを倒すのよ!!」

「島田さん、だから、落ち着いて!?　そんな風に勝手に動くとまとまりが」

「み、美波ちゃん、落ち着いてください!?」

美波は雄二討伐隊の事など知らないため、ただ純粋に明久の命を狙っているがその行為は完全に方向性を間違っており、優子と瑞希は美波をフォローしながらも何とか女子生徒達の被害を最小限に抑えており、

「……木下さんも姫路さんも大変だね。何か、妙なシンパシーを感じるよ」

「平賀、おかしな事を言ってないで指揮を執れ。木下と姫路がいるおかげで男子(こっち)軍の被害は甚大なんだぞ!!」

源二は美波に引きずられている優子と瑞希に美春や美紀の暴走に巻

き込まれる自分と重ね合わせたようであり、優子をかわいそうなものでも見るように言うと恭二はそんな彼の様子に源二を怒鳴りつけ、

「わかってるよ。行くよ。彼女達も戻らせるわけに……な、何だ！？」

「え？　ちょ、ちょっと何？　何なのよ！？」

源二は苦笑いを浮かべた後に指示を出そうとした時に雄二を先頭にした集団が物凄い勢いで自分達に向かってきており、その様子に優子達は驚きの声をあげる。

## 第３８３問（後書き）

どうも、作者です。

もう1本、オリジナルファンタジー小説を書き始めました。『勇者の息子と魔王の娘？』と言う作品です。

コメディータッチかな？　と思います。

# 第３８４問

「……落ち着け」

「やっほー。優子、助けにきたよ♪」

優子、瑞希、美波が率いる女子軍と恭二、源二が率いる男子軍はともに押し寄せてくる雄二討伐部隊の登場で完全に浮足立っているなか、理音と愛子を先頭とした生徒達が現れる。

「り、理音、これは何なのよ！？」

「……気にするな。バカの暴走だ。優子、今からここの女子軍と男子軍を同盟させる。平賀、お前が指揮を執れ」

優子は現れた理音につかみかかるように聞くと理音は眉間にしわを寄せたまま、『バカの暴走』だと言うとその場にいた多くの生徒達は納得したようで苦笑いを浮かべるなか、理音はここの部隊を同盟させて源二に指揮をさせると言い始め、

「ま、待ってくれ。確かに今はあれをどうにかしないといけないのはわかるけど成績で考えれば、根本や木下さんが」

「……２人とも冷静に振る舞おうとするが頭に血が昇りやすいから無理だ」

源二は自分が指揮を執るできではないと言うが理音は源二が適任者だと言うと、昨日、今日の源二の指揮を見ているためか生徒達から反対の声が上がる事はないが、

「ま、待ってください。平賀くんが指揮を執るのはわかりした。でも、この状況でどうやって止めるんですか？」

「確かにそうだ。押さえつけれるわけがないぞ」

瑞希と恭二は勢いのまま駆け抜けてくる雄二討伐隊を物理的に抑えつけるのは無理だと言う。

「あぁ。俺達にはできない。だから、それはできる人間にやって貰う。総合教科で召喚フィールド起動」

「で、できる人間って、それに召喚フィールドを展開させてどうするつもりよ」

「決まってるだろ。強制召喚」

理音は口元を緩ませながら自分達には雄二討伐隊を物理的に抑える事はできないができる人間がいると言うと自分達と雄二討伐隊を召喚フィールドで囲み、『強制召喚』と言った瞬間に召喚フィールドに入った生徒達の召喚獣は無理やり召喚させられ、

「……なるほど、鉄人を使うわけか？」

「それが最善の手だ」

恭二は無理やり召喚させられた召喚獣を倒す事で雄二討伐隊に参加している生徒を鬼の補習に送る事を理解すると理音は表情を変える事なく頷くなか、

「ねえ、理音、どうして、今回も召喚獣の装備が変わってるの？」

「ホントだ。今日は杖にローブ？　魔法使い風だね」

理音の召喚獣は赤い宝石が付いた杖に白いローブ姿と言った魔法使い風であり、優子と愛子は召喚されるたびに装備の違う理音の召喚獣に苦笑いを浮かべ、

「ん？　今回は実験でやりたい事があってな」

「あれ？　点数もいつもの∞（インフェニティ）じゃないんだね」

理音は何か召喚システムで実験をしていたようであり、点数もＡクラスの平均点程度に抑えられており、

「ど、どうするのよ。人数を考えればあんたの点数が頼りだったのよ！！」

「……青筋を立てるな。それより、喜べ。今から、お前達は点数を稼ぎ放題だ。あいつらを狩り終えるまでに試召戦争に決着がつかない事を願うんだな。連結（リンク）、拘束（バインド）」

優子は理音の召喚獣で一気に決着を付けようと思っていたようだが、理音の点数が低い事に慌てるが理音の口元は何か企んでいるのか緩んだままであり、２つの言葉（ワード）を発すると理音の召喚獣の杖の先端に付いていた赤い宝石が強烈な光を放つ。

# 第３８５問

「ど、どう言う事だ!?　り、理音、お前、何をした!?」

「……動けない」

「何、召喚獣と操縦者を繋げて、召喚獣を拘束したから操縦者も動けなくなっただけだ」

直ぐ目の前まで迫っていた雄二は自分の身体が動かなくなった事に顔を引きつらせて理音に聞くと理音は平然としたまま、とんでもない事を言いだし、

「……おかしいわ。いくらなんでもこの状況はおかしいわ。いくら理音が天才で召喚システムをいじくりまわしておかしな事をやってるとしてもこの状況はあり得ないわ」

「ゆ、優子、そうかも知れないけど、ほら、実際に起きているわけだし」

「別にたいした事はしていない。観察処分者のプログラムの応用だ」

優子は目の前で起きている信じられない状況にぶつぶつと言い始めるが愛子はそんな優子の様子に苦笑いを浮かべて真実は真実として受け入れようと言うとこの状況を作り出した本人である理音は表情を変える事なく、観察処分者のプログラムの応用だと言った時、

「……理音、これが観察処分者のプログラムの応用って事はあれか？　ひょっとして」

「フィードバックなら付けたままだから、安心しろ」

「安心できるか!?　だいたい、俺は被害者だぞ。せめて、俺と翔子の拘束だけは解きやがれ!?」

雄二は理音の言葉に悪寒を感じたようで顔を引きつらせたまま、頭をよぎった最悪の状況を尋ねようとすると理音は観察処分者特有のフィードバックは付けたままだと言い、雄二はすぐに自分達を解放するように言うが、

「……雄二、私の事を心配してくれるなんて嬉しい」

「……今の霧島さんの一言で殺意が上がったね」

「……ほ、本当ですね」

翔子は雄二の言葉に頬を赤らめるとその言葉を聞いた雄二討伐隊がまとう殺意はもう1段階引き上げられ、瑞希と源二は大きなため息を吐くと、

「まぁ、拘束（バインド）は腕輪にしようとしている能力だからな。使用制限があるから、たいした時間は持たないから安心しろ。こっちの大勢を整えるための時間稼ぎだ。現に見ろ。俺の点数は勢いよく減っている」

「……やっぱり、その場所なんだね」

「……前田、お前は、この状況でどうしてそんなに冷静なんだ?」

理音は召喚獣を拘束しているのは腕輪用の能力だと言うと自分の召喚獣を見るように言うと理音の召喚獣はいつも通り、理音の頭の上に移動しており、愛子はその姿に苦笑いを浮かべるが理音の召喚獣の上に表示されている点数はすでにＤクラス程度まで減少している。

「あれ？　前田、仮にあんたを倒したら何点、入るの？」

「ん？　考えてもいなかったが１００点くらいやっても良いぞ。その代わり、死ぬ覚悟はしておけ」

美波は理音の召喚獣が誰かに倒された場合はどうなるのかと言うと理音はかなりの高得点をやっても良いと言うと理音の周りにいた味方達も理音の点数が減っている様子を見ているため、一瞬、勝てるのかと思ったようだが、理音が邪悪な笑みを浮かべる姿に自分達の命を優先したようであり、

「何だ。つまらんな」

「……つまらないじゃないわよ」

理音は周りの生徒達の反応に心底つまらなさそうに言うと優子は大きなため息を吐き、

「えーと、とりあえずは坂本と霧島さんはこっち側で良いのかな？」

「お、おう。こっちの方が安全なんだ。当然だろ」

「……妻は夫の指示に従うのだけ」

源二は理音の拘束（バインド）が解ける前に雄二と翔子の立ち位置を確認すると

雄二は直ぐに返事をし、翔子は雄二の指示に従うと言うと、

「……おい。坂本を差し出した方が簡単に収まるんじゃないのか？」

「で、ですけど、そう言うわけにもいきませんよ」

雄二討伐隊は雄二と翔子の様子に先ほど上がったばかりの殺意をもう1段階あげ、その姿に恭二は眉間にしわを寄せるが瑞希は苦笑いを浮かべてそんな事はできないと言う。

# 第386問

「リオ、みんな、雄二を渡すんだ。そうすれば、この場は平和的に治めよう」

「……と、言ってるが、どうする？」

「行くわけないだろ！！　だいたい、俺が何で、こいつらに殺されないといけないんだよ！！」

理音の拘束（バインド）が解けると雄二討伐隊の指揮をしている明久は素直に雄二を引き渡すように言うと理音は取りあえず、雄二に確認すると雄二は当然、声を上げ、

「明久くん、どうして、そこまで、坂本くんを目の敵にするんですか？」

「それは、霧島さんみたいな美人が雄二みたいなゴリラ！？　な、何、姫路さん、美波、ボ、ボクが何かした？」

「……そうですか。霧島さんみたいな人が明久くんはタイプなんですね」

「そうなんだ。アキ、死ぬ覚悟はできてるわね」

明久の様子に瑞希はどうして明久がそこまでやる気になっているかと聞くと明久は雄二と翔子では釣り合わないと言い、嫉妬の炎を燃やすがその言葉で瑞希と美波の背後には真っ黒な殺意をまとい始め、

「……どうして、吉井くんは気付かないのかな？」

「……アキにも問題があるがあの殺意が1番の問題だろ。嫉妬を超えた殺意を向けられればその人間が自分に好意を向けられているとは思わないだろ？」

「……確かにそうよね」

愛子は未だに瑞希と美波の気持ちに気付かない明久に苦笑いを浮かべると理音は明久にも問題があるが原因の一端は瑞希と美波にもあると言い、優子は理音の言葉に納得できるようで大きなため息を吐く。

「瑞希、島田、何度も言わせるな。お前らにその殺意を出す資格はない」

「ど、どうして、ですか！？」

「そうよ！！　ウチにはアキに思い知らさせる義務が」

「……ないと言ってるだろ」

理音は明久に襲い掛かりそうな瑞希と美波の首をつかむが2人は理音の行動に不満げな声を上げるが理音はそんな義務はないと言うと、

「この2人に任せるとアキが死ぬかも知れないからな。アキの相手は俺がするか」

「へ？　リオがボクの相手？」

「あぁ。不満か？　今の点数ならお前でも倒せるかも知れないぞ」

理音は自分が明久の相手をすると言い、明久の前に立つと明久は驚きの表情をするが理音の召喚獣はＦクラス程度まで減少しており、理音は明久を挑発するように笑う。

「この点数差で、ボクの操作技術ならいけるよね？　そうすれば……あんな事やこんな事も？」

「……前田、良いのか？　その点数差なら直ぐには倒せないだろ」

「問題ない。倒せないなら、倒せるまで殴り飛ばす」

明久は先ほどの理音を倒せば１００点と言う話を聞いていたようで理音を倒せば最高得点も夢ではないと考え、口元を緩ませておかしな妄想に入りだすと恭二は明久の操作性はそれなりに評価しているようであり、理音が負けると最高得点を取れる確率がかなり減るため、理音に考え直すように言うが理音は表情を変える事なく、明久をぶっ飛ばすと言うと、

「……宝石の赤は血の色って事かな？」

「……ありそうで怖いわ」

優子と愛子は理音なら明久の攻撃を受ける事なく、明久を倒す姿が思い浮かんだようで苦笑いを浮かべ、

「まぁ、これ以上時間をかけるのはもったいないな。平賀」

「あぁ。行くぞ！！」

理音は試召戦争が決着が付く前に雄二討伐隊を蹴散らすように言うと源二は攻撃の指示を出す。

# 第３８７問

「リオ、いくら、リオでもこの点数差じゃ、ボクには勝てないよ」

「何だ？　アキのくせに少し点数が上がったから、俺に勝てるとでも思っているのか、だいたい、操作が上手いのはお前だけじゃないぞ」

「ちょ、ちょっと、いきなり仕掛けてこないでよ！？」

明久は理音の前に立ち、自分が圧倒的有利な状況に自信があるようで口元を緩ませると理音はそんな明久の様子にくすりと笑った瞬間に理音の召喚獣は明久の召喚獣の前まで移動すると素早く杖を振り下ろし、明久の召喚獣がその一撃を木刀で受け止めると理音の召喚獣は後ろに飛び、明久の召喚獣と距離をとる。

「点数が上がって召喚獣の操作を蔑ろにしているかと思ったがまだ召喚獣の操作は覚えているみたいだな。脳容量がないからすでにデリートされていると思ったんだが」

「ちょっと、そこまで、ボクはバカじゃないよ！？　って、みんな、何で黙るのさ！？」

理音は小さく口元を緩ませて明久を小バカにすると明久は声をあげるがその瞬間にその場は凍り付き明久は涙目になり叫び、

「……まぁ、今まで、点数が低くてもどうにかなっていたのはお前以上に操作の上手い人間がいなかっただけだ」

「な、なんだと、確かに操作性は観察処分者の特権だけど、ボクだって痛い思いをして覚えたんだ！！　それを思い知らせてやる！！」

理音は明久の言葉に呆れたようにため息を吐くと明久は召喚獣の扱い方なら理音にも負けないと叫ぶ。

「面白い。やれるものなら、やってみろ。１撃でも当てる事ができたら１０点やる。１撃に対して１０点だ。悪い条件じゃないだろ？」

『前田に１撃を当てれば１０点だ！！　行け！！』

理音は明久の様子に邪悪な笑みを浮かべて、１発当てるたびに１０点をやると言った瞬間にＦクラス男子数名が一斉に理音に襲い掛かるが、

「……まったく、関係ない人間が邪魔をするな」

「あ、あの。リオさん、今、何を」

理音の召喚獣は素早く動くと自分に向けられた攻撃に全てカウンターで攻撃を仕掛けて行き、理音の召喚獣の杖についている宝石がキレイに襲いかかった召喚獣の顔面に吸い込まれて行くように召喚獣を殴りつけ、理音に攻撃を受けた召喚獣は勢いよく召喚者ごと吹っ飛んで行き、それどころかなぜか理音の召喚獣の装備していた白いローブと顔は所々、赤く染まっており、明久はその様子に顔を引きつらせ、

「何だ？　アキは俺以上の操作技能を持っているんだろ。さあ、始めるか？」

「ま、待った!?　ちょっと、落ち着こう。まずは理音の召喚獣からだ。どうして返り血を浴びてるの?」

「決まってるだろ。演出だ」

「止めてよ!?　いろいろと危険だから、怜生くんが泣くだろ!!」

理音は明久に向かい試召戦争を再開させようと言うが明久は目の前に立っている理音の召喚獣の変化に理音に和解を申し出ようとしているのか様子をうかがうように理音の召喚獣に付いて聞くが理音は表情を変える事なく言い切り、明久は理音の召喚獣は怜生のような小さい子供には見せられないと叫ぶと、

「そうか。いくつか付けた能力の目安としてわかりやすいと思ったんだが、怜生が泣くかもしれないなら、後で直しておく事にしよう」

「……能力の目安?」

「あぁ。俺の召喚獣が誰かの召喚獣を倒すたびにこの宝石やローブは相手の血を吸い……まぁ、血を吸うと言うのはものの例えだが、倒した召喚獣の数によって」

「ま、参りました!?　い、命だけ助けてください!!」

理音は今日の試召戦争が終結したら直しておくと言い、明久は理音の言葉に背中に冷たい物が伝い始め、恐る恐る理音の召喚獣に付いている能力の事を聞くと理音の召喚獣の杖に付いている宝石は光輝くと同時に雄二討伐隊の1部から火柱が昇り、明久は身の危険を感じたようで召喚獣と一緒に理音に向かい土下座をして命乞いをする。

# 第388問

「アキ、何を言ってるんだ？　最初から『命だけ』は助けてやるつもりだぞ」

「……やっぱり、そうなりますよね」

理音は表情を変える事なく、『命だけ』は強調すると明久は理音の性格を熟知しているため、頭をあげると顔を引きつらせ、

「ほら、早く立て、早くしないと俺の気が変わるかも知れないぞ」

「か、簡単に殺されてたまるか。それなら、ボクだって全力でやってやる！！」

理音は明久の反応が楽しいのか邪悪な笑みを浮かべたまま、明久に試召戦争の続きをやろうと言うと明久と彼の召喚獣は慌てて立ち上がり、理音の正面に立つとポケットから清涼祭で手に入れた白金の腕輪を装備すると理音を倒してやると叫び、明久の召喚獣は以前に理音が白銀の腕輪に組み込んだプログラムが作動したようで咆哮をあげるが、

「それじゃあ、始めるか？」

「えーと、何かないの？　ボクの召喚獣は白金の腕輪を使ったわけだしさ」

「前に言っただろ。それは威圧された場合に相手の召喚獣の動きが鈍くなるんだ。なぜ、俺が威圧されないといけない？」

理音の表情は変わる事もなく、明久に向かい言うと明久は理音の召喚獣が威圧されて動きが鈍くなる事を期待していたようだが何も起こらないため、理音に腕輪の能力をもう1度、確認すると理音は何度も同じ説明をさせるなと言いたげにため息を吐き、

「そろそろ、本気で始めるぞ。時間も雄二は短期決戦を望んだはずなんだがな。お前のバカな行動で男女混じってすでに戦況は何かわけのわからない状況だ。ここにいたっては男子軍、女子軍と言う垣根すらなくなっているわけだからな。それに完全に見せ物になってきた気がするしな」

「……うん。そうだね」

理音の召喚獣は杖を持つ手に力を込めるとそれに応えるように明久の召喚獣も木刀を握る手に力を込め、

「どうする？　強化合宿が終わった日の夕飯でも賭けるか？」

「仕送りも入って来たばかりだから、のっても良いんだけど、後々、きつくなりそうだし、外食じゃ無ければのっても良いかな」

理音の召喚獣は明久の召喚獣との距離を一気に縮め、杖を振り下ろすと明久の召喚獣は木刀でその攻撃を受け止め、

「まぁ、それでも良いか。帰った後に飯の準備は面倒だしな」

「やるのはリオだけどね」

理音は明久に夕飯を作る事になると言うと明久の召喚獣は力を込め

て木刀で理音の召喚獣を後ろに跳ね飛ばすと直ぐに攻撃に転じて理音の召喚獣の着地点を狙って木刀で足元を薙ぎ払うが、

「飛翔（フライト）」

「きたな！？」

理音が言葉（ワード）を発すると召喚獣の杖の先にある宝石が光輝き、理音の召喚獣は地面に着地する事なく宙を浮いており、明久は次から次に出てくる理音の召喚獣の能力に声をあげ、

「まぁ、気にするな。使うと点数が減るんだしな。制限があるんだ。俺が何か能力を使う度にそっちが有利になっているんだからな」

「その割には1発の攻撃力が減っているけどその分、攻撃を受ける気がするよ」

理音は能力使用にも限りがあると笑うと明久はそれでも納得がいかないようで文句を口に出すがゲームで強い敵と戦ってきている気分になってきているようで楽しそうに口元を緩ませ始めている。

## 第３８９問

「……あいつら、何か楽しそうだな？」

「気分は子供の時のチャンバラって感じだな」

理音と明久の戦いを見た恭二はため息を吐くと源二は苦笑いを浮かべ、

「まぁ、あの２人にしかわからない何かがあるんだろ……と言うか、改めて言うのもなんだが、何だこの状況は！？」

「……雄二は私が守る」

雄二は理音と明久が幼なじみだと言う事で今の２人が昔と同様に『遊んでいる』と思ったようでため息を吐くが自分の首だけを狙って押し寄せてくる生徒達の姿に声をあげると翔子は雄二を守ると言って彼の前に躍り出て襲いかかる生徒達を蹴散らして行き、

「あれだね。気分的には坂本くんがお姫さま？」

「……愛子、おかしな事を言わないでよ」

愛子は雄二と翔子の様子にニヤニヤと笑うと優子は疲れたようなため息を吐く。

「坂本がお姫さま？　汚い絵面だな」

「あ？　女装趣味の変態に言われる筋合いはねえよ」

「何だと？　あれはお前達バカクラスが無理やりさせた事だろ！！」

恭二は雄二がお姫さまと言われた事をバカにするように言うと雄二は恭二を睨みつけて彼を女装趣味の変態と罵ると2人は睨みあいを始め出し、

「……どうして、こう問題ばかり起きるんだろう？」

「……平賀くん、ごめんなさい」

源二は理音に評価された事は嬉しかったようだが、それ以上にかかった負担が大きいようで大きく肩を落とすと源二の様子に優子は申し訳なくなったようで源二に謝り、

「優子、ボク達も攻めるよ。ここを片付けたら弓永さんのところに戻らないといけないんだからね」

「そうね。平賀くん」

「そうだね。でも、俺達もそれは一緒だからね」

愛子は流石に翔子1人では耐えきれないため、優子に攻撃をしようと言うと優子は源二に指示をくれと言い、源二は大きく頷き、指示を出し始めるが、

「どきなさい！！　ウチがアキにお仕置きをするのよ！！　邪魔よ！！」

「み、美波ちゃん、落ち着いて下さい！？　また、前田くんに怒ら

れちゃいますよ」

「……胃が痛い」

美波は明久への制裁権を理音から奪おうと思っているようで2人が戦っている所まで突き進もうとするが瑞希は理音に怒られた事で少し冷静さを取り戻したようで美波に考え直すように言っているが瑞希は美波の勢いに引きずられて行き、源二は2人の様子に胃の辺りを押さえる。

「……平賀くん、胃薬いる？」

「ありがとう。って、何で、木下さんが胃薬を持ってるんだい？」

「……最近、Fクラスに関わるようになってたまに痛む時があるから、理音に調合して貰ったのよ」

「……木下さんも苦労してるんだね」

優子は源二の様子にポケットから小さな包みを取り出すと源二は包みを受け取りながらも優子が胃薬を持っている理由を聞くと優子は理解できない事が多い、Fクラスの面々に処理が追いつかなかくなった時に理音から貰ったと言うと源二は先ほど感じた優子へのシンパシーは気のせいじゃないと頷くが、

「平賀くん、騙されたらダメだよ。優子はいぢめられる事に悦びを感じるタイプだからね。だから、前田くんと付き合ってるわけだし♪」

「愛子！！　おかしな事を言わないで！！」

「……木下さんの胃痛はFクラスだけじゃないと思うよ」

愛子はニヤニヤと笑いながら優子はドMだと言うと優子は愛子を怒鳴りつけ、愛子はお怒りの優子から逃げるように駆け出して行くと優子は愛子を追いかけて行ってしまい、源二は実質Aクラスをまとめているのが優子だと言う話を聞いた事があるようで大きなため息を吐く。

# 第３９０問

「標的（ターゲット）」

「今度は何！？」

理音の言葉（ワード）に明久は次の理音の攻撃から避けるように後ろに下がるが明久の召喚獣の頭や胸に的が浮かび上がり、

「……弾丸（ブリッツ）」

「ちょ、ちょっと、それは卑怯だよ！？」

理音の召喚獣は明久の召喚獣から距離を取り、杖を振りかざすと明久の召喚獣に浮かび上がった的を狙って無数の弾丸が放たれると明久の召喚獣はその弾丸を何とか交わすが弾丸は方向を変えて明久の召喚獣に浮かび上がった的を狙い続け、

「当たれば消えるぞ」

「当たった時点で死んじゃうからね！？」

「心配するな。命だけは助けてやると言っただろ。救命処置は任せておけ」

理音は弾丸が的に当たると的は消えると言うが的の位置から喰らえば観察処分者である明久にとっては致命傷になりかねないと明久は叫ぶが理音は救命処置なら任せろと言い、

「それは危ないだろ！？」

「大丈夫だ。専攻は薬学だが外科的な医療も完璧だ」

明久は理音の言葉に声を張り上げるが理音は表情を変える事なく言う。

「そこは問題じゃないだろ！？」

「それよりいいのか？　よそ見をしていて良いのか？」

「嘘！？　あ、あれ、木刀で叩き落とせるの？」

明久は声をあげるが理音は明久によそ見をして良いのかと聞くと明久の召喚獣のすぐそばには理音の召喚獣が放った弾丸が迫っており、明久の召喚獣は避ける事が出来ずに木刀を振りまわすと木刀に当たった弾丸は叩き落とされ、明久は驚いたような表情をするが、

「当たれば消えると言ったはずだ。それより、俺はよそ見をしていて良いのかと言ったはずだが」

「え？　ぶほっ！？　ぬおぉぉ。頭が割れるように痛い！？」

理音の召喚獣は最初からこのタイミングを狙っていたかのように明久の召喚獣との距離を一気に縮めると理音の召喚獣は杖で明久の頭を勢いよく殴りつけ、明久と明久の召喚獣は同じ動きで地面をのた打ち回り、

「やはり、点数の減りが大きいせいかあまり削れないな。まぁ、実験台（アキ）が死なないようにいたぶれるから問題ないか」

「ちょっと待て!?　今、実験台でボクと読んだだろ!!」

「……ちっ、バカのくせに鋭いな」

理音は明久を見下ろしながら、実験が続けられると言うと明久は痛む身体で立ち上がり、理音に文句を言うが理音は明久の言葉に舌打ちをすると、

「その舌打ちはおかしいだろ!?」

「気にするな。些細な事だ」

「待て。今の些細な事はボクの生き死にの問題だろ!?　全然、些細じゃないからね!?　むしろ、大問題だからね!?」

「気にするな。鈍感(バカ)は死ななければ治らないとも言うし、お前のためにも1度、人生をリセットするのも良いのではないかと思ってな」

「ダメだからね!?　そのリセットは取り返しがきかないからね!?」

明久は理音の舌打ちに再び、声をあげるが理音は些細な事だと言い切り、明久は理音の言葉に反論し、

「大丈夫だ。命だけは助けてやる」

「何?　この会話は無限ループなの!?」

「何をわけのわからん事を言っているんだ?」

「そこはすで返すの！？」

理音と明久の試召戦争はまだ終わりそうにない。

# 第３９１問

「えーと、あっちの方が盛り上がってるな」

「そうじゃのう」

「ねえ。ここは今はあっちと同じように同盟を組んであの騒ぎを鎮圧すると名を打って理音と吉井くんの戦いを見に行かない？」

大樹と秀吉は女子の大将である深月の前まで到着するが後ろから聞こえる理音と明久の勝負に起きる歓声に大将同士の試召戦争は微妙に盛り上がりに欠けており、深月はこの勝負を放り出して理音と明久の試召戦争を見に行かないかと言うと、

「流石にそれは無理じゃろう」

「いや、思ったより時間もたったから、このままだと時間切れって事にもなりそうだし……悪い提案じゃ無いかも」

秀吉はそんな事はできないとため息を吐くが大樹は思いのほか乗り気であり、

「それじゃあ。同盟成立って事で良いかな？」

「そうだな」

大樹と深月の手で新たな勢力が出来上がった時、

「ゆ、弓永さん、あ、あの。霧島さんと吉井くんがみなさんを引き

つれて行ってしまって、わ、私はどうしたら良いんでしょうか？」

「本宮は無事か？　これはメインアタッカーが手に入ったな」

「そうだね。ボク達は主戦力が他に配置されているから、あっちに飛び込むのは躊躇せざる得なかったんだけど、葵、良いところに戻ってきてくれたよ」

深月は頭が現状について行けなかったようで泣きそうな表情で戻って女子の大将である深月の元に戻ってくるが状況は更に彼女の想像の斜め上を爆走しており、

「「これから男子軍、女子軍本陣は同盟をして、後方で私利私欲に走った連中を殲滅する！！」」

「へ？　ゆ、弓永さん、これはいったいどう言う事ですか！？」

大樹と深月は声を合せて男子軍と女子軍両本陣の同盟が成った事を宣言すると葵は状況について行けるわけもなくおろおろとし始め、

「……本宮、落ち着くのじゃ」

「で、ですけど、木下くん、同盟ってどう言う事なんですか？」

「あれだよ。深月、ボクも清瀬くんも愛し合う葵と木下くんの仲を引き裂く事は出来なかったんだよ」

秀吉は葵に落ち着くように言うが葵が直ぐに対処できるわけもなく、深月は秀吉と葵をからかうようにニヤニヤと笑う。

「今更だけど、ここまでぐちゃぐちゃになると大将ってどうなるんだ？　俺か弓永が討ち取られた時点で終わりだろ？」

「大丈夫じゃない。ほら」

大樹は同盟が成ったものの自分達が負けると今日の試召戦争が終わってしまうため、下手に動けないと言うと深月は上空を指差し、

「……完全に男女間じゃなくなってるわけだな」

「うむ。理音は何を考えておるのじゃろうか？」

上空には第１勢力大将『吉井明久』、第２勢力大将『平賀源二』と表示されており、第３勢力大将は『清瀬大樹ｏｒ弓永深月』と書かれており、

「大将はどっちにする？」

「そうだね。理音と吉井くんの勝負を見るとなるとあの中に突っ込まないといけないわけだよね」

「そうなるな」

大樹と深月は興味本位から理音と明久の試召戦争を見たいため、お互いに大将になりたくないようで、

「「任せた」」

「お主達は何を言っておるのじゃ！？」

2人で秀吉の肩を叩くと秀吉は声をあげるがその瞬間に上空には第3勢力大将『木下秀吉』と表示され、

「葵、大将の警護は任せるよ。小山さんと代表に伝令。今からボク達は3方向から挟み撃ちにするよ!!」

「良いか。指示は俺と弓永さんが出す。行くぞ!!」

大樹と深月は秀吉が反論する暇を与える事なく、指示を出すと進みだし、

「な、なぜなのじゃぁぁ!!!??」

「えーと」

声をあげる秀吉と状況について行けない葵の2人だけがその場に取り残される。

# 第３９２問

「ちょ、ちょっと、何が起きてるのよ!?」

「……えーと、私もよくわからないんだけどね。あれ」

優子は雄二討伐隊を倒すために友香の部隊が援護に来てくれたと思っていたのだが、友香の部隊は優子達に攻撃をし始め、優子は意味がわからない状況に声をあげると友香は申し訳なさそうに上空を指差すとそこには現状の３つの勢力の大将と主要部隊長が書かれており、

「理音!!　あいつは何をしてるのよ!?」

「……前田くんもだけど弓永さんと清瀬くんもよ。本当は止めたかったんだけど、やっぱり、みんな、最高得点は取りたいみたいで」

優子はこの原因を作った明久と戦っている理音の顔を思い浮かべて声をあげると友香はそれ以上に最高得点の魅力は高いようだと言うと、

『木下さん、その首、貰うわ!!』

『あなたを倒して、前田くんを頂くわ!!』

優子に向かい、友香が率いていた女子生徒２人が襲いかかるが、

「ちょっと、黙ってて」

「愛だね」

「そうね」

優子は女子生徒が理音を狙っている事に不快感をあらわにして女子生徒を切り捨てると優子の姿に愛子は苦笑いを浮かべると友香は大きく頷き、

「愛子、遊んでないで、蹴散らすわよ！！　秀吉、あんた、何、大将になんかなってるのよ！！　あのバカに反省させてやるわ！！」

「えーと、木下さん、木下くんはどちらかと言えば被害者みたいなんだけど」

「……小山さん、もう遅いみたいだよ」

優子はこの女子生徒達の中に自分の彼氏である理音に好意を寄せている人間もいると言う事を改めて実感したようで声を張り上げて愛子に攻撃を任せると友香は完全に大樹と深月に巻き込まれたであろう秀吉を擁護しようと優子に声をかけるが優子はすでに秀吉に向かって駆け出しており、優子の行く手を阻んだ生徒達はすべて蹴散らされて行き、愛子は優子の様子に苦笑いを浮かべる。

「木下さん、凄いわね」

「愛の力は偉大だね」

友香は感情で突っ走って行った優子と蹴散らされた生徒達を見て、顔を引きつらせるが愛子は後で優子をからかおうと思っているようで楽しそうに笑うと、

「それで、小山さんはどうする？　何なら、ぼくが相手をしてあげるよ。教科は保健体育。もちろん、実技でね♪」

「……遠慮するわ。私はどちらかと言えば最高得点にも興味がないわ。それに男女間なら代表としての責任として部隊長はしないといけないけど、今は違うわけだし、工藤さんの相手をして補習室送りはイヤよ」

「あれ？　小山さんはもっと熱い人かと思ってたんだけどね」

愛子はこの部隊の指揮官である友香に試召戦争をするかと聞くが友香は男女間ではない試召戦争ではリスクを冒す意味がないと言うと愛子は意外そうな表情をするが、

「冷静になろうとしているだけよ。私は頭に血が昇りやすいから、それにああはなりたくないでしょ？」

「確かにね。代表も坂本くんも大変だ。でも、ちょっと、憧れない？」

「まぁ。それは少しくらいわね」

友香はため息を吐くと嫉妬と言った感情任せに雄二を攻撃している生徒達を指差し、愛子は2人で背中を合わせて襲いかかる生徒達を倒している雄二と翔子を見て羨ましくないかと言うと友香は苦笑いを浮かべて頷いた後、

「あぁ。良い男はみんな人のものか？」

「あれ？　小山さん、坂本くんがタイプ？」

「うーん。見た目はそうでもないけど、私は『頭が良い人』がタイプよ。お勉強ができるって言う頭の良さだけじゃなくてね。それで、根本くんとも付き合ってたわけだし……今となっては汚点でしかないけど」

少しだけ寂しいそうに笑うと愛子は意外だと言うが友香は自分の好きなタイプを話すと恭二と付き合っていた時の事を思い出したようで苦虫をかみつぶしたような表情をし、愛子はそんな友香の様子に苦笑いを浮かべる。

## 第393問

「秀吉、ちょっと良いかしら？」

「あ、姉上、お、落ち着くのじゃ！？　ワ、ワシは悪くないのじゃ！？」

優子が青筋を浮かべて秀吉の前まで移動すると秀吉は優子の様子に彼女に落ち着くように言うが、

「あたしは落ち着いているわ。それより、この状況について聞きたいんだけど良いかしら？」

「ま、待つのじゃ！？　お、落ち着くのじゃ！？　ワシは悪くないのじゃ、だから、まずはその手を放すのじゃ！？　ワ、ワシだって今の状況を理解できておらぬのじゃ！？」

優子は秀吉の肩をつかみ、秀吉は優子がつかんでいる肩が痛いようで悲鳴を上げているようで脂汗を流しながら手を放して欲しいと叫ぶ。

「き、木下さん、お、落ち着いて下さい！！　木下くんは何も知らないんです！！　弓永さんと清瀬くんが勝手に大将になれと言って、駆け出して行ってしまったんです」

「……そう。でもね。それはそれよ」

葵は優子の様子に秀吉が危ないと思ったようで優子に落ち着くように言うが優子の怒りはすでに何かで解消しなければ収まりがつかな

いようであり、満面の笑顔で秀吉の肩をつかんでいる手に力を込め、

「や、止めるのじゃ！？　姉上！？」

「き、木下さん、止まってください！？」

秀吉は肩に感じる激痛に声をあげると葵は優子に抱きついて止まって欲しいと言うと優子を何とか秀吉から引き離すが優子は秀吉を睨みつけて今にでも襲いかかりそうであり、

「き、木下くん、逃げてください！！」

「し、しかし」

「そう。逃げるしかできないの？　相変わらずのヘタレね」

葵は優子に抱きついたまま、秀吉に逃げるように言うと秀吉は流石に葵を置いて逃げるわけにはいかないようで動きを止めてしまい、その姿に優子は秀吉を彼女である葵の前でバカにすると、

「ワシはヘタレではないのじゃ！！　ワ、ワシだって、やられてばかりではないのじゃ！！　Ｆクラス木下秀吉が姉上に現代文勝負を挑むのじゃ！！」

「へぇ、あんたがあたしに勝てるとでも思っているの？」

秀吉は理音からもヘタレと言われ続けているためかどうやらおかしなスイッチが入ってしまったようで、優子への恐怖を振り払うように優子に試召戦争を仕掛けると優子は挑発に乗った秀吉を見て小さく口元を緩ませ、

「Aクラス木下優子、受けるわ。試獣召喚（サモン）」

「試獣召喚（サモン）なのじゃ！！」

優子と秀吉は正面に向きあうと召喚獣を呼び出す言葉（ワード）を唱えると2人の足元には機械的な魔法陣が浮かび上がり、『ポン』と言う小さな音とともに2人をデフォルメしたようなサイズの召喚獣が現れ、

「彼女の前で情けない姿を見せない事ね」

「う、うるさいのじゃ！！　ワシだってやればできるのじゃ！！」

優子の召喚獣は秀吉の召喚獣に向かい、ランスを構えると秀吉の召喚獣も彼の声に反応するように武器である薙刀を優子の召喚獣に向かい構え、空気が張りつめた瞬間、

「……時間です」

「終結！！」

指定の時間がきたようで放送で怜生と西村教諭の声で試召戦争終了が宣言され、

「「……」」

優子と秀吉の間には微妙な空気が流れる。

# 第３９４問

「終了時間か？　これで終わりだな！？　な、何で、止まらねえんだよ！？」

雄二は怜生と西村教諭が試召戦争終了時間を宣言した事で助かったと地面に座りこもうとするが誰１人として、雄二への攻撃の手を緩めようとする生徒はなく、雄二が驚きの声をあげると、

「……だって、これ、坂本くんを倒すためだけに作られた勢力だし」

「……試召戦争が終わっても感情のまま、進んでいるわけだね」

愛子は雄二討伐隊だけは試召戦争終了時間では止まらないと言うと源二は状況を理解したようで大きなため息を吐き、

「ため息を吐いてないで、手伝えよ！？」

「あ？　何でだよ。試召戦争は終了したんだ。それ以外で生徒を倒したって点数にならないだろ。俺は戻るぞ」

「てめえ、根本！！」

雄二は先ほどまで自分の味方をしてくれていた生徒達に援護をしてくれと言うが恭二はこれ以上は付き合う義理はないと言い、自習室に向かい歩き出すと恭二と同じ意見の生徒達は恭二の後に続くように自分達の自習室に戻って行き、その様子に雄二は先頭を切った恭二を怒鳴りつけるが恭二が振り返る事はなく、

「えーと、ボク達はどうしよっか？」

「そうだね。前田くんと吉井くんはどうなったかな？　あの2人も試召戦争の時間なんて関係なく勝負を続けていそうだけど……」

「明久くん、頑張ってください！！」

「ほらほら、理音も油断してると吉井くんの攻撃が当たっちゃうよ」

愛子は苦笑いを浮かべて解散するかと源二に聞くと源二は理音と明久の勝負が気になると言った時、先ほどまで理音と明久の勝負が行われていたところは試召戦争の時間が終了した事で興味本位の生徒達が2人を囲み完全な観戦ムードになっている。

「ちょっと出遅れたかな？」

「そうだね。でも、2人とも召喚獣の操作はもの凄く上手いから、勉強になるだろうし、見ておきたいんだけどね」

愛子と源二はこの場所では良く見えないため、どうしようかと顔を見合わせた時、

「あ。そうだ。前田くんが救護用に使っていたところにスクリーンがあったんだ。そこなら、見れるかな？　怜生くんはそこで見てるはずだし」

「ここに居ても良くは見えないし、行ってみようか？　前田くんが戻られないなら、弟くんの相手を誰かがしないといけないだろうし」

「そうだね」

愛子は康太の治療をしていたところに行こうと言うと源二は頷き、
2人の話を聞いていた数名の生徒が加わり、場所を移動すると、

「……ムッツリーニくん、何をしてるの？」

「……何もしていない」

怜生は康太の膝の上に座り、大人しく理音と明久の勝負を見ており、
愛子は2人の様子に苦笑いを浮かべ、

「怜生くん、ボクと一緒に見よう」

「……怜生くん、どけてくれると嬉しい」

「……はい。こうたお兄ちゃん、ありがとうございました」

愛子は康太が少しだけ困っているのがわかったようで怜生を呼ぶと
怜生は康太の顔を見た後、康太の足から下りて頭を下げると愛子の
方に歩いて行き、

「土屋くんも、弟くんには敵わないみたいだね」

「……そんな事実はない。それより、確か、ここをこうすれば」

「土屋くん、それに触って良いのかい？」

「……問題ない。重要なプログラムはロックがかかっている。
今、俺がやろうとしているのは……これで良かったはず」

源二は強化合宿で怜生に甘いところのある生徒達がいる事に気づいているようで苦笑いを浮かべて言うと康太は表情を変える事なく、源二の言葉を否定すると理音のパソコンに手を伸ばし、何かをやろうとしており、源二は康太の行動に驚きの声を上がるが康太は作業を止める事なく、キーボードを指で弾いて行くと目的の事が出来たようで小さくつぶやくと、

「ムッツリーニくん、よくできたね」

「……清涼祭の後に理音から聞いた」

上空には理音と明久の勝負が映し出される。

## 第３９５問

「……試召戦争、終了したみたいね」

「そうじゃのう」

肩すかしをくらい微妙な空気が流れているなか、優子は眉間にしわを寄せながら秀吉に声をかけると秀吉はこれで一先ずは自分の命が助かったと思ったようで安心したように頷くが、

「秀吉、あんた、何、終わった気になってるの？　あんたは姉であるこのあたしに逆らったのよ」

「ま、待つのじゃ。姉上！？　だ、だいたい、姉上がワシを疑ったのが悪いのであって、ワシは悪くはないのじゃ！！」

「そう。秀吉、あんたはあたしが悪いって言うのね？」

優子は秀吉が自分に逆らったと言う事実だけが気に入らないようであり、秀吉を睨みつけると秀吉は優子の様子に後ずさりしながら自分は悪くないと言うと優子のこめかみには明らかな青筋が浮かび上がって行く。

「ま、待ってください！？　お、落ち着いてください！？」

「何を言ってるの？　あたしは落ち着いているわよ」

葵は秀吉を守るように優子と秀吉の間に割って入ると優子は落ち着いていると言い、秀吉と葵の顔を交互に見て、

「秀吉、あんた、男だとか言うわりになんで、本宮さんの影に隠れてるのよ。本当に情けないわね。あんたが後ろに隠れてるって事はあたしの相手は本宮さんがしてくれるって事かしら？」

「な、何じゃと！？　ワシは男なのじゃ！！　それにワシは葵の彼氏なのじゃ！！　ワシが葵を守るのじゃ！！」

「き、木下くん、今、葵って」

優子は彼女である葵の後ろに隠れている秀吉の姿に姉として情けないと言うと秀吉は優子の言葉にプライドが傷つけられたようで葵の前に移動して優子に向かい言うがその表情はこれから自分に起きるであろう事を察しながらも恐怖を振り払うように男らしく葵を守ると声を張り上げると勢いで葵の名前を呼び、葵は秀吉が自分を名前で呼んだ事に驚きの表情をすると、

「ふーん。秀吉、あんた、生意気よ」

「い、いきなり何をするのじゃ！？」

優子は秀吉の反応に少し驚いたような表情をした後、秀吉を生意気だと言うと秀吉の額の前に右腕を突き出すと秀吉の額を指で弾き、秀吉は優子のいきなりのデコピン攻撃に何があったかわからないようで額を両手で押さえて優子を非難するが、

「まぁ、秀吉のくせにあたしに逆らったのは許せないけど、今日のところは男を見せたって事で許してあげるわ。葵」

「は、はい！？」

優子は少しだけ見えた秀吉の成長にくすりと笑うと葵の名前を呼び、葵は秀吉だけではなく優子からも名前で呼ばれた事にどう言う反応して良いのかわからずに声を裏返す。

「別に何もしないわよ。秀吉と付き合う上で秀吉の姉として言っておくわ。見ての通り、情けないヘタレ男だから、何かあったら尻でも蹴ってやる気にさせないさい。あたしが許すわ」

「そ、そんな、私が木下くんの」

「木下くん？」

「ひ、秀吉くんはな、情けなくなんてありません」

優子は葵に向かい秀吉が情けない姿を見せたら喝を入れるように言うと葵は優子の言葉を否定しようとするが優子は葵を睨みつけると葵は優子が言いたい事を理解したようで1度、大きく深呼吸をした後に秀吉を名前で呼ぶと秀吉と葵は恥ずかしいようで顔を真っ赤にして2人でうつむいてしまい、

「まったく、見てるこっちが恥ずかしくなるわね。秀吉、葵、あたしは怜生くんのところに言ってくるから、後は2人で好き勝手にやってなさいよ」

優子は付き合い始めてそれなりに時間も経つのに初々しい反応をする2人に付き合っていられないと言いたげにため息を吐くと2人を置いて歩き出す。

# 第396問

「愛子、平賀くん、これっていったいどう言う事？」

「あ、お帰り、優子」

「……お帰りなさい」

優子は怜生のところに向かって歩いていると上空には理音と明久の試召戦争が映し出されており、到着するなり、原因を知っていそうな2人に聞くが愛子と怜生は優子を向かいいれると、

「えーと？　一先ずはただいまで良いのかしら？」

「良いんじゃないかな？」

「そう。ただいま。怜生くん」

「はい」

優子は2人の様子に苦笑いを浮かべるとただいまと言い、怜生は返事をする。

「それで、愛子」

「これってどう言う事って言うけど、あの戦いは元々、坂本くんを倒すためだから、収まりがついてないだけ、前田くんと吉井くんはなんか楽しくなってきたみたい」

「……あいつは何をしてるのよ」

優子は愛子に改めて、今の状況を確認すると愛子はこの状況について簡単に説明し、優子は上空に移る理音の様子にため息を吐くが、

「木下さんは応援に行かなくて良いのかい？　前田くんを応援するなら、あっちの方がよくないかな？」

「確かにそうだね。優子、行かなくて良いの？」

「……あたしが行かなくたって大丈夫でしょ。あいつは人の応援とかがあっても力に変えるような人間じゃないわよ。だいたい、今の時点で遊んでいるのが明らかでしょ」

「まぁ、吉井くんの攻撃は全部、交わされてるけどさ」

源二と愛子は優子に理音の応援に行かなくて良いのかと言うと優子はからかわれていると思っているようで行かないと言うと怜生の隣に座ると愛子は優子の反応が面白くないと言いたげな表情をする。

「怜生くん、理音を応援しよっか？」

「はい。お兄ちゃんもアキお兄ちゃんも頑張ってください」

優子は不満そうな愛子に関わるとまたからかわれると理解しているため、怜生に一緒に理音を応援しようと言い、怜生は優子の言葉に頷くと上空に映る理音と明久の2人を応援し、

「もう。怜生くんはかわいいな♪」

「愛ちゃん？」

「愛子、気持ちはわかるけど止めなさい」

愛子は怜生の愛らしさに怜生に抱きつくが怜生は愛子の行動の意味がわからないようで首を傾げ、優子は愛子の行動にため息を吐いた時、

「……土屋くんは何をしてるの？」

「……何もしてない」

黙々と理音のパソコンのキーボードを叩いている康太に気づき、康太に声をかけるが康太は何もないと大きく首を振る。

「……土屋くん、言っておくけど、そのパソコンにはおかしなデータは入ってないわよ。それは試召戦争用のデータとか解析用だから、普段、学園で使ってるのはここにはないわよ」

「……なんだと？　それだとこれには何も入っていないのか？」

優子は康太が理音のパソコンから必死に何かを探していると思ったようで探しているものも何となく理解したようで康太に向かい言うと康太は予想していなかった言葉にがっくりと膝を落とし、

「……ムッツリーニくん、何をしているの？」

「……何もしていない」

康太の様子に愛子は呆れたように言うと康太は膝を落としていながが

らも優子や愛子が思っているようなものは探していないと大きく首をするがその行動には説得力も何も無く、2人は大きくため息を吐くと、

「木下さん、工藤さん、土屋くんも見なくて良いのかい？」

「そ、そうね」

源二は3人の様子に苦笑いを浮かべると理音と明久の試召戦争を見なくて良いのかと言い、優子と愛子は頷き上空に視線を向ける。

# 第３９７問

「……リオ、もう後がないんじゃない？」

「そう言うなら、１撃でも当ててみたらどうだ？」

明久の召喚獣は理音のおかしな攻撃を何とか木刀で弾きながら理音に向かい言うが明久の召喚獣の木刀は１度も理音の召喚獣には届いておらず、理音の召喚獣の点数の減少は全て理音が自分で行った攻撃のためであり、理音は表情を変える事なく明久に向かい言い、

「……まったく、召喚獣の操作が上手い人の相手をするのがこんなに厄介だとは思わなかったよ」

「何だ？　それは自分は凄い事をいつもやっているんだとでも言いたいのか？」

「そんな事じゃないよ。ただ……ボクもそろそろ、攻撃に移ろうと思ってさ！！」

明久は召喚獣の操作性の向上で試召戦争での作戦の幅が広がる事を再認識したようで苦笑いを浮かべ、理音はそんな明久の様子に誉めて貰いたいのかと言うと明久は小さく口元を緩ませ、反撃開始だと叫ぶと明久の召喚獣は一気に理音の召喚獣に向かって駆け出して行く。

「突撃か？　確かに今の点数差なら、俺の召喚獣は吹き飛ぶだろうが、それは浅はかではないか？」

「どうかな？　多重（ダブル）召喚！！」

「ここでそのカードを切るか？」

「ボクの点数が半分になったって今の理音の点数じゃ、結構な衝撃だろ！！」

理音は明久の行動につまらないと言いたげにため息を吐くが明久はここで白金の腕輪の多重召喚を使うと明久はこれで理音の表情が少しは変わると思ったようだが理音の表情は変わる事はなく、明久の2体の召喚獣の木刀が理音の召喚獣に襲い掛かると、

「……そうでもないな」

「ちょっと、何で！？」

理音の召喚獣の杖は明久の召喚獣の木刀の1本を受け止め弾き返すと、もう1体の明久の召喚獣は理音の召喚獣の頭に木刀を叩きつけようとするが理音の召喚獣の動きは次の攻撃に対処できるわけもなく、理音の召喚獣の頭に木刀が吸い込まれるように進んで行くが理音の召喚獣の頭に当たる寸前にまるで水面が広がるように空間が歪むと明久の召喚獣の木刀をはじき返し、明久は驚きの声をあげるが、

「油断するヒマがあるのか？　攻撃が終わった後は1番、スキができるんだぞ」

「ぶほっ！？　あ、頭が割れるように痛い！！！？？？」

理音は表情を変える事なく、明久に油断してて良いのかと言うと明久の召喚獣の頭は理音の召喚獣に杖で思いっきり殴り飛ばされ、明

久は2体の召喚獣とともに地面をのたうち回り、

「早く立て、まだ、試していない事があるんだ」

「待て！？　それが痛みに耐えている幼なじみに言うセリフか！！」

理音は明久に向かい、早く立てと言うと明久は勢いよく立ちあがり、理音にお前は鬼かと言いたげに指差し言う。

「吉井くんもタフだね」

「そ、そうですね」

明久が勢いよく立ちあがる姿に深月は苦笑いを浮かべると瑞希もかなりの衝撃を受けながらもあまりダメージがなさそうな様子に苦笑いを浮かべ、

「ここまでタフさが上がっているのは瑞希と島田の攻撃の影響か？」

「リオ、何を言ってるの？」

「……何でもない。それより、そろそろ、頃合いだな。決着をつけるか？」

「い、いや、できればもう少し待って貰いたいかな？」

「何、気にするな」

理音の明久の頑丈さに何かを考えるように呟くと明久は理音が何を言っているか理解できないようで首を傾げ、理音は明久の様子を見

てくすりと笑い終わらせると言うと理音の召喚獣の杖の先の宝石には光が集約されて行き、明久はこれから起きるであろう惨劇に顔を引きつらせる。

# 第３９７問（後書き）

どうも、作者です。

番宣です。

バカとテストと召喚獣の二次創作を新たに書き始めました。以前、思いつきに書かせていただいた。『バカとテストと戦略眼』です。

興味が湧いた方はご覧ください。

# 第３９８問

「……喰らえ」

「ま、待った！？」

理音は召喚獣に攻撃指示を出そうとすると明久は何か言いたい事があるようで右手を前に出して理音に止まるように言うと、

「アキ、お前と俺はどんな関係だ？」

「どんなって、幼なじみ？」

「なら、俺が次に起こす行動はわかるな」

「……うん。すっごくわかる。待ってくれるわけがないね」

「そう言う事だ」

理音は明久に自分の性格を考えると自分の次の行動は決まっているだろと言い、明久は自分の最後の姿を思い浮かべたようで顔を引きつらせたまま後ずさりをして行くと理音の口元は今日１番ではないかと言えるくらいの邪悪な笑みを浮かべると理音の召喚獣の杖の宝石は強烈な光を放つが、

「あ、あれ？　何も起きない？」

「ん？　どう言う事だ？」

光が消えた後には何も起きず、明久だけではなく理音自身も意味がわからないようで2人は首を傾げ、

「明久くん、今が攻めどきです！！　きっと、前田くんの攻撃は打ち止めなんです」

「あっ！？　そうだね。リオ、これでボクの勝ちだよ！！」

瑞希は理音の攻撃するほどの点数がなくなってしまったのだと言い、明久は瑞希の言葉で攻撃に転じようとした時、

「あだっ！？　あ、頭が！？　な、何！？　何があったのぉぉ！！！？？？」

『ガン』と言う音が響き、明久の2体の召喚獣の頭にはどこから現れたかわからないが金ダライが直撃しており、明久は予想だにしていなかった攻撃に明久は頭を押さえてうずくまり、そこで明久の点数は『0』になる。

「理音、最後がこれ？」

「……いや、そんなつもりはないんだが、おかしいな。最後に相応しく、アキの召喚獣を消し炭にするくらいの火力をぶつけるはずだったんだが、間違えたか？」

意外な試召戦争の終結に深月は苦笑いを浮かべると理音はまったくそんなつもりはなかったようで首を傾げると、

「ちょっと待て！？　何を間違えたら、それが、金ダライになるんだよ！？　リオが言った攻撃だと死ぬかも知れないから、喰らわな

くて良かったんだけど、こんな負け方はカッコ悪いだろ！！」

「何を間違えたらと言われると……変換プログラムか出力プログラムにエラーがあったとしか思えないんだが」

「……前田、そこは素で返すところじゃないんじゃないか？」

明久はこんな最後は納得がいかないと叫び、理音はプログラムを間違えたようだと言い、大樹は理音の返事に苦笑いを浮かべ、

「……いや、出力が上手く出ていないからな。やはり、寝てない状況で作るんじゃなかったな」

「……リオ、寝てない状況って昨日は外に召喚フィールドを張れるようにしてたんじゃないの？」

「ん？　いや、予想以上に早く終わってな。実際は瑞希を追い返して2時間で終わっている。それで少し遊ぼうと思ったら寝てないせいか途中から楽しくなってな」

理音はプログラムを組んだ時の事を思い出して苦笑いを浮かべると明久は昨日の理音の徹夜中に何をしていたんだと言いたげな表情をするが理音の徹夜は途中からは完全な趣味であり、理音が徹夜までして作ったプログラムだと思っていた明久、瑞希は眉間にしわを寄せるが、

「まぁ。このエラーは明日まで直しておこう」

「……いや、何をするつもりだよ」

理音は気にする事なく、エラーはエラーとして直すと言い、明久は理音の言葉に大きくため息を吐いた時、少し離れたところから明久の召喚獣に金ダライが落ちた時と同じような音が何発も聞こえ、その音に続くように痛みに耐える声が聞こえ、

「……時間差か？」

「……そう言えば、他の人達も今はフィードバックがあるんだよね」

理音と明久は何があったか理解したようで苦笑いを浮かべる。

# 第３９９問

「……睨むな」

「睨みたくもなるわよ」

脱線はしたものの男女間の試召戦争が終結すると点数が『０』になった生徒は西村教諭の補習時間になり、理音は先ほどのエラーを直すためにプログラムを確認していると優子は不機嫌そうな表情で理音の向かいに座り、

「まぁ、優子の気持ちもわかるけどね」

「……理音、私も雄二と一緒に補習室に行きたい」

「前田くん、私も補習室に行きたいです！！　美波ちゃんは明久くんと一緒でずるいです」

愛子は怜生を抱えながら優子が怒っている理由がわかると言う隣で、翔子は金ダライを喰らわなかったようで理音の金ダライで止めを刺された雄二と一緒に補習室に行きたいから理音に点数を削って欲しいと言うと瑞希も翔子と同様に明久と一緒の補習室で勉強をしたいようであり、翔子の言葉に同調する。

「……良いか。瑞希、霧島、会えない時間が２人の愛をより強くするんだ」

「……ホント？」

「そうなんですか？」

理音は２人の相手をするのが面倒なようで適当に話を合わせると２人は理音の言葉に少しだけ考えるような素振りをするとお互いに考える事があるようで理音から離れて行き、

「……えーと、あれで良いのかな？」

「さあな。少なくともあいつらの場合は少し距離をとって相手を尊重すると言う事も必要だろ」

愛子は珍しく理音の言葉に従った２人に苦笑いを浮かべると理音は相手を拘束する方法にしか行かない２人の恋愛感を危険視しているようで明久と雄二の考えを尊重させるためだと言うが、

「……あたしはもう少し、あんたの行動を拘束したいんだけど」

「優子、言って置くぞ。俺はお前と違って縛られる趣味はない」

「あたしもないわよ！！」

「……緊縛プレイ」

優子は今日の理音の行動に怒っているようで理音の自由すぎる行動をどうにかしたいと言うと理音からはおかしな返答があり、優子はその言葉に顔を真っ赤にして理音を怒鳴りつける隣で康太が鼻血を吹きだして倒れ込み。

「……取りあえず、輸血パックだな」

「……」

「……優子、秀吉はどうかしたのか？　見るからに本宮と何かあって浮かれていて周りの様子など目にも耳にも入っていなさそうだが」

「……理音、あんたのその観察眼と予想はどうして的確すぎるのよ」

理音は優子の怒りの様子など気にする事なく康太の応急処置を始めると自習教室の隅でボーっとした様子で空を眺めてたまに小さく笑う秀吉の様子に眉間にしわを寄せて聞くと優子は理音が話を聞かない事に諦めたようなため息を吐くと、

「……やったか？」

「あんたは怜生くんの前で何を言うつもりよ！？」

理音は秀吉と葵の進展具合を予想するが優子は理音の言葉を怜生の教育上よくないと止めるが、

「冗談だ。ヘタレな秀吉が強化合宿と言う状況で先に進めるわけはない。大方、お互いに名前で呼ぶくらいで浮かれているんだろう」

「……まったく、その通りなんだけど、あんたがおかしいの？　秀吉と葵がおかしいの？」

「えーと、難しいところかな？」

理音は冗談だと言うと試召戦争中に起きた秀吉と葵の事だからたいした事でもないのに浮かれていると言い切ると優子は眉間にしわを浮かべて理音の言葉を肯定し、愛子は理音と優子の様子に苦笑いを

浮かべる。

# 第４００問

「優子、それにさ。確かに前田くんはちょっとおかしな事をしたけどそれまでの過程を考えないとダメだよ」

「過程？」

愛子は優子が理音を睨みつけていたが理音には理音の行動に至った過程があると言うと優子は愛子が何を言いたいのかわからないようで首を傾げると、

「だって、前田くんは優子があの流れに押しつぶされないように試召戦争に参加したわけだし、えーと、確か、『……知らんと言いたいところだが、このままだと優子達のところにぶつかって行くな。工藤、手伝うか？』だったかな？」

「あう」

愛子は理音のそばにいたため、理音が試召戦争を止めに行ったまでの過程も見ているためニヤニヤと笑いながら優子を見て言うと優子は愛子から聞かされた言葉に体温が一気に上昇したようで顔を真っ赤にして理音に視線を移すが、

「……ここだな。となると……を変更する事……力時に……わけか？」

「……前田くんもマイペースだね」

「……納得がいかないわ」

理音は康太の治療を終えた後は直ぐにプログラムの修正に戻っており、すでに周りの音など聞こえないように外部から聞こえる音を遮断してぶつぶつと何かを呟いているため、愛子は理音の様子に苦笑いを浮かべ、優子は眉間にしわを寄せる。

「それに結局は坂本くんが代表との事を保留にしているのが悪いわけだしさ」

「……それを発表したら、もっとひどい暴動になる気もするのよね。今日の反応を見て思ったんだけど、最初はおかしいのはFクラスだけかな？　と思っていたんだけど、坂本くんを傷めつけようとしたのはFクラスだけじゃないし、それも女子も多く混じってたわけでしょ？」

「た、確かにそうかも」

愛子は今日の試召戦争の騒ぎの原因は雄二がはっきりしない事が大きいと言うと優子は正式に雄二と翔子が付き合い出した時の事を考えてどんな暴動が起きるか心配だと言うと愛子は苦笑いを浮かべ、

「でも、そう考えると、やっぱり、前田くんって凄いのかな？」

「凄いんでしょ。気が点いたら、勢力も全部表示してるし、あんな騒ぎになる事も想定していたって事でしょ」

「それも確かに凄いんだけどね。ボクが言いたいのは、前田くんが優子と付き合っているって事」

「どう言う事？」

理音の凄さを実感したと頷くと優子はまだ、納得がいかない部分があるようで不機嫌そうに言うが愛子の言いたい事は召喚システムや理音の天才性ではなく、優子と付き合っている事と言い、優子は愛子の言葉にバカにされていると思ったようで声に怒りが混じるが、

「違うよ。勘違いしないで優子がどうって話じゃなくてね。Ｆクラスの人達って、誰かが付き合うとか、女の子と会話をしたとかでも、おかしな覆面を被って追いかけてくるでしょ？　それも今日でＦクラス以外にも同じ行動をする人達もいるわけだしさ。実際、文月学園でお付き合いって難しいと思うよ」

「まぁ、そうかも」

「あれだけの事、下手したら命にかかわる事をされてるのに優子と付き合ってるわけだし……まぁ、２度と逆らえないようにしているって噂もあるけど」

愛子は優子の反応に少しだけ慌てると直ぐに優子の原因ではないと言い、理音が優子と付き合う上でかけている労力を考えてため息を吐く。

## 第４０１問

「う、まぁ、そうね」

「だから、そう言うのは羨ましいって思うな」

優子は照れ臭そうに苦笑いを浮かべると愛子は優子が羨ましいと言い、

「……まぁ、愛子の場合は土屋くんだしね」

「な、何を言ってるの！？」

「……愛ちゃんはこうたお兄ちゃんが好きですか？」

優子は先ほど、理音に治療を受けて絶対安静と書かれたプレートを首からかけられて横になっている康太に視線を移して言うと愛子は声を裏返し、優子の言葉に愛子の腕の中にいる怜生は愛子の顔を見上げると、

「そ、そんな事は？」

「嫌いですか？　僕はこうたお兄ちゃん、好きです」

愛子は康太の事など好きではないと否定しようとすると愛子の様子に怜生は残念そうに言い、愛子は怜生の様子にどうしたら良いかわからないようであり、優子に助けを求めるような視線を向ける。

「愛子も怜生くんには敵わないわね」

「う！？　で、でも、ボク達で怜生くんに敵う相手はいないでしょ」

「まぁ、そうなんだけどね。怜生くん、こっちにおいで」

優子はいつも愛子にからかわれているため、少しだけ楽しそうに笑うと愛子は思いもよらなかった反撃に優子から視線をそらすと優子は怜生に自分のところに来るように言い、愛子は怜生を抱きしめていた手を放すと怜生は優子の元に歩いて行き、

「まぁ、相手がいる分、ましなのかな？　少し余裕はあるし」

「……優子、それは勝ち組の意見だよ」

優子は怜生を膝の上に座らせると相変わらず、召喚システムを修正している理音に視線を移して言うと愛子は小さくため息を吐くと、

「優子、実際、前田くんが言った命令権で誰かが誰かをデートに誘ったら、誘った時点で処刑に遭うんじゃないかな？」

「た、確かにそうかもね……でも、そうでもしないと気づいてくれない人もいるから、頑張りたくなるんでしょうね」

「姫路さんも大変だね」

愛子は命令権が使われた時に暴動が起きる可能性があると苦笑いを浮かべると優子は愛子の言葉にＦクラスの生徒がおかしな覆面をかぶり、男子生徒を追いかけ回している様子しか目に浮かばなかったようでため息を吐くが、鈍い明久に必死に自分の想いを伝えたいと頑張っている瑞希に視線を向けると彼女は翔子と一緒に自習をして

いる姿に応援してあげたいと言うと愛子は大きく頷く。

「何で、吉井くんって、あんなに鈍いのかしら？」

「優子は前田くんに原因を聞いた事はないの？」

「うーん。前に聞いた事もある気がするんだけど、それより、姫路さんや島田さんの暴力があるから、吉井くんが2人から好意が向いているかわからないのが原因だとあたし思っているし」

「た、確かに、あれはやりすぎだよね」

優子はこれだけ瑞希が頑張っているのだから、気付かない明久に対して呆れたようなため息を吐くと愛子は優子は理音から明久が鈍い理由を聞いていないかと聞くが優子は聞いたか聞いていないか自信がないようで眉間にしわを寄せて、瑞希と美波の暴力が1番の原因だと言うと愛子は苦笑いを浮かべる。

# 第４０２問

「……疲れたよ」

「ったく、何で、俺が補習室送りにならなきゃならねえんだよ」

西村教諭の鬼の補習が終わったようで補習室に送られていた生徒達が少しずつ自習室に戻ってくるが雄二は納得できていないようで原因を作った明久を睨みつける。

「……雄二、お帰り。一緒に居れなくてさびしかった」

「しょ、翔子！？　ひ、ひっつくんじゃねえ！？　また、さっきと同じ流れになるだろ！？」

「……裏切り者には死の制裁を」

翔子は雄二を見つけて直ぐに彼に抱きつこうとするが雄二は先ほどの騒ぎもあるため、翔子を交わすがすでに雄二はＦＦＦ団にロックオンされており、康太が雄二に向かいカッターを投げつけ、雄二は投げつけられたカッターを何とか交わす。

「……また、始まるのね。って、吉井くん、待ちなさい！！」

「止めないで、木下さん！！　ボクは雄二みたいな不細工が霧島さんの隣に存在している事が許せないんだ！！」

「存在、全否定かよ！？」

優子は始まりだした騒ぎに大きくため息を吐くと明久が雄二の首をかき切るために気づき、声を張り上げると明久は優子に止めないで欲しいと叫び、

「……雄二、覚悟は良いね？」

「良いわけあるか！！　だいたい、俺に文句を言う前にお前はどうなんだ？　開戦前に姫路と『２人っきり』で勉強していたのは誰だ？」

『総員、あの２人の臓物を我らが高貴な魂を持つＦＦＦ団に奉げるのだ！！』

明久は雄二とにらみ合いを始めるが雄二は自分の生存率を上げるために、明久を巻き込み、自習室の中の殺意は一気に跳ね上がる。

「……これはどうしたら良いのよ？」

「さ、さぁ？　優子、前田くんを動かせないかな？」

「無理でしょ。あいつがこの状況で反応するわけがないでしょ！？ちょ、ちょっと、怜生くん、そっちに行っちゃダメよ！？」

優子と愛子はＦクラスの生徒達の様子に大きく肩を落としている間に優子の膝の上に座っていた怜生が明久と雄二の元に駆け出してしまい、

「……アキお兄ちゃん、ゆうじお兄ちゃん、ケンカはダメです」

「れ、怜生くん！？　こんなところに来ちゃダメだよ！？」

「が、がきんちょ！？　は、早く、ここから逃げるんだ！！」

怜生は明久と雄二の元に着くと２人の顔を見上げてケンカは良くないと告げ、明久と雄二は怜生が現れた事に慌てて怜生を逃がそうとするが、

『あのクソガキは清涼祭の時にロリっこに抱きしめられていたな？』

『さっきも木下姉の膝の上に乗っていやがった』

『『『『『『許せねぇぇぇ！！！！！！』』』』』』

醜い嫉妬の塊であるＦＦＦ団は怜生にまで嫉妬のこもった殺意を向けた時、

「……怜生に敵意を向けたバカはどいつだ？」

「……結果オーライなのかな？」

「……そうだと良いわね」

怜生へ向けられた殺意に理音が反応し、ゆっくりと理音が立ち上がり、その姿を見た優子と愛子は苦笑いを浮かべ、

「……えーと、雄二、一先ずは一時休戦にしない？」

「そ、そうだな。が、がきんちょ。こっちだ」

「……」

明久と雄二は理音の様子に巻き添えを喰らわないように怜生を抱きかかえて逃げ出すと理音からは大量の花火が放たれ、

「……高さが足りないな」

「……理音、やりすぎよ」

怜生に殺意を向けたFクラスの男子生徒は理音にぶちのめされ、自習室の隅に積み上げられる。

# 第４０３問

「……お兄ちゃん」

「ん？　怜生、ケガはないか？」

「……ないです」

怜生は教室の隅に積み上げられている屍を眺めている理音の足元に駆け寄ると理音は怜生を抱き上げる。

「……なんだ？」

「……いや、今更だが、お前とがきんちょは極度のブラコンだと思ってな」

「……その一言で片づけて良いのかな？」

雄二は理音と怜生の仲の良い様子にため息を吐くと愛子は苦笑いを浮かべる。

「ん？　意味がわからんが、それより、これは何が原因だ？」

「……理音、あんた、全てを蹴散らしてから気づくの？」

「ん？　些細な事だろ。怜生やお前に比べれば、こんな奴ら、どうでもいい」

理音はＦクラスの生徒を蹴散らしながらも原因を理解していなかっ

たようで首を傾げると優子は理音の状況にため息を吐く。

「……これが前田くんの強みだよね。坂本くんも代表に言ってみたら」

「……雄二」

「……翔子、工藤、それを言った時点であいつらが復活する気がするから止めてくれ」

翔子は雄二にも理音のように自分の事を大切だと言って欲しいと言うが雄二は身の安全を優先したいようで翔子から距離を取り、

「それより、理音、あの金ダライはなんだったんだ」

「ん？　プログラムの失敗だ」

話を逸らそうと自分の召喚獣の頭の上に落ちてきた金ダライに付いて聞く。

「し、失敗って、どんな失敗だよ！？」

「ん？　詳しく説明するとな」

「……いや、長くなりそうだから良い」

「ん？　そうか。残念だ」

理音は雄二に説明をしようとするが雄二は理音の説明好きな所に火が点くと思ったようで話を切り上げると理音は少しだけ残念そうな

表情をする。

「しかし、今日は勝てなかったとなると明日はキツイよな？」

「前田、最高得点って、どうなってるのよ？」

一先ず、会話を切り上げると明日の最終日の試召戦争の準備もあるため、理音にわからないところを聞きながら自習を始め出すと美波は最高得点者がどうなっているのか気になるようで理音に聞く。

「状況を聞くと面白みに欠けないか？」

「で、でも、凄く気になります」

「……理音、私も聞きたい」

瑞希と翔子も命令権が欲しいようであり、理音との距離を詰めて聞き、

「まぁ、誰がと言うのはさすがに問題がありそうだが、現状でトップを狙えそうなのは、優子、雄二、瑞希、霧島は狙えそうだな」

「え？　あたしも？」

理音はこの場にいるメンバーで最高点数を取れそうな４人の名前を上げると優子はそんなに点数を取っている自覚がないようで首を傾げる。

「……優子はほら、さっき、弟くんに襲いかかるのに前にいた人達を蹴散らして行ったから」

「瑞希は初日から普通に稼いでいるし、雄二と霧島は雄二の身を守るために戦った事で点数を稼いだな」

「……2人の愛の力」

愛子は優子が点数を稼いだのは怒りに任せて秀吉に向かって行った時だと言い、理音は他の3人が点数を獲得している状況を話すと翔子は頬を赤らめ、

「……ボクは雄二の息の根を止めても良いと思うんだ」

「アキお兄ちゃん、ケンカはダメです」

明久は翔子の様子に雄二への殺意を向け始めると怜生が明久の服を引っ張り、明久を引き留める。

# 第４０４問

「前田、ウチはウチの点数はどうなのよ？」

「現状で言えば無理だな。中間より、少し下と言ったところだ」

「な、何でよ？　ウチだって頑張ってるわよ。もう１度、確認しなさいよ。どこかで間違っているはずよ」

美波は自分の点数がどの辺にあるか知りたいようで理音に詰め寄ると理音は美波の順位を中間あたりだと言うが美波は納得できないようで理音に点数を確認し直すように言うが、

「間違いなどあり得ない。だいたい、島田、お前の場合は点数を稼げてないのは当然だからな」

「当然って、どう言う事よ！！」

「……優子や瑞希が連携上手くとっているなか、１人で暴走して駆け出し、１つの戦闘にかける時間が長い。戦闘時間が長いから点数の減りも大きくなり、そこを狙われる。お前を助けるために他の人間がフォローに入るの繰り返し、言い方が悪いが勝手に突っ込んで行って、勝手に囮になって周りに点数を稼がせている」

理音は美波が点数を取れていない理由など明らかだと言うと美波の暴走で迷惑を受けていた優子、瑞希、愛子の３人は何も言えないようで苦笑いを浮かべる。

「男子も一緒だ。雄二や平賀、根本、清瀬を中心とした隊長格の指

示を聞いている生徒はそれなりに点数を獲得しているが、ウチのクラスのバカどもはほとんどが1点も取れていない」

「なら、ウチは今からどうすれば良いのよ!!　それに暴走して駆け出して行ったのは優子だって一緒でしょ!!　それなのに優子は何で点数を獲得してるのよ!!　あんたが何かしてるに決まってるでしょ!!」

「ほう。俺がシステムを管理する上でそんな事をすると思っているのか？」

美波は自分の点数が低いのは理音が優子を贔屓しているせいだと言い始め、その言葉に理音は無表情だが不快感を示しているようである。

「ま、待て。島田、いくらなんでもそれは言い過ぎだ。だいたい、理音がそんな事をするわけがないだろ」

「……理音はそんな事はしない」

雄二と翔子は理音が怒っている事に気づき、美波を落ち着かせようとするが、

「島田、考えても見ろ。お前と優子では自力が違うんだ。総合得点でも１０００点以上、お前の得意な数学でも１００点近く違うのに良くそんな口が叩けるな」

「そ、それは」

「他人に罪をなすりつけている間はあのクズどもと変わらん。これ

からの行動次第ではお前も俺の攻撃対象になると自覚しておけ」

理音はこれ以上は美波の話を聞く気はないようであり、

「ちょ、ちょっと、理音、落ち着きなさい」

「何だ？」

「それは言い過ぎじゃないかな？」

優子と愛子は今の理音がいつもとは違う事に気づき、理音に声をかける。

「俺は落ち着いている。ただ、人の事をここまでバカにしておいて、未だに自分は悪くないと言っている人間相手に話す事はないだけだ」

理音は表情を変える事なく淡々とした口調で話す事はないと話を切り上げ、

「……か、完全に怒ってますね」

「……この理音は初めて見たんじゃないか？　お、おい。明久、どうにかしろよ」

「……無理だと思う」

瑞希と雄二は理音と最も付き合いの長い明久に任せようとするがすでに明久は諦めに入っている。

## 第４０５問

「な、何よ。ウチが悪いって言うの！！」

「当たり前だ。俺はお前に聞かれた事をありのまま話したんだ。怒鳴りつけられる理由がない」

しかし、美波は自分が悪いとなど思ったないのか、もしくは完全に意地になっているようで理音を怒鳴りつけるが理音から返される返答は淡々と冷たい。

「み、美波も落ち着いてよ」

「ウチは落ち着いてるわよ！！」

明久は理音を落ち着かせるのは先に美波を冷静にさせる事が重要だと考え、彼女のに声をかけるが美波が冷静になる事はなく、

「……ちょっと放した方が良さそうね。代表、愛子、姫路さん、島田さんの方は任せて良い？」

「うん。前田くんがいると島田さんは意地になると思うし」

「……こっちはどうにかする」

「はい。前田くんの事をお願いします」

優子は理音と美波の距離を少し開けた方が良いと判断して３人に美波の事を頼み、

「理音、ちょっと良い？」

「……なんだ？」

「良いから、ちょっときなさい」

理音を引きずって自習室を2人で出て行く。

「ちょっと待ちなさい！！　前田、あんた、逃げ……もごもご」

「島田さん、ちょっと落ち着こうね」

理音と優子が自習室を出て行く姿に美波は怒鳴り散らして2人を追いかけようとするが愛子は美波の口を塞ぎ、翔子と瑞希は美波を押さえつけてイスに座らせると、

「怜生くん、こっち」

「……はい」

「……」

愛子は美波が暴れないようにと怜生を美波の膝の上にのせ、美波は膝の上に怜生が乗った事で暴れるわけにもいかないため、不機嫌そうな表情をする。

「あ、あの。美波ちゃん」

「何？　瑞希も前田の味方なんでしょ」

美波は理音は完全に瑞希の味方だと思っているようで頬を膨らませて顔を逸らすと、

「……雄二」

「あぁ。おい。明久、ちょっとこい」

「えっ!?　な、何で？　美波を落ち着かせないと」

「この場は女どもに任せろ」

翔子はこの場所に明久が居てはいけないと思ったようで雄二の腕を突き、雄二は美波を心配している明久を引きずって自習室を出て行く。

「これで、一先ずは良いかな？　Ｆクラスの男子もまだ屍だし」

「……うん」

「な、何よ？　霧島さんも工藤さんも前田の味方なの？」

美波は自分に甘い明久まで連れて行かれた事に完全に自分は孤立させられたと思っているのか愛子と翔子にまで敵意をむき出しにする。

「そうだね。この状況なら、ぼくは前田くんの味方をするよ」

「……愛子？」

「だって、そうでしょ。元々、この試召戦争の原因を作ったのって

島田さんとか吉井くん達Fクラスの男子を疑ったからでしょ」

愛子は美波の様子に1度、大きくため息を吐くとこの状況では美波の味方をするのはバカらしいとはっきりと言い、翔子は愛子の様子に不安そうに彼女の顔に視線を向ける。

「ウ、ウチは謝ったわよ!!」

「『前田くんに言われて』ね。ぼくから言わせて貰えば、誰かに言われたから謝るなんて謝った相手をバカにしてるとしか思えないよ。それに島田さん、前田くんがこの男女間の試召戦争をやるって言った意味を考えた事ってある?」

美波は謝ったんだから悪くないと言うが愛子は美波は本当に明久には謝っていないと言った後、彼女に男女間の試召戦争の意味を問う。

# 第４０６問

「試召戦争の意味？　前田が遊びたいだけでしょ。実際、アキ相手に遊んでたわけだし」

「本当にそう思ってるの？」

「な、何よ。違うって言うの？」

美波は愛子の言いたい事がわからないようで不機嫌そうな表情のままであり、愛子は自分の問いに考える事もなく、自分の感情だけで理音を責めており、そんな美波の様子に愛子は呆れたようにため息を吐く。

「あのままだったら、男子と女子の関係は最悪だよ。男子は自分達は犯人じゃないのに疑われた。それもいわれのない暴力まで受けた人間がいる。吉井くんは女子に甘いから、何も言わないかも知れないけどね。他の男子生徒はわからないよ。実際に初日に覗きに走って前田くんから罰を受けた男子生徒だっているんだし、前田くんはどこまで考えているかわからないけどそれを止めるために試召戦争をしたてあげた」

「……理音が試召戦争を考えてくれなかったら、同じ自習室で自習できたかもわからない」

「吉井くんはかわいそうだよね。犯人って決めつけられていわれのない暴力を受けたわけだし、前田くんはその事に付いても何も言ってないかな？　それが前田くんが吉井くんに謝れと言った事じゃないの？　前田くんは島田さんと吉井くんの事を考えて言ってくれた

んじゃないの？」

愛子と翔子は理音が何もしなかった時の強化合宿の事を聞くと美波は黙ってしまう。

「今日、吉井くん達が騒ぎを起こした時も、あのままの勢いで衝突してきたらとか考えた？　何人、ケガしたかわかないよ。それを止めたのは誰？　前田くんは自分勝手にやっているようでいろいろ見てるよ。自分の事だけしか考えてない島田さんがそんな前田くんを責めれるの？　確かに前田くんは言葉が足りないけどさ。間違った事を言ってる？　試召戦争で暴走しないで欲しいって優子が言った時、優子や小山さんが暴走した人間に最高得点を狙う資格がないって言った時、弓永さんが大将を引き受けてくれた時に島田さんは『自分は悪くない』って自分を正当化していただけでしょ」

「それはだって、アキが……」

「ほら、また、吉井くんのせいにしようとする。自分が点数を獲得できないのは誰のせい？　システムを作った前田くん？　島田さんに指示を出した優子や小山さん？　それとも勝手に暴走した島田さん？　自分の非も認めないの？　正直、ぼくはそんな自分勝手な人の味方はできないよ。強化合宿の行動や前にぼくが前田くんの家に遊びに言った時の事を見させて貰えば、島田さんは自分さえ良ければ良いんでしょ。友達が困っててもどうでも良いんでしょ。実際、ぼくは優子が前田くんと付き合うようになったから、Ｆクラスの人達とも遊ぶ機会が増えただけだし、今の島田さんを見ているとぼくも前田くんも島田さんの友達じゃなさそうだからね」

「く、工藤さん、それは言い過ぎだと思います。美波ちゃんは清涼祭の時に私の事を心配してくれました」

「……」

愛子は今の美波とは友人ではいられないとはっきりと言うと瑞希は愛子は言い過ぎだと反論するが美波は愛子から突き付けられた言葉がかなり堪えているようで顔は真っ青になって行き、

「……自分がどれだけおかしな事をしたか。自覚できた？」

「……うん」

愛子は美波の表情に美波が冷静になってきたと判断したようで改めて聞き返すと美波は弱々しく小さな声で頷く。

# 第４０７問

「……優子、なぜ、俺は自習室を出ないといけないんだ？」

「あのままだと、あんた、島田さんに何をするかわからないでしょ」

「……何をわけのわからない事を言っているんだ？　なぜ、俺が島田を攻撃する必要がある？」

優子は美波と理音を自習室に一緒に置いておくと理音が美波に攻撃をすると思っていたのだが当の本人の理音は意味がわからないと首を傾げる。

「へ？　あんた、何もする気はなかったの？　あんた、島田さんの態度に腹を立ててたでしょ？　今にもあの無駄に攻撃力の高い花火とか姫路さんの料理の栄養剤とか」

「だから、何をわけのわからない事を言っている。あの状態の島田に何を言っても無駄だろ。冷静になるまでは自分の作業に移ろうと思っただけだ。物理攻撃にきた時は交わせば良いしな。それに島田の話を聞いているといくつかやっておいた方が面白そうな事を思いついたからな」

「……何？　あたし達が心配したのは無駄だって事？」

理音は美波の性格を考慮した上で時間を開けようとしたようであり、優子は理音の言葉に顔を引きつらせた後、

「なら、最初から言いなさいよ！！　あんたは言葉が足りないのよ

！！」

「……待て。怒られる理由がわからん」

「……何か、バカらしくなってきたわ」

優子は理音の胸倉をつかんで吠えるが理音は意味が全く理解していないようで首を傾げており、優子は大きく肩を落とす。

「……状況を察するに、お前達は俺と島田が自習室でどちらか一方を『虐殺』すると思ったわけだな」

「……どうしてかしら？　あんたと島田さんだとケンカとかより、『虐殺』って言葉で驚かないのが不思議よね」

「……まぁ、お前や島田、霧島もだな。俺が見る限り、高校一般女子の攻撃力ではないしな」

理音は優子の様子で一先ずは状況を察したようで頷き、

「そうなると自習室には戻らない方が良いのか？　まったく、また、徹夜になるか？」

「……あんたは今度は何をする気よ？」

「ん？　たいした事じゃない。島田みたいに俺とお前の関係で文句を言う人間もいる可能性は否定できないしな」

「別に文句を言う人がいるなら、言わせておけば良いでしょ。だいたい、そんな事を言う人達は点数なんてまともに取れないでしょ…

…清水さんみたいに」

理音は考え付いた作業を進めたいようであるが自習室には戻れないと思ったようでため息を吐くと優子は周りが自習室で自習をしているなか、理音と2人だと言う事を思い出したようで理音との距離を縮めようとした時、廊下の先から理音に向けた殺意をだだ漏らしにした美春に気づく。

「ん？　清水？」

「殺しますわ。前田理音、あなたのわけのわからないシステムでは美春は点数を稼げないではないですか！！　今すぐ美春の点数を最高得点にしなさい。そうすれば、八つ裂きにするだけで許してあげますわ！！」

「……おかしな事を言うな。さっさと自習室に戻れ」

美春は理音におかしな殺意を向けて叫んだ時、大樹が現れて美春の首をつかみ、自習室に引きずって行き、廊下には美春の殺意にまみれた罵声が響き、

「……清水を見ていると俺でも島田がかわいそうに思えるんだ」

「……そうね。島田さんもだけど清瀬くんもね」

理音と優子は2人の様子に眉間にしわを寄せる。

## 第４０８問

「わかったなら、島田さんの次の行動は？」

「……謝る事だけど、前田、きっと凄く怒ってるし、ウチ、昨日も前田に言われたのに」

愛子は美波に反省の色が見えたようで安心したのか苦笑いを浮かべて美波に聞くが彼女は理音の態度から理音が怒っていると思っており、謝りに行くのが気不味いようであり、

「わ、わかってるわよ。でも……」

「……お兄ちゃんは怒ってないです」

愛子と翔子は美波の様子に少し困ったように小さくため息を吐くと美波の膝の上に座っていた怜生が彼女の顔を見上げて理音は怒っていない事を美波に教えるが、

「怜生くん、怒ってるわよ。前田、途中から話もする気無いって感じだったし、だから、優子も前田を連れて行ったわけでしょ」

「……お兄ちゃんは怒ってません。大丈夫です」

美波は謝りに言った時の理音の反応が怖いようで怜生を抱きしめて不安だと口にするが怜生は美波の不安を取り払うようにもう１度、彼女に向かって言う。

「怜生くんはどうして、前田くんが怒ってないって思うんですか？」

「……お兄ちゃん、怖くなかったです。お電話してる時のお兄ちゃんと違います」

「お電話？　誰と？」

「……わからないです」

怜生は理音が怒っている時とは違う事を話すと愛子は理音が電話で怒っていた相手が気になったようで怜生に聞くが怜生は電話の相手に心当たりがないようで大きく首を横に振った時、

「……まったく」

「自分の勘違いを俺のせいにするな」

「ま、前田くん!?　も、戻ってくるのが早いですよ!?」

疲れた様子の優子が理音と一緒に自習室に戻ってきたようで瑞希は美波に踏ん切りが付いてないため慌てるが、

「ん？　島田、頭に上った血は下がったみたいだな。もう少し冷静にならないとそのうち頭の血管が切れるぞ」

「……へ？」

理音は美波の顔を覗き込むと彼女の状況を確認し、美波は怜生の言葉を信じていなかったようでいつもと変わらない理音の様子に頭が処理しきれないようであり、間の抜けた声を発する。

「……優子、どう言う事？」

「……島田さんが熱くなってるから、冷静になるまで会話を切り上げたんだって、まったく、心配したあたし達がバカみたいじゃないの」

「……そ、それはまた、言われると凄く前田くんらしいと言うか」

優子はため息交じりで廊下で理音から聞いた事実を説明すると瑞希、美波、翔子、愛子の４人は妙に納得してしまったようで苦笑いを浮かべ、

「……やっぱり、お兄ちゃんは怒ってなかったです」

「うん。ホントね。ありがとう。怜生くん」

怜生は美波の顔を見て笑うと彼女は理音に謝るための勇気を怜生から貰いたいようで腕の中にある怜生の体温を感じるように１度、しっかりと抱きしめ、

「ま、前田、さ、さっきはごめんなさい。ウ、ウチが言い過ぎたわ」

「……あぁ」

美波は理音に頭を下げるが理音の興味はすでに新しく考え付いた玩具（プログラム）に移っており、反応は薄く、

「前田！！　ウチが謝っているのにその態度は何よ！！」

「み、美波ちゃん！？　お、落ち着いて下さい！？」

理音の反応を見て美波の怒りは再加熱し、瑞希は慌てて美波に落ち着かせようとし、

「……何と言うか。この2人は根本的なところで相性が悪い気がするわ」

「そんな事もないと思うけど、優子、良かったね。島田さんが前田くんを恋愛対象に見る前で」

理音と美波の様子に優子はため息を吐くが愛子は優子と美波には共通する部分が多いため、優子をからかうようにニヤニヤと笑う。

# 第４０９問

「……なんだよ。人騒がせだな」

「まったくよ」

自習室に戻ってきた明久と雄二は理音と美波の争いが勘違いだった事を説明すると雄二は大きく肩を落とし、優子はため息を吐くと新しいプログラムの作っている理音に視線を移し、

「ま、まぁ、何も起きなかったんだし、良かったよ」

「そうなんだけどね……」

「ん？　工藤、何かあったのか？」

明久は２人の事を心配していたため、何もなかった事を喜ぶが愛子は何か考える事があったようで眉間にしわが寄っている。

「ちょっとね……吉井くん、坂本くん、あのさ。電話で前田くんに怒られた事ってある？」

「電話で？　ボクはないよ」

「俺もないな。それに明久の場合は怒られるより、バカにされるって感じだろ」

「そっか。確かにそうだね」

愛子は怜生が電話で怒っていたと聞いた事が気になっているようで明久と雄二に聞くと2人は理音に怒られた事はないと首を傾げ、

「待って!?　工藤さん、そこで納得するのはおかしいよ!?　だいたい、雄二、お前は何を言うんだよ!!」

「あ?　俺は事実を言ったまでだろ」

雄二の言葉が明久は気に入らなかったようで2人はにらみ合いを始め出し、

「……愛子、何かあったの?」

「うん。少しだけ気になってさ。前田くんってあまり感情を表に出すタイプじゃないでしょ。そんな前田くんが感情的になる相手だよ。それを本人に聞くわけにもいかないしさ」

「確かに気にはなりますね」

愛子はそんな2人を気にする事なく、理音を感情的に怒らせる人物の事が何か引っかかっているようであり、瑞希はその言葉に頷く。

「まぁ、留学時代の知り合いだとは思うんだけど」

「あ、ちょっと、工藤さん、ボク、1人だけ、理音が感情的に話をする人間に心当たりがあるんだ」

「ホント!?　誰?」

愛子は苦笑いを浮かべると明久は雄二との睨みあいの途中で何かを

思い出したようであり、愛子は明久の言葉に飛びつく。

「……言い難いんだけど、ボクの姉さん」

「吉井くんのお姉さんですか？」

「う、うん。リオが留学していた近くにボクの姉さんもいるんだよ。姉さんの仕事でちょっと手伝ったような事も言っていたんだけど」

「ん？　そう言えば、理音の初恋の相手って話だったよな」

明久は該当するのは姉である玲だけが理音を感情的にする人間だと言い、雄二は以前に聞いた理音の初恋の話を思い出すと、

「……坂本くん、吉井くん、その話、詳しく教えてくれないかしら？」

理音の初恋の話に優子は食いつき、こめかみに青筋を浮かべて明久と雄二の肩をつかむ。

「ま、待て。木下姉、落ち着くんだ！？　だいたい、俺は詳しい事は何も知らないんだ！？　明久に聞け！？」

「き、木下さん、落ち着いて、痛い！？　痛いから！？」

「そう？　あたしには教えられない事なのかしか？」

優子につかまれた肩はきしみ始め、明久と雄二の顔は苦痛に歪みだし、２人は命乞いを始めるが２人の様子に優子は勝手に勘違いしているようで明久と雄二の肩をつかんでいる手にはさらに力が込めら

れて行く。

# 第４１０問

「優子も落ち着きなよ。初恋は初恋でしょ」

「……初恋は心に残るもの」

「そうです！！」

愛子は優子を落ち着かせようとするが初恋が現在進行中の瑞希と翔子は拳を握り締めて初恋を肯定する。

「「あだだっだだ！！！？？？」」

「……あたしに教えてくれないかしら？」

初恋肯定派の２人の発言に優子のこめかみに浮かぶ青筋はくっきりとしたのものになって行き、その青筋に比例するかのように明久と雄二の肩を絞め上げて行く力は上がって行き、

「……お前らは何をしてるんだ？」

「前田、優子を止めてよ。あんたのせいみたいだから」

明久と雄二の悲鳴に理音は気づき、首を傾げると美波は優子を指差してどうにかしろと言う。

「よくわからんが、優子、放してやれ。骨が折れるとくっつくまで時間がかかるからな」

「……ええ」

「た、助かった？」

「そうだな」

理音は状況は理解できないようだが優子を一先ず、明久と雄二の２人から引き離し、２人は安心したようで胸をなで下ろすと、

「それで、優子は何を怒っているんだ？」

「なんか、前田の初恋の事が気になるみたいだよ」

「何で、そんな話になっているんだ？」

騒ぎの原因が自分の初恋の事である事に意味がわからずに眉間にしわを寄せる。

「それはやっぱり、気になるんですよ。好きな人の初恋とかは、ですから、優子ちゃんを安心させてあげてください」

「ん？　そうなのか。聞いても別に面白いとは思わないんだが」

瑞希は優子の気持ちがわかると想い人である明久をちらちら見ており、理音はその様子に首を傾げると、

「……理音、優子の不安を取り除くのも彼氏の仕事」

「そんなものか？　まぁ、俺だけと言うのもなんだから、せっかくだから、先に明久の初恋から」

「ちょっと待った!?　リオ、お前は何を言う気だ!!」

翔子からの言葉に理音は明久を巻き添えにしようとし、明久は当然、声をあげて理音を取り押さえようとするが、

「前田くん、その話を詳しく教えてください!!」

「アキ、あんた、邪魔よ。ちょっと黙ってなさい!!」

瑞希と美波は明久を押さえつけて、理音に明久の初恋について詳しく話すように詰め寄る。

「ちょっと、何で、姫路さんも美波もボクの初恋に喰いつくんだよ!?」

「……アキお兄ちゃん、それは自分で気付かないとダメだと思います」

「そうだね。吉井くんはもう少し周りを見ないとダメだよね」

明久は瑞希と美波の喰いつきように意味がわからないようで声を張り上げるとそんな明久の様子に怜生と愛子は首を横に振り、

「……がきんちょでも気づくのに本当にこいつは鈍いな」

「そうね」

優子は初恋の事で周りが見えなくなってきている瑞希と美波を見て、少し冷静になってきたように見える。

「前田くん、それで、明久くんの初恋の相手は誰ですか？　私が知っている娘ですか！！」

「そうよ。白状しなさいよ」

「……さて、どうするかな？」

「リオ、行っちゃダメだよ。それはダメだからね！？」

「そうだな」

明久は絶対に知られたくないようで明久に思い直すように叫び、理音は慌てる明久を見て小さく口元を緩ませる。

# 第４１１問

「考え直してよ。だいたい、リオと木下さんの問題であって、ボクには関係ないわけだしさ」

「そうだな。それも確かに言える事だな……」

「……なんか、この光景って見た事があるな」

「そうね。結局、理音があっさりと言う流れよね」

明久が理音に考え直すように説得している様子を見て、優子と雄二は明久の説得など無駄だとため息を吐く。

「冗談だ。これを言っても俺に旨味も何もないからな。知りたかったら、最高得点でも取って自分で聞いたらどうだ？」

「「……」」

しかし、理音の口から出た言葉は２人の予想から外れており、

「な、何でよ！？　もったいぶらずに教えなさいよ！！」

「そうです。前田くん、ここまで引っ張っておいて卑怯です！！」

瑞希と美波はかなり不満なようで距離を詰めて理音を怒鳴りつける。

「た、助かったの？」

「理音にしては珍しい反応ね？」

「うん。絶対にばらされると思ったよ。……まったく、姫路さん本人に聞かれるなんて、恥ずかしいに決まってるだろ。それくらい、わかって欲しいよ」

明久は瑞希と美波から解放された事で安心したようで小さな声でつぶやくと、

「……確かに、本人には聞かせられないわね」

「吉井くん、そうなら、姫路さんに告白したら良いんじゃないの？」

優子と愛子にはしっかりと聞かれており、２人は呆れたようなため息を吐く。

「な、何を言ってるんだよ！？　木下さんも工藤さんも！？」

「照れない。照れない」

「それより、前田くんは大丈夫なの？」

明久は２人に聞かれた事に慌てるが優子も愛子もばらす気もないため、瑞希と美波にからまれている理音に視線を戻すと、

「「……」」

瑞希と美波は理音に言い負かされてようであり、膝を付いて悔しそうに涙を流している。

「……理音、あんた、今度は何を言ったのよ？」

「ん？　聞きたいなら、自分達もこの場で自分の初恋を披露しろと言ったまでだ。瑞希は性格上、絶対に言えないと思っていたが、どうやら、島田もだったとは思わなかったがな」

「……とりあえず、姫路さんは前田くんに弱点を最初から押さえられてたっぽいけど、島田さんも弱点を押さえられたって感じだね」

理音は表情を変える事なく、２人を黙らせた方法を話すと愛子は苦笑いを浮かべ、

「理音、それで、お前の初恋って結局、どうなんだ？」

「ん？　別に面白い事でもないぞ。お前と霧島のようにきっかけになったイベントが起きたわけでもないしな」

「ちょっと待て！？　お前は何を知ってると言うんだ！？」

雄二は理音の初恋の話に戻そうとすると理音は特に面白いものでもないと首を捻り、雄二は理音の口から自分と翔子の名前が出てきた事に驚きの声をあげる。

「ん？　この間、霧島から聞いたんだ。霧島を逃がして上級生３人とケンカとはなかなか男らしいじゃないか」

「……でも、ケンカは良くないと思います」

「……あの時の雄二、凄くカッコ良かった」

理音と怜生は翔子から話を聞いたようであり、雄二は余計な事を話した翔子を睨みつけようとするが翔子はその時の事を思い出しているようで顔を赤らめている。

# 第４１２問

「翔子！？　お前は何を言って回ってるんだ！？」

「……理音が私と雄二の結婚式で流す２人の軌跡はスライドじゃなく、フルＣＧで作ってくれるって言うから」

「次世代発表の新技術で再現しようかとも思っているんだが、お前たち２人の結婚式を発表の舞台にするのは流石にどうかと思ってな」

雄二は恥ずかしさのあまり翔子を怒鳴りつけるが理音と翔子、２人の天然には怒鳴る程度では効果があるわけもなく、

「お前は何をするつもりだ！？」

「安心しろ。特許くらいは軽く取れるくらいの新技術だ」

「安心の意味が分かんねえよ！？」

雄二は本気か冗談かわからない理音の言葉に完全に翻弄されている。

「これは前田くんの初恋話はお流れかな？」

「そうみたいね」

「あれ？　優子、反応が薄くない？　さっきの勢いはどうしたの？」

愛子は理音の初恋の話から方向がずれている事に少しだけ残念そうに言うが優子はかなり冷静になったようで反応は薄い。

「だって、冷静になるとなんか聞くのって怖くない？　よく、テレビとかで初恋は特別とか言うし」

「でも、気にならない？　前田くんなら、隠さずに教えてくれると思うけど」

「そ、そうだけどさ」

どうやら、優子は冷静になったせいで理音の初恋の相手と比べられる事を考え始めたようで聞くのが怖くなってきたようだが、

「ここは聞かないとダメよ。優子」

「そうです。前田くんの気持ちを確認する上で絶対に聞いておいた方がいいと思います！！」

瑞希と美波は単純な好奇心なのか理音の弱点を押さえて起きたいのか、優子に詰めより、

「で、でもさ。そう言うのってやっぱり、ちょっとルール違反な気もするし」

「実際は、優子が前田くんが初恋の人に負けないように頑張れば良いわけだしね」

「そ、そうよ。だから、この話はここでお終い。終わりよ」

優子は2人の勢いに押されながらもこの話を切り上げようとした時、

「……姉さんと木下さんはタイプがまったく違うよね？」

明久は悪意などなく、ふと姉である玲と優子の印象はまったく違うと口を滑らし、

「理音、坂本くんと代表の話は後よ。先にあんたの初恋の話を教えなさい！！」

「……吉井くん、せっかく、話の収拾がつきそうだったのに」

「……うん。ごめん。悪気はまったくなかったんだよ」

優子は明久の一言で、再び、スイッチが入ったようで理音との距離を詰めて行き、２人の様子を見た明久は申し訳なさそうに愛子に謝る。

「優子、今更だが、そんなものを聞いてどうするんだ？」

「良いから、話しなさいよ！！」

「別に聞いても面白くはないんだがな」

理音は優子がここまで熱くなっている理由がわからないようで首を傾げると、

「俺の場合はさっきも言ったがあまり面白いものでもないぞ。年上の姉さんに憧れるのはよくある事だろ。それがアキの姉である玲さんだっただけだ。それが初恋なんだろ」

「それだけ？」

「だから、面白いものではないと言っただろ。ただ、そうだな……」

理音は表情を変える事なく、自分の初恋を憧れだと言い切るとあまりのあっけなさに優子は呆けるが理音は他にも何かあったようで優子を眺め、

「サイズはあるか？」

「死ね！！」

優子と玲の1部分を比較した感想を述べると優子からは理音の顔面に向けて渾身の右ストレートが飛ぶ。

## 第413問

「……あれを交わすんだ」

「……今更だけど、優子の攻撃って常識から外れてるよね？」

「ん？　なぜ、わざわざ、喰らう必要がある？」

しかし、優子の渾身の右ストレートが理音の顔を打ち抜く事はなく、明久と愛子は顔を引きつらせるが理音は気にする様子もなく、

「前田、あんた、やっぱり、ウチの敵ね」

「え、えーと、美波ちゃん、落ち着いてください」

理音が玲と優子の胸のサイズを比較したせいか、優子と同等のサイズの美波は再び理音へと殺意を向け始める。

「わけのわからない事を言うな。だいたい、何度も言わせるな。最近はサイズじゃないと理解したと言っているだろ」

「……前田くん、男らしいんだけど、それを怜生くんの前で言うのはどうかと思うんだよ」

理音は優子と美波から向けられる殺意に眉1つ動かす事はなく、価値観は変わったと言い切ると愛子は怜生の前で話す事ではないと苦笑いを浮かべ、

「それもそうだな。だいたい、優子も島田もだが、そこまで気にす

る意味がわからん」

「そうですよ。大きいと肩がこったり大変な事だって……」

「姫路さん、それは今は言っちゃダメかも」

瑞希は胸が大きいのは大きいで大変だと言いかけるがそれは優子と美波の怒りを誘う言葉でしかなく、彼女は2人に両脇に抱えられ、

「ゆ、優子ちゃん、美波ちゃん、ど、どうしたんですか！？」

「……姫路さん、ちょっと話したい事があるのよ」

「……そうよ。付き合ってくれない」

瑞希は2人に連れられて自習室を出て行く。

「……大きいのは大変なのか。そうだよね。姫路さんはあれだけ大きいわけだし、でも、やっぱり、大きい方が見ててぐっとくると言うか。待てよ。どこから、肩がこるんだろう？　姫路さんは推定Fカップとして、美波と木下さんはたぶん、Aカップだから、これはムッツリーニと討論するべき議題だよね？」

「アキ、そう言う独り言は人に聞こえないところで言った方が良いんじゃないか？」

「吉井くんも男の子だね」

明久は瑞希の言葉からいろいろなものを考え始めたようで1人でぶつぶつと言い始めるがその言葉は本能に忠実なのが駄々漏れであり、

理音と愛子は明久の様子に呆れたように声をかける。

「……な、何でもないんだ!?　き、気のせいだよ!?　ボクはおかしな事なんて考えてないよ!?」

「説得力がない。だいたい、お前と秀吉が巨乳好きなのはすでに町内に知れ渡っている」

「ちょっと待て!?　町内ってどう言う事だよ!?　せめて、学園内って言ってよ!?」

「……それでも充分に恥ずかしい事だと思うけど」

明久は慌てて否定しようとするが理音は今更、気にする事ではないと言い切るがその範囲は明久が思っていたよりも広範囲であり、明久は驚きの声をあげる。

「なら、学園内にしとくか?　ん?　そうだ。この間、葉月にアキはどんな女の子になれば喜んでくれるかと聞かれてな。アキは巨乳好きだと言ったら、これから島田と一緒に牛乳を飲んだり、キャベツや鶏肉を食べると言っていたぞ」

「葉月ちゃんに何を吹きこんでるのさ!?」

「大丈夫だ。よく言われる食品には何の科学的な根拠もないから」

「……前田くん、それも違うと思うよ」

理音は明久の様子に何かを思い出したようで葉月にも明久が巨乳好きだと言う事を教えた事を話すと愛子はやはり世間からずれている

理音の様子にため息を吐く。

# 第４１４問

「ん？　そうか。聞かれた事を教えただけなんだが」

「……そう言うところ、変わらないよね」

理音は愛子がため息を吐く理由が理解できないようで首を傾げると愛子は出会ってから変わらない理音の様子に苦笑いを浮かべる。

「リオ、そう言えば、明日の試召戦争って何をする気？」

「ん？　聞いてどうするんだ？　と言うか、明日を楽しみにしていれば良い」

「……いや、おかしな事にしかならない気がするんだけど」

明久はこれ以上、おかしな事実を聞かされると心が折れそうなため、話題を変えようとすると理音はくすりと笑うが明久は理音の表情に不安しか感じないようであり、

「まぁ、ボクはほとんど点数を取ってるわけじゃないから、あまり関係ないんだから良いんだけどね」

「そう思いたいなら、そう思っておけば良い」

明久は現実から目を逸らそうと最高得点には程遠い自分には関係ない話だと言おうとするが理音は彼特有の邪悪な笑みを浮かべている。

「……リオ、ごめん。もう1度、聞くよ。明日は何をするつもり？」

「前田くん、ぼくも教えてほしいかな。ぼくも最高得点は取れなさそうだし、それを聞けば、明日は何かやる気になれるかも知れないしね」

明久と愛子は理音の考えている事を説明して欲しいと言うと、

「まぁ、簡単に言えば救済処置だ。点数が最高得点に届かない人間は最終日はやる気が起きないだろ。明日1日で最高得点を取った人間には命令権以外の何かをやろうと思ってな。それの準備をしていたんだ」

「確かにそれならやる気は出る生徒もいるかな？」

「賞品って、何を考えてるの？　何か特殊な腕輪とかかな？」

理音は最終日の試召戦争で考えている計画を話すと明久と愛子は興味が湧いたようで理音に賞品に何を考えているか聞き、

「腕輪は流石に無理だ。そこまでの時間はないからな。まぁ、一応は如月グランドパークのペアチケットと学食の食券1万円分くらいだ。ペアチケットでもあれば命令権はなくても少しくらいは頑張るだろ。まぁ、点数を取れるかは俺には関係ないがな」

「前田くん、優しいね」

理音は表情を変える事なく賞品の事を話すと愛子は美波とのやり取りも見ていたためか、これが理音なりの優しさであると気づきくすくすと笑うが、

「食券1万円分？　それにペアチケットも売れるよね？」

「……吉井くん」

隣で明久は目の前にぶら下がったエサに目を輝かせ始め、愛子は明久の予想外の喰いつきにため息を吐く。

「……チケットは非売品にした方が良いか？　売った場合は罰ゲームがあるとか」

「吉井くんが取った場合はそうしようよ……でも、仮に吉井くんがチケットを取ったら、姫路さんと島田さん、どっちを誘うと思う？」

理音と愛子は明久の様子に呆れるが愛子はそれより、もっと面白い事を多い浮かんだようで理音に明久が選ばないといけない2択について聞くが、

「何かを勘違いして、瑞希と島田、2人で行けと言いだすか、霧島に譲渡」

「……どうしてかな。その光景しか目に浮かばないよ」

理音は明久が瑞希と美波を選ぶ事はあり得ないと言い切り、愛子は理音の言葉に顔を引きつらせると、

「他人の事を心配する前に自分で取って、康太でも誘え」

「な、何を言ってるんだよ!?」

理音は愛子の顔を見てくすりと笑うと彼女をからかい、愛子は顔を

真っ赤にして慌てる。

# 第４１５問

「康太の性格上、お前の好きな乙女ちっくな展開にはならないと思うぞ。待ってても無意味だ」

「だ、誰が乙女だよ！？　ボ、ボクはそんなものに興味なんかないよ！？」

理音は慌てる愛子の様子にくすりと笑うが愛子は理音の言葉を全力で否定しようとするが、

「愛ちゃん、こうたお兄ちゃんの事、嫌いですか？」

「あ、あう」

怜生が愛子の服を引っ張り、不安そうな表情で愛子の顔を覗き込むと愛子は目を泳がせ、

「怜生、工藤は康太を嫌ってるわけじゃないから責めるな」

「……はい」

理音は怜生を呼ぶと怜生は理音の言葉に素直に頷いて理音の膝の上に隣に座り、

「興味を引きたいのはわかるが根本的なものが間違っていると思うぞ。お前のアタックは下手したら康太が死にかねない。ベクトルが違うがお前のアタックは島田や霧島と変わらん」

「……あの2人と一緒は嫌かな？」

理音は愛子に向かい少し素直になるように言うと愛子は苦笑いを浮かべる。

「狙ってみたら、どうだ？　せっかくだしな。俺としては工藤も康太も数少ない友人だからな。なるべく、応援してやりたい」

「それは島田さんに言わなくても良いの？」

「あっちより、一先ず、お前たち2人の方が早くまとまりそうだしな。それにアキがチケットを取っても進展はない気がする」

理音はくすりと笑うと愛子は視線を逸らしながらチケットは美波のために用意したんじゃないかと言うが理音は未だにチケットの売却費用を何に使うか考えてぶつぶつとつぶやいている明久を見て眉間にしわを寄せると、

「……それはあんまり応援されてる気がしないかも」

「ん？　そんな事はないぞ。それに発破をかけるだけでも大部、変わってくるだろ。違うか？」

「……」

愛子は理音に明久を見限った代わりで応援されていると思ったようで少し頬を膨らませるが理音はそんな事はないとくすりと笑い、愛子は理音の言葉に気まずそうに視線を逸らす。

「後はお前は俺と優子の時も秀吉と本宮の時も応援していただろ。

なら、俺が応援してもおかしくないだろ」

「……何か、上手く乗せられてる気がするんだけど」

理音は愛子がしてきた事が戻ってきただけだと言い、愛子は小さくため息を吐くと、

「乗せられてると思うなら乗せられておけ。前に進む気持ちになるならそれで良いだろ」

「そうなのかな？」

「あぁ。そんなものだ。まぁ、最高得点を取れるかはわからないけどな。まぁ、欲しかったらチケットくらいは用意するぞ」

「……それは遠慮しておくよ。それは何か卑怯だし」

理音は愛子が最高得点を取れなくても愛子が望むならチケットくらいは用意するとつもりのようだが愛子は苦笑いを浮かべる。

「なら、頑張れ。ああなった。アキは強いぞ」

「……そうだね。だけど、目的の方向は間違えないで欲しいよ」

「……ボクの日本史と世界史ならＡクラスにも簡単に負けないはずだから、後は雄二の部隊だと絶対に囮扱いにされるから、根本くんはイヤだし、平賀くんの部隊に志願して」

理音と愛子はチケット獲得のために方法を考え始めている明久を見てため息を吐く。

## 第４１６問

「最終日の最高得点者には別枠で賞品ね」

「何だ？」

優子、瑞希、美波の３人が自習室に戻ってくると理音の考えている最終日の賞品に優子は首を傾げ、

「ねえ。命令権より、そっちの方が良いと思う人っていない？」

「確かに命令権はデートも自腹だしね。誘い難いってのはあるかも」

「……そう言われるとそうだな」

優子は疑問に思った事を口にすると理音は眉間にしわを寄せ愛子は苦笑いを浮かべる。

「それなら、総合の優勝者にも何か賞品を追加しなさいよ」

「……島田、お前は簡単に言うな」

美波は明日の最高得点だけでも欲しいようで教科書を片手に特に考える事なく賞品を追加するように言い、理音はため息を吐くと、

「流石に次から次と賞品は追加できないよね」

「何？　あんた、お金持ってるんだから、それくらいできるでしょ」

愛子は苦笑いを浮かべるが美波は理音が世界的な科学者でもある事からそれくらいは簡単だと思っているようであり、

「島田、お前は俺に怜生や葉月になんでも買い与えるなと言うのに自分はずいぶんと勝手な事を言うな」

「そうね。それはどうかと思うけど」

「う。そう言われれば、そうかも知れないけど、今回は勝利に向かってみんな頑張ってるわけだし、それとは違うでしょ」

理音は普段、美波に言われている怜生の教育方針と今の美波の考えは矛盾している指摘すると美波は理音の言葉に納得する事もあったようで少し気まずそうに視線をそらすが彼女の性格上、直ぐに自分の間違いを正す事はない。

「実際、理音、お前、最終日の賞品は問題ないのか？」

「たいした金額ではないからな。ペアチケットに関してはお前らのウェディング体験の成功もあるから、如月グループも好意的だしな。あまり、俺の懐は痛まない」

「……ずいぶんと簡単に言うな」

雄二は理音に賞品の事を確認すると理音は表情を変える事なく言い切り、雄二は先日のウェディング体験の事を思い出してため息を吐くと、

「……そのチケットにも如月グループのおかしな思惑が入ってなければ良いけどな」

「……」

「……おい。理音、お前、今、目を逸らしただろ？」

雄二ウェディング体験には如月グループがおかしな考えを混ぜ込んでいたため、今度のチケットにも何かないかと勘繰るように言うと理音は雄二から目をそらすように視線をパソコンのディスプレイに戻す。

「ん？　気にするな。あまり、おかしな事はないはずだ。だいたい、お前と霧島はもう目を付けられているんだ。関係ない」

「……それはまたウェディング体験になるってことか？」

「何度も同じ事はしないだろ。今回は神前だ」

「変らねえよ！？」

理音の言葉に雄二は声をあげると、

「……頑張る」

「はい。頑張ります」

理音と雄二の話に聞き耳を立てていたようで瑞希と翔子に火が点き、

「おい。理音、どうしてくれるんだ？」

「霧島が勝ってもお前らは教会か神前を選ぶかの選択肢が増えるだ

けだろ。気にする事ではない」

雄二は翔子のやる気に身の危険を感じたようで理音につかみかかるが理音の反応は当然、薄い。

# 第４１７問

「まぁ、霧島に最高得点を取らせないように早めに倒せば良いだろ」

「あのな。翔子を倒すってなると保健体育でムッツリーニをぶつけるか、日本史か世界史で明久をぶつけるかだろ」

理音は雄二の様子にルールを思い出せと言うと雄二は翔子を倒せる駒は男子生徒には限られているため、ぶつぶつと何かを考え始める。

「へぇ、坂本くんも吉井くんを評価してるのね」

「それだけ、操作性と言うのは重要な要因（ファクター）と言う事だ。お前は召喚大会で対戦してるんだ。わかるだろ？」

「……そう言えばそうね」

優子はいつもはいがみ合っているようにも見える雄二が持つ明久への評価に驚いたような表情をするが理音は召喚獣の操作の重要性を話し、優子は召喚大会で明久に攻撃がなかなか当たらなかった事を思い出したようで苦虫をかみつぶしたような表情をすると、

「……実際、召喚獣の操作で言えば、アキほどではないがＦクラスはお前らより上だ」

「そうなの？」

「あぁ。実戦は何よりの練習だからな。最初の試召戦争を考えればな」

理音は冷静に召喚獣の操作が上手い人間がFクラスに集まっていると言う。

「そうなの？　前田くん」

「あぁ。待ってろ……」

愛子は理音と優子の話を聞いていたようで理音に確認すると理音はパソコンのキーボードを叩き、

「……理音、あんた、どんだけ、データを集めてるのよ？」

「必要だからな。召喚システムのバージョンアップなどを考えるとデータがあって困る事はない。それを使いきれるかは俺と妖怪ばばあしだいだけどな」

ディスプレイには優子や愛子になら見せてもよさそうな明久達Fクラスの主力の成績や理音の評価の操作技術と言った多くの情報が書き込まれており、優子は細かすぎるデータに顔を引きつらせるが理音は気にする事はなく、

「ねえ。前田くん、ひょっとして、今回の男女間の試召戦争もデータ収集のために仕掛けたの？」

「ん？　これに関しては結果だ。元々は普通の講義？　……」

「理音、どこに行くの？」

愛子は理音の持っているデータに苦笑いを浮かべると理音は何かを

思い出したようで勢いよく立ちあがり、優子は理音を呼び止める。

「特別講義の事をすっかり忘れていた。島田、準備もあるから行くぞ」

「えっ!?　ちょ、ちょっと待ってよ!?　ウチは人の事を気にしているほど時間はないのよ!?」

「良いから行くぞ。学園側の都合で協力させてるんだ。少しくらいは明日の点数にサービスしてやる」

理音は特別講義の時間が近くなっている事に気づいたようで美波を引きずって自習室を出て行き、

「そう言えば、すっかり忘れてましたね」

「昨日も今日も理音の特別講義はまともにやってないわよ。何か、普通の授業になってるし」

「まぁ、今は医療系や語学系の特別講義よりは前田くんに質問できる時間の方が貴重だしね」

瑞希は明久の勉強を見ていたため、特別講義には出ておらず、理音の慌てように苦笑いを浮かべるが特別講義に参加していた優子と愛子は普段の授業をあまり変わらないとため息を吐く。

# 第４１８問

「結局、今日も変わらないわけね」

「そうみたいだな」

「清瀬くんも常連様だね」

理音の特別講義は本日も自習の質問会場になっており、忙しそうに質問に答えている理音の様子に優子と愛子、初日から特別講義に参加している大樹は苦笑いを浮かべている。

「でも、清瀬くんは良いの？　特別講義が目当てだったんじゃないの？」

「別に俺は最近、ウチの園児も英語の塾に行ってる子供も多いから、その子達の相手をするためだから、なかったらなかったでもかまわないんだよ」

「そこまで割り切れるのってある意味、才能よね」

愛子は理音に質問をするわけでもなく、自習を行っている大樹の様子に疑問を持ったようであるが大樹は特に気にした様子もないため、優子は眉間にしわを寄せると、

「いや、色々と割り切らないと生きていけない１７年間だったから」

「……清瀬くん、本当に清水さんで良いわけ？」

大樹は苦笑いを浮かべて今までの人生を振り返ると優子の眉間のしわをいっそう深くなって行き、

「それを聞かれると俺も木下さんと工藤さんにも良いのか？　って聞きたくなるんだけど」

「「……」」

大樹は優子の様子にニヤニヤと笑って2人に反撃を仕掛けると優子と愛子は大樹からの思いもよらない攻撃に何があったかわからないようで鳩が豆鉄砲を喰らったような表情をする。

「まぁ、前田は表情がないけど、怜生くんを見てると良い奴なんだと思うしな。でも、土屋は同性としてはどうなんだって思う。女の子からは敬遠される感じだろ？」

「……それは否定できないかもね」

「ねえねえ。正直な話を聞いても良い。清瀬くんって土屋くんのムッツリ商会ってどう思ってるの？」

大樹は康太の事を聞くと愛子は気まずそうに視線を逸らしており、大樹の言葉に優子は何かあったようで大樹に康太のやっている『ムッツリ商会』の事を聞くと、

「まぁ、好きな子の写真を欲しいのはわからなくもないんだけどさ。それにしても盗撮は不味いだろ。それに写真なら一緒の写真か土屋が撮った奴より、自分で撮った奴を持っていたくないか？　それを買うのはちょっとな」

「……これがFクラスの人達とモテる人の違いかな？」

「ねえ。愛子、清瀬くんって、モテるの？」

大樹は苦笑いを浮かべて自分は康太から写真を買う気はないと言うと愛子は大樹が女子生徒から人気があるとつぶやき、優子は初めて聞いたのか愛子の服を引っ張る。

「清瀬くん、人気あるよ。前田くんだけじゃなく、清瀬くんのうちに弟や妹が通ってる子もいるし、優子は前田くんと一緒に怜生くんを迎えに行くんでしょ。見た事ないの？」

「……そう言われると見た事があるわね」

「これだから、彼氏持ちは他の人気のある男の子の情報に疎い」

愛子は優子の様子に少しだけ呆れたようであり、優子は気まずそうに愛子から視線を逸らし、

「まぁ、ウチにくるお母さんたちから、既に前田と木下さんは夫婦扱いされてるし良いんじゃないか？」

「それもそうだね。優子は問題ないね」

「な、何を言うのよ！？」

大樹と愛子は優子をからかうと優子は顔を真っ赤にして大声で否定した時、

「優子、うるさいぞ。真面目にやっている人間もいるんだ。騒ぐな」

「……う、うん」

教室の前から理音の声が響く。

# 第４１９問

「……お兄ちゃん」

「ん？　どうかしたか？」

特別講義が終わって自習室に戻ると怜生は理音に駆け寄り、理音は怜生を抱き上げると、

「……ひでよしお兄ちゃんがおかしいです」

「秀吉がおかしい？　……良いか。怜生、気にするな。秀吉は優子の弟だから仕方ないんだ」

「……あたしって、あんなのなの？」

「まぁ、否定できないかな？」

「そうね。噂に聞くとあんな感じなのよね」

怜生は秀吉を指差し、理音が秀吉に視線を移すと秀吉は葵から名前で呼ばれた事に浮かれるを通り越して、葵を名前で呼ぶ時の事を考えているようで１人芝居を行っており、理音はその様子を怜生に見せてはいけないものと判断すると理音と一緒に教室に戻ってきた優子は眉間にしわを寄せ、愛子と美波は苦笑いを浮かべる。

「……妄想は血筋か？　血に眠るものとは興味深いな」

「ちょっと、理音、おかしな事を言わないでよ！？」

理音は怜生に秀吉を見せないように座ると優子と秀吉が似ている事を血筋だと判断したようだが優子は慌てて理音の言葉を撤回させようとすると、

「……そうだな。血筋だけでは計り知れない物もある」

「な、何、理音？」

理音は瑞希に勉強を教わりながら自習をしている明久に視線を移し、明久は理音の視線に何か感じたようである。

「いや、おじさんとおばさんの才能、玲さんの才能から考えると残りカスと言っても良いのかと思ってな」

「ちょっと待て！？　さすがにそれは酷いだろ！？」

理音は明久をかわいそうなものを見るような視線で明久を『残りカス』と例えると明久は理音が言いたい事がわかったようで声をあげるが、

「そうだな……才能に偏りがある事やＭ気質と考えると間違いなく血筋だ」

「ちょっと待て！？　リオ、また、お前は何を言うつもりだ！！」

「ん？　いや、おじさんとおばさんの関係を考えるとお前は完全にＭだろ？　玲さんもＳかＭで考えるとＭ気質だしな」

理音は気にする事なく明久をマゾと言い切り、

「ぬおぉぉぉ!?　な、何でお前はみんなの前でそんな事を言うんだ!?」

「明久、心配するな。お前がMなのはみんな知ってるから」

明久は理音の言葉に頭を両手で抱え込むように叫ぶと雄二はニヤニヤと笑って明久に止めを刺す。

「なるほど、だから、前田くんと相性が良いんだね」

「……それなら、ウチももっと攻めても良いのよね?」

「わ、私も頑張ります」

「……姫路さん、島田さん、それは間違ってるからね」

愛子は明久の様子に理音と明久の関係が成り立っている原因だと思ったようで大きく頷くと瑞希と美波はまた何かを勘違いしているようであり、優子は大きく肩を落とすと、

「理音、いつも言ってるけど、怜生くんにおかしな事を教えないでって言ってるでしょ!!」

「おかしな事?　何を言ってるんだ?　どんな事であろうと知識とは必要なものだ。怜生が学ぶのを止めてアキやウチのクラスのバカどもと同じ道を歩いたらどうするんだ?」

「それはそうかも知れないけど、教える頃合いってのがあるでしょ!!」

理音に怜生の教育上良くない事は教えるなと叫ぶが理音は気にする事はない。

# 第４２０問

「……お姉ちゃん」

「何、怜生くん？」

優子が理音を怒鳴りつけている様子に怜生は優子の腕をつかみ優子は怜生の行動にに笑顔を向けると、

「……マゾ。『マゾヒスト』、『マゾヒズム』の略。『性的に被虐趣味の人』。対義語はサド？」

「……」

怜生は幼稚園児が知っていてはいけないであろう言葉を発し、優子は怜生の言葉を頭が処理するのを拒否しているようで目を泳がせるが、

「『被虐趣味』ってなんですか？」

「理音、あんたは本当に何を教えてるのよ！！！！」

怜生はまだ理解していない言葉もあるため、首をかしげて優子に質問し、優子は怜生におかしな事を教えた理音の胸倉をつかんで叫ぶ。

「……待て。これに関しては俺は教えた記憶はない」

「じゃあ、誰が教えるのよ！！」

「そうだな。該当者は康太以外にも居過ぎてわからん」

「……納得しちゃいけないんだけど、納得するしかなさそうなのね」

理音は今回の件に関しては本当に教えた記憶がないようで首をかしげ、優子は理音が誤魔化そうとしていると思ったようでさらに追及をするが理音は未だに屍の山になっているFクラスの生徒を指差すと優子は納得するしかないようで眉間にしわを寄せると、

「……さっき、アキお兄ちゃんがゆうじお兄ちゃんはマゾだって言ってました」

「吉井くん！！」

「アキ、それは事実だが性癖は人それぞれなんだ。言って回るな」

怜生は理音ではなく明久に教わったと言い、優子は明久を怒鳴りつけるが対照的に理音は特に気にした様子もなく、

「仕方なかったんだよ。リオや木下さん達が特別講義の間に雄二が霧島さんにアイアンクローを受けてる姿を見て、怜生くんが泣き出しそうになったから、あれは愛情表現だって言うしかなかったんだよ」

「だからと言っても言い方があるでしょ！！　坂本くんがMなのは吉井くんと一緒で文月学園の常識だとしても怜生くんに教える事じゃないでしょ！！」

「ちょっと待て！！　木下姉！！」

明久は優子の怒りの様子に慌てて怜生に余計な事を教えるに至った経緯を話すと優子は明久に説教を開始しようとするが優子の言葉に納得がいかない雄二は声を張り上げるが、

「……霧島、雄二はMだから、多少の攻撃はかまわないがあまり過剰な攻撃だと後遺症の面も考えて止めざる得ないからな」

「……わかった。雄二が壊れないよう悦んでもらえるように頑張る」

理音は雄二の後ろで邪悪な笑みを浮かべると翔子に余計な事を吹き込み、翔子は雄二を喜ばせるために努力したいようで両手を握りしめて気合を入れる。

「怜生くん、ちょっとお散歩に行ってこようか？」

「……はい」

愛子は理音と翔子の様子にこれから起きるであろう惨劇を怜生に見せてはいけないと判断したようで怜生を自習室から出て行くと、

「しょ、翔子、お前は何がやりたいんだあぁぁぁ！！！？？？」

「……雄二、嬉しい？」

「嬉しいわけがあるか！！」

翔子の指は雄二の頭に伸ばされてがっしりと彼の頭を絞め上げ、雄二の悲鳴が自習室に響いた時、

『坂本雄二、霧島さんといちゃつくなど許せるか？』

『……坂本雄二は我らが誇り高き異端審問会の名を汚す裏切り者だ』

ゆっくりと屍の山から嫉妬の混じった視線を込めたFクラスの生徒が立ち上がり始める。

# 第421問

「ん？　復活したか」

「……前田、あんた、冷静よね」

理音は復活し始めたFクラスの生徒の様子を表情を変える事なく見ていると美波は大きくため息を吐くが、

「……アキの事じゃないとお前もそれなりに冷静だな」

「何、わけのわからない事を言ってるのよ？」

理音は明久が女子生徒と話をしているだけで殺気をまとう美波が雄二相手だとどうでも良さそうにしている姿に小さく肩を落とすと美波は怪訝そうな表情をする。

「あ、あの。前田くん、美波ちゃん、そんな事より、皆さんをどうにかしないと坂本くんが危ないんじゃないでしょうか？」

「良いんじゃない。坂本、Mだし、ウチ、回復試験の申請してくるわ」

「島田、ちょっと待て！！　誰がMだ！！」

瑞希は目の焦点が合っていないにも関わらず雄二への嫉妬だけで立ち上がり始めたクラスメート達の姿に顔を引きつらせるが美波は雄二にかまっているより、自分の回復試験の方が重要なようで試験を受けると立ち上がるがM扱いされた上に大量の殺意を受けている雄

二は納得がいくわけもなく声をあげるが、

「前田、回復試験が終わったら、他の教科の自習にも付き合って点数の減った教科を優先的にあげるから……違うわ。古典、ウチが古典ができないのはばれてるから、昨日も今日も古典で仕掛けられる事が多かったから、少しでも点数をあげてやるわ！！」

「あぁ。わかった」

美波は自分の点数を冷静に見えるくらいに今は落ち着いているようで理音に勉強を見てくれるように頼むと時間が惜しいようで急いで自習室を出て行く。

「おい。理音、そこで落ち着いているのは良いんだけどな。俺を助けようとは思わないわけか？」

「ん？　Mだし、必要ないだろ」

「ちげえよ！？　何で、俺がM扱いされねえといけねえんだよ！！」

雄二は自分に向けられる殺意をどうにかしたいため、原因を作った理音にどうにかするように叫ぶと、

「そうだな。MはMでも相手が霧島じゃないとダメなんだったな。まぁ、上手く行っていると言う事だし問題はないな」

「……雄二」

「ち、ちげえよ！？」

理音は雄二が翔子限定のMだと言い切り、翔子は頬を赤く染めて照れたように目を伏せる姿に雄二は声をあげるがそんな雄二と翔子の様子にFクラスの生徒の殺意はさらに1段階引き上げられ、空間が歪んでいるようにも見える。

「ふむ。嫉妬でここまで行けるのは才能なのか？」

「ち、違うと思いますけど、で、でも、嫉妬したくなるのは少しわかります」

「……瑞希、余裕を持って信じてくれるのも好感度がアップするかも知れないぞ。あんなのを見せられた人間はだいたい離れて行くからな」

「そ、そうなんですか！？」

理音は嫉妬の塊に眉間にしわを寄せると瑞希は自分も嫉妬深いため、少しFクラスの生徒達の気持ちもわかるようだが、理音は何度も瑞希に注意している事だと言いたげに彼女に言い聞かせようとし、瑞希は驚きの声をあげる横で、

「遊んでないでどうにかしろ！！」

「……待って、雄二」

雄二はクラスメート達の嫉妬に耐え切れなくなり、逃げるように自習室を出て行き、その後を翔子とFクラスの生徒が追いかけて行く。

# 第422問

「前田くん、今更ですけど、坂本くんを助けなくて良いんでしょうか？」

「ん。知らん。あれは雄二と霧島の問題だからな。愛の逃避行なんだ。部外者が何かを言うのは野暮と言うものだ」

「愛の逃避行ですか？　そ、そうですね。そんな素敵なものは翔子ちゃんのためにも邪魔をしてはいけませんね」

瑞希は雄二の命を初めは心配するが理音の口車に乗り、翔子の幸せを願っているようで顔を真っ赤にして妄想の世界に飛び出そうとするが、

「……瑞希、優子のおかしなところをマネするな」

「そ、そうですね」

「ちょっと、理音、姫路さん、それってどう言う事よ！！」

理音は瑞希が妄想の世界に飛び込むのを止めると例えられた優子は面白いわけもなく不服だと言いたげに声をあげる。

「ん？　何を言ってる。今更だろ。あれを見てみろ」

「……秀吉、あんた、あの騒ぎの中でもあのままなの？」

「優子は1人で机で笑っているだけだが、秀吉は動きが点く分、う

っとうしいな」

「……リオ、それは少し言い過ぎじゃないかな？」

理音はクラスメート達が雄二を追いかけていた騒ぎの中でも未だに1人で妄想で演技を続けている秀吉を指差すと優子は眉間にしわを寄せるが理音は優子の様子など気にする事なく、優子と秀吉を見比べて秀吉をうっとうしいと言い切り、明久は理音の様子に苦笑いを浮かべると、

「あれ？　そう言えば、吉井くんって、ＦＦＦ団って言うあのおかしな軍団に入団しているのよね？　それなのにここに居て良いの？　それに秀吉は葵と付き合ってるのに制裁の対象にならないの？」

「……優子、それを聞くのはどうかと思うんだが」

優子は明久がクラスメート達と一緒に雄二を追いかけて行かなかった事に首を傾げる。

「え？　だって、秀吉は美少女だよ。葵ちゃんと2人の美少女が並んでるんだよ。目の保養ができるじゃないか！！」

「……吉井くん、何度も言うけど、秀吉はあたしの弟だからね」

「雄二をグロテスクに殺すのは捨てがたいけど、今は明日のトップを取ってチケットを手に入れないといけないから、雄二の相手なんてしてる暇はないんだよ」

明久は秀吉を相変わらず、美少女扱いしているためか拳を握り締めて叫ぶと優子は眉間にしわを寄せるが明久は今は明日のトップ賞を

取る事が重要のようであり、明久が自習に戻ろうとすると、

「あ、あの。吉井くんはチケットを取れたら、誰を誘うつもりなんでしょうか？」

「へ？　ボクはチケットが取れたら売るつもりだけど」

「誰を誘うつもりですか？」

瑞希は笑顔だが明久は本当はチケットを売却する気などなく誰かを誘うと思っているようで明久に白状しろと言いたげであり、瞳の奥は笑ってなどなく、

「な、何を言ってるの？　姫路さん、ボクはチケットを売って当面の食費にしようと思っているんだよ」

「……誰を誘うつもりですか！？　ま、前田くん、いきなり、何をするんですか！？」

「おかしな事を言ってないで、アキに自分かアキがチケットを取ったら一緒に行かないかと言えば良いだろ？」

明久は瑞希の様子に生命の危険を感じているようで明久の顔には大量の脂汗が流れ始めるが瑞希は目が笑っていない笑顔でもう1度、明久に誰を誘うかと聞いた時に理音は瑞希の頭に軽くチョップをすると瑞希は頭を押さえながら理音を非難するような視線を向けるが理音は気にする事なく、瑞希の言いたい事を代弁する

# 第４２２問（後書き）

どうも、作者です。

番宣です。

『バカなテストの思いつき』で書かせていただいていた。『僕と幼なじみな新任教師？』を連載化しました。

もう１点、以前から活動報告や感想板で理音と美波ならどんな話が書けるんだろうか？　と数名の方と話していたのですが原案を『バカなテストの思いつき』に更新させていただきました。題名は『サドで邪悪な召喚獣ｉｆ～ａｎａｔｈｅｒ　ｓｋｙ～』です。舞台は美波が日本へ戻る１週間前のドイツから始まります。連載は皆様の反応しだいで。（苦笑）

## 第423問

「な、何を言ってるんですか。前田くん！？」

「何を？　そのままだろ」

瑞希は理音の言葉に顔を真っ赤にするが理音は気にする事はなく、

「だ、ダメだよ。姫路さんに奢らされたら、仕送りまでボクは生きていけないよ」

「……吉井くん、そこはデートだと認識できないのね」

「……まぁ、話を聞く限りはデートと認識しないで毎回、搾取されてるとしか思ってないみたいだからな。そこは瑞希と島田の自業自得だ」

明久は理音と瑞希のやり取りなど耳に入っていないようでデートではなく、奢らされるとしか思っていないようであり、明久の様子に優子は呆れたようで肩を落とすが理音は今までの瑞希や美波の行動のせいだとため息を吐く。

「だ、だって、デートは男の子がお金を出してくれるものじゃ」

「……そんなものはドラマやマンガだけの世界だ。だいたい、お前らが一緒に動く時はアキはデートと認識していないんだ。それに付き合ってもいないのに奢らせるのは違うだろ。お前もアキも一介の高校生であって特別な収入があるわけでもないんだ」

瑞希は何かで手に入れた知識なのかデートは男が費用を持つものだと思っているようだが理音はその考えを否定するのと同時に改めて、明久と瑞希は恋人ではないと釘を刺すと、

「優子ちゃん、前田くんはこんな事を言ってますけど、女の子はデートの時はやっぱり男の子に費用を持ってもらいたいですよね？」

「……優子を味方に引き入れようとするな」

瑞希は理音の考えは男の意見でしかないと言いたいようで優子を味方に引き入れようとするが、

「あ、あたし？　別に気にした事ないけど、理音は自然にそう言うのをしてくれるし。でも、催促するのは違うと思うかな？」

「で、でも、前田くんは優子ちゃんとのデートの費用は持っているんですよね。それなら」

「……だから、前提条件が違うだろ。俺と優子は付き合っている。お前とアキは現状で言えば友人だろ。恋人同士のデートを前提で考えるな。後は俺はお前らと違って自分で稼いだ金だ。親のすねをかじってるわけでもないんだ。お前らにどうこう言われる筋合いはない」

優子はデートの費用は理音が持ってくれる事が多いため苦笑いを浮かべながらも瑞希の考えは間違っていると伝えると瑞希は自分の考えを肯定するためのものを探そうとするが理音はため息を吐いて彼女の考えを否定する。

「……ねえ。理音、姫路さん、色々と盛り上がってるところ。悪い

んだけど、こんな話をしたら、流石に吉井くんでも姫路さんの気持ちに気付かない？」

「あっ！？　ま、前田くん！？」

「ん？　心配するな。今はアキは自分の生活費の事しか考えていないから、耳には絶対に入っていないし、目の前で、瑞希や島田がアキの事を好きだと話をしても理解できるかが微妙だ」

優子は理音と瑞希の顔を引き寄せて、明久の前でする話じゃないと話を止めようとするが理音は明久は絶対に気づかないと言い切り、優子と瑞希が明久に視線を移すと、

「……どうしよう。姫路さんに奢る事になると絶対に後で美波にも奢らされるから、そうなると」

明久はぶつぶつと呟いており、理音達の話などまったく耳に入っていないようであり、

「「……」」

優子と瑞希は明久の様子に言葉を失う。

# 第４２４問

「……まったく、吉井くんって、どうして、あんなに鈍いのかしら」

「ん？　基本的にこの学園の人間はどこかしら鈍いだろ」

自習時間が一先ず、終わり休憩時間になり、理音はシステムの調整のために召喚フィールドを張るための出力部の調整に入っていると優子は理音と2人でいる時間もあまり取れないためか理音の作業を覗き込んでいる。

「……それも否定できないわね。でも、どうなるかはわからないにしてもあれじゃあ、姫路さんも島田さんもかわいそうよ」

「アキの場合はいつも言ってるが周りの影響が多いだろ。あいつの家族は特殊だからな」

「特殊？」

優子は明久の鈍さをどうにかできないのかとため息を吐くと理音は明久の鈍さは家族にも原因がある事を話し、優子は理音の言葉に首を傾げると、

「あいつの家は女が強い家系でな。おじさんとアキはおばさんと玲さんには基本的に逆らえない」

「……そうなの？」

「だから、あいつは瑞希や島田だけではなく、女子全般に甘いだろ

？」

「確かにそうね」

理音は明久の家庭は女性陣が強いのが明久が瑞希や美波に強く意見を言えない原因だと説明すると優子は苦笑いを浮かべて頷く。

「甘いだけじゃ、進展も何もないとは思うんだけどな。あいつは瑞希にも島田にも本音を言う事はないわけだから、直して欲しいところとか話し合えてぶつかり合う事もないだろ。そんな中で本音で遠慮もない雄二との言い合いを見てるだろ。瑞希や島田は文月学園のおかしな校風に浸食されているから雄二が恋人だとかお前が好きなおかしな妄想に発展するわけだ」

「だ、誰がおかしな妄想をしてるのよ！？　最近は、そっちより、あんたとの事……何でもないわ」

理音は明久が少しは女子生徒を特別視しなくなれば何か変わってくるかも知れないと話すがその過程で優子を小バカにしており、優子は理音の言葉を全力でしようとするが何か理音に聞かせたくない言葉が混じったため、視線を逸らして何もなかったふりをするが、

「……お前はアキと違って本音や考えた事を口に出し過ぎだ」

「……反省するわよ」

理音は妄想の世界に直ぐに飛び出す優子に呆れているところも多いため、ため息を吐くと優子は言いかけた言葉がかなり恥ずかしかったようで理音とは目を合わせようとしない。

「アキにとって瑞希は少し距離をとって守ってあげたいって感じだけどな。それは瑞希から見れば寂しいと言う感じがする。逆に島田は距離が近すぎるから女として扱われていないと思う。真逆のタイプの2人だからな。お互いはお互いを羨ましいと思う。現状で言えばアキにとってあの2人は意識している異性でしかないんだけどな。当人達が気づいていなく、嫉妬でしか動かない。それを踏まえても鈍いのは実際、アキだけはない」

「……あんたは相変わらず、冷静に見てるわね」

「観察は科学者にとって重要なものだ」

理音は冷静に明久と瑞希、美波の関係を見ており、瑞希と美波をも鈍いと言い切るろ優子は理音の様子に大きくため息を吐くが理音は気にする様子もなく、作業を続けて行く。

# 第425問

「……そして、今日もこうなるわけか？」

「……頭が痛い」

夕飯を終えてＤＥＦクラスの入浴時間になると、昨日に引き続きＦクラスの男子を中心にした女子風呂覗き大作戦が展開されており、理音と源二は大きく肩を落とす。

「……前田、この状況ってどうにかできないのかな？　良い方が悪いけど下位クラスと上位クラスに分かれてるから問題が起きるのかな。ＡＢＣは覗きたがるのは居ても行動に移すのはいなかったって根本や清瀬が言ってたし」

「……上位、下位の問題じゃないな。基本的にバカが集まり過ぎて理性と言うものが存在しなくなっている結果だ。あいつらは自分達の都合の悪いものは排除するからな。それがたとえ常識であっても」

「……非常識の塊か」

源二は自分がまとめきれないのが原因だと思っている節も見え、理音は源二の様子に少しは気を使っているようで彼をはげますと源二は力なく笑い、

「……元気、出してください」

「そうだね……クラスは清水さんが騒いで、男子だけでも誰も俺の話を聞いてくれない。何なんだろうな」

怜生は源二を励まそうとしているようで彼の顔を覗き込むが源二の気分は晴れないが、

「ん？　別にEクラスの『三上』は話を聞いてくれるんだ。問題はないだろ」

「……」

理音は何かを思い出したかのように『三上美子』と言う女子生徒の名前を出し、理音の口からでた名前に源二は顔を引きつらせる。

「ん？　どうかしたか？」

「な、何で、三上さんの名前が出てくるんだ！？」

「いや、ただ、今日の雄二討伐隊との戦闘で上手く、彼女を守って戦っていたように見えたからな。その後の三上の目は……本宮や工藤の言葉を借りて言えば完全に恋する女の子の目だったからな」

源二は理音に美子の事を知っている理由を聞くが理音は今日の試召戦争を見ていればわかると言い切るが、

「……前田、お前は吉井とずっと戦っていたんじゃないのか？」

源二は理音が明久と戦っていたため、自分と美子の間に起きた事を見ていなかったはずだと聞き返す。

「ん？　さっき、点数計算に間違いがないかを確認していたんだが、その時の映像にお前が三上の前に立っている姿が映っていてな。そ

う言う面白い映像を見つけたらその人間を固定して映しておくようにプログラムを組んでいたからな。後はさっき、深月と玉野から三上とお前がおかしな動きをしていると言うタレこみがあったからな」

「……それは悪趣味の上にいろいろと問題がないのか？」

理音は試召戦争のデータ分析で知り得た情報にEクラスの深月とDクラスの美紀からの情報を合わせた推測だと言い切るが源二の顔は理音がFクラスに所属している事もあるのか自分の身の危険を感じているようであり、顔は引きつって行くが、

「勘違いするな。俺はあのバカどもと違う。深月や玉野も同じだ。だいたい、男女間の模擬試召戦争はあくまできっかけを与えるに過ぎない。その中で起きている事は本人同士の問題だ……ただ、そうとは思わないバカどもが多いわけだ」

「……それが困るんだよ」

「まぁ、学園内ではお互いに近づかないのは必須だな。何かあれば言いにこい。俺が協力できる事は協力しよう」

「……あぁ。頼む」

理音は源二と美子の問題は当人同士の問題だと言い切ると源二は大きく肩を落としながらも理音の言葉に頷く。

# 第４２６問

「それで、前田、あれはどうしたら良いと思う？」

「ん？　水鉄砲ならあるが」

「……前田は、どこから水鉄砲を取り出しているんだ」

源二は理音との話も落ち着くと壁に登ろうとしている男子生徒達に視線を移し、理音はどこからともなく昨日、男子生徒達を制圧した水鉄砲を取り出す。

『……良いか。前田が作ったプログラムを考えると間違いなく起きるはずだ』

『確かに、それに俺達は今は観察処分者仕様、この作戦は上手く行く』

男子生徒達は壁を登る事はできないためか、次の作戦を考えているようで１つの案が思い浮かんで大きく頷き、

『『『『『試獣召喚（サモン）！！』』』』』

試召戦争時に召喚獣を呼び出すための言葉（ワード）を叫ぶと大浴場のタイルには機械的な魔法陣が浮かび上がり始め、

『成功だ！！　誰か直ぐに部屋に戻ってデジカメを！！』

『任せろ！！　すでに用意してある』

召喚獣にデジカメを持たせて女子の入浴姿を撮影するつもりのようである。

「ま、前田、水鉄砲を貸してくれ。このままじゃ、三上さんが！？」

「……落ち着け。せめて前くらい隠せ」

源二はEクラスの美子も入浴している可能性が高いため、彼女を守りたいようで立ち上がるが理音は落ち着いた様子であり、

「お、落ち着いていられるわけないだろ！！」

「落ち着け。だいたい、それくらいの対処はできている」

理音は男子生徒の行動など予測済みだと言うと、

『ハ、ハリセンだと！？』

『こっちはピコハン！？』

タイルに浮かび上がった魔法陣から現れたのは男子生徒の召喚獣ではなく、巨大なハリセンやピコピコハンマーが現れ、召喚獣を呼び出そうとした男子生徒をぶっ飛ばす。

「ま、前田、これは？」

「ん？　今は合宿所全体にフィールドを張る事ができるようになっているからな。それに覗きの罰で観察処分者のようにフィードバックを付けられている奴らも多い。召喚獣を覗きに使おうと考える奴

もいるとは思ったからな。対処くらいはする。まったく、アキも雄二もそうだが、基本的には召喚システムは最先端の技術なんだぞ。どうして、覗きやくだらない事に使おうとするんだ。だいたい、召喚システムは……」

理音は男子生徒達が召喚システムを蔑ろにしているのが納得できない事もあるようであり、何かを言いかけるが怜生の視線に気づくと言いかけた言葉を飲み込み、

「……お兄ちゃん」

「何でもない。怜生、お前は気にしなくて良い」

「……はい」

怜生は理音の変化に気づいたようで不安そうな表情で理音の顔を覗き込むと理音は怜生の頭を優しく撫で、

「前田、あのさ」

「……悪い。これは俺の問題だ。立ち入ってこないでくれ」

源二は付き合いは長くはないが強化合宿で知った理音の人となりを見て、彼の力になってやりたいと思ったようだが、理音は彼の気持ちには気づいたようで首を横に振ってそれを拒絶し、

「そうか……悪い」

「いや、悪いのは俺だから、気にしないでくれ」

源二は理音に謝るが理音は悪いのは自分だから、源二に謝る必要はないと彼に心配をかけないようにぎこちないが笑顔を見せようとする。

## 第427問

「真面目にやってるようだね」

「……ばばあ、ずいぶんとゆっくりとした到着だな」

理音は入浴を終えると怜生を明久達に預けて召喚システムの調整をしているとカヲルが合宿所に到着したようで理音のパソコンを覗き込むと理音はカヲルの方に向きあう事なく、カヲルの到着が遅い理由を聞くと、

「仕方ないだろ。2年は強化合宿だけど、1年と3年は普通に授業を受けてるんだ。学園長としてずっとこっちにいるわけにはいかないさね」

「それもそうだな」

カヲルはそれでも急いできたと言いたげにため息を吐き、理音は聞いておきながらも興味無さそうに頷く。

「それで、西村先生や高橋先生から聞いたんだけど、また、おかしな事を始めたみたいだね」

「……おかしな事をしているつもりはない。バカどもを犯罪者にするわけにもいかないだろ。召喚システムを自分の利益にしか考えないような奴らに渡すわけにもいかないんだからな」

「あんたがいてくれて本当に助かってるよ。悪かったさね。無理をさせて、あたしも手伝うよ」

理音は同年代の人間から見れば好き勝手に召喚システムを使って遊んでいるように見えるがしっかりとした考えで動いており、カヲルは理音に無理をさせている事を理解しているため、理音の体調を心配するように言うが、

「……ばばあ、熱でもあるのか？　気持ち悪いぞ。具合が悪いならさっさと寝ろ。ばばあに長時間の運転も辛いだろ。途中でくたばって汚い寝顔を見せられると作業に影響があるからな」

「……本当に口の減らないくそじゃりだね」

理音は眉間にしわをよせて、気持ち悪いとカヲルの心配を一蹴するとカヲルはこめかみにぴくぴくと青筋が浮かび始める。

「別にばばあに心配される覚えはない。だいたい……『とうさんが作って、ばばあが育てた』こいつを戦争に使わせるわけにはいかないだろ。それをやるのは俺の役目だ。怜生やこの後、育っていく、ガキどものためにもな」

「そうさね。あいつみたいな人間を作らないためにも、召喚システムはこのままくそじゃりどものものにしておきたいさね。それを確立するのが、あたしの仕事さね。あのくそじゃりが望んでいた事だしね」

理音は表情を変える事はないがカヲルには感謝しているようであり、カヲルは理音の様子に理音と彼の父親の姿が重なったようで少しだけ優しげに笑った時、

「ちょ、ちょっと、理音、学園長先生、理音のお父さんが召喚シス

テムを作ったって、どう言う事ですか！？　理音のお父さんは学校の先生だったって、それなのに、どうして、召喚システムに関わっているのよ！？」

優子は理音の様子を見にきたようでドアの前で聞こえてしまった事実が信じられないようで勢いよくドアを開けると理音に詰め寄り、

「……まったく、立ち聞きとは趣味が悪いな」

「そ、それはなんか入っちゃいけない空気だったし、で、でも、気になるし」

理音は優子の様子に眉間にしわを寄せると優子は理音の表情を見て、理音が呆れている事は理解出来たようで冷静になったのか、気まずそうな表情をするが理音から視線を逸らす事はない。

## 第４２８問

「まったく」

「くそじゃり、どうするんだい？　あたしは席を外そうかい？」

理音は優子の様子にため息を吐くとカヲルは理音と優子の事も気にかけているようであり、いつか理音が話さないといけない事でもあるため、優子の味方に付いたようである。

「別に居てもかまわないだろ。実際はばばあも当事者なわけだしな」

「り、理音、あたしが理音のお父さんの事を聞いても問題ないの？」

「前に言っただろ。聞きたかったら話してやると」

優子は理音が父親の事を話してくれそうな事に少し驚いたようだが理音は表情を変える事はなく、

「優子、最初に言って置くぞ。怜生には話すな。まだ、たぶん、伝える時ではないからな」

「う、うん。それはあたしだってわかるわよ」

理音は怜生には話すな優子に釘を刺すと優子は大きく頷き、

「そうだな。どこから話すべきか？」

「えーと、理音のお父さんが召喚システムを作ったって言うのは、

どう言う事なの？　だって、学校の先生だったって、あたしは聞いてたし」

「その件に付いてはあたしの口から話そうかね。このくそじゃりはその時はまだ小さかったし、あたしがこのくそじゃりの父親『海理（かいり）』から召喚システムを託された理由を海理が何故、学校の教師にならないといけなかったかを」

理音はどこから話して良いか考え始めると優子は学校の教師だったはずの理音の父親が何故、召喚システムを作ったか知りたいと言うとカヲルは理音の父親の事を思い浮かべたようで少しだけ寂しそうに笑う。

「お、お願いします。学園長先生」

「あぁ……あんたには前にこいつの父親があたしの教え子だって話はしたね」

「は、はい」

優子はカヲルに頭を下げるとカヲルは優子に自分と海理の関係を確認し、

「海理はあたしの教え子でもかなり優秀な人間だった。特にシステムのプログラムに関してはその時にすでにあたしなんか足元にも及ばないくらいの才能を見せていたんだ」

「それなら、どうして、学校の先生に？」

「簡単な事さね。凡人には天才を理解する事はできない。そして、

その才能は嫉妬に変わり、自分達の地位や名誉を脅かす存在だと考え、大学にいた高名な教授連中は権力を使って、海理の居場所を奪ったんだ。研究職への道はすべて閉ざされた海理には道がなくなった」

カヲルは当時の事を思い出しているのか悔しそうに顔をしかめると、

「待ってください。その時、学園長先生は何をしていたんですか？」

「あたしは日本の大学のくだらない権力争いに嫌気がさしてね。その時には日本を離れていたんだよ。海理の事は信頼できる人間に任せたはずだったんだけどね……そいつも自分の身の方が可愛かったわけさ。それであたしも研究の方が忙しくてね。日本に帰ってくる事もなかったし、あいつが教師になってるなんて知らなかった。知った時にはこのくそじゃりが生まれてたしね」

優子はカヲルが海理を守る事に動いてくれなかったのかと問い詰めるとカヲルも信頼していた人間に裏切られていたようで首を横に振り、

「あたしが日本に戻ってきた時に、海理が教師をやってるって事を聞いて会いに行った。家族ができた事も聞いていたから、家族を連れてあたしのいる研究所に来ないかと誘ったんだ。だけど、あいつは笑って言ったよ。『確かに研究職も魅力的ですが、俺には生徒達（かけがえのないもの）がいる』ってさ。正直、あたし達、科学者には信じられない言葉だったよ。でもね。あいつらしいとも思ったんだよ。その時に『召喚システム（こいつ）』を渡されたのさ。教師になって気づいた事、子供達は自分の進みたいものもわからないうちに進学や就職を義務付けられている。もっと自由にのびのびと自分の進むべき道を探せるものが欲しいって、それをあたしにやれって言ってね。あたしに

面倒な事を押し付けて自分は1教師でいるとか言ってね」

「それって……前に理音が言ってた事よね？」

「あぁ」

カヲルは海理から召喚システムを託された時の事を思い出して、大きくため息を吐くと優子は以前、理音が話してくれた召喚システムを学習プログラムに取り組む理由を思い出したようで理音に確認する。

「だから、あたしは言ってやったさ。それなら、こいつを主軸にした学校を作ってやるって、天才『前田海理』が作ったものを世界に示して、あんたを表舞台から排除したバカどもにあんたの存在を知らしめてやる。だから、その時はあいつにも召喚システム（こいつ）を使った新しい学校で教師として研究者として働いて貰うってね。まぁ、それは叶えられなかったけどね」

「そうなんですか」

カヲルは自分と海理が夢見た物が完成に近づいているが海理がその場所にいない事に寂しそうな表情をすると優子は複雑そうな表情で頷き、

「……他にも召喚システムが普及すれば、くだらない権力で潰される才能が減る。数値で見える分、日本では潰されてしまうかも知れないが、ばばあの人脈で外国（そと）で認められる人間だって出てくるかも知れない」

「少なくともあたしやこのくそじゃりがいた研究所にはそんな人間

が出てきた時の受け入れ準備はできてるさ。そうなってくれれば、才能の他国への流失がどれだけ自分達に不利益か理解出来る人間が新しい道を考えてくれる」

理音とカヲルは召喚システムを使って、海理のように潰されてしまう才能をすくい上げる事もできると考えているようであり、

「そこから先が他人任せなのが心配なところだけどな」

「まぁ、仕方ないさね。それを理解出来る政治家が文月（ウチ）学園から出てくれれば、良いけどね。政治の世界は大学よりもくだらない権力やしがらみにとらわれてそうだからね」

理音とカヲルは科学者だけではどうにもできない事もあるとため息を吐くと、

「そうなんだ……あんた、いろいろと考えてるのね」

「悪かったな」

「くそじゃり、もう少し、彼女に信用されるようにしなよ」

優子は2人の言葉を聞くが理音の普段の行動からはまだ信じられないようで多少、疑いの視線を向けると理音は優子の考えている事が理解できているようであり、眉間にしわを寄せ、カヲルは理音と優子の様子に苦笑いを浮かべる。

# 第４２９問

「くそじゃり、あたしはちょっと、先生達と打ち合わせでもしてこようかね。木下、少しの間、くそじゃりの相手を頼むよ」

「が、学園長先生、ま、待ってください！？」

カヲルは理音と優子をからかいたいようでニヤニヤと笑うと部屋を出て行き、

「あ、あのさ。理音」

「別に無理に言葉を探す必要はないぞ」

優子は理音の父親である海理の話に何を言っていいのかわからないようであり、困ったように笑うと理音は気にする様子はないと言うが、

「な、何よ。それ、あたしはあんたを心配してるの。だって、あたし、あんたの彼女なのよ。あんたが１人で何でもできるのは知ってるわよ。だから、心配くらいさせてよ。それに……」

優子は自分より、しっかりとした考えを持ち、先を歩いている理音に置いて行かれる不安があるようで自分の不安を振り払いたいのか理音の服をつかみ、彼の顔を見上げる。

「心配くらいと言うが、心配などする必要はない。だいたい、お前は何を心配しているんだ？　俺は何も言わずにいなくなるような事はない。まぁ、たまに学会もあるから、日本から出る時もあるがな」

「学会？　外国であるの？」

「あぁ。日本に戻ってくる前にやっていたものをまとめて発表してくれとな。急に決まったものがあるんだ。強化合宿後と夏休みになったら、少しの間な」

理音は勝手に居なくなる事はないと言うがそれでも数日は外国に行く事もあると話し、

「な、何で、そう言う事は早く言わないのよ！？」

「首を絞めるな。急に決まったと言ってるだろ。俺だっていきなりで文句を言いたいんだが、後の事を考えると断る事もできないんだ」

優子は理音の言葉に頭に一気に血が上ったようで理音につかみかかるが理音はため息を吐き、

「……さっきの人脈を広げるって事？」

「あぁ。必要な事だからな。日本（ここ）に戻ってくるまでは考えもしなかったが、戻ってきて召喚システムに関わる事でいろいろと思いだした事もある。必要な事はすべてして行きたいんだ。とうさんのためにお前や怜生のためにも」

「あ、あたしのため？」

優子は理音の性格では学会などにまともに参加などしないと思っているようで首を傾げると理音はくすりと笑う。

「何だ？」

「あたしのためにもなるの？」

「そうだろ。お前の成績だって外に出れば充分に嫉妬の対象になるんだ。お前は努力で今の物を作りあげてきているかも知れない。だけどな。世界とは優劣をつけたい人間ばかりだ。自分だって努力しているのに何であいつのほうがと言ってな。そうすると考える行動は決まってくるだろ」

優子は自分のためだと理音が言う理由がわからずに首を傾げる姿に理音は優子にも気をつけるように言った時、

「リオ、助けて、ムッツリーニが！？　……ごめん！？」

明久が勢いよくドアを開けるが部屋の中にいる2人の様子を見て、慌ててドアを閉め、

「……今度は何があったんだ？」

「わからないけど、どうして、こう騒ぎしか起こせないのかしら」

「アキ、康太は今度は何をしたんだ？」

理音と優子はため息を吐きながら明久に話を聞くための廊下に出て行く。

# 第４３０問

「ボ、ボク達の事は気にしないで続けてよ！！」

「……吉井くん、おかしな勘違いをしないで」

明久は理音と優子の邪魔をしたと勘違いしているため、逃げだそうとするが優子は明久の様子に大きく肩を落とす。

「それで、何があったんだ？　康太がと言っていたが、出血多量か？　心停止か？」

「……すぐにその２択しか出てこないのはどうかと思うんだけど」

理音は康太がまた死にかけていると決めつけており、部屋に戻ろうとする様子に優子は眉間にしわを寄せると、

「しゅ、出血多量だよ。ムッツリーニは持ってきていた輸血パックが足りなくなって、ボク達にはどうしたら良いか」

「そうか。輸血パックは俺も持ってきてるが試召戦争中に使ったからな。ここまで大量に使う事は想定していなかったからな。後１日あると考えると足りなくなる事も考えられるから、血液を提供してくれる人間がいないか聞いて回ってくれ」

「う、うん。わかったよ」

明久は康太の状況を話すと理音は明久に指示を出し、康太の状態を確認するために足早に駆け出して行き、

「……そんなに大事なの？」

「優子、お前も女子に聞いて回ってくれ」

「ええ、わかったわ」

理音は後ろを歩いている優子にも女子にも協力者を探して欲しいと言って自分達の部屋に戻る。

「……それで、お前らは何がやりたかったんだ？」

「……まぁ、色々とあってな」

理音は部屋に戻ると康太を合宿先に用意していた救護室に運んで治療を済ませると部屋にいた雄二となぜか部屋に備え付けのられている浴衣に着替えた秀吉、瑞希、美波、翔子、愛子の６人に聞くと雄二は理音から気まずそうに視線を逸らし、

「……大方、明日、男子軍の士気を高めるために、瑞希達の写真をエサに使おうとしたんだろ」

「……わかっているなら、聞くな」

理音は雄二の態度と瑞希達女性陣の格好から１つの答えしか推測できなかったようであり、雄二は理音の言葉に大きくため息を吐く。

「少なくとも、自分の彼女の写真を他の男どもに回す心理がわからないがな。ん？　それとも霧島を呼んだのは自分が見たかったからか？　もう少し、素直に言えば良いだろ」

「……雄二、雄二がみたいなら私はいつでも良い」

「り、理音、翔子、お前ら、何をわけのわからない事を言ってるんだ！？」

理音は雄二の作戦のなかに自分の欲望を満たそうとしている事に気づいているようで康太の状態を確認しているのか脈を測りながら、雄二の欲望をあっさりと翔子に話すと翔子は頬を赤く染め、雄二は顔を真っ赤にしながら理音の言葉を否定するが、

「……それは許さない」

「霧島、これ以上、患者を増やすな。俺もヒマじゃないんだからな」

「そう言うなら、助けやがれ！？」

雄二の言葉は翔子の怒りを買い、彼女の細くしなやかな指は雄二のこめかみをつかみ、周りに雄二の頭蓋骨が軋みをあげる音が響き始めた時、

「リオ、血をくれるって言ってくれた人を集めたよ」

「……かなりの数の男子がね」

「まぁ、康太が死ぬと困る男は多いからな」

血液提供者が廊下に並んでおり、理音は集まった人間の男女比を見て眉間にしわを寄せる。

# 第４３１問

「ふむ……」

「ねえ。理音。土屋くんに輸血できる血以外はいらなくない？　こんなに集めてどうするのよ？」

理音は提供された血液を見て、何か考え込むような素振りをしており、優子は理音が考え事をしている様子が不安しか感じないようでジト目で見ると、

「ん。不測の事態もあるかも知れないから問題ない……せっかくだ。血液提供者には血液の成分も分析して後で送ろうとは考えているが」

「前田くん、それって大変じゃない？　ただでさえ、作業も時間がかかってるわけでしょ」

理音は血液提供者の名簿も作っていたようで名簿を手に取ると浴衣のままの愛子は苦笑いを浮かべるが、

「使わないかも知れないのに提供してくれたんだ。それくらいはしないとダメだろ……アキ、やっぱり、お前は食生活を見直せ。成分を見る限り、脳みそだけでなく、いろいろ足りないぞ。栄養を補給するのにこれを出すか？」

「ちょっと待て！？　どうして、そこでバカにするんだよ！！　それにどれだけ、栄養が不足しようがそれはいらない！！」

理音は明久の血液の成分表を見て明久に生活を改めるように言うと

懐から栄養剤を取り出すが明久はバカにされた事に声をあげるだけで危機感はなく、

「……そんな反応をするから、バカにされるんだ。良いか。これが標準値だ。お前の血液の成分を考えると」

「えーと……」

「ほとんどが標準からはずれてるじゃないか」

理音は明久に血液の標準値と明久の数値を見せるが明久は理解できていないようで首をかしげ、後ろから覗き込んだ雄二は呆れたようなため息を吐く。

「このままじゃ、病気をした時……まぁ、アキだから大丈夫か」

「そうだな。明久だから大丈夫だな」

「ちょっと待て!!　今、絶対にボクは風邪をひかないとか思っただろ!!」

理音と雄二は明久の顔を見た後、同じ答えをはじき出したようで話を切り上げようとするが明久は2人にバカにされている事に気づき声をあげるが、

「そうだな。アキ、夏には風邪をひかないように気をつけろよ」

「う、うん。そうだよ。ボクだって風邪くらいひくよ」

「……夏風邪はバカしかひかない」

理音は明久にも風邪に気を付けるように言うと明久はわかれば良いと言いたげに頷くがバカにされている事には気づいていないようであり、輸血により復活した康太は身体を起こしながら明久に事実を吐きつける。

「何だと！？」

「……気付かないからバカにされるんじゃないかしら」

「そうだね」

明久はそこで初めてバカにされ続けている事に気づき声をあげると明久の様子に優子と愛子は苦笑いを浮かべると、

「康太、まだ寝ていろ。まったく、試召戦争の時に無理をするなと言ったはずだ」

「……理音、男には何を犠牲にしても挑まなければいけないものがあるんだ」

「そうか。そんなに工藤の浴衣姿が見たかったわけか」

「……そんな事実はない」

理音は明久の事など気にする事なく、康太を診察しながら無理をしないように言うが康太には譲れないものようであり、目つきを鋭くすると理音は康太が愛子の浴衣姿に反応したと決めつけ、康太は直ぐに大きく首を振って否定する。

# 第４３２問

「まぁ、そう言う事にしておくか。お前ら、騒ぐのは勝手だが怜生を起こすなよ……怜生は部屋にいたか？」

「怜生くんなら清水さんと玉野さんに連れて行かれたよ」

「……アキ、お前、玉野に怜生を売ったな」

理音は康太の状態を確認し終えると医療道具を片付けながら、明久達にあまり騒ぐなと言った時、怜生が部屋にいなかった事に気づき、明久は理音から視線を逸らす。

「う、売ったなんて、人聞きの悪い事を言わないでよ！？」

「なら、どういう経緯でこうなったんだ？」

「ま、待て。理音、落ち着くんだ」

明久は理音の背中に黒い殺意（もの）が浮かび上がってきた事に身の危険を感じたようで後ろに下がり始めるが直ぐに壁にぶつかってしまい、２人の様子に雄二が２人の間に割って入るが、

「……雄二、お前も共犯者か？」

「いや、明久の独断だ」

「ちょっと待て！？　あっさり売り渡すな！？」

理音は落ち着いた口調で雄二も共犯者かの確認をすると雄二はあっさりと明久を売り渡す。

「まぁ、お前が原因なんだし、仕方ないだろ」

「待って!?　リオ、これにはわけがあるんだ。『雄二』が玉野さんなら浴衣以外にもみんなに着せる衣装を持っているはずだと言って、ボクを売り渡そうとしたんだ」

雄二は明久が原因だと言い切るが明久は雄二も共犯だと白状するだけではなく、雄二が浴衣以外にも女性陣に何かを着せようと思っていたとまで白状し、

「……そうか。霧島、雄二はお前にいろんな格好をして欲しいみたいだ」

「……雄二、私は雄二が望むなら、どんな格好でもする。一先ずは雄二が大切にしているこの本の人と同じ格好をする。理音、エプロンを貸して欲しい」

「待て!?　翔子、お前がどうしてそれを持っているんだ!?」

理音は雄二へのお仕置きは翔子に任せるようにしているのか翔子に雄二を任せると雄二は翔子が手にしている成人向けの雑誌に心当たりがあるようで顔を真っ赤にするが、

「……お義母さんが雄二の机の1番下の引出しの二重底になったところに隠してあると教えてくれた」

「あ、あのばばあ!!」

「……お義母さんをそんな風に言うのは許さない」

雄二へのお仕置きなのか翔子の綺麗な指は雄二の両目に吸い込まれて行き、雄二は救護室の激痛でベッドの上に倒れ込みのたうちまわり、

「……理音、エプロン」

「待て。霧島、場所が場所だ、これはどうだ？」

「……ナース服？　雄二はナース服も好き？」

「翔子、わけのわからない事を言うな！？」

翔子は再度、理音にエプロンを要求するが理音は救護室と言う事もあるのか懐から『ナース服』を取り出し、翔子は目が潰されている雄二に恥ずかしそうに聞くが雄二は翔子のナース服姿もきになるようだが、今はそれどころではなさそうである。

「理音、あんたは何でそんなものを持っているのよ？」

「何を言っている。緊急手術とかもあるかも知れないから手術着も持っているぞ」

「……前田くんのカバンからはもっとおかしなものが出てきそうだから怖いよ」

「何を言ってる。人工心肺くらいしか入っていないぞ」

「……いや、明らかにそれはサイズ的におかしいから」

優子は自分の彼氏である理音がナース服を持ち歩く変態だと思ったようだが理音の持ち物は常識では考えてはいけない。

# 第433問

「……理音」

「なんだ？」

「……俺はナースキャップがない物をナース服だと認めない」

理音の持ち物に微妙な空気になっているなか、康太は理音の名前を呼び、理音が振り返ると康太はすでに翔子のナース服姿を思い浮かべているようで横になっていたベッドの1つを真紅に染め上げているがしっかりと主張は通してから力尽き、

「ム、ムッツリーニ！！！？？？」

「……早速、提供して貰った血液が役に立つのか？」

明久は康太を抱きかかえて薄れゆく彼の意識に届くように康太を呼ぶなか、理音は眉間にしわを寄せると片付け始めていた医療道具を取り出し、康太の手当を再び行おうとするが、

「雄二、霧島、ここだと康太の治療に影響があるから、この部屋を使え」

「……ありがとう。雄二、行こう」

「待て！？　理音、お前はなんの鍵を渡した！？」

理音は雄二と翔子が康太の治療の邪魔だと感じたようで翔子に鍵を

渡すと翔子は雄二を引っ張って救護室を出て行こうとし、雄二は理音の渡した鍵に不安しか感じないようで声を張り上げる。

「ん？　一応、優子をつれこむために用意していた部屋の一室だ。他にも押さえてあるから遠慮なく使ってくれ」

「理音、あんたは何を言ってるのよ！！」

「首を絞めるな。針が血管に入らん」

理音は雄二の言葉に振り返る事なく康太の治療を最優先にしており、優子は顔を真っ赤にして理音の首を絞め上げようとするが理音は優子の攻撃を交わしながらも康太への輸血を開始しはじめ、

「前田くん、準備万端だね」

「ん？　まぁ、男としてはいつでも狙うだろ。学校行事だとしてもせっかくの親元から離れているわけだしな。まぁ、優子の両親からはいつでも良いと言われた事もあるんだが」

「理音、あんた、あたしの両親と何を話してるのよ！？」

愛子は理音の言葉は流石に予想外だったようで顔を引きつらせるが理音はすでに優子の両親から許可は下りている事を告げ、優子は理音を怒鳴りつけるが、

「……雄二、私も許可を貰ってる。２人のご両親にも許可は貰ってる。お義母さんはこれを使えって」

「お前は何を取り出すつもりだ！？」

翔子は理音と優子におかしなライバル心を燃やし始めたようでポケットから何かを取り出そうとする様子に雄二は彼女の手を押さえつけ、

「霧島、雄二はいろいろと場所とかを考えたいようだから、もう少し待った方が良さそうだな」

「坂本くんって、どこか発想が乙女だよね」

「工藤、知っているか？　雄二は本宮の小説もかなり読み漁っているぞ。意地を張ってはいるが霧島とのデートやらを考えるだけ考えるが実行に移せないヘタレだ」

「うん。それ、わかる」

雄二と翔子の様子に理音と愛子は雄二をヘタレと言い切る。

「あ、あのさ。リオ、ボクが言うのも何なんだけど、怜生くんは良いの？」

「本当にお前が言うのはどうかと思うが、清水は最近は清瀬の家の手伝いもしてるから、怜生も懐いているしな。清水が居ればおかしな事にはならないだろ。何より、人命が優先だ」

「……すまない」

明久は先ほどまで怜生の事で真っ黒な殺意（もの）をまとっていた理音が冷静になり、康太の治療を行っている姿に疑問に思ったようで首を傾げると理音は医療従事者として当然の行為だと言い、康太は理音が

怜生より自分の事を優先している事に少しだけ罪悪感を覚えているようで弱々しい声で謝る。

## 第４３４問

「とりあえずは清水と玉野の部屋に行きたいところだが……」

「……女子部屋にあんた達は行かせないわよ」

「わかってる」

康太の治療を終えて怜生を迎えに行こうとするが男子生徒が女子部屋に行くわけにも行くのは時間的にも問題があるため、優子は理音を睨みつけ、

「とりあえず、ぼくと優子が清水さんと玉野さんの部屋に怜生くんを呼びに行くから、前田くん達はここで待っててよ」

「あぁ……アキ、そっちに行こうとするな。瑞希や美波に殺されるぞ」

「わ、わかってるよ。それに玉野さんに見つかるかも知れないからね」

愛子は優子と一緒に怜生を迎えに行ってくれるようであり、理音と明久にこの場所で待っているように言い、優子と愛子は女子部屋の奥に進んで行き、

「……」

「ねえ、リオ」

「ん？　どうかしたか？」

2人で怜生を待っているが理音は何かを考えているようであり、明久は沈黙に耐えきれなくなったようで理音を呼んだ時、

「ん？　前田に吉井、こんなところで何をしているんだ？」

「て、鉄人！？　べ、別に何もしてないよ！？」

2人を見つけた西村教諭が声をかけてくる。

「西村先生は見回りですか？」

「あぁ。お前達はこんなところで何をしているんだ？」

西村教諭は何度言っても自分の事を『鉄人』と呼ぶ明久に拳骨を落とす姿を見るが理音は気にする事なく、時間を確認して教師陣の見回りの時間かと確認すると西村教諭は頷いた後、2人に何をしているかと聞き、

「怜生が清水と玉野の部屋で遊んでいるのでそろそろ寝せる時間なので優子と工藤に呼んできて貰おうと思いまして」

「うむ。そう言う事か」

理音は怜生が女子部屋にいると話すと西村教諭は2人がここにいる理由に納得したようであり、大きく頷くと、

「前田、吉井、お前達はおかしな事をするんじゃないぞ。普通なら、男子生徒が女子部屋に入りこまないかを警戒しないといけないのだ

が」

「この学年は逆や同性で忍び込むのも多いですからね」

「……その通りなんだ。まったく、Fクラスのバカどもだけではなく、どうしてこんなに騒ぎを起こすんだ」

西村教諭も今日までの見回りでいろいろと問題があったようで眉間にしわを寄せ、理音は西村教諭の苦労が見えたようであり、西村教諭は苦労を理解してくれる理音がいる事に少し不満をこぼす。

「まぁ、男としては女子部屋に忍び込むたくなるのは理解できますがね。中にはそれで摘まれる人間もいますが」

「……坂本と霧島か。まったく」

理音は表情を変える事なく、女子部屋に入りたい気持ちはあると言った後、廊下の先に視線を向けると雄二が縛られて翔子に引きずられている姿が目に映り、西村教諭は大きく肩を落とすと、

「理、理音、鉄人、助けろ!?」

「……理音、西村先生、どいて欲しい」

雄二は助けを求めるが翔子は雄二を連れて部屋に戻るつもりのようであり、道を開けて欲しいと頼み、

「霧島、常識で考えてくれ」

「そ、そうだ。鉄人、よく言った!! 翔子、放しやがれ!!」

西村教諭は翔子の行動に頭が痛いようでこめかみに手を当て、雄二はその姿に自分の安全が確保されたと思ったようだが、

「霧島、先生は他の生徒がいる前でそう言う行為に移ろうと言うのはどうかと思うんだ。強化合宿中は止めるんだ」

「おい！？　鉄人、お前は教師だろ！！　止めるところがちげえよ！！！」

西村教諭は翔子の行おうとしている行為は強化合宿中にするのは止めるように言うだけである。

# 第435問

「しかし、優子と工藤は遅いな」

「そうだね」

「おい！？　お前ら、助けろよ！？」

理音と明久は雄二の身の危険など正直どうでもいいため、怜生を迎えに行った優子と愛子が帰ってこない事に首をひねった時、

「ん？　携帯がなってるな……工藤からだな」

「何かあったのかな？」

理音の携帯電話に愛子からのメールが届き、明久と翔子は理音の携帯電話を覗き込むと、

「……完全に寝てるな」

「そうだね」

「……雄二、私も怜生くんみたいな子供が欲しい」

「待て！？　翔子！？　ズボンを下ろそうとするな！？」

怪獣のぬいぐるみ型パジャマに着替えさせられた怜生が美春の服を握って寝ている写真が添付されており、理音と明久は苦笑いを浮かべる後ろで翔子が雄二のズボンに手をかけているがすでに誰も何も

言わず、

「前田、どうする？　俺が怜生くんを連れてくるか？」

「お願いしたいんですが、１つ問題がありまして、怜生は寝てる時につかんだものは起きるまで絶対に放しません」

「うん。そうだね」

西村教諭は見回りの途中で怜生を連れてくるかと言うが理音と明久は怜生の寝た時の特徴を話すと、

「だとすると、困ったな。怜生くんは女子部屋で寝ても問題はないと思うが、夜中に起きた時に前田か吉井がいた方がいいのではないか？」

「理音」

「前田くん」

西村教諭が怜生の事を考えると美春達より、怜生ともっと近い人間のいる部屋で寝た方が良いと思っているようで首をひねると怜生をどうするか確認しに優子と愛子が戻ってくる。

「怜生は起きないか？」

「うん。それにあんな風に寝てると起こせないし、何よりね」

「……起こしたら、暴動になりそうだったわ」

理音は2人に怜生の状況を聞くと優子と愛子は苦笑いを浮かべ、

「暴動？」

「うん。ちょっとね。清水さんと玉野さんの部屋の娘達が怜生くんの寝顔の写真をメールでばら撒いたみたいで今は、怜生くんの寝顔を見に女子達が集まってて、ぼくと優子もようやく脱出できたんだよ」

明久は優子の口から出た『暴動』と言う言葉に首を傾げると愛子は今の美春と美紀の部屋の入口には女子生徒達が群がっているとため息を吐く。

「……怜生、大人気だな」

「状況的には親戚で集まった時の親戚の小さい子と言った感じに近いんだろうね」

「そんな感じかも」

理音は眉間にしわを寄せると明久は苦笑いを浮かべ、愛子は女子達の気持ちもわかるようで少しだけ気まずそうな表情をするが、

「とは言え、流石にいつまでも騒いでいるわけにはいかんだろう。木下、工藤、行くぞ。前田、吉井、今だけは目をつぶるから、怜生くんを迎えに行くぞ。その代わり、おかしな行動はするな」

「行くって、女子部屋に？」

「……アキ、目を輝かせるな。おかしな事を考えると瑞希、島田、

清水に全殺しに遭うぞ」

西村教諭は怜生をこのままにしておくと騒ぎになるため、兄である理音を直接迎えに行かせた方が良いと判断したようで理音と明久についてくるように言い、明久は男子禁制の楽園に足を踏み入れる事に目を輝かせるが理音は明久に冷静になれと言うと翔子に襲われている雄二を置いて、理音、明久、優子、愛子の４人は西村教諭の後を追いかけて行く。

# 第436問

「……凄い事になっているな」

「でしょ」

5人が美春と美紀の部屋の前に到着すると入口は女子生徒で溢れかえっており、理音と西村教諭が眉間にしわを浮かべる様子に愛子は苦笑いを浮かべ、

「……吉井くん、おかしな事を考えたら、ダメよ」

「わ、わかってるよ!?　な、何か女子部屋の方は女の子の良い匂いがしてる気がするとかは全然考えてないよ!?」

「……アキ、本音が駄々漏れだ」

優子はキョロキョロを周りを見ている明久をジト目で見ると明久は慌てておかしな事など考えていないと言うが本音は駄々漏れであり、理音がため息を吐くと、

「お前達、いつまで遊んでいるつもりだ。そろそろ、消灯時間なんだ。部屋に戻るんだ。清水、玉野、怜生くんを連れて来てくれ」

西村教諭は群がっている女子生徒達に解散するように指示を出し、女子生徒達は西村教諭の登場に少し驚いたような表情をした後に名残惜しそうに入口から距離を取る。

「……ようやく出れましたわ」

「あれ？　前田くんに吉井くんまで」

「て、天使ちゃん♪　前田くん、これは怜生くんにプレゼントだよ。その代わり、着た時の写真をちょうだいね」

入口が開くと怜生を抱っこした美春と友香も一緒だったようで部屋から出てくる後ろから怜生に着せようと考えていたのかクマやキリンのぬいぐるみ型のパジャマを持った美紀が顔を出すが美紀は明久を見つけるなり、獲物を追う猛禽類のような目つきになると持っていたパジャマを理音に渡し、

「た、玉野さん！？　お、落ち着くんだ。ボクとリオは怜生くんを迎えにきたんであって、おかしな物は着ないからね！！」

「……アキ、玉野、少し黙ってくれ」

明久は声を上げながら美紀の様子に後ずさりを開始し始め、理音はため息を吐く。

「前田くん、怜生くん、寝ちゃったんだけど、清水さんの服をつかんだまま、放してくれないのよね」

「無理に起こすわけにもいきませんし、少しだけ困ってしまいましたわ」

「あぁ。悪いな」

友香と美春は怜生を理音に渡したいようだが怜生は美春の服をしっかりとつかんだままであり、理音は苦笑いを浮かべると、

「怜生、起きろ。部屋に戻るぞ」

「……お兄ちゃん？」

理音は美春から怜生を受け取り、怜生の名前を呼ぶと怜生は理音の声に反応したようで美春の服を話して開ききらない目を手でこすりながら理音を呼び、

『『『……』』』

理音と怜生の様子を遠目から見ていた女子生徒達は怜生の可愛さと理音の無表情な姿のギャップに何か感じたようで声をあげる事なく、ハイタッチを始め出し、

「前田くん、今の怜生くんの写真を撮っても良いかしら？」

「……小山さん、流石にそれは止めた方が良いと思うわよ」

友香は寝ボケ眼の怜生の写真を撮りたいようで携帯電話を取り出すが優子は怜生の状態を考えて止めた方が良いとは言うが、

「……優子、悪者だね」

「だからと言っても仕方ないでしょ」

囲んでいる女子生徒からは優子に向けてブーイングが上がり始め、

「……前田、吉井、戻るぞ。あまり、男子生徒がここにいるのは良くないからな」

「そ、そうだよね。リオ、帰ろう」

「あぁ。清水、小山、玉野、世話になったな」

西村教諭は怜生を中心に騒ぎが起きているため、この騒ぎを鎮めるために理音、怜生、明久を連れて男子部屋に戻って行く。

# 第４３６問（後書き）

どうも作者です。

番宣です。

以前から書かせていただいていた『サドとちっちゃな幼なじみ』の他にｉｆを書き始めました。『僕と歪んだ愛情表現？』の深秋をヒロインにした『僕と幼い日の約束』。思いつきで書かせていただいた美波をヒロインにした『ａｎｏｔｈｅｒ　ｓｋｙ』をサド邪ｉｆシリーズとしてまとめました。興味がある方はご覧ください。

そして、サド邪ｉｆシリーズはまさかの美春を正式ヒロインに見つめた『Ｂｅｒｓｅｒｋｅｒ　Ｐｒｉｎｃｅｓｓ（仮）』も計画中です。

# 第437問

「……女子部屋、良い匂いだったよ」

「アキ、おかしな事を言うな。匂いの成分的にはシャンプーやボディソープの匂いでしかない」

「だとしても、やっぱり違うよ」

「……お前達はおかしな事を言うな」

理音達が男子部屋の入口まで戻ると明久は女子部屋の方は女の子の良い匂いがしたと言いだし、西村教諭はそんな男子高校生の会話に大きくため息を吐くと、

「前田はまだ召喚システムの調整をするのか？　怜生くんの事を考えると今日は休んだ方が良いのではないか？」

「そうですね。調整はプログラムがある程度、自動でやってくれるので今日はこのまま休もうと思います。怜生もこんな感じですし」

西村教諭は理音が強化合宿中はまともに寝ていない事もあるため、理音の体調を心配すると理音は怜生が自分の服をしっかりと握りしめて寝息を立てている様子に苦笑いを浮かべて頷く。

「そうしろ」

「はい。アキ、部屋に戻るぞ……戻れたら良いな」

「何？　戻れたら良いのってどう言う事？　……うん。戻れたら良いね」

理音は部屋に戻ろうとして廊下の先に視線を向けると眉間にしわを寄せ、明久は首を傾げた後、廊下に視線を移すとそこには女子部屋から帰ってきた理音と明久に敵意を通り越して殺意をまとったＦクラスの生徒と強化合宿でＦクラスに毒された他のクラスの男子生徒が陣取っており、

「リオ、あれだよ。花火は？」

「悪いな。怜生を抱きかかえている状況では取り出す事ができん」

明久はいつも簡単にＦクラスの生徒を迎撃している理音に助けを求めるが理音は今の状況では何もできないと首を横に振る。

「お前達、消灯時間になるんだ。遊んでいないで部屋に戻れ」

『いくら、鉄人だろうが、この人数では無理だろ。総員、吉井明久、前田理音、前田怜生の首を我らが誇り高き異端審問会に奉げるのだ！！』

西村教諭は男子生徒達の行動に頭を押さえて大きくため息を吐くが男子生徒の１人が殺意を押さえる事なく吠えると４人に向かい、男子生徒達は駆け出し始め、

「……まさか、怜生くん相手でも許せないのか？」

「……彼女ができるとかそれ以前の問題だとどうして気付かないんだ？」

「リ、リオも鉄人もどうしてそんなに落ち着いているんだよ!?に、逃げないと殺されちゃうよ」

西村教諭は今回は理音と明久の味方であるようで歩を進め、理音は眉間にしわを寄せるが逃げる気はないようであり、明久だけが今の状況に慌てているが、

「……フィールド起動。強制召喚」

「リ、リオ、それって今日の試召戦争の?」

理音は落ち着いた様子で召喚フィールドを展開すると男子生徒達の足元に機械的な魔法陣が描かれ始め、「ポン」と言う音とともに男子浴場で現れたハリセンやピコピコハンマーが現れ、男子生徒達を張り倒して行き、遅れて台車が数台現れると張り倒された男子生徒達を補習室に運んで行き、

「前田、この召喚何だが、学園でもできるようにならないか?」

「そうですね。考えておきます」

西村教諭は簡単に収まった暴動に理音に学園でも同じ事ができないかと相談する。

# 第438問

「あの後も大変だったのね」

「Fクラスだけじゃないんだね」

理音は先に召喚システムの様子を見に行った理音を抜かしたいつものメンバーが食堂に集まると明久は男子部屋に戻った時の事を優子と愛子に話すと2人は男子生徒の行動に大きく肩を落とす。

「うん。木下さんと工藤さんの方は大丈夫だったの？」

「暴動になりかけたんだけど、前田くんと清瀬くんに連絡したら……」

「後はなぜか、弓永さんもいっぱい、写真を持ってたわ」

「……理音はブラコンの気があったが、なんで、清瀬と弓永はこんなにがきんちょの写真を持ってるんだ？」

明久は苦笑いを浮かべながら悪役を買って出てくれた優子達の方はどうだったかと聞くと理音、大樹、深月からたくさんの怜生の写真がメールで送られてきた事で騒いでいた女子生徒達は収まったと笑うが雄二は何故か怜生の写真を大量に抱え込んでいる2人の意味がわからないようで眉間にしわを寄せると、

「……ただで配られると売上に響く」

「ムッツリーニ、お主、理音に写真を売っている事をばれるように

するのじゃぞ」

「……下手したら殺される」

康太は怜生の写真も売りさばいているようでぽつりと不満を漏らすと秀吉と翔子は康太に理音にばれないように気を付けるように心配されるが、

「……専売許可は取っている」

「その分、きちんと怜生くんの写真は全種類、理音に渡すことになってるみたいよ」

「……完全にブラコンじゃねえか」

優子と康太は理音から許可は取れていると言い、雄二は顔を引きつらせる。

「まぁ、やっぱり、小さい頃のアルバムは有った方が良いよね。怜生くん」

「そうですね」

「……こうやって見ると吉井と瑞希も夫婦みたい」

明久は隣に座っている怜生に写真はあった方が良いかと聞くと怜生は良くわかっていないようだが大きく頷き、怜生を挟んで座っている瑞希も明久の言葉に賛同すると翔子が余計な爆弾を投下し、

「な、何を言ってるんですか？　しょ、翔子ちゃん！？」

「み、美波？　ど、どうして、ボクの肩をつかむのかな？」

瑞希は翔子の言葉に顔を真っ赤にして慌てるのと同時に怒りの美波の指は明久の肩に食い込み始め、

「別にどうして、いつも瑞希なのかな？　と思ってね」

「ちょ、ちょっと、意味がわからないよ！？」

美波は額に青筋を浮かべながら明久の肩をつかむ手にさらに力がかかりだし、明久は激痛に脂汗を流しながら美波に解放を願い出るが聞き入れられるわけもなく、

「意味なんてわからなくても良いのよ。アキがウチのストレスを解消させてくれれば」

「……そんなわけがあるか」

「前田、また、邪魔をする気？」

美波は明久を攻撃して自分の中にあるストレスを発散させようとした時、理音が食堂に戻ってきて美波を止めるが美波は理音を睨みつける。

「……島田、お前は昨日も同じ事を言わせたのに今日も同じ事を言わせるつもりか？」

「確かにね。島田さんも落ち着きなよ。前田くん、何か急いでいるみたいだけど、何かあったの？」

理音は美波に向かいあまり血圧をあげるなと言いたげに席に座るとあまり時間もないのか運んできた朝食のみそ汁をご飯にかけると一気に腹の中に流し込み、愛子は理音の様子に苦笑いを浮かべると、

「ん。ちょっとな。最終日だしな。ちょっと、試しに話をしてみたら、思いのほか乗り気でな。その調整をな」

「いや、意味が分かんねえよ。必要なところをきちんと話せ」

「まぁ、気にするな。どうせ、直ぐにわかる事だからな。悪い。アキ、もう少し、怜生を頼めるか？」

「う、うん。ボクは良いけど」

理音は朝食を一先ず、腹に流し込むと食器を片づけるために立ち上がり、

「……おかしな事しか起きない気がするのじゃ」

「そうね」

理音の背中に一抹の不安しか感じないメンバーであった。

# 第４３９問

「それでは行きましょうか。前田くん」

「そうですね」

「……まさか、先生達まで悪のりをするとは思いませんでした」

最終日の試召戦争が始まり、しばらくした時、召喚システムの管理をしている理音の周りに西村教諭、学年主任であり、Ａクラス担任の『高橋洋子』教諭だけではなく強化合宿の引率の教師陣が全員集まっている。

「それでは始めます」

「あぁ。男女ともに昨日のバカ騒ぎの件もあるしな。反省させるには良い機会だ」

理音は準備ができたかと教師陣に確認すると西村教諭は大きく頷き、

「……これをどう使うかは生徒しだい」

理音が口元を緩ませてパソコンのエンターキーを押すと轟音とともに試召戦争の舞台に火柱が２ヶ所立ち上がり、

「……前田、これは大丈夫なのか？」

「ん？　当然です。この火柱はあくまで演出の映像ですから生徒にも召喚獣にもダメージはありません」

西村教諭は立ち上がった火柱を見て眉間にしわを寄せると理音はただの演出だと言い切るが、火柱が上がった事に生徒達は当然、パニック状態になるが、恐怖はその後にやってくるものである。

「……試獣召喚（サモン）。多重召喚（ダブル）」

理音が召喚獣を呼び出す言葉（ワード）と明久が白金の腕輪を得て使用する事のできる多重召喚の言葉（ワード）を使用すると2ヶ所の火柱の中には杖を手にローブをまとった魔術師風と日本刀を腰に刺した武士風の理音の召喚獣が立っており、

「それじゃあ、私達も行きましょうか？」

「そうですね」

理音の召喚獣だけではなく、教師陣も試召戦争のなかに進んで行き、

「……これが最終日のイベントかよ」

「ボス戦ってやつかな？」

雄二と源二は火柱のなかに立っている召喚獣の姿を見て、理音が考えている事を理解したようで苦笑いを浮かべると、

「雄二、どう言う事なのじゃ！？」

「さあな。理音が考えている事だ。これで終わるとは思えないぞ」

秀吉は状況が理解できないようで雄二と源二に駆け寄り、雄二は次

の理音の行動を推測しようとした時、

『て、敵襲！！　て、鉄人が攻めてきたぞ』

『に、逃げろ！！　ヤツは人間では倒せない！！』

『お、大島だ。俺達じゃ無理だ。ム、ムッツリーニに援護を要請するんだ！？』

教師達が生徒達に試召戦争を仕掛けはじめたようで生徒達の悲鳴とともに西村教諭の生徒を補習室に運ぶ声が響いて行く。

「……理音の召喚獣だけじゃなく、まさか、教師まで投入かよ」

「坂本、平賀、これはどう言う事だ！！」

「知るかよ。俺達が聞きてえよ」

雄二は理音の行動に舌打ちをした時、状況を確認しに恭二が戻ってくるが雄二にも理音の考えを読み切る事はできていないため、恭二を怒鳴りつけると、

「せっかくの最終日だ今日の最高得点者にも賞品があると説明しただろ。質より量の相手を用意してやったんだ。せいぜい、『協力』して戦ってくれ」

「……ったく、そう言う事かよ」

「雄二、どう言う事なのじゃ？」

生徒全員に聞こえるように理音の声が響き、理音の言葉に雄二は何かに気づいたようで小さくため息を吐くと秀吉はまだ理音の考えている事が理解できないようで首を傾げる。

# 第４４０問

「昨日は今日のトップ賞にも賞品をくれてやるって言ってただろ」

「うむ」

「だけど、それより、目的は平賀と三上のような人間を作ること」

雄二は理音の目的を男女を協力させる事だと話し、

「さ、坂本、な、何を言ってるんだ！？」

「慌てるなよ。俺も別にクラスの奴らと同じ行動をする気はない。俺があいつらに賛同するのは明久の幸せをぶち壊す時だけだ」

「……それを公言するのはどうかと思うのじゃ」

源二は周りに知れ渡ると面倒な事になるため、慌てて雄二の口をふさごうとするが雄二は源二の幸せを壊すつもりはないと言った後、明久は不幸のどん底に突き落としたいと何の迷いもない瞳で言い切り、秀吉は大きく肩を落とす。

「まぁ、結局は男子連中に良いかっこを付けさせてやりたいって事だな。後はバカの駆除……」

「……見る見るうちにＦクラスが駆逐されていくのじゃ」

雄二は教師陣に目の敵にされるように補習室送りにされて行く、クラスメート達を見てため息を吐くと、

「それじゃあ、男女協力で教師や前田の召喚獣を倒せって事か？」

「それなら、木下さんに合流した方が良いんじゃないか？　いくら、前田とは言え、彼女は倒せないだろ」

恭二と源二は状況を理解したようであり、優子と合流しようと言いだすが、

「いや、理音の性格上、木下姉だろうと関係ない。今回に限って言えばあいつはルールだからな。それができないとしたら、教師陣が木下姉の部隊を襲いかかってるはずだ」

「確かにのう。島田にルールの事を話しておったし、姉上相手でも本当に死ぬわけでもないし、情はかけんじゃろうな」

雄二と秀吉は理音の性格では優子を特別扱いする事はないと言い切り、

「平賀、根本、点数を稼ぎたいなら、俺や秀吉からも離れた方が良いぞ。はっきり言えば、ルールの公平さを考えると俺や秀吉にも攻撃を仕掛けてくる可能性が高い」

「そう言う事です」

雄二は理音の性格からこの場所にも理音の召喚獣が来る可能性が高いと言った時、魔術師風の理音の召喚獣が現れる。

「……理音、なぜ、召喚獣が話しておるのじゃ？」

「すいません。私はマスターではありませんので正確な事は話せませんが、簡単に言えば簡単な人口ＡＩを召喚獣のプログラムをのせています。マスターは現在はプログラム維持に手一杯なので、マスターの思考から推測して私ともう１人は動いています」

「……相変わらずの無駄な技術だな」

秀吉は現れた理音の召喚獣を警戒するように身体を向き直すと召喚獣は自分の意志でこの場所に現れたと言い、雄二は勝手に歩き回る召喚獣に大きくため息を吐くと、

「それじゃあ、俺達は今から全力でお前と戦わないといけないわけか？」

「そうですね。お望みならそうしても良いんですが、どうも、もう１人が好戦的なようで、説明役はどうやら、私のようでマスターの行動に叫び声をあげている方にも説明してこないといけませんので」

雄二は召喚獣を呼び出そうとするが召喚獣は行儀よく頭を下げると召喚獣の背後の空間は歪みだし、

「瞬間移動か？」

「まぁ、私はデータでしかありませんからね。それでは私達に狩られないようにせいぜい、気を付けてくださいね。時間まで逃げ切れたら生き残りボーナスもあるようですから」

雄二は一先ず助かった事に苦笑いを浮かべるが召喚獣は言いたい事は述べたようで姿を消してしまう。

# 第４４１問

「あいつは何をしてるのよ！！」

「いやぁ。この光景も3日目になるとなれてくるね」

「弓永さん、適応能力高いね」

優子は理音の召喚獣が火柱の中から出現した時、理音の行動に声を張り上げるとその姿を見た深月は優子の叫び声がないと召喚戦争が始まらないと言いたげに頷き、愛子は苦笑いを浮かべる。

「まぁ、適応能力が高くないとこの学園じゃ生きていけないよ」

「そうかもね」

「弓永さん、工藤さん、遊んでいないで作戦を決めませんか？」

深月と愛子は文月学園で生きていく術だと頷きあっている姿を見て、瑞希は遠慮がちにこの後の作戦を決めようと言うが、

「うーん。作戦って言ってもね。すでに男女間の試召戦争でもなくなってるみたいだし」

「え？　どう言う事ですか？」

「理音は『協力』しろって言ったでしょ。あれは男子、女子じゃなくて全員で協力しろって事だよ。女の子らしく、好きな男の子に守って貰いたいって言っても問題なしだよ」

深月は理音の考える事を直ぐに理解できたようで瑞希をからかうように笑うと、

「深月さんは気づきますか？　他に気づいている人は何にいますかね？」

「理音、あんた、何をしてるのよ！！」

そこには理音の召喚獣が現れ、理音の召喚獣を見つけた優子は理音の召喚獣をつかみ、大きく身体を揺する。

「召喚獣をつかめてるね」

「あれじゃない。観察処分者仕様だからとか」

「そんな事をしたら、理音が死んじゃうでしょ」

優子が召喚獣をつかんでいる姿に瑞希、愛子、深月は苦笑いを浮かべ、

「優子、それくらいにしなよ。前田くんも話があるから、ここに出向いてきたわけだし」

「そうしてくれると助かります……あの。なぜ、私は捕まえられるんですか？」

「うん。何となく、召喚獣って抱き心地が良いよね」

愛子は優子を止めると理音の召喚獣は愛子に礼を言おうとするが愛

子は召喚獣のサイズが何かにしっくりときたようで少しだけ気まずそうに笑うが召喚獣を放す事はなく、

「……理音、ちょっと良いかしら？」

「優子さん、勘違いしているようですが、私はマスターとは違います」

優子は笑顔で召喚獣を呼ぶと召喚獣は身の危険を感じたようで、自分は理音とは違うと大きく首を振ると、

「うん。理音の反応じゃないね」

「そうみたいですね」

「優子、ストップ、一先ずは召喚獣の……ねえ、召喚獣じゃ面倒だから、名前を決めようか？」

深月と瑞希は召喚獣の反応が理音の反応と一致しないため、優子を止めると会話をする上で面倒なため、召喚獣に名前を付けようと言い始める。

「……そんなヒマはないんですけど」

「まぁ、良いじゃない。せっかくなんだし、ねえ、気分的にはあっちで暴れてる子も同じ立場なんだよね？」

召喚獣は女子特有の姦しい様子にどのように対応して良いのかわからないようで、愛子の腕の中で首を傾げるが深月は気にする事なく、

「双子みたいだけど、どっちがお兄ちゃん？」

「どちらと言われると私は昨日のマスターの戦闘データから作り出されているので私の方が先にできたとなりますが」

「君がお兄ちゃんなんだね」

召喚獣は諦めが入ったようで深月の話に付き合いだし、

「……深月ちゃん、凄いです」

「……そうね」

召喚獣とも平気で会話をする深月の様子に優子は眉間にしわを寄せ、瑞希は苦笑いを浮かべる。

# 第442問

「それじゃあ、君が『アイン』くんにあっちの暴れてる子が『ツヴァイ』くんね」

「……もう、どうでも良いです」

「それで、アインくんはどうしたの？」

深月に『アイン』と名付けられた召喚獣はこの場所に来た事を後悔しながらうなだれている姿に愛子は苦笑いを浮かべてアインにこの場所に訪れた理由を聞くと、

「はい。今日の試召戦争が始まると優子さんが叫び声をあげてマスターに対して怒り狂って女子軍に迷惑をかけると思いましたので説明をしに来たはずだったんですが……」

「……完全に優子の行動は読まれてるんだね」

「……理音の召喚獣のデータを基にしてるとは言え、それはそれで複雑ね」

アインはここでの会話で深月が理音の考えを理解して、正直、後悔しているようであり、アインの様子に優子は眉間にしわを寄せる。

「まぁ、ボクも理音の考えを理解したしね。優子の周りはアインくんは直ぐには仕掛けてこなくてもツヴァイくんが来る可能性も高いね。理音は割と平等だから、優子だけを特別扱いしないだろうし」

「そうですね。深月ちゃん、凄いです」

「任せてよ」

深月は理音の考えを読んだ事に少しさびしい胸を張ると瑞希は彼女を誉め、周りでは生徒達が深月命名の『ツヴァイ』や教師陣に狩られているなか、緩い空気になっており、

「何やってるのよ。遊んでいないで増援を？　……前田くんの召喚獣がこんなところにも！？」

「小山さん、えーと、落ち着いてね」

前線の指示を取っていた友香が女子本陣に増援を求めて駆け寄ってくるが、アインの姿を見て驚きの声をあげ、愛子は簡単にアインの事を説明すると、

「そうなの。とりあえず、工藤さん、アインくんの抱き心地はどうなの？」

「うん。すっごく良いよ」

「そうなの……」

見た目は怜生より小さいアインの姿は女子生徒達にはツボなところもあるようであり、友香や本陣にいた女子生徒達も愛子が羨ましかったようで愛子の腕のなかにあるアインに手を伸ばし、

「こ、これはどう言う事ですか！？」

「……アインくん、連れて行かれちゃいましたね」

「そうだね」

「うん。理音にボク達の召喚獣も抱きつけるように……ダメだね。自分のだとなんか、面白くないし、ナルシストっぽい」

アインは女子生徒に拉致され、アインの悲鳴だけが響いて行き、その姿は理音が生徒達を補習室に送るために作りだしたはずの最凶系の敵の姿には見えず、瑞希と愛子は苦笑いを浮かべ、深月はアインを抱きしめられなかった事に名残惜しそうな表情をする。

「取りあえずは、先生達や理音が作ったシステムの１つ無力化したって事で良いのかしら？」

「……まぁ、昨日の怜生くんの事を考えればそれを予想できなかった理音の落ち度かな？」

「いやぁ、これは予想できないと思うよ。それにアインくんはアインくんの考えでここに来たみたいだし」

優子は眉間にしわを寄せながら、自分達もそろそろ試召戦争に繰り出さないといけないと判断したようであり、わずかに残った女子生徒達は苦笑いを浮かべつつも大きく頷き、

「それじゃあ、女子本陣……とは言えないくらいになったけど、出ようか？　状況はわかる男子もいると思うから、その場合は協力、点数狙いで戦いを挑んでくる男子には容赦しないようにね。先生達と戦う場合は先生の担当教科では絶対に勝てないと思うから他の教科に引きずり込む事、優子、瑞希、愛子、頼りにしてるよ」

深月は攻撃指示を出し、わずかに残った女子本陣は攻撃に部隊を進めて行く。

# 第443問

「……これは予想外だな」

「まったくさね」

理音とカヲルは召喚システムを管理しながら女子生徒達にアインがさらわれた様子に眉間にしわを寄せると、

「お兄ちゃん、僕も」

「あぁ。試獣召喚（サモン）」

怜生も理音の召喚獣を抱きしめるのがお気に入りのためか理音の顔を見上げ、理音は怜生の様子に怜生が望んでいる事を理解して召喚獣を呼び出す言葉（ワード）を発すると地面には機械的な魔法陣が描かれ、「ポン」と言う音と一緒にドラゴンに乗った理音の召喚獣が現れ、怜生は直ぐに召喚獣を抱きしめて嬉しそうに笑い、

「……康太、お前、試召戦争は良いのか？」

「……それよりはこの写真の方が重要」

怜生の愛らしい姿を嗅ぎつけた康太は試召戦争を後回しにして駆けつけ、理音は大きく肩を落とす。

「……それにこうやって怜生くんが笑ってくれるようになったのは俺も嬉しい」

「ん？　あぁ、そうだな」

康太は怜生と出会ってから写真を撮っている事もあるためか、最初に会った時から表情が増えてきた怜生の事を本当に嬉しく思ってくれているようで理音はそんな康太の言葉に珍しく表情を緩ませ、

「……理音の表情が増えるのもな」

「ん？　何を言っているんだ？」

康太は理音が表情を緩ませた瞬間もデジカメのなかに記録してくすりと笑うが理音は自分の表情が変わった事になど気づいていないようで首を傾げ、

「……何でもない。俺は試召戦争に戻る」

「そうか。頑張れよ」

「……それなら、手加減をしてくれ」

「それは無理だな」

康太は大きく首を横に振り、試召戦争に戻る事を告げると理音は表情を変える事無く康太の背中を見送る。

「……なるほどね。彼女だけじゃなく、それなりに楽しくやっているようだね。まぁ、周りはバカばかりみたいだけどね」

「ん？　どうかしたか？」

「いや、何でもないよ。それより、続けるよ。データを集めないといけないんだからね」

カヲルは理音と康太の様子に少しだけ表情をほころばせると理音は意味がわからないようで首をかしげ、カヲルはそんな理音の様子に苦笑いを浮かべて召喚システムの調整を続けるように言い、

「そうだな。せっかく、深月達が名前を決めたようだしな。アイン、いつまでも遊んでいるな」

「わ、わかっていますけど、マ、マスター、どうしたら良いんでしょうか？」

理音は召喚戦争が映し出されているディスプレイからアインの映っているディスプレイを中心に映し出すとアインは現在、女子生徒に追われており、アインは女子生徒達の勢いに完全に流されてすでに対処ができなくなっているようで泣きそうな声で返事をするがその様子が彼を追いかけている女子生徒達にさらに火を点けたようであり、

「……まぁ、頑張れ。アイン」

「み、見捨てないでください。マスター！？」

流石の理音も昨日の怜生の仕草に歓声まであげる女子生徒達には気落とされていたようでアインを応援するとアインは理音に見捨てられると判断したようで悲痛な声をあげるが、

「別に見捨てるつもりはない。強制転送するぞ」

「は、はい。ありがとうございます。マスター」

理音はアインを1度、他の戦場に送るようであり、アインは身の危険から脱せる事に安心したように返事をするとアインの周りの空間は歪みだし、アインはその場所から消えてしまうと、

「アインくんが消えたわ。前田くん、余計な事を。みんな、アインくんを探すわよ！！」

友香はアイン捜索隊を結成し始め、女子生徒達は直ぐに友香の指示に従いだし、

「……本当にこの学園の生徒は大丈夫なのか？」

「……自信がなくなるさね」

理音とカヲルはディスプレイに映る女子生徒達の姿に大きく肩を落とす。

# 第４４４問

「見つけたわよ。アキ」

「み、美波！？　ま、待って落ち着くんだ。ど、どうして、拳を握り締めているの！？」

明久は試召戦争とは別の意味で命の危険にさらされていた、最終日の試召戦争が始まって直ぐに理音と教師陣の仕掛けた教師乱入と言う事態にも慌てる事無く、日本史と世界史の２教科に教科を絞り、攻めかかってきた生徒達を倒して地味だが確実に点数を稼いでいた中、明久に取っては教師や理音の召喚獣より出会ってはいけない３人の内の１人である美波に遭遇してしまう。

「待って。まずは落ち着こう。だいたい、どうして、美波はボクに直接攻撃をしようとするんだよ」

「何を言ってるのよ。アキ、直接攻撃なんかしないわ」

「そ、そうなの？」

明久は美波を落ち着かせて逃げるタイミングを計ろうとすると美波は明久を直接攻撃する気はないと笑顔を見せ、明久はほっとしたようで胸をなで下ろすが、

「だって、ウチはアキもアキの召喚獣もボッコボコにするんだから」

「ちょっと、リオ、空におかしなテロップを入れるヒマがあったら助けてよ！？」

美波の考えは明久の予想の斜め上を突き抜けており、美波の言葉に反応するかのように空には『要するにフルボッコ』と書かれ、明久はこの状況を見ているであろう理音にツッコミを入れると、

「そうだな。島田、何度も言わせるな。本体を倒しても点数にはならないぞ」

「そっか。忘れてたわ」

「忘れてたじゃないよ!?　美波、君はやっぱりバカなの!?　どうして、直ぐにボクを殴る方向に思考が飛ぶんだよ!!」

理音は美波を止めるとそこで美波は明久を倒しても何にもならない事を思い出したようで手を叩き、明久は美波の考えはおかしいと叫んだ時、

「……豚野郎の分際でお姉さまを罵倒するとはどう言う事ですか？」

「し、清水さん？」

明久は背後から美波以上の殺気をまき散らした美春の声が聞こえ、顔を引きつらせて振り返ると想像した通り、漆黒の殺意をまとった美春が立っている。

「ふむ。アキ、絶対絶命ってヤツだな」

「冷静に言ってないで助けてよ!?」

「いや、人外化した清水は倒せば点数が高いぞ。点数を稼ぐには良

い状況だろ」

「違うよ。命があってこそだよ！？」

理音は明久の状況を見て、淡々とした口調で明久に高得点獲得のチャンスだと言うが明久にとってはそれどころではなく大声をあげると、

「アキ、覚悟は良いかしら？」

「豚野郎、美春とお姉さまのデートのために死んでもらいますわ」

完全に最終日の試召戦争の目的とは外れた2人が明久に襲いかかろうとした時、

「……待て。2対1とは卑怯な真似は許さん」

「へ？　リオの召喚獣？　リオ、ひょっとして、ボクを助けてくれるの？」

「アキ、悪いがツヴァイが動いているのは俺の意思じゃない。ツヴァイの意思だ」

日本刀を腰に差した深月命名の『ツヴァイ』が美波と美春から明久を守るように立ちふさがり、明久は理音が自分を助けてくれると思ったようだが、

「……勘違いなされるな。明久殿、我は卑怯な真似が許せんだけだ。故に微弱ながら明久殿に助太刀させて頂く」

「そ、そうなの？」

ツヴァイは腰の日本刀を抜くと明久に助太刀をすると言い始め、明久は頭が付いて行かないのか首を傾げる。

# 第４４５問

「……行くぞ。明久殿」

「う、うん。Ｆクラス吉井明久が日本史勝負を!?　な、何で、勝手にフィールドが決まるの!?」

ツヴァイが明久に召喚獣を呼び出すように声をかけると明久は自分の有利な日本史でフィールドを展開しようとするが召喚フィールドは明久、美波、美春、ツヴァイの４人を総合教科のフィールドが囲む。

「決まっている。戦場とはお互いの全力をぶつけあう場。単体教科など男らしくない」

「ちょ、ちょっと、でも、総合教科だとボクは美波に勝てないよ!?」

ツヴァイは自分が召喚フィールドをした事を話すと明久は点数的に美波に勝てないと声をあげるが、

「逆境を跳ね返す時にこそ。男児の成長につながる」

「そ、そうだ。この召喚獣はリオの召喚獣なんだ。きっと、美波や清水さんを簡単に倒すくらいの点数のはず……役立たずだ!?」

ツヴァイは落ち着いた様子で日本刀を構えると明久はツヴァイが味方なら絶対に負ける事などないと考えるが召喚フィールドの中でツヴァイの頭の上に表示された点数は総合教科で１０００点を切って

おり、明久は頭を抱える。

「役立たずですわ。豚野郎の召喚獣は所詮はクズでしかありませんわ。お姉さま、速くあの豚2匹を血祭りに上げて美春と愛の楽園に参りましょう。試獣召喚（サモン）ですわ！！」

「そ、それは遠慮したいかな」

美春はツヴァイの点数を鼻で笑うと召喚獣を呼び出すが美波は美春が現れた事で自分も被食者（エサ）である事を思い出したようであり、後ずさりするがすでに召喚フィールドの中に入ってしまったため、逃げる事はできずに顔を引きつらせると、

「自業自得だ」

「そんな事を言ってないで助けなさいよ！？　そ、そうだ。清瀬に連絡してよ。それくらいしてよ」

「残念ながら、清瀬は生徒達をまとめて現在は化学の布施先生と交戦中だ。それがあるから清水も大手を振ってここにいるんだろ」

放送で理音はため息混じりの声で美波に声をかけ、美波は大樹を呼んで欲しいと叫ぶが大樹は男女間の試召戦争で得た信頼で彼はすでに個人で動くわけにはいかない立場になっており、美春は大樹の手が届かない状況に嬉々として美波を捕食しに来たと事を話し、

「それより、アキ、島田、召喚獣を呼びださないみたいだからな。俺が呼び出してやろうか？　どうせ、召喚フィールドが展開された時点で逃げられないんだ。覚悟を決めないとツヴァイに倒されるぞ」

「倒されるって言ったって、点数はFクラス並みなんだよ。今のボクや美波の点数なら、ど、どうして!?」

「な、何で、美春の方が押されてるのよ!?」

理音は明久と美波にツヴァイと美春の戦いに目を向けるように言うと点数差では圧倒的にツヴァイが不利だったはずだがツヴァイは素早い動きで美春の召喚獣の攻撃を交わし、美春の召喚獣を斬りつけ、美春はツヴァイの事を捉える事ができずに彼女の血圧はあがっているようで顔を真っ赤にしてツヴァイを怒鳴りつけており、

「ちょこまかと動くんじゃありませんわ。豚野郎!!」

「……つまらん」

「死になさい。豚野郎!!」

ツヴァイは美春との戦いでは面白くないと言いたげな表情をすると日本刀を鞘に戻して立ち止まり、美春はその様子を見て止めを刺そうと彼女の召喚獣はツヴァイに飛びかかろうとするが、

「……また、つまらぬ者を斬ってしまった」

「な、何なんですか!?」

決着はツヴァイが日本刀を鞘に戻した時についていたようであり、美春の召喚獣の身体は上半身と下半身が分かれて召喚獣は地面に倒れ込み美春は何があったかわからないような表情をする中、

「戦死者は補習!!」

「覚えておきなさい。豚野郎！！」

西村教諭が現れて美春を担いで召喚フィールドから出て行き、美春のツヴァイへの殺意のこもった叫び声が響く。

# 第４４６問

「リ、リオ、どうして、清水さんは負けたの？」

「ん？　ツヴァイの性能は操作性に特化させているわけだ。後はこの学園に存在しない。武士道とか騎士道とかを正確に組み込んで見た。点数は相手の点数を読み取ってその３分の２程度に調整する」

「それって、戦う人間相手で点数が変動するって事？」

「まぁ、簡単に言えばな。だが、ＡＩの成長はツヴァイしだいだからどう変わって行ったかは試召戦争が始まってからの状況だからな」

明久は目の前の信じられない光景に理音にツヴァイの能力を確認すると理音はツヴァイの基本性能を話すがその後は自分の知ることではないと話した時、

『前田の召喚獣は点数が低いぞ！！　一斉にかかれ！！』

『あの召喚獣、さっき、女子達に囲まれてやがった。許せねぇ。血祭りにあげるんだ！！』

ツヴァイの点数だけを見て、勝てると思ったまだ補習室送りになっていなかったＦクラスの生徒１０名が一斉にツヴァイに襲いかかるが、

「……多勢に無勢とは情けない」

ツヴァイは襲いかかるＦクラスの生徒達の攻撃の隙間をすり抜ける

と日本刀に手をかけると、勢いよく日本刀を抜くと同時に3体の召喚獣の首が地面に落ち、ツヴァイに斬られた召喚獣のキズの切り口からはまたも理音のいらないこだわりが入ったようで勢いよく赤い液体のようなものが噴き出る。

「ふむ。抜刀術か？　なかなか、面白く成長しているな。やはり、時代劇の殺陣のデータを組み込んだのも良かったか？」

「待て！？　感心するのはそこじゃないだろ。やる事がグロイから、怜生くんとか女の子が泣くからね！！」

「……前田、これは無理」

理音はツヴァイの技に感心したように言うが明久は目に映るにはあまりにグロテスクな光景に声を上げ、美波は顔を真っ青にして地面にへたり込んでしまい、

「そうか。リアルを追及してみたんだが」

「だから、そうじゃないからね」

理音は不評な理由がわからないようであり、明久が叫んだ時、

「次は明久殿と島田殿の番だな」

「む、無理、ウチは辞退する」

Fクラスの召喚獣を倒して返り血で身体を真っ赤に染め、日本刀には血を滴らせているツヴァイが明久と美波に声をかけるが美波は目に映るツヴァイにすでに戦う気力がなくなってきたようで立ち上が

る事は出来ない。

「何を言っているんだ。戦場で後退などあり得ない。男児だろうと女子であろうと戦場に出れば1人前の武士でなければならない。武器を抜け、それは飾りか！！」

「……リオ」

「そうだな。ツヴァイ、一先ず、矛を収めろ。今回は俺の失敗のようだしな。島田が落ち着くまでは見逃してやれ」

ツヴァイは美波に向かい、情けない事を言うなと叫ぶが美波の顔からはすでに戦意だけではなく血の気も引いており、理音と明久はツヴァイに退くように言うが、

「しかし、主殿！！　それでは我の武士道が」

「戦意のない人間に戦いを強要するのは武士道ではない。傲慢なだけだ」

「……わかりました。主殿の指示に従います」

ツヴァイは納得できないようだが理音の言葉にしぶしぶ頷き、

「島田殿、勝負は預ける。主殿」

「あぁ……強制転送をかけるぞ」

ツヴァイは美波に声をかけると振り返ると理音はツヴァイの意思を読み取り、ツヴァイを強制転送をかけ、

「美波、大丈夫？」

「う、うん」

明久が美波に駆け寄ると美波は明久が自分を心配してくれている事が嬉しいのか頬を朱に染める。

# 第４４７問

「しかし、まぁ、何と言うか……死屍累々？」

「確かにな」

雄二と大樹は目の前で生徒達が補習室送りにされている様子に苦笑いを浮かべると、

「坂本、清瀬、お前達は戦わないのか？」

「……西村先生、以前から聞きたいと思ってたんですけど、西村先生の腕力はいろいろな世界の法則を無視してますよね？」

「清瀬、お前は何をわけのわからない事を言っているんだ？」

補習室に送る生徒を１０名抱えて歩いている西村教諭が声をかけてくる。

「お、おい。清瀬、鉄人と世間話は不味いだろ」

「いや、西村先生はすでに補習室に生徒を送り届けるのが仕事になってるから問題ないだろ」

雄二は西村教諭に召喚フィールドを展開すると逃げきれないため、大樹に避難しようと言うが大樹は苦笑いを浮かべながら西村教諭は召喚フィールドを展開する事はないと言い切り、

「あぁ。そっちは他の先生達と前田の召喚獣に任せる事にした。他

の先生方に任せると逃げる奴らもいるからな」

「……いや、それはありがたいんだけど」

西村教諭はすでに召喚獣を呼び出すのは止めたようで雄二はその言葉に眉間にしわを寄せるが、

「お前達も遊んでいないで真面目に戦うようにあまり、戦意が低いと前田が更に戦力を投入するとも言っていたしな」

「……あいつは何体の召喚獣のデータを作る気だ」

西村教諭は2人に真面目に参加するように言うと担いでいた生徒を補習室に運んで行くが去り際には不吉な言葉を残して行く。

「どうする？　割と散り散りになってきてるしな。戦力になりそうな人間と合流できれば良いんだけど、木下は本宮さんの元に駆け出すし、土屋は気が付いたらどこかに言ってるし、根本も平賀も同じく……まとまりないよな」

「まぁ、仕方ないだろ。秀吉や平賀は相手がいるし、根本は未練たらたらだしな。そう言う清瀬は清水のところに行かなくて良いのか？」

「美春の場合は暴走して直ぐに補習室に送られてるだろ。今更探すだけ、無駄。もう少し考えて動けるなら、探す価値もあるんだけどな。それより、共同戦線を張ってくれそうな人間を探そう。流石に最終日に補習室に送られたくないからな」

「そうだな」

雄二と大樹は次の相手を探すにも戦力が低下しすぎているため、次の作戦に移れないようで共同戦線を張ってくれそうな生徒を探していると、

「坂本くんに清瀬くん、何をしてるの？」

「ん？　木下姉に姫路、工藤と弓永か。今は休憩中、戦力がバラけちまったからな。２人じゃ何もできなくてな」

「それなら、合流する？　坂本くんがいると指揮を執ってくれるから、楽そうだし。あにより、ボク達も戦力がバラけちゃってＡクラス３人の中でボクだけ浮いてるから」

優子、瑞希、愛子、深月も共同戦線を張れる人間を探しているようであり、深月は雄二と大樹に誘いをかけ、

「それは良い提案だな」

「乗らせて貰う。共同戦線の提案のお礼に１つ情報を。教師陣は規制をかけてるのか腕輪を使ってこないぞ」

「え？　先生達って腕輪を使わないんですか？」

「それってホントなの。坂本くん、清瀬くん」

雄二と大樹は深月の提案に乗り、その礼なのか雄二は教師陣が腕輪を使っていない事を話すと優子と瑞希は驚いたようで声をあげる。

# 第４４８問

「あぁ。使わないようにしてるか、使えないかはわからないけどな」

「使わないようにしてるのは戦力バランスで考えてるからじゃないの？　先生方が腕輪を使えないなんてないでしょ」

雄二は理由ははっきりとしていないためかため息を吐くと愛子は雄二の『使えない』と言う言い回しが気になるようで首を傾げ、

「あぁ。１つ、使えないと思ったのは教師が腕輪を持つ意味があるのか？　って事だ」

「何で？　腕輪は４００点以上の特権でしょ？」

「それをどこで使うんだ？」

雄二は教師が腕輪を持っていないと思っているようであり、愛子は教師陣は腕輪の所有最低ラインである４００点以下の点数なわけがないと聞くと雄二は教師が腕輪を持っている意味がないと聞き返す。

「確かに先生方は試召戦争をするわけでもないからな」

「それって、先生方は腕輪を持ってないって事？」

「まぁ、あくまで可能性の問題だけどな。担当教科で攻めて返討ちになる可能性を考えたら他の教科で攻めるのが安全策だ」

雄二の言葉に大樹は納得が言ったようで頭をかくと優子は信じられ

ないようであり、雄二は冒険をする必要はないと苦笑いを浮かべると、

「でも、成績上位者3人がいるなら、悪い賭けじゃないよね？」

「あぁ。個人的な考えで言えば、教師の召喚獣より、理音の召喚獣の方が質が悪そうだ」

「アインくんとツヴァイくんですか？」

深月は優子、瑞希、愛子の3人をメインにして教師に当たるのは悪い賭けではないと考えたようであり、雄二も手に入れた火力は有効に使いたいようで口元を緩ませると理音の召喚獣と戦わないようにする事を提案し、瑞希は先ほど女子生徒達に追いかけられて半べそをかいていたアインを思い浮かべたようで苦笑いを浮かべる。

「アインとツヴァイ？」

「弓永さんが名付けたのよ。理音の召喚獣じゃ話がしにくいって言って」

雄二は召喚獣に名前が付いている事など知らないため、首を傾げると優子はため息を吐きながら簡単な経緯を話し、

「因みにアインくんはさっきから、女子達のマスコットになってるから……」

「ど、どうして、追いかけてくるんですか！？　わ、私は試召戦争をするためにマスターから作り出されたのであって、抱きつかれるためではないです」

愛子は苦笑いを浮かべながら騒ぎになっている場所を指差すと騒ぎの中心からはアインの泣き声が響き、

「……となると問題は後の1体か？」

「ツヴァイくんはたぶん、あっち」

雄二はツヴァイの居場所を考えると深月はもう1ヶ所、人だかりができている場所を指差すと、

『次は俺だ！！　行くぞ。ツヴァイ！！』

「……受けて立とう」

なぜか、ツヴァイの周りには1対1を望む体育会系の生徒が集まっておりツヴァイは日本刀に手をかけると楽しそうに口元を緩ませており、

「……ずいぶんと個性的な成長をしてるな」

「……理音は何を目的であの2体の召喚獣を作ったんだ？」

「気にしない方がいいかもよ」

雄二と大樹は理音の2体の召喚獣の成長に大きくため息を吐くと愛子はすでにアインとツヴァイは理音の手を放れていると笑う。

# 第４４９問

「……そうなると教師を狙うか？」

「そっちに行く？　点数的に言えば、ツヴァイくんが倒しやすそうだよ」

雄二はアインとツヴァイの相手は避けようと考えたようであり、教師を狙うかと提案すると深月は雄二の提案にツヴァイを囲んでいる場所から聞こえるツヴァイの点数が対戦者より低くなると言う事は聞こえているようで雄二に確認すると、

「いや、仮にツヴァイの相手は盛り上がってるけど、あれは何か１対１じゃないといけない空気だ。と言うか、人数を増やすと」

「……複数での戦いだとツヴァイは強いよ。１対１の方が分が良いかも」

「ホントよ」

雄二はツヴァイの能力に何か引っかかっているようで首を傾げた時、明久と美波が優子達が集まっている事に気づき、声をかけてくる。

「明久くん、美波ちゃん、無事だったんですか？」

「うん。何とか……美波と清水さんに殺されそうになったけど」

「そ、それはアキが悪いんでしょ！！」

瑞希は2人が無事だった事を喜んでいるようで2人に駆け寄ると明久は美波と美春から理不尽な暴力を受けそうになったと肩を落とし美波は自分は悪くないと言いたげに明久を怒鳴りつけ、

「……島田さん、何度も言ってるけど、責任転嫁は止めなさい。また、理音に怒られるわよ」

「島田さんもこりないね」

優子は美波の様子に大きく肩を落とし、愛子は苦笑いを浮かべると、

「明久、島田、お前達はツヴァイの戦いを見たのか？」

「う、うん。戦いを見たと言うか……斬殺シーンを見た」

「……うん」

雄二は明久と美波の様子から少しでもツヴァイの戦闘データを読み取ろうとしたようだが明久は雄二の問いに目を逸らし、美波はツヴァイがFクラスの生徒の召喚獣が倒された時の事を思い出したようで顔を真っ青にし、

「……理音、あいつは何をしてるのよ」

「斬殺シーンか？　ツヴァイくんは日本刀を使ってるし、理音って時代劇好き？」

「まさか、そんな日本に偏見のある外国人じゃないんだから……優子？」

優子は美波の変化に理音がまたおかしな事をしていると思ったようで眉間にしわを寄せ、深月は明久の言葉に首を傾げると愛子は流石にそんな理由で選ばないだろうと言いかけるが優子、明久、雄二の3人は愛子から視線を逸らす。

「ちょ、ちょっと、本当なの？」

「……最近、一昔前の時代劇にはまってるのよ。テレビの下にＤＶＤのボックスが何種類も並んでるわ」

「後は映画もね。怜生くんも一緒に目を輝かせて見てたよ」

「……俺はこの間、翔子から逃げるために理音の家に泊まったら、あいつは徹夜で見ていたぞ」

愛子は理音と時代劇は合わないようで眉間にしわを寄せて聞き返すと3人から出る証言は肯定しか見当たらず、

「これは確定だね」

「そうですね」

「時代劇って、ちょんまげ？」

「……えーと、美波ちゃん、確かに間違ってはいないんですけど」

理音が時代劇好きと認定される中、ドイツからの帰国子女である美波だけはあまり理解ができていないようで首を傾げ、瑞希は美波に時代劇の説明をしようとするが、

「なぁ、そろそろ、どうするか決めないと不味くないか？　あまり、遊んでると西村先生が前田は戦力の増強するかも知れないって言ってたし」

「そうだな」

雄二と大樹はそろそろ試召戦争に戻ろうと提案する。

# 第４５０問

「それじゃあ、どこから行くの？　ツヴァイくんは避けるんでしょ。そうなるとアインくん？」

「さっきは先生方とも言ってたけど、どうするの？　と言うか、別に生徒を倒しても点数にはなるのよね」

「そうだな……」

優子と愛子は雄二にどこから狙うかと再確認すると雄二が周囲を見渡した時、

「……まったく、見てられません。前田くん、これ以上、アインくんが戦力にならないのは教師陣としても問題があります」

「了解しました。強制召喚をかけます」

「な、何!?」

アインを追いかけ回している女子生徒が試召戦争に参加しないと昨日の騒ぎの罰にもならないため、洋子はこの状況を見ているであろう理音に声をかけると友香を筆頭にしてアインを追いかけ回していた女子生徒の召喚獣は強制的に呼び出される。

「た、高橋先生、ど、どうしたんですか？」

「あなた達は試召戦争の時間を何に使うつもりなんですか？」

友香は目の前に立つ洋子の様子に驚きの表情をすると洋子は大きく肩を落として女子生徒達に今の時間の意味を考え直すように言うが、

「洋子先生は何もわかっていません。今、私達は試召戦争なんかより、アインくんを抱きしめる事に意味があるんです！！」

「よく言ったわ。玉野さん。私達も玉野さんと同じ意見です！！」

美紀は試召戦争より大切なものがアインにはあると叫び、友香は美紀の意見に大きく頷くとその声は女子生徒に感染し拡大して行き、

「マ、マスター」

「……アイン、泣くな。逃げずに戦え。あいつらを補習室に送れば助かるぞ」

「わ、わかりました」

おかしなテンションに磨きがかかった女子生徒達の姿にアインは理音に泣きつき、そのアインの様子にさらに女子生徒達のテンションは上がり、理音はため息を吐きながらアインに向き合って戦うように激励をするとアインは自分の武器である杖を手に持つ。

「そうですよ。前田くんの言う通りです。しっかりとアインくんも責務を果たしてください」

「あ、あの。高橋先生、どうして、私を持ち上げるんですか？」

アインは召喚獣が現れたため、反撃に転じようとするがそのアインの行動を味方であるはずの洋子がアインの身体に手を伸ばし、邪魔

をすると、

「……確かに、追いかけまわしたくなるのもわかりますね」

「洋子先生、ずるいです！！　私達がここまでアインくんを追いかけてきたのに、卑怯です！！」

「そうです。横暴です！！」

洋子はアインをギュッと抱きしめ、アインの抱き心地を確認する様子に友香と美紀を中心にした女子生徒達は洋子がアインを独占した事が不満なようで声を上げ、

「……どうして、こんな事に」

「まぁ、あれだな。工藤に捕まった時点で運命はきまっていたようだな」

アインは洋子に捕まり、色々と諦めたようで彼女の腕の中で肩を落とし、理音はそんなアインを励ますように声をかけ、

「……ねえ。みんな、ちょっとお願いが、アインくんを助けに行くって言うのはダメかな？」

「……うん。何か、凄く罪悪感が」

アインの様子に彼が女子生徒から追いかけ回される原因を作った愛子と深月はいたたまれなくなってきたようでアイン救出作戦を立てないかとメンバーに相談する。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6215m/

サドで邪悪な召喚獣

2011年11月18日01時07分発行